

朝見遺跡（第5次）発掘調査報告

～松阪市立田町・和屋町～

— 本文編 —



瑞花円鏡・瑞花双鳥八稜鏡

2022（令和4）年3月

三重県埋蔵文化財センター



S B57041・57042他掘立柱建物群検出状況（東から）



S B57041柱穴の並び (北から)



S B57041・57042完掘状況 (西から)



S B55005 (北西から)



S B57041ピット検出状況 (東から)



S D53002 (南東から)



S D53002最上層青銅鏡出土状況 (西から)



S D53002最下層青銅鏡出土状況 (南西から)



S D53002出土青銅鏡 (上から素文鏡、瑞花円鏡、瑞花双鳥八稜鏡)

例 言

- 1 本書は、高度水利機能確保基盤整備事業（朝見上地区）に伴う朝見遺跡（第5次）の発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、三重県松阪市立田町・和屋町に位置する。
- 3 発掘調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産部から依頼を受けて実施した。発掘調査および整理作業の経費は、国庫補助金を得て三重県教育委員会が一部負担し、他は三重県農林水産部から執行委任を受けた。
- 4 発掘調査期間は平成26（2014）年4月22日～平成27（2015）年2月18日である。
- 5 第5次調査の発掘調査面積は、9,996 m²である。
- 6 調査および整理作業の体制は以下のとおりである。

調査主体 三重県教育委員会

[現地調査 平成26年度]

調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課

櫻井拓馬 谷口文隆 嶋田元彦 渡辺和仁 森隆生 小倉礼

研修員 田中信太郎

土工委託 安西工業株式会社

[整理作業 平成27～令和3年度]

整理担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課

櫻井拓馬 森川常厚 穂積裕昌 土橋明梨紗 田中久生

保存処理委託 (株)吉田生物研究所、(株)古環境研究所

自然科学分析委託 (株)パレオ・ラボ（土壌分析・年代測定）

(株)パリノ・サーヴェイ（樹種同定）

- 7 本書の編集は櫻井があたり、文責は文末に記した。遺物の写真撮影は櫻井、田中久生が行った。
- 8 発掘調査および整理作業に際しては、地元朝見上地区の方々をはじめ、下記の諸氏や機関に御指導・御協力を賜った。記して感謝したい。

泉拓良、杉山洋、小野映介、山中敏史、外山秀一、田村陽一、矢野健一、関西縄文文化研究会、東海縄文研究会、榎本義讓、西田尚史、丸山真史、内川隆志、朝見上地区土地改良区、松阪市教育委員会、松阪市文化財センター（敬称略、順不同）

- 9 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

- 1 本書では、国土地理院発行の1:25,000 数値地図（「松阪」相当、（平成20年10月発行）、三重県共有デジタル地図の1:2,500 地形図（平成24年06PF831番）を用いた。三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（令和3年4月5日付三総合地第1号）。
- 2 標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。
- 3 本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。方位は第VI座標系の座標北で示した。掘立柱建物の方位は、飯野郡条里地割（N15° E）との対応を示すため、南北軸を東西偏角で示した。
- 4 本書で用いる遺構略号は以下のとおりである。
SB：掘立柱建物 SH：竪穴建物 SE：井戸 SK：土坑 SD：溝 Pit：柱穴
SR：自然流路 SX：墓 SZ：その他不明遺構 SF：炉跡
- 5 土色の標記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967年初版）に拠った。遺物観察表における土器の色調表記もこれに従う。
- 6 遺物実測図の縮尺は1:4を基本とし、その他の縮尺を適宜用いた。
- 7 註は各節の文末に付し、参考文献も註に記した。
- 8 遺構一覧表、遺物観察表は各章末に付した。
- 9 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
 - ・実測番号は、当センター所蔵の遺物実測図番号である。
 - ・色調は外面のみ、標準土色帖の色名（「黄橙色」など）を記す。マンセル記号の表記は省略した。
 - ・土器の残存率は全周を12分割して示す（例：口縁部3/12）。1/12以下のものは「口縁部片」など。
 - ・胎土は、特徴的な事項（砂粒や金雲母の多さなど）のみ備考欄に記した。
 - ・法量は完存ないし復元の値である（器高は残存値）。口径・底径は実測時の接地面ではなく、外周で計測した値とした。また、土師器皿の底径は記していない。
 - ・出土砥石の粒度は、JIS研磨剤の規格に準拠するサンドペーパーに対比して示す。粒度は#40以下、80（粗目）、120、180（中目）、320、600（細目）、1000、2000以上（極細目）の8段階とした。
- 10 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応する。遺物写真は縮尺不同である。
- 11 古代（平安時代）・中世の時期区分は、多気郡明和町斎宮跡における土師器編年（斎宮歴史博物館2001）、南伊勢系土師器を中心とした中世土器の編年（伊藤2008）に即して示した（第III章参照）。共伴陶磁器などでさらに年代の絞り込みが可能な場合は、各陶磁器編年や暦年代観を記している。

平安時代 前期（斎宮Ⅱ期1～3段階）	8世紀末～9世紀	
中期（斎宮Ⅱ期4段階）	10世紀前半	古代
後期（斎宮Ⅲ期）	10世紀後半～11世紀前半	
中世Ⅰ期（a・b）	11世紀後半～12世紀後半、平安時代末	中世前期
Ⅱ期（a・b）	12世紀末～14世紀前葉、平安時代末～鎌倉時代	
Ⅲ期（a・b）	14世紀中葉～15世紀前半、南北朝～室町時代	中世後期
Ⅳ期（a・b・c）	15世紀後半～16世紀末、戦国期	

目次

巻頭図版

例言・凡例	i・ii
目次	iii～vi

I 前 言

1. 調査の経緯と経過	1	3. 朝見上地区遺跡群	5
2. 調査の方法	4		

II 位置と環境

1. 櫛田川と沖積平野	7	4. 中世以降の集落	11
2. 先史時代の遺跡動向	7	5. 近年の古気候研究との関係	11
3. 古道と条里の展開	10		

III 遺 構

1. 基本層序と微地形	13	7. 5区	58
2. 検出遺構の概要	15	8. 6区	63
3. 1区	17	9. 7区	85
4. 2区	31	10. 8区	109
5. 3区	38	11. 9区	116
6. 4区	46	遺構一覧表	126

IV 遺 物

1. 出土遺物の概要	136	3. 縄文時代の遺物	182
2. 弥生時代以降の遺物	136	遺物観察表	213

V 自然科学分析

1. 分析の種類と対象	243	3. 樹種同定	262
2. C 14年代測定・土壌分析	243		

VI 総 括

1. 縄文時代の集落と環境	271	4. 条里地割と開発	282
2. 弥生～古墳時代の土地利用	275	5. 朝見遺跡の特質	285
3. 平安時代の遺構と遺物	277		

写真図版（別冊）

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2	第36図	S K 54004・54006・54033、S D 54009 遺物出土状況図	53
第2図	朝見遺跡調査位置図	3	第37図	S D 54011・54014 断面図、 遺物出土状況図	54
第3図	調査区位置およびグリッド割付図	6	第38図	S E 54031	55
第4図	遺跡分布図	8	第39図	S E 54036	56
第5図	地形分類図	9	第40図	S B 54039・54041～54043	57
第6図	遺跡周辺のボーリングデータ	14	第41図	5区遺構全体図	59
第7図	土層柱状図	16	第42図	5区東壁土層断面図	60
第8図	1区遺構全体図①	20	第43図	S E 55001	61
第9図	1区遺構全体図②	21	第44図	S B 55005、S B 55005 隣接ピット 遺物出土状況	62
第10図	1-1～1-3区西壁土層断面図	22	第45図	6区上層遺構全体図	66
第11図	1-4区西壁・南壁土層断面図	23	第46図	6区北壁土層断面図	67
第12図	S D 51001・51002・51043・51044 断面図	24	第47図	6区南壁・下層断割土層断面図・ 下層埋積浅谷断面図	68
第13図	S D 51005・51020・51021	25	第48図	S K 56001・56002・56020～56022・ 56024、S K 56021 遺物出土状況図	69
第14図	S X 51017	26	第49図	S K 56007・56012、S D 56033 断面図 S F 56036 遺物出土状況図	70
第15図	S X 51029	27	第50図	S E 56003	71
第16図	S E 51028・S E 51036	28	第51図	S E 56004	72
第17図	S X 51042 遺物出土状況図	29	第52図	S E 56006	73
第18図	S Z 51046 遺物出土状況図	30	第53図	S K 56013・56028・56031・ 56032	74
第19図	2区遺構全体図①、S X 52019・ S D 52026・52027 断面図	33	第54図	S X 56026 平面図、断面図・ 遺物出土状況図	75
第20図	2区遺構全体図②、S R 52003・ S D 52006 断面図	34	第55図	S X 56027 平面図、断面図	76
第21図	2区遺構全体図③、S D 52004 断面図	35	第56図	S X 56027 遺物出土状況図	77
第22図	2区西壁土層断面図	36	第57図	S K 56029 断面図・遺物出土状況図	78
第23図	2区北壁、南壁土層断面図	37	第58図	S B 56034・56066	78
第24図	3区遺構全体図①、S D 53011 断面図	40	第59図	S B 56035・56063～56065	79
第25図	3区遺構全体図②、S D 53001・53005 ～53007 断面図	41	第60図	6区下層遺構全体図	80
第26図	3区遺構全体図③	42	第61図	6区北壁土層断面模式図	81
第27図	3区西壁土層断面図	43	第62図	S X 56037、S X 56057、S F 56048～ 56056、S K 56059	83
第28図	3区南壁土層断面図	44	第63図	S Z 56038・56047・S K 56060、 S K 56061・S F 56062・S K 56058	84
第29図	S E 53004	44	第64図	7-1区遺構全体図①	91
第30図	S D 53002 断面図・遺物出土状況図	45	第65図	7-1区遺構全体図②	92
第31図	4-1区、4-3区遺構全体図	48			
第32図	4-1区、4-2区遺構全体図	49			
第33図	4-1区、4-4区遺構全体図	50			
第34図	4-1区南壁土層断面図	51			
第35図	4-4区北壁、4-1区西壁土層断面図	52			

第 66 図	7-1 区遺構全体図③	93	第 96 図	土器・陶磁器等	1 区③	149	
第 67 図	7-1 区遺構全体図④	94	第 97 図	土器・陶磁器等	1 区④	150	
第 68 図	7-2 区遺構全体図	95	第 98 図	土器・陶磁器等	1 区⑤・2 区①	151	
第 69 図	7-2 区、7-3 区遺構全体図	96	第 99 図	土器・陶磁器等	2 区②・3 区①	152	
第 70 図	7-1 区北壁土層断面図①	97	第 100 図	土器・陶磁器等	3 区②	153	
第 71 図	7-1 区北壁土層断面図②	98	第 101 図	土器・陶磁器等	3 区③	154	
第 72 図	7-2 区北壁・7-3 区東壁土層断面図	99	第 102 図	土器・陶磁器等	3 区④	155	
第 73 図	S D 57001・57015・57017・57018・ 57020・57021・57023 断面図	100	第 103 図	土器・陶磁器等	3 区⑤・4 区①	156	
第 74 図	S E 57006・S K 57012、S K 57031・ S D 57032 遺物出土状況図	101	第 104 図	土器・陶磁器等	4 区②	157	
第 75 図	S B 57041・57043、SB57041 ピット 遺物出土状況図	102	第 105 図	土器・陶磁器等	4 区③・5 区	158	
第 76 図	S B 57042・57044 S A 57046・57059・57060・57068	103	第 106 図	土器・陶磁器等	6 区①	159	
第 77 図	S B 57045・57047・57075 S A 57066・57067	104	第 107 図	土器・陶磁器等	6 区②	160	
第 78 図	S B 57048・57049・57076	105	第 108 図	土器・陶磁器等	6 区③	161	
第 79 図	S X 57022	106	第 109 図	土器・陶磁器等	6 区④・7 区①	162	
第 80 図	S B 57071・57074 S B 57071 ピット遺物出土状況図	107	第 110 図	土器・陶磁器等	7 区②	163	
第 81 図	S D 57053・57058・57062・57069	108	第 111 図	土器・陶磁器等	7 区③	164	
第 82 図	8 区遺構全体図①、S D 58015～ 58018・58020・58021 断面図	110	第 112 図	土器・陶磁器等	7 区④・8 区①	165	
第 83 図	8 区遺構全体図②、S D 58015・58016・ 58018・58019・58024 断面図	111	第 113 図	土器・陶磁器等	8 区②	166	
第 84 図	8 区東壁土層断面図	112	第 114 図	土器・陶磁器等	8 区③・9 区①	167	
第 85 図	8 区東壁土層断面図② 8 区南～西壁土層断面図	113	第 115 図	土器・陶磁器等	9 区②	168	
第 86 図	8 区東西土層断面図	114	第 116 図	土器・陶磁器等	9 区③	169	
第 87 図	S X 58013	115	第 117 図	土器・陶磁器等	その他ピット	170	
第 88 図	9 区遺構全体図	120	第 118 図	土器・陶磁器等	包含層等①	171	
第 89 図	9 区北壁・東壁土層断面図①	121	第 119 図	土器・陶磁器等	包含層等②	172	
第 90 図	9 区北壁・東壁土層断面図②	122	第 120 図	木製品	1 区①	175	
第 91 図	S B 59042・59043・59049・59050、 ピット遺物出土状況図	123	第 121 図	木製品	1 区②・4 区①	176	
第 92 図	S B 59044・59045・59051、SA59048、 ピット遺物出土状況図	124	第 122 図	木製品	4 区②	177	
第 93 図	S K 59033 他遺物出土状況、 S D 59023・59027・59035 断面図	125	第 123 図	木製品	4 区③	178	
第 94 図	土器・陶磁器等	1 区①	147	第 124 図	木製品	4 区④	179
第 95 図	土器・陶磁器等	1 区②	148	第 125 図	木製品	4 区⑤	180
				第 126 図	木製品	6 区	181
				第 127 図	縄文土器の分類		183
				第 128 図	縄文土器	1 区①	188
				第 129 図	縄文土器	1 区②	189
				第 130 図	縄文土器	1 区③	190
				第 131 図	縄文土器	1 区④	191
				第 132 図	縄文土器	1 区⑤	192
				第 133 図	縄文土器	1 区⑥	193
				第 134 図	縄文土器	1 区⑦	194
				第 135 図	縄文土器	1 区⑧・6 区①	195
				第 136 図	縄文土器	6 区②	196
				第 137 図	縄文土器	6 区③	197

第 138 図 縄文土器 6 区④	198	第 157 図 遺跡周辺の地形分類図	261
第 139 図 縄文土器 6 区⑤	199	第 158 図 県内の縄文中～後期前半の遺跡	271
第 140 図 縄文土器 6 区⑥	200	第 159 図 朝見上地区遺跡群の縄文遺構・ 遺物分布	272
第 141 図 縄文土器 6 区⑦	201	第 160 図 大里西沖遺跡 S H 15 縄文土器 5	274
第 142 図 縄文土器 6 区⑧・その他	202	第 161 図 弥生・古墳時代の遺構分布	276
第 143 図 朝見遺跡（第 5 次）の石器組成	204	第 162 図 7-1 区大型建物 S B 57041 付近の 遺構変遷	278
第 144 図 石器 1 区・6 区①	206	第 163 図 平安時代の館的建物	280
第 145 図 石器 6 区②	207	第 164 図 平安時代の空間利用	283
第 146 図 石器 6 区③	208	第 165 図 朝見遺跡の土地変遷史	286
第 147 図 石器 6 区④	209	写真 1 7 区での調査指導風景	5
第 148 図 石器 6 区⑤	210	写真 2 縄文土器（1536）施文状況	186
第 149 図 石器 6 区⑥	211	写真 3 テフラ試料の偏光顕微鏡写真	265
第 150 図 石器 6 区⑦・7 区	212	写真 4 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真	266
第 151 図 年代測定試料の写真	246	写真 5 産出した花粉化石	267
第 152 図 暦年較正結果	246	写真 6 産出した植物珪酸体	268
第 153 図 分析 No. 2 ～ No. 4 の火山ガラス の屈折率測定結果	248	写真 7 樹種同定結果 1	269
第 154 図 堆積物中の珪藻化石分布図	253	写真 8 樹種同定結果 2	270
第 155 図 花粉分布図	256		
第 156 図 植物珪酸体分布図	258		

表目次

第 1 表 高度水利機能確保基盤整備事業 （朝見上地区）に伴う調査一覧表	4	第 9 表 テフラ試料の湿式篩分け・ 重液分離の結果	248
第 2 表 遺構一覧表	126 ～ 135	第 10 表 4 φ 篩残渣中の鉱物組成	248
第 3 表 青銅鏡の蛍光 X 線分析結果	139	第 11 表 珪藻化石の環境指標種群一覧	250
第 4 表 遺物観察表	213 ～ 242	第 12 表 堆積物中の珪藻化石産出表	251 ・ 252
第 5 表 分析試料一覧	244	第 13 表 産出花粉孢子一覧表	254 ・ 255
第 6 表 年代測定試料および処理	245	第 14 表 試料 1 g 当りのプラント・オパール個数	257
第 7 表 放射性炭素年代測定および 暦年較正の結果	245	第 15 表 第 5 次調査墨書土器一覧	281
第 8 表 火山灰分析試料とその特徴	248		

巻頭写真図版

- ・巻頭図版 1（7 区大型掘立柱建物）
S B 57041 ・ 57042 他掘立柱建物群検出状況
- ・巻頭図版 2（5 区・7 区大型掘立柱建物）
S B 57041 柱穴の並び
S B 57041 ・ 57042 完掘状況、S B 55005
S B 57041 ピット検出状況
- ・巻頭図版 3（3 区青銅鏡出土状況）
S D 53002
S D 53002 最上層青銅鏡出土状況
S D 53002 最下層青銅鏡出土状況
- ・巻頭図版 4（出土遺物 青銅鏡）
S D 53002 出土青銅鏡

I 前 言

1. 調査の経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

朝見遺跡は、松阪市街地より約1km東の田園地帯に位置する遺跡で、周辺には今なお条里型地割がよく残っている。ここで、朝見上地区（朝田・立田・和屋・幸生・上七見・上川町）を対象とした県営ほ場整備事業（高度水利機能確保基盤整備事業）が計画されたため、調査の原因者である三重県松阪農林事務所と保護措置について協議を行った。事前協議の詳しい経過は、既刊の『朝見遺跡（第1・2次）発掘報告』をあわせて参照されたい。

ほ場整備の事業区域は159haに及んだため、平成21年度に分布調査、範囲確認調査は平成22～25年度の4ヶ年に分割して実施した（第1表）。本次調査に関わる範囲確認調査の結果は『朝見遺跡（第3・4・6次）発掘報告』に掲載している。

(2) 既往の調査

朝見遺跡の発掘調査は、いずれも当事業に関わるもので、9次に及んでいる。詳細は第1表および既刊の報告書を参照されたい。

(3) 調査の経過

第5次調査は平成26(2014)年4月22日に開始し、平成27(2015)年2月18日に終了した。工事計画や耕作、水利との関係上、まず遺跡東端の1～3区の調査を進め、4～6区、7～9区へと順次西進した。1区と6区では下層遺構及び遺物包含層を確認したため、追加調査を実施している。

以下に調査日誌（抄）を記す。

【調査日誌（抄）】

平成26(2016)年

- 4月24日 調査前写真撮影
- 5月7日 2区表土掘削開始
- 5月28日 1区南側より重機掘削開始
- 6月25日 1-4区全景・遺構別写真撮影
- 6月26日 1-1～3区全景写真撮影
- 6月30日 3区重機掘削開始。
- 7月8日 3区表土掘削中にSD53002より円鏡

出土。出土状況確認後一時取上げ。

- 7月11日 表土掘削中、SD53002より八稜鏡出土
 - 7月15日 八稜鏡を取り上げ
 - 7月22日 4区東側より重機掘削開始
 - 7月30日 3区SD53002最下層から鏡が出土
 - 8月6日 3区全景写真を撮影。4区遺構検出開始
 - 8月21日 1区下層の縄文精査、縄文土器多数
 - 9月6日 3区を対象に現地説明会開催
 - 9月10日 4区全景、遺構写真撮影
 - 9月11日 5区・6区表土掘削開始
 - 9月18日 6区重機掘削開始
 - 9月30日 7-1区重機掘削開始
 - 10月24日 6区全景・遺構写真撮影
 - 10月29～30日 7-1区掘立柱建物全景写真撮影
 - 10月31日 7-2区表土掘削開始
 - 11月12日 9区表土掘削開始
 - 11月13日 7-2区全景写真撮影
 - 11月14日 8区表土掘削開始
 - 11月19日 5区南端より表土掘削開始
 - 11月29日 6区・7区を中心に現地説明会開催
 - 12月2日 6区下層確認、縄文遺構精査開始
 - 12月12日 7-2区掘立柱建物の完掘写真撮影
 - 12月19日 5区遺構検出を開始
 - 8区・9区的全景写真撮影
 - 12月25日 6区下層全景・遺構写真撮影
- 平成27(2017)年
- 1月14日 8区・9区的全景写真撮影
 - 1月28日 6区調査区北壁断割、土層確認
 - 2月2日 5区全景写真撮影
 - 2月5日 5区下層確認、現地調査終了
 - 2月18日 撤収完了

【調査指導】（敬称略、所属は当時）

- ・2014年8月19日 杉山洋（奈良文化財研究所）
出土鏡について
- ・2014年9月10日 外山秀一（皇學館大學）
遺跡周辺の地形環境について
- ・2014年11月10日 山中敏史（奈良文化財研究所）
官衙関連遺構、遺物について



第1図 遺跡位置図 (1:15,000、三重県市町共有デジタル地図に加筆)



第2図 朝見遺跡調査位置図 (1:6,000)

- ・2015年3月18日 泉拓良（京都大学）
縄文土器について

（4）文化財保護法にかかる諸手続

本発掘調査に伴う法規上の手続は以下の通り。

①文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護 条例第48条第1項

（土木工事等のための発掘に関する通知）

- ・平成22年9月9日付、松農環第4236－1号
（県教育長あて県知事通知）「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知書」

②文化財保護法第99条第1項

（発掘調査の着手報告）

- ・平成26年4月23日付、教埋第28号
（県教育長あて県埋蔵文化財センター所長報告）

「埋蔵文化財発掘調査の報告について」

③文化財保護法第100条第2項

（文化財の発見・認定通知）

- ・平成27年3月2日付、教委第12－4435号
（松阪警察署長あて県教育長通知）
「埋蔵文化財の発見について（通知）」

（5）普及公開

発掘調査成果説明会や普及啓発パンフレットの刊行等の普及公開活動を行った。また、学校教員の研修や中学生の職場体験を発掘現場および普及公開活動の中で実施した。

2. 調査の方法

第1表 高度水利機能確保基盤整備事業（朝見上地区）に伴う埋蔵文化財調査一覧表

調査年度	範囲確認調査						発掘調査			報告書
	遺跡名 (所在地)	確認面積	範囲確認 調査坑数	現状	調査期間	対応	遺跡名 (次数)	調査面積	形式	
平成22年度	朝見遺跡 (和屋町)	162,000㎡	16ヶ所 (1,437㎡)	水田	20100914～ 20101006	要調査	朝見遺跡 (第1次)	205㎡	工事立会	1
平成23年度	堀町遺跡 (朝田町)	123,020㎡	66ヶ所 (396㎡)	水田	20111219～ 20111227	要調査	朝見遺跡 (第2次)	3,412㎡	本発掘調査 工事立会	1
	四常遺跡 (朝田町)	4,900㎡	3ヶ所 (18㎡)	水田	20111214	施工可				
	大角遺跡 (朝田町)	1,060㎡	2ヶ所 (12㎡)	水田	20111214	要調査				
	朝見遺跡 (立田町)	40,080㎡	29ヶ所 (248㎡)	水田	20111214～ 20111219	要調査				
平成24年度	中坪遺跡 (立田町)	131,000㎡	74ヶ所 (444㎡)	水田	20121203～ 20121208	要調査	堀町遺跡 (第5次)	4,396㎡	本発掘調査	2
	朝見遺跡 (立田町)	150,000㎡	55ヶ所 (330㎡)	水田	20121211～ 20121214	要調査	大角遺跡 (第1次)	64㎡	工事立会	
平成25年度	朝見遺跡 (和屋町)	187,000㎡	64ヶ所 (384㎡)	水田	20130904～ 20130913	要調査	朝見遺跡 (第3次)	236㎡	工事立会	6
							堀町遺跡 (第6次)	5,463㎡	本発掘調査	4
							中坪遺跡 (第1次)	1,955㎡	本発掘調査	3
平成26年度							朝見遺跡 (第4次)	452㎡	工事立会	6
							中坪遺跡 (第2次)	1,100㎡	本発掘調査	5
							朝見遺跡 (第5次)	9,996㎡	本発掘調査	本書
平成27年度							堀町遺跡 (第7次)	720㎡	工事立会	4
							朝見遺跡 (第6次)	8,545㎡	本発掘調査	6
平成28年度							朝見遺跡 (第7次)	5,742㎡	本発掘調査	未刊
							朝見遺跡 (第8次)	600㎡	工事立会	未刊
平成29年度							中坪遺跡 (第3次)	3,775㎡	本発掘調査	7
							朝見遺跡 (第9次)	620㎡	工事立会	未刊
平成30年度							中坪遺跡 (第4次)	64㎡	工事立会	7

報告書

- 1 三重県埋蔵文化財センター『朝見遺跡（第1・2次）発掘調査報告』2015年
- 2 三重県埋蔵文化財センター『堀町遺跡（第5次）発掘調査報告』2016年
- 3 三重県埋蔵文化財センター『中坪遺跡（第1次）発掘調査報告』2017年
- 4 三重県埋蔵文化財センター『堀町遺跡（第6・7次）発掘調査報告』2018年
- 5 三重県埋蔵文化財センター『中坪遺跡（第2次）発掘調査報告』2018年
- 6 三重県埋蔵文化財センター『朝見遺跡（第3・4・6次）発掘調査報告』2021年
- 7 三重県埋蔵文化財センター『中坪遺跡（第3・4次）発掘調査報告』2022年

(1) 調査区の設定 (第2図)

今回の調査地は、平成28・29年度工事対象部分のうち、集落内道路・用排水路・ポンプ場敷設箇所を対象とし、多くの調査区が線状を呈する。また、調査区も遺跡各所に分散している(第2図)。

調査区は着手順に1～9区と名付け、各調査区の内部は枝番を付して管理し(例:1-4区)、青銅鏡出土や大型掘立柱建物など重要遺構の調査にあわせ、適宜拡張した。

平面直角座標系は世界測地系を採用した。地区割(グリッド)は第1・2次調査で設定した、旧飯野郡主条里(N15°E)を主軸とする100m四方の大地区(A～M)を踏襲したが、調査範囲が広範囲に及んだため、遺跡全体を覆うよう大地区(A～W)を追加した。大地区内は東西を1～25、南北をa～yに25分割した4m四方の小地区を設け、大・小地区とも、北西隅を基点とした地区名(例:テ-g25)を付与した。遺物の取り上げにはこのグリッドを用いている(第3図)。

(2) 遺構検出・掘削

表土から遺構面までの堆積土を重機(バックホー)で除去し、遺構検出・掘削は人力で行った。井戸の断ち割りや自然流路の掘削、一部遺物包含層の掘削においては、重機を補助的に用いている。

(3) 記録・図化

遺構実測は調査員による手測りである。遺構検出段階は小地区単位の1/40略測図(遺構カード)を作成し、これをもとに1/100の遺構配置図を作成した。遺構平面図・土層断面図については原則1/20で作成し、適宜その他の縮尺を適用した。これらの図面に加えて現場の作業日誌も当センターで保管している。

遺構番号は調査区ごとの通し番号とし、第5次調査の5を冒頭に付し、調査区(1～9区)の数字と3桁の通番を組み合わせている。今次以降は複数の調査区を2班同時並行で調査したためである。

(例)「SD 51002」の場合

= SD (遺構) + 5 (次) + 1 (区) + 002 (通番)

なお、報告書作成にあたり、遺構番号の加除訂正を行ったが、原則として調査時の番号をそのまま用いている。

ピットの遺構番号は、当センターの調査標準に従い、小地区ごとの通し番号としているが、遺物実測図を掲載した掘立柱建物のピットについては、別に番号を付した(例:SB 57041-P1)。

遺構写真は、6×7判(モノクロ・カラーリバーサル)で撮影し、35mm判(モノクロ・カラーリバーサル)やデジタル1眼レフを補助的に用いた。使用したカメラは、6×7判:ペンタックス、35mm判:ニコンFM2、デジタル:ニコンD800Eである。遺物の写真撮影はデジタルカメラを用いた。

(4) 出土遺物の整理

出土遺物は出土年月日と遺構・層位の区別を行い、小地区単位で取りあげている。整理作業終了後は報告書掲載遺物およびその参考資料(A遺物)と未掲載遺物(B遺物)に区分して保存した。

保存処理は、A遺物の一部に限定した。金属製品は残りの悪い釘などは保存処理していない。木製品は小型製品のうち機能が明確なもの、大型品は建築部材転用の井戸枠、曲物の良品に限定し、その他は樹種同定などの分析に供した。

3. 朝見上地区遺跡群

本書では、本ほ場整備事業で発掘調査した、朝見遺跡・堀町遺跡・中坪遺跡を総称するとき、便宜上「朝見上地区遺跡群」と呼ぶこととする。

II章以降で述べるように、この3遺跡はいずれも櫛田川分流(名残川)の旧河道が形成した自然堤防上に立地し、縄文時代中期以来の地理的環境・歴史的展開ともに相互の関係が深いと認められるためである。(櫻井)



写真1 7区での調査指導風景(山中敏史氏)



第3図 調査区位置およびグリッド割付図 (1:6,000)

Ⅱ 位置と環境

1. 櫛田川と沖積平野

(1) 遺跡の位置

朝見遺跡(1)は南北に細長く伸びた三重県のほぼ中央、松阪市立田町・和屋町にある縄文時代から中世の集落跡である(第4・5図)。遺跡は松阪市の中心市街地から約2km東方の田園地帯にあり、一帯には古代以来の条里型地割がよく残っていた(写真図版1)。今回のほ場整備においても、基本的にこの地割を踏襲するかたちで用排水路や田面の整備が行われている。下流域はほ場整備未施工であり、今なお条里制の息づくエリアである。

当地周辺の地理的・歴史的環境については、朝見上地区遺跡群の既刊報告書でも詳細に述べており、それらを再構成しながら、記述していきたい。

当地は櫛田川とその支流・分流が形成した沖積平野(櫛田川低地)にあたり、西を松阪市街地(松阪低地)、南を丘陵、東を明野台地に囲まれている。その母体となった櫛田川は、高見山地を水源とし、上流では中央構造線に沿って流れている。下流は松阪・玉城丘陵に挟まれた低地を東に流下したのち、松阪市豊原町・早馬瀬町付近で広い平野に達し、伊勢湾に向かって北流する⁽¹⁾。

(2) 乱流する櫛田川

一帯は今でこそ起伏の少ない平坦な地形となっているが、櫛田川の流路は度重なる洪水で幾度も大きく変化し、特に右岸側に紡錘形の自然堤防を発達させている。特に、承和14(847)年頃と、永保3年(1083)に櫛田川中流域を襲った大洪水は、多気・飯野の郡界が変わるほどの大規模な流路変遷を生ぜしめた。また、保安2年(1121)の台風による洪水は、東寺領大国荘(多気郡多気町弟国周辺)に甚大な被害を与えた。これらの災害が、櫛田川下流域にも大きく影響したことは想像に難くない⁽²⁾。

かつては現在の祓川が櫛田川本流であり、伊勢神宮・斎宮との関係から、櫛田川は神域の境界線と認識されていた(「神之近堺」)。これに対して「下樋小川」が「神之遠堺」と称された⁽³⁾。「下樋小川」

は金剛川など堀町遺跡の西側を流れる小河川の通称ともされ⁽⁴⁾、後述の「飯野・飯高郡条里絵図」には、金剛川が飯高・飯野郡の郡界として描かれている。

(3) 櫛田川の分流

国土地理院の治水地形分類図(2014年更新版)によれば、この櫛田川本流とは別に、松阪市和屋町・立田町・朝田町付近には、北西-南東方向に斜行する旧河道と、それに由来する自然堤防が細長く伸びている。また中坪遺跡(2)の位置する立田町から大宮田町・古井町に向かって北伸する、規模の大きな自然堤防が発達し、かつて松阪市豊原町付近から北西に流れた櫛田川分流があったことがわかる。

現和屋集落付近は、旧河道に東西両側を挟まれた自然堤防(微高地)であると図示され(第5図)、朝見遺跡付近は、標高約6mと沖積低地としては標高が高いのが特徴といえる。

朝見遺跡の発掘調査では、この自然堤防に平行する方向の溝や流路が、弥生時代後・終末期以降、位置をわずかに変えながら、現在まで連続と続くことが判明している⁽⁵⁾。V章(自然科学分析)においても、当地の地形環境について詳しく検討しており、櫛田川右岸に比べ左岸側は相対的に起伏が少ないことや、基盤層・遺構埋土の堆積状況から、櫛田川本流から切り離された名残川が存在し、右岸に比べて安定的な土地利用が可能であったと推測している。この名残川が基幹水路となり、各時代の開発を支えていたのである。

2. 先史時代の遺跡動向

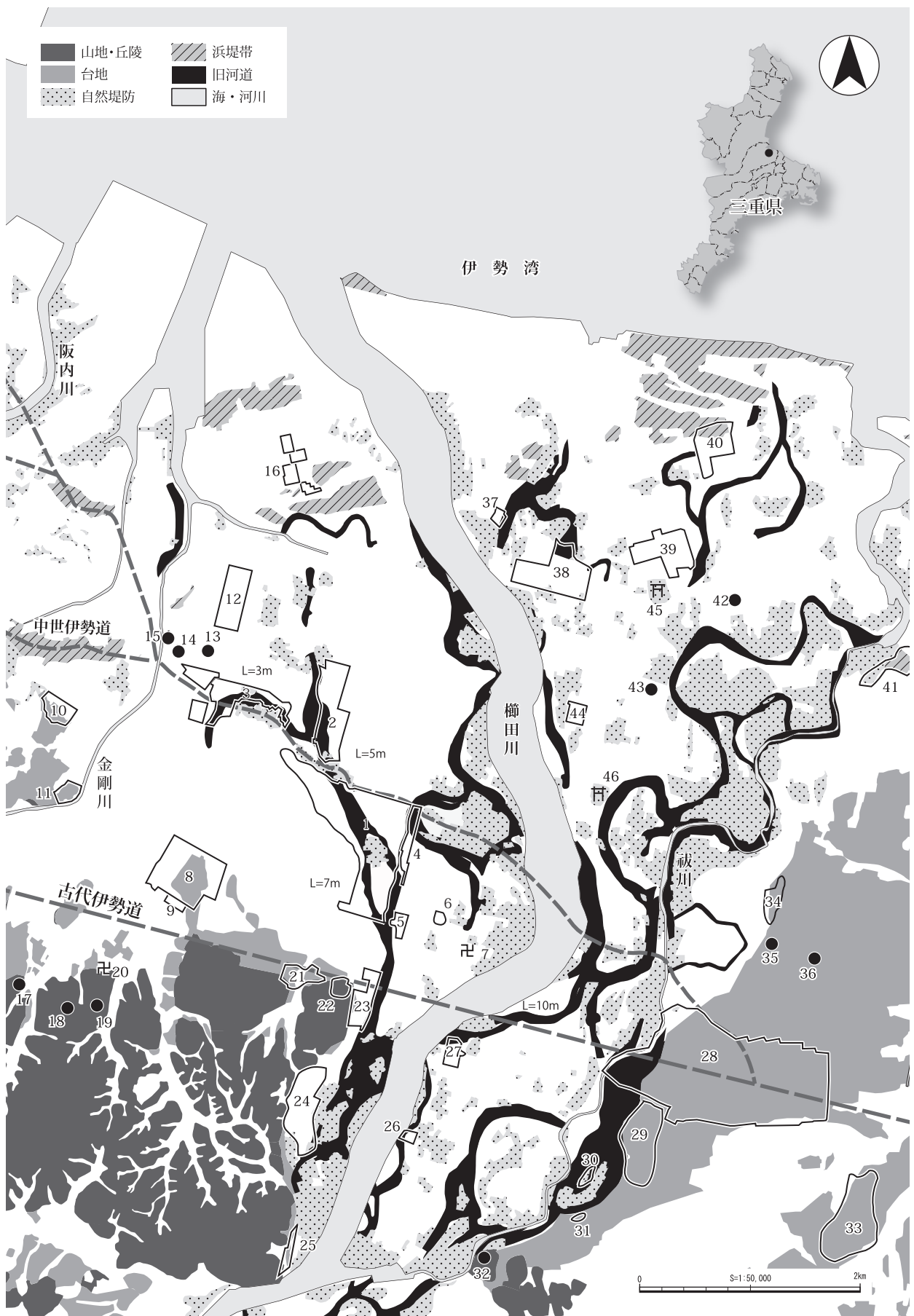
(1) 低地の縄文集落

近年の大きな調査成果として、堀町遺跡(3)・中坪遺跡・朝見遺跡で縄文時代中期中葉(咲畑式)から後期中葉(元住吉山I式)の遺構・遺物が出土し、およそ半径2kmの範囲に縄文時代中・後期の集落が点在している状況が判明した⁽⁶⁾。なかでも、中期後葉~末の遺物量が突出して多い。朝見遺跡・堀町遺跡では石囲炉や埋設土器などの遺構や、石皿など

1. 朝見遺跡 2. 中坪遺跡 3. 堀町遺跡 4. 瀬干遺跡 5. 大蓮寺遺跡 6. かん志ゆう遺跡
7. 大雷寺廃寺 8. 村竹コノ遺跡 9. 甘子遺跡 10. 湧早崎遺跡 11. 杉垣外遺跡 12. 御堂山遺跡
13. 佐久米大塚山古墳 14. 丸山古墳 15. 糠塚古墳 16. 西黒部遺跡群 (池ノ上遺跡・小狐遺跡・西黒部西山遺跡)
17. 権現山1・2号墳 18. 坊山1号墳 19. 高田2号墳 20. 貴田寺廃寺 21. 丸野遺跡・中谷遺跡
22. 天王山遺跡・天王山古墳群 23. 琵琶垣内遺跡 24. 山添遺跡・山添古墳群 25. 大川上遺跡 26. 横地西ノ垣内遺跡
27. 古轡通りB遺跡 28. 齋宮跡 29. 金剛坂遺跡 30. 寺垣内遺跡 31. 織糸遺跡 32. 神前山1号墳 33. 北野遺跡
34. 粟垣内遺跡 35. 坂本古墳群 36. 東垣外古墳群 37. 東久保北浦遺跡 38. 川島遺跡 39. 服部遺跡 40. 南山遺跡
41. 西浦遺跡 42. 北浦古墳 43. 狐槽古墳 44. 魚見下起遺跡 45. 神服織機殿神社 46. 神麻績機殿神社



第4図 遺跡分布図 (1:50,000、国土地理院発行 1:25,000 数値地図に加筆)



第5図 地形分類図 (1:50,000、註5文献を一部改変)

定住を示す遺物が認められ、県内の臨海平野では初の成果として注目される。

第三章で詳しく述べるように、沖積層（洪積層の可能性もある）は下部の砂礫層が大きく凹凸を見せており、微高地上では比較的安定した居住が可能であったと推測される。

明和町西浦遺跡（41）では、基盤層と見られていた砂層中から里木Ⅱ式に相当する深鉢（埋設土器か）が出土した点も注目される⁽⁷⁾。櫛田川下流域は伊勢湾沿岸の縄文研究の上で注目すべきフィールドとなりつつあり、遺跡の形成過程について、Ⅵ章で詳しく検討することとした。

（2）弥生時代の集落と墓域

弥生時代の櫛田川河口付近の海岸線については、遺跡の分布や浜堤帯の位置などから論じた石黒立人氏の研究があり、弥生時代の海岸線を、松阪市幸生町付近の浜堤帯と明野台地の先端を結ぶラインに想定している⁽⁸⁾。古墳時代以降の海岸線については、『万葉集』、『風土記』逸文の記述や松阪市南山遺跡（40）⁽⁹⁾の調査成果などから、かつて「的形」と呼ばれた胃袋状の潟湖が櫛田川河口部に存在し、外洋船も停泊可能な良港があったとする説がある⁽¹⁰⁾。

ただし、朝見上地区では、中坪遺跡から北に向かって顕著な旧河道や自然堤防が北側へ向かって伸びており、その影響で海岸線が内陸側に進入しづらい環境があったと予想される。

弥生時代の遺跡は、金剛川左岸から櫛田川にかけての段丘上に湧早崎遺跡（10）、村竹コノ遺跡（8）や天王山遺跡（22）など中・後期の集落が展開する。櫛田川低地においては、堀町遺跡で後期前半の集落が見つかったのみで、後期以前の開発は低調であったといえる。

朝見遺跡、瀬干遺跡（4）では弥生時代終末期の方形周溝墓群が見つかった⁽¹¹⁾。これらの墓域に対応する集落は今のところ明確でないが、方形周溝墓の検出範囲は径1kmと広く、本来は複数の集落が点在していたのであろう。

（3）古墳の展開

櫛田川低地の主要な古墳築造は古墳時代中期に入ってからである。全国でも出土例が稀少な金銅装眉庇付冑（メトロポリタン美術館蔵）をもつ佐久米

大塚山古墳（13）の被葬者は、伊勢湾の海上交通にも関わった有力首長と目される⁽¹²⁾。

朝見遺跡付近では、明治末年に7基の古墳があり、その一つが本次調査区に接した「面塚」であると伝えられる⁽¹³⁾。

後期古墳では、丘陵裾部に金銅装馬具や振り環頭太刀を保有する山添2号墳（24）などがあり、6世紀後半の有力豪族の存在が知られる⁽¹⁴⁾。

3. 古道と条里の展開

（1）古代の飯野郡

古代の飯野郡は、7世紀に多気郡から分離され、一端神宮膝下から離れるが、8世紀末にふたたび神郡に加えられ、度会・多気郡と合わせて神三郡と称された。神郡内は祭主・宮司のもと、地方豪族である郡司や検非違使が統治し、加えて東寺領荘園や、在地寺院など雑多な勢力が利を競っていた。飯野郡域では、郡衙や下級官衙の様相は不明である。

堀町遺跡近辺は、のちの条里絵図に「長田里」の名があり、和名抄に記載された「長田郷」とみられる。朝見遺跡の付近は南北方向の七条・八条に相当し、具体的な里名は不詳である⁽¹⁵⁾。本次調査出土の墨書土器「七西井」は、条里地割内の地名を示す可能性があり、重要である（Ⅳ・Ⅵ章）。

（2）古代伊勢道と中世参宮古道

飯野郡域では、南側の段丘上に古代伊勢道が、平安時代後半から中世には、三渡川河口付近から浜堤帯を結び神宮へ至る中世参宮古道が所在していた。堀町遺跡も中世参宮古道の通過点にあり、街道沿いの朝田・立利・清水などの各郷には関が置かれ、関銭が徴収されていた⁽¹⁶⁾。

直線規格道であることを至上命題とした古代伊勢道に対して、中世参宮古道は地形に即した自然発生的な海沿いの道とみられるが⁽¹⁷⁾、佐久米古墳群の立地などからみて、古代以前にも同様のルートが用いられていた可能性は高いといえよう。

（3）平安時代の朝見遺跡と堀町遺跡

その両者が接する衝地にあるのが、朝見遺跡であり、既往の調査で多数の重要遺物が得られている。列挙すると、平安時代前期、特に9世紀後半には初

期貿易陶磁、多数の緑釉陶器（緑釉緑彩含む）、大量の製塩土器、石帯、墨書土器、転用硯、木製祭祀具などがある。これらの構成は櫛田川対岸の齋宮ともよく似ることから、齋宮寮の貴族・官人層が経営に関与した可能性が指摘されている⁽¹⁸⁾。また、平安時代中期には、今回報告する二面庇付大型建物（10世紀前半）を中心とした建物群があり、柱穴掘方の大きさは齋宮や国府にも匹敵し、この時期としては異例である。平安時代後期（10世紀後半）には、複数の青銅鏡が水辺祭祀に供されたほか、鏡出土地に隣接する大蓮寺遺跡で四面庇付建物や陰刻花文をもつ緑釉陶器が確認された⁽¹⁹⁾。

朝見遺跡はいわゆる官衙関連遺跡であるが、その性格を限定しうる文字資料を欠いている。しかし、方六町におよぶ規模、館（荘所）的な大型建物が広範囲に展開するなど、有力寺社の古代荘園に似た空間構成をとる点は注意される⁽²⁰⁾。

これに対して、堀町遺跡は墨書土器や木製祭祀具が出土するという共通性はあるものの、緑釉陶器の少なさ、石帯など官衙の色彩の強い遺物に乏しいなど、遺跡の性格は朝見遺跡と若干異なる⁽²¹⁾。これら近隣遺跡を含めた遺跡の比較検討、一帯の景観の復原は、朝見上地区の調査を通じた重要な課題の一つである。

（４）櫛田川下流域の条里

飯野郡条里（N15° E）は、古代の伊勢道を基準線としており、松阪市西黒部付近まで広がっている。かねてより、飯野郡における条里施工の進展は、『沢氏古文書』内の飯野・飯高郡条里絵図が15世紀末の段階を示すものとされてきた⁽²²⁾。ところが近年、稲本紀昭氏は、当絵図の作成が13世紀に遡るという見方を示している⁽²³⁾。この説に拠れば、鎌倉時代には現況とさほど変わらない範囲に条里型地割が及んでいたこととなる。

朝見遺跡では、第1・2次調査の結果から、11世紀前半以降に現地表面に遺存する条里坪境溝の開削が進んだと考えられており⁽²⁴⁾、坪境溝以外の条里方向の溝も、平安時代末以降のものが多いようである。一方、掘立柱建物の軸軸から、「見えない条里プラン」も採用されていた可能性が高い⁽²⁵⁾。建物一帯の条里プランの諸段階や特徴を細かく明らかに

することが求められる。

4. 中世以降の集落

14世紀代には「太神宮法楽寺棚橋領」として「朝田郷・立理郷・宮田郷」など、当地付近の郷村名が史料上に現れ、中世においても神宮の膝下にあったことが知られる⁽²⁶⁾。

朝見上地区の朝田・立田（旧立利村）の現集落は、櫛田川分流の旧河道が形成した自然堤防上に立地し、中世参宮古道沿いに発達した街村的形態をとる。これに対し、和屋・上七見・下七見などは、条里型地割に即した方形の集村となっている（写真図版1）。朝見遺跡の中心は和屋集落上にあるが、中世参宮街道に面した朝田・立利（立田）・宮田などの郷村に比べると、史料上、単に字名や地名として登場することどまっておらず、中世集落の形成過程に差異がみられる可能性がある。

和屋町では、集落内に戦国期の一石五輪塔や江戸時代の墓標をもつ集団墓がみられ、室町時代以降、集村化していったと推測される。近世には津藩領、18世紀中ごろ（『宗国史』）には家数46、人数212という⁽²⁷⁾。

5. 近年の古気候研究との関係

近年の樹木年輪酸素同位体比を中心とした、高解像度の古気候復元研究は、古代・中世の村落や荘園研究に大きな影響を与えつつある。朝見遺跡の最盛期である平安時代は、9世紀以降温暖・乾燥となるが、10世紀、特に中葉は、数十年にわたって危機的な高温少雨の時期が続いたとされている。その後、11～12世紀に高温多雨の不安定な時期が訪れ、13世紀には寒冷・多雨となる⁽²⁸⁾。沖積平野の開発においては、こうした数十年周期の気候変動が大きく影響したと予想され、朝見上地区遺跡群の調査成果も、最終的にそれらと対照していく必要がある。

櫛田川流域では、承和14（847）年頃、永保3年（1083）の大洪水、保安2年（1121）の台風による洪水などがあり、14世紀以降もしばしば洪水の被害が訴えられている。東寺領大国荘関係資料では、

史料上「堰長」とよばれる田堵や神宮禰宜ら在地勢力がその都度井堰や溝の復旧にあたり、徐々に権益を増やしていった様子がかがえる。保安2年(1121)の台風による洪水では、耕地は甚大な被害を受けたが死者が少ないことが注目され⁽²⁹⁾、気候変動の影響も一定織り込みながら、低地開発は進展していった。

一方、先史時代の気候変動についても、紀元前2300年ごろの寒冷化、いわゆる「4.2～4.3Ka イベント」などの顕著な気候変動の影響だけでなく、より細かな数十年周期の変動も視野に入れ、基盤層の形成過程や縄文～古墳時代遺構の動向を照応させていく必要がある。(櫻井)

註

- (1) 山本威「榑田川低地」『松阪市史』第1巻史料編(自然)、松阪市、1977年。
- (2) 水野章二「大國・川合荘」『講座日本荘園史』6、吉川弘文館、1993年。
- (3) 『神宮雜令集』(編者未詳、13世紀初頭成立か)
- (4) 平松令三編『三重県の地名』平凡社、1983年。
- (5) 三重県埋蔵文化財センター『朝見遺跡(第1・2次)発掘調査報告』2014年、同『朝見遺跡(第3・4・6次)発掘調査報告』2021年。
本書内で報告書未刊行の発掘調査成果について触れる際は、各年度の現地説明会資料、および三重県埋蔵文化財センター『水と大地といにしえの人びと～松阪市朝見地区の発掘調査から～』2015年、に拠る。
- (6) 註5前掲および三重県埋蔵文化財センター『堀町遺跡(第6・7次)発掘調査報告』2018年。
- (7) 明和町教育委員会『西浦遺跡現地説明会資料』2014年。
- (8) 石黒立人「伊勢湾周辺地域における弥生時代の平野地形について」『愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要』第7号、愛知県埋蔵文化財センター、2006年。
- (9) 松阪市教育委員会『南山遺跡発掘調査報告』1980年。
- (10) 穂積裕昌「伊勢湾西岸域における古墳時代港津の成立」『考古学に学ぶⅡ』同志社大学考古学シリーズ刊行会、2005年、ほか。
- (11) 三重県埋蔵文化財センター『瀬干遺跡』2000年。
- (12) 註10前掲。

- (13) 松阪市『松阪市史』第二巻史料編考古、1978年(原典は、大西源一「県下における古墳時代遺跡」『三重県史談会会誌』第2巻第10号、1911年)。
- (14) 松阪市教育委員会『山添2号墳発掘調査報告書』1998年。
- (15) 斎宮歴史博物館『斎王のおひざもとー斎宮をめぐる地域事情ー』2006年/星野利幸「神三郡の土地利用について一条里復元を中心に」『斎宮歴史博物館研究紀要』16、2007年。
- (16) 伊藤裕偉「斎宮寮・伊勢道・条里」『斎宮歴史博物館研究紀要』13、2001年。
- (17) 伊藤裕偉「海岸線の変動と交通環境」『環境の日本史』2、吉川弘文館、2013年。
- (18) 註5前掲。
- (19) 三重県埋蔵文化財センター『大蓮寺遺跡(第2次)発掘調査報告』2014年。
- (20) 宇野隆夫氏のいう「有力寺社主導2型」を指す。宇野隆夫『荘園の考古学』青木書店、2001年。
- (21) 三重県埋蔵文化財センター『堀町遺跡』2000年/同『堀町遺跡(第5次)発掘調査報告』2016年/同『堀町遺跡(第6・7次)発掘調査報告』2018年。
- (22) 谷岡武雄「飯野・多気郡の条里制」『伊勢湾沿岸地域の古代条里制』東京堂出版、1979年。
- (23) 稲本紀昭「飯野・飯高郡条里図について」『三重県史研究』26、三重県、2011年。
- (24) 註5前掲。
- (25) 金田章裕『微地形と中世村落』吉川弘文館、1992年。
- (26) 註4前掲。
- (27) 註4前掲。
- (28) 伊藤啓介・田村憲美・水野章二編『気候変動と中世社会』臨川書店、2020年。
- (29) 註2前掲。

Ⅲ 遺 構

1. 基本層序と微地形

(1) 基本層序

当地の基本層序は以下の通りである。調査区間の層序の対比は、土層柱状図（第7図）に示した。

I：現代作土（耕土）

II：現代作土（床土等）

III：マンガン粒を多く含む灰褐色シルト

中世以降の水田耕土に由来するものと推測される。弥生時代～中世の遺物を包含。

IV：弥生時代～鎌倉時代遺構の基盤層

黄褐色系シルトや砂を主体とし、層中・層間に縄文時代中期中葉（咲畑式）～後期前葉（北白川上層式）の遺構・遺物を含む。

縄文時代の遺物は、上位の黒褐色～褐色系シルト（古土壌）の前後に多くみられる。

V：極細（粒）砂～粗砂層

無遺物層である。

VI：砂礫層

無遺物で、遺跡中央から東側の基盤層下部に広く認められる。

なお、この基本層序は遺跡中央の微高地を中心としたものであり、遺跡の各所で大きく変化している。

(2) 調査地の微地形・埋没地形

ここでは、ほ場事業に伴うボーリング地質図⁽¹⁾や発掘調査区の土層柱状図から、調査地の微地形・埋没地形について概観する。なお、遺跡周辺の地形環境については、V章（自然科学分析）でも地理学的観点から詳述しているので併せて参照されたい。

①表層の地形

朝見遺跡は、調査地東側の1・2区は地表高約6.5m、調査地西側の8・9区は約5.8m、遺跡南東部の3区は約7.8mで、地形は南東から北西に向かって緩やかに傾斜している（第6図）。今回の調査地は概ね微高地にあたり、遺跡西部の低地（1・2次調査地）とは、約50cm～1mの比高差がある。

現和屋集落付近は旧河道の痕跡などで条里型地割が乱れるが、その他の場所では条里型地割が貫徹さ

れ、水田として利用されている。旧河道付近は畠地もみられる。

②地質ボーリングからみた埋没地形

埋没地形は第6図に示す。遺跡近辺のボーリングデータによれば、標高-4～5m付近で「更新統（洪積層）」に達し、これが緩やかに西～北西へと傾斜している。

完新統（沖積層）はシルト・砂などを主体とする上部（Ac・As層）と、標準貫入試験N値50以上の固い砂礫層（Ag層）の下部に大別される（完新統・更新統の区分は註1文献によるが、堆積年代については検討を要する）。

下部砂礫層は厚さ5m以上で、大きくは東から西へと傾斜する。完新統上部は厚さ2～3mほどの砂・シルトで、下部砂礫層の凹地を埋め、現況の平坦な地形を形成している。堀町遺跡・朝見遺跡の発掘調査結果から、完新統最上部は縄文時代中期～弥生時代後期以前の堆積と推測される（VI章）。

こうした完新統の層序は、堀町遺跡付近（松阪市朝田町）⁽²⁾、中坪遺跡付近（松阪市大宮田町）⁽³⁾、琵琶垣内遺跡付近（松阪市目田町）⁽⁴⁾のほか、櫛田川右岸（松阪市六根町）⁽⁵⁾でも確認でき、櫛田川下流平野に概ね共通すると考えられる。

朝見遺跡内では、遺跡東側（1区付近）で下部砂礫層がより高く、遺跡中央（4・9区付近）まで標高0～1m前後の高さを保っているが、朝見遺跡の西から堀町遺跡の南（断面図④⑤地点）は下部砂礫層が落ち込み、上部の砂・シルト層が分厚くなっている。

なお、断面図②③地点（本次調査4・9区付近）は特に砂（As）が卓越しており、微高地の形成過程や旧河道の位置を考える上で示唆的である。

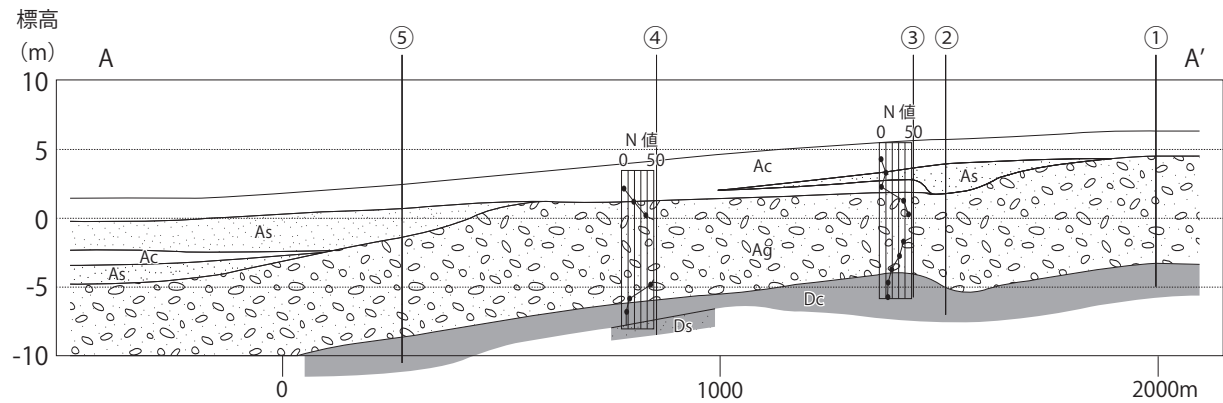
③各調査区の基盤層

次に、各調査区の下層確認や井戸掘削時に確認した基盤層の状況を見ておきたい（第7図）。

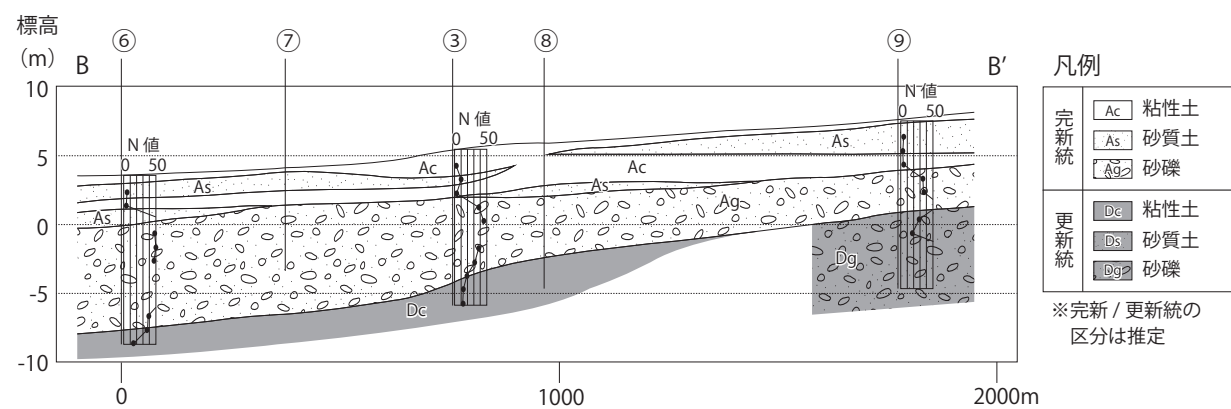
弥生時代～中世の遺構は現代作土・床土のほぼ直下で検出した。7-2区・8区など基本層序III層を介在するところもあるが限定的である。基本層序IV層は



地質断面図 (A-A' 断面)



地質断面図 (B-B' 断面)



第6図 遺跡周辺のボーリングデータ (縮尺任意)

シルト、砂質シルト、極細砂が主体で、やや上位に腐植質の古土壌（いわゆる暗色帯）が認められる。

この古土壌前後に縄文時代中・後期の遺構・遺物が認められ、各層下面に植物の生痕もみられる。

3区（柱状図⑭）では、黒ボク土とみられる黒色シルトが厚く堆積しており、同層は遺跡北西の9区南側下層にもみられる。この黒色シルトは1・2次、6次、7次調査でも確認されており、層中に広域テフラ K-Ah を含んでいる。6次調査での年代測定結果や本次調査の土壌分析結果（V章）から、縄文時代前半期の朝見遺跡の地形環境を知る上で極めて重要と考えられるので、これらの詳しい形成過程は、V・VI章で改めて論じたい。

基本層序VI層（砂礫層）は、3区黒色シルトや縄文遺物・遺構との層序関係から、前述のボーリング調査で把握された「下部砂礫層」に相当するものであろう。

基本層序V・VI層は、遺跡中央～東側で把握したが、遺跡西側はシルトや泥炭状の堆積が顕著となり、地形が西側へ落ち込んでいくか、西側へ向かって堆積物が側方細粒化したとみられる。つまり、基本層序V・VI層の時期においても、遺跡中央から東部が微高地、西側が低地であったと推測され、基盤層の埋没地形が現代まで影響していることがわかる。

なお、5区では、標高3m付近で基本層序VI層に対応する可能性のある砂礫層に達したため、直上の堆積物（炭化材）をC14年代測定に供したが、縄文後期相当の年代値が得られたため、当該砂礫層が基本層序VI層に対応するとの確証は得られなかった。5区付近には、局所的な谷（埋積浅谷）が存在した可能性がある。

基本層序VI層の砂礫層は、古代・中世の井戸の基盤となっているが、遺跡中央から東部は全体的に地下水位が低く、地表から約2m掘り下げなければ湧水がみられない。いったん埋没した遺構は、常に好気的な環境下にあるため、5次調査では有機質遺物が非常に少ない。

航空写真（写真図版1）では、朝見遺跡周辺にやや白く映る箇所があり、基本層序VI層の凸地がソイルマークとして白く表れたものと推測される。

2. 検出遺構の概要

今回の調査では、縄文時代から中世の遺構を約350基検出した。

弥生時代～中世の遺構はすべて基本層序IV層上面で検出し（上層遺構）、IV層中・層間で縄文時代中～後期の遺構・遺物を確認した（下層遺構）。

上層遺構は、遺構検出面までの深度が非常に浅いため、古代・中世の水田畦畔などは削平されたのみみられる。また、室町時代（南北朝期含む）～戦国期の遺構は非常に希薄であった。

下層遺構は、大半が土壌化作用により消失したとみられ、層中の遺物集中や埋設土器・石囲炉などの構造物、炉跡（被熱面）として把握したのが多いが、堆積条件により遺構の掘方を明確に認識できた地点もある。

以下、調査区ごと、遺構番号の順に記述する。

なお、文中の時期区分について、弥生・古墳時代移行期の時代・時期区分はやや煩雑なため、濃尾平野の廻間Ⅰ～Ⅱ式併行を弥生時代終末期、廻間Ⅲ式以降を古墳時代前期として扱う。

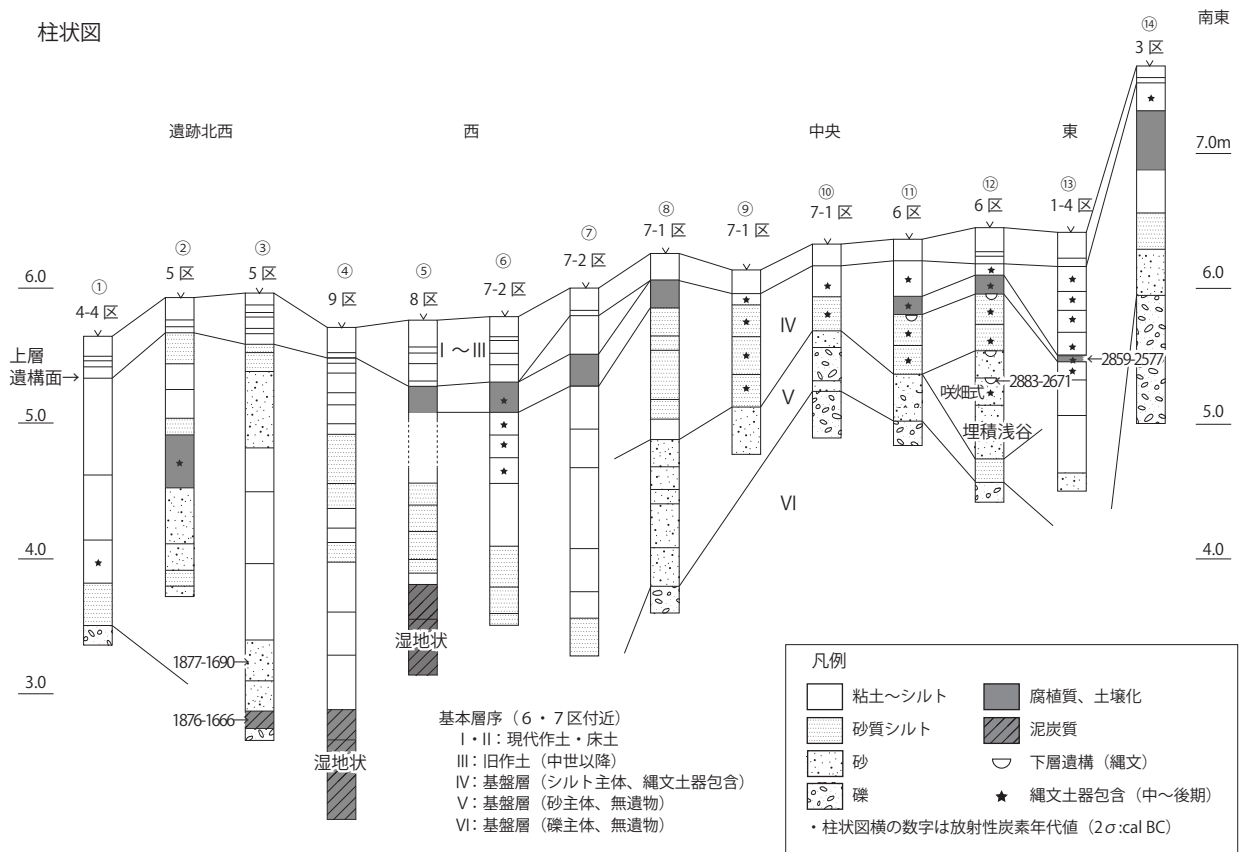
平安時代は斎宮跡の土器編年⁶⁾に即し、前（Ⅱ-1～3段階）・中（Ⅱ-4段階）・後期（Ⅲ期）に区分する。斎宮跡の土器編年は2018年に更新されたが、朝見上地区遺跡群の既刊報告書との対応を図るため、本書では2001年の斎宮編年を用いたので注意されたい。

平安時代末以降は、南伊勢系土師器を中心とした中世土器の時期区分⁷⁾に従い、中世Ⅰ～Ⅳ期と表記する。概ね中世Ⅰ＝平安時代末、Ⅱ＝平安時代末～鎌倉時代、中世Ⅲ＝南北朝期～室町時代、中世Ⅳ＝戦国期に相当する。詳しい暦年代観などは、凡例にも示したのであわせて参照されたい。遺構の詳細は、末尾の遺構一覧表（第2表）に記した。

掘立柱建物の軸方向を表す際は、飯野郡条里地割（N15° E）との関係を示すため、南北軸を便宜的に主軸とし、北からの東西偏角で示した（例：N5° E、N15° W）。棟方向は東西棟、南北棟などと呼称する。



柱状図



第7図 土層柱状図(縮尺任意)

3. 1区 (第8～18図)

(1) 概要

遺跡東部の調査区で、南北に長い北側を1-1～1-3区、逆L字形の南端部分を1-4区とした(第8・9図)。7次調査1区が西接する。1-1～1-3区は大半が条里坪境溝であるSD 51002にあたり、東接する現水路への影響が懸念されたため遺構は部分的な掘削に留めた。1-1～1-3区では、他に弥生～古墳時代の溝や方形周溝墓などが認められる。

1-4区は平安時代のピット・条里方向の溝・井戸などが多数みられたが、掘立柱建物を構成する柱列は明確でない。このほか、同一面上で弥生時代後期～終末期の方形周溝墓を2基確認した。

上層遺構は現代作土・床土直下(地表下30cm)の浅黄色砂質シルト層上で検出した(第10・11図)。

なお、上層遺構掘削中に縄文土器が多数認められたことから、下層確認を行い遺物の包含状況を確認した。縄文時代の遺物は1-4区西壁5層以下にみられ、9層(黒褐色砂質シルト、第11図)の前後に特に多かったため、9層上までを重機で除去した後、人力により精査し遺物集中を確認した(SZ 51046)。また、西壁土層から土壌分析・年代測定用サンプルを採取した(V章)。

下層確認は1-4区西端、1-1区北端でも実施したが、黄色系シルト層中に若干の縄文土器片を認める程度であった。1-1区西壁10層は有機物は少ないものの、下面に生痕が著しく認められ、土壌化作用は強かったようである。なお、西側の7次調査1区でも縄文時代の遺物等を確認している。

(2) 上層遺構

SD 51001 (第12図、写真図版6) 1-4区東側を条里方向に走る大溝で、幅約4m、深さ1.5m前後を測る。北端は中世の溝SD 51002に切られる。断面観察から、3段階の変遷が想定され、徐々に規模を小さくしていったとみられる。

遺物は主に上層から出土した。奈良時代の遺物が目立つが、遺構の切り合いから、平安時代の中で廃絶した溝と考えられる。

SD 51002 (第12図、写真図版7) 1-1～1-4区を南北に縦断する大溝である。1-4区北側ではT字状に

分岐し、1-3・4区では大きく蛇行する。東岸の大半が調査区外で全幅は不明だが、幅10mを超えるものである。埋土は粗砂や粘砂が主体である。

平安時代末～鎌倉時代の陶器が出土しており、中世に開削された条里坪境溝であろう。現代の水路沿いにあり、長期にわたり機能した水路であったと推測される。

SD 51003 1-4区西端で検出した弧状に巡る溝で、幅40cm、深さ10cm程度の浅いものである。土師器の小片が出土している。

SD 51004 1-4区西端で検出した溝である。両端は調査区外に延びるため全体の形状は不明であるが、若干湾曲する。幅40cm、深さ40～50cmを測る。SD 51003より後出でSD 51005に切られる。出土遺物はSD 51007からの混入とみられる。

SD 51005 (第13図、写真図版7) 1-4区で検出した溝である。幅約1m、深さ30cm、深いところで60cmを測る。調査区西端から北東に23m程直進し、L字状に屈曲して北へ向きを変え、調査区北側でSD 51002に切られる。平安時代の土師器杯が比較的多く出土した。

SD 51006 1-4区西端で検出した。SD 51007と完全に重複するが、それより後出のものである。遺構の大半が調査区外にあり詳細は不明である。溝としているが大型の土坑かもしれない。

SD 51007 1-4区西端を北西から南東へ走る溝である。幅1m、深さ50cmを測る。埋土は3層に分かれ、最下層は砂層である(第11図)。

弥生～古墳時代の土師器片が出土している。

SD 51010・51019 1-4区西部で検出した条里方向の溝で、大半をSD 51011に切られる。幅は40～80cm、深さ約20cmと浅い。土師器碗等が出土している。

SD 51011 (写真図版6・7) 1-4区西部で検出した条里方向の溝である。幅約2m、深さ約1mの深い溝で、西肩部の立ち上がりが非常に急である。砂質シルト・シルトで埋没する(第11図)。比較的多くの遺物が出土している。

SD 51012 1-4区中央部、SD 51001に西接する浅い溝である。幅1～1.5mを測り、深さは東側が1段深く約30cmを測る。土師器甕や須恵器杯・蓋片が出土している。

S D 51016 1-4区東端を南北に延びる小規模な溝である。深さは10 cm程度の浅いものである。付近にS D 51014・51015 など同種の素掘溝がみられる。

山茶碗などが出土しており、中世の耕作に伴う遺構と考えられる。

S X 51017 (第14図、写真図版8) 1-4区東部で検出した弥生時代後期後半～終末期の方形周溝墓である。東半はS D 51002に切られる。

周溝は幅約1.5 m、深さ約70 cmで、墳丘側が一段深く、肩部の立ち上がりも墳丘側が非常に急である。周溝内寸で一辺約6.5 m、周溝の外寸で約9 mを測る。陸橋部は未検出で、埋葬施設および墳丘は残存しない。周溝北側はS D 51024と重複しており、S D 51024付近に別の方形周溝墓が存在した可能性もある。

遺物は上～中層(第14図1・7・8層)から出土しており、西周溝・南周溝では高杯脚部が出土した。

S K 51018 1-4区中央部で検出した土坑である。西半をS D 51001に切られ全形は不明であるが、一辺約1 mの方形土坑であろう。

埋土には土器を含まず、炭を多量に含む。注意深く精査したが、火葬骨片などはみられなかった。

S D 51019 1-4区西で検出した溝である。大半をS D 51011に切られているが、幅40 cm、深さ20 cm程度で、弧状に湾曲する。S D 51010と同類の溝であろう。

S D 51020 (第13図、写真図版7) 1-4区中央で検出した溝で、S D 51005に切られる。S D 51011付近からS D 51029付近へ向かっている。幅は約1 m、深さ40～60 cmで、下層は砂・上層はシルトで埋没する。

主に下層から、弥生時代後期の土器や古墳時代中・後期の台付甕が出土しており、古墳時代の遺構とみられる。

S D 51021 (第13図) 1-4区で検出した浅い溝である。S D 51011から派生して屈折しながら、東端はS D 51001にぶつかる。埋土は極細砂やシルトで、土師器小片が若干出土した。

S Z 51023・S D 51024 S D 51017北端付近は遺構が錯綜しており、当初、奈良時代の遺物を含むS Z 51023として全体の精査を進めた。その後、S D 51017の北端部及びS D 51024を検出した。

S D 51024は延長約2 m、幅40 cm、深さ40～70

cmの溝である。

S K 51025 1-4区中央部で検出した直径60 cmの不整形円形を呈する土坑である。深さ10 cm程度の浅いものである。埋土には若干の土師器片の他に炭を含む。

約5 m南東に位置するS K 51018も炭を含むことから、それと同様の遺構かもしれない。

S E 51028 (第16図、写真図版5) 1-4区北西端で検出した平安時代前期の井戸で、最上部はS D 51002に切られる。掘方は直径約3 mの不整形円で、中央やや東に一辺60～70 cmの方形井戸枠を設ける。

井戸枠は上部の井戸枠・土居桁とやや向きの異なる土居桁が下部に別にあり、掘方埋土にも井戸枠材が含まれていることから、当井戸は一度改修された可能性が高い。

井戸枠上部は縦板・横板組で、三枚組接ぎの土居桁の外側に縦・横板を添えたものである。井戸枠材は腐食著しいが、建築部材からの転用が一定含まれるとみられる。下部は土居桁のみ残存し、丁寧に表面調整された板材を相欠きして組み合わせ、その上に欠き込み仕口のある横板ないし横棧を組んでいる。下部西側には、井戸枠製作時に切断した端材を裏込めとして充填していた。

枠内の中央には直径約60 cmのニッケイ属を削り抜いた水溜を設置する。最下部はチョウナで薄く削られ、湧水層に打ち込んだようである。また、西側1ヶ所に水通しの欠き込みがある。水溜と土居桁の間は裏込めの礫を充填している。

掘方・井戸枠内埋土から9世紀前半の土師器や灰釉陶器など多くの遺物が出土している。また、井戸枠内から比較的残りの良い球胴の土師器甕が出土しており、釣瓶として用いられたものかもしれない。

なお、井戸枠内埋土を土壌分析に供した(V章)。

S X 51029 (第15図、写真図版9) 1-4区北部で検出した方形周溝墓である。西半分は調査区外にあり、北端はS D 51002に切られ全形は不明だが、南周溝が西壁付近で途切れており、南側に陸橋部が想定できる。このことから、周溝内寸で一辺約7～8 mの規模に復原できよう。

南側周溝は深さ約70 cmで、東側周溝中央で深さ約40 cmと浅くなり、北側へ向かって再度深くなる。

埋土は砂質シルトで、中層はマンガンを多く含む。

南側周溝中層から広口壺(100)が出土した。

S D 51031 1-1区中央部を南西から北東へ直線的に延びる小溝である。幅40cm、深さ20cmで土師器小片が出土した。

S D 51032 ~ 51035・51037 1-1区中央部で検出した小溝群で、耕作に伴う素掘溝であろう。

S E 51036 (第16図、写真図版7) 1-1区で検出した遺構で、埋土断面観察の結果、井戸の可能性が高いと判断した。東側はS D 51002に切られ不明であるが、掘方は一辺3mの不整形である。

井戸枠は抜き取られ残存しないが、埋土の状況から幅1m程度の規模と推測され、南側には別の掘方埋土が認められることから、1度以上の改修を経ている可能性が高い。

出土遺物はいずれも先行するS X 51042からの混入とみられ、遺構の時期は明確にしがたい。

S D 51038・51039 1-1区南部で検出した。調査区の大半をS D 51002が切るため、確認できた範囲は狭いものの、S D 51038は北西から南東へ延びる溝と思われる。幅は約2m、深さは20cm程度と浅い(第10図)。土師器片が若干出土した。

南側のS D 51039とは方向を直角に違えるため、一連の溝である可能性が高い。

S D 51040 1-1区南部で検出した。南西から北東に延びる溝で、形状や埋土はS D 51038と酷似する。

S X 51042 (第17図、写真図版4) 1-1区で検出した弥生後期後半の方形周溝墓である。

S D 51002やS E 51036により大半が失われ、全形は不明であるが、西側周溝と北側周溝の一部が残存しており、周溝北西隅が途切れるタイプの方形周溝墓と判断した。

規模は周溝内寸で一辺約8mと推定され、1-4区で検出した2基の方形周溝墓よりもやや大きいものである。周溝は幅約2.3m、深さ80cmで、埋土はシルト単層である。

溝底からわずかに浮いた状態で多くの土器が出土している。高杯や短頸壺・直口壺は完形またはそれに近いものが含まれる。

S D 51043 (第12図) 1-3区で検出した。大半をS D 51002に浸食されているため、その掘削の途中で検出することができた。

幅は6m以上、検出面からの深さは60cm程度で、幅に比してかなり浅いものである。S D 51002が大きく蛇行する地点であり、出土遺物の時期差もないため、S D 51002の一時期の流路筋と考えられる。

S D 51044 (第12図) 1-3区東側で検出した。大半が調査区以外で、上部はS D 51043・S D 51002に切られており詳細は不明である。溝ではなく土坑かもしれない。埋土はS X 51042と同じ褐灰色シルトで、弥生～古墳時代の遺構である可能性が高い。土師器小型器台や6～7世紀の甕が出土している。

(3) 下層遺構

S Z 51046 (第18図、写真図版10・11) 1-4区北部で確認した縄文時代中～後期の遺物集中である。

遺物は、1-4区西壁9層(黒褐色砂質シルト)と直下の10層(明黄褐色シルト)に多く含まれているが、層の上下関係と遺物の時期の前後関係、黒褐色砂質シルトの範囲と遺物の出土範囲は一致しない。

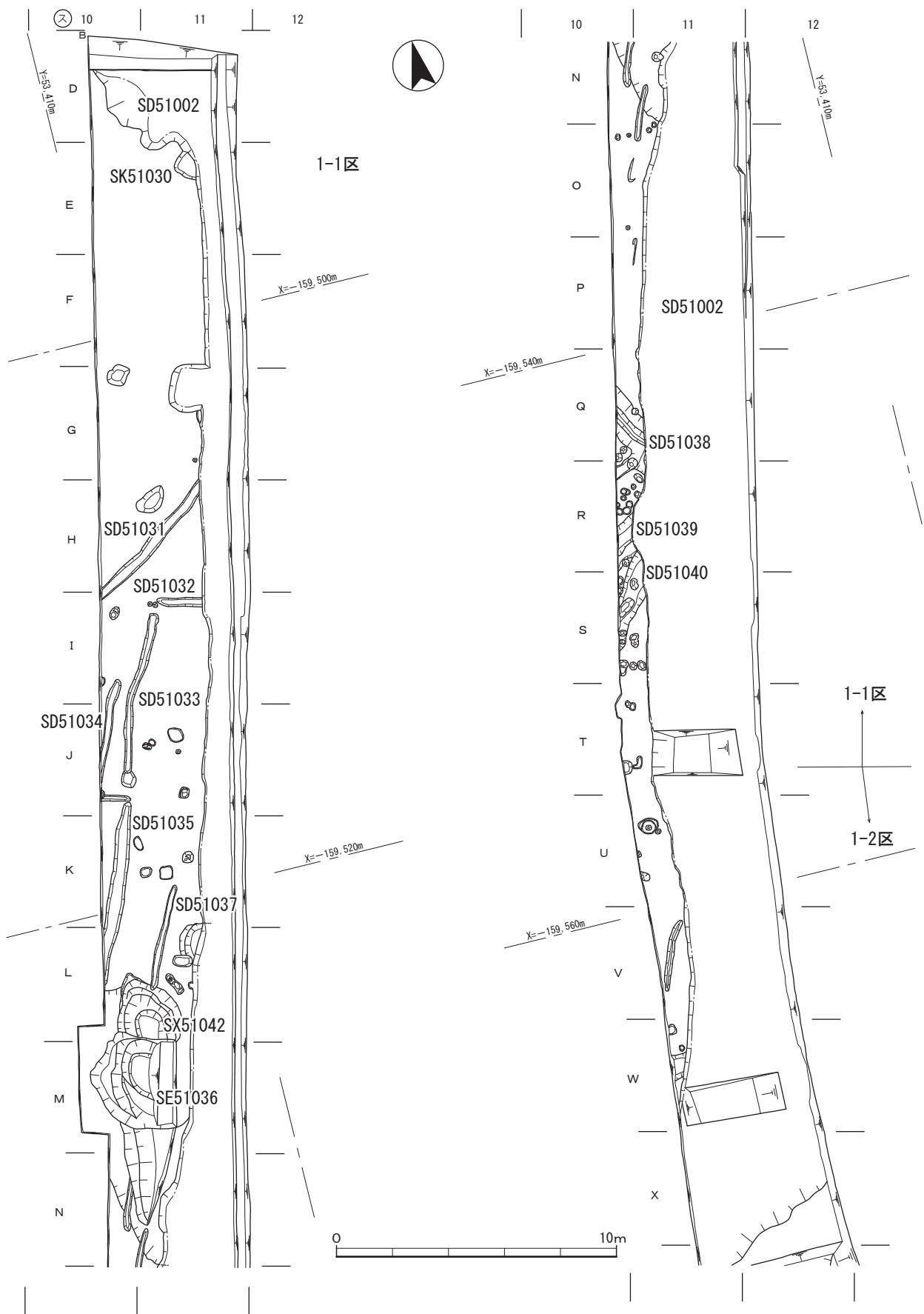
南北10m、東西6mの範囲に土器や礫が散布するが、小規模な土器集中ないし環状の遺物散布が複数あり、本来は竪穴住居や土坑、石囲炉などが存在したと推測される。特に取上No22周辺は遺物量が多く、残りの良い土器が複数みられる。取上No7付近も土器が多い。礫群1・4・5は10～20cm大の礫集中で、石囲炉の残欠などであろう。礫群2・3は小礫の集中である。取上Noと遺物番号の対応は第18図を参照されたい。

土器は縄文時代中期末が主体で、後期初頭～前葉のものも若干認められる。礫は全て回収し、室内で選別したが、石器は数点しか含まれていなかった。

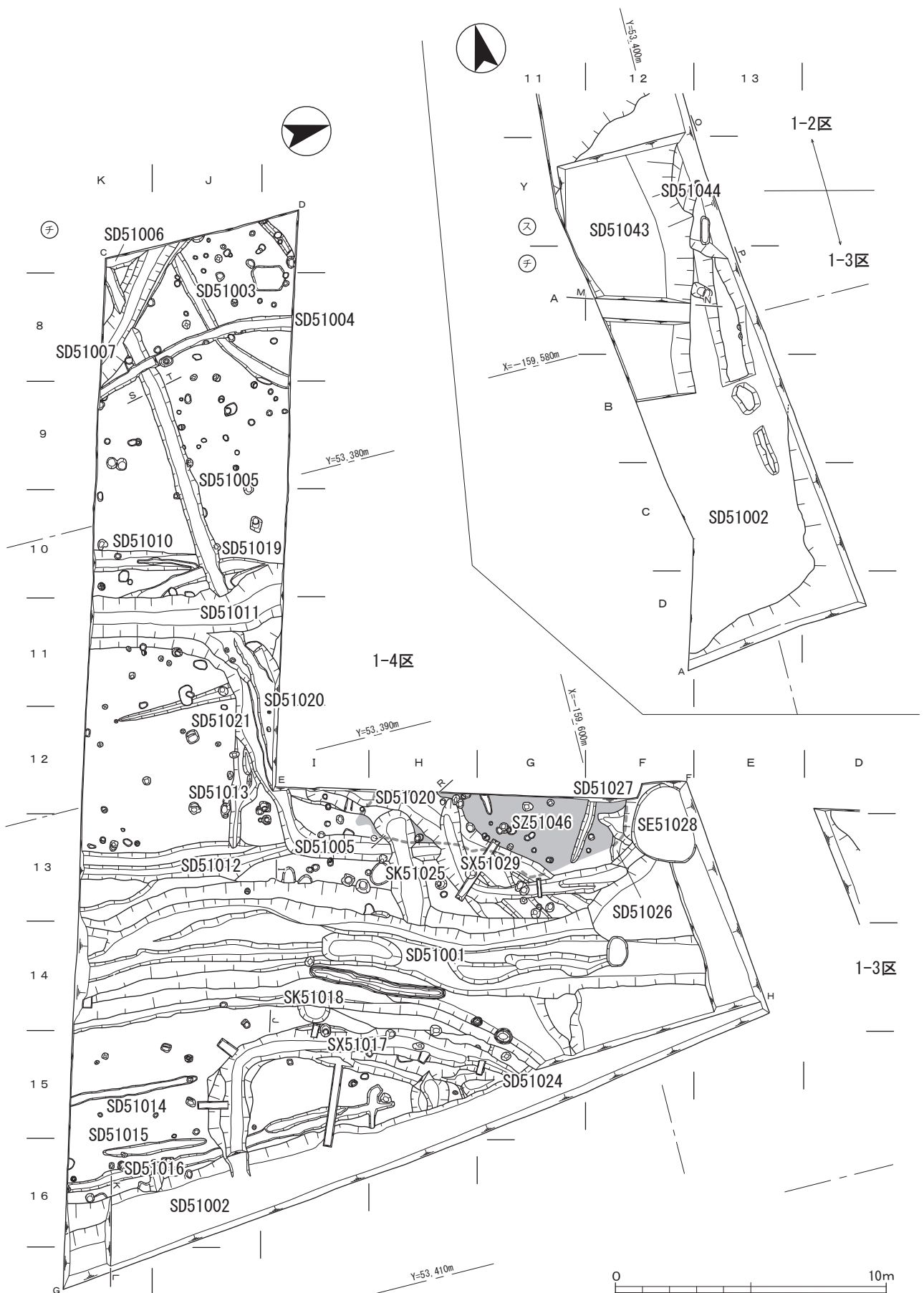
西壁9層除去後、10層(明黄褐色シルト)上面を精査したが、遺構の平面プランを確認することはできなかった。11層以降は遺物が出土しなかったため、重機で掘り下げ、13層(基本層序VI層の砂礫層)に達したところで下層調査を終了した。

1区調査の時点では、縄文時代の遺跡形成過程に関する知見が不足していたため、6区のような各層の上面精査は実施していないが、11層上で遺構が検出できた可能性があろう。

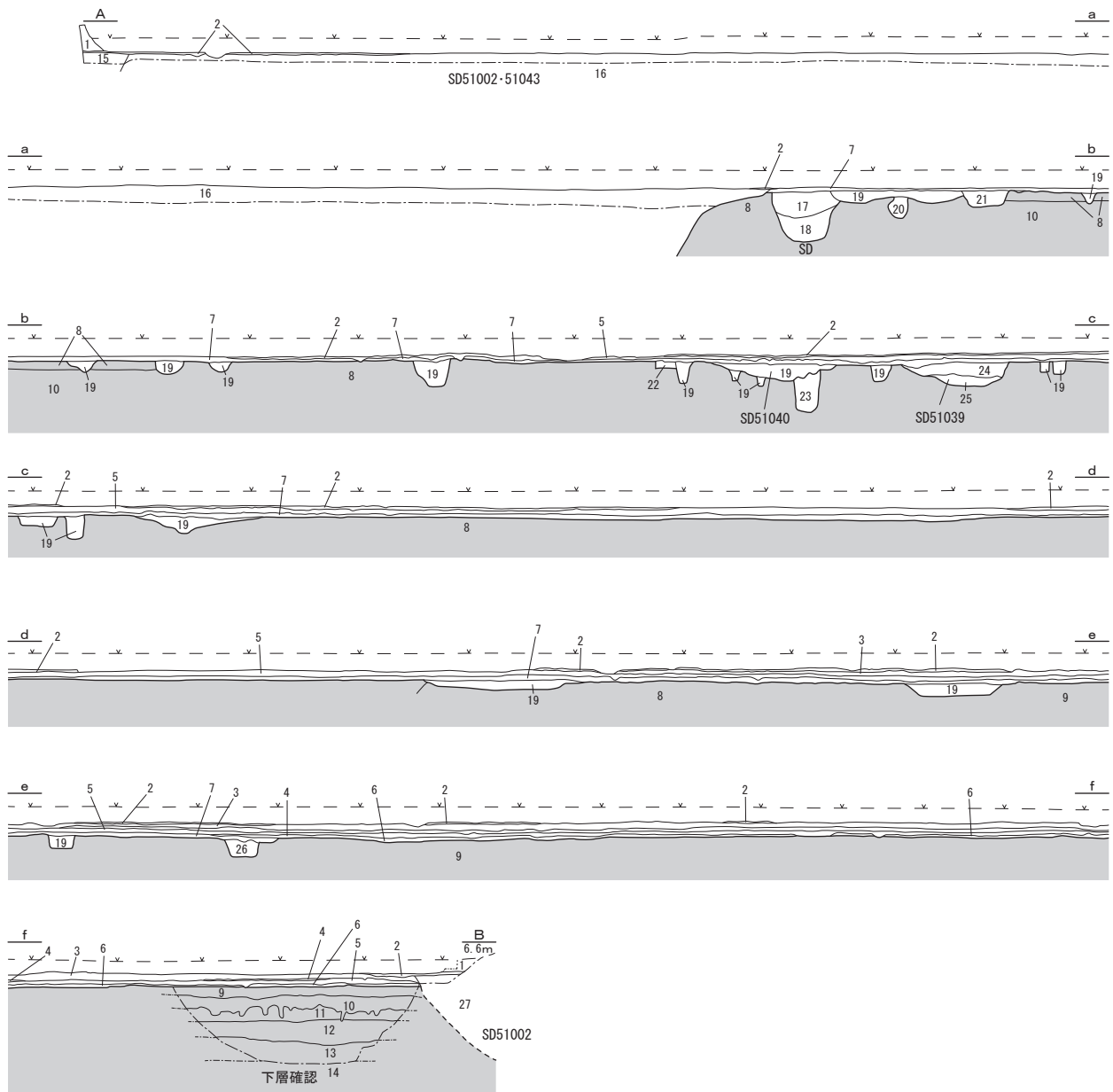
なお、S Z 51046掘削中に9層から回収した炭化材をC14年代測定に供し、4105±25yrBP(2859-2577calBC:2σ)の年代値を得た(V章)。



第8图 1区遺構全体図① (1:200)



第9図 1区遺構全体図② (1:200)

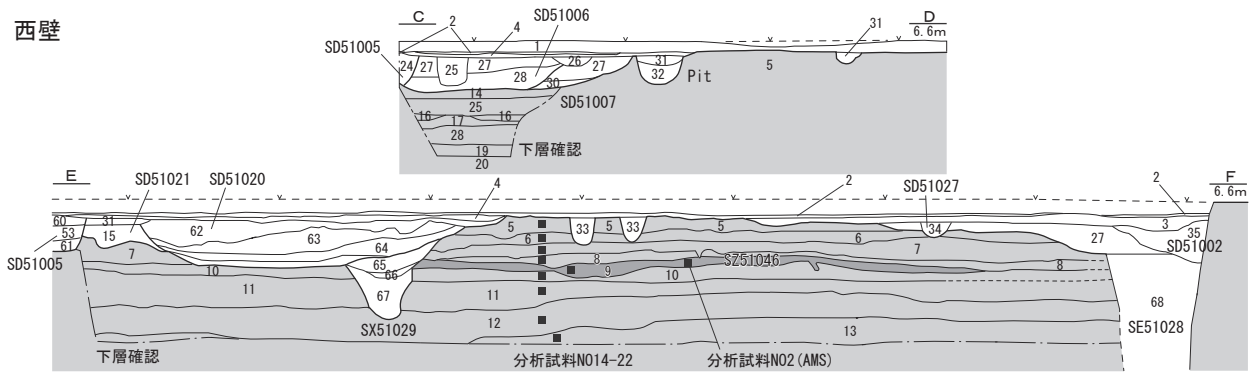


- | | |
|---|---|
| 1. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土<耕作土> | 16. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂<SD51043埋土> |
| 2. 10YR6/6 明黄褐色シルト<床土> | 17. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (マンガン多含) |
| 3. 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト (マンガン多含) <旧耕作土> | 18. 10YR5/2 灰黄褐色シルト |
| 4. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト<旧床土> | 19. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 |
| 5. 2.5Y6/1 黄灰色シルト (マンガン多含) <旧々耕作土> | 20. 10YR6/1 褐灰色粘質土 |
| 6. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト<旧々床土> | 21. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (マンガン多含) |
| 7. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (マンガン多含) <旧々々耕作土> | 22. 2.5Y7/2 灰黄色粘質土 |
| 8. 10YR6/1 褐灰色粘土質シルト<基盤層> | 23. 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土 |
| 9. 10YR6/1 褐灰色粘土質シルト (上面に鉄分集積・縄文土器含)
<基盤層> | 24. 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (マンガン多含) <SD51039埋土> |
| 10. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト (生痕著しい・縄文土器含) | 25. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土シルト<SD51039埋土> |
| 11. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト (マンガン多含・縄文土器含) | 26. 10YR6/1 褐灰色シルト<SD51031埋土> |
| 12. 2.5Y5/3 黄褐色シルト
(直径1cmの炭化物まばらに含む・縄文土器含) | 27. 2.5Y6/1 黄灰色粗~細砂<SD51002埋土> |
| 13. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂 | |
| 14. 2.5Y5/1 黄灰色粘砂 (直径3cmの大礫多含) | |
| 15. 10Y5/1 灰色粘質土<SD51002・51043埋土> | |

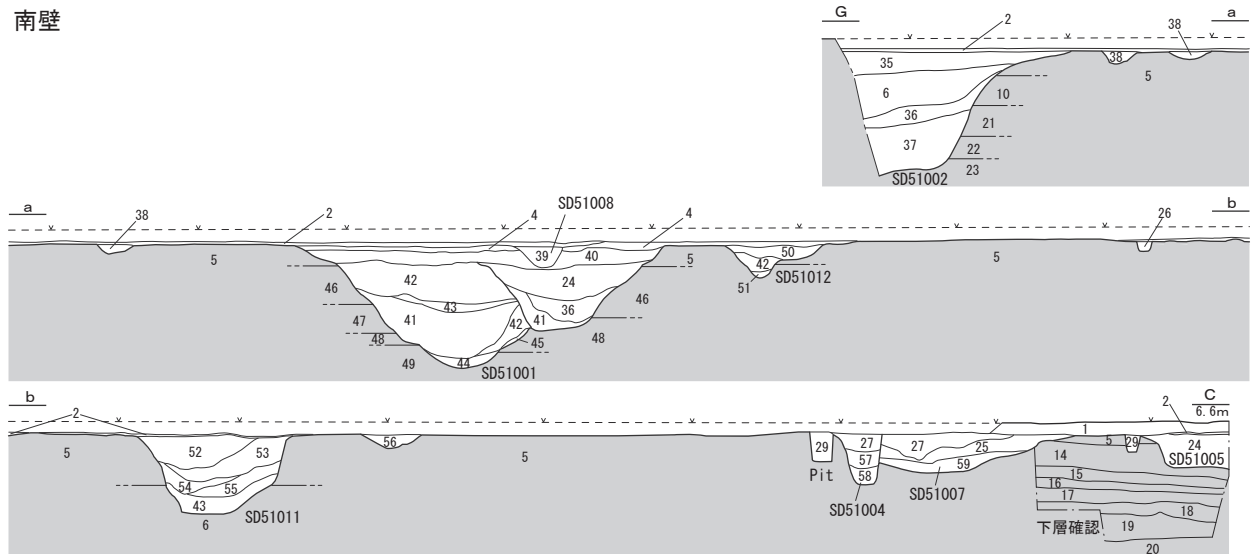
0 5m

第10図 1-1 ~ 1-3 区西壁土層断面図 (1:100)

西壁



南壁

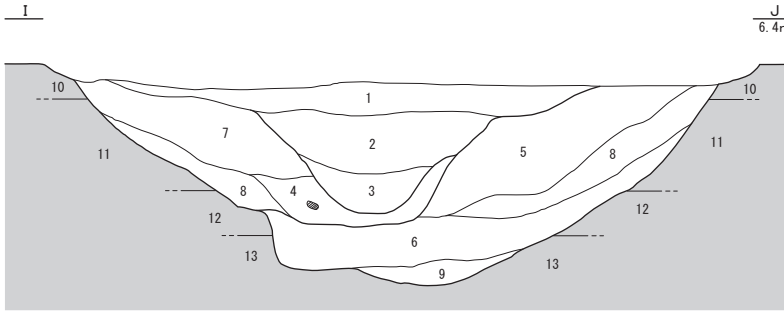


- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土<耕作土> 2. 2.5Y7/6 明黄褐色シルト<床土> 3. 2.5Y6/2 灰黄色砂質土<旧耕作土> 4. 10YR5/1 褐灰色シルト(マンガン多含)<包含層> 5. 5Y7/4 浅黄色砂質シルト(マンガン多含)<基盤層> 6. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト 7. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト 8. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト(0.5cmの炭・礫・縄文土器含) 9. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト(0.5cmの炭・黄褐色シルト塊・礫・縄文土器含) 10. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト 11. 5Y6/3 オリーブ黄色極細砂 12. 2.5Y5/3 黄褐色シルト(下部は極細砂多含) 13. 2.5Y5/3 黄褐色細砂(3~5cmの礫多含) 14. 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルト(マンガン多含、炭化物まばらに含) 15. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト 16. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト(砂は少ない) 17. 2.5Y6/2 灰黄色シルト 18. 2.5Y7/6 明黄褐色シルト(よく締まる) 19. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂 20. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫 21. 10YR6/4 にぶい黄褐色極細砂 22. 10YR6/2 灰黄褐色極細砂(マンガン多含) 23. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト(鉄分含) 24. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト 25. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土(黄褐色シルト塊含) 26. 2.5Y6/1 黄灰色粘質土 27. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土(マンガン多含) 28. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト<SD51006埋土> 29. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 30. 2.5Y6/1 黄灰色粘土質シルト<SD51007埋土> 31. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 32. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 33. 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 34. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土<SD51027埋土> 35. 5Y6/2 灰オリーブ色砂質シルト~細砂(黄褐色シルト塊他含)<SD51002埋土> | <ol style="list-style-type: none"> 36. 2.5Y5/1 黄灰色極細砂(灰黄色シルト塊含) 37. 10Y6/1 灰色極細砂(植物遺体含)<SD51002埋土> 38. 10Y6/1 灰色粘質土 39. 10Y6/2 オリーブ灰色シルト(マンガン多含)<SD51008埋土> 40. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト(上面にマンガン集積)<SD51001埋土> 41. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂とシルトの互層<SD51001埋土> 42. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 43. 10YR6/1 灰色砂質シルト 44. 2.5Y5/1 黄灰色粘砂(土器多含)<SD51001埋土> 45. 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト(マンガン多含)<SD51001埋土> 46. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト(縄文土器若干含) 47. 10Y6/1 灰色極細砂(黄褐色シルト塊含) 48. 2.5Y7/4 浅黄色粘土質シルト 49. 10Y7/2 灰白色粘土質シルト(鉄分沈着) 50. 2.5Y6/1 黄灰色粘土(マンガン多含)<SD51012埋土> 51. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト<SD51012埋土> 52. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト(黄褐色シルト塊含)<SD51011埋土> 53. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 54. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト(土器多含)<SD51011埋土> 55. 10YR5/2 灰黄褐色シルト(粗砂多含)<SD51011埋土> 56. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土(黄褐色土塊含)<SD51010埋土> 57. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト<SD51004埋土> 58. 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト<SD51004埋土> 59. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂 60. 10YR5/2 暗灰黄色シルト(マンガン多含)<SD51005埋土> 61. 2.5Y6/1 黄灰色シルト<SD51005埋土> 62. 10YR4/1 褐灰色シルト<SD51020埋土> 63. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト<SD51020埋土> 64. 10YR5/1 褐灰色極細砂(炭をまばらに含む)<SD51020埋土> 65. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 66. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト(暗褐色シルト塊含)<SX51029埋土> 67. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトと極細砂の互層 68. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(黄褐色シルト塊含)<SE51028埋土> |
|--|---|



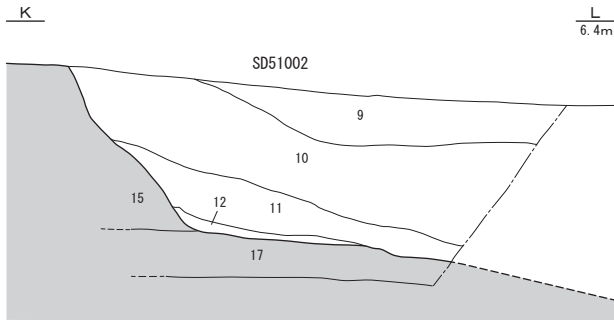
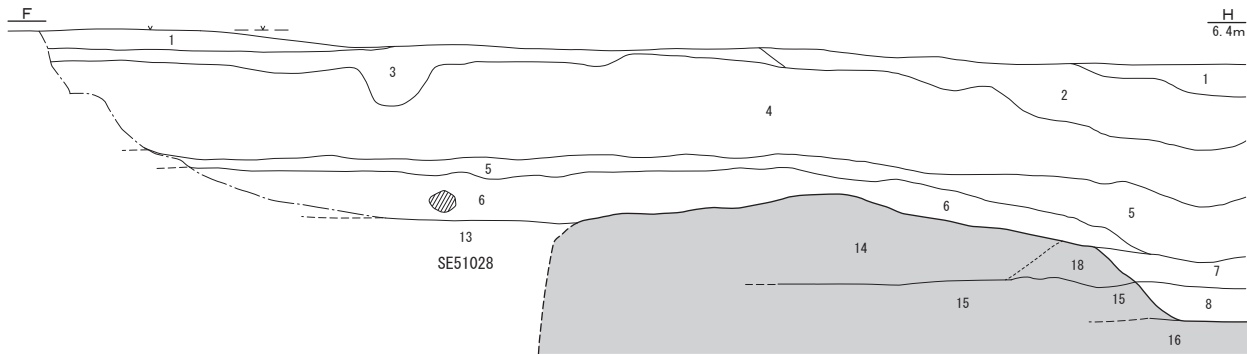
第 11 図 1-4 区西壁・南壁土層断面図 (1:100)

SD51001



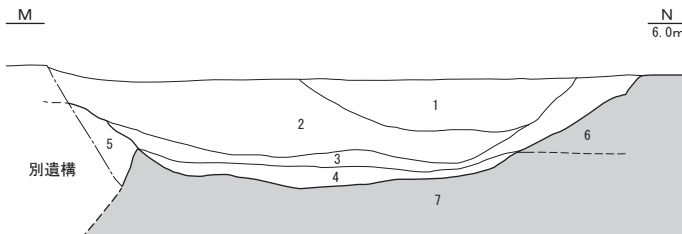
- 1. 2. 5YR6/2 灰黄色砂質シルト
(上面にマンガン集積)
- 2. 2. 5YR5/2 暗灰黄色砂質シルト
- 3. 2. 5YR5/1 黄灰色極細砂とシルトの互層
- 4. 2. 5Y6/1 黄灰色極細砂とシルトの互層
(鉄分多含)
- 5. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
- 6. 2. 5YR6/1 黄灰色極細砂と粘土質シルトの互層
- 7. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト
- 8. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト
(黄褐色シルト塊含)
- 9. 2. 5Y5/1 黄灰色粘砂 (土器多含)
- 10. 2. 5Y7/6 明黄褐色シルト (縄文土器若干含)
- 11. 2. 5Y6/3 にぶい黄色シルト (縄文土器若干含)
- 12. 2. 5Y7/4 浅黄色粘土質シルト
- 13. 10Y7/2 灰白色粘土質シルト (鉄分沈着)

SD51002



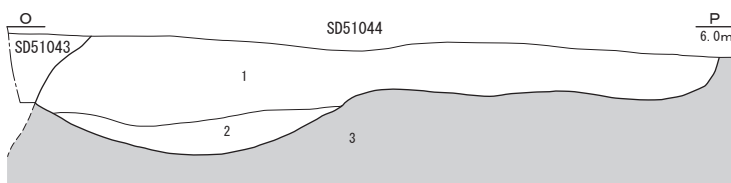
- 1. 10Y5/1 灰黄色砂質シルト (大礫多含)
- 2. 2. 5Y5/1 黄灰色砂質シルト (大礫含)
- 3. 5YR5/1 灰色シルト<旧耕作土>
- 4. 2. 5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト (黄褐色シルト塊含)
- 5. 2. 5Y5/1 黄灰色極細砂～砂質シルト (下面に鉄分沈着)
- 6. N5 灰色粗砂
- 7. N5 灰色粘砂
- 8. N6 灰色粘砂
- 9. 5Y5/2 灰オリーブ色砂質シルト
- 10. 5Y5/2 灰オリーブ色極細砂～粗砂
- 11. 7. 5Y6/1 灰色粘砂
- 12. 5Y7/3 浅黄色粘土質シルト
- 13. 7. 5YR5/2 灰褐色シルト (黄褐色シルト塊含) <SE51028埋土>
- 14. 5Y7/2 灰白色粘土質シルト
- 15. 2. 5Y7/6 明黄褐色粘土質シルト
(局所的に青灰色に変化、縄文土器含)
- 16. 7. 5YR5/4 にぶい褐色砂礫 (鉄分沈着)
- 17. 2. 5Y5/2 暗灰黄色細砂
- 18. 14が青灰色に変色

SD51043

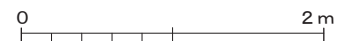


- 1. 2. 5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト
- 2. 2. 5Y5/2 灰黄色砂質シルト
- 3. 2. 5Y6/1 黄灰色細砂～極細砂 (2cmの礫、土器多含)
- 4. 2. 5Y4/1 黄灰色砂質シルト
- 5. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (黄褐色シルト塊含)
- 6. 2. 5YR7/6 明黄褐色シルト (縄文土器含)
- 7. 10YR7/1 灰白色砂質シルト～極細砂 (鉄分沈着)

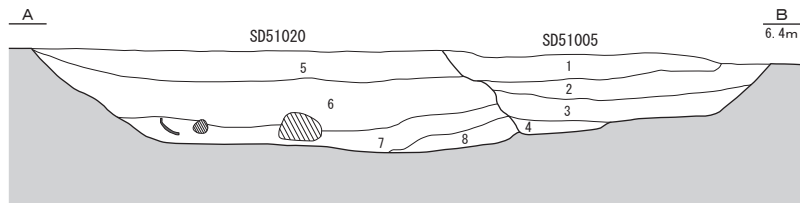
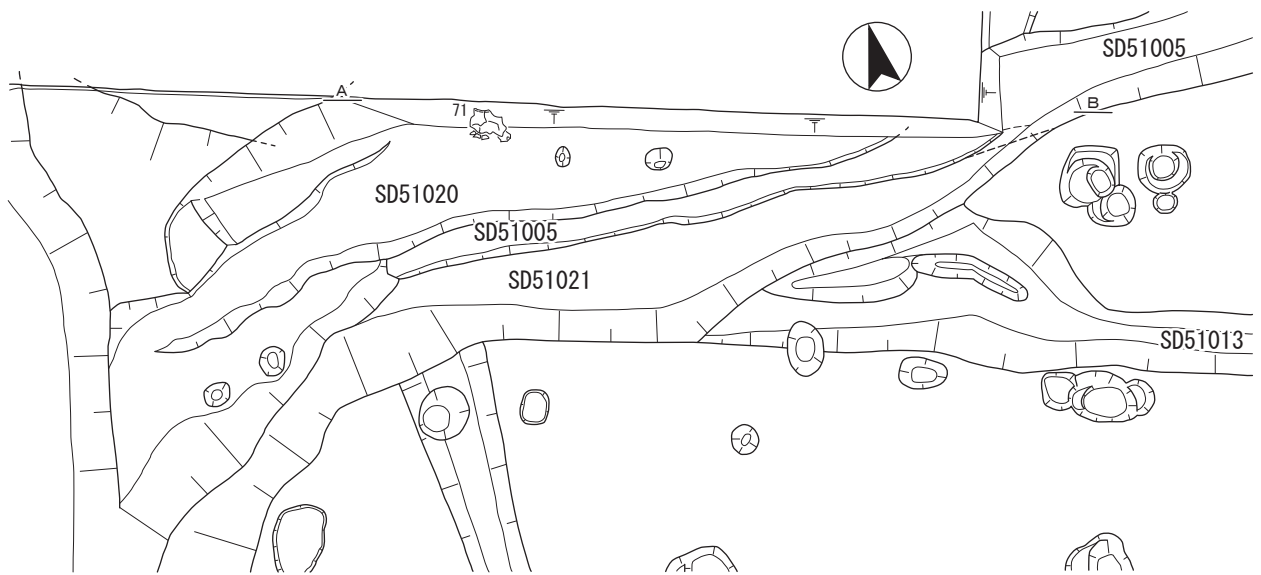
SD51044



- 1. 10YR5/2 灰黄褐シルト
- 2. 10YR6/1 褐灰色粘質シルト
- 3. 2. 5Y7/6 明黄褐色シルト

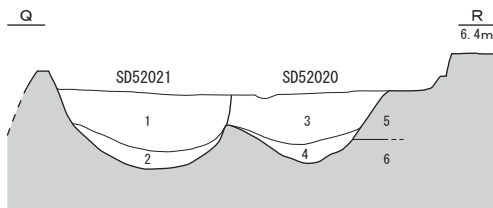


第 12 図 S D 51001・51002・51043・51044 断面図 (1:50)



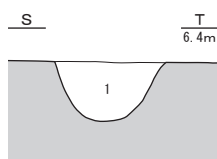
- | | |
|---|--------------------------------------|
| 1. 10YR5/2 暗灰黄色シルト (マンガン多含) <SD51005埋土> | 5. 10YR4/1 褐灰色シルト<SD51020埋土> |
| 2. 10YR5/2 暗灰黄色シルト<SD51005埋土> | 6. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト<SD51020埋土> |
| 3. 2.5Y6/1 黄灰色シルト<SD51005埋土> | 7. 10YR5/1 褐灰色極細砂 (炭若干含) <SD51020埋土> |
| 4. 2.5Y6/3 にぶい黄色極細砂<SD51005埋土> | 8. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂<SD51020埋土> |

SD51020・SD51021



- | |
|---|
| 1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト<SD51021埋土> |
| 2. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂<SD51021埋土> |
| 3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 (黄褐色シルト塊含) <SD51020埋土> |
| 4. 5Y6/1 灰色極細砂<SD51020埋土> |
| 5. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト |
| 6. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト (縄文土器若干含) |

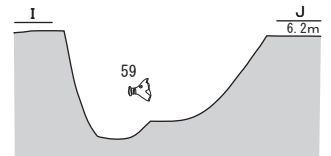
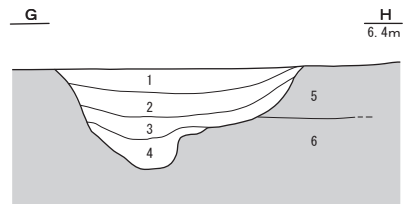
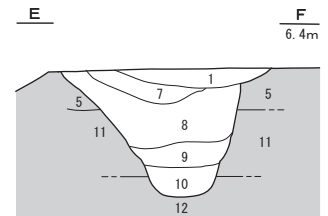
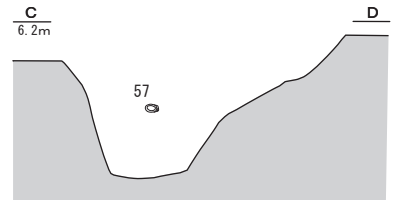
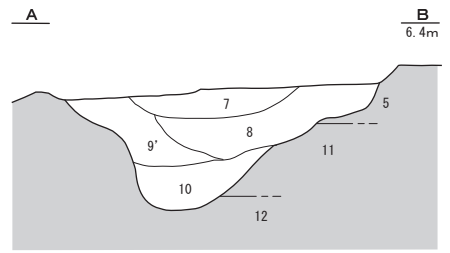
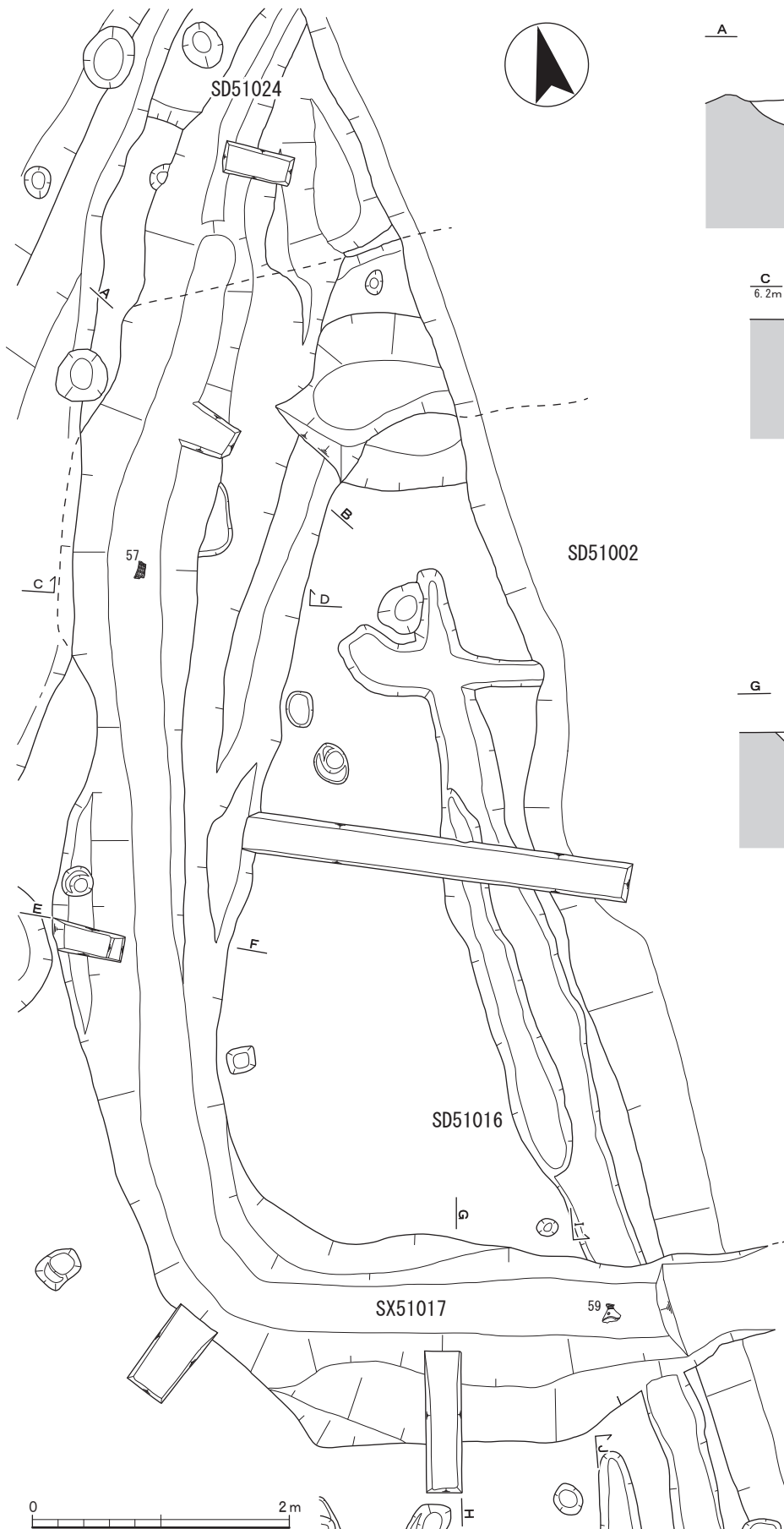
SD51005



- | |
|----------------------------|
| 1. 2.5Y6/2 灰黄色シルト (マンガン多含) |
|----------------------------|

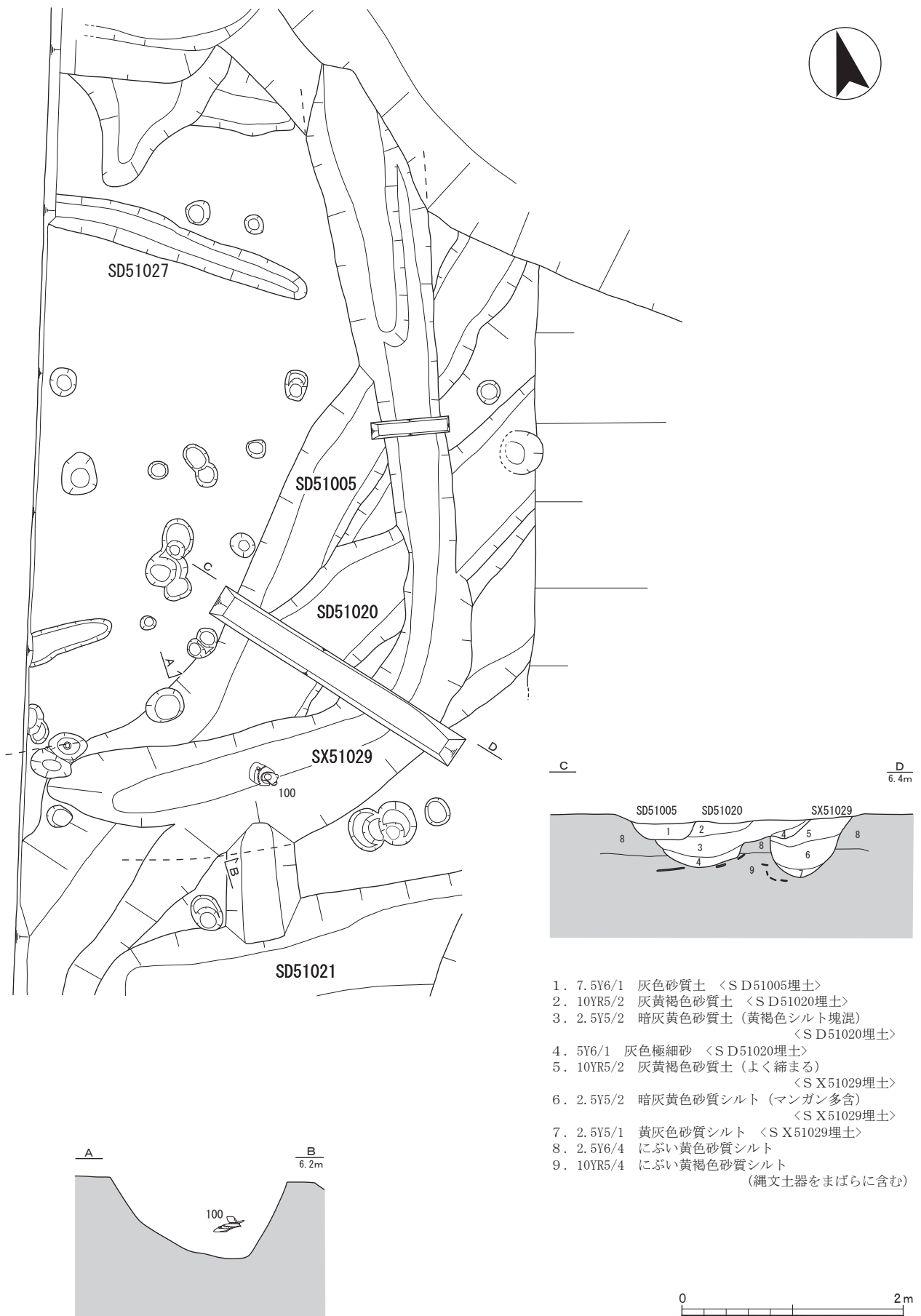


第 13 図 S D 51005・51020・51021 (1:50)



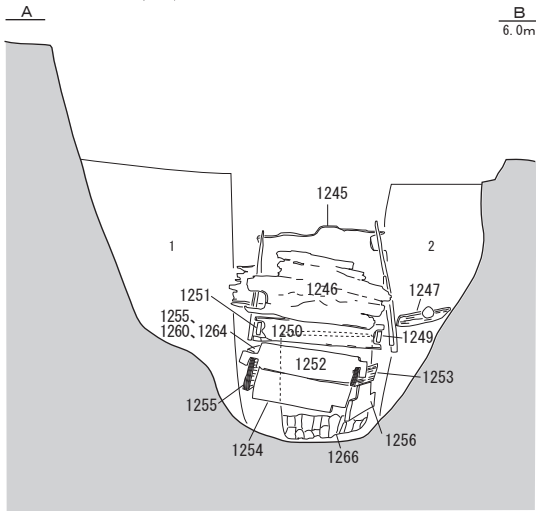
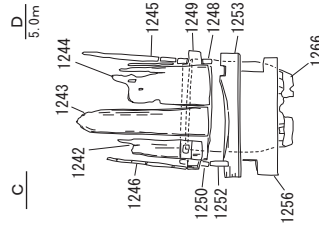
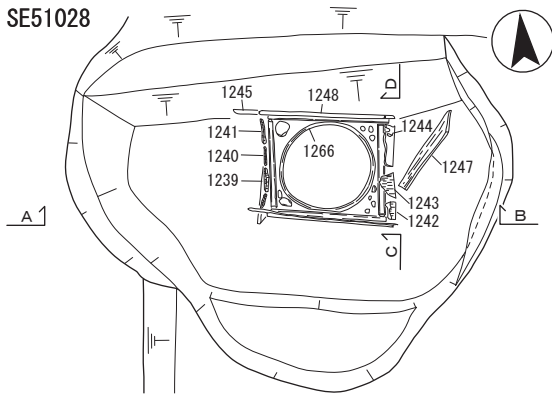
1. 2. 5Y5/2 暗灰黄色砂質土
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
3. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
(黄褐色シルト塊含)
4. 2. 5Y5/3 黄褐色シルト
(灰黄褐色シルト塊含)
5. 5Y6/4 オリーブ黄色砂質シルト
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
(縄文土器含)
7. 2. 5Y7/11 浅黄色シルト
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
9. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
- 9'. 2. 5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト
(灰色粗～細砂多く混)
10. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
(黄褐色シルト塊含)
11. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
12. 10Y6/1 灰色極細砂

第14図 SX51017 (1:50)

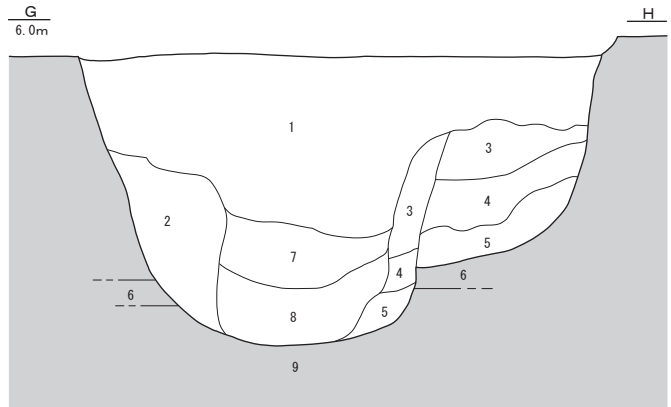
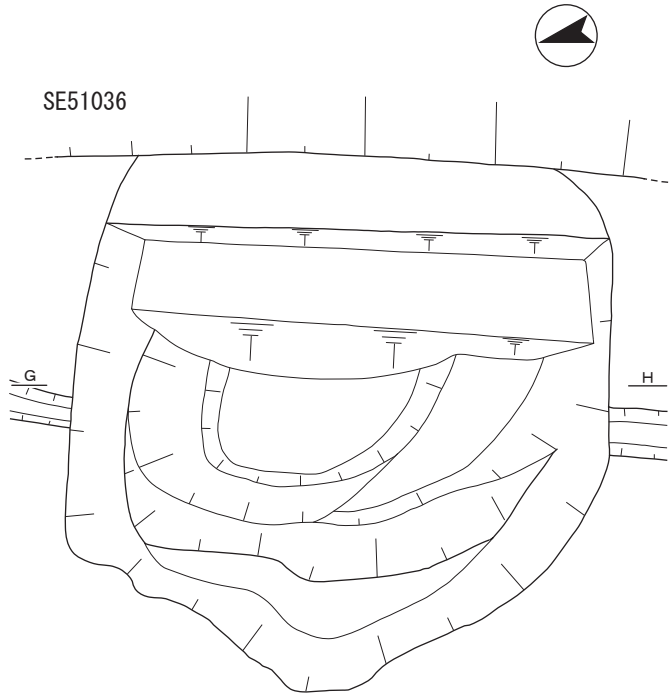


第 15 図 SX 51029 (1:50)

SE51028



SE51036

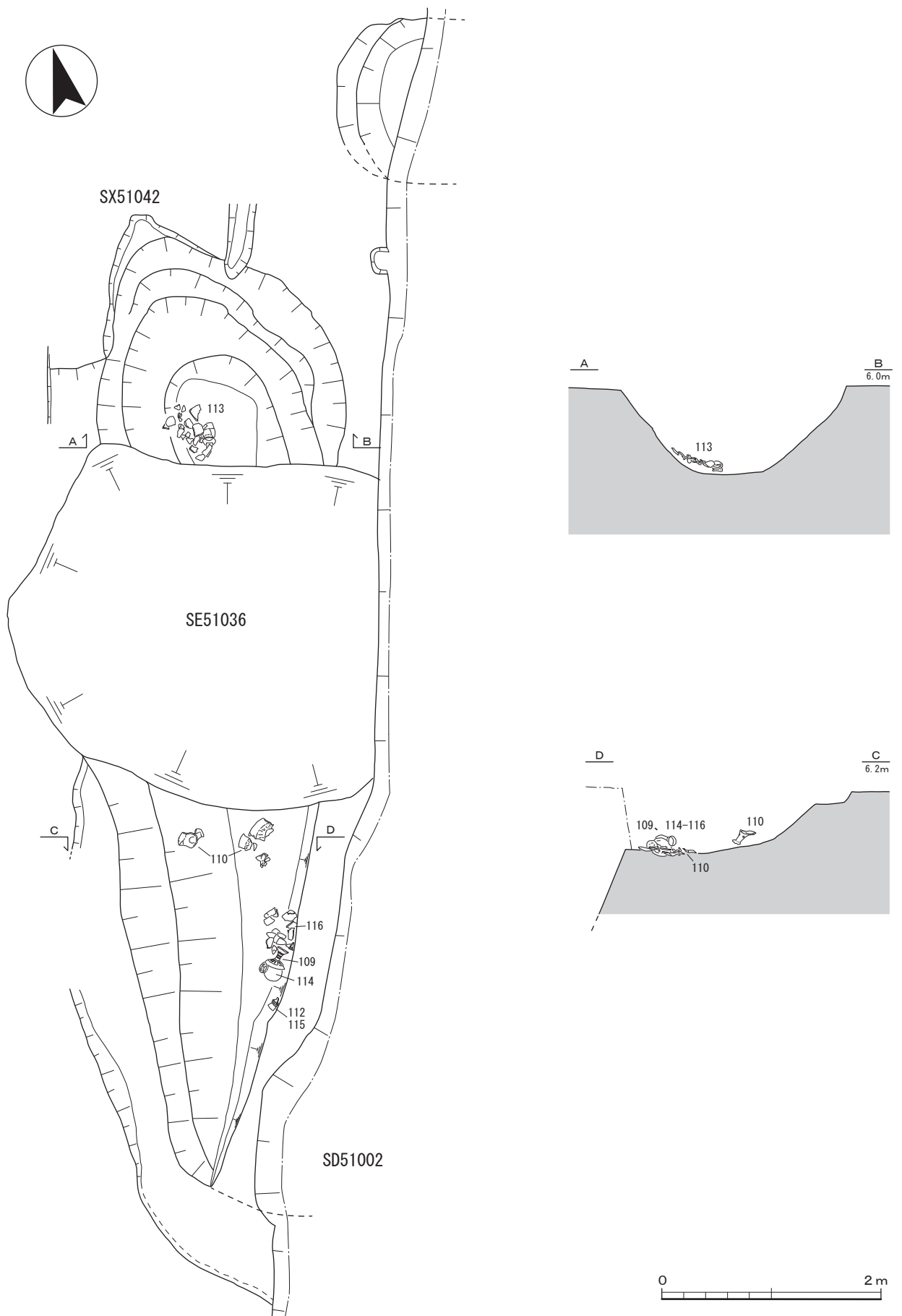


1. 7.5YR5/2 灰褐色シルト (黄褐色シルト塊若干含)
2. 5BG5/1 青灰色粘土質シルト (緑灰色シルト塊若干含、土器小片多含)

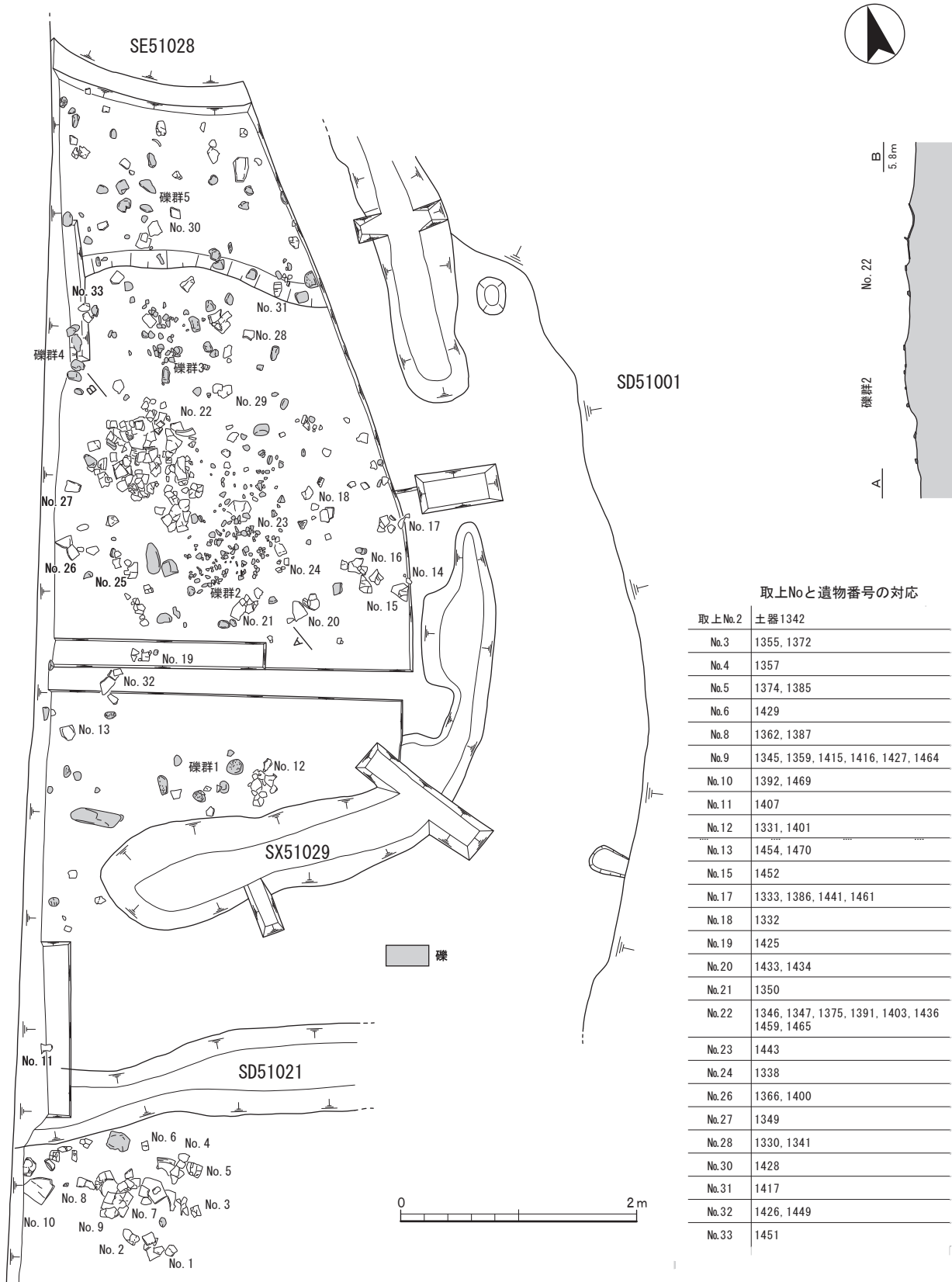
1. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (オリーブ灰色シルト塊、黄褐色シルト塊、灰色極粗砂塊多含)
2. N5 灰色極粗砂 (黄褐色シルト塊、5cm程度の礫多含)
3. 10YR5/2 灰黄褐色シルト
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
5. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (やや締りが弱い)
6. 2.5Y5/1 黄灰色細砂
7. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト (5cm程度の礫多含)
8. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト
9. 2.5Y5/1 黄灰色極粗砂 (5cm程度の礫多含)



第 16 図 SE 51028・SE 51036 (1:50)



第 17 图 S X 51042 遺物出土狀況图 (1:50)



第 18 図 S Z 51046 遺物出土状況図 (1:50)

4. 2区 (第19～23図)

(1) 概要

遺跡東部の調査区で、1区の南側にあたる。また、6次調査6区が南接する。便宜的に北端を2-1区、南北直線部分を2-2区、南端を2-3区と分けて調査にあたった(第19～21図)。

東側は大半が条里坪境溝であるSR 52003・SD 52022にあたり、当該遺構は東接する現水路への影響が懸念されたため、部分的な掘削に留めた。他に南北方向に走る古墳時代の大溝SD 52004と、そこから派生する溝群(SD 52005・52006・52016～018)、弥生時代終末期の方形周溝墓(SX 52019)などがある。溝以外の遺構は希薄であった。

古墳時代から現代まで水路がよく似た位置・方向をとるが、これは基幹水路となった放棄流路ないし名残川が、微高地の東縁辺である当地付近を流れ続けていたためであろう。

こうした遺構の分布状況から、2区付近は水田等の食糧生産域が広がっていたと推測される。

本調査区では、基盤層中に縄文時代の遺物がみられなかったため、下層確認は実施していない。

(2) 遺構

SD 52001・52002 2-3区の南端～南東端付近の不定形な遺構で、底面は複数の溝や土坑状となる。

中世の鍋片や陶器片が出土している。

SR 52003 (第20図) 調査区東端を南北に流れる自然流路または溝で、東岸は調査区外である。やや蛇行しながら南から北に向かって流れたものと考えられ、概ね条里や現代の水路に沿う。このまま北流し、1区のSD 51002に繋がる可能性がある。

幅は調査区内で5m以上あり、深さは1m以上あるが、農業用水路が近接するため、完掘はしていない。埋土はシルトと砂の互層である(写真図版17)。

中世後期～近世の土師器鍋や天目茶碗などが出土しており、16世紀以降に埋没したとみられる。

SD 52004 (第21図、写真図版14・15) 2-3区を南北に流れる大溝である。2-2区でやや東に向きを変え、SR 52003に切られ消滅している。

幅は3～4m、深さ約1mを測る。土層断面観察から、大きく3～4段階の変遷が想定され、中層や

下層は砂が主体でやや流速が早く、上層はシルト等泥質の浮遊堆積物が主体となる。埋没とともに順次幅を狭めている。

古墳時代前～後期の土師器碗・甕、台付甕、須恵器、飛鳥時代の土師器などが出土した。

SD 52005・52016・52017・52018 (第20図、写真図版14) SD 52004西肩には、東西方向の溝が等間隔でほぼ直角に接続されており、西側へ分水されていたとみられる。

SD 52005は幅約3mで埋土は上下2層に大別され、いずれもシルトである。

SD 52016・52017・52018はほぼ同規模の溝で、いずれも埋没はSD 52004より早い。SD 52004中層埋没時には完全に廃絶しており、これらの上面にSD 52006が新たに掘削される。このSD 52006とSD 52004上層が並走するようである。

いずれの溝からも古墳時代の遺物が出土している。

SD 52006 (第20図、写真図版15) 2-2～2-3区を南北に走る古墳時代の溝で、緩やかに北西へ湾曲していく。

幅約1m、深さ約60cmで、埋土は3層に分かれ、上層の2層はシルト、下層は粗砂を含むシルトである。SD 52005・52016・52017廃絶後にも機能しており、SD 52004上層と並走する水路として利用されていたようである。

弥生時代終末期～古墳時代の土師器壺、台付甕などが出土しており、SX 52019からの混入とみられる遺物もある。

SD 52008 2-3区の南端から北上する幅60cm、深さ20cm未満の小規模な溝である。SD 52009の上面にあり、耕作痕ないしSD 52009の最終埋没時に形成された浅い溝状のたまりであると推測される。

中世の遺構である可能性が高い。

SD 52009 2-3区南部で検出した浅い溝である。幅は約1m、深さは10～20cmの浅いもので、埋土はシルトである。

完形の土師器杯(154)が出土している。

SA 52011 2-3区南端で3間分を検出した柱列である。ピットは2基ずつが重複しており、わずかに20cmほど北側へずらして柵を更新したのと考えられる。

ピット掘方は直径 20 cm の円形を呈し、検出面からの深さは 20 cm 程度、柱間は 66 cm の等間である。南東から北西へ延び、東端は S D 52009、S D 52001 付近で途切れる。

この柱列から 90 m 北側に、並列する S A 52024 があり、同時期の遺構である可能性が高い。

S D 52012 2-3 区南で検出した。S D 52010 の 2 m 北側を並走するが、それより長い溝で、S R 52003 に切られるまで東進する。

溝の断面形や埋土は S D 52010 に類似するが、幅、深さともにひとまわり小規模である。

古代の土師器杯・長胴甕片が若干出土している。

S D 52013 2-3 区で検出した東西方向の溝で、南側に S D 52010・S D 51012 など似た溝がみられる。S R 52003 に切られるが、その前身の水路から分水するための溝であろう。

平安時代の土師器杯、灰釉陶器等が出土している。

S D 52014 2-3 区の S D 52012 や S D 52015 の東端で逆 L 字状に曲がる、不定形な溝である。底面は土坑のような凹みが複数ある。

一帯の削平により、耕作に伴う溝の深い部分だけが残存していたものと考えられる。

S D 52015 S D 52012 のすぐ北側を東進するが、それに切れ大部分が不明である。溝の規模や埋土は S D 52012 に酷似する。

わずかに土師器の小片が出土した。

S X 52019 (第 19 図、写真図版 13・17) 2-2 区で検出した弥生時代終末期の方形周溝墓である。周溝は逆 L 字状に屈曲し、南側に陸橋部が開口するとみられる。西半は調査区外にあり、東半は S D 52006・52020 に切られる。

規模は周溝内寸で一辺約 8 m に復原できよう。削平により埋葬施設や墳丘は残っていない。

周溝幅は 1.0～1.4 m、深さは 75 cm で、南東隅は幅 70 cm 程度まで狭くなり、深さ 50 cm と若干浅い。

埋土は下層が砂・砂質シルトの互層、上層はシルトである。

南側周溝中層で内湾口縁壺 (165) が出土している。

なお、本遺構と S D 52006 が交差した地点で、S D 52006 底面から内面に水銀朱が付着した高杯 (118) が出土したが、本来は当遺構に伴うものの可能性が

高い。

S D 52020 (写真図版 13) 2-2 区で検出した南北方向の溝である。調査区内では直線的であるが、北側の延長部分は 2-1 区で確認できず、緩やかに西へ曲がっていくとみられる。

幅 40 cm 前後、深さは約 30 cm で、埋土にはマンガンを多く含む (第 22 図)。

土師器高杯等が若干出土している。

S D 52022・52026・52027・52028 (第 19 図、写真図版 16) 2-2～2-1 区にある南北方向の大溝群で、東側の大半を S R 52003 に切られる。

S D 52022 は東側の S D 52027 と西側の S D 52026 に分かれ、S D 52028 は S D 52026 が西へ湾曲したものである。S D 52026 は深さ 1.2～1.5 m を測る。埋土はシルトと砂の互層で、一定埋没後は S D 52027 に移流し、幅約 2 m、深さ 60 cm と規模は縮小する。

古代の土師器長胴甕や古墳時代の台付甕、須恵器等多くの遺物が出土している。

S D 52023 2-1～2-2 区を南北に流れる、幅約 50 cm、深さ約 10 cm の小溝である。緩やかに湾曲し、S D 52022 に合流する。

土師器壺片等が若干出土している。

S A 52024 2-1 区で 26 間分を検出した東西方向の柱列である。延長約 20 m で、東端は S R 52003 に切られるが、S D 52022・S D 52025 等の溝群よりも後出の遺構である。

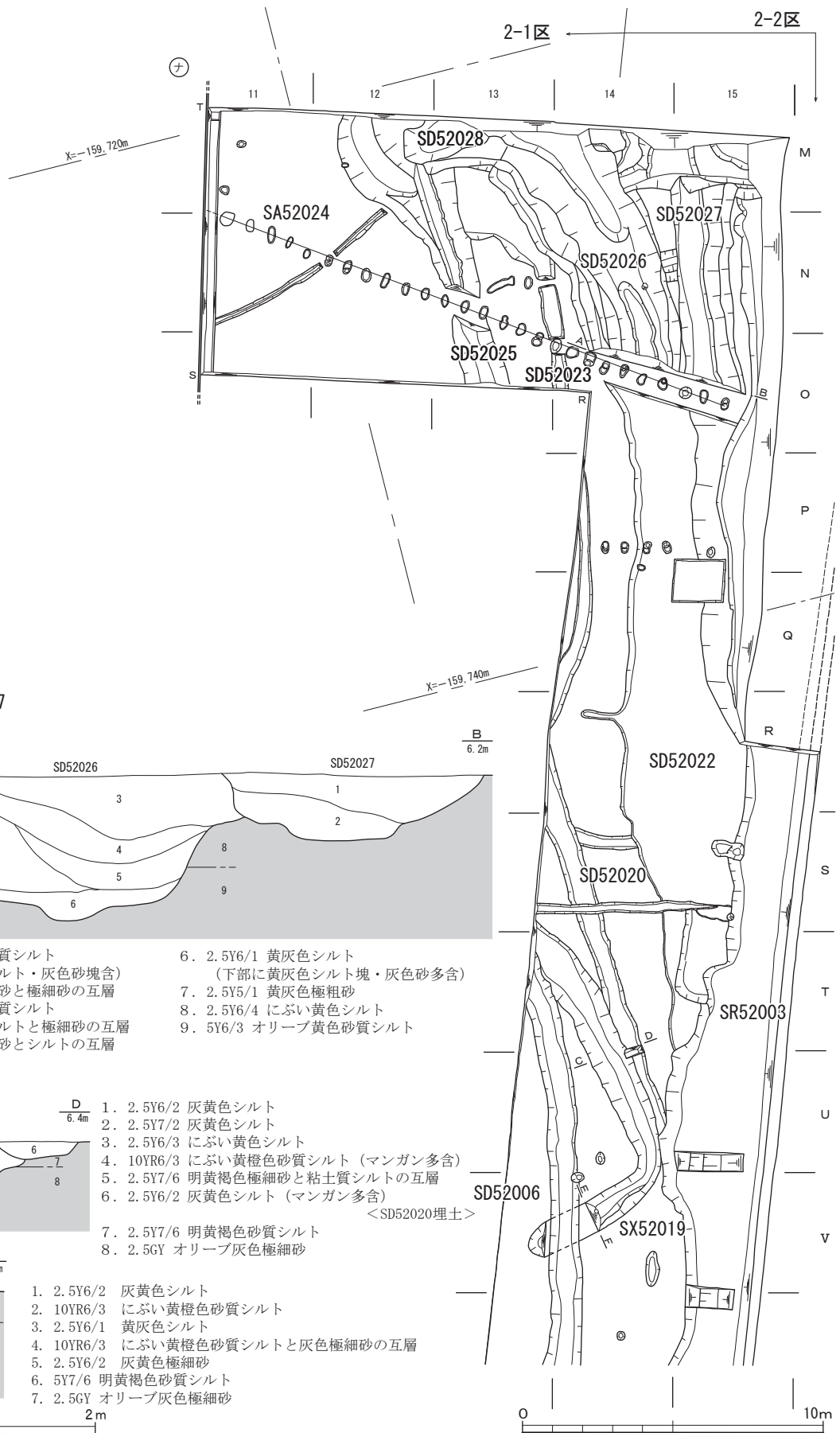
ピット掘方は直径 20 cm の円形で、ピットの重複から 1 度更新したと考えられる。ピットの深さは 40～20 cm で、不揃いである。柱間寸法も 60 cm と 75 cm が混在し不統一である。また、約 4 m 南と、約 90 m 南に離れて同様な柱列 (S A 52011) がある。

遺構埋土の色調や溝との前後関係などから、中世末から近世の遺構と判断している。

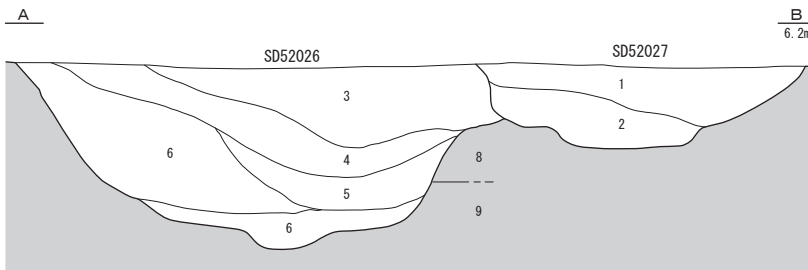
S D 52025 (写真図版 16) 2-1 区で検出した溝で、北端を S D 52028 に切られる。S D 52023 と並走する水路であろう。

幅 1.3 m、深さ 50 cm で、埋土は 3 層に分かれ (第 23 図)、最下層は細砂がみられる。

遺構の切り合いから、古代の遺構である可能性が高い。

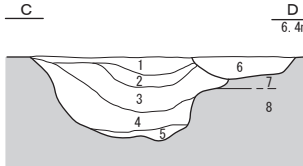


SD52026・SD52027

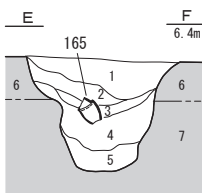


- | | |
|---------------------------------------|---|
| 1. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト
(黄褐色シルト・灰色砂塊含) | 6. 2.5Y6/1 黄灰色シルト
(下部に黄灰色シルト塊・灰色砂多含) |
| 2. 2.5Y5/1 黄灰色粗砂と極細砂の互層 | 7. 2.5Y5/1 黄灰色極粗砂 |
| 3. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト | 8. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト |
| 4. 2.5Y7/1 灰白色シルトと極細砂の互層 | 9. 5Y6/3 オリーブ黄色砂質シルト |
| 5. 2.5Y6/1 黄灰色細砂とシルトの互層 | |

SX52019



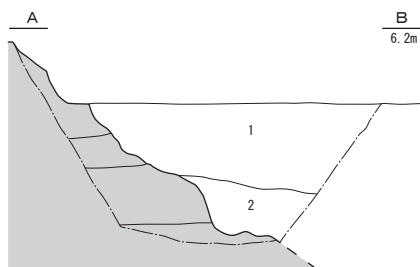
- | |
|---|
| 1. 2.5Y6/2 灰黄色シルト |
| 2. 2.5Y7/2 灰黄色シルト |
| 3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト |
| 4. 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質シルト (マンガン多含) |
| 5. 2.5Y7/6 明黄褐色極細砂と粘土質シルトの互層 |
| 6. 2.5Y6/2 灰黄色シルト (マンガン多含)
<SD52020埋土> |
| 7. 2.5Y7/6 明黄褐色砂質シルト |
| 8. 2.5GY オリーブ灰色極細砂 |



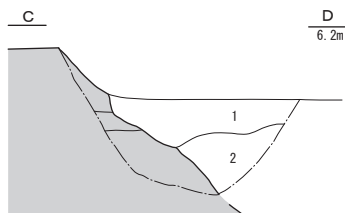
- | |
|---------------------------------|
| 1. 2.5Y6/2 灰黄色シルト |
| 2. 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質シルト |
| 3. 2.5Y6/1 黄灰色シルト |
| 4. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質シルトと灰色極細砂の互層 |
| 5. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂 |
| 6. 5Y7/6 明黄褐色砂質シルト |
| 7. 2.5GY オリーブ灰色極細砂 |

第19図 2区遺構全体図① (1:200)、S X 52019・S D 52026・52027 断面図 (1:50)

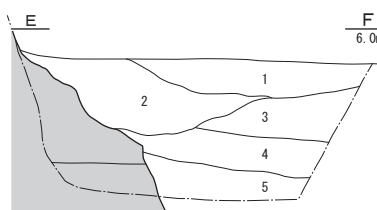
SR52003



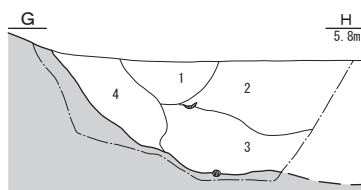
1. 2.5Y6/1 黄灰色シルトと極粗砂の互層
2. N5/ 灰色シルトと極粗砂の互層



1. 2.5Y6/1 黄灰色シルトと極粗砂の互層
2. N5/ 灰色シルトと極粗砂の互層

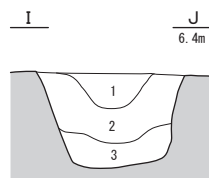


1. 2.5Y6/1 黄灰色シルト (上層)
2. 2.5Y6/1 黄灰色シルトと粗砂の互層 (上層)
3. 5B6/1 青灰色粘土質シルト (極粗砂多含)
4. 5B5/1 青灰色シルト (縮り弱い)
5. 5B5/1 青灰色粘土質シルトと明オリーブ灰色粘土質シルトの互層

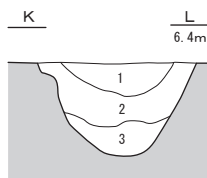


1. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト
2. 5B6/1 青灰色粘土質シルト (極粗砂多含)
3. 5B5/1 青灰色粘土質シルト (縮り弱い)
4. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (黄褐色シルト塊含) <SD52004埋土>

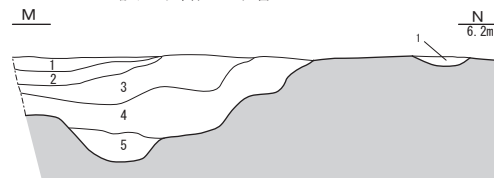
SD52006



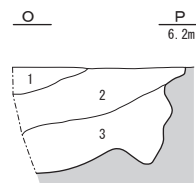
1. 7.5YR5/1 褐灰色シルト<上層>
2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト<上層>
3. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (灰色砂含) <下層>



1. 7.5YR5/1 褐灰色シルト<上層>
2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト<上層>
3. 2.5YR5/3 黄褐色シルト (灰色砂含) <下層>



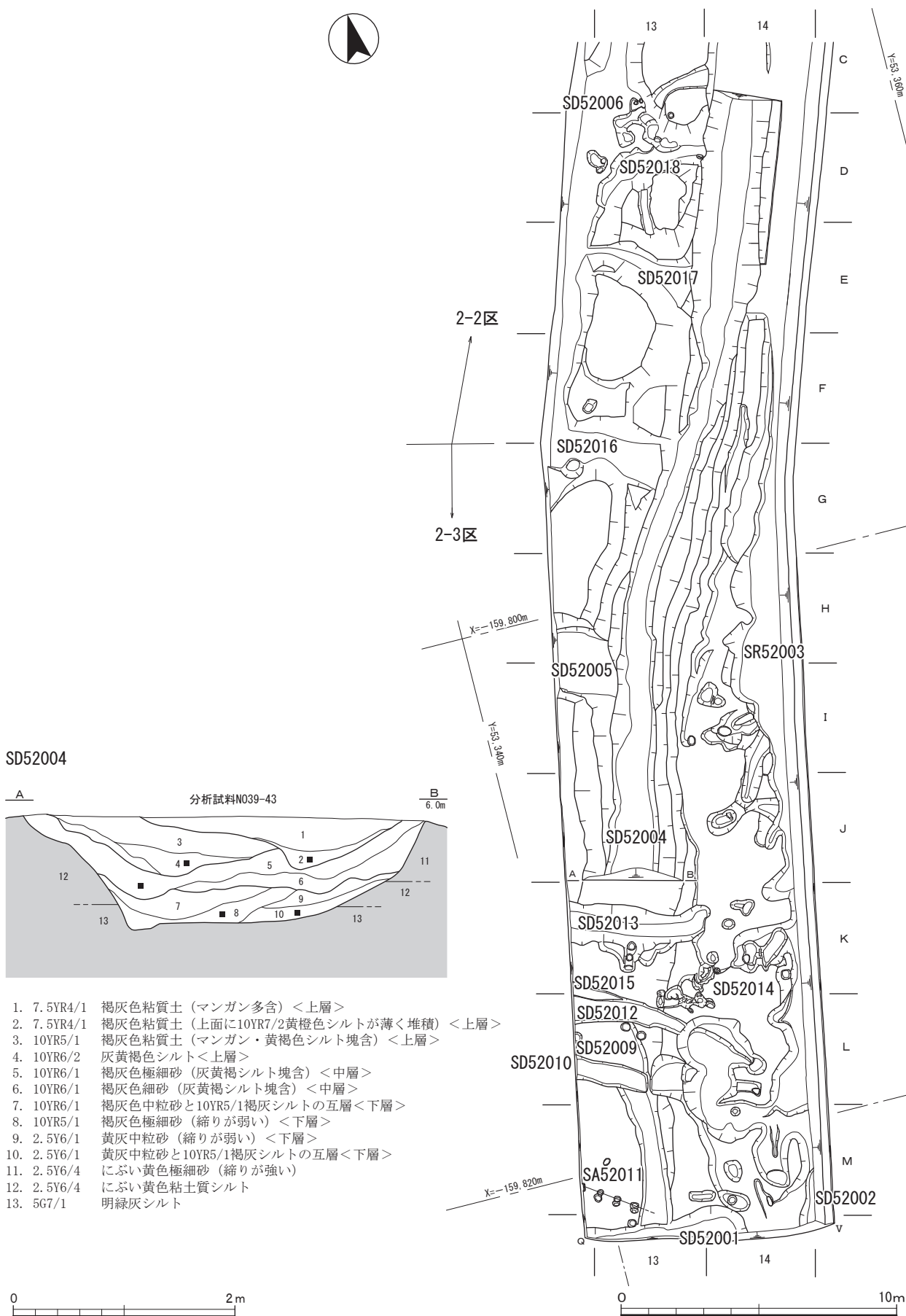
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト<上層>
2. 10YR5/1 褐灰色シルト<上層>
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土質シルト<上層>
4. 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土質シルト (灰色極粗砂含) <下層>
5. 2.5Y6/2 灰黄色粘砂<下層>



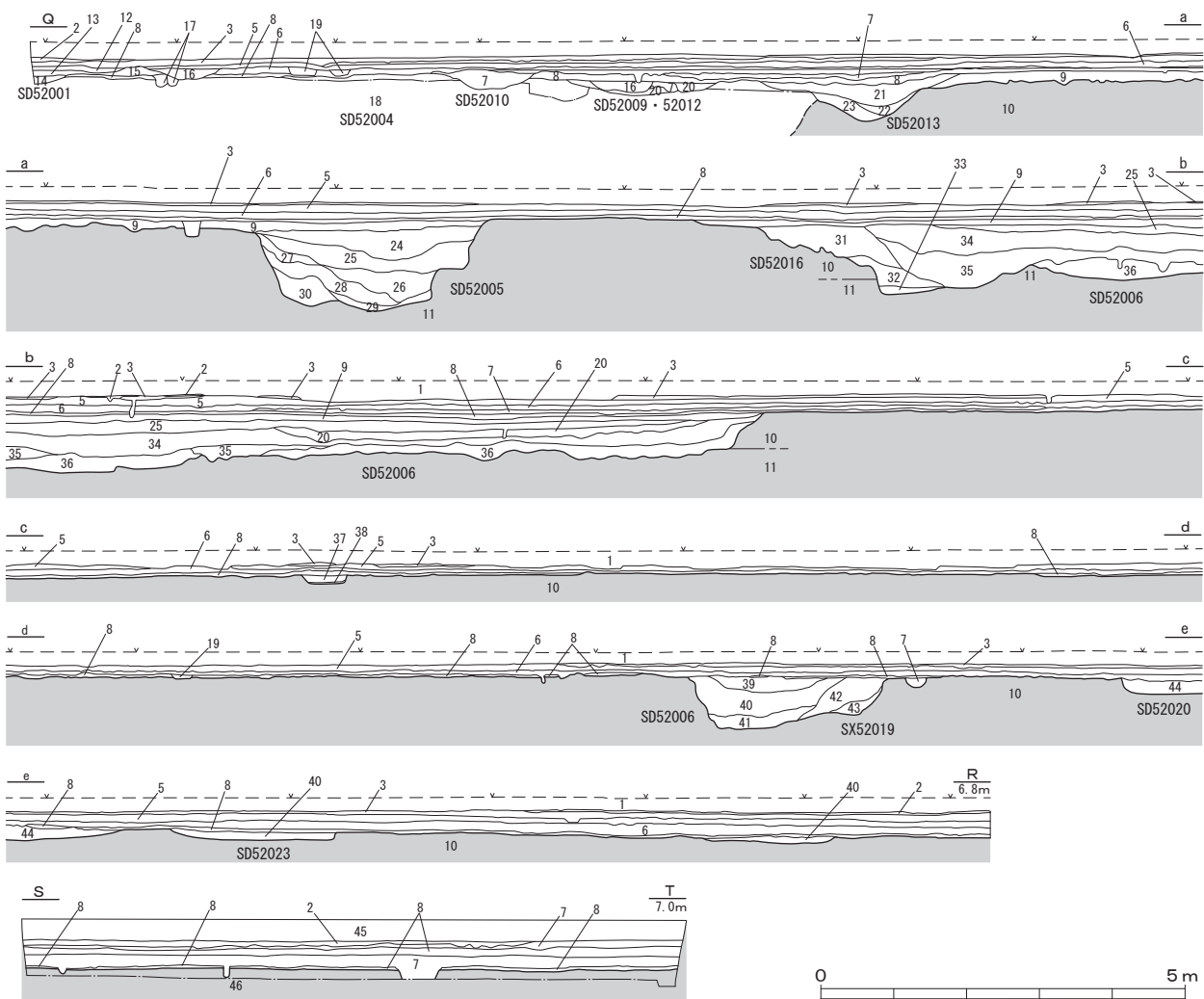
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土質シルト
3. 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土質シルト (灰色極細砂塊含)



第 20 図 2 区遺構全体図② (1:200)、SR 52003・SD 52006 断面図 (1:50)



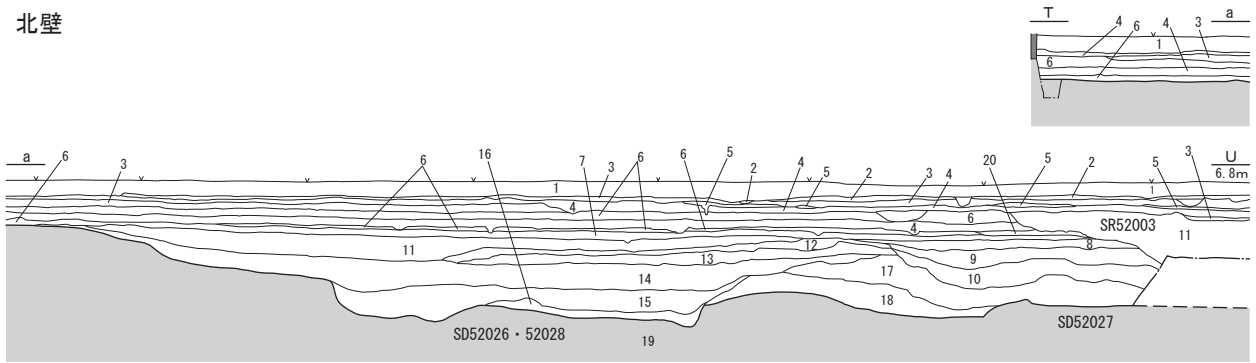
第 21 図 2区遺構全体図③ (1:200)、SD 52004 断面図 (1:50)



- | | | | | | |
|-----|----------|-------------------------------------|-----|----------|------------------------|
| 1. | 2.5Y5/1 | 黄灰色粘質土<耕作土> | 25. | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色シルト |
| 2. | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色粘質土<近現代 旧耕作土> | 26. | 2.5Y6/2 | 灰黄色粘土質シルト |
| 3. | 2.5Y6/6 | 明黄褐色シルト (よく縮まる) <床土> | 27. | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色シルト (黄褐色シルト塊若干含) |
| 4. | N5 | 灰色粘質土<旧耕作土> | 28. | 2.5Y5/1 | 黄灰色粘土質シルト (灰色砂塊含) |
| 5. | 2.5Y6/1 | 黄灰色シルト (マンガン含、下面に鉄沈着)
<中世耕作土・床土> | 29. | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色粘土質シルト (灰色砂多含) |
| 6. | 2.5Y6/1 | 黄灰色シルト (マンガン若干含) <中世耕作土・床土> | 30. | 2.5Y7/4 | 浅黄色シルト (灰色砂多含) |
| 7. | 2.5Y6/2 | 灰黄色シルト<中世耕作土・床土> | 31. | 2.5Y6/2 | 灰黄色シルト (やや縮る) |
| 8. | 2.5Y6/6 | 明黄褐色シルト<中世耕作土・床土> | 32. | 2.5Y6/3 | にぶい黄色シルト (マンガン多含) |
| 9. | 2.5Y5/1 | 黄灰色シルト (マンガン多含) | 33. | 2.5Y6/1 | 黄灰色粘砂 (縮り弱い) |
| 10. | 2.5Y7/6 | 明黄褐色砂質シルト<基盤層> | 34. | 2.5Y6/3 | にぶい黄色粘土質シルト |
| 11. | 2.5GY6/1 | オリーブ灰色極細砂 | 35. | 2.5Y6/1 | 黄灰色極粗砂 |
| 12. | 2.5Y5/1 | 黄灰色粘質土 | 36. | 2.5Y6/4 | にぶい黄色粘土質シルト (灰色極粗砂塊多含) |
| 13. | 10YR5/1 | 褐灰色粘質土 | 37. | 10YR6/1 | 褐灰色シルト |
| 14. | 2.5Y6/1 | 黄灰色粘土質シルト (縮り弱い) <SD52001埋土> | 38. | 炭・焼土 | |
| 15. | 2.5Y6/1 | 黄灰色砂質シルト (マンガン多含) | 39. | 7.5YR5/1 | 褐灰色シルト |
| 16. | 2.5Y5/1 | 黄灰色シルト | 40. | 10YR5/2 | 灰黄褐色シルト |
| 17. | 10Y6/2 | オリーブ灰色シルト | 41. | 2.5YR5/3 | 黄褐色シルト (灰色砂含) |
| 18. | 10YR5/1 | 褐灰色シルト (マンガン多含) | 42. | 2.5Y6/3 | にぶい黄色シルト |
| 19. | 2.5Y6/1 | 黄灰色シルト | 43. | 10YR6/3 | にぶい黄褐色砂質シルト |
| 20. | 10YR5/1 | 褐灰色シルト | 44. | 2.5Y6/2 | 灰黄色シルト (マンガン多含) |
| 21. | 2.5Y6/1 | 黄灰色シルト (やや縮る) | 45. | コンクリート | |
| 22. | 2.5Y6/1 | 黄灰色、砂質シルト | 46. | 5Y6/3 | オリーブ黄色シルト (マンガン沈着) |
| 23. | 7.5GY6/1 | 緑灰色砂質シルト | | | |
| 24. | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色シルト (黄褐色シルト塊含) | | | |

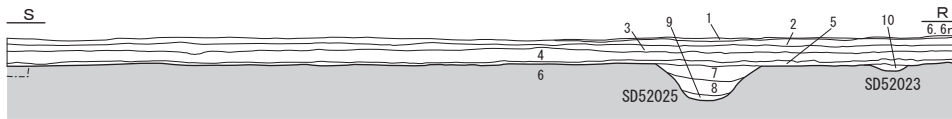
第 22 図 2 区西壁土層断面図 (1:100)

北壁

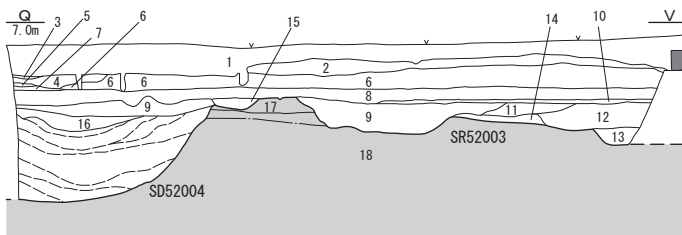


- | | |
|--------------------------------------|---|
| 1. 5Y4/1 灰色粘質土<耕作土> | 11. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト (粗砂多含) <SR52003埋土> |
| 2. 2.5Y6/2 灰黄色シルト<床土> | 12. 2.5Y5/1 黄灰色粗砂 |
| 3. 2.5Y6/2 灰黄色シルト | 13. 2.5Y6/2 黄灰色シルト |
| 4. 2.5Y6/2 灰黄色シルト<中世耕作土・床土> | 14. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト |
| 5. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト (鉄分沈着) | 15. 2.5Y6/1 黄灰色シルト (下部に黄灰色シルト塊、灰色砂多含) |
| 6. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト<中世耕作土・床土> | 16. 7.5GY8/1 明緑灰色極細砂 |
| 7. 2.5Y6/2 灰黄色シルト (下面に鉄分沈着) | 17. 2.5Y5/1 黄灰色極細砂 |
| 8. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト | 18. 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト |
| 9. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト (黄褐色シルト、灰色砂塊若干含) | 19. 7.5Y5/2 灰オリーブ色砂質シルト<基盤層> |
| 10. 2.5Y5/1 黄灰色粗砂と極細砂の互層 | 20. 2.5Y6/8 明黄褐色シルト (鉄分沈着) |

南壁



- | | |
|--------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 2.5Y7/1 灰白色シルト<近現代旧耕作地> | 6. 5Y6/3 オリーブ黄色シルト (マンガン多含、局所的に灰色極細砂) |
| 2. 2.5Y6/1 黄灰色シルト (マンガン多含) <床土> | 7. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト (マンガン多含) |
| 3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト (中世耕作土・床土) | 8. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト (やや縮りが弱い) |
| 4. 2.5Y6/2 灰黄色シルト<中世耕作土・床土> | 9. N5 灰色細砂 |
| 5. 2.5Y6/8 明黄褐色シルト (鉄分沈着) <中世耕作土・床土> | 10. 10YR5/2 灰黄褐色シルト |



- | | |
|---|--|
| 1. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土<耕作土> | 15. 2.5Y5/1 黄灰色シルト (やや縮る) <SD52008埋土> |
| 2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土<近現代耕作土> | 16. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト (マンガン多含) <SD52004埋土> |
| 3. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト (よく縮る) <床土> | 17. 2.5Y7/6 明黄褐色砂質シルト<基盤層> |
| 4. N5 灰色粘質土<旧耕作土> | 18. 2.5Y6/1 オリーブ灰色極細砂<基盤層> |
| 5. 2.5Y6/1 黄灰色シルト (マンガン若干含、下面に鉄分沈着) | |
| 6. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 | |
| 7. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土<SD52001埋土・検出面> | |
| 8. 10YR5/1 褐灰色粘質土<<SD52001埋土・検出面> | |
| 9. 2.5Y6/1 黄灰色粘質土シルト (縮りが弱い) | |
| | <SD52001・SR52003埋土> |
| 10. 10YR5/6 黄褐色粘質土シルト (鉄分多含) <SR52003埋土> | |
| 11. 2.5Y6/1 黄灰色粘質土シルト (灰色極粗砂多含) | |
| | <SR52003埋土> |
| 12. 2.5Y6/1 黄灰色極粗砂 (灰色シルト塊含) <SR52003埋土> | |
| 13. 2.5Y6/1 黄灰色粘砂 (縮りが弱い) <SR52003埋土> | |
| 14. 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト (縮りが弱い) <SR52003埋土> | |



第 23 図 2 区北壁、南壁土層断面図 (1:100)

5.3区(第24～30図)

(1) 概要

遺跡南東部の調査区で、約300m東側に大蓮寺遺跡が所在する。調査区北側(第24図)は、全体が条里坪境溝(SD53011)にあたり、埋没単位ごとにSD53015・53016などの溝が錯綜している。調査区南側(第25図)には南北方向の大溝SD53002やSD53001があり、これらは当地から遺跡北西側へ向かう基幹水路であったとみられる。

SD53002からは青銅鏡が3面出土し、うち2面は表土掘削中に遺構上面で並んで出土したため、調査区を一部拡張し、溝の延長と上層包含遺物の確認をおこなった。

他に中世の井戸(SE53004)があるが、ピットなど住居関連遺構は希薄である。数条の中世素掘溝が並ぶ状況から、この付近に水田が想定できる。

遺構は現代作土・床土直下(地表下40cm)のにぶい黄色シルトないし褐灰色シルト層(南壁6・7層)上で検出した。西半はより下位の7層が露出することから、本来は西側が微高地にあたるとみられる。

南壁7層の褐灰色シルト以下は、黒褐色シルト(南壁8層)、にぶい褐色シルト(南壁9層)で、さらに下位は基本層序VI層の砂礫層となる(SE53004基盤層で確認)。

基盤層に黒ボク土ないし二次堆積とみられる黒褐色シルトがみられたことから、南壁中央で下層確認を実施するとともに、土壌分析用サンプルを採取した(第28図、写真図版22)。黒褐色シルト(南壁8層)は層中に広域火山灰K-Ahの降灰層準を含む可能性があるため、さらに上・中・下位に細分した。

南壁7層中に土器が若干介在していたものの、基盤層中に縄文時代の遺物はあまり見られなかった。

(2) 遺構

SD53001(第25図、写真図版21) 南北方向の溝で、主軸はN15°Wである。幅は1.5～1.8m、深さ約1mである。溝断面は逆台形で、埋土は4～5層に分かれ、いずれもシルト質であるが、下層は砂層との互層で流理が顕著である。3層下で再掘削されている。

土師器杯・甕、灰釉陶器等、平安時代後期～末の

遺物が出土した。

SD53002(第30図、写真図版19・20) 3区西部を南東から北西に走る大溝で、上面幅約6.5m、底面幅約5.5m、深さは最深部で約1mを測る。

溝の底面はやや平坦で、両肩寄りと中央の底面に幅20～50cmの小溝がある。断面形は切り通し状の道路遺構に似るが、硬化面などは認められない。

弥生時代終末期、古墳時代から中世前期の遺物を層位的に含むことから、長期にわたり機能した基幹水路だったとみられる。

埋土は最下層が土器片を多く含む砂礫、中位付近は砂や礫を含む砂質シルトである。特に北壁5・7層はラミナが顕著で、肩側を抉るような激しい水流があったと推測される。上層は黄灰色シルト～砂質シルトで、浮遊堆積物が主体となり、溝の規模も小さくなっていたようである。溝底面は常に酸化状態にあり、有機質遺物が残る環境ではなかった。

当遺構では、青銅鏡が3面出土した(巻頭図版4)。うち2面は平安時代後期(10世紀後半)に製作された鏡である(瑞花円鏡212・瑞花双鳥八稜鏡213)。2面は近接し(約50cm間隔)、溝東肩から約1m西から、ともに鏡面を天に向け、水平を保った状態で出土した(写真図版20)。重機による表土除去時、溝上面(第30図3・5層相当)から出土したもので、当溝がほぼ埋没した段階で、同時か大きな時期差なく水辺の祭祀に供されたと推測される。八稜鏡が北側、円鏡が南側に置かれる。重機掘削で一部を欠失したが、本来は完形であったとみられる。

鏡の周囲は腐蝕により若干変色していたが、木箱や布袋など有機質容器の痕跡は認められなかった。鏡は裸で置かれ、太陽光を反射する視覚的効果が求められたのであろう。円鏡の下には約10cm大の礫があり、石の上に置いた可能性がある。

もう1面は素文鏡(187)で、溝底(第30図12層)から、鏡面を上にして出土した。全体が著しく腐蝕しており、残りは非常に悪い。下層の共伴遺物から、古墳時代以降の小型仿製鏡の可能性はある。

なお、鏡の取り上げにあたり、八稜鏡は全体に割れ、素文鏡はきわめて脆弱な状態であったため、パラロイドB-72(5～10%キシレン溶液)を数回塗布した後、表面に画仙紙を貼り付けて補強し、周囲の土ごと切

り取って回収した（写真図版 21）。

その他の出土遺物は、大きく上層（第 30 図北壁 1～6・9・10 層中心）・下層（7・8・11・12 層中心）に分けて取り上げた。

上層は平安時代前～中期の土器や中世の山茶碗を含むが、西肩付近（6 層）は 7 世紀代の甕がまとまって出土しており、この時期に溝が一度埋没し、その後改修されたとみられる。下層は弥生時代終末期～古墳時代の遺物が主体であるが、底面付近（12 層）から 7 世紀後半代の須恵器短頸壺（196）がほぼ正位で出土している（写真図版 21）。

下層埋土は砂礫を主体とすることから、下層出土の素文鏡や土器片などは、より上流側から流入した可能性が高い。

なお、3 区周辺に弥生～古墳時代の遺構はないが、本溝の上流側には琵琶垣内遺跡（松阪市豊原町）があり、古墳時代から古代の溝が複数みられ、遺物相も類似することから、当溝との関連が推定できる。

S D 53003 3 区南東端で延長約 12 m を検出した南北方向の溝で、東半分は調査区外にある。当地の地境を流れる溝ないし自然流路と推測され、2 区 S R 52003 や 1 区 S D 51002 へつながる可能性が高い。

古代の土師器甕、瓦片や中世の山茶碗等が出土している。

S E 53004（第 29 図、写真図版 22） 3 区南で検出した直径 2.5 m、深さ 2.5 m の円形井戸である。

深さ約 2 m で湧水層に達し、この付近で直径約 50 cm の円形掘方となった。この部分から曲物片が出土しており、水溜めの曲物を据えていたようである。

井戸枠・曲物とも抜き取られ残存していない。

埋土各層から、灰釉陶器や山茶碗、瓦片が出土しており、平安時代後期～末にかけて機能・廃絶したとみられる。山茶碗は煤が付着するものが多くみられた。瓦片は細かく破碎された形跡がある。

S D 53005（第 25 図、写真図版 21） S D 53001・53002 と並行する幅 60 cm、深さ 15 cm の細い溝である。

平安時代後期～中世 I 期の土師器が出土した。

S D 53006・53007（第 25 図） S D 53006 は 3 区東側で検出した幅 30 cm、深さ 10 cm の素掘溝で、S D 53001・53005 に並行する。平安時代末の土師器等が出土した。

S D 53007 は幅 90 cm、深さ 30 cm の浅い溝で、S D 53003 から派生し、S D 53001 に合流する。埋土は下層が砂、上層がシルトである。平安時代後期～末の土器が出土している。

S D 53008 3 区中央で検出した東西方向の溝である。S D 53001 より後出の遺構で、幅約 1 m、深さ 60 cm で、平安時代末の山茶碗などが出土した。

S D 53009 3 区中央東端で溝西肩の一部を検出した。詳細は不明であるが、S D 53003 と一連の溝である可能性が高い。

中世の遺物が出土している。

S D 53010 3 区北、S D 53011 の上面で検出した東西方向の溝である。平安時代末～鎌倉時代の土師器等が出土した。

S D 53011・53013・53015・53016（第 24 図、写真図版 23） S D 53011 は 3 区北を南北に走行する溝または流路である。調査区全体が溝にあたり、幅は 4 m 以上、深さ 1 m 以上に及ぶ（第 27 図）。

溝内の埋没単位ごとに細い溝や土坑状の溜まり（S D 53013・53015・53016、S K 53012）が認められ、砂やシルトで一定埋没後、上面に溝や流路が形成されたとみられる。

各遺構から馬歯の小片、完形の土師器皿、山茶碗、白磁碗など、主に平安時代末の遺物が出土している。他に、弥生～古墳時代の土器や管玉もみられた。

S K 53012 3 区北、S D 53011 内で検出した不整形土坑である。埋土はシルトと砂層が混在し、上面から 60 cm ほどで底部に至る。S D 53011 埋没の過程で形成された遺構であろう。

S D 53013 3 区中央で検出した溝である。幅 80 cm 前後、検出面からの深さは 20 cm 程度である。

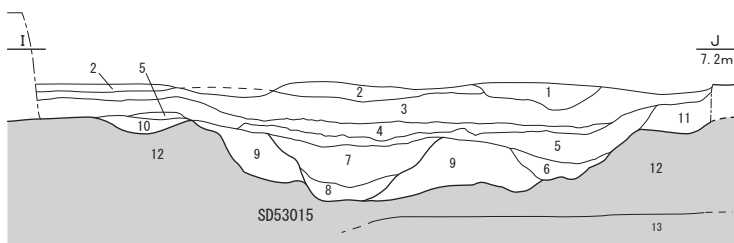
東側調査区外から弧を描きながら北流し、再び東側調査区外へ延びるため、全長 10 m ほどを確認したにとどまる。S D 53011 等と一連の流路であるものと推測される。

S D 53014 3 区北端で検出した東西方向の溝で、S D 53011 等が埋没した後に掘削された遺構である。幅 1.6 m、深さ 60 cm を測る。埋土は 3 層に分かれ、中層がシルトの他は砂層である（第 27 図）。

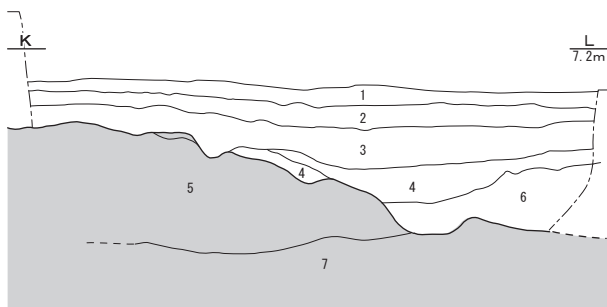
平安時代末の土師器や山茶碗が出土しているが、遺構の年代は室町時代以降に下る可能性がある。



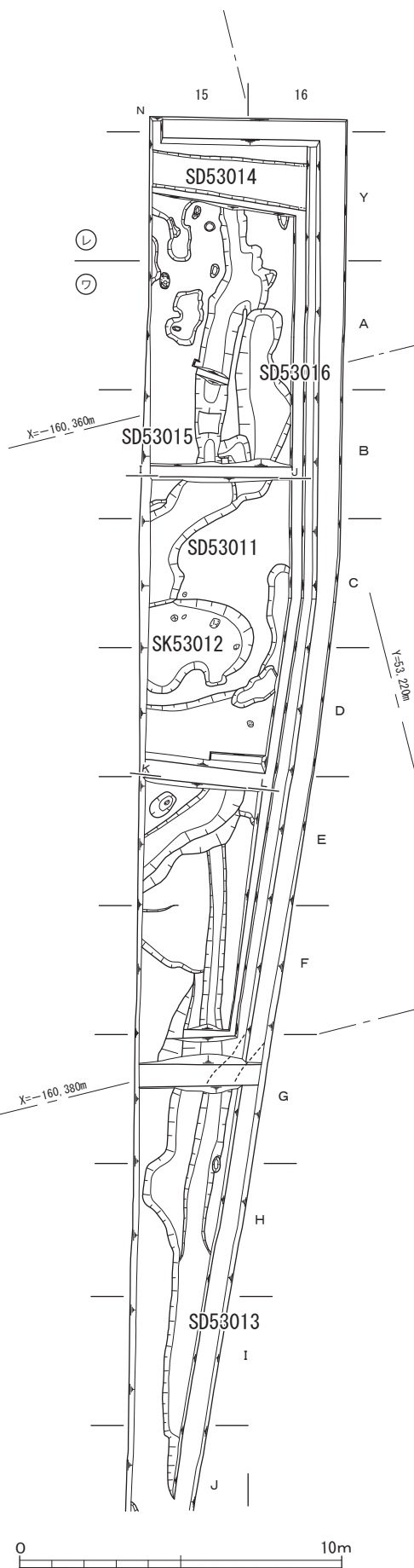
SD53011



1. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト (黄褐色シルト塊若干含)
3. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト
4. 2.5Y6/2 灰黄色細砂 (1cm大礫・遺物多含)
5. 5Y5/2 灰オリーブ色砂質シルト
6. 2.5Y5/1 黄灰色粘砂<SD53016埋土>
7. 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト<SD53015埋土>
8. 2.5Y7/2 灰黄色粘土質シルト<SD53015埋土>
9. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト
10. 10YR6/4 黄橙色極細砂
11. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂
12. 10YR5/6 黄褐色～オリーブ黄色極細砂 (上面に鉄分集積)
13. 2.5Y7/4 浅黄色粘土質シルト

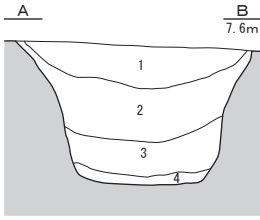


1. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト (黄褐色シルト塊含)
2. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト
3. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルトと粗砂の互層
4. 2.5Y6/1 黄灰色粘土質シルトと粗砂の互層
5. 5Y6/3 オリーブ黄色極細砂<基盤層>
6. N5 灰色粘土質シルトと極細砂の互層
7. 2.5Y7/4 浅黄色粘土質シルト

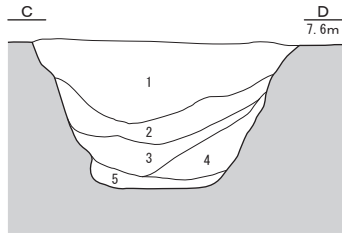


第 24 図 3区遺構全体図① (1:200)、SD53011 断面図 (1:50)

SD53001

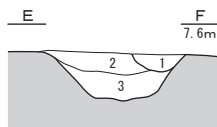


1. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト
2. 2.5Y6/1 黄灰色粘土質シルト
3. 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト (流理目立つ)
4. 2.5Y6/1 黄灰色粘土質シルトと極細砂の互層



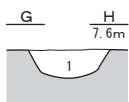
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土<上層>
2. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト<上層>
3. 2.5Y6/1 黄灰色粘土質シルト<下層>
4. 2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂 (褐灰色シルト塊含) <下層>
5. 2.5Y6/1 灰色砂質シルト (縮りが弱い) <下層>

SD53006・53007

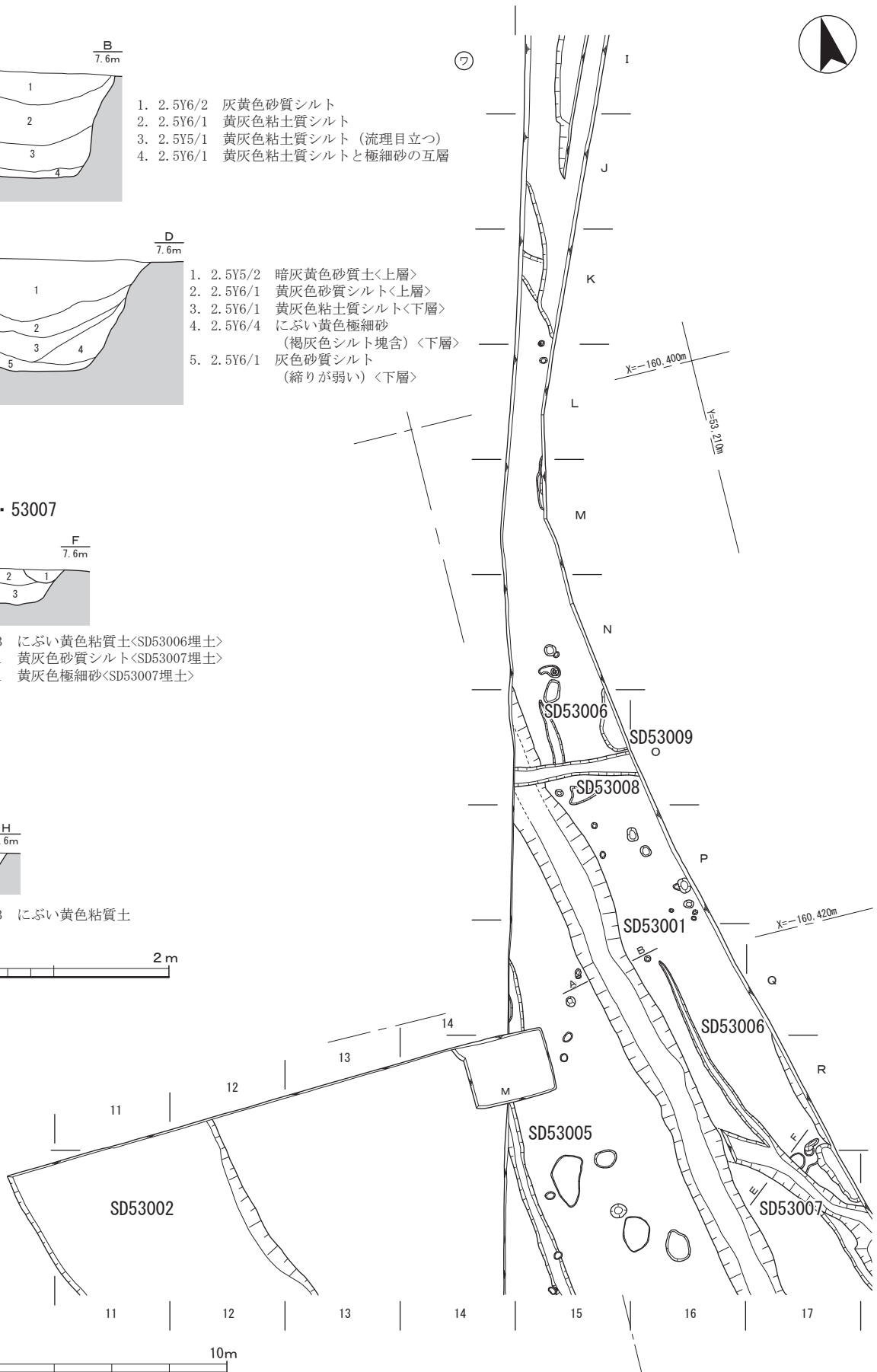
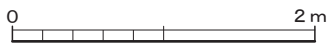


1. 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土<SD53006埋土>
2. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト<SD53007埋土>
3. 2.5Y5/1 黄灰色極細砂<SD53007埋土>

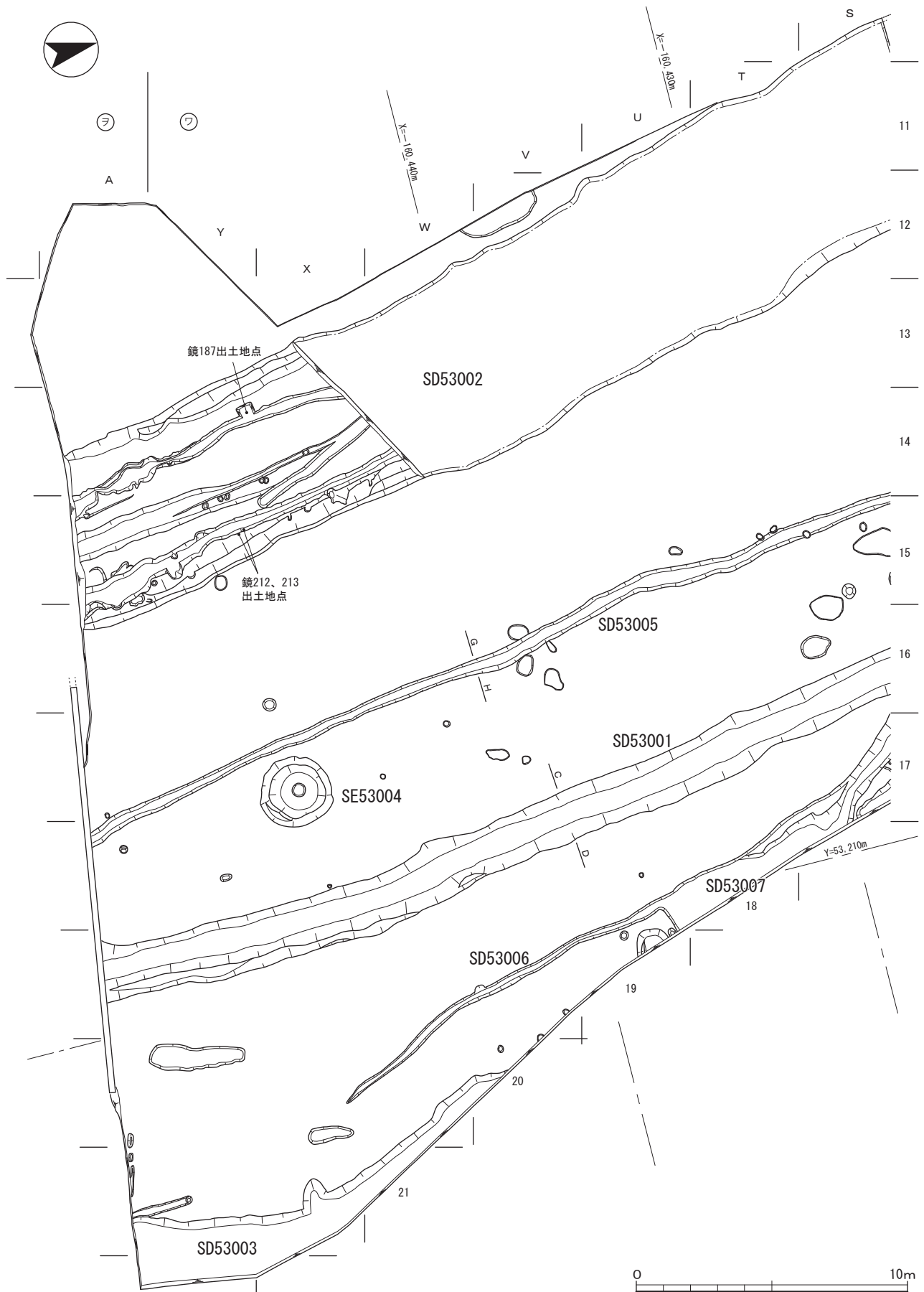
SD53005



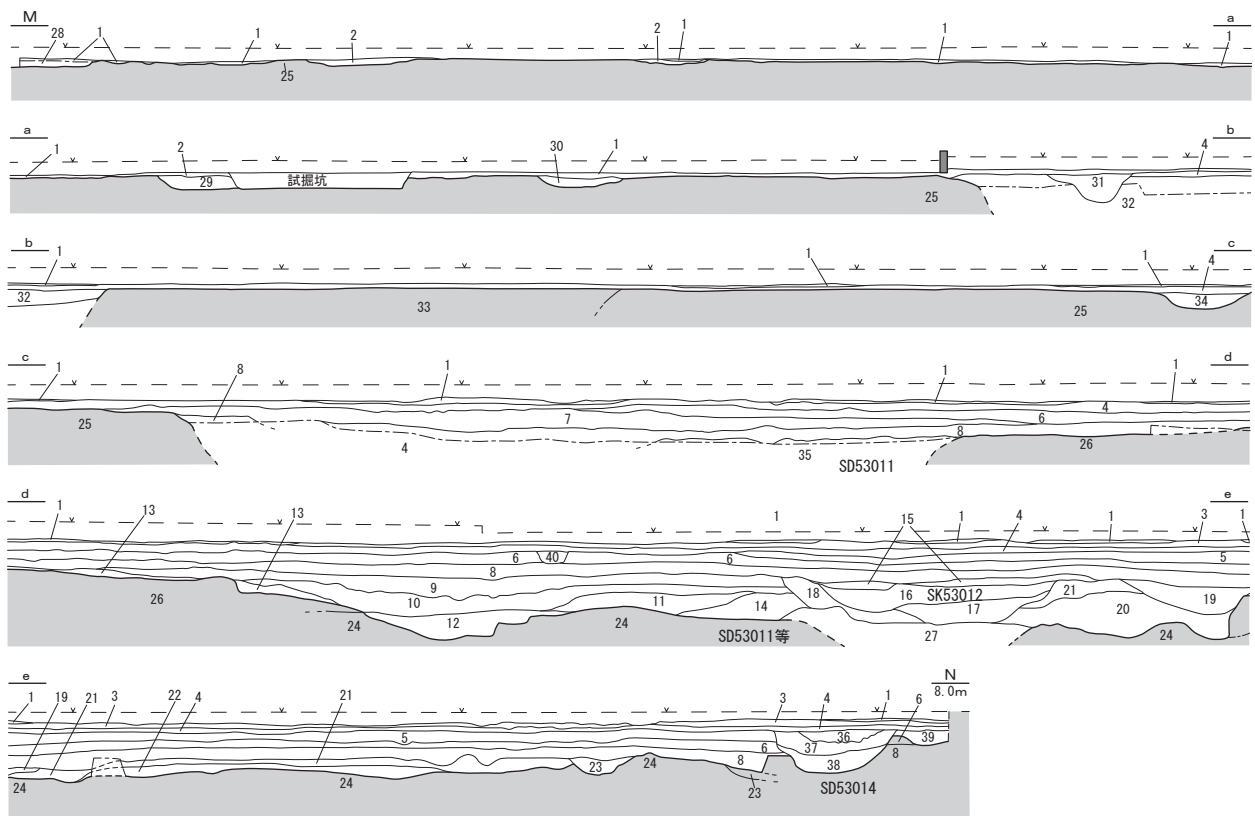
1. 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土



第 25 図 3 区遺構全体図② (1:200)、SD53001・53005～53007 断面図 (1:50)



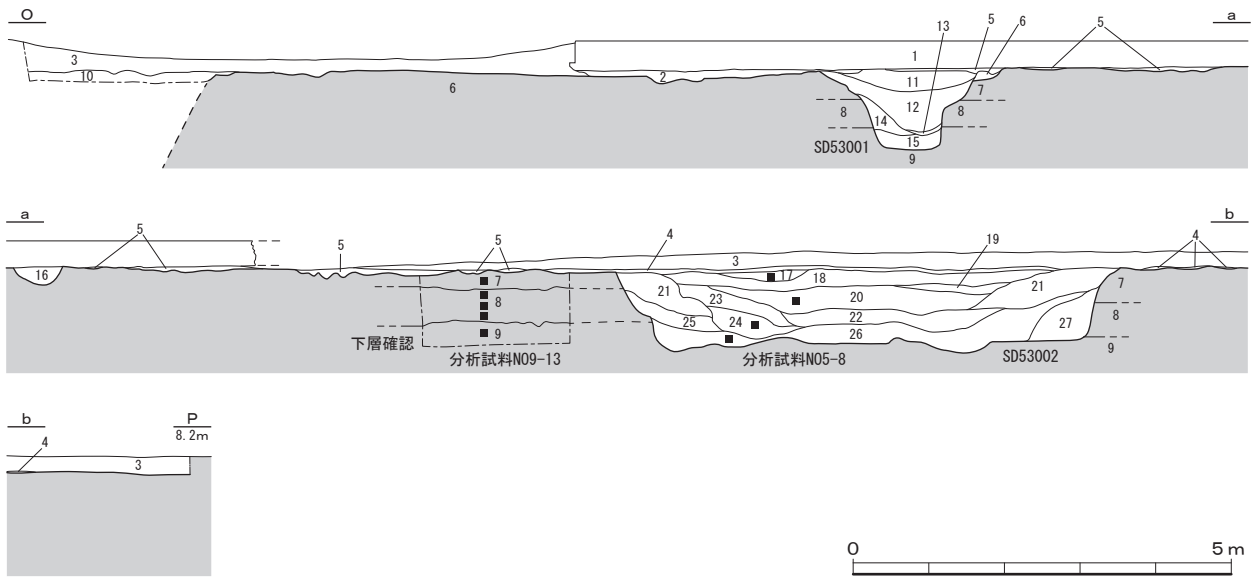
第 26 図 3区遺構全体図③ (1:200)



- | | |
|--|---|
| 1. 2. 5Y6/6 明黄褐色シルト<床土> | 21. 2. 5Y6/1 黄灰色極細砂 (黄褐色シルト塊若干含) |
| 2. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト | 22. 2. 5Y5/2 暗灰黄色粗砂 (0.5cm礫多含) |
| 3. 5Y6/1 灰色シルト (下面に鉄分沈着) | 23. 2. 5Y6/2 灰黄色極細砂 (マンガン多含) |
| 4. 5Y6/1 灰色シルト | 24. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂<地山> |
| 5. 2. 5Y6/2 灰黄色砂質シルト (下面に鉄分沈着) <SD53011上層> | 25. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト<地山> |
| 6. 2. 5/6/1 黄灰色シルト (下面に鉄分沈着) <SD53011上層> | 26. 5Y6/2 灰オリーブ粘土質シルト (褐色砂含) <地山> |
| 7. 10YR6/1 褐灰色シルト (下面に鉄分沈着) <SD53011上層> | 27. 7. 5Y7/2 灰白色シルト |
| 8. 2. 5Y6/1 黄灰色砂質シルト (マンガン多含) | 28. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト<SD53002埋土> |
| 9. 2. 5Y6/2 黄灰色シルト (黄褐色シルト塊含) | 29. 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト<SD53005埋土> |
| 10. 2. 5Y5/1 黄灰色砂質シルト | 30. 10YR5/1 褐灰色シルト<SD53005埋土> |
| 11. 2. 5Y6/2 灰黄色砂質シルト (にぶい黄褐色極細砂塊含) | 31. 2. 5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト (上部にマンガン沈着) <SD53008埋土> |
| 12. 2. 5Y6/1 灰黄色極細砂と中砂の互層 | 32. 2. 5Y5/1 黄灰色砂質シルト (マンガン多含) <SD53001埋土> |
| 13. 5Y6/2 灰オリーブ粘土質シルト | 33. 2. 5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト<地山> |
| 14. 2. 5Y7/2 灰黄粘土質シルト (黄褐色シルト含) | 34. 2. 5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト |
| 15. 2. 5Y7/3 浅黄色シルト<SK53012埋土> | 35. 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト<SD53011埋土> |
| 16. 2. 5Y6/2 灰黄色シルト<SK53012埋土> | 36. 2. 5Y6/2 灰黄色極細砂 (1~3cm礫多含) <SD53014埋土> |
| 17. 2. 5Y6/3 にぶい黄色極粗砂 (1cm礫多数) <SK53012埋土> | 37. 2. 5Y6/2 灰黄色砂質シルト (黄褐色シルト塊若干含) <SD53014埋土> |
| 18. 2. 5Y6/2 灰黄色砂質シルト (極粗砂多含) <SK53012埋土> | 38. 7. 5Y5/1 灰色極細砂<SD53014埋土> |
| 19. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (灰色粗砂含) <SD53015埋土> | 39. 2. 5Y5/1 黄灰色シルト |
| 20. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (にぶい黄色極細砂、黄褐色シルト塊含) | 40. 5Y6/3 オリーブ黄色シルト<SD53010埋土> |

0 5m

第 27 図 3 区西壁土層断面図 (1:100)

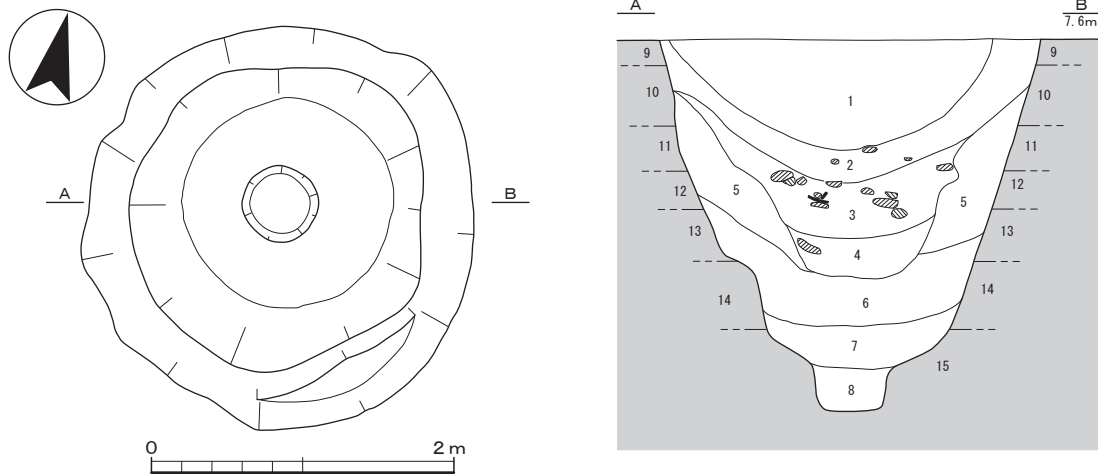


1. コンクリート
2. 攪乱
3. 5Y4/1 灰色粘質土<耕作土>
4. 2. 5Y6/6 明黄褐色シルト<床土>
5. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト
6. 2. 5Y6/4 にぶい黄色シルト～砂質シルト<基盤層>
7. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト<基盤層>
8. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト<基盤層>
9. 7. 5YR5/4 にぶい褐色シルト<基盤層>
10. 2. 5Y6/3 にぶい黄色砂質土<SD53003埋土>
11. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土<SD53001埋土>
12. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (黄褐色・黒褐色シルト塊含)
<SD53001埋土>
13. 7. 5Y5/1 灰色粘土質シルトと極細砂の互層<SD53001下層>
14. 5Y6/1 灰色粘土質シルト (明黄褐色シルト塊含) <SD53001下層>

15. 5Y6/1 灰色粘砂 (締りが弱い) <SD53001下層>
16. 2. 5Y6/2 灰黄色シルト<SD53005埋土>
17. 2. 5Y6/2 灰黄色砂質シルト (マンガンやや多含) <SD53002最上層>
18. 2. 5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト<SD53002最上層>
19. 2. 5Y7/1 灰白色粘土質シルト<SD53002上層>
20. 2. 5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト (西側ほど粘土質傾向)
<SD53002上層>
21. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト (1cm礫多含) <SD53002上層>
22. 2. 5Y5/1 黄灰色粘土質シルト<SD53002上層>
23. 2. 5Y5/2 暗灰黄色極細砂<SD53002上層>
24. 2. 5Y6/1 黄灰色粘土質シルト
25. 2. 5Y6/2 灰黄色粘土質シルト (1cm礫多含) <SD53002上層>
26. 2. 5Y5/2 暗灰黄色砂礫<SD53002下層>
27. 2. 5Y4/2 暗灰黄色シルト (黒褐色シルト・褐色シルト含)
<SD53002下層>

第 28 図 3 区南壁土層断面図 (1:100)

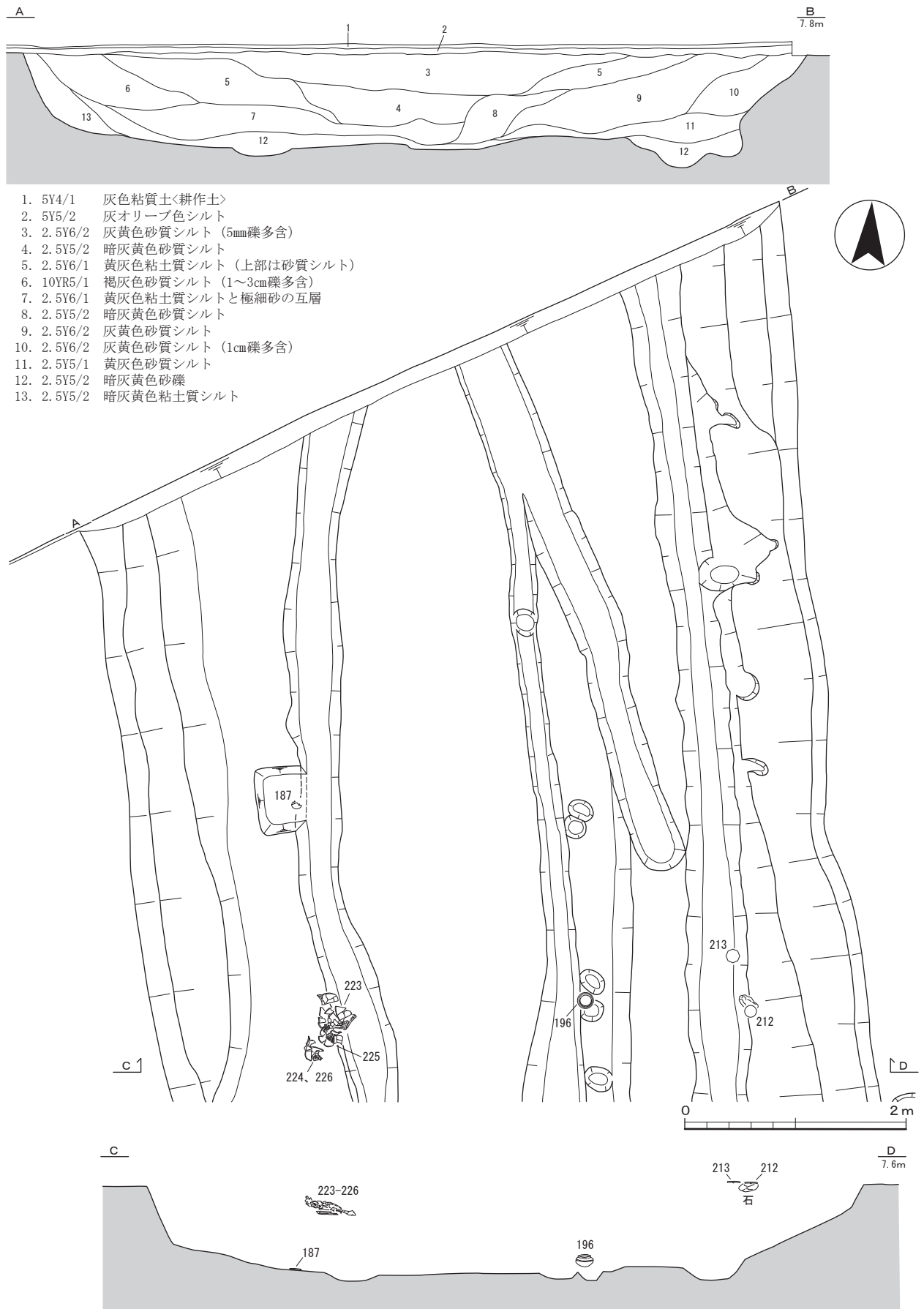
SE53004



1. 2. 5Y6/3 にぶい黄色粘質土
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (5～10cmの大礫含)
3. 2. 5Y5/2 暗灰黄色シルト (5～10cmの大礫多含)
4. 2. 5Y4/1 黄灰色粘土質シルト (緑灰色・黒褐色シルト塊含)
5. 2. 5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト (褐色・黒褐色シルト塊含、または互層)
6. 7. 5Y6/1 緑灰色粘土質シルト～10BG5/1青灰色粘土質シルト
7. 10BG5/1 青灰色粘土質シルト (黒色粘土質シルト含)
8. 2. 5Y4/1 黄灰色粘土質シルト (曲物片含)

- <9～15層：基盤層>
9. 7. 5YR5/2 灰褐色シルト
 10. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト
 11. 10YR6/4 にぶい黄褐色粘土質シルト (やや締りが弱い)
 12. 2. 5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト
 13. 2. 5Y6/2 黄灰色粗砂
 14. 10YR5/6 黄褐色砂礫
 15. 2. 5Y6/3 にぶい黄色砂礫 (5cmの大礫多含、湧水層)

第 29 図 SE 53004 (1:50)



第 30 図 S D 53002 断面図・遺物出土状況図 (1:50)

6. 4区 (第31～40図)

(1) 概要

遺跡北部の調査区で、南側を4-1、北東を4-2、北側を4-3、南側離れを4-4区と呼称し調査にあたった(第31～33図)。西側を6次3区、7次10区、東側を7次8区と接する。

調査区西側に自然流路SR 54035、中央にSD 54011、54012など南北方向の溝、東側に区画溝SD 54003などがみられる。他に掘立柱建物数棟、井戸4基などがある。弥生時代終末期～古墳時代の自然流路(SR 54035)は、断ち割りにより堆積状況と包含遺物を確認した。

遺構の主軸は各時代とも微地形に即したN10° W前後をとり、条里方向の遺構は確認できない。

全体的に遺構はやや希薄であるが、掘立柱建物のピットを見る限り、遺構面が50～60cm程度削平されている可能性が高く、遺構の分布や建物配置を検討する際は、この点を十分に考慮する必要がある。また、朝見遺跡の中では、中坪遺跡に近いこの4区・9区付近で飛鳥～奈良時代の遺構が比較的多く認められる傾向がある。

遺構は明黄褐色シルト層上で検出したが、西側は砂質シルトとなっている(第34・35図)。

4カ所で下層確認を実施したが、縄文時代の遺物は希薄であった(写真図版30)。4-4区北壁5層から若干縄文土器が出土した。

(2) 遺構

SD 54001・54002 4-1区東端で検出した溝で、複数の遺構が錯綜しており、SD 54002がより新しい。当地には地境となる水路があり、その前身となる遺構であろう。調査区内で幅1m以上、深さ30cmを測る。SD 54001から平安時代末～鎌倉時代の遺物が出土している。

SD 54003 4-1区で検出した幅40cm、深さ10cm程度の細い溝で、2ヶ所でS字状に屈折する。1区SD 51005と溝のあり方はよく似ており、区画溝あるいは耕作に伴うものとみられる。SD 54007より後出の遺構である。

奈良時代の土師器片が多く出土した。

SK 54004 (第36図、写真図版29) 4-1区東で検出

した長径1.4m、短径1m、深さ70cmの楕円形土坑である。

平安時代後期の土師器杯などが出土した。

SE 54005 (写真図版29) 4-1区南壁付近で検出した円形の井戸である。掘方は直径2.5～2.7mの不整形円形、深さ1.8mを測る。

井戸枠は検出されていないが、土層断面(第34図)の観察では下層に掘り返した形跡があり、井戸枠等は抜き取られたと考えられる。

埋土から奈良時代の遺物が多く出土しており、廃絶後は廃棄土坑となったようである。

SK 54006 (第36図、写真図版29) 4-1区東で検出した長径1.1m、短径80cm、深さ40cmの楕円形土坑である。埋土は砂質土と粘質土が互層となる。

中世IV期の土師器鍋等が出土した。

SD 54007 4-1区で検出した幅30cm、深さ10cm前後の小規模な溝で、約3m西にも同様の溝が並行する。ともに条里方向に沿うが、奈良時代のSD 54003、SE 54005に先行する遺構である。

古代の土師器片が出土した。

SK 54008 4-1区南壁付近で検出した。調査区端での検出のため全体の形状は不明確であるが、一辺70cmの隅丸方形を呈するものと思われる。深さは検出面から25cm程度であるが、埋土には礫を多く含む。

SD 54009・54016 (第36図) SD 54009は4-1区で検出した小規模な素掘溝で、幅35cm、深さ10cmを測る。北側のSD 54016は延長部分であろう。

溝の走行方向はN10° Wで、西側にあるSD 54011と並行する。

SD 54009から、平安時代後期の土師器碗などが出土している。

SK 54010 4-1区南壁付近で検出した。調査区端での検出のため全体の形状は不明であるが、幅50cmの溝状を呈する。深さは20cm程度で、埋土は礫である。

SD 54011・54014 (第37図、写真図版29・30)

SD 54011は4-1区・4-3区で検出した直線的な溝で、幅1.5～3m、深さ50～60cmを測る。北側がより幅広である。溝の走行方向はN10° Wで、粗砂や砂礫で埋没後、改修されている。

SD 54014はSD 54011と重複する溝で、幅70cm、深さ30cmである。SD 54014が後出であるが、出土

遺物に大きな時期差はない。

ともに弥生時代終末期～古墳時代、飛鳥時代の土器が出土した。

S D 54012 (写真図版 29) 4-1 区西で検出した溝で、幅 2.2 m、深さは 60 cm～1.1 m を測る。断面形は V 字形で、埋土は砂ないし砂質土が主体である (第 34 図)。南西から北東へ走行するが、北東の延長部分が確認できないことから、S D 54011・54014 に合流する溝の可能性はある。

古代の土師器甕などが出土した。

S D 54013・54015・54017 4-1 区で検出した幅 20～40 cm、深さは 5 cm 前後の素掘溝で、S D 54009・54016 と直交する。S D 54015 から室町時代の土師器片が出土した。

奈良・平安時代の遺物も含むが、中世の素掘溝と考えられる。

S K 54020 4-1 区の調査区端で検出したため全形は不明であるが、直径約 2 m の円形で、深さは 30 cm に満たない。

中世の山茶碗が出土した。

S D 54021・54024・54025・54027 4-2 区から 4-1 区区の調査区北東端で検出した中世の溝で、一連のものと思われる。

山茶碗や常滑など中世の陶器が出土している。

S K 54022 4-1 区の調査区北東端で検出した、直径 1.5 m、深さ 30 cm の円形土坑で、中央部は深さ 50 cm と 1 段下がる。S D 54021 より後出の遺構で、中世の山茶碗などが出土した。

S K 54023 4-1 区東で検出した長径 1 m、短径 60 cm の楕円形の土坑である。深さ 30 cm で、北半は深さ 10 cm と段差がある。中世Ⅲ期の土師器が出土している。

S D 54026 4-3 区で検出した幅 30 cm、深さ 10 cm 未満の小規模な溝である。調査区外から 2 m ほど南下して途切れる。S D 54016 等と同様に耕作に関する素掘溝であろう。

S K 54030 4-3 区西で検出した直径 90 cm～1.5 m の楕円形土坑で、深さは 5 cm に満たない。中央部は円形に若干凹む。

S E 54031 (第 38 図、写真図版 27) 4-1 区西端で検出した平安時代中期の井戸である。掘方は一辺 2.7 m の方形で、深さ 2.5 m で底に至る。深さ 1 m 以下はグ

ライ層となり湧水がみられた。掘方中央部に木製井戸枠を据えるが、水溜めはない。

井戸枠は縦板・横板組で、内寸が一辺 75 cm の方形である。最下段に土居桁を組み、その外側南北に縦板を 5 枚、東西に横板を充て、高さ 90 cm 付近に横板を設ける。

井戸枠材は同一母材を割り裂くか、長手の部材を半分に切断し、対向する面に配置している。特に横板はそれぞれ対面の部材が接合関係にあり (IV 章)、井戸製作時の木材利用状況を詳細に復原することが可能である。この縦板・横板組井戸の製作パターンは堀町遺跡でも確認でき、古代～中世の朝見上地区遺跡群に共通したものといえよう。

井戸枠内から完形の土師器甕 (383) や底板付きの曲物 (1267) が出土しており、釣瓶として用いられたものかもしれない。他に、井戸枠内・掘方から平安時代中期の土師器や灰釉陶器、志摩式製塩土器などが出土した。

S K 54033 (第 36 図、写真図版 29) 4-1 区西で検出した直径 1.4 m、深さ 30 cm の浅い円形土坑である。遺物は希薄であった。

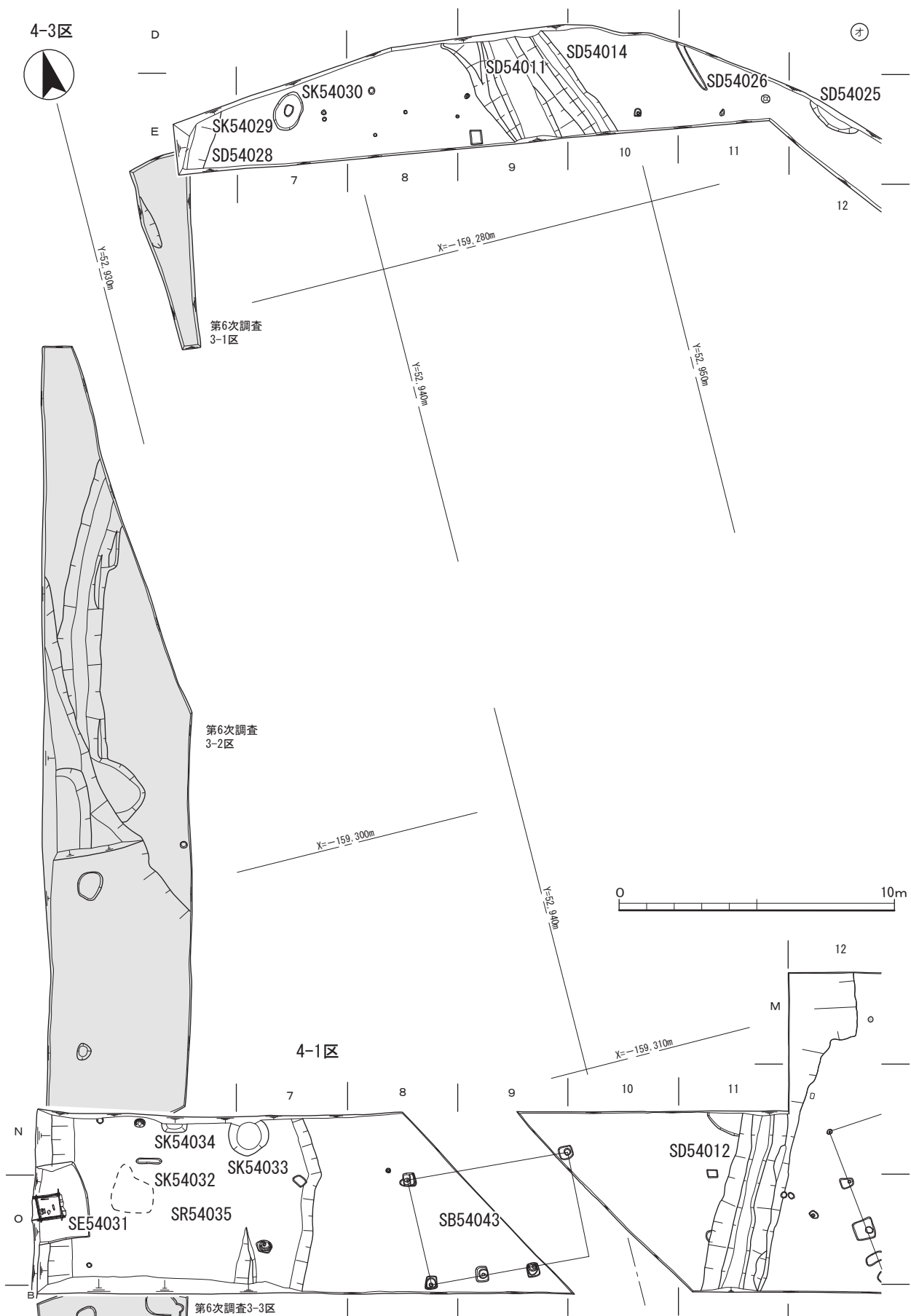
S R 54035 (写真図版 31) 4-1 区西端で検出した弥生時代終末期～古墳時代の自然流路である。全幅は不明であるが、調査区内で幅は 10 m 以上、深さは 1.8 m ある。北側延長は第 6 次調査で検出しており (S R 63008)、南から北へ流れる自然流路と考えられる。また、南は 7-1 区で確認した自然流路 (S R 57077) につながる可能性が高い。

埋土は砂礫とシルトが互層をなしており、西側から徐々に幅を狭めつつ埋没していったと考えられる (第 34 図)。

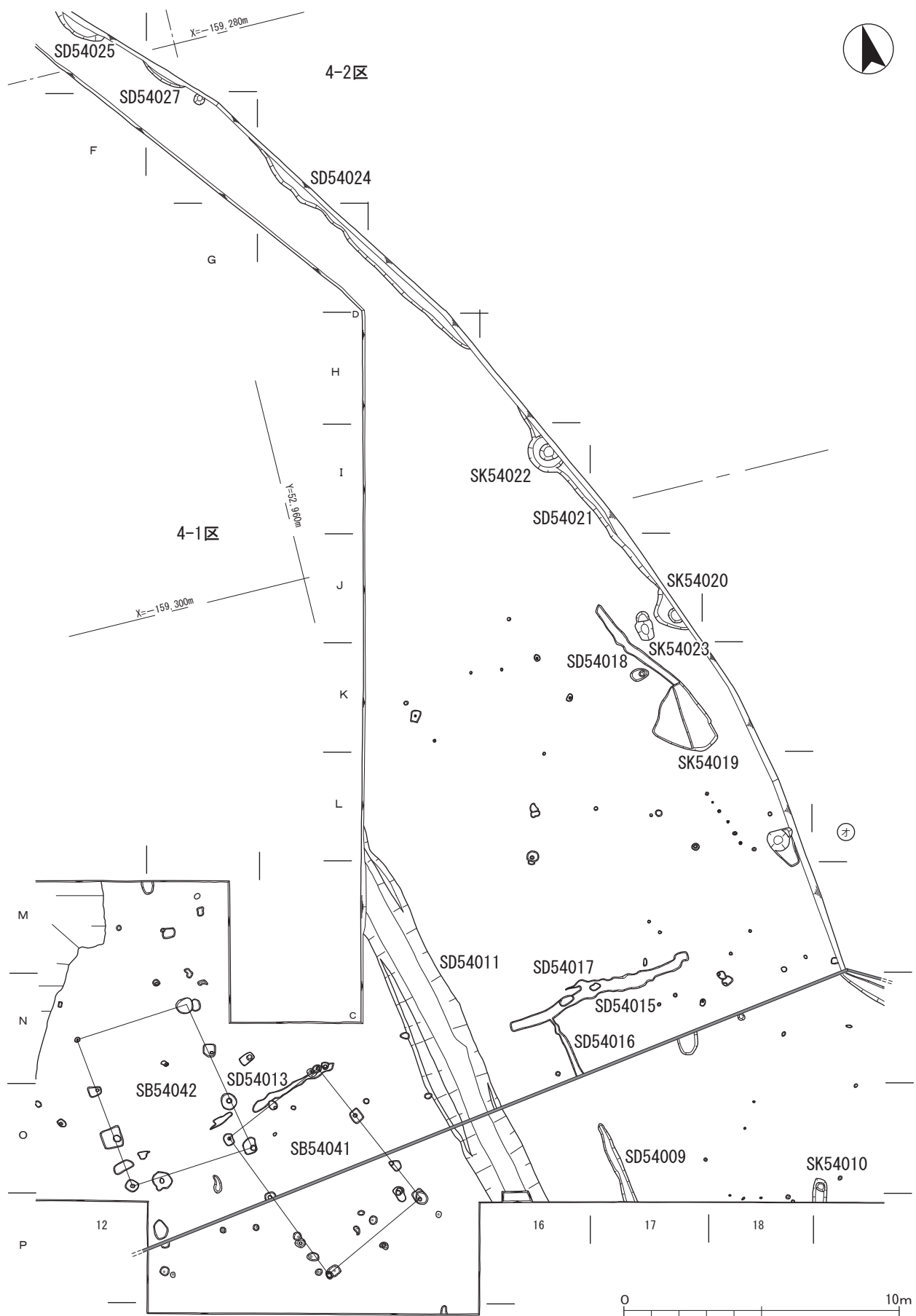
最下層付近で弥生時代終末期～古墳時代前期の土師器が出土した。

S E 54036 (第 39 図、写真図版 28) 4-4 区中央で検出した平安時代後期～末の井戸で、掘方は直径 3.3 m の円形、深さ 2.5 m である。中央に木製の井戸枠を設ける。北東に前身遺構である方形掘方の S E 54040 がある。

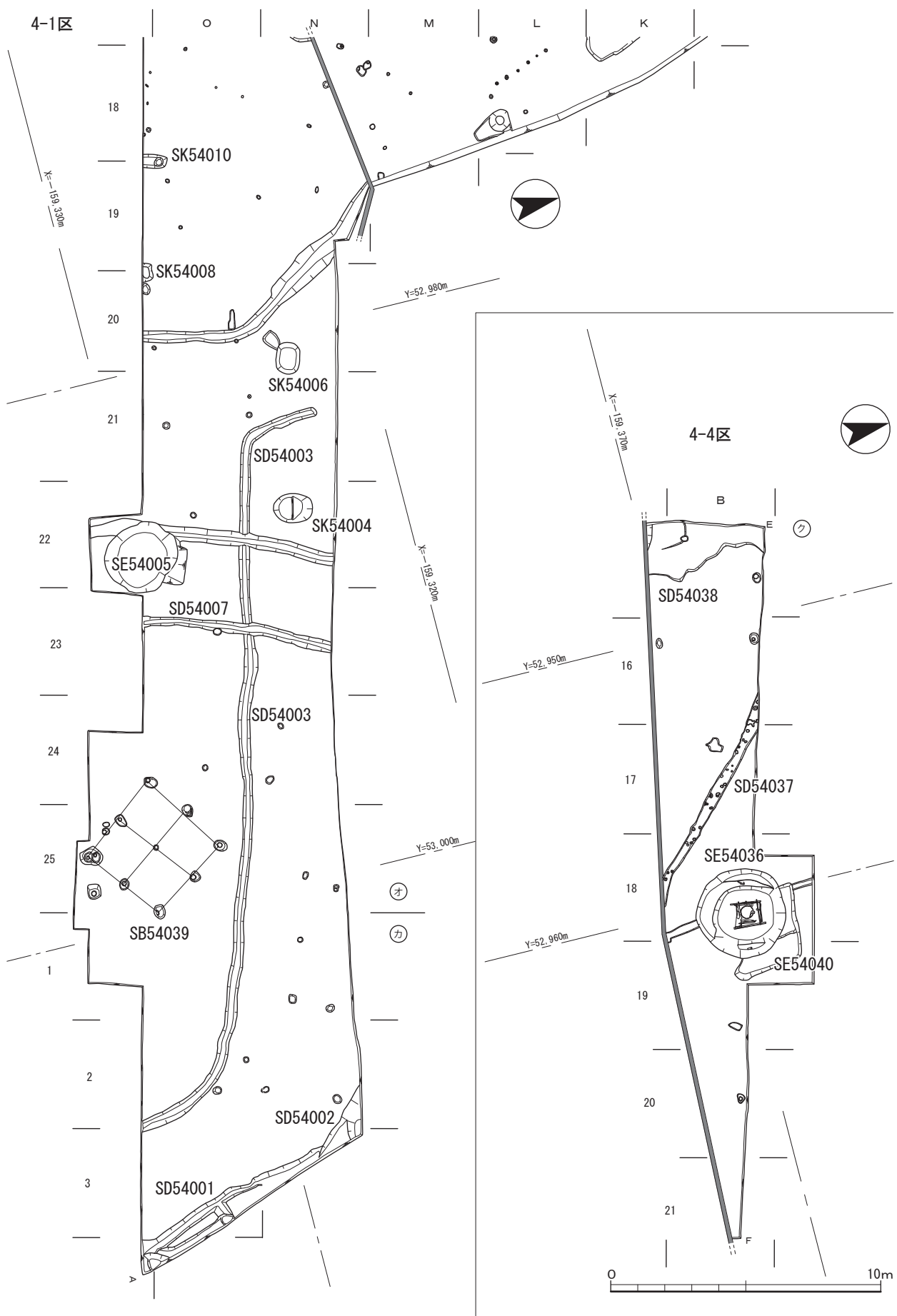
井戸枠は縦板・横板組で、内寸が一辺 90 cm の方形、東西面を横板、南北面を縦板で組み、縦板内側を横板で留める。横板は長手の同一母材を切断し、対面



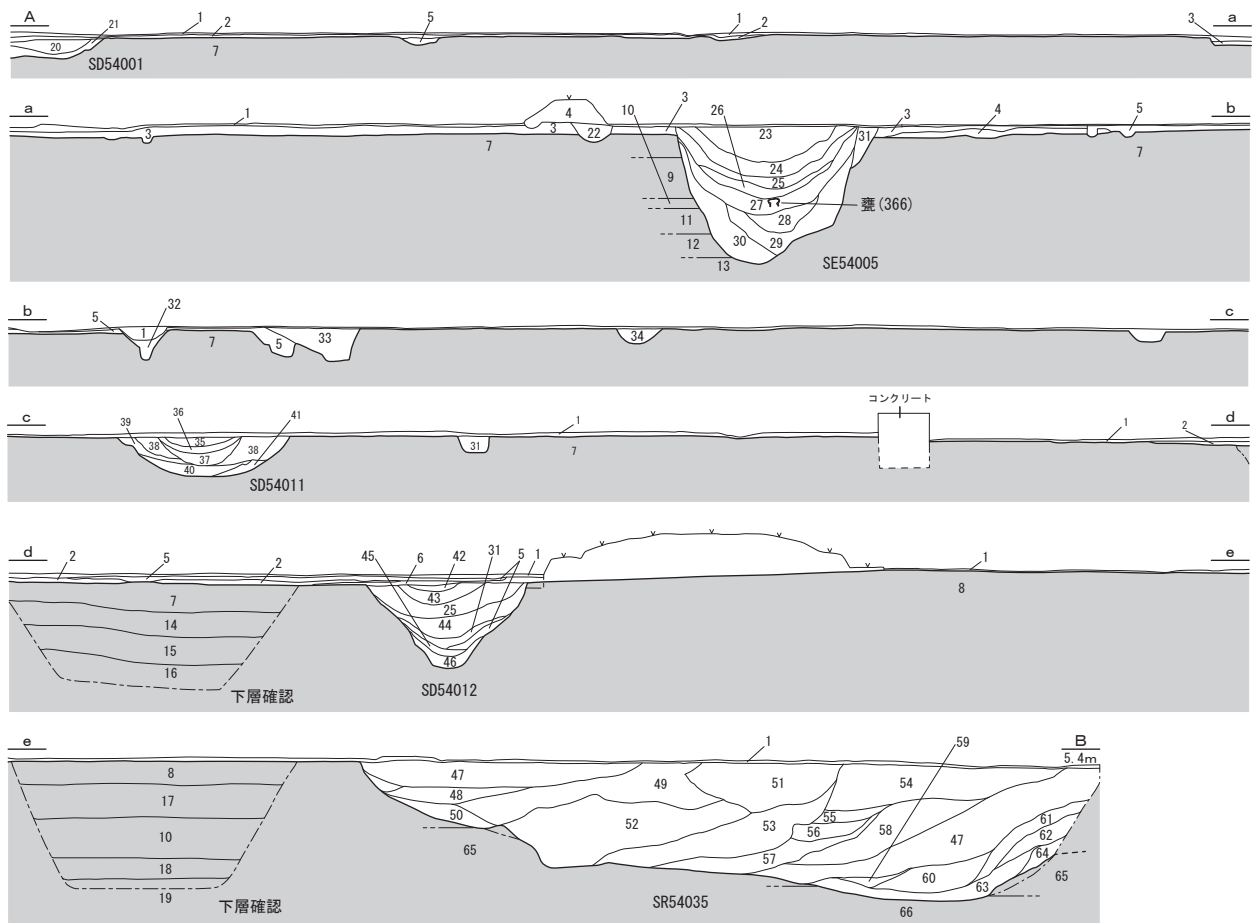
第 31 図 4-1 区、4-3 区遺構全体図 (1:200)



第 32 図 4-1 区、4-2 区遺構全体図 (1:200)



第 33 图 4-1 区、4-4 区遺構全体图 (1:200)

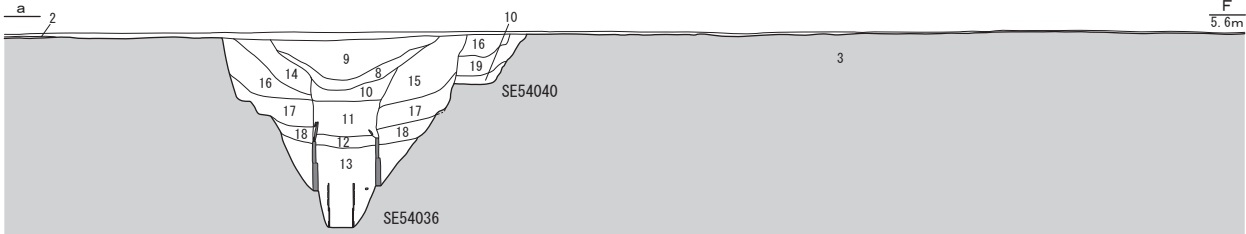
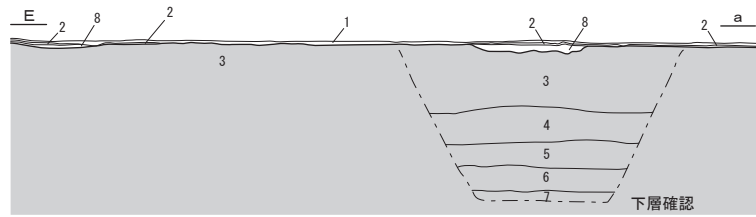


- | | |
|--|---|
| 1. 10YR6/1 褐灰色砂質土<耕作土> | 34. 10YR2/3 黒褐色礫<SK54010埋土> |
| 2. 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土<床土> | 35. 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質土<SD54014埋土> |
| 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色弱シルト | 36. 10YR6/3 にぶい黄褐色細砂<SD54014埋土> |
| 4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト | 37. 10YR6/2 灰黄褐色粘質土<SD54014埋土> |
| 5. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土<旧耕作土他> | 38. 7.5YR2/3 極暗褐粗砂 (マンガン含) <SD54011埋土> |
| 6. 10YR4/1 褐灰色砂質土<旧耕作土> | 39. 10YR6/2 灰黄褐色砂質土<SD54011埋土> |
| 7. 10YR7/6 明黄褐色シルト<検出面> | 40. 7.5YR4/1 褐灰色粗砂 (0.5cmの礫含) <SD54011埋土> |
| 8. 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質シルト<検出面> | 41. 7.5YR4/2 灰褐粗砂<SD54011埋土> |
| 9. 10YR6/8 明黄褐色シルト | 42. 10YR4/6 褐色砂質土<SD54012埋土> |
| 10. 10YR5/6 黄褐色シルト | 43. 10YR3/4 暗褐色砂質土<SD54012埋土> |
| 11. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト | 44. 10YR4/4 褐色砂質土<SD54012埋土> |
| 12. 10YR5/2 灰黄褐色粗砂 | 45. 10YR5/1 褐灰色粗砂<SD54012埋土> |
| 13. 10YR4/1 褐灰色礫 | 46. 10YR4/1 褐灰色粘質土<SD54012埋土> |
| 14. 10YR6/3 にぶい黄褐色極細砂 | 47. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト |
| 15. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂 (1~5cmの円礫多含) | 48. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂 |
| 16. 5Y6/1 黄灰色極粗砂 (湧水層) | 49. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト |
| 17. 10YR6/6 明黄褐シルト | 50. 7.5YR4/1 褐灰色粗砂 |
| 18. 10YR5/8 黄褐色粘質シルト (小石含) | 51. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト |
| 19. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫 | 52. 7.5YR4/1 褐灰色砂礫 |
| 20. 褐灰色粘質土<SD54001埋土> | 53. 7.5YR5/1 褐灰粗砂 |
| 21. 黒褐色砂質土<SD54001埋土> | 54. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト |
| 22. 10YR3/2 黒褐色砂質土<SD54007埋土> | 55. 10YR5/2 灰黄褐色シルト |
| 23. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土<SE54005埋土> | 56. 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト |
| 24. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土<SE54005埋土> | 57. 10YR6/1 褐灰色粗砂 |
| 25. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土<SE54005・SD54012埋土> | 58. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト |
| 26. 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質土<SE54005埋土> | 59. 5B4/1 暗青灰色砂質シルト |
| 27. 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土<SE54005埋土> | 60. 5PB3/1 暗青灰色シルト |
| 28. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土<SE54005埋土> | 61. 10YR5/2 灰黄褐色シルト |
| 29. 10YR3/4 暗褐色粘質土<SE54005埋土> | 62. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト |
| 30. 10YR5/6 黄褐色粘質土<SE54005埋土> | 63. 5BG2/1 青黒色粘質シルト |
| 31. 10YR3/3 暗褐色砂質土<SD54012埋土他> | 64. 10YR7/3 にぶい黄褐色粘質シルト |
| 32. 10YR8/3 浅黄褐色シルト | 65. 10YR7/8 黄褐色粘質シルト |
| 33. 2.5YR5/1 黄灰色砂質土 (礫含) <SK54008埋土> | 66. 5BG7/1 明青灰色粘質シルト |



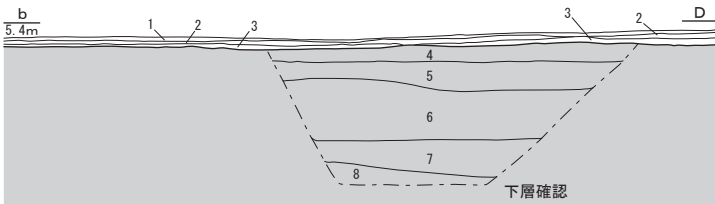
第 34 図 4-1 区南壁土層断面図 (1:100)

4-4区 北壁



- | | |
|---|--|
| 1. 10YR6/1 褐灰色砂質土<耕作土> | 11. 5PB5/1 青灰色粘質シルト<SE54036埋土> |
| 2. 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土<床土> | 12. 5B5/1 青灰色粘質シルト<SE54036埋土> |
| 3. 10YR7/6 明黄褐色シルト<基盤層> | 13. 5PB3/1 暗青灰色粘質シルト<SE54036埋土> |
| 4. 10YR5/8 黄褐色シルト | 14. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土<SE54036掘方埋土> |
| 5. 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト (縄文土器含) | 15. 10YR5/6 黄褐色砂質土<SE54036掘方埋土> |
| 6. 10YR4/6 褐色砂質シルト | 16. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質土<SE54036掘方・54040埋土> |
| 7. 10YR5/1 褐灰色砂礫 | 17. 5PB4/1 暗青灰色粘質シルト<SE54036掘方埋土> |
| 8. 10YR6/2 灰黄褐色砂質土<SD54037・54038、SE54036埋土> | 18. 5GY4/1 オリーブ灰色粘土質シルト<SE54036掘方埋土> |
| 9. 10YR4/4 褐色砂質土<SE54036埋土> | 19. 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質土<SE54040> |
| 10. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土<SE54036・54040埋土> | |

4-1区 西壁

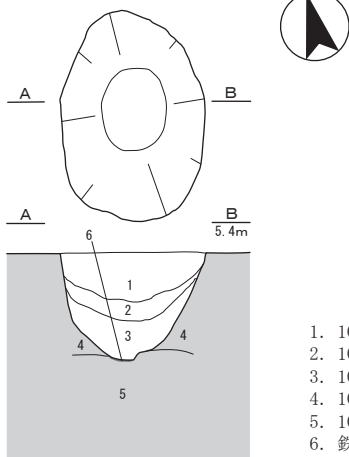


- | | |
|--------------------------|--|
| 1. 10YR6/1 褐灰色砂質土<耕作土> | 8. 5Y6/1 灰色細砂 |
| 2. 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土<床土> | 9. 10YR6/3 にぶい黄褐色細砂 |
| 3. 5YR4/2 灰褐色シルト | 10. 10YR6/2 灰黄褐色粘質土<SD54014埋土> |
| 4. 5Y7/1 灰白シルト質極細砂<基盤層> | 11. 7. 5YR4/1 褐灰色粗砂 (0.5cmの礫含) <SD54011埋土> |
| 5. N7/ 灰白色砂 | 12. 10YR6/1 褐灰色細砂<SD54011埋土> |
| 6. 2. 5Y7/4 浅黄色粘土 | 13. 7. 5YR4/2 灰褐色粗砂<SD54011埋土> |
| 7. 5Y7/2 灰白色粘土 | 14. 7. 5YR3/1 黒褐色砂礫<SD54011埋土> |



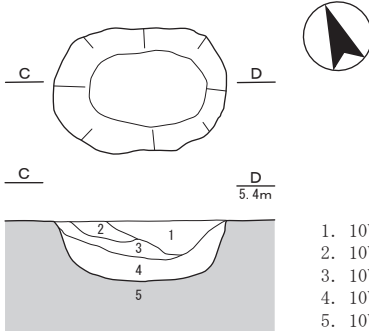
第 35 図 4-4 区北壁、4-1 区西壁土層断面図 (1:100)

SK54004



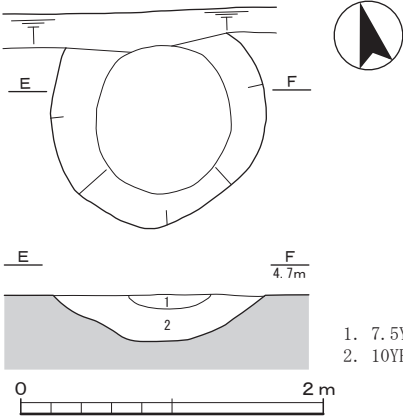
1. 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト (鉄分含)
2. 10YR6/2 灰黄褐色粘質土 (鉄分含)
3. 10YR6/1 褐灰色粘質土 (鉄分含)
4. 10YR7/4 にぶい黄橙色粘質土 (鉄分含) <基盤層>
5. 10YR5/2 灰黄褐色細砂 (鉄分含) <基盤層>
6. 鉄分の沈殿

SK54006



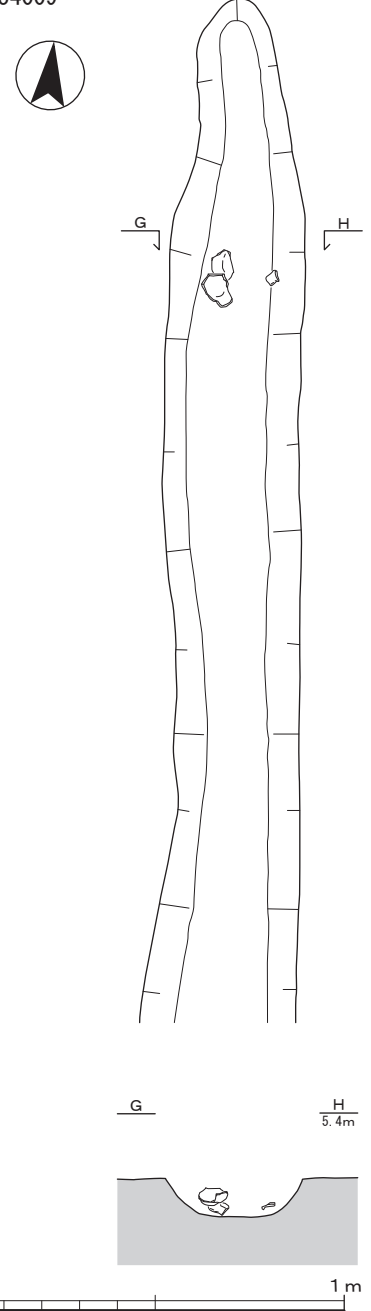
1. 10YR6/1 褐灰色砂質土 (鉄分含)
2. 10YR5/1 褐色粘質土 (明黄褐色土・マンガ混)
3. 10YR5/1 褐灰色砂質土 (褐色土混)
4. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
5. 10YR7/4 にぶい黄橙色シルト <基盤層>

SK54033

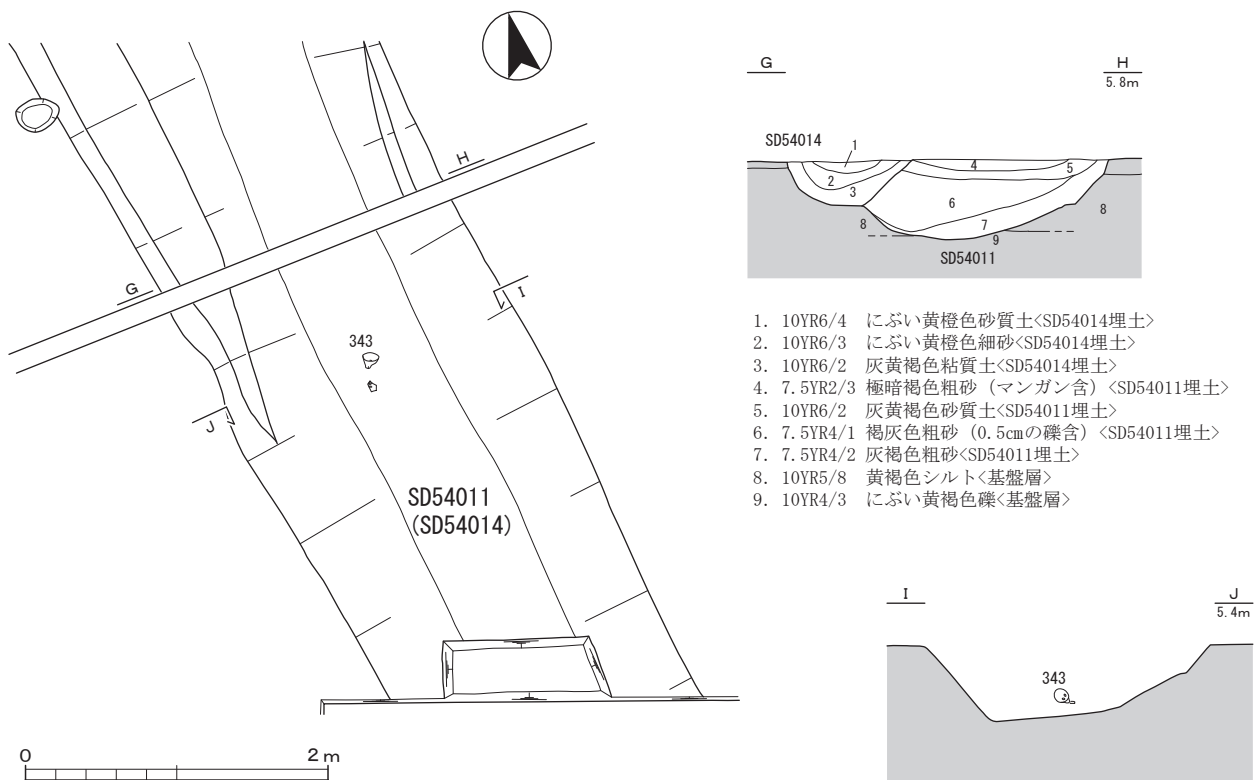
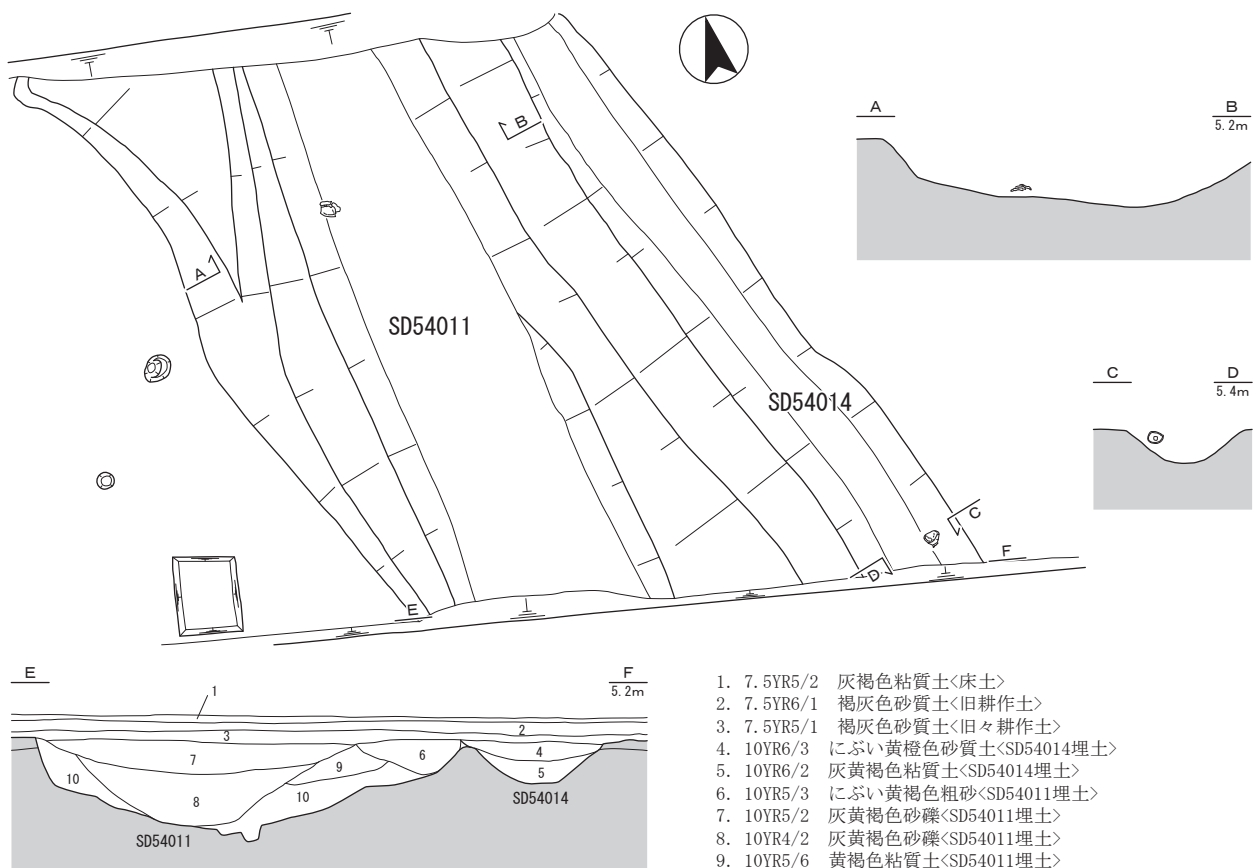


1. 7.5YR5/1 褐灰色砂質土
2. 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土

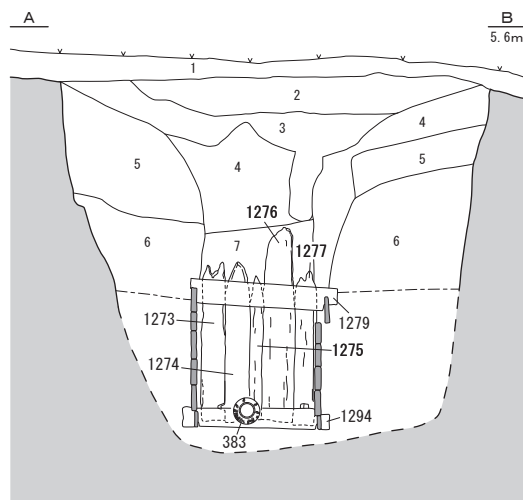
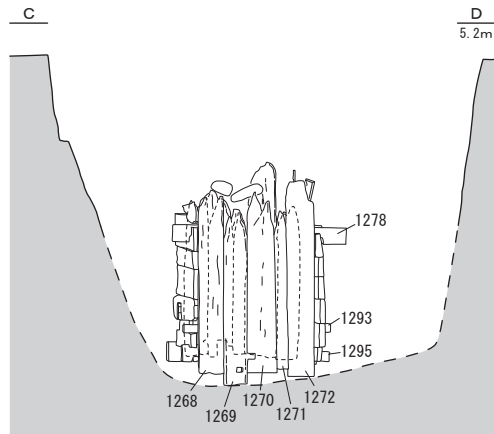
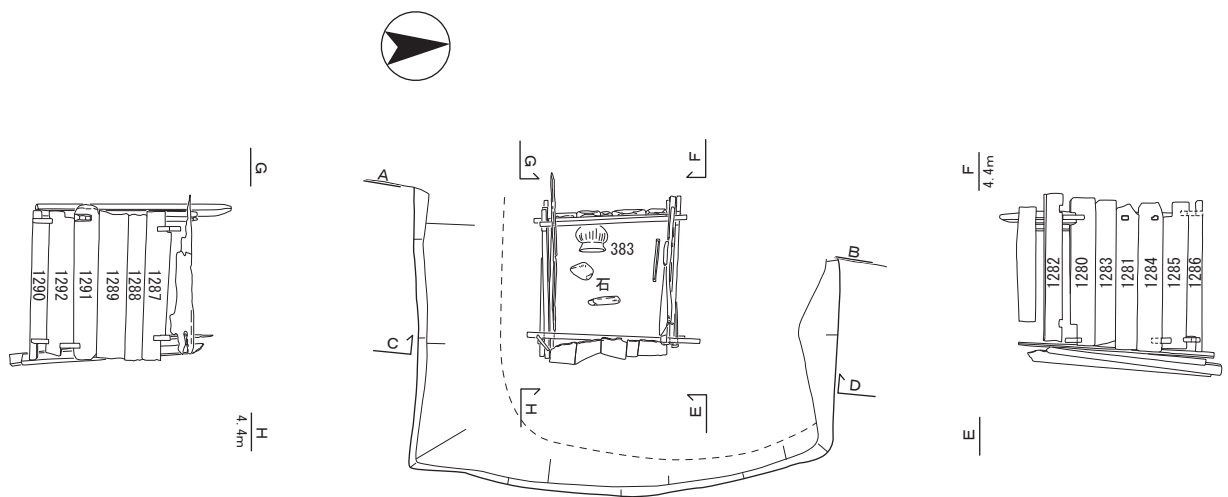
SD54009



第 36 図 SK 54004・54006・54033 (1:50)、SD 54009 遺物出土状況図 (1:20)



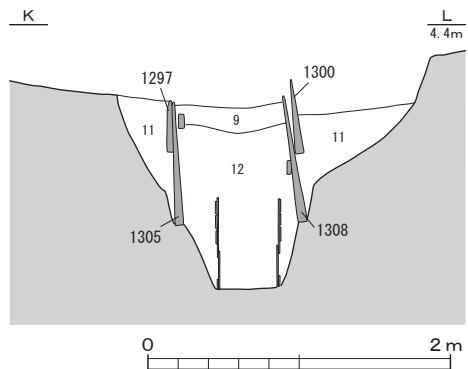
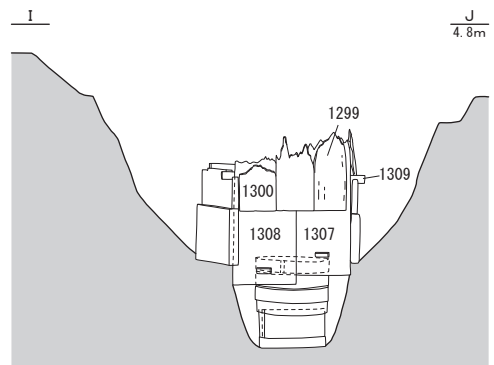
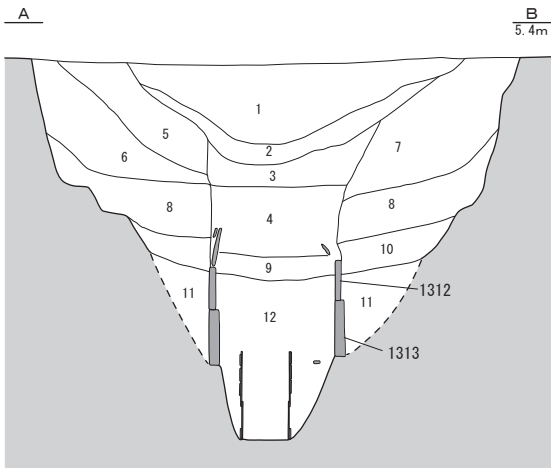
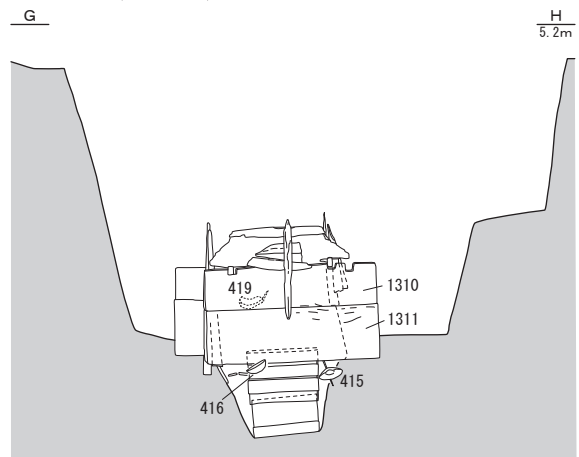
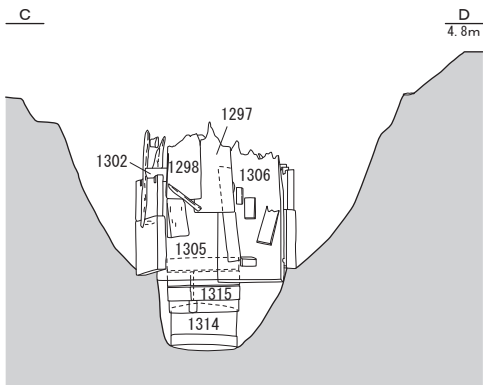
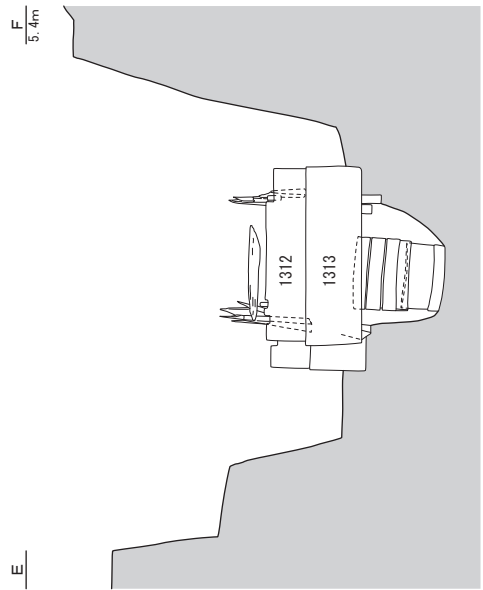
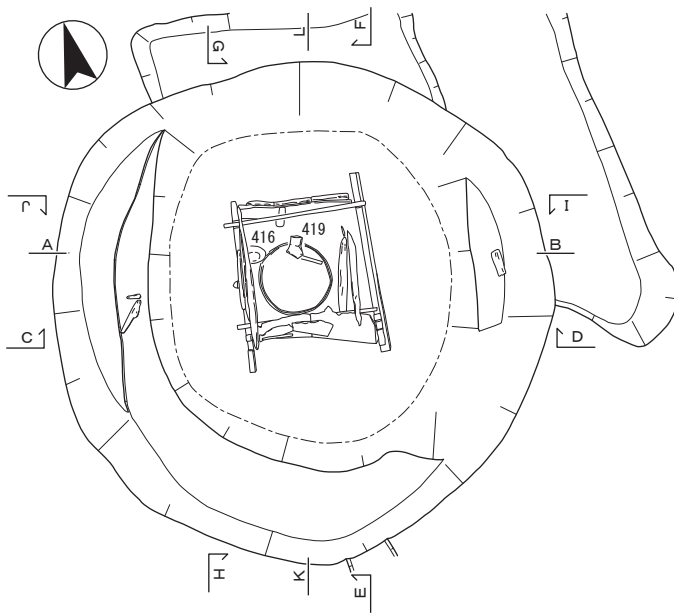
第 37 図 S D 54011・54014 断面図、遺物出土状況図 (1:50)



1. 10YR5/1 褐灰色土<耕作土>
2. 7.5YR5/2 灰褐色粘質土
3. 7.5YR6/2 灰褐色粘土
4. 10YR7/8 黄橙色粘土
(暗褐色粘土塊多含)
5. 7.5YR6/1 褐灰色粘土
(黄橙色粘土塊多含)
6. 5Y6/1 褐灰色粘土
7. 5B6/1 青灰色粘土

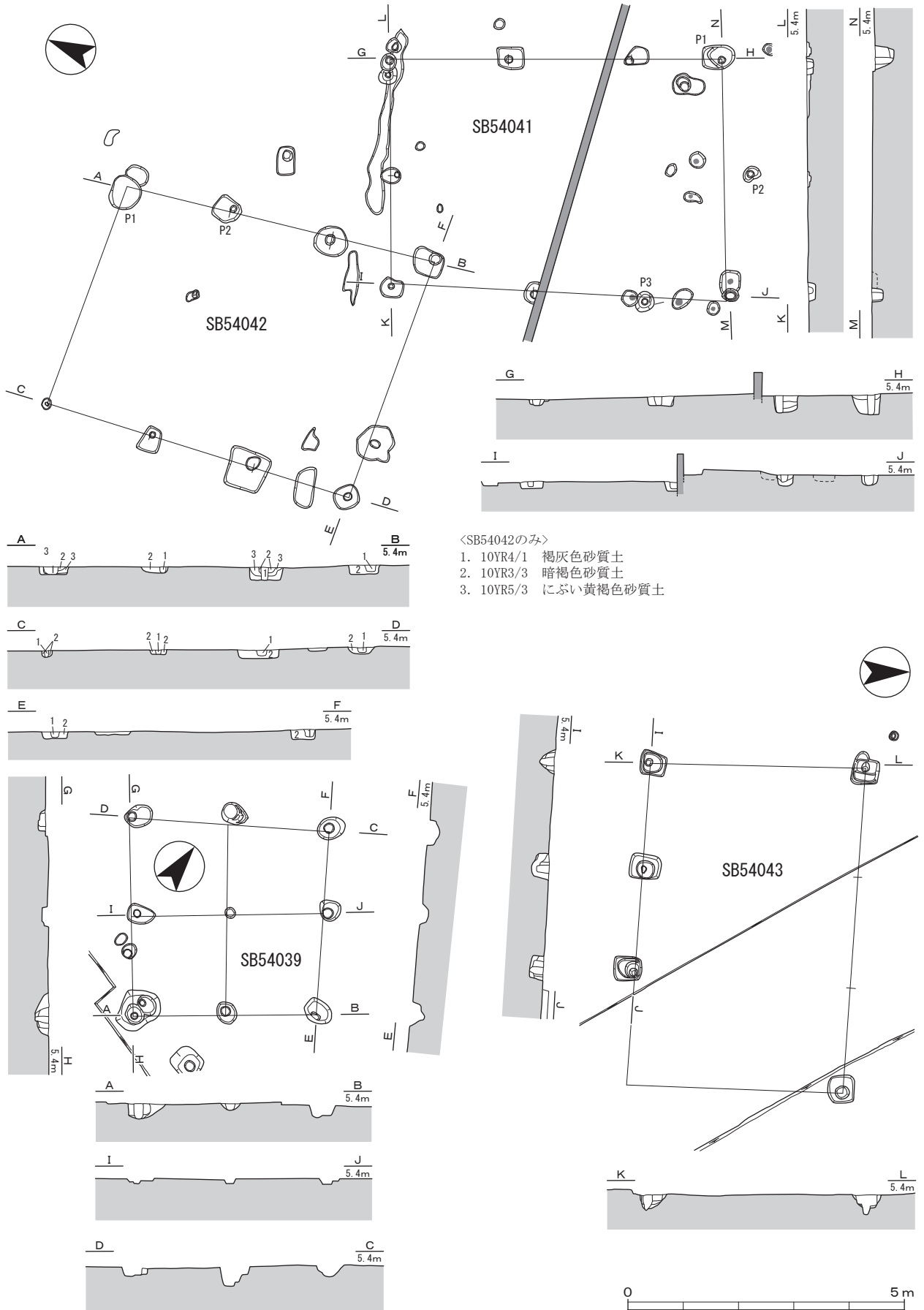


第 38 圖 SE 54031 (1:50)



1. 10YR4/4 褐色砂質土
2. 10YR6/2 灰黄褐色砂質土
3. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土
4. 5PB5/1 青灰粘質シルト
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
6. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質土
7. 10YR5/6 黄褐色砂質土
8. 5PB4/1 暗青灰色粘質シルト
9. 5B5/1 青灰粘質シルト
10. 5GY5/1 オリーブ灰色粘質シルト
11. 5B4/1 暗青灰色粘質シルト
12. 5PB3/1 暗青灰色粘質シルト

第 39 図 S E 54036 (1:50)



第40図 SB 54039・54041～54043 (1:100)

に配置している。表面はチョウナで整形されており、建築部材からの転用とみられる。縦板は重厚な柾目材で、いずれも柄穴や蟻溝状の加工があり、接合関係こそ不明だが近似した建築部材の転用であろう。縦板の外側には小さな板材を添えて補強している。

掘方中央は約 50 cm 深く掘り下げ、直径約 50 cm、高さ約 40 cm の曲物を 2 段重ねて水溜めを設ける。

遺物は平安時代後期～末の土師器、灰釉陶器、山茶碗などがある。曲物外側の井戸底部から完形の灰釉陶器ないし山茶碗が 2 点 (415・416) 出土した。いずれも投げ込まれたものであろう。他に井戸掘方から曲物の残骸が出土しており、重複する S E 54040 の遺物の可能性がある。

S D 54037 (写真図版 30) 4-4 区で検出した幅 50 cm、深さ 10 cm 未満の浅い溝である。南東から北西へ延び、底面には耕起具の痕跡とみられる多数の凹みがある。

平安時代中～後期の土器が出土した。

S B 54039 (第 40 図) 4-1 区東部で検出した。2 間×2 間の総柱建物で、主軸は N39° W である。ピット掘方は直径約 40 cm の不整円形で、削平のためピットの残りは悪い。

柱痕跡は直径 10～15 cm の円形である。柱間寸法は 1.8 m (6 尺相当) を基本とするが、やや不揃いで、歪んだ平面形を呈する。古代の土師器が出土した。

S E 54040 (写真図版 28) 4-4 区で一辺 2.8 m、深さ約 70 cm の方形の掘方を検出した。大半を重複する S E 54036 に切られ、詳細は不明である。

平安時代後期～末の土器が出土している。

S B 54041 (第 40 図、写真図版 26) 4-1 区中央で検出した 3 間×2 間の建物で、主軸は N24° W、南北棟である。ピット掘方は一辺 50 cm の隅丸方形である。桁行方向の側柱は、柱間が不等間で、相対する側柱も柱筋の通りが悪い。柱痕跡は直径 12 cm ほどの円形である。平安時代末の土師器片などが出土した。

S B 54042 (第 40 図、写真図版 26) 4-1 区中央で検出した、3 間×1 間の掘立柱建物である。主軸 N10° W、南北棟で、ピット掘方は一辺 50 cm ほどの不整形であるが、削平により規模は不揃いである。また妻側柱のピットは確認できない。

柱痕跡は、直径約 10 cm の円形である。南東側は S B 54041 と重複するが前後関係は不明である。

平安時代後期～末の土師器などが出土した。

S B 54043 (第 40 図、写真図版 26) 4-1 区西で検出した側柱建物である。建物中央部を現道が横切っており、不明確な部分が多いが、3 間×1 間、主軸は N2° E の東西棟とみられる。

柱間寸法は 1.8 m (6 尺相当) の等間で、平面形は若干歪みがある。妻側柱は検出できなかった。ピット掘方は一辺 50 cm 前後の方形で、柱痕跡は直径 15 cm の円形である。平安時代後期の土師器片が出土した。

7.5 区 (第 41～44 図)

(1) 概要

遺跡北部、4 区と 9 区の間にある南北方向の調査区で、北側を 7 次 8 区、南側を 6 次 4 区に接する。北側で掘立柱建物を確認したことから、周囲を一部拡張した。全体的に遺構は希薄である。

遺構は現代耕土・床土直下 (地表下 20cm) の灰黄褐色シルト層 (東壁 12 層) 上で検出した。南側は黄褐色シルト (東壁 26 層) が遺構面である。

下層確認は北側・南側の 2ヶ所で実施し、北側は暗色帯 (東壁 37 層) や縄文土器片を確認したが、遺物量は少ない。南側では極細砂や粘土質シルトがみられ、地表下約 3.2 m で砂礫層 (東壁 50 層) となった。

この直上で黒褐色の土壌 (東壁 49 層) を検出し、本層とその上層 (47 層) で C 14 年代測定用サンプルを採取した。49 層の炭化材 (試料 No3) は 3440 ± 25yrBP (1876-1666calBC:2σ)、47 層の炭化材 (試料 No4) は 3450 ± 25yrBP (1877-1690calBC:2σ) の年代値を得た (V 章)。ともに縄文後期中葉に相当する年代値であり、北側下層確認 (37 層) で得られた土器と年代的な齟齬が生じることから、5 区南側に局所的な旧流路や埋積浅谷が存在した可能性がある。

現状では、50 層の砂礫層が 1 区や 6 区で確認した基本層序 VI 層の砂礫層と対応するかは確定できない。

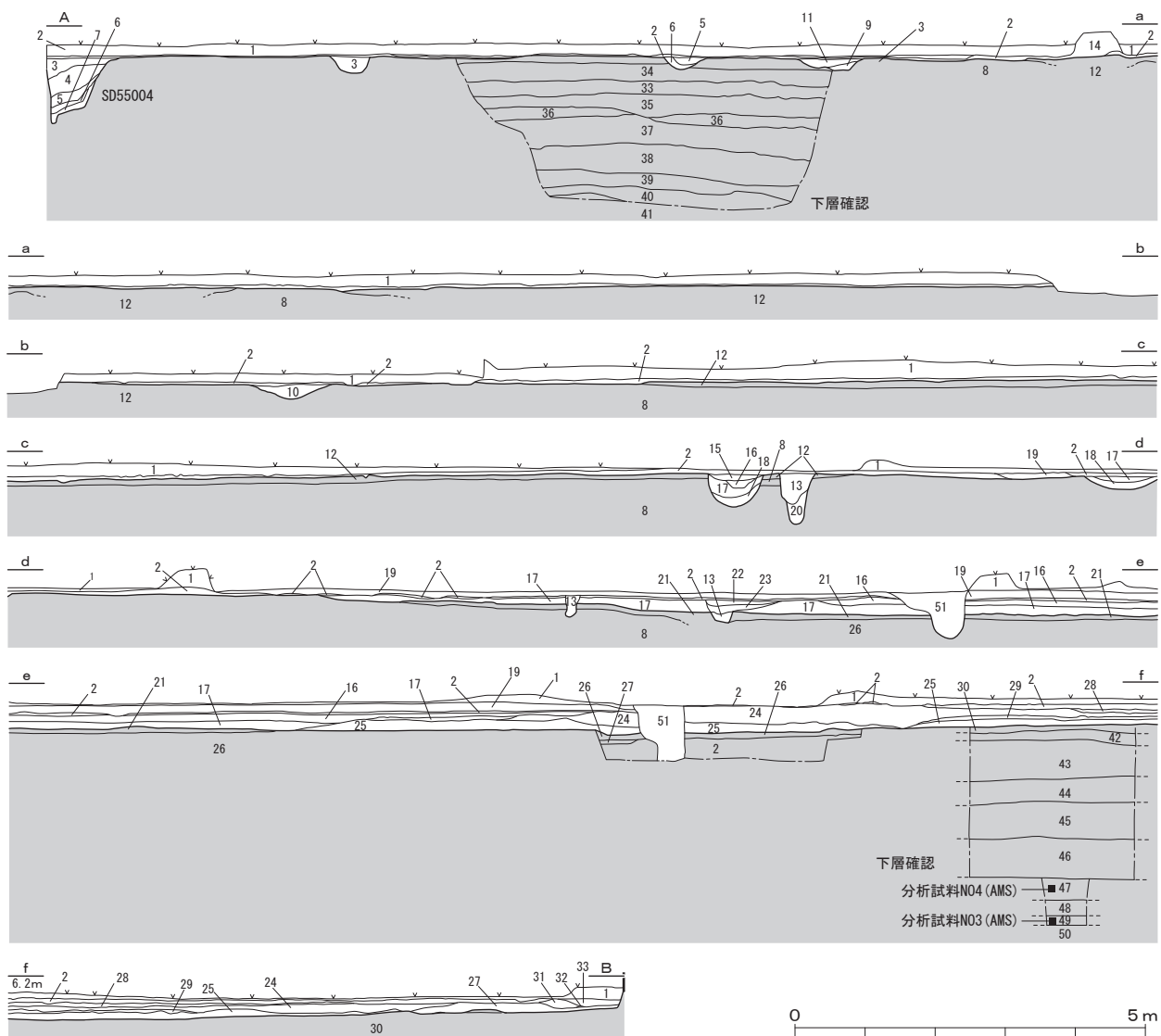
(2) 遺構

S E 55001 (第 43 図、写真図版 34) 5 区南で検出した直径 2 m、深さ 1.8 m の円形井戸である。

深さ 1.2 m～1.6 m で湧水層に達し、埋土も還元状態になる。底面は直径 80 cm 程度の円形にやや深くなっており、この部分に水溜めがあった可能性もあるが、



第41图 5区遺構全体图 (1:200)



- | | |
|---|-------------------------------------|
| 1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト<耕作土他> | 27. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト |
| 2. 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト<床土他> | 28. 10YR6/6 明黄褐色シルト (褐灰色シルト塊含) <床土> |
| 3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト (極細砂含) <SD55004他埋土> | 29. 2.5Y5/4 黄褐色シルト<床土> |
| 4. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト (極細砂含) <SD55004埋土他> | 30. 10YR4/2 灰黄褐色シルト<基盤層> |
| 5. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト<SD55004他埋土> | 31. 10YR4/4 褐色シルト |
| 6. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト (極細砂含) <SD55004他埋土> | 32. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (細砂含) |
| 7. 2.5Y5/4 黄褐色極細砂<SD55004埋土> | 33. 2.5Y5/3 黄褐色シルト |
| 8. 2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルト (極細砂・マンガン含) <基盤層> | 34. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト (極細砂・マンガン含) |
| 9. 2.5Y4/2 暗灰色粘質シルト | 35. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト |
| 10. 2.5Y4/2 暗灰色砂質シルト (細砂含) <SD55003埋土> | 36. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト |
| 11. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト | 37. 10YR3/3 暗褐色シルト (縄文土器・小石含) |
| 12. 10YR5/2 灰黄褐色シルト<基盤層> | 38. 5Y4/2 灰オリーブ色極細砂 |
| 13. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質シルト | 39. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂 |
| 14. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質シルト<畦> | 40. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト (細砂含) |
| 15. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 | 41. 10YR5/1 褐灰色粗砂<湧水層> |
| 16. 2.5Y5/2 灰黄色粘質土 | 42. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト |
| 17. 2.5Y5/2 灰黄色極細砂 | 43. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂 (締り弱い) |
| 18. 2.5Y5/2 灰黄色粘質土 (極細砂含) | 44. 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土質シルト (締りやや弱い) |
| 19. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質極細砂<床土> | 45. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト |
| 20. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質極細砂 | 46. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト (砂やや多い) |
| 21. 2.5Y4/6 オリーブ褐色粘質土<基盤層> | 47. 2.5GY7/1 明オリーブ灰色極細砂 (よく締まる・炭含) |
| 22. 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土 | 48. N6/ 灰色細~粗砂 |
| 23. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質シルト (極細砂含) | 49. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト (腐植土・植物遺体含) |
| 24. 2.5Y4/6 オリーブ褐色粘土質シルト<旧耕作土> | 50. 10YR5/1 褐灰色砂礫 |
| 25. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト | 51. 攪乱 |
| 26. 10YR5/6 黄褐色シルト<基盤層> | |

第 42 図 5 区東壁土層断面図 (1:100)

井戸枠等は残骸も含め確認できなかった。下層の埋土が乱れており、井戸枠は抜き取られたとみられる。

飛鳥～奈良時代の土師器・須恵器等が出土した。

S D 55002 5区南端で検出した幅70 cm、深さ約10 cmの浅い溝である。方向は約N25° Wで、条里方向とも大きく違える。

S D 55003 5区中央部で検出した深さ約20 cmの浅い溝である。幅は約90 cmで緩やかに北東へカーブしていく。弥生時代終末期の高杯が出土した。

S D 55004 (写真図版 34) 5区北端で検出した条里坪境溝で、現況の用水と重複する。深さ約1 mに及ぶ。埋土は砂質シルト～シルトで、最下層は極細砂である(第42図)。室町時代の遺物が出土した。

S B 55005 (第44図、写真図版 33・34) 5区北側で検出した桁行4間、梁行2間の掘立柱建物で、主軸はN20° Eの南北棟である。

西側で調査区を拡張し、東側は坪掘りにより底の確認を行ったが、東西とも底は付属しない。調査区内に関連する建物はなく、単独で存在する。付近の遺構密度も低い。

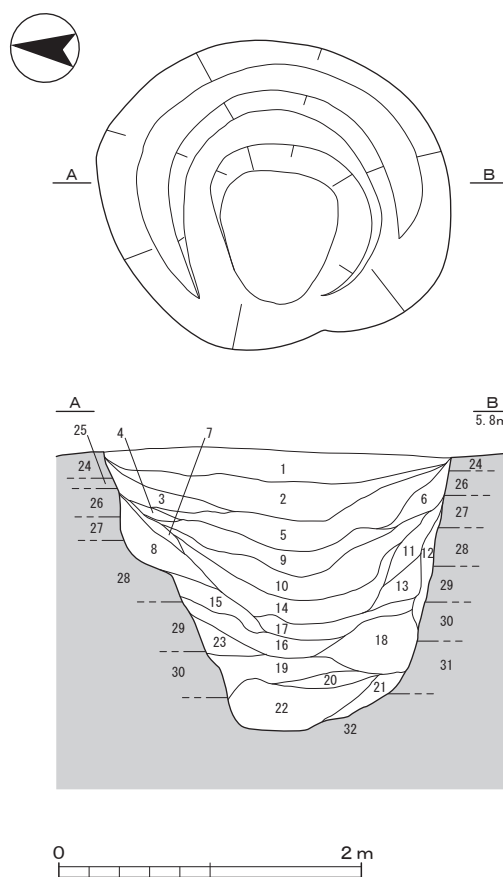
ピット掘方は一辺1 m程度の方形で、7区S B 57041等とともに県内屈指の大きさである。ピットの深さは約50 cmであるが、妻側柱はごく浅く、南側(P6)は深さ25 cm、北側(P12)は痕跡程度が残っているにすぎない。柱間寸法は2.1 m(7尺)等間である。

各ピットで柱痕跡や柱抜き取り痕を検出しており、直径約20 cmの柱と推定される。東西側柱は外側へ倒して抜き取られるが、掘方は大きく掘り返されていない。柱痕跡は掘方底に達していないものが複数あり、根固めの後に柱を据えたと考えられる。南西隅のP5では、柱抜き取り後に礫を埋めていた。

P3・5・8・10の掘方・抜き取り痕から比較的多くの遺物が出土しており、平安時代前～中期の土師器杯や灰釉陶器がみられた。

同位置での建て替えの痕跡もなく、比較的短期間のうちに廃絶した建物である。

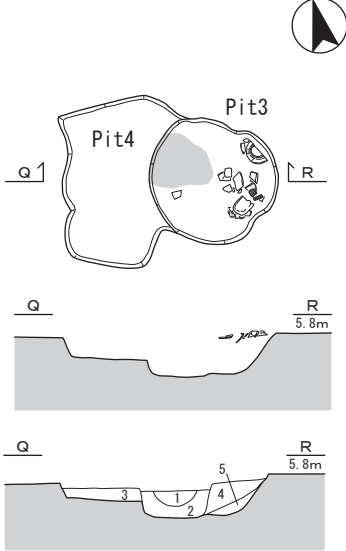
なお、南妻側柱P6の南側に隣接するピット(ケール12Pit 3)では、上層から灰釉陶器皿やほぼ完形の土師器杯などが出土している。S B 55005 妻側柱の添柱などであろうか。



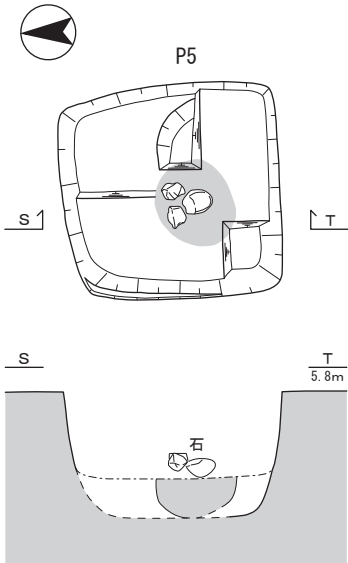
1. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト
2. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト
4. 7.5YR5/2 灰褐色砂質シルト
5. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
7. 5Y5/2 灰オリーブシルト
8. 2.5Y5/3 黄褐色シルト(暗褐色土塊含)
9. 10YR4/2 灰黄褐色シルト(赤褐色シルト塊含)
10. 10YR5/2 灰黄褐色シルト(赤褐色シルト塊含)
11. 2.5Y5/3 黄褐色シルト(赤褐色シルト塊含)
12. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(赤褐色シルト塊含)
13. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト(赤褐色シルト塊含)
14. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト(赤褐色シルト含)
15. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
16. 2.5Y5/1 黄灰色シルト(黄褐色砂質シルト塊含)
17. 10YR5/2 灰黄褐色シルト(黄褐色砂質シルト含)
18. 2.5Y5/1 黄灰色シルト(黄灰色砂・黄褐色砂質シルト含)
19. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト(黄褐色砂質シルト含)
20. 2.5Y4/1 黄灰色粘土
21. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト
22. N4/ 灰色粘土
23. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(褐色シルト塊含)
24. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト<検出面>
25. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
26. 10YR3/3 暗褐色シルト
27. 2.5Y5/3 黄褐色シルト
28. 10YR3/4 暗褐色シルト
29. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト(粘性強い)
30. 10YR4/2 灰黄褐色シルト(微砂含)
31. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂(湧水層)
32. 2.5Y5/1 黄灰色細砂(極細砂含)<湧水層>

第43図 S E 55001 (1:50)

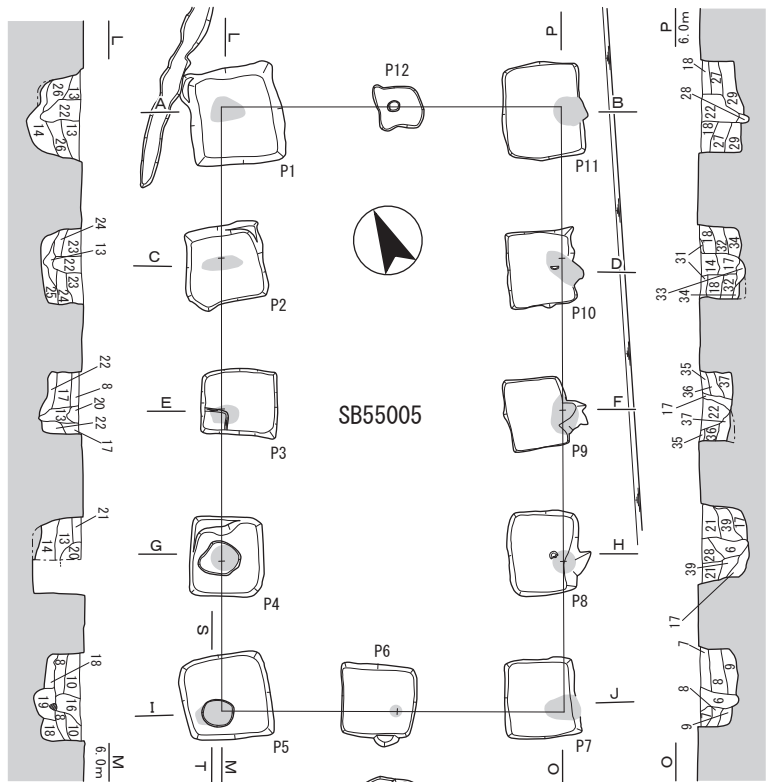
ケL12 Pit3・Pit4



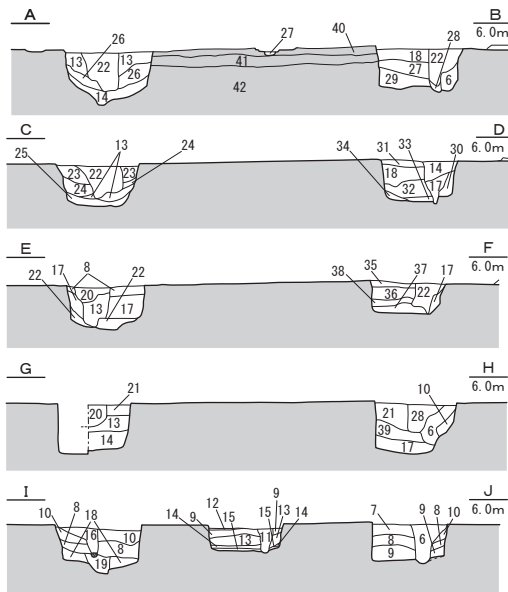
1. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (黒褐色シルト含)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
3. 2.5Y5/3 黄褐色シルト
4. 2.5Y5/4 黄褐色シルト
5. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト



6. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
7. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト (明黄褐色粘土塊含)
8. 2.5Y6/2 灰黄色シルト
9. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (明黄褐色粘土塊含)
10. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト
11. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト (明黄褐色粘土塊含)
12. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
13. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト (明黄褐色粘土塊含)
14. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト (明黄褐色粘土塊含)
15. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (極細砂含)
16. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト
17. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト
18. 5Y5/2 灰オリーブ色砂質シルト
19. 5Y6/2 灰オリーブ色シルト
20. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
21. 5Y5/2 灰オリーブ色砂質シルト (明黄褐色粘土塊含)



柱抜取痕



22. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト
23. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト (明黄褐色粘土塊含)
24. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (明黄褐色粘土塊含)
25. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト (明黄褐色粘土塊含)
26. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (明黄褐色粘土塊含)
27. 2.5Y5/3 黄褐色シルト
28. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
29. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
30. 5Y4/3 暗オリーブ色シルト
31. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト
32. 5Y5/3 灰オリーブシルト
33. 7.5Y5/1 黄灰色シルト
34. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト
35. 5Y5/3 灰オリーブ砂質シルト
36. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (明黄褐色粘土塊含)
37. 7.5Y5/2 黄灰色シルト
38. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト
39. 5Y5/3 灰オリーブシルト (明黄褐色粘土塊含)
40. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
41. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト (極細砂・マンガン含)
42. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト

0 5m

第44図 SB 55005 (1:100)、SB 55005 隣接ピット遺物出土状況 (1:40)

8. 6区 (第45～63図)

(1) 概要

遺跡中央部、和屋集落の北東側にある東西方向の調査区である。通称「面塚」が北接し、北側は7次3区、南側は第7次4区と接する。

上層遺構は現耕土・床土直下(地表下15cm)の浅黄色砂質シルト層上で検出した。弥生時代終末期の方形周溝墓や飛鳥時代の溝・井戸、平安時代の掘立柱建物・井戸、平安時代末～鎌倉時代の井戸・土坑などがあり、特に西半は遺構密度が高い。平安時代の掘立柱建物の柱穴は残存深さ20～30cmほどで、上層遺構はおよそ50cm前後削平されているとみられる。

なお、上層遺構の検出・掘削中に埋設土器(SX56037)をはじめ縄文時代の遺物が多数認められたことから、下層確認を行い遺構・遺物の包含状況を確認した。縄文時代の遺物は北壁7層中に多くみられたが、工期等を勘案し7層までを重機で除去した後、8層以下で遺構検出を試みた(下層遺構)。

下層遺構の詳しい検出状況については後述する。

(2) 上層遺構

S K 56001・56002・56021・56022・56024(第48図、写真図版41) 6区中央で検出した浅い方形の土坑群で、規模は一辺1～2m、深さ5～15cmを測る。

切り合いからS K 56002が最も古く、S K 56020・56021が新しいが、各遺構から中世の山茶碗が出土しており、大きな時期差はない。

S K 56021では、礫と山茶碗がまばらに散布していた。

S E 56003(第50図、写真図版39) 6区中央で検出した掘方直径約4mの不整円形、深さ約3mの井戸である。木製井戸枠は一辺約60cmの縦板・横板組で、下部のみ残存していた。埋土断面の観察から、井戸枠上部は抜き取られたと推測される。

井戸枠は南北方向を横板、東西方向を縦板とし、縦板は内側の横板で固定する。枠内には、直径約40cmの曲物を据えて水溜めとしている。

埋土から平安時代末(中世I b期)のロクロ土師器や完形の山茶碗などが出土した。

S E 56004(第51図、写真図版39) 6区中央で検出した掘方直径2.8～4mの不整円形、深さ約2.6mの

井戸である。井戸枠は石組で、直径0.9～1mの楕円形を呈する。石組は最下段に長さ30cmのやや大ぶりの礫を据え、他は長さ10～20cmの形の礫を小口積で高さ約1.5m積み上げる。上部ほど小さい石を用いる傾向がある。礫は井戸底面の基盤層に多く含まれるため、井戸掘削時に得られた礫を用いた可能性が高い。井戸上部は石組がみられないが、石組を破却して埋め戻した様子もないため、別に木製の井戸枠があったかもしれない。

最下部は、直径約50cmの曲物を一段据えて水溜めとする。曲物の周囲には礫を裏込めに充填していた。

埋土から土師器・山茶碗・青磁などが出土しており、中世II a期の井戸と考えられる。

S E 56006(第52図、写真図版40) 6区中央で検出した井戸で、掘方は一辺約4～5mの方形、深さ2.5mを測る。

井戸枠は木製で、長辺約90cm、短辺約60cmの縦板・横板組である。水溜めはみられない。

井戸枠は腐食し最下段の土居桁と縦板のみ残存していたが、井戸枠の痕跡は上層でも確認できることから、抜き取られず原位置のまま腐食していったと考えられる。井戸枠痕内の埋土最上層には10～20cmの礫が集中し、井戸廃絶時に礫を投棄したようである。深さ2.3mで礫層に達し、湧水がみられた。

井戸枠痕内の埋土から墨書土器「七西井」(456)や暗文のある土師器杯、志摩式製塩土器、掘方から緑釉陶器等が出土しており、平安時代中期の井戸と判断される。

S K 56007(第49図) 6区中央で検出した土坑で、長辺2.7m、短辺2mの隅丸長方形を呈する。深さ約10cmの浅いもので、平安時代中期の土師器、砥石などが出土した。

埋土に炭や焼土塊を多く含むが、重複するS F 56036からの混入と考えられる。

S K 56012(第49図、写真図版41) 6区中央で検出した一辺2.5m、深さ約10cmの不整形の土坑である。S K 56001等の中世土坑群と同様のものであろう。

S K 56013(第53図、写真図版41) 6区東部で検出した、一辺約3mの隅丸長方形を呈する土坑である。深さ約1mで底に到達した。水溜めであろうか。

埋土は灰色系砂質シルトで、下層はやや砂が多い。

山茶碗が出土している。

S K 56015 6区中央で検出した一辺約3mの方形土坑である。深さは約20cmで底面は平坦である。S E 56003に南東を切られる。

平安時代の土師器杯等が出土した。

S K 56018 6区中央で検出した一辺約2.5mの不整形方形土坑で、深さ約10cmと浅い。

平安時代の土師器片や灰釉陶器片が若干出土した。

S K 56019 6区中央で検出した土坑のひとつで、直径約4～5mの不整形円形を呈する。深さ約10cmと浅い。中世の土師器片などが出土した。

S K 56020 (第48図) 6区中央で検出した土坑のひとつで、一辺1.3～1.4mの隅丸方形、深さ6cmの浅いものである。中世の山茶碗片が若干出土した。

S D 56023・56025 6区中央で検出した、幅50cm、深さは約10cmの浅い溝である。S D 56023は逆L字形に屈曲し、S E 56003に切られるが、一辺6m程度の区画溝とみられる。S D 56025は、S D 56023から派生する東西方向の溝で、50cmほどの途切れる部分がある。

これらの溝から、平安時代前期の土師器杯や灰釉陶器等が出土した。

S X 56026 (第54図、写真図版37) 6区中央で検出した弥生時代終末期の方形周溝墓で、北東は調査区外へ続いていく。規模は周溝内寸で一辺約8mを測り、南側に幅約1.8mの陸橋部をもつ。墳丘や埋葬施設は残存していない。

周溝幅は75cm～1mで、隅はやや狭く、陸橋部付近は幅広となる。周溝の深さは西側で約25cm、南東部は60cmとやや深い。南東部では下層に砂、上層にシルトが堆積する。下層埋土は基盤層との識別が非常に困難であった。

陸橋部の西側上層で土師器壺(547)、東側周溝下層からも壺(548)が出土している。

S X 56027 (第55・56図、写真図版37・38) 6区西で検出した弥生時代終末期の方形周溝墓で、調査区外の西側周溝は7次調査で確認している。陸橋部は未検出であるが、南ないし東側に陸橋部が開くものと予想される。

規模は周溝内寸で一辺約13mと比較的大きなものである。墳丘や埋葬施設は残存していない。

周溝幅は80cm～1.3mで、隅はやや狭く、東側は特に幅広となる。周溝の深さは、北側が約1mと深く、西側で約60cm、東側は30cmと浅い。埋土は下層が細砂、上層にはシルトが堆積する。

遺物は周溝上層から弥生時代終末期の土師器が出土している。北側周溝中央では壺(563)、高杯(572)、台付甕(569・571)が個体ごと散在していた。東側周溝では赤彩の壺(566)など多数の遺物が折り重なっており、同一個体が散らばって出土したもの(561)もある。いずれも、周溝がある程度埋没した段階で投棄されたと考えられる。

なお、西側周溝では、埋土上層から完形の須恵器杯(577)や土師器杯(578)、甕(570)など飛鳥～奈良時代の遺物がみられた。墳丘をもつ墓が後世にも一定認識され、祭祀の対象であった可能性がある。

S K 56028 (第53図、写真図版41) 6区中央で検出した直径2.6mの円形土坑である。南半分が調査外にあり、深さ1.2mで掘削を断念した。素掘りの水溜めや井戸の可能性が高い。7～8世紀の土師器や須恵器が出土した。

S E 56029 (第57図、写真図版40) 6区西で検出した円筒形の土坑である。直径約2.1m、深さ約2.1mを測る。底面は礫層に達しており、調査中は湧水がなかったが、素掘りの水溜めや井戸の可能性が考えられる。井戸枠の痕跡や抜き取り痕は認められなかった。埋土最上面には破砕された飛鳥～奈良時代の土師器・須恵器が集中的に投棄されていた。

S K 56031 (第53図、写真図版41) 6区西端で検出した直径約1.8m、深さ約30cmの円形土坑で、近世の土坑である。

S K 56032 (第53図、写真図版40) 6区西で検出した長径1.5m、短径1.1m、深さ1.5mの土坑である。底面は湧水層に達しておらず、水溜めであろうか。埋土は西側を掘り返した形跡がある。

7世紀後半～8世紀の完形土師器杯(543)や残りのよい土師器甕(544)が下層から出土した。

S D 56033 (第49図、写真図版41) 6区西を東西に走る溝で、7区S D 57015と一連のものである。幅約3m、深さ約1mを測る。

埋土は上層がシルト、下層には一部に砂が介在する。遺物は非常に少なく詳細な時期は不明であるが、

埋没後に飛鳥～奈良時代の S E 56029・S K 56032 が掘削されており、飛鳥時代以前の遺構であると考えられる。

S B 56034 (第 58 図、写真図版 36) 6 区東で検出した桁行 4 間、梁行 1 間以上、東西棟の掘立柱建物で、南北軸は N13° W である。

柱掘方は一辺 50～60 cm の隅丸方形で、深さ約 15 cm と上部は相当削平されていると考えられる。柱痕跡は直径 20～25 cm の円形で、柱間寸法は 2.1 m (7 尺相当) 等間である。

平安時代中期の土師器や灰釉陶器が出土した。

S B 56035 (第 59 図) 6 区中央で検出した掘立柱建物である。ピットは一辺 50～75 cm の方形で、全体として 4 間×5 間程度の柱列がみられるが、中世の井戸などに削平され、詳細は不明である。2 棟程度の側柱建物に分離できるかもしれない。主軸は N7° W である。

柱穴の深さは約 30 cm、柱痕跡は直径約 20 cm である。柱間寸法は 2.7 m (9 尺相当) で、東側と南側は 2.1 m (7 尺相当) とやや狭く、庇の可能性はある。

S B 56034・56065・56066 の 3 棟と共に建物群を形成し、その中の主屋的な建物と推測される。

柱穴から平安時代中～後期の土師器や志摩式製塩土器が出土した。

S F 56036 (第 49 図、写真図版 41) 6 区中央で検出した小土坑で、S K 56007・S E 56006 に切られ、約半分が残存する。一辺 40 cm の隅丸方形で、深さ 25 cm を測る。掘方壁は強く被熱し赤化しているが、底は直接火を受けていない。

埋土は炭や焼土を多く含み、奈良時代の土師器杯・皿が出土した。堅穴住居のカマド部分が残存したものであろう。

S B 56063 (第 59 図) 6 区中央で検出した 2×2 間以上の掘立柱建物であるが、後世の遺構により周囲が削平され、詳細は不明である。主軸は付近の建物と若干異なる (N20° W)。

柱掘方は直径 50 cm 程度の円形または不整長方形を呈する。柱掘方は深さ 10 cm～50 cm と不揃いである。

ピットから灰釉陶器片が出土しており、平安時代の建物とみられる。

S B 56064 (第 59 図) 6 区中央で検出した桁行 2 間

以上の掘立柱建物で、後世の遺構により周囲が削平され、詳細は不明である。

柱掘方は一辺 80 cm～1 m の長方形を呈する大型のもので、S B 56035 等に比べ一回り大きい。柱痕跡から、直径 25 cm 程度の柱であったと推測される。東側柱からほぼ完形の土師器杯など、平安時代中期の土器が出土している。

S B 56065 (第 59 図) 6 区西端で検出した 2 間×1 間の掘立柱建物である。S B 56035 等に伴う小型の建物であろう。柱間寸法は桁行 2.1 m (7 尺相当) の等間である。柱掘方は直径 15～50 cm の円形で、深さ約 10 cm 程度と浅い。

出土遺物は灰釉陶器等平安時代のものである。

S B 56066 (第 58 図) 6 区東端、S B 56034 の南側柱筋の延長上で 2 基の柱穴を確認した。柱間寸法は S B 56034 と同じであるが、柱掘方の規模は小さく円形である。11 世紀代の土器等が出土した。

(3) 下層遺構 (第 60 図、写真図版 42)

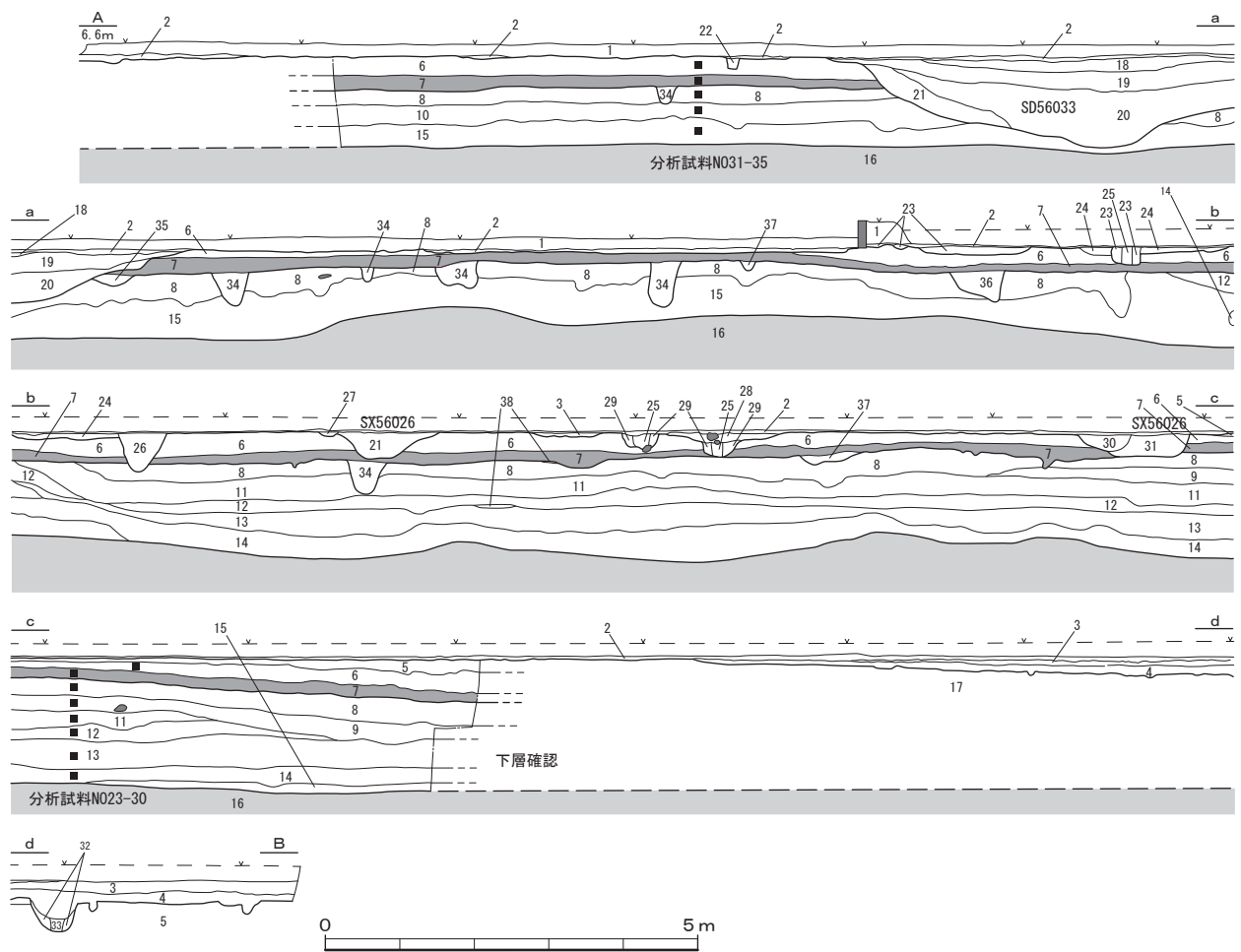
下層確認の当初は、縄文時代中期末～後期前葉の遺物を包含し、有機物の多い古土壌 (北壁 7 層、第 46 図) を除去し、北壁 8 層上面で遺構検出を試みた。その結果、埋設土器や焼土 (被熱) 面、堅穴状の不定形な落ち込みを確認した。

当該面上で検出したこれらは、基盤層の土壌化により、縄文時代中期末～後期前葉の遺構プランが消失し、埋設土器や炉の被熱面など硬質部だけが残ったものである。従って、本来は多数の石囲炉や堅穴住居が存在したとみられる。堅穴状の不定形な落ち込みは、中期末の土器を多く含むが、より下層から S K 56061 など縄文時代後期初頭～前葉の遺構が検出された。埋積浅谷及び北壁 7 層以下の遺物相との比較から、これらは人為的な遺構ではなく、堅穴住居等の埋没過程で生じた、ごく浅い凹みに有機物の多いシルトが堆積したものと推測される。

最終的に、詳しい層序のデータを得るため、調査区北壁を中心として埋積浅谷付近を徐々に掘り下げ、遺構検出を試みた。その結果、縄文時代中期中葉 (咲畑式) から後期前葉 (北白川上層式) までの遺構・遺物、埋積浅谷の埋積過程を明らかにすることができた。また、6 区西側の S X 56037 付近でも、土壌化した 8 層を一定掘り下げたところで土坑や石囲炉残欠など



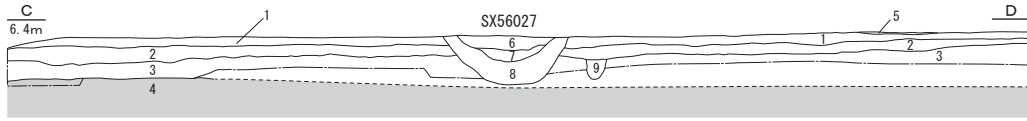
第 45 図 6 区上層遺構全体図 (1:200)



- | | |
|--|---|
| 1. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土<耕作土> | 30. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト (焼土・炭多含) <SK56007埋土> |
| 2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト<床土> | 31. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト~極細砂<SX56026埋土> |
| 3. 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト<旧耕作土> | 32. 2.5Y6/2 灰黄褐色シルト<SB56066柱堀方> |
| 4. 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト<旧耕作土> | 33. 2.5Y5/1 黄灰色シルト<SB56066柱痕跡> |
| 5. 5Y6/2 灰オリーブ色細砂<基盤層> | 34. 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質シルト (炭若干含) |
| 6. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト<基盤層> | 35. 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質シルト |
| 7. 10YR5/2 灰黄褐色シルト~砂質シルト
(縄文土器多含、焼土・炭含) | 36. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト (炭・焼土若干含) |
| 8. 2.5Y7/6 明黄褐色砂質シルト<上面で下層遺構検出> | 37. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト |
| 9. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト (縄文土器・炭含) | 38. 7.5YR5/3 にぶい褐色細砂<被熱または焼土塊> |
| 10. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト | |
| 11. 5Y6/4 オリーブ黄色細~粗砂 | |
| 12. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂 (黄褐色粘土塊含、縄文土器・炭若干含) | |
| 13. 2.5Y6/3 にぶい黄色細~粗砂 | |
| 14. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト | |
| 15. 10Y6/2 オリーブ灰色砂礫、砂質シルト、細~粗砂の互層 | |
| 16. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫 (10~20cmの礫多含) | |
| 17. 2.5Y7/1 灰白色粘土質シルト (上面に鉄分集積) | |
| 18. 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト<SD56033埋土> | |
| 19. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト (黄褐色シルト塊多含) <SD56033埋土> | |
| 20. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトと2.5Y6/2灰黄色粘土質シルトの互層<SD56033埋土> | |
| 21. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト<SX56026・SD56033埋土> | |
| 22. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト | |
| 23. 10YR5/1 褐灰色シルト (黄褐色シルト塊含) <SK56018埋土> | |
| 24. 10YR5/1 褐灰色シルト<SK56019・SB56035柱堀方埋土> | |
| 25. 10YR4/2 灰黄褐色シルト<SB56035柱痕跡埋土> | |
| 26. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂 (黄褐色シルト塊多含) <SE56004埋土> | |
| 27. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂 (黄褐色シルト塊含) | |
| 28. 10YR5/1 褐灰色極細砂<SD56005埋土> | |
| 29. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト | |

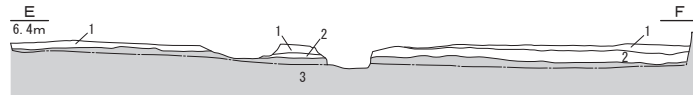
第46図 6区北壁土層断面図 (1:100)

調査区南壁 西部



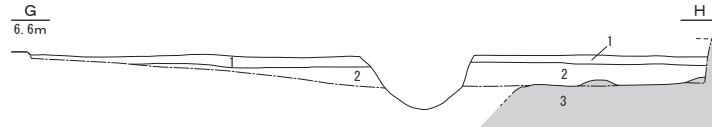
- | | |
|---|---|
| 1. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト | 6. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト (極粗砂多含) <SX56027埋土> |
| 2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (縄文土器多含、炭・焼土含) <下層包含層> | 7. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (黄褐色シルト塊含) <SX56027埋土> |
| 3. 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト (炭若干含、縄文土器含) | 8. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト <SX56027埋土> |
| 4. 10YR6/4 にぶい黄橙色極細砂 | 9. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト (炭若干含) |
| 5. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト <床土> | |

下層テ22ライン断面



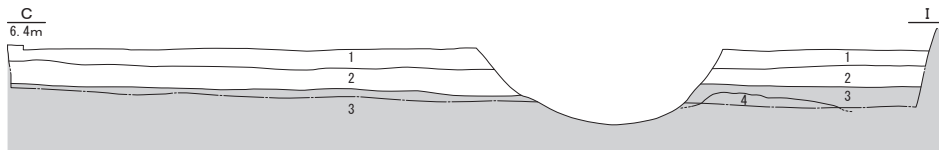
- | | |
|-----------------------------------|---------------------|
| 1. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト <上層検出面> | 3. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト |
| 2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (縄文土器多含、炭・焼土含) | |

下層テ18ライン断面



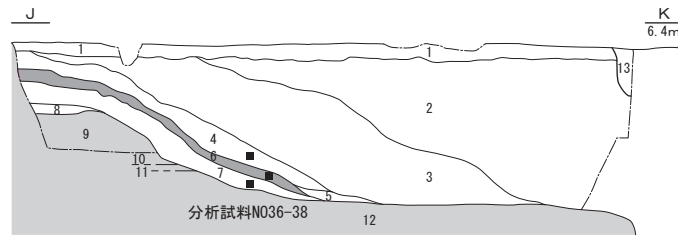
- | |
|---------------------------------------|
| 1. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト (縄文土器含) <上層遺構基盤層> |
| 2. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト (縄文土器含) |
| 3. 2.5Y5/3 黄褐色極粗砂 |

下層テ14ライン断面



- | | |
|------------------------------|-------------------|
| 1. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト (縄文土器含) | 3. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂 |
| 2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト (縄文土器含) | 4. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 |

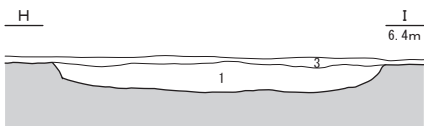
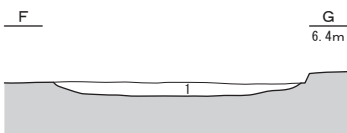
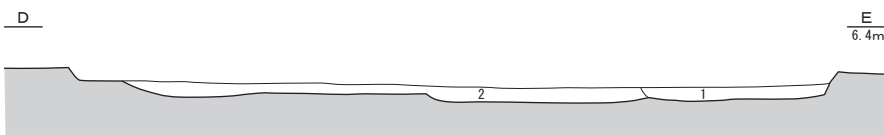
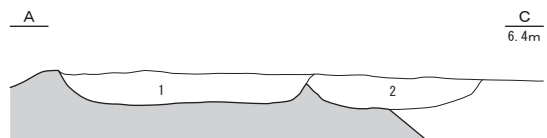
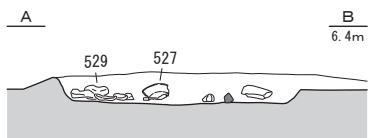
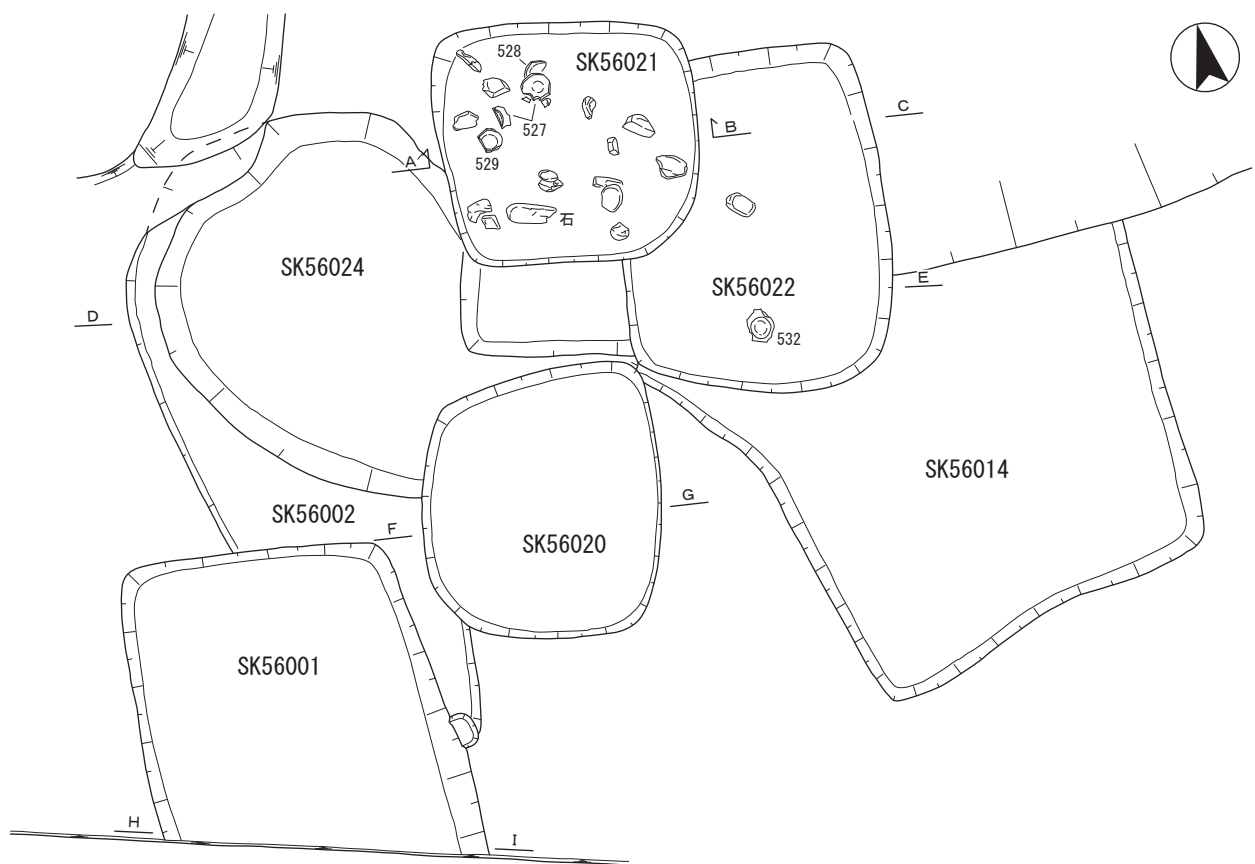
下層埋積浅谷断面



- | | |
|-----------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂 | 8. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト (縄文土器含) |
| 2. 5Y6/2 灰オリーブ色極細～細砂 (縄文土器若干含) | 9. 5Y6/3 オリーブ黄色極細砂 (縄文土器含) |
| 3. 2.5Y6/2 灰黄色細砂 (縄文土器若干含) | 10. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト |
| 4. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト (縄文土器含) | 11. 10Y6/2 オリーブ灰色細砂 |
| 5. 10BG6/1 青灰色粗砂 (縄文土器含) | 12. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂礫 (10～20cmの礫多含) |
| 6. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (縄文土器多含、炭・焼土含) | 13. SK56013埋土 |
| 7. 2.5Y7/6 明黄褐色シルト (縄文土器含) | |



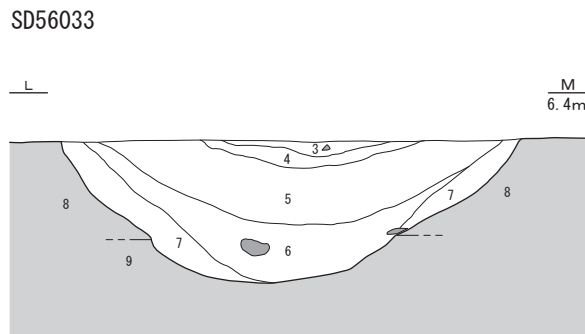
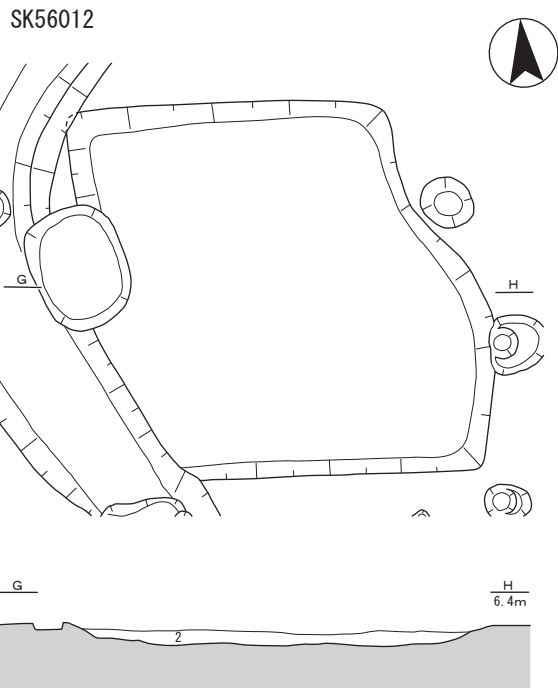
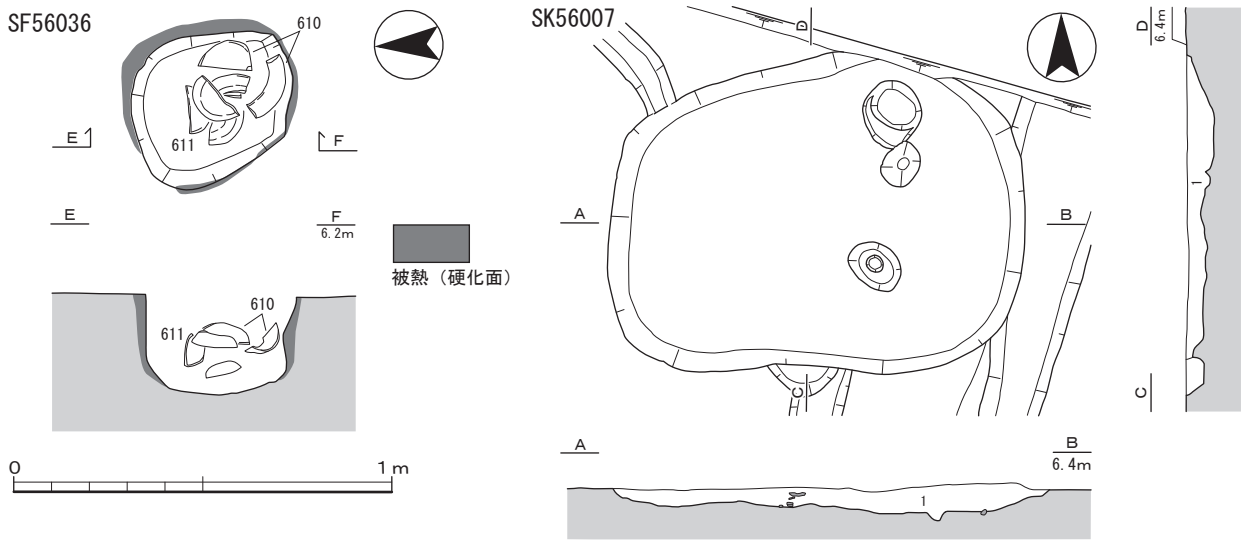
第 47 図 6区南壁・下層断割土層断面図・下層埋積浅谷断面図 (1:100)



- 1. 2. 5Y6/1 黄灰色砂質シルト
- 2. 2. 5Y6/2 灰黄色砂質シルト
- 3. 水田床土
- 4. 5YR4/1 褐灰色砂質シルト (マンガン多含)



第 48 図 SK 56001・56002・56020～56022・56024、SK 56021 遺物出土状況図 (1:40)

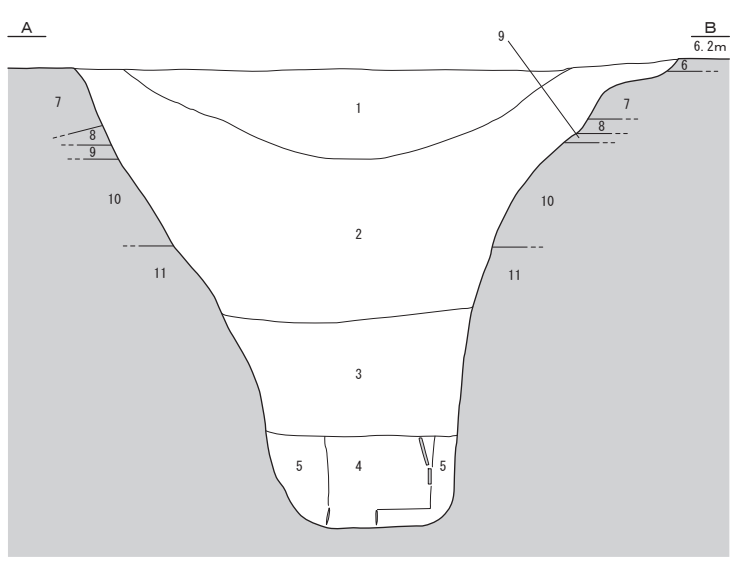
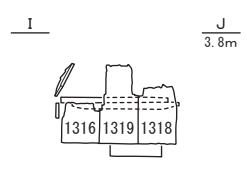
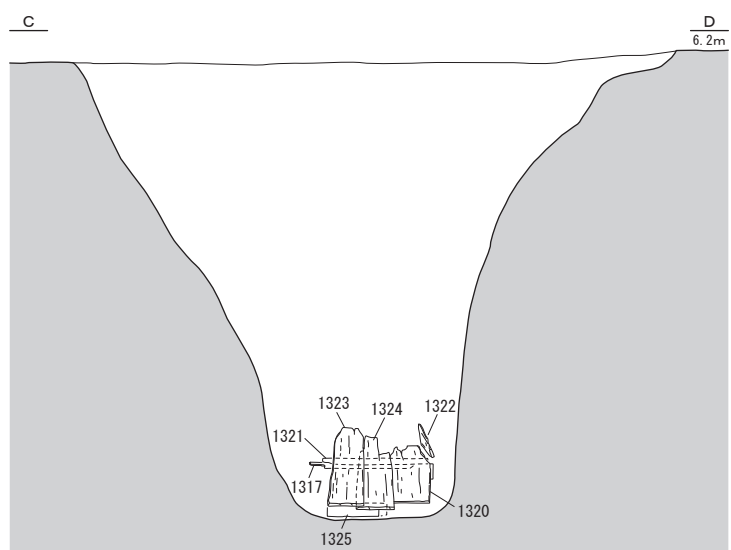
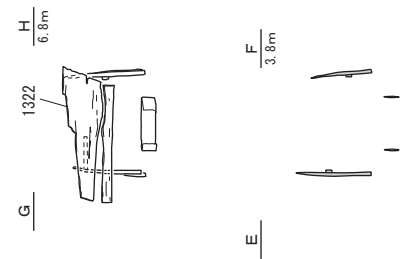
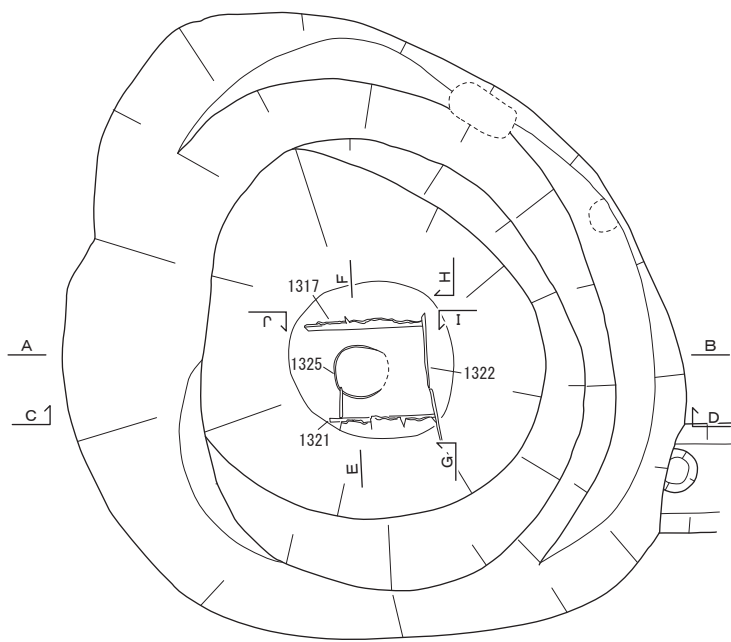


- 1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト (焼土・炭多含)
- 2. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト
- 3. 2.5Y6/2 灰黄色シルト (マンガン多含)
- 4. 2.5Y6/1 黄灰色シルト
- 5. 2.5Y6/2 灰黄色シルト (黄褐色シルト塊若干含)

- 6. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂と2.5Y6/2灰黄色シルトの互層
- 7. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (粗砂多含)
- 8. 5Y6/3 オリーブ黄色シルト～極細砂<基盤層>
- 9. 5Y5/2 灰オリーブ色中砂～粗砂



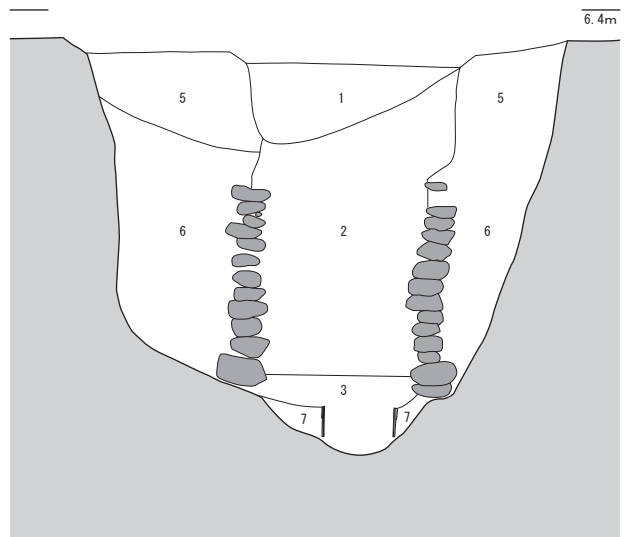
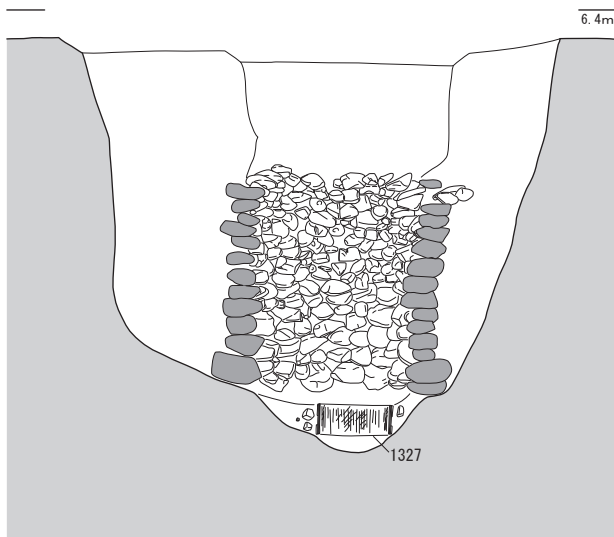
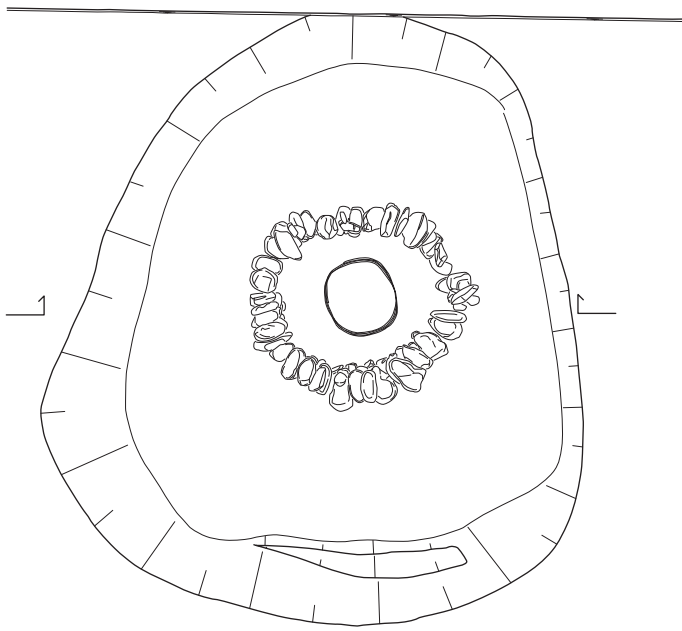
第 49 図 SK 56007・56012 (1:50)、SD 56033 断面図 (1:50)、SF 56036 遺物出土状況図 (1:20)



- 1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (20cmの礫若干含)
- 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (黄褐色シルト塊若干含)
- 3. 10BG5/1 青灰色粘土質シルト (締りが弱い)
- 4. 5B6/1 青灰色粘土質シルト
- 5. 5Y6/1 青灰色粘砂 (2~5cmの礫多含)
- 6. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト (マンガン多含) <検出面>
- 7. 2.5Y5/6 黄褐色砂質シルト<検出面>
- 8. 2.5Y5/3 黄褐色砂礫
- 9. 2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂
- 10. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂
- 11. 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂 (2~5cmの礫多含)

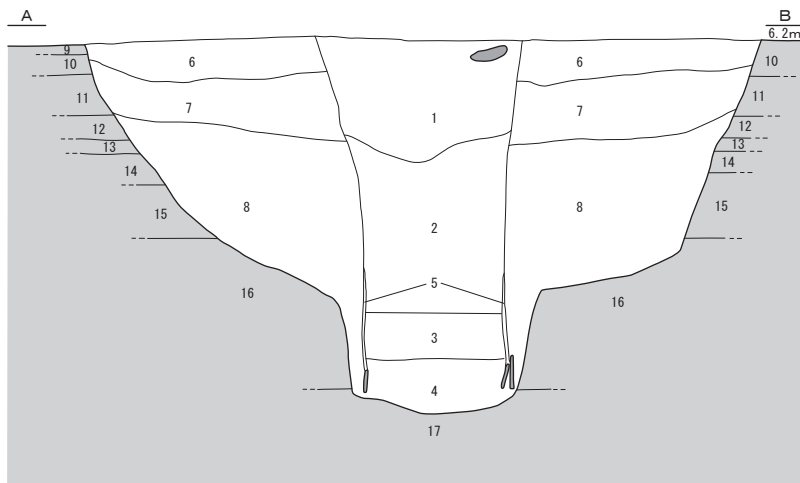
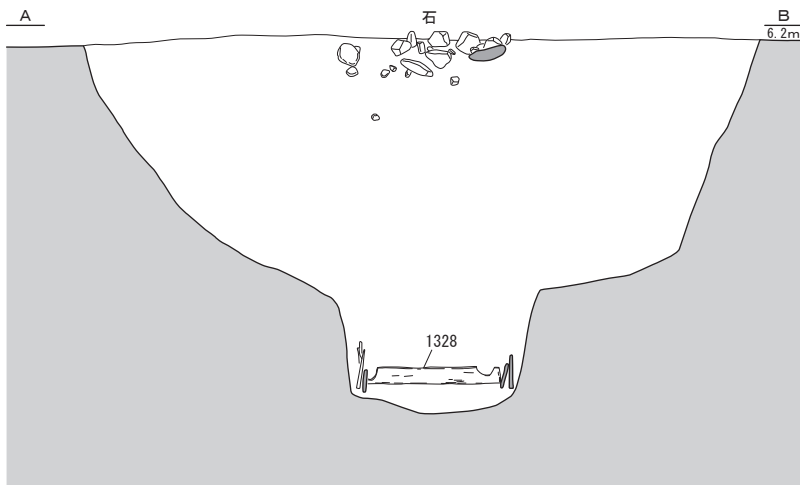
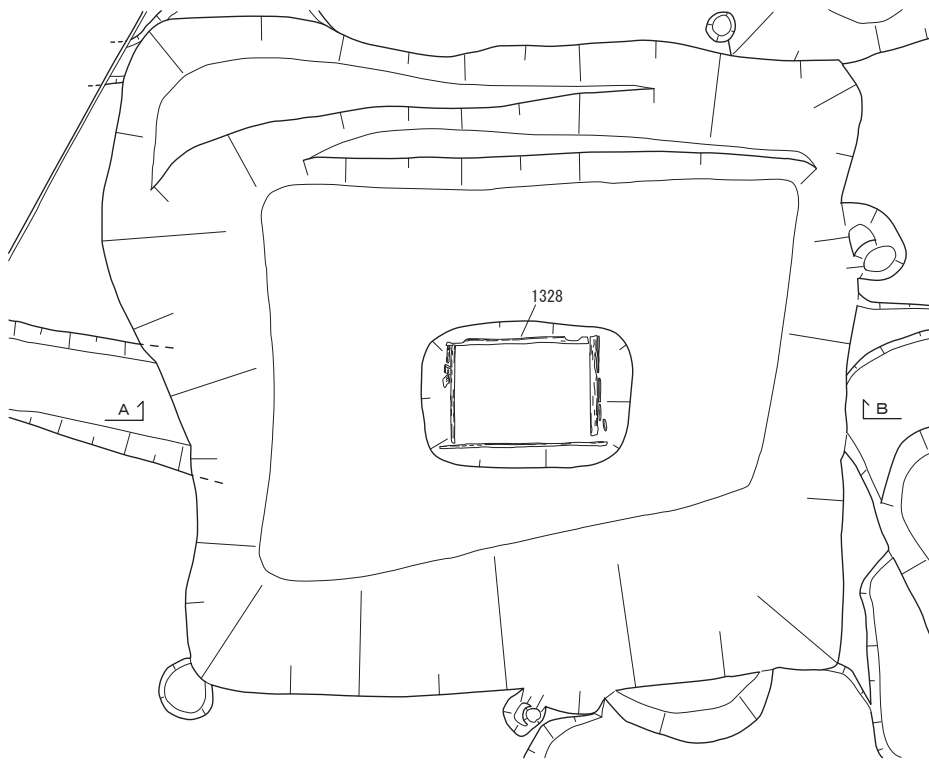


第 50 図 SE 56003 (1:50)

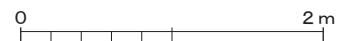


1. 5Y6/2 灰オリーブ色砂質シルト (5cmの礫若干含)
2. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト (黄褐色シルト塊含)
3. 5B5/1 青灰色粘土質シルト (転落石多含)
4. 5B5/1 青灰色粘砂
5. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト (黄褐色シルト塊含・1cmの礫多含)
6. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト (砂礫多含)
7. 5B5/1 青灰色砂質シルト (礫多含)

第 51 図 SE 56004 (1:50)

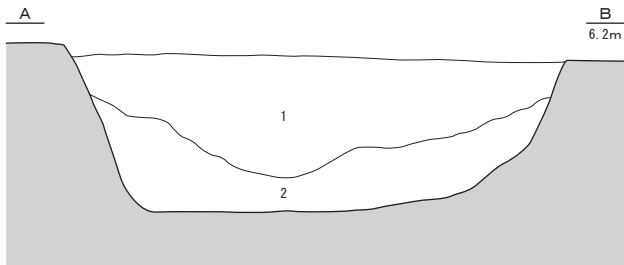
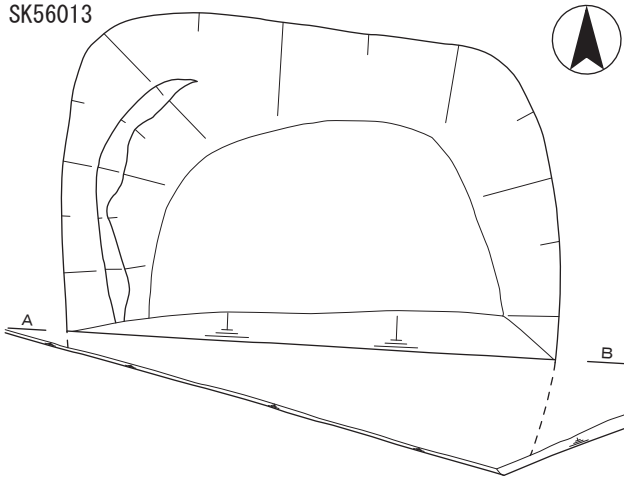


1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト
(上部に礫集中)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト
3. 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト
(浅黄色シルト・極細砂塊含)
4. 5B5/1 青灰色粘砂
〈井戸枠内埋土〉
5. 2.5Y5/1 黄灰色粘土
〈井戸枠腐食痕〉
6. 5Y6/1 灰色極細砂
(黄褐色シルト塊若干含)
7. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂
(黄褐色シルト塊若干含)
8. 2.5Y6/3 黄褐色シルト
(黄灰色極細砂塊含)
- 〈基盤層〉
9. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト
10. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
(縄文土器含)
11. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト
12. 2.5Y5/2 暗灰色極細砂
13. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト
(縄文土器含)
14. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂
15. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
16. 5Y5/2 灰オリーブ色粗砂
17. 2.5Y6/3 にぶい黄色礫〈湧水層〉

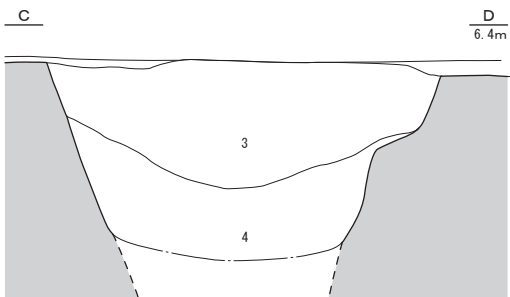
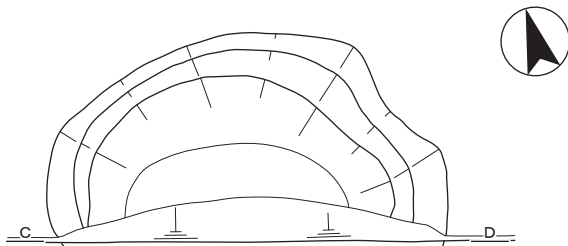


第 52 図 SE 56006 (1:50)

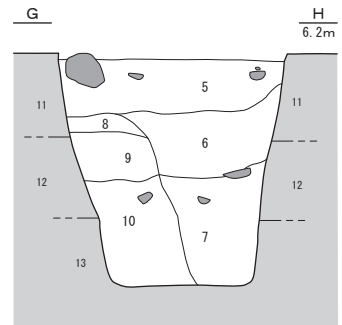
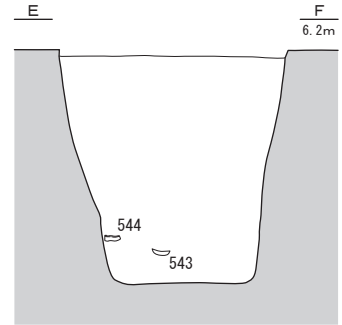
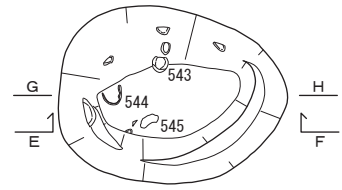
SK56013



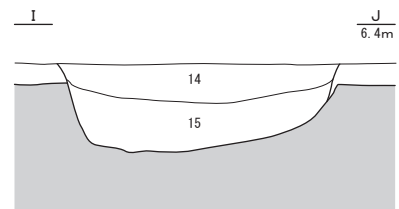
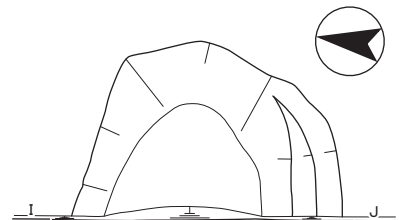
SK56028



SK56032



SK56031

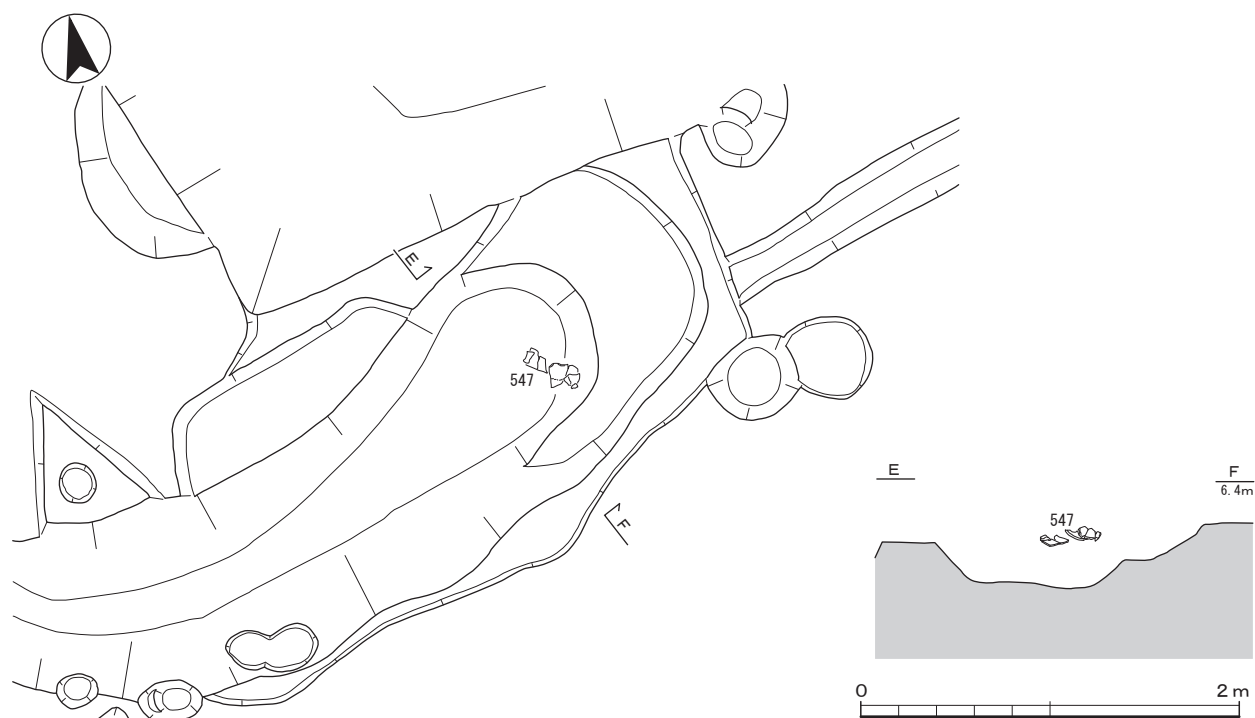
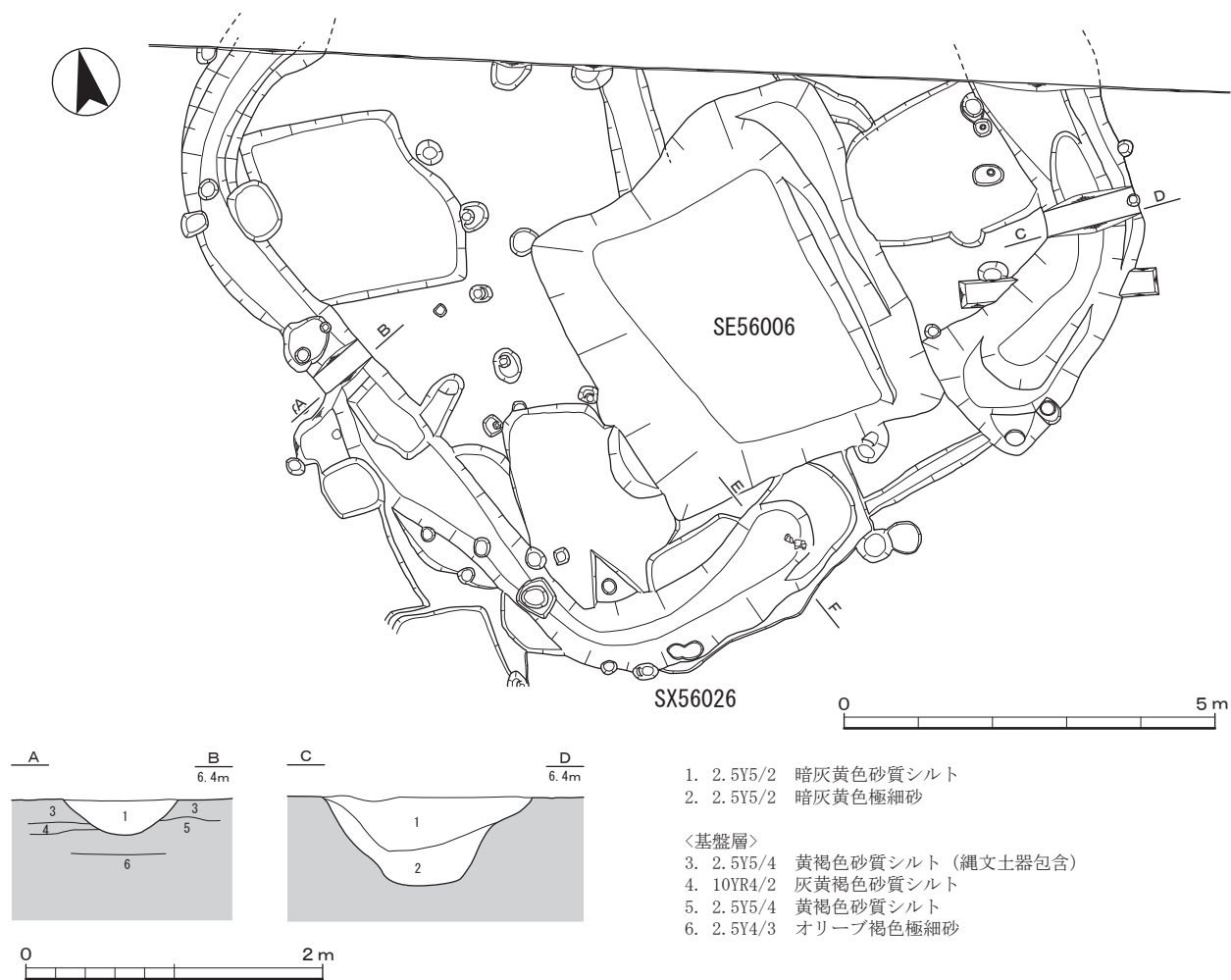


1. 7.5Y5/1 灰色砂質シルト (灰色シルト塊若干含)
2. 7.5Y4/1 灰色砂質シルト (砂含)
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (2cm以下の礫若干含)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (黄褐色シルト塊若干含)
5. 10YR5/2 灰黄褐色シルト
6. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (褐灰色シルト塊若干含)
7. 2.5Y6/1 黄灰色シルト (黄褐色シルト塊若干含)
8. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト (黄灰色シルトと互層)
9. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト (黄褐色シルトを層状に含む)
10. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト
11. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト<基盤層>

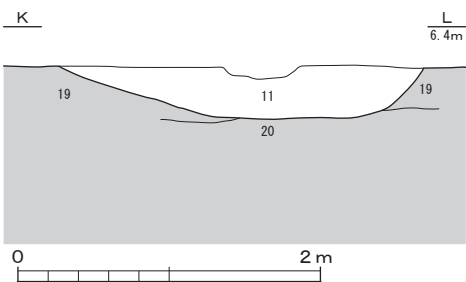
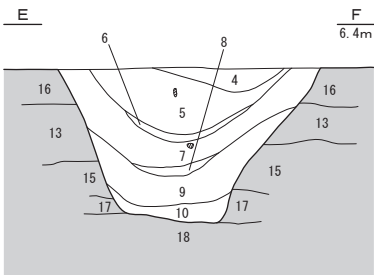
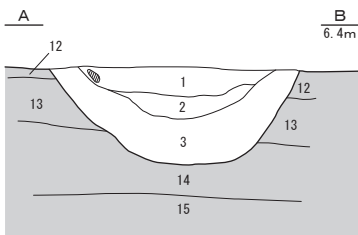
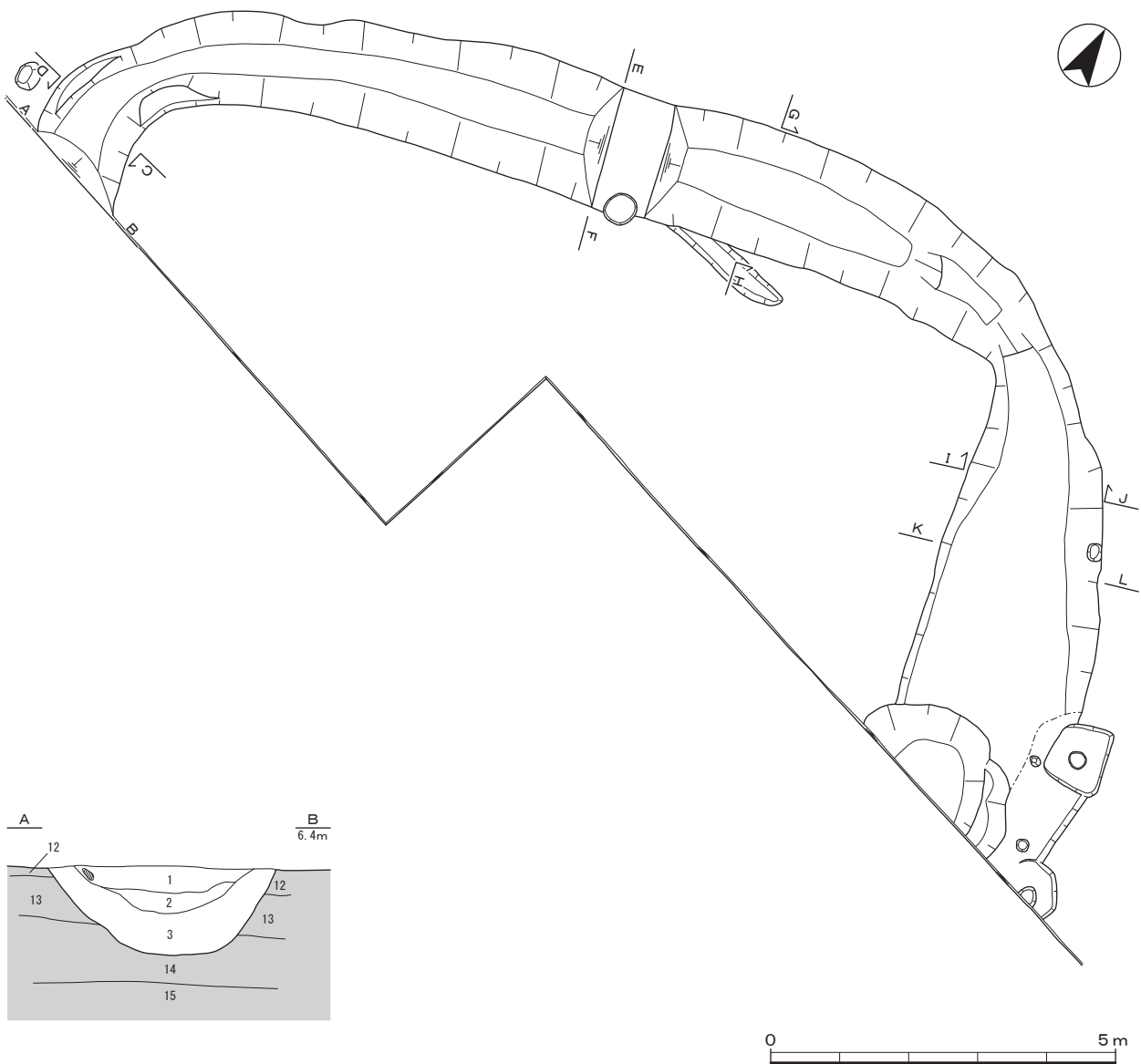
12. 5Y6/4 オリーブ黄色極細砂～砂質シルト
13. 5Y4/2 灰オリーブ色砂礫
14. 7.5Y5/1 灰色砂質シルト
15. 7.5Y4/1 灰色砂質シルト



第 53 図 SK 56013・56028・56031・56032 (1:50)



第54図 SX56026 平面図 (1:100)、断面図 (1:50)、遺物出土状況図 (1:40)

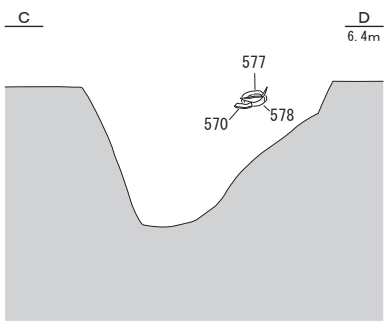
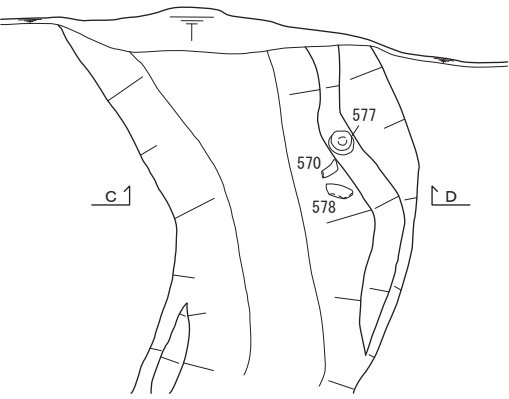
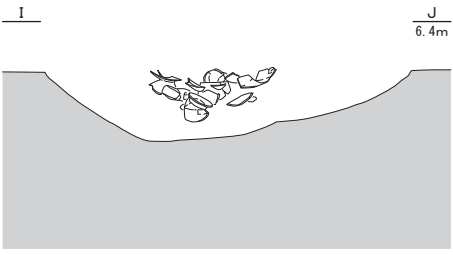
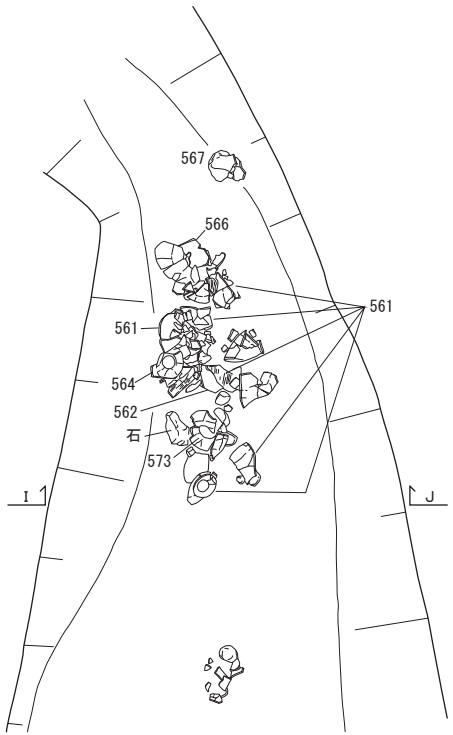
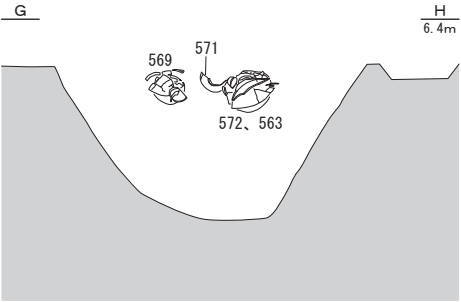
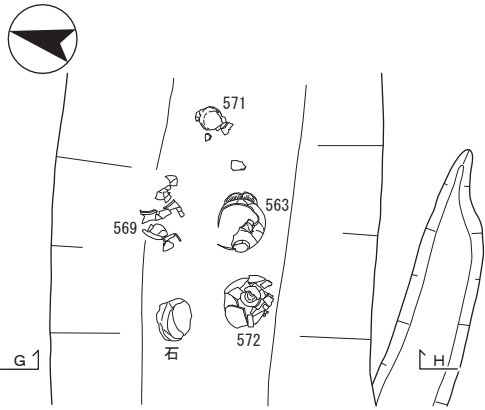


1. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト (極粗砂多含)
2. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (黄褐色シルト塊含)
3. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
4. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト (下面に灰色極細砂含)
5. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト
6. 2.5Y7/1 灰白色極細砂
7. 2.5Y5/2 灰黄褐色砂質シルト (黄褐色シルト塊若干含)
8. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂
9. 2.5Y6/2 灰黄色細砂 (黄褐色・灰白色シルト塊含)
10. 2.5Y6/1 黄灰色粗砂
11. 10YR4/2 灰黄褐色シルト

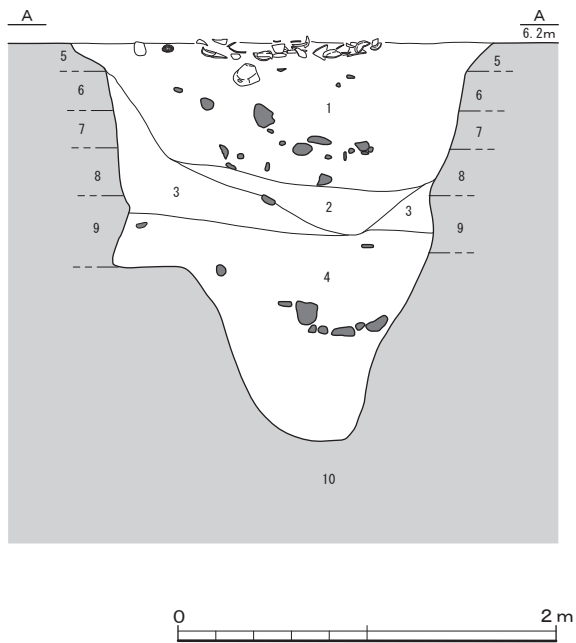
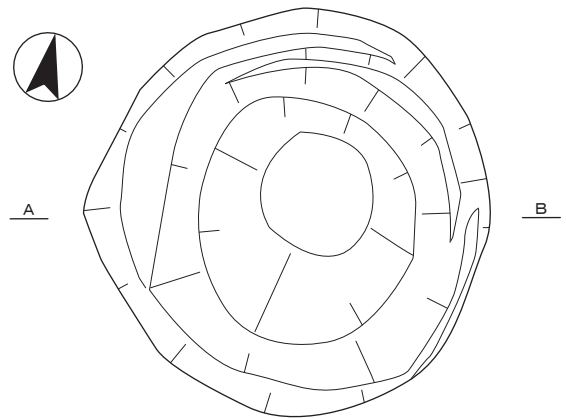
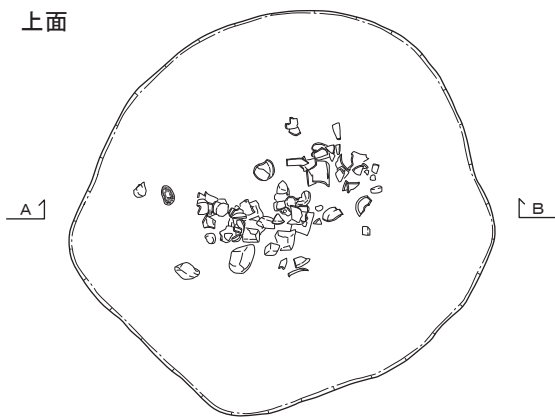
< 基盤層 >

12. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (縄文土器多含)
13. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
14. 5Y5/3 灰オリーブ色極細砂
15. 5Y5/1 灰色砂礫
16. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト (縄文土器多含)
17. 5Y5/2 灰オリーブ色中砂
18. 5Y5/1 灰色砂礫
19. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト
20. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫

第 55 図 S X 56027 平面図 (1:100)、断面図 (1:50)



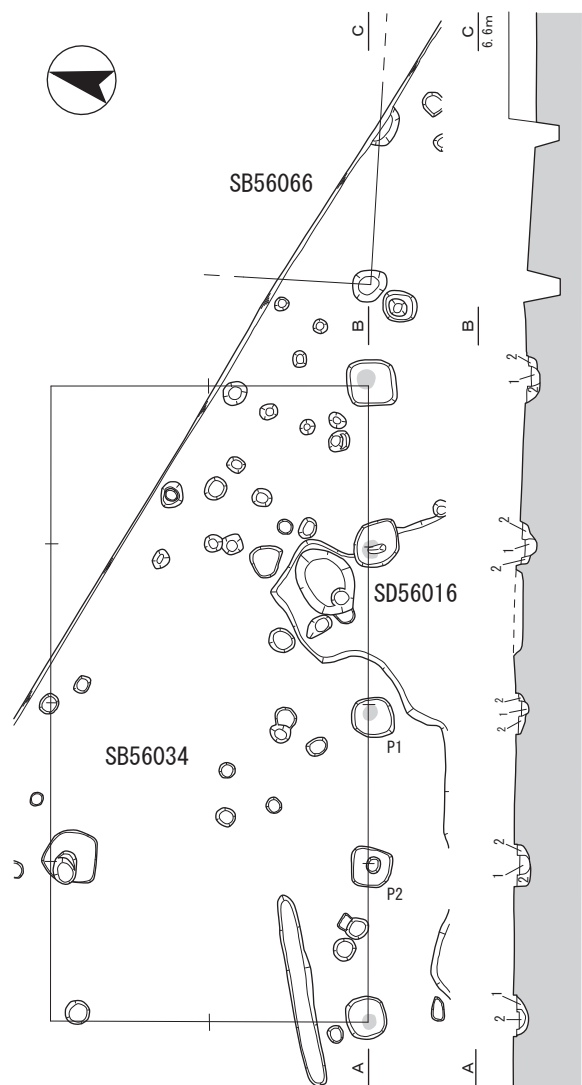
第 56 图 S X 56027 遺物出土狀況圖 (1:40)



1. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (5~10cmの礫多含)
2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト
3. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト (褐灰色シルト塊若干含)
4. 2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂と灰色粗砂の混成土

<基盤層>

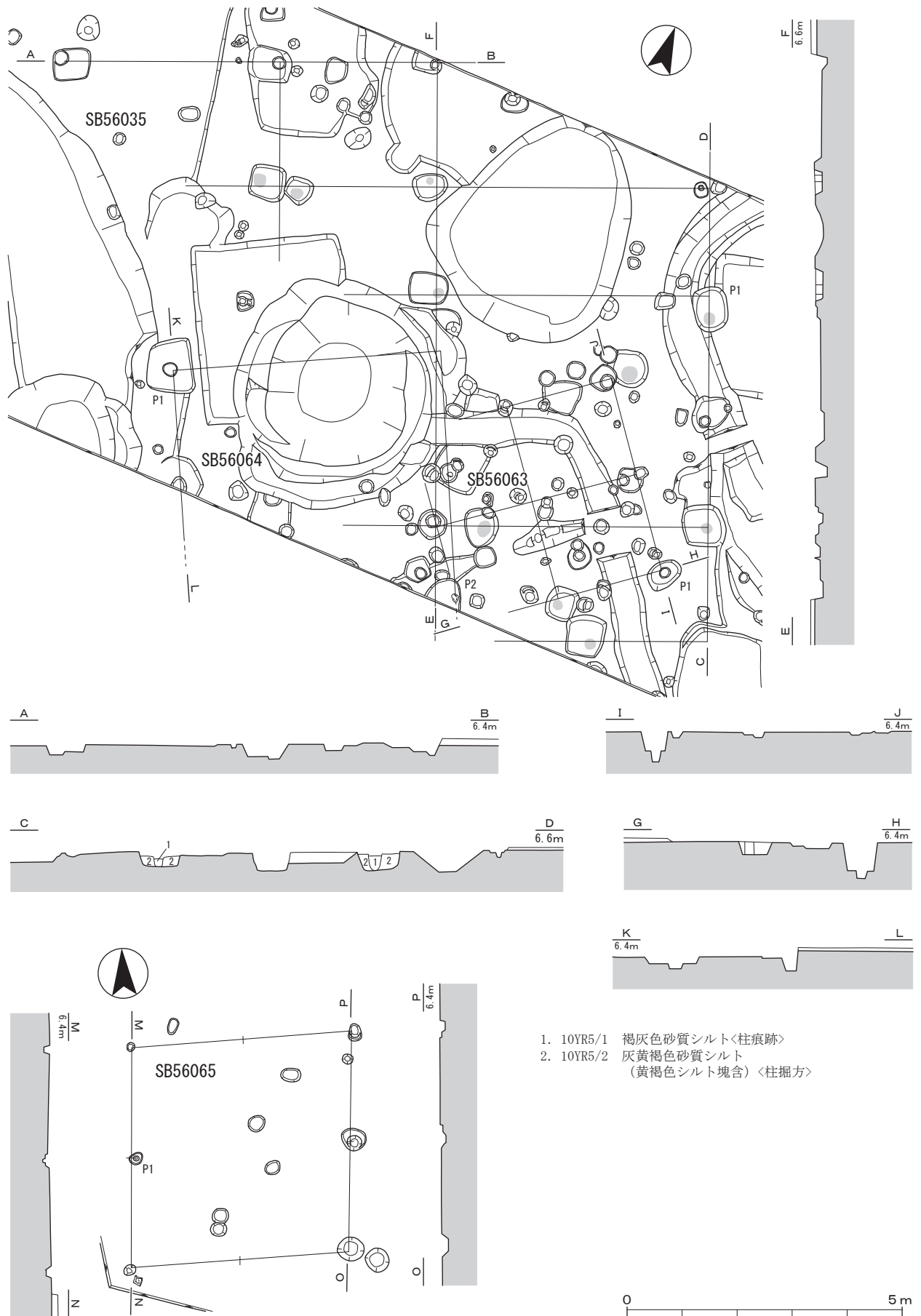
5. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト
6. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト (炭若干含) <縄文土器包含層>
7. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト
8. 2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂
9. 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂
10. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫



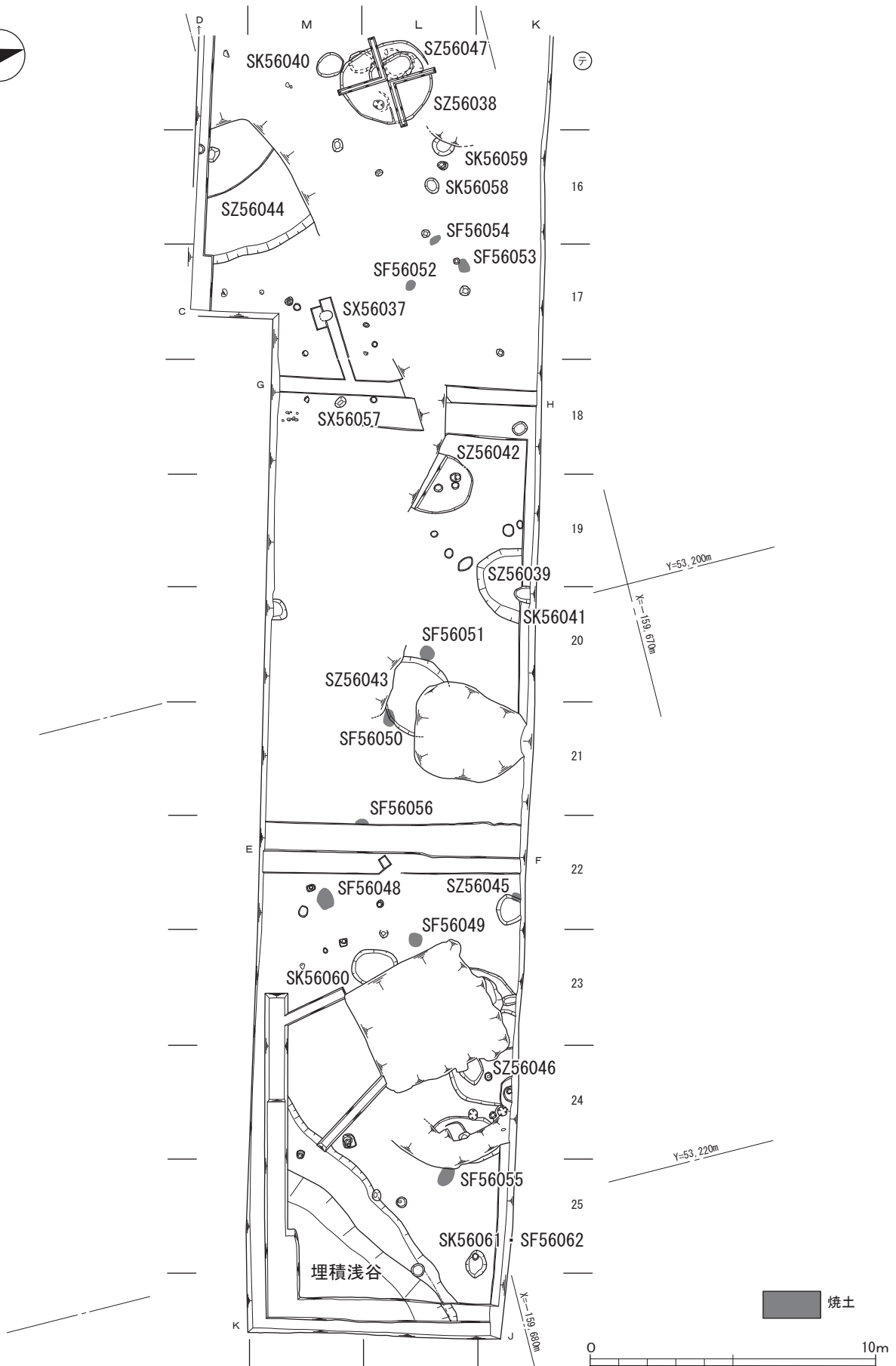
1. 2.5Y6/1 黄灰色粘土質シルト<柱痕跡>
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト<掘方埋土>

第 57 図 S E 56029 断面図・遺物出土状況図 (1:40)

第 58 図 S B 56034・56066 (1:100)



第59図 SB 56035・56063～56065 (1:100)



第 60 图 6区下層遺構全体图 (1:200)

の遺構を明確に識別することができた。

遺構は北壁13層上まで認められ、14層からは無遺物層となった。

層序と検出遺構・遺物の対応は第61図に示す。

S X 56037 (第62図、写真図版45) 上層遺構面で上端を検出した縄文時代中期末の埋設土器である。深鉢を逆位で埋設しているが、掘方は認識できず、土壌化により消失したと推測される(写真図版45では掘方相当の分層線を引くが、誤認である)。

遺構上面から約20cm下、基盤層(第62図1・2層)の境目付近で、胴部片が外側に倒れこんでいた。このことから、1層(北壁8層)の堆積時または土壌化の過程で土器の破損が生じたことがわかる。

S Z 56038・56047 (第63図、写真図版46・47) 6区西側、北壁8層上面で検出した、灰黄褐色シルト(北壁7層)の浅い落ち込みである。

長径3m、短径2.8mの不整楕円形を呈する。深さは約10cmで、中央部が若干深い。

北東寄りに土器が出土する地点があり、この付近をS Z 56047とした。当初、S Z 56047は竪穴住居の屋内土坑とみて掘り下げたが、基盤層の土質との有意差はなかった。

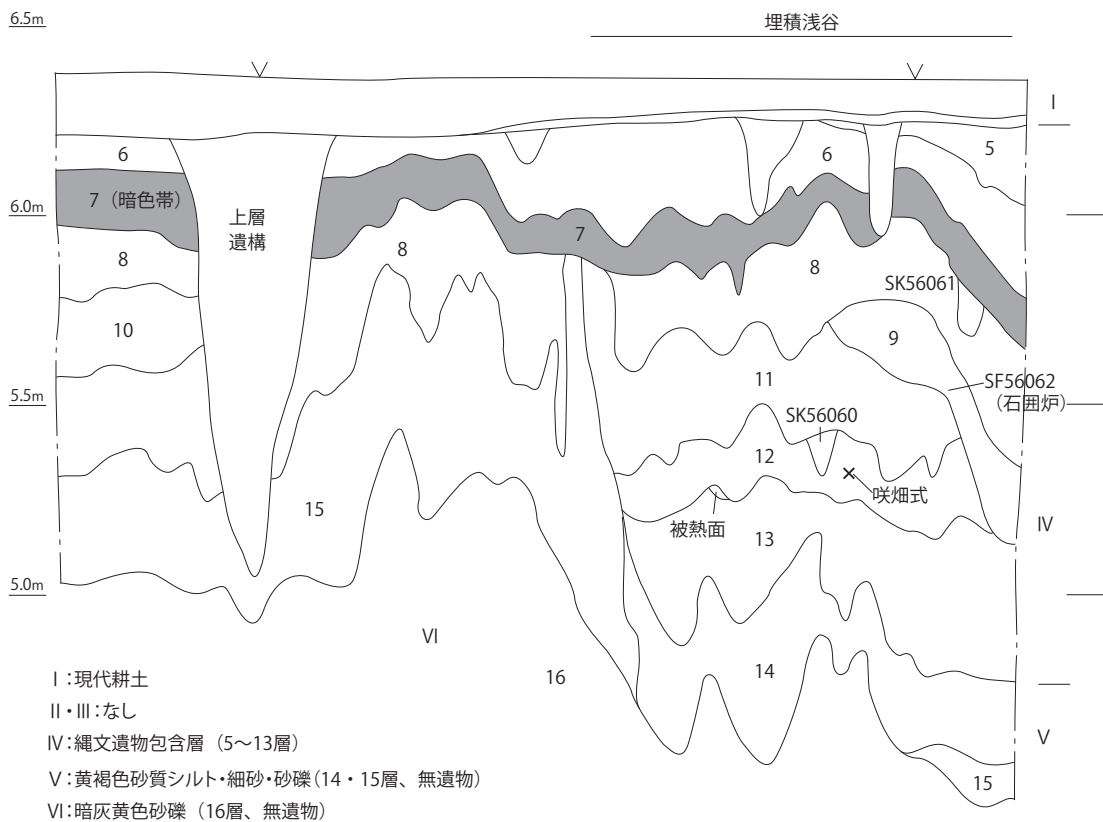
S Z 56047から縄文時代中期末の土器がまとめて出土したが、S Z 56038出土土器は後期の土器を含み、年代に齟齬がある。これらから、S Z 56047は、調査区北壁8層以下に包含された土器・礫を遺構と誤認したものと判断した。

S Z 56039 (写真図版47) 6区中央で検出した、灰黄褐色シルト(北壁7層)の浅い落ち込みである。直径3m前後の楕円形で、深さは10cm未満である。

S K 56040 6区西部、8層上面で検出した。直径90cm程度の不整円形を呈し、深さ10cm未満の浅いものであるが、S Z 56047と同様、誤認の可能性がある。

縁帯文成立期の土器が出土している。

S K 56041 S Z 56039の中央付近、8層上面で検出した直径50cm前後、深さ20cmの楕円形土坑である。



※SK56060炭化材=4175±25yrBP (2883-2671cal BC:2σ)

第61図 6区北壁土層断面模式図(高さ1:20、幅1:200)

埋土には焼土が混じる。縄文時代中期末の土器が出土した。

S Z 56042 ~ 56046 いずれも8層上面で検出した灰黄褐色シルト(北壁7層)の浅い落ち込みである。直径2.5m~4m、深さ約10cm程度のものが多い。落ち込み内や周辺に被熱面がみられるが、明確に関連施設と判断できるものはない。

S Z 56042 から縄文時代中期末、S Z 56046 から後期初頭~前葉の土器が出土したが、S Z 56046 付近は7層の重機掘削時にも特に土器・石器が多く得られた地点であり、本来はこの付近に多くの遺構が存在したと推測される。

S F 56048 ~ 56056 (第62図、写真図版47) 8層上面で検出した円形・楕円形の被熱面で、直径30~80cm、厚さ2~4cmである。

元は石囲炉などの火処であったとみられるが、遺構肩部プランが消失し、被熱面が残ったものである。より下層で検出した被熱面に比べると、被熱の痕跡が明確で、これは基盤となった8層が粘土質なためであろう。他に、北壁断面13層上でも被熱面を確認しており、縄文時代中期中葉の遺構とみられる。

S X 56057 (第62図) 6区中央、8層掘り下げ時に検出した正立状態の深鉢底部である。

約3m西側に埋設土器S X 56037があり、埋設土器の可能性が高い。高さ10cm程度が残存していた(土器1527)。

S K 56058 (第63図、写真図版45) 6区西、8層掘り下げ時に検出した直径50cm、深さ20cmの円形土坑である。

中央に長径20cmのやや扁平な礫が集中しており、石囲炉の残欠や礫の廃棄土坑であろう。

S K 56059 (第62図、写真図版45) 6区西、8層掘り下げ時に検出した直径70cm、深さ20cmの円形土坑で、中央部が播鉢状に深い。埋土に炭や礫を含む。

S K 56060 (第63図、写真図版47) 6区東、北壁12層上面で検出した長径1.6m、短径1.3mの楕円形土坑である。深さは5cmと浅い。

上層遺構S E 56006に東側を削平されており、この掘方で遺構を認識していた。埋土に炭を多く含むことから、炭化材をC14年代測定に供し、縄文時代中期中葉相当の年代値が得られている(V章)。

埋土から咲畑式の土器片が出土した。

S K 56061 (第63図、写真図版45) 埋積浅谷の掘り下げ時に確認した土坑である。

直径70~90cm、深さ10cmの不整円形で、南側がより深く、その付近に縄文時代後期初頭から前葉の土器片が集中していた。埋土には炭や焼土を含む。

S F 56062 (第63図、写真図版47) S F 56062は埋積浅谷の重機による掘り下げ時に検出した石囲炉で、長径70cm、短径60cm、深さ7cmを測る。

検出時に多くの石が外れてしまったが、本来は扁平な礫を8個立てていたようである。底部の被熱痕は弱い、これは基盤が砂のためであろう。

埋積浅谷 (第47図、写真図版43・44) 6区東側は全体(北壁5~13層)が東側へ落ち込んでいく谷地形であり、これを総称して埋積浅谷と呼称する。

上層遺構面で最上層の細砂(北壁5層)を検出しており、当初は旧流路と考えていたが、下層確認時に南北方向の断ち割りを実施したところ、旧地表面の土壌(北壁7層・第47図6層)が深く南東へ落ち込んでいくことから、谷であると判断した。

埋積浅谷は調査区南東側へさらに深く続いていくが、調査区内で水場や有機質遺物を確認することはできなかった。

北壁13~6層までは厚さ20cm前後の堆積が間断なく続くが、その後は厚さ約2mの細砂で一気に埋積している(第47図1~3層)。この細砂はわずかに縄文土器(1552)を含むが、詳細な時期は不明である。谷が完全に埋没後、弥生時代終末期の方形周溝墓S X 56026が形成される。

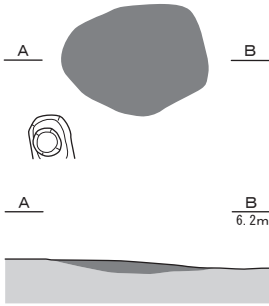
以上から、縄文時代後期前葉~弥生時代終末期の間に、上部の埋積が急激に進むような洪水イベントが生じたとみられる。

発掘調査前に実施した範囲確認調査では、6区と2区の間は弥生時代~中世の遺構が希薄と判断されたが、この埋積浅谷の細砂による埋積が、上層遺構の分布に影響を与えた可能性があろう。

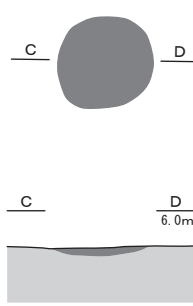
ピット (写真図版45) 6区西側、S X 56037付近では、8層上面ないし8層掘り下げ時に縄文時代のピットを複数検出することができた。

縄文時代中期末から後期前葉の土器や石器が出土している。

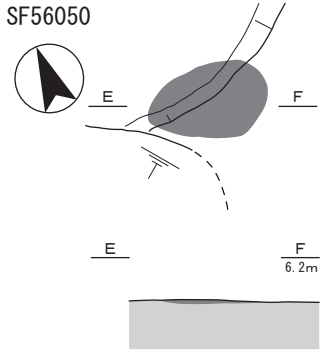
SF56048



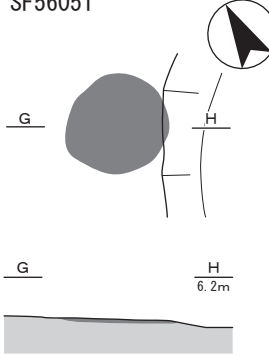
SF56049



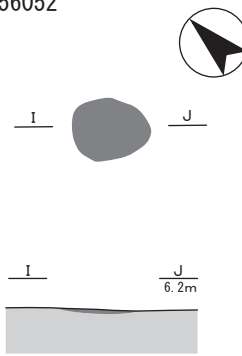
SF56050



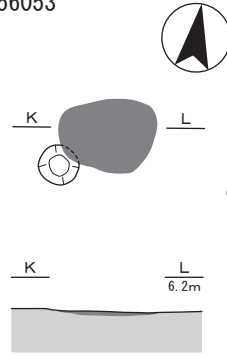
SF56051



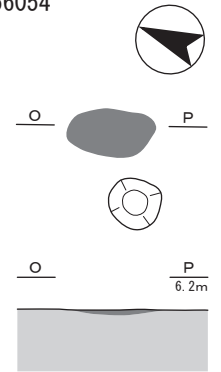
SF56052



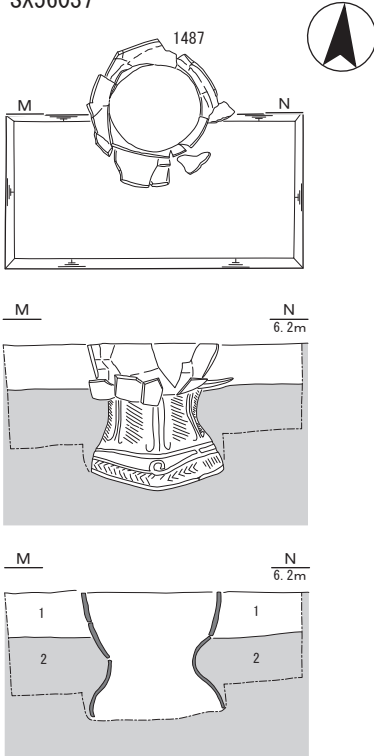
SF56053



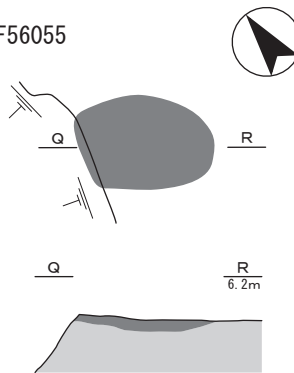
SF56054



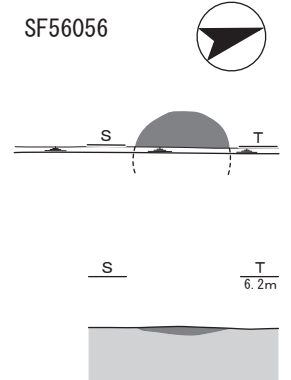
SX56037



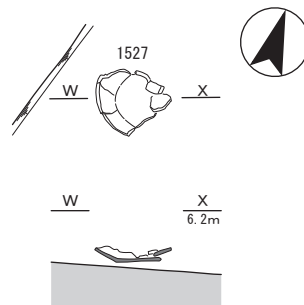
SF56055



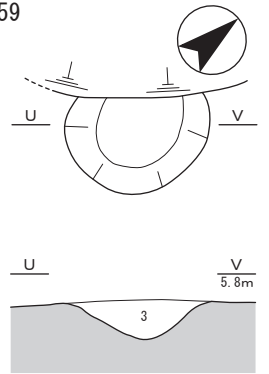
SF56056



SX56057



SK56059

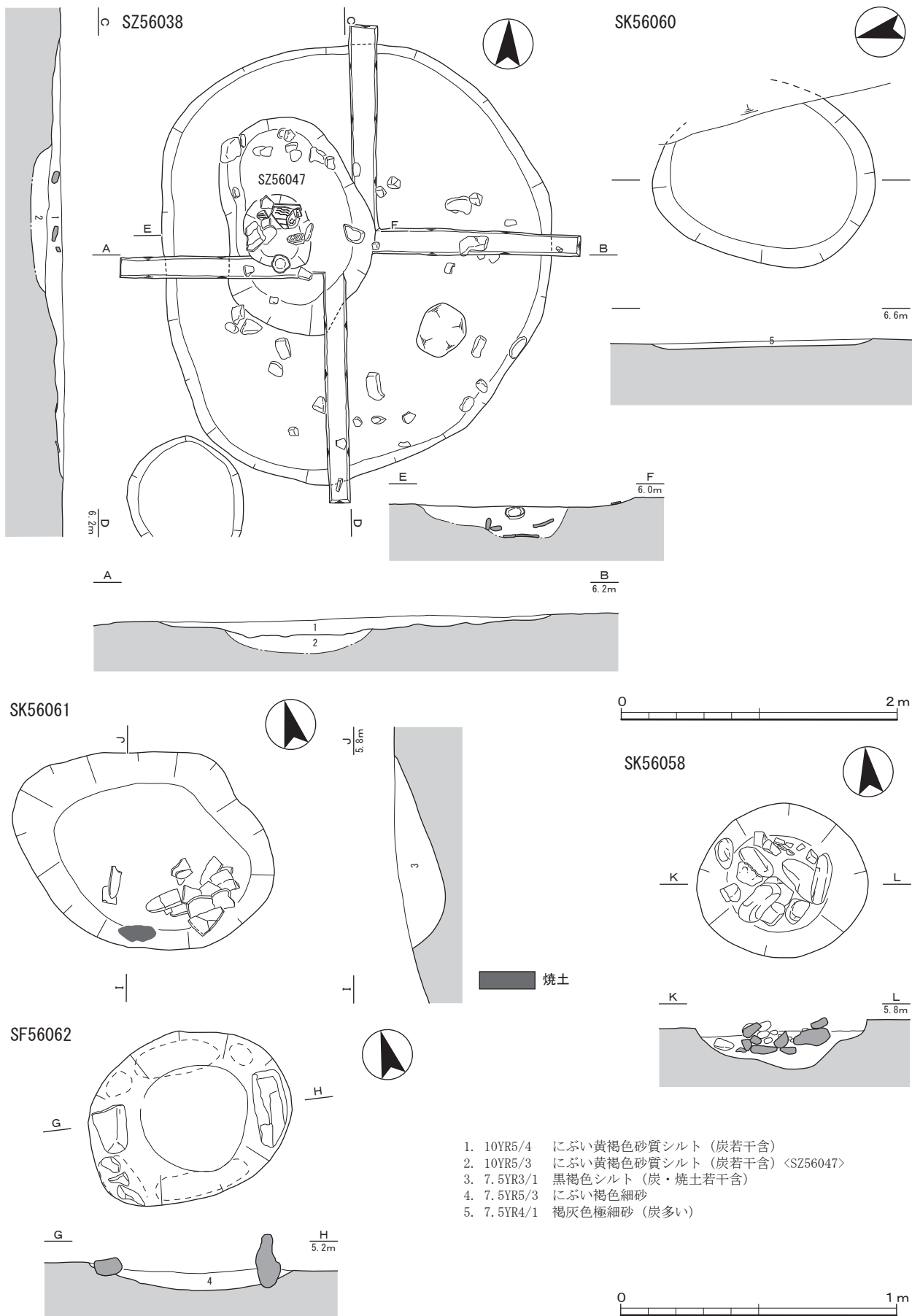


- 1. 2. 5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト<縄文土器包含層>
- 2. 2. 5Y5/4 黄褐色砂質シルト
- 3. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (炭若干含)

■ 焼土 (被熱面)



第 62 図 S X 56037、S X 56057、S F 56048 ~ 56056、S K 56059 (1:40)



第 63 図 S Z 56038・56047・S K 56060 (1:40)、S K 56061・S F 56062・S K 56058 (1:20)

9. 7区 (第64～81図)

(1) 概要

遺跡中央部、和屋集落の北にある東西方向の調査区である。東側を7-1区、西側を7-2区、西端を7-3区とした(第64～69図)。7-2区南側は6次5区、7-3区は1次2区と接する。

7-1区(第64～67図)は、現耕土・床土直下(地表下20cm)で遺構を検出した。基盤層は、東側が黄色系砂質シルトで若干縄文土器を含む。中央～西側は有機物を多く含む褐灰色砂質シルトである。東側は平安時代の遺構が希薄で、室町時代～戦国期の遺構が散見される。

中央付近は平安時代の掘立柱建物群(SB 57041等)が展開する。二面庇の大型建物SB 57041を含むこの建物群は、SD 57017などの細い溝群で画された東西約50mの地割内にあり、地割の軸は正方位に近い。SD 57030等の区画溝群から西は、再び遺構が希薄となる。なお、建物のピットや木棺墓の残存状況から、一帯は50～60cm程度は削平されている可能性が高く、遺構の分布を考える際には注意が必要である。遺構の時期的な変遷は、VI章で詳述することにした(第162図)。

7-1区西側は弥生時代終末期から古墳時代の自然流路(SR 57077)が錯綜しており、この自然流路埋没後にSD 57050、57038など平安～鎌倉時代の遺構が形成されている。SR 57077は複数の流路が重複しており、全体で幅24m以上ある。

7-2区(第68図)も現耕土・床土直下で遺構面に達するが、西半のみ、基本層序III層の灰黄褐色シルトが介在している。SD 57051とSD 57058間には多数の溝がみられ、SD 57053は底面に波板状凹凸面をもつ道路遺構と考えられる。SD 57053の東側(7-2区と7-1区の境界)は現在も同方向の里道があり、ほぼ同位置に道路が踏襲され続けたとみられる。

7-2区中央は、大型建物SB 57071を中心とした平安時代の掘立柱建物群が展開する。

7-3区は全体が溝ないし流路に相当する。

下層確認は7-1区西・中央・東で計4ヶ所、7-2区で1ヶ所行った(第70～72図)。縄文土器は各サブトレンチの上位1mのシルト中にみられ、その前後

は土壌化が進み生痕も多くみられた。しかし、上層遺構掘削中、下層確認中に遺物集中などは確認されなかったため、7-2区で一部を面的に広げ、遺構検出を試みる程度に留めた。基本層序VI層の砂礫層は、6区に近い東側は浅く、西側は深い位置にある。

(2) 遺構

SD 57001 (第73図、写真図版56) 7-1区東を南北に走る溝で、概ね条里地割に即している。幅は1.2m、深さ75～90cmを測る。埋土は4層に分かれ、最上層は砂質シルト、他は粘土質シルトで埋没する。下層から中世IV期の土師器などが出土した。

SD 57002 7-1区東端で検出した深さ30cmの浅い溝で、SD 57015より後出の遺構である。主軸はSD 57001と同じく条里の南北方向をとる。

中世の山茶碗や常滑産陶器などが出土した。

SD 57005 7-1区東部で検出した南北方向の溝で、幅は50～60cm、深さ30cm前後である。中世III期の土師器鍋等が出土しており、4m東側を並走する同時期のSD 57009とともに耕作に関わる溝であろう。

SE 57006 (第74図) 7-1区東端付近で検出した、直径約3mの円形井戸である。深さ約2mまで掘削したが、調査区端のため完掘はできなかった。深さ1.2m以下で埋土は還元色となり、湧水がみられる。井戸枠は確認できない。

中世の山茶碗等が出土した。

SD 57007 7-1区東部で検出した南北方向の溝で、幅40cm、深さ5cmである。SD 57009と重複するが、それより後出の溝である。中世IV期の土師器が出土している。

SD 57008 7-1区東で検出した幅60cm～1m、深さ10cm前後の不定形な溝である。調査区南端付近を蛇行しており、SD 57004も関連する溝と考えられる。

中世IV期の土師器が出土した。

SD 57009 7-1区東を南北に走る溝で、若干西へ湾曲する。底面は掘削時の農具痕が顕著である。中世III期の土師器が出土した。

SD 57010・57016 7-1区東で検出した幅40cm、深さ10cmの断続的な溝である。平安時代の土師器が出土している。

SK 57012 (第74図、写真図版56) 7-1区で検出した土坑で、平面形は一辺約2.7mの方形である。深さ

は約1.8mの井戸状であるが、調査時点では湧水はなかった。井戸枠を据えた痕跡は確認できない。素掘りの水溜めであろう。埋土上層は2種類の土の混成土で、人為的に埋め戻されている。下層は砂・シルトが互層となる。中世後期の土師器などが出土した。

S D 57015 (第73図、写真図版56) 7-1区南東隅で検出した東西方向の溝で、6区S D 56033の延長にあたる。幅約3m、深さ1.2mで、断面形はV字形に近くなる。上面には平安時代以降のものと思われるピットがみられた。遺物は土師器小片のほか、下層の縄文土器が混入していた。

S D 57017・57018・57020・57021・57023 (第73図、写真図版56) 7-1区中央で検出した小溝群で、これより西側に掘立柱建物群が展開することから、区画溝と考えられる。幅は40～50cm、深さ10～20cm未満で、やや蛇行しながら南から北へ流れる。特にS D 57018は大きく蛇行する。遺構の切り合いから、S D 57020・57021・57023からS D 57017・57018へと変遷することがわかっている。埋土はシルトであるが、S D 57020は砂が主体である。

S D 57017から平安時代中期の土師器や墨書土器、灰釉・緑釉陶器などが出土しており、S B 57041～57043と遺物相が共通することから、S D 57017が特に上記建物と関係が深いようである。

S X 57022 (第79図、写真図版54・55) 7-1区中央で検出した平安時代末の木棺墓である。掘方は長辺2.4m、短辺1mのややいびつな長方形である。深さは15～20cmで、上部は大きく削平されたと思われる。埋土上層には木棺腐食後の流入土がみられ、上面から約15cm掘り下げたところで木棺痕跡を確認した。

木棺痕跡は掘方の中央で検出し、長さ180cm、幅60cm、深さ7～10cmを測る。土層断面では、側板・小口の腐食痕が明確で、平面形が整った長方形であることから箱型木棺を想定するが、底板の腐食痕は確認できない。また、側板と小口の結合方法も不明で、板を固定した釘も出土していない。持ち運ぶ棺ではなく、側板・小口板を据えただけの可能性もあろう。また、木棺痕跡検出時、上面に複数の棒状の腐食痕が見られた。棺上部の掛木や、棒と筵などを組み合わせて棺の蓋をした等が考えられる。

棺内、棺外から供献土器が出土している。棺内は

中央やや北寄りにロクロ土師器小皿(640)を伏せている。また南東には土師器、ロクロ土師器の皿が5枚埋置されている。皿は棺の南東隅に重ねられ、下位の3枚(639・642・644)は正位、その上に逆位の2枚(641・643)を載せる。皿周囲の埋土は若干黒みがかっており、有機質の容器や遺物を伴っていたと推測される。

棺外は掘方南東隅に土師器小皿を3枚置く。まず逆位の皿(645)を置き、その上に逆位(648)、正位(646)の皿を載せる。これらは掘方底に接しており、棺を埋める前に埋置されたものである。

土師器はいずれも中世I b期に位置づけられ、本遺構は12世紀前半の木棺墓と考えられる。付近では、S B 57047・57048などが同時期の建物である。

S K 57024 7-1区中央、S B 57075と重複する不定形な落ち込みである。長さ3m、幅1.3m、深さ10cm足らずの浅いもので、埋土はシルトである。山茶碗や土師器鍋など中世の遺物が出土している。

S D 57025 7-1区中央で検出した条里南北方向の溝である。幅2.4m、深さ60cmで、東側が段状に浅くなる。平安末～室町時代の山茶碗や土師器皿等が出土しており、現代の水田畦畔と完全に重複する。現代の耕地割が中世に遡る可能性を示す遺構である。

S K 57026(写真図版56) 7-1区東で検出した長径1.4m、短径1mの長楕円形土坑である。S D 57009に先行する遺構である。深さ20cmで、中央が1段下がる。埋土は砂質シルトの単層である。中世III期の土師器が出土している。

S D 57028 7-1区で検出した条里南北方向の溝である。幅20cm、深さ5cm未満で、平安～鎌倉時代のピットを切る。室町時代の陶器小片が出土している。

S D 57029 7-1区西で検出した条里南北方向の溝で、約3m西に同じく条里方向のS D 57037がある。第6次調査のS D 65010に繋がる。幅1.3m、深さは40cmで、断面形は逆台形である。埋土は3層に分かれるが(第70図)、最下層は砂層で流水があったようである。完形の土師器皿など、中世II～III期の遺物が出土している。

S D 57030 7-1区西部で検出した幅50cm、深さは25cmの溝で、第6次調査のS D 65012に繋がる。幅1.3m、深さ20cm程度の浅い溝が重複する。また、西側

には幅約 50cm の別の溝がある (第 70 図)。遺物は希薄であるが、S B 57041 等の建物群の西側を画する溝群と推測される。

S K 57031 (第 74 図、写真図版 56) 7-1 区西で検出した、一辺約 2.5 m、深さ約 20 cm の浅い方形の土坑で、底面はほぼ平らである。

埋土上層から完形の土師器椀、甕、灰釉陶器など平安時代後期の遺物が出土している。

S D 57032 (第 74 図、写真図版 56) 7-1 区西部で検出した、幅約 60 cm、深さ 30 ~ 40 cm の溝である。S D 57033 と直交する東西の溝で、西側が途切れている。上層で遺物が集中的に出土した地点があり、土師器皿や鍋、山茶碗等の破片など中世 II 期の遺物が集中していた。

S D 57033 7-1 区西部で検出した南北方向の溝である。第 6 次調査の S D 65011 に繋がる。幅は約 60 cm、検出面からの深さは 20 cm 程度である。

S K 57036 7-1 区西で検出した長径 1.8 m、短径 1.4 m の楕円形土坑である。深さは 20 cm で、埋土は砂質土である。平安時代末の土師器が出土した。

S D 57037 7-1 区西で検出した条里南北方向の溝で、6 次調査の S D 65029 に繋がる。幅は 1 ~ 1.8 m、深さ 60 cm である。埋土は砂質シルトで (第 70 図)、S D 57029 と同時期の溝と推測される。

S D 57038 7-1 区西端で検出した幅 1.4 ~ 1.8 m、深さ 80 cm の南北方向の溝である。

約 3 m 東側に S D 57050 が並走する。第 6 次調査の S D 65026 に繋がり、断面形は V 字形で、埋土はシルトと砂の互層である (第 70 図)。

古代の土師器片が出土した。

S K 57039 7-1 区で検出した直径 2.2 m の円形土坑である。西側が S D 57025 に切られ、深さ 10 cm 程度と浅い。底面で S B 57045 のピットを検出しており、S B 57045 より後出の遺構と考えられる。

S B 57041 (第 75 図、写真図版 48 ~ 52) 7-1 区中央の区画で検出した大型の掘立柱建物である。S B 57042・57043 と重複しており、S B 57041 が先行する。付近の建物群の中で、もっとも古い建物であり、かつ朝見遺跡の平安時代建物で最大のものである。

主軸は N8° E の東西棟で、桁行 3 間、梁行 2 間の身舎の西・南側に 1 間分の庇が付く二面庇の建物で

ある。南面にはさらに小ピットの柱列があり、南庇との間隔が 1.2 ~ 1.5 m と狭いことから、縁束と考えられる。あるいは庇の添柱、孫庇の可能性もあろう。

身舎のピット (P1 ~ 10) は一辺約 1 m の方形で、三重県内の平安時代の建物では、斎宮や国庁の建物に比肩する規模である。特に隅柱のピットが大きい。深さは約 20 cm で、一帯は約 50 ~ 60 cm ほど削平されている可能性が高い。このためか、屋内の床束柱は確認できない。全てのピットで直径約 25 cm の柱痕跡を検出しているが、柱痕跡から拳大の石や土器が出土するものが散見され、5 区 S B 55005 と同じく、掘方を大きく壊さず柱を抜き取ったものが含まれよう。その場合、ピット上部の削平により柱抜き取り痕が不明になったと推測される。柱間寸法は柱芯心間で 2.4 m (8 尺) 等間である。

南側庇のピット (P15 ~ 18) は身舎と同等の大きさで、柱間は身舎と等間である。西側庇 (P11 ~ 14) は一辺 60 ~ 80 cm とやや小さい不整形で、身舎から柱間 2.7 m (9 尺) である。

縁束のピット (P19 ~ 23) は、一辺 50 cm 前後の不整形で、身舎や庇より小さい。柱間は南側庇から 1.2 m (4 尺) である。庇・縁束を含めた建物規模は桁行 10.5 m、梁行 9.0 m、専有面積は約 94 m² となる。身舎・庇・縁束ピットのいずれも、同位置で建て替えた痕跡は認められず、短期間で廃絶した建物とみられる。

P6・7・16・23 などの掘方・柱痕跡から、平安時代中期 (10 世紀前半) の土師器や灰釉陶器、志摩式製塩土器、土錘、刀子が出土している。造営と廃絶に大きな時期差はない。P16 掘方では、外面に「保平カ」と墨書のある土師器杯 (714) を正位で埋置していた。

S B 57042 (第 76 図、写真図版 48 ~ 50・53) 7-1 区中央で検出した桁行 4 間、梁行 2 間の側柱建物である。内部に床束などは確認できない。柱間寸法は柱芯心間で 2.4 m (8 尺) 等間である。主軸は N17° E の東西棟で、方位が揃う S B 57043 と同時に存在した建物であろう。また、北・南・東側の S A 57046・57048・57059・57060 は、S B 57042・57043 に伴う柵や塀などと考えられる。

ピットは一辺 60 ~ 70 cm の方形で、大きさや平面形はやや不揃いである。深さは約 30 cm であるが、妻

側柱 P6・12 は 10～20 cm と浅い。この点は 5 区 S B 55005 と共通している。柱痕跡は直径約 20 cm で、柱当たりが掘方底面より若干沈下しているものが多い。柱痕跡から比較的大きな土器の破片が出土したものがあり、柱を抜き取ったものが含まれよう。また、同位置での建て替えの痕跡は認められず、比較的短期間で廃絶したとみられる。

ピット掘方・柱痕跡から、平安中期の土師器、灰釉陶器、緑釉陶器等が出土している。

S B 57043 (第 75 図、写真図版 48～50) 7-1 区中央で検出した桁行 3 間、梁行 2 間の側柱建物である。主軸は N17° E の南北棟、S B 57041 より後出で、S B 57042 に付属する建物の可能性が高い。

柱間寸法は柱芯間間で 2.1 m (7 尺) 等間である。南側柱はピットが重複し、部分的に改修されたとみられる。ピットは一辺 50 cm 前後の方形または円形で、平面形は不揃いである。深さは約 20 cm で、直径 20 cm の柱痕跡が認められる。

掘方・柱痕跡から平安中期の土師器杯が出土した。

S B 57044 (第 76 図) 7-1 区中央で検出した桁行 3 間、梁行 2 間の小規模な側柱建物で、S B 57041～57043 廃絶後に展開する建物のひとつである。

主軸は N7° E の東西棟で、削平のためか検出できないピットも多い。ピットは直径 30 cm 前後の円形で、深さ 20 cm を測る。柱間寸法は 2.1 m (7 尺) 等間である。小穴が重複するものが多く、柱抜き取り痕とみられる。平安時代後期 (11 世紀) の土師器などが出土している。

S B 57045 (第 77 図) 7-1 区中央で検出した桁行 3 間、梁行 2 間の側柱建物で、西側に庇が取り付く可能性がある。主軸は N3° E の東西棟で、柱間寸法は 1.8 m (6 尺) 等間である。ピットは直径 30～40 cm の円形、深さは約 20 cm を測る。柱痕跡は直径約 15 cm の円形である。南側に重複する S B 57044 と同規模であり、建て替えかもしれない。

平安時代後期の土師器、黒色土器、灰釉陶器などが出土している。

S A 57046・57059・57060・57068 (第 76 図) 7-1 区中央で検出した柱列で、S B 57042 の三方をコの字形に囲む取り囲む柵または目隠し塀と考えられる。S A 57046 は東西 4 間の柱列で、柱間寸法は 2.1 m (7

尺) で東端は 2.4 m と広い。平安中期の土師器が出土した。ピット掘方は一辺 40 cm の隅丸方形で、深さ約 15～20 cm である。

S A 57059 は東西 5 間、重複する S A 57060 は東西 4 間で、切り合いから S A 57059 が先行する。ピット掘方は一辺 40 cm の隅丸方形で、柱痕跡は直径約 15 cm であった。柱間寸法は 2.1 m (7 尺) で、S A 57060 西端のみ 2.4 m (8 尺) である。

S A 57068 は S B 57042 東側の柱列である。3 間分を検出し、ピット掘方は一辺 25～40 cm の方形・不整形円形である。柱間寸法は 2.1 m (7 尺) である。

いずれの遺構からも平安中期の土師器 (墨書土器含む)、灰釉陶器、土錘などが出土している。

S B 57047 (第 77 図) 7-1 区で検出した 3 間×2 間の側柱建物である。主軸は N15° E の東西棟で、条里地割に沿うが、中世の溝 S D 57025 に切られる。ピットは直径 25～30 cm の円形で、深さは 10 cm 程度である。柱間寸法は 2.1 m (7 尺) 等間である。

北東隅の P1 から、平安時代末の山茶碗が出土している。

S B 57048 (第 78 図) 7-1 区中央で検出した 3 間×2 間の側柱建物である。主軸は N10° E の東西棟で、S B 57076 と重複し、S B 57049 とは軒が接するため、それぞれ別時期の建物と考えられる。ピット掘方は直径 25 cm の円形で、深さ 20 cm 程度である。柱痕跡は直径約 15 cm の円形、柱間寸法は 2.4 m 等間で、中世 I 期の土師器が出土している。

S B 57049 (第 78 図) 7-1 区中央で一部を検出した梁行 3 間の側柱建物で、主軸は N12° E の東西棟である。ピット掘方は、一辺約 40 cm の隅丸方形で、深さ 40～50 cm を測るが、妻柱は極端に浅い。柱痕跡は直径 15 cm 程度の円形である。柱間寸法は 1.8 m (6 尺) であった。平安時代中～後期の土師器が出土している。

S D 57050 (写真図版 56) 7-1 区西端で検出した幅 1.2 m、深さ 50 cm の南北方向の溝で、断面形は逆台形である (第 70 図)。埋土はシルトで、古代の土師器・須恵器が出土した。S R 57077 埋没後の遺構である。

S D 57051・57052・57055 S D 57051 は 7-2 区東で検出した幅 2.1 m、深さ 50 cm の溝である。6 次調査の S D 65001 に続く。埋土はシルトで、山茶碗や中世 IV 期の土師器などが出土している。

S D 57052はS D 57051の西側に並ぶ小規模な溝で、S D 57051 とほぼ同時期の遺構である。この他にも、S D 57055 など、同方向に走る中世の溝が認められる(第70図)。

S D 57053 (第81図、写真図版59・60) 7-2区で検出した南北方向の溝であるが、6次調査の結果と合わせ、最終的に道路遺構と判断している。当初は一般的な溝として調査を進めたため、欠落した情報が多いが、その反省をもとに6次調査(S Z 65004)でより詳細な土層や遺物出土状況の検討を行っているので、最終的な所見はそちらを参照されたい。

S D 57053は幅1.2m、深さは40cmの溝状で、肩は緩やかに立ち上がる。西側にS D 57058・57062、東側にS D 57069が同方向に走る。底面は幅60cm、深さ25cmの小溝状であるが、この埋没後(南壁8層上面)に小土坑が列状に連続して形成され、埋土の様相から、いわゆる波板状凹凸面であると考えられる。

波板状凹凸面は直径40～80cmの不整円形で、深さは5cm前後とごく浅い。凹凸面は2時期のものが重複しており、同時期の凹凸面は約60～90cm間隔で配置されているようである。凹凸面の埋土は砂質シルトで、小礫や土師器・陶器・瓦の小片を中央に敷くものが多い。また、複数の凹凸面から馬歯が1点ないし複数点出土しており、上下顎の歯が混在するものもみられた。中世における馬に関する祭祀の例として重要である。遺物は平安時代後期～末のものが混在している。

路面とみられるのは南壁7層の粗砂層で、幅約1.2mにわたり硬く締まっている。本次調査時点では、S D 57069の埋没後に7層が形成されたとしていたが(第81図)、6次調査で再検討した結果、S D 57069は道路側溝として機能したと判断している。

上層は細砂で埋没しており、山茶碗がまとまって出土した。上層の堆積前にS D 57058・57062が機能・埋没している。

波板状凹凸面の遺物から、S D 57053は11～12世紀にかけて機能した道路と推測され、13世紀に埋没したとみられる。S D 57053の東側(7-2区と7-1区の境界)は現在も同方向の里道があり、中世以降、ほぼ同じ位置に道路が踏襲され続けたと考えられる。

S D 57064 (写真図版61) 7-2区で検出した条里南

北方向の溝である。幅2m、深さ50cmで断面形は逆台形である。埋土上層はシルト、下層は極細砂で埋没する(第72図)。山茶碗など中世I期の遺物が出土しており、当地付近でも平安時代末以降、条里方向の溝が展開していく。

なお、混入遺物であるものの、縄文時代の大型有茎鏃(1710)が出土した点は特筆される。

S D 57056・57057・57061 7-2区東で検出した条里南北方向の小溝群で、詳細な時期は不明だが、S D 57053・57055等の道路遺構や溝とは方向を違え、それらに先行する。埋土は粗砂やシルトである(第72図)。

S D 57058 (第81図、写真図版59) 7-2区東で検出した幅1.5m、深さ60cmの南北方向の溝である。S D 57062、S D 57053に先行する遺構で、埋土はシルトと礫混じり細砂の互層で、断面形は逆台形である。平安時代後期の土師器などが出土しており、S B 57071を中心とする建物群の東側区画溝と考えられる。

S D 57062 (第81図) 7-2区東で検出した南北方向の溝で、S D 57053の西に接する。6次調査S D 65007に繋がる。上面の幅80cm、深さ80cmで、断面形はV字形である。埋土は極細砂で、中世の山茶碗などが出土している。S D 57053と同時期の遺構である。

S D 57065 7-2区西で検出した南北方向の溝である。幅50～60cm、深さは10～20cm程度で、中世以降の耕作に伴う溝であろう。

S A 57066・57067 (第77図) 7-1区で検出した2～3間分の柱列である。建物と重複する位置にあり、柵としては不自然な位置にあるため、削平により掘立柱建物の柱列が欠失したものと推測されるが、建物を復原するまでに至らない。

S D 57069 (第81図) 7-2区東、S D 57053の底面で確認した溝で、S D 57053の道路側溝とみられる。隣接する第6次調査区のS D 65005に繋がる。幅30～50cm、検出面からの深さは30cm前後である。埋土はシルトで、中世の山茶碗などが出土した。

S B 57071 (第80図、写真図版57・58・61) 7-2区中央で検出した大型の掘立柱建物である。

6次調査5区も含め周辺は建物が錯綜する上、7-2区西側は中世以降の耕作で全体が削平されているため、建物の平面形は推定によるところが大きい。S B 57042とほぼ同規模の桁行4間、梁行2間の側柱建

物とみられる。西側柱を中世の溝 S D 57054・57064、東側柱を中世の小溝に切られる。

主軸は N7° E の東西棟で、やや正方位に近く、S B 57042・57043 と一致している。ピットの切り合いから、7-2 区付近の建物群では最も先行する、中核的な建物であろう。同位置で建て替えた痕跡はみられず、短期間で廃絶したと考えられる。

ピット掘方は一辺 70 cm から 1 m の方形で、側柱は隅と中央がやや大きく、その間は一回り小さい。直径 25 cm ほどの柱痕跡を検出しているが、上部が削平されているため、抜き取り跡との識別が困難なものも多く、見かけ上は柱筋の通りが悪い。柱間寸法はややブレがあるが、概ね 2.1 m (7 尺) である。S B 55005・57042 等と同じく、妻柱は極端に浅く、西側は削平により消失している。

南側柱に対応するピットが南側に散見され、南面に庇ないし縁が存在した可能性があるが確実でない。また、東面にも側柱に対応するピットが 2 基あり、調査区北側を一部拡張して精査したが、北東隅相当のピットはなかった。建物内西側には、間仕切り状のピットが 2 つあるが、遺物の時期は側柱と異なる。

南東隅の P7 から土師器皿 (811) や上半を欠いた灰釉陶器瓶 (818) が出土しており、柱を抜き取った後に地鎮のため埋納したものであろう。土師器皿は拳大の礫とともに横向きに立てられていた。瓶は横倒しで、口縁を意図的に打ち欠き仮器化したものであろう。この他に掘方・柱痕跡から平安時代前～中期の土師器や黒色土器、灰釉陶器などが出土している。

S D 57072 (第 69 図、写真図版 62) 7-3 区で検出した大溝ないし自然流路である。調査区が狭いため全体の形状は不明であるが、幅は 4 m 以上、検出面からの深さは 2 m を測る。2 次調査 S D 1 と一連の遺構であろう。肩の立ち上がりは緩やかで、底面は凹凸が激しい。埋土はシルト系であるが、礫や粗砂を含む。平安時代後期～末の土器・陶器が出土した。

S B 57074 (第 80 図) 7-2 区で北半を検出した掘立柱建物である。6 次調査の結果と合わせ、桁行 5 間、梁行 3 間、主軸は N3° E の東西棟と考えた。ピット掘方は直径 30 cm 前後の円形で、柱間寸法は不等間で広く、相対する柱穴も不揃いである。

平安時代後期～末の土師器片が出土している。

S B 57075 (第 77 図) 7-1 区中央で検出した。北半が調査区外のため全体は不明であるが、桁行 2 間以上、梁行 2 間の南北棟と考えられる。柱掘方は直径 30 cm 前後の円形で、柱間寸法は 1.2 m と狭い。

平安時代中期の土師器が出土しているが、平安時代末の S B 57047 と軸方向が一致しており、同時期の建物の可能性がある。

S B 57076 (第 78 図) 7-1 区中央で検出した桁行 2 間以上、梁行 2 間の総柱建物である。主軸は N23° E の南北棟とみられる。ピット掘方は直径 20～30 cm の円形で、深さ 25 cm 前後である。柱間寸法は 1.5 m、2.1 m、3.0 m と不等間となる。

平安時代後期～末の土師器が出土しており、中世 I 期の建物とみられる。

S R 57077 (第 70 図、写真図版 62) 7-1 区西側で確認した弥生時代終末期～古墳時代の自然流路である。全体で幅 24 m 以上、深さ 1.8 m 以上あり、調査区北壁での断割による土層と規模の確認に留めた。

6 次調査の結果も踏まえると、複数の流路が錯綜しており、最終埋没時には数条の小流路帯となっていたようである。

S B 65016 (第 80 図) 7-2 区で検出した掘立柱建物で、6 次調査の結果と合わせ、3 間×2 間の南北棟とした。ピット掘方は直径 40～50 cm 程度の円形を呈するものが多い。

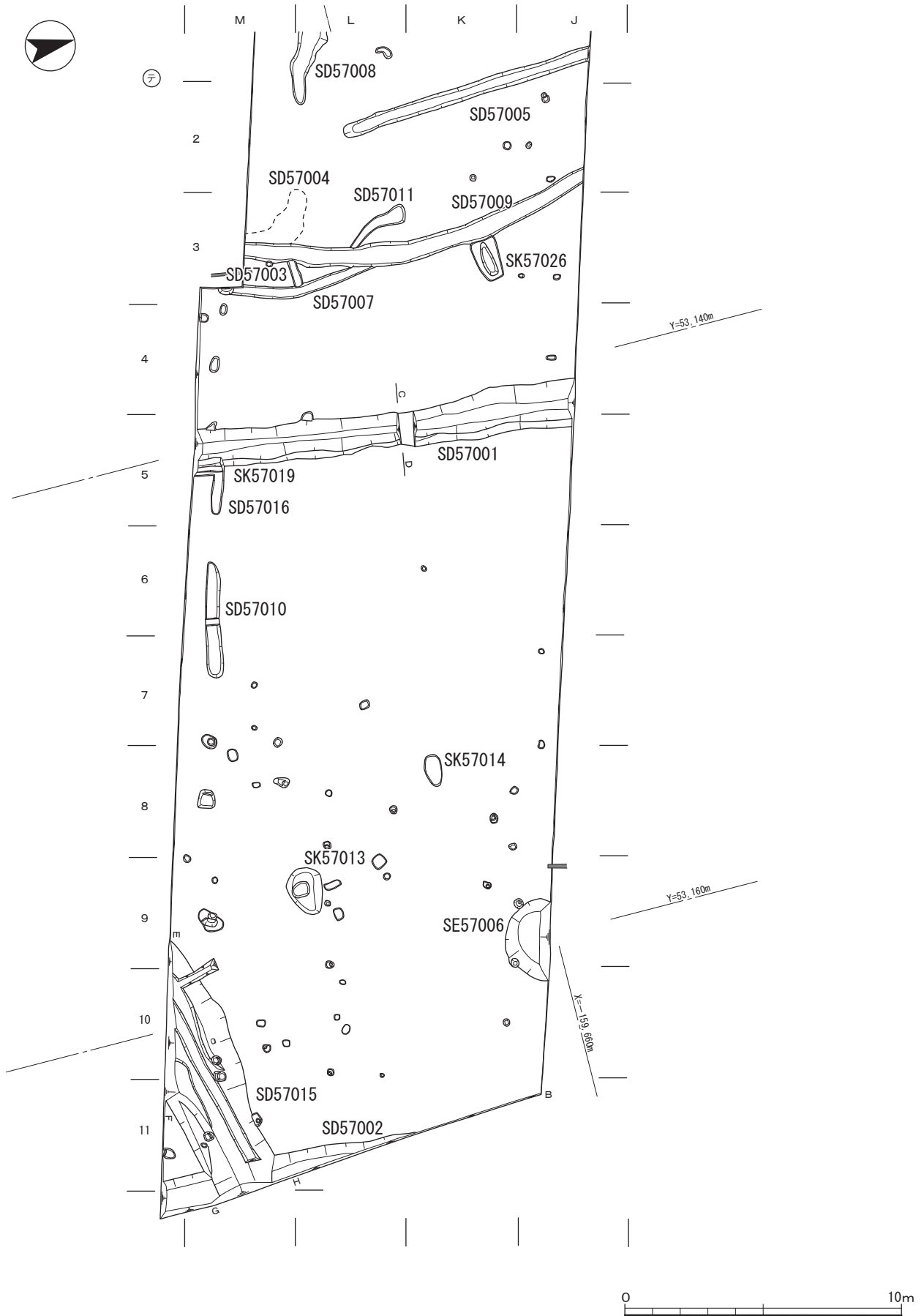
S B 65018 (第 80 図) 7-2 区で検出した掘立柱建物で、6 次調査の結果と合わせ、中央に間仕切りをもつ 5 間×2 間の南北棟を想定した。柱掘方は直径 25 cm 程度の円形である。

(3) 下層確認

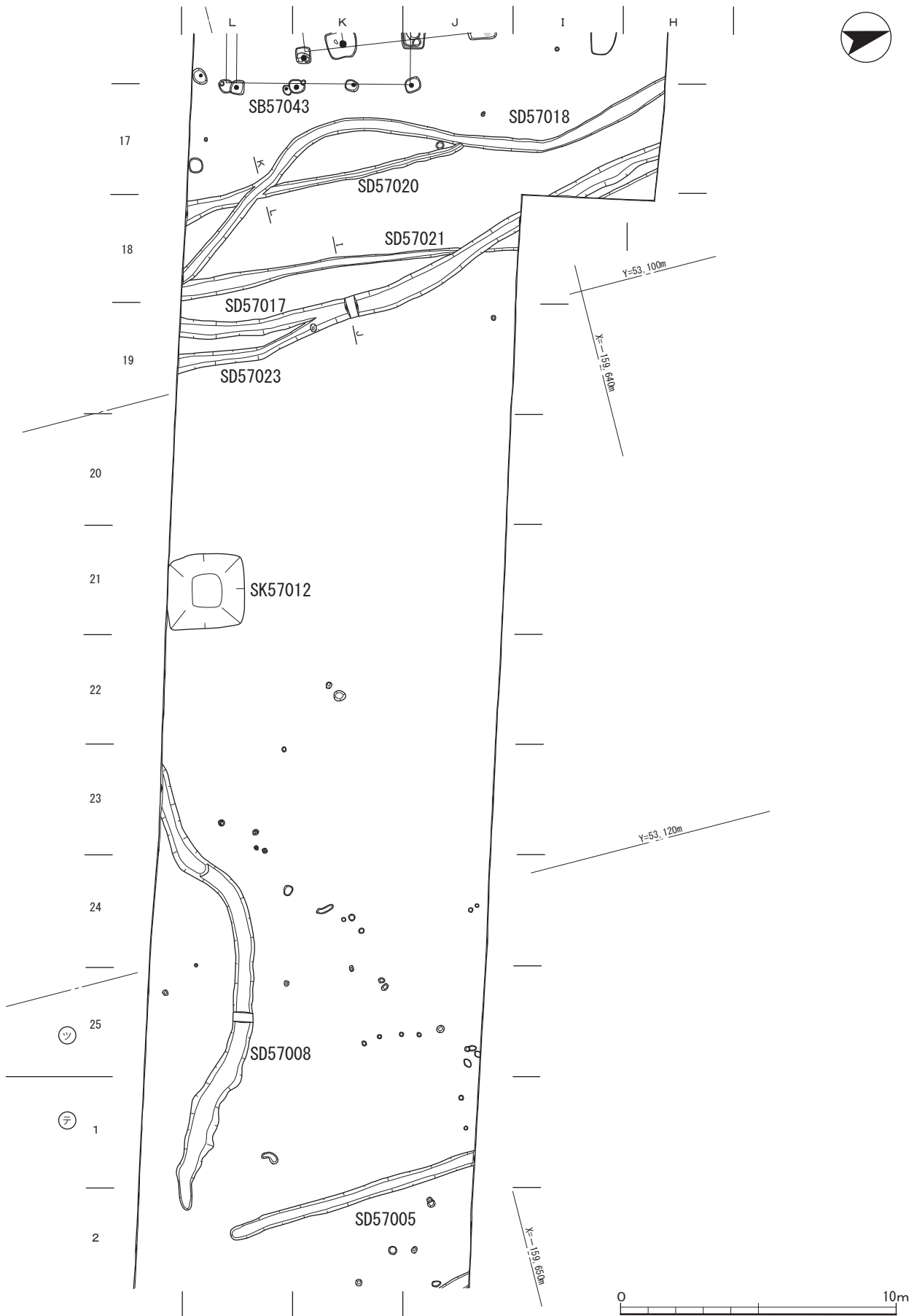
7-2 区下層 (第 69 図、写真図版 62) 遺構面に縄文土器が含まれていたことから、検出面より約 70 cm 下の腐植の少ない褐色シルト層 (第 72 図 17 層) 上面で遺構検出を試みたが、遺構は確認できなかった。

平面的には不定形な小土坑・ピット状に見えるものもあったが、調査区壁面の観察によると、付近は生痕が非常に顕著であり、人為的な遺構ではないと判断した。遺物の出土もなかった。

なお、S D 57064 から縄文時代の大型の有茎鏃 (1710) が出土しており、縄文時代でも古相の遺構・遺物が付近に存在する可能性がある。

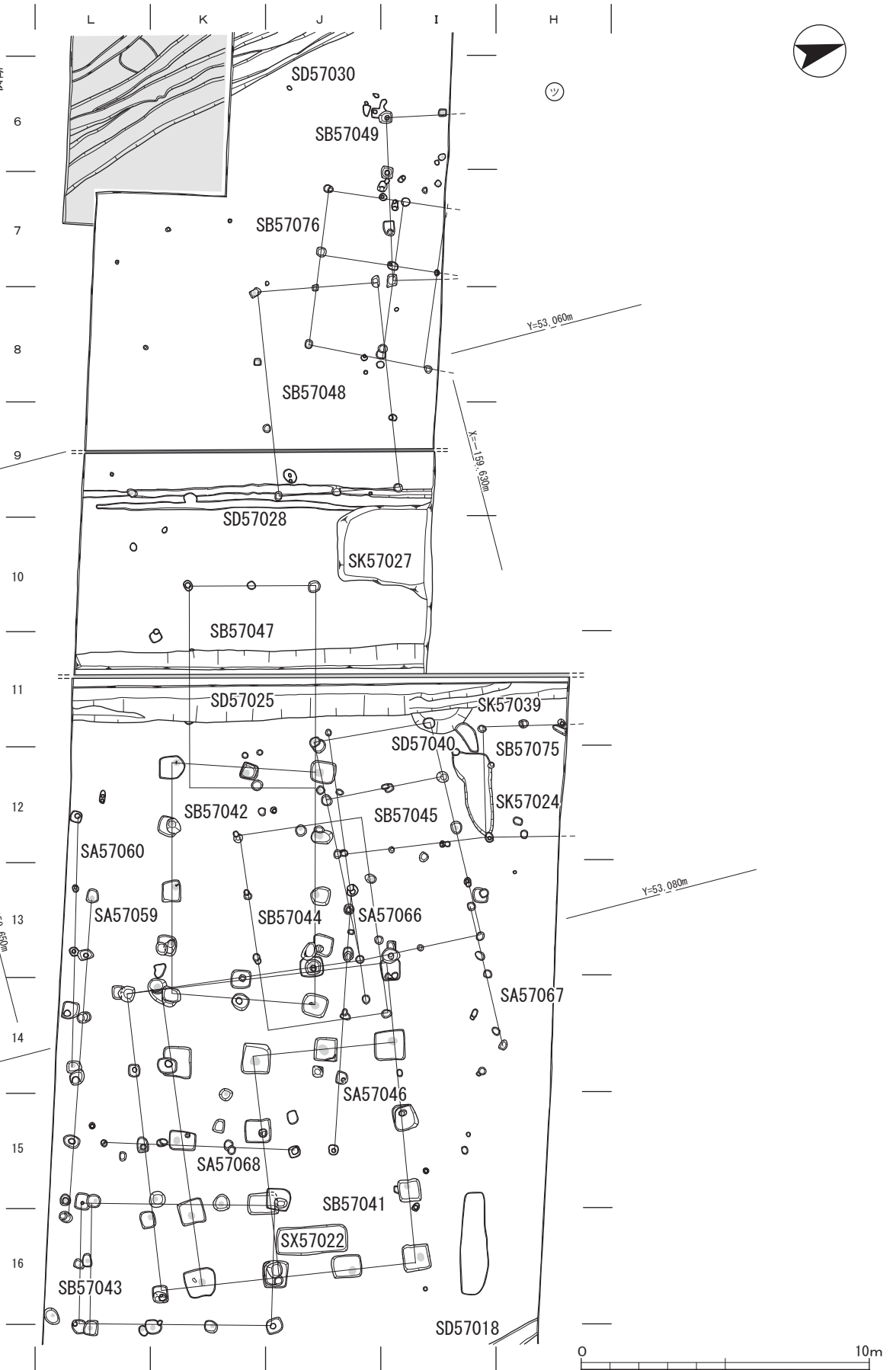


第 64 图 7-1 区遺構全体図① (1:200)

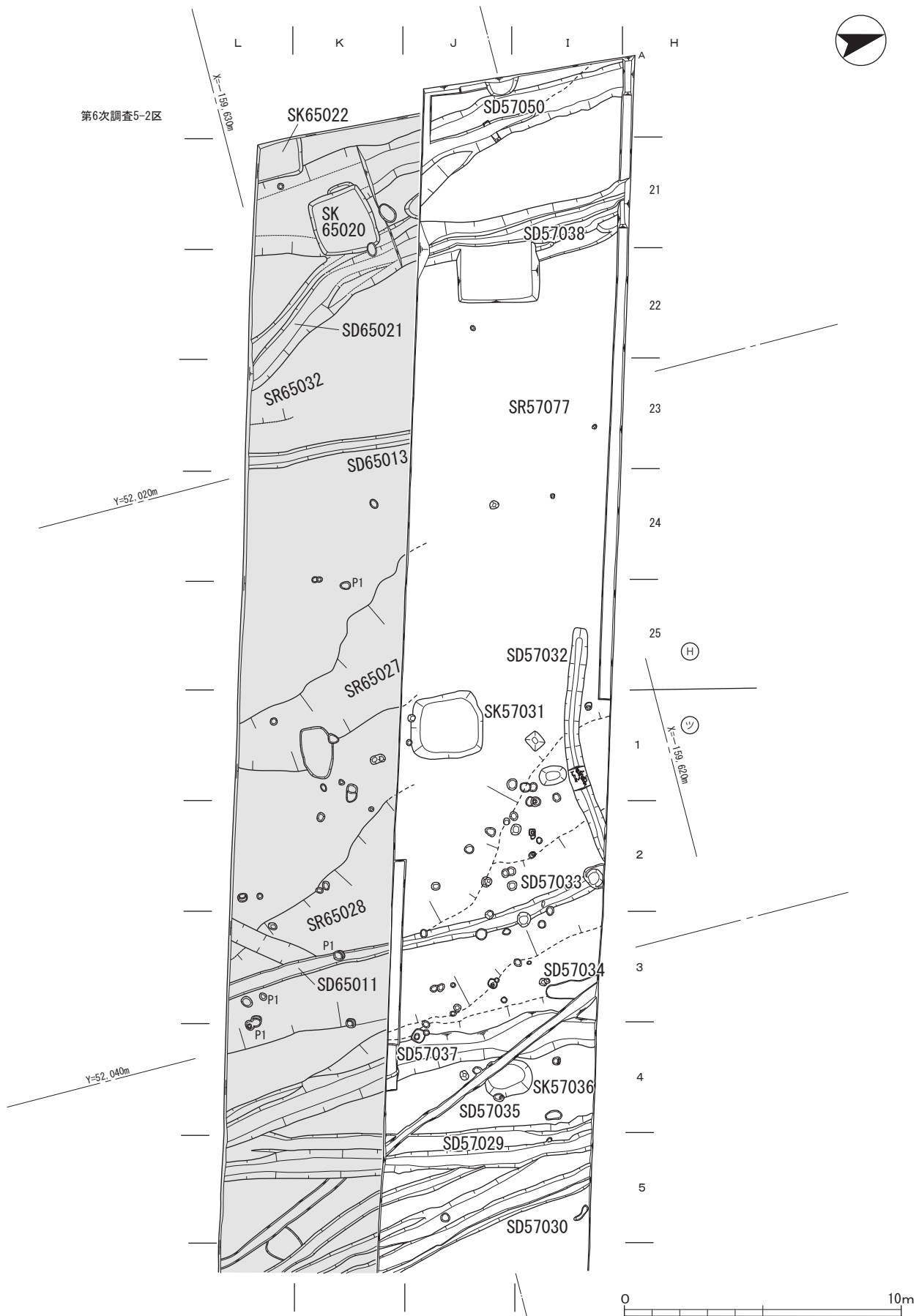


第 65 図 7-1 区遺構全体図② (1:200)

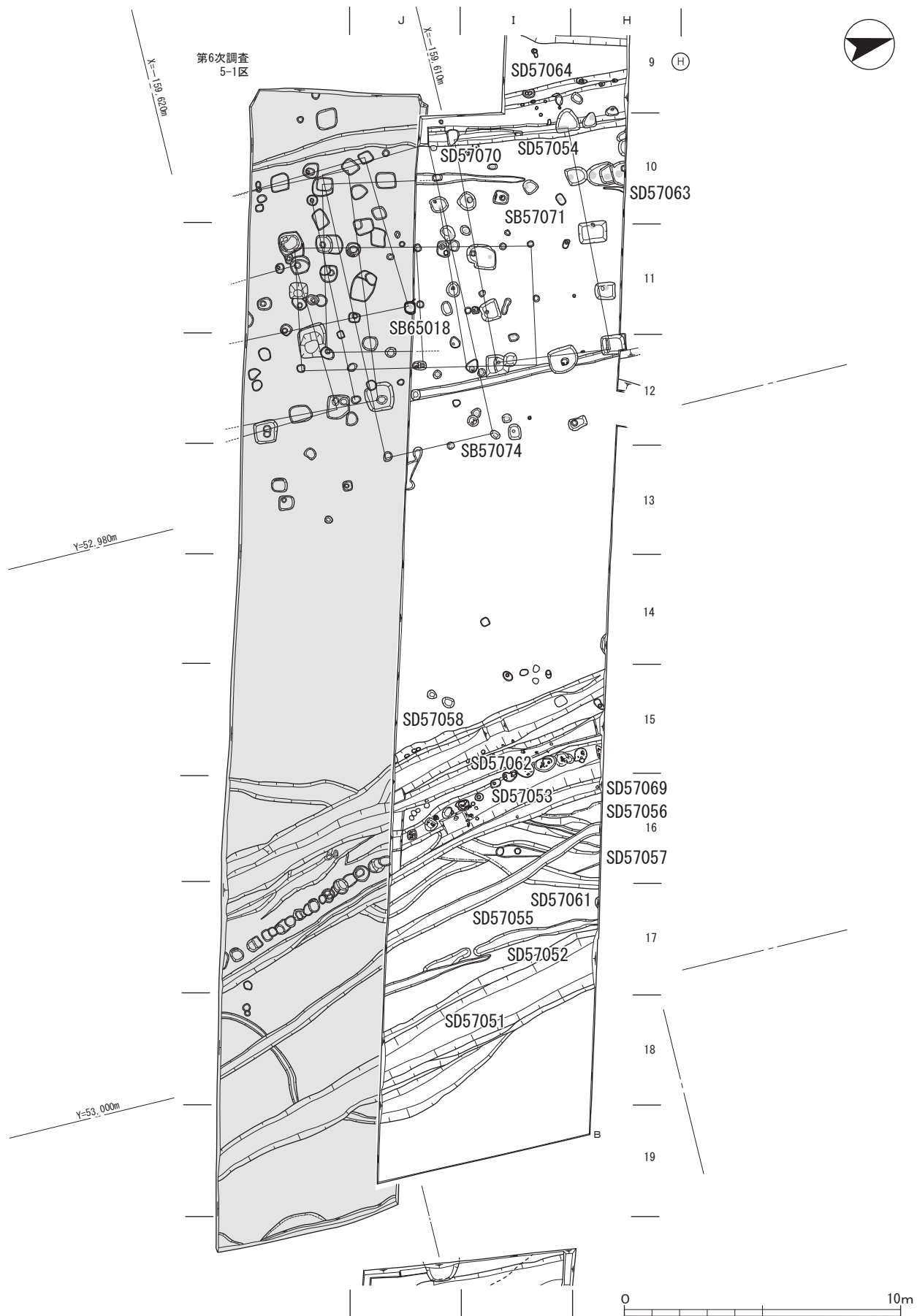
第6次調査
5-2区



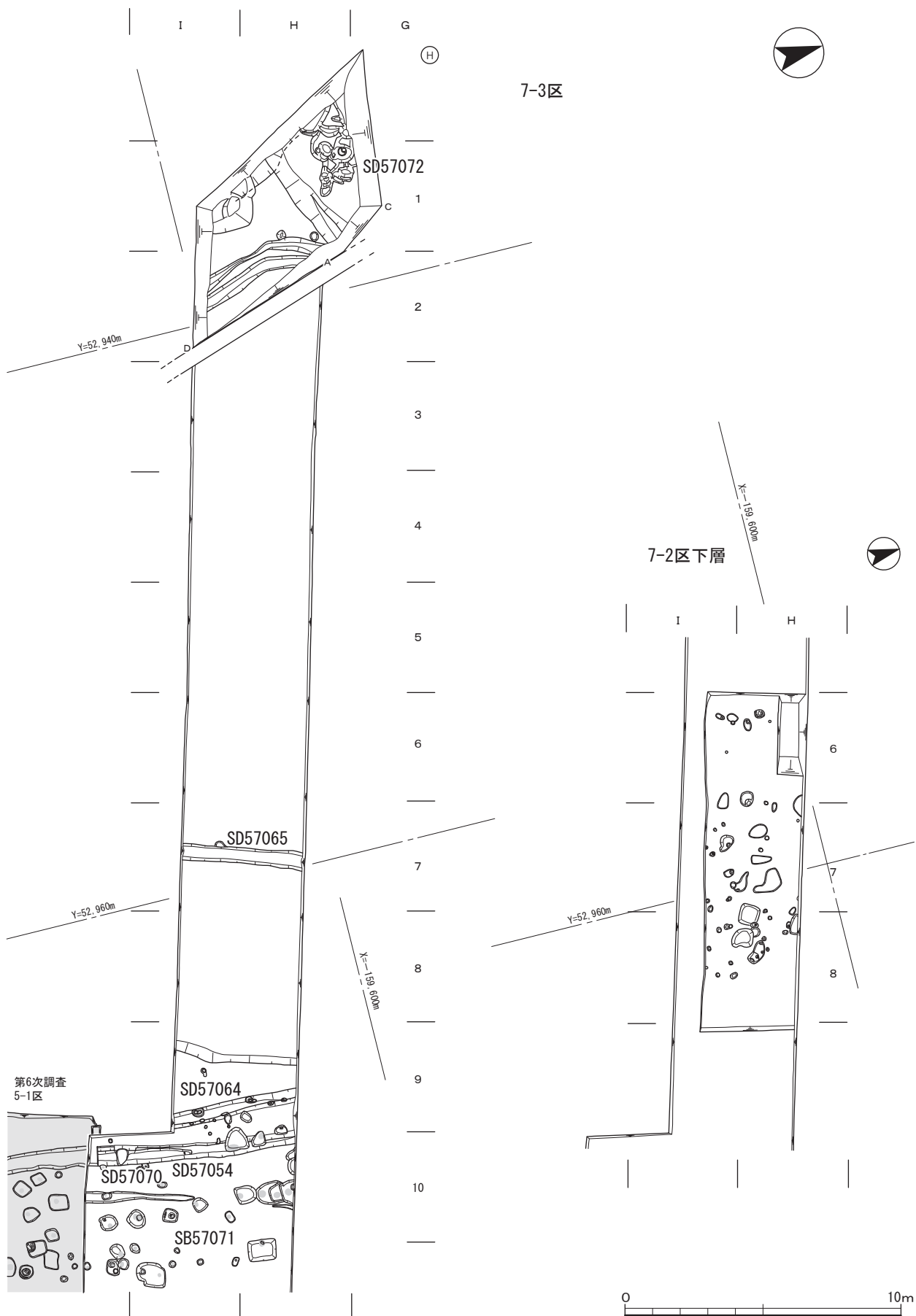
第 66 図 7-1 区遺構全体図③ (1:200)



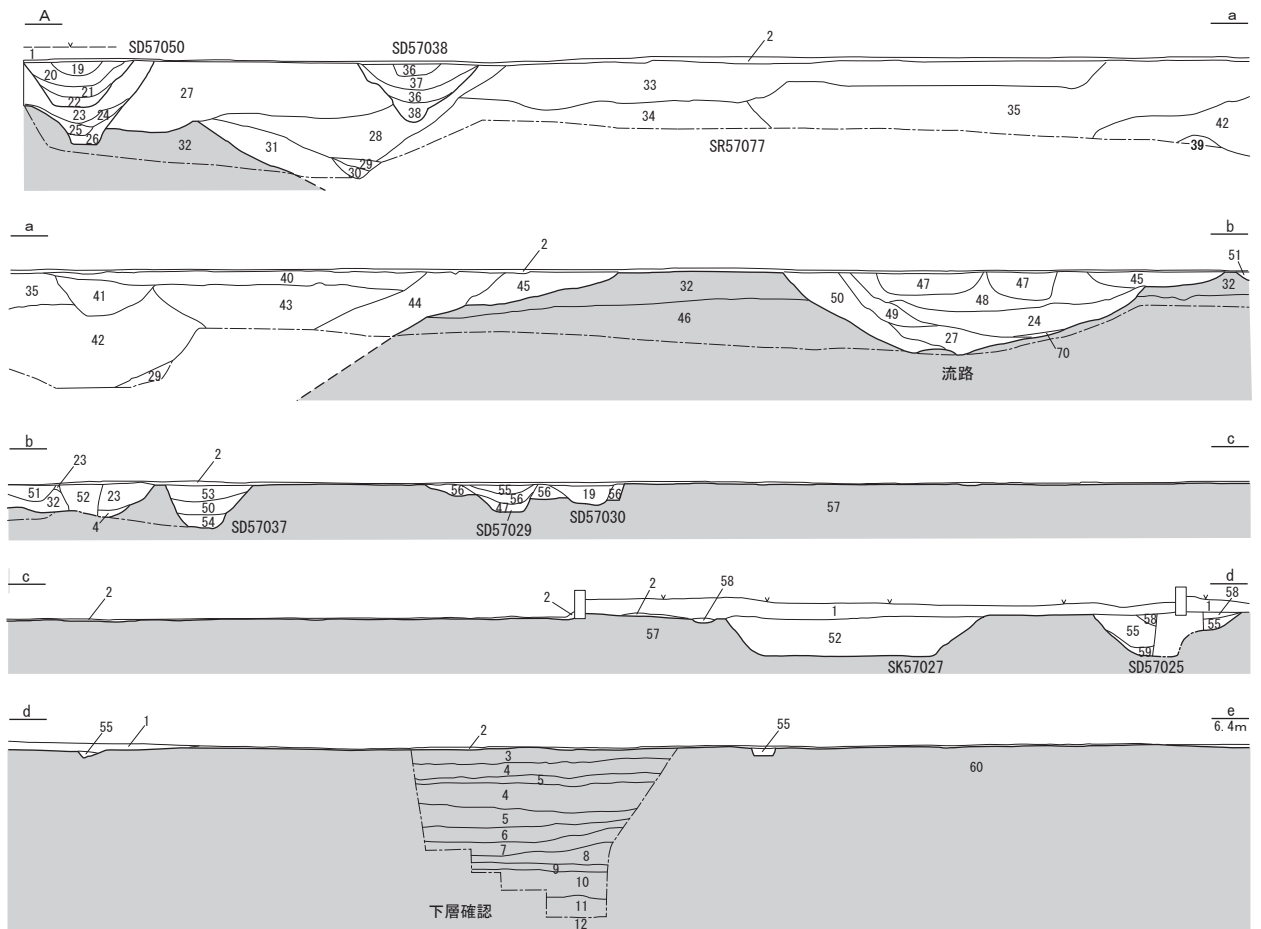
第 67 図 7-1 区遺構全体図④ (1:200)



第 68 図 7-2 区遺構全体図 (1:200)

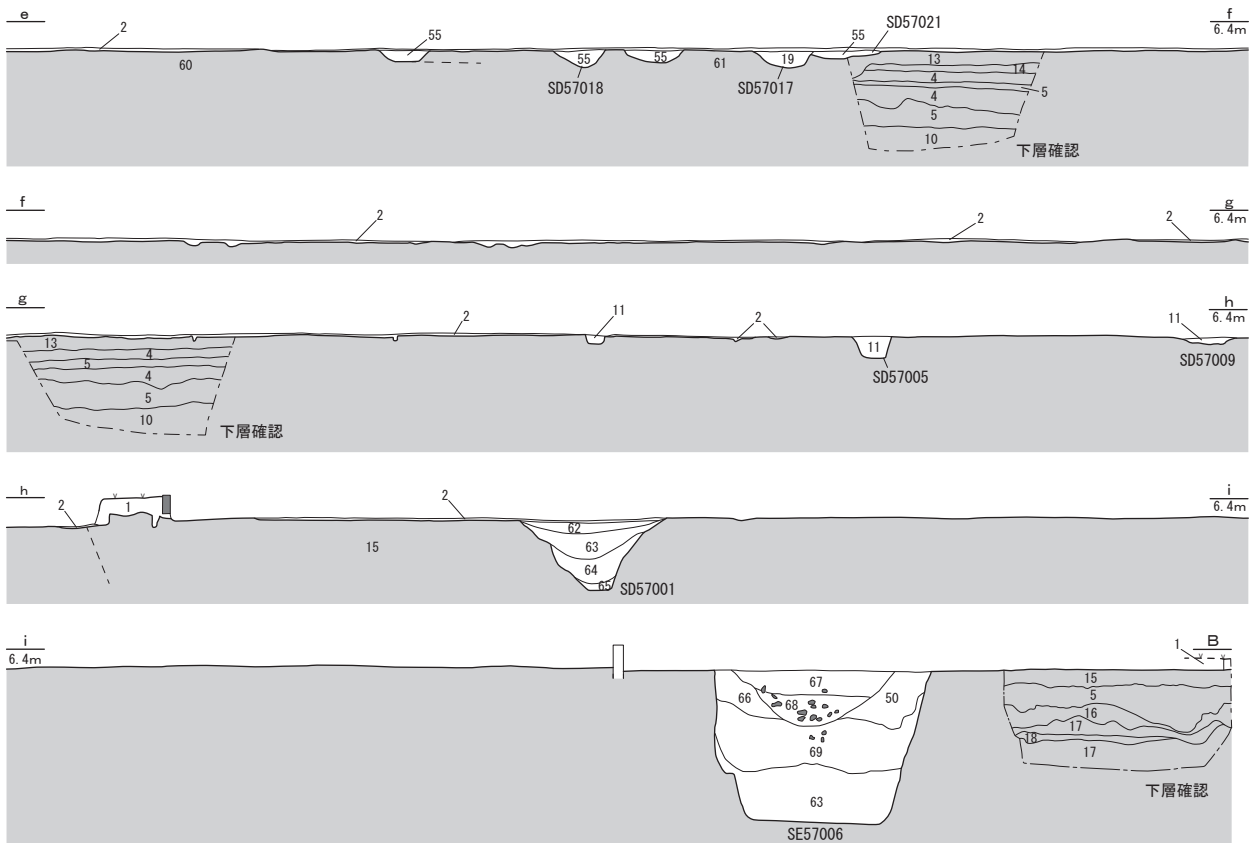


第 69 图 7-2 区、7-3 区遺構全体图 (1:200)



- | | |
|---|---|
| 1. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土<耕作土> | 19. 2.5Y6/1 黄灰色シルト<SD57017・SD57030・SD57050埋土> |
| 2. 2.5Y7/6 明黄褐色砂質シルト<床土> | 20. 2.5Y6/1 黄灰色粘土質シルト<SD57050埋土> |
| 3. 7.5YR5/2 灰褐色砂質シルト(縄文土器含)<基盤層> | 21. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト<SD57050埋土> |
| 4. 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト(縄文土器含) | 22. N6/ 灰色粘土質シルト<SD57050埋土> |
| 5. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト(縄文土器含) | 23. 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質土(粗砂含)<SD57034埋土を含む> |
| 6. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト | 24. 10YR4/6 褐色粗砂 |
| 7. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂~砂質シルト | 25. 10YR6/4 にぶい黄褐色粗砂 |
| 8. 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂 | 26. 10YR5/2 灰黄褐色粗砂 |
| 9. 2.5Y6/2 灰黄色粘砂 | 27. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂(小石含) |
| 10. 5Y5/2 灰オリーブ色細砂 | 28. 10YR4/4 褐色粗砂(小石含) |
| 11. 5Y5/2 灰オリーブ色極細砂<SD57005・SD57009埋土を含む> | 29. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂 |
| 12. 5Y5/1 灰色砂礫 | 30. 10YR4/1 褐灰色粗砂 |
| 13. 2.5Y6/3 にぶい黄色極細砂(マンガン多含)<基盤層> | 31. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫 |
| 14. 2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂(マンガン多含) | 32. 7.5YR4/4 褐色粘質シルト<基盤層> |
| 15. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト(縄文土器含)<基盤層> | 33. 7.5YR5/6 明褐色砂質シルト |
| 16. 2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂 | 34. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルトと粘土の互層 |
| 17. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫(10cmの礫多含) | 35. 7.5YR5/8 明褐色砂質シルト |
| 18. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 | |

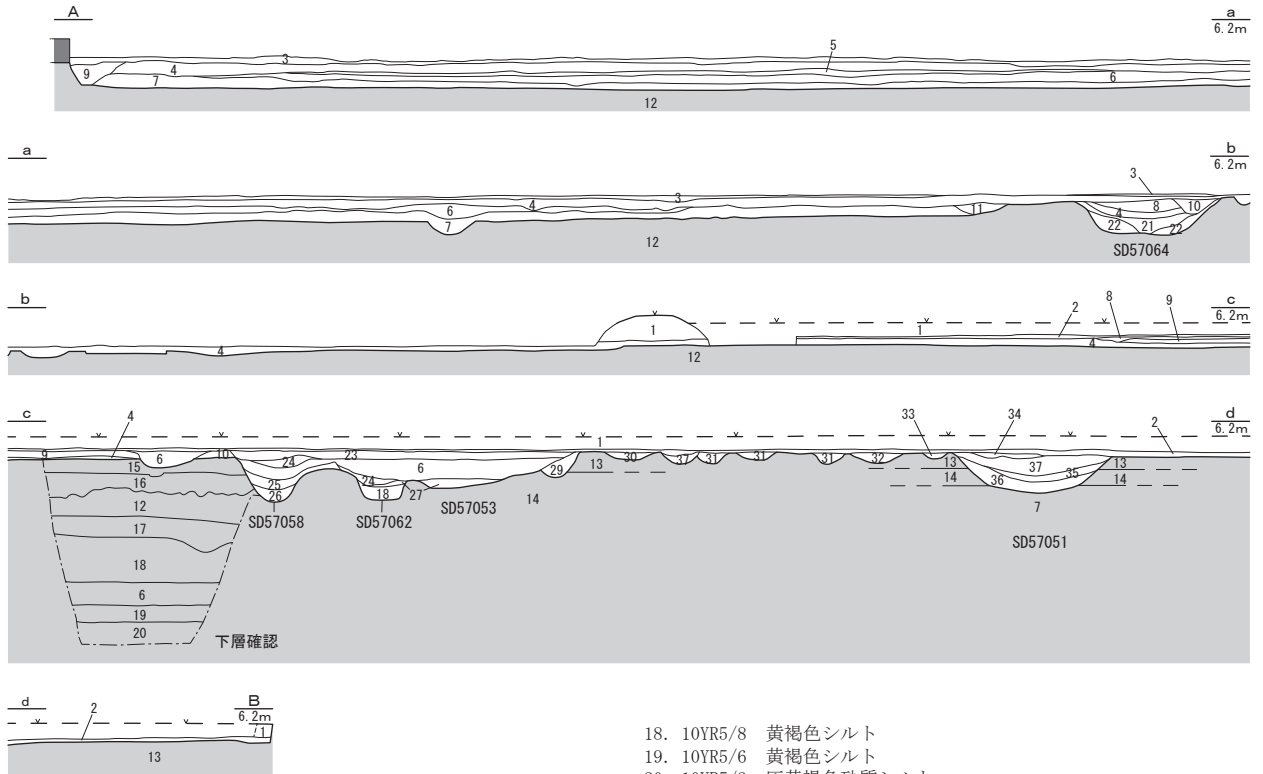
第70図 7-1区北壁土層断面図①(1:100)



- | | |
|---|---|
| 36. 2. 5YR6/1 黄灰色砂質シルト<SD57038埋土> | 54. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト<SD57037埋土> |
| 37. 2. 5Y6/2 灰黄色砂質シルト (粗砂多含) <SD57038埋土> | 55. 2. 5Y6/2 灰黄色シルト<SD57017・SD57018・SD57021
・SD57025・SD57029埋土を含む> |
| 38. 2. 5Y6/1 黄灰色極細砂<SD57038埋土> | 56. 2. 5Y6/3 にぶい黄色シルト<SD57029埋土> |
| 39. 10YR4/1 褐色砂質シルト | 57. 7. 5Y4/1 褐色シルト<検出面> |
| 40. 2. 5Y5/2 暗灰黄色極粗砂 | 58. 2. 5Y7/2 灰黄色シルト<SD57025埋土を含む> |
| 41. 10YR4/6 褐色砂質土 | 59. 2. 5Y5/1 黄灰色シルト<SD57025埋土> |
| 42. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト | 60. 10YR5/1 褐色砂質シルト<基盤層> |
| 43. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト (小石含) | 61. 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質シルト<極細砂<基盤層> |
| 44. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト (小石含) | 62. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト<SD57001埋土> |
| 45. 10YR6/6 明黄褐色シルト | 63. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト<SE57006・SD57001埋土> |
| 46. 7. 5YR5/6 明褐色粘質シルト | 64. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト<SD57001埋土> |
| 47. 2. 5Y5/2 暗灰黄色極細砂<SD57029・SD57032・SD57033埋土> | 65. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト<SD57001埋土> |
| 48. 10YR4/4 褐色砂質シルト | 66. 10YR6/4 にぶい黄褐色粘土質シルト<SE57006埋土> |
| 49. 10YR4/4 褐色シルト | 67. 10YR4/6 褐色砂質シルト (5cmの礫若干含) <SE57006埋土> |
| 50. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
<SE57006・SD57037埋土を含む> | 68. 10YR4/6 褐色砂質シルト (15cmの礫含) <SE57006埋土> |
| 51. 10YR7/2 にぶい黄褐色砂質土 (粗砂含) | 69. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト (5cmの礫含) <SE57006埋土> |
| 52. 攪乱<SK57027・SD57035埋土> | 70. 7. 5YR4/6 褐色シルト・細砂 |
| 53. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土<SD57037埋土> | |

第 71 図 7-1 区北壁土層断面図② (1:100)

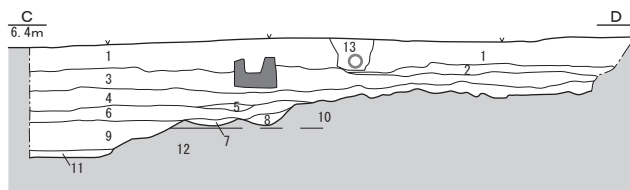
7-2区



1. 2. 5Y5/1 黄灰色粘質土<耕作土>
2. 2. 5Y6/1 黄灰色シルト<床土>
3. 10YR7/4 にぶい黄橙色極細砂
4. 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト<SD57064埋土を含む>
5. 10YR6/3 にぶい黄褐色極細砂
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
<SD57053・57058・57062埋土を含む>
7. 10YR5/2 灰黄褐色シルト
8. 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト<SD57064埋土を含む>
9. 10YR6/4 にぶい黄褐色極細砂
10. 10YR6/2 灰黄褐色シルト<SD57054埋土を含む>
11. 10YR6/2 灰黄褐色シルト
12. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト<基盤層>
13. 2. 5Y6/2 灰黄色砂質シルト(マンガン多含)<基盤層>
14. 7. 5YR4/1 褐色シルト(下面生痕著しい)
15. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト
16. 5YR4/2 灰褐色シルト
17. 7. 5YR4/4 褐色シルト<下層検出面>

18. 10YR5/8 黄褐色シルト
19. 10YR5/6 黄褐色シルト
20. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
21. 10YR4/4 褐色極細砂<SD57064埋土>
22. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂<SD57064埋土>
23. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂<SD57058・57062埋土>
24. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂(小礫含)
<SD57058・57062埋土>
25. 7. 5YR5/2 褐色極細砂<SD57058埋土>
26. 7. 5YR5/2 褐色シルト<SD57058埋土>
27. 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂(小礫含)<SD57053・57062埋土>
28. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂<SD57062埋土>
29. 2. 5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト<SD57069埋土>
30. 2. 5Y6/2 灰黄色砂質シルト<SD57051・57055・57056埋土>
31. 2. 5Y6/2 灰黄色極細砂(粗砂含)
<SD57057・57061埋土を含む>
32. 2. 5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト
33. 2. 5Y6/3 にぶい黄色極細砂<SD57052埋土>
34. 2. 5Y7/2 灰黄色砂質シルト<SD57051埋土>
35. 2. 5Y5/1 黄灰色シルト<SD57051埋土>
36. 2. 5Y5/2 暗灰黄色極細砂(褐色シルト塊多含)
<SD57051埋土>
37. 2. 5Y6/2 灰黄色シルト<SD57051・57055埋土>

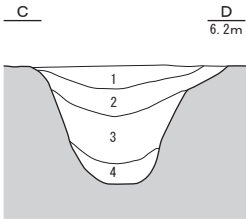
7-3区



1. 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質土<表土>
2. 7. 5YR7/8 黄褐色粘質土<客土>
3. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質土<客土>
4. 10YR5/2 灰黄褐色シルト
5. 10YR6/2 灰黄褐色シルト
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
7. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト
8. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト
9. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト<SD57072埋土>
10. 5YR3/3 暗赤褐色シルト<基盤層>
11. 10YR4/4 褐色シルト<SD57072埋土>
12. 10YR5/6 黄褐色シルト
13. 攪乱

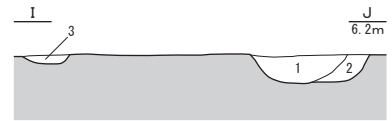
第 72 図 7-2 区北壁・7-3 区東壁土層断面図 (1:100)

SD57001



1. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト
4. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト

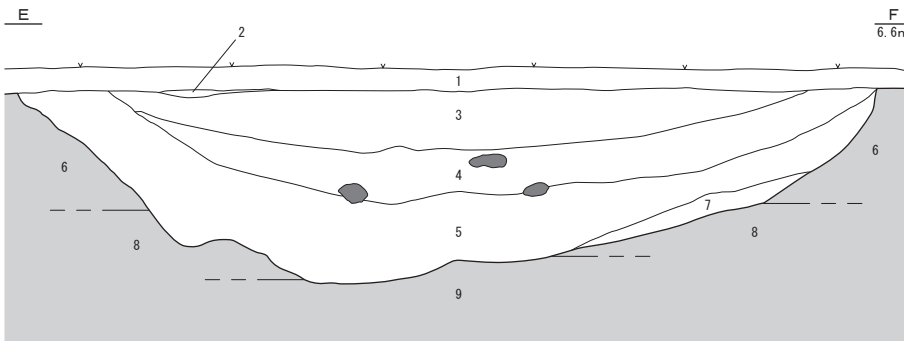
SD57017・57021・57023



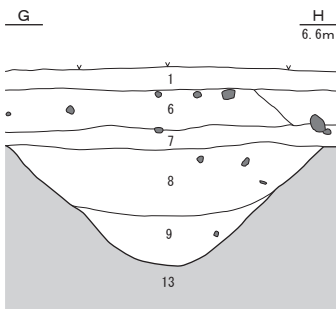
1. 2. 5Y5/1 黄灰色シルト<SD57017>
2. 2. 5Y6/2 灰黄色砂質シルト<SD57023>
3. 2. 5Y6/2 灰黄色砂質シルト<SD57021>

SD57015

(調査区南壁)

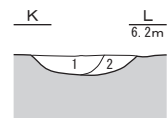


(調査区東壁)



1. 2. 5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト<耕作土>
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト<床土>
3. 10YR6/4 にぶい黄褐色粘土質シルト
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
5. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト (一部極細砂と互層)
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト<SD57002埋土>
7. 2. 5Y5/3 黄褐色粘土質シルト<SD57002埋土>
8. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト
9. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルトと極細砂の互層
10. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト
11. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルトと極細砂の互層
12. 2. 5Y3/3 暗オリーブ褐色極細砂
13. 2. 5Y4/3 オリーブ褐色細砂 (礫含)

SD57018・57020

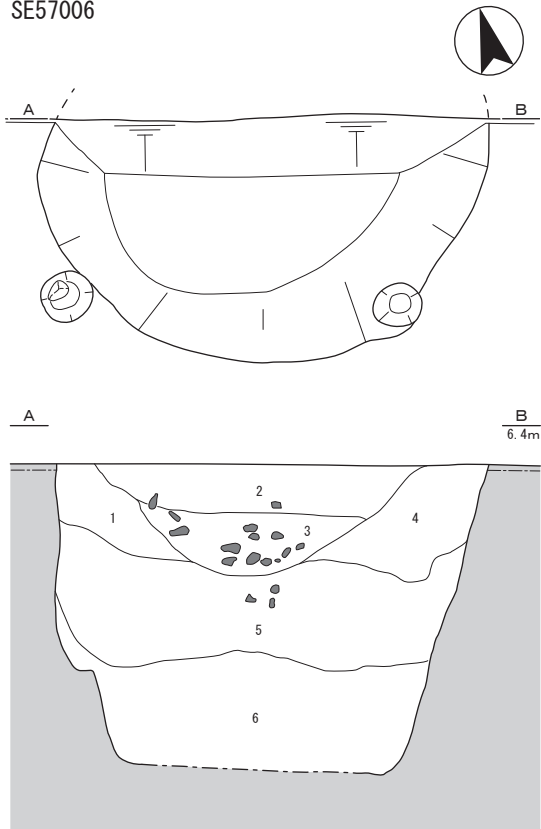


1. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト (粗砂多含) <SD57018埋土>
2. 2. 5Y6/1 黄灰色極細砂 <SD57020埋土>



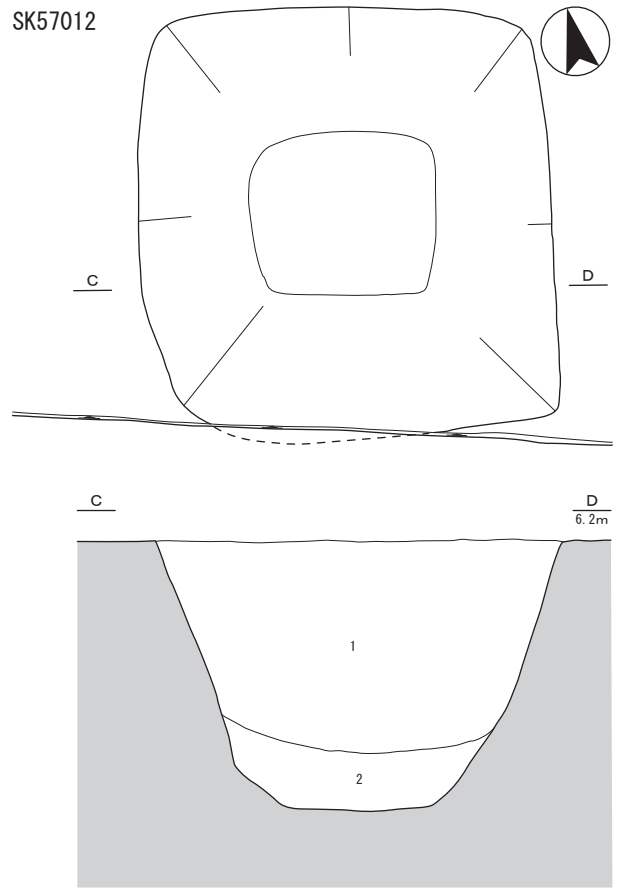
第 73 図 S D 57001・57015・57017・57018・57020・57021・57023 断面図 (1:50)

SE57006

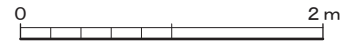


1. 10YR6/4 にぶい黄橙色粘土質シルト
2. 10YR4/6 褐色砂質シルト (5cmの礫若干含)
3. 10YR4/6 褐色砂質シルト (15cmの礫含)
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト (5cmの礫含)
6. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト

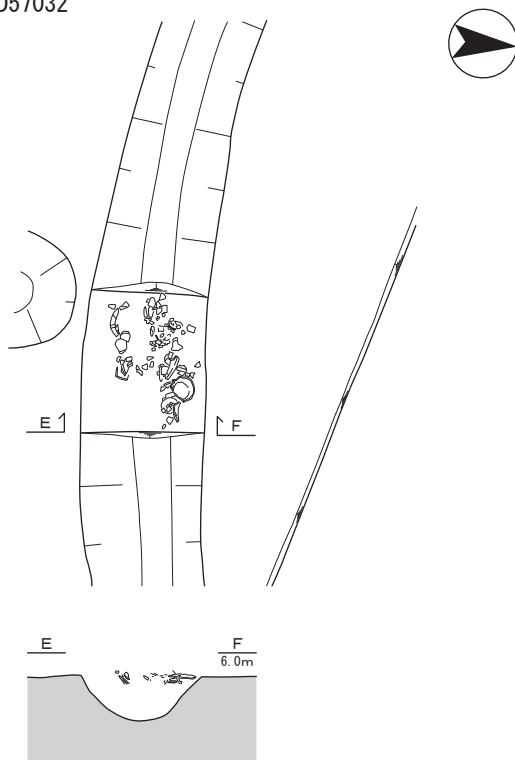
SK57012



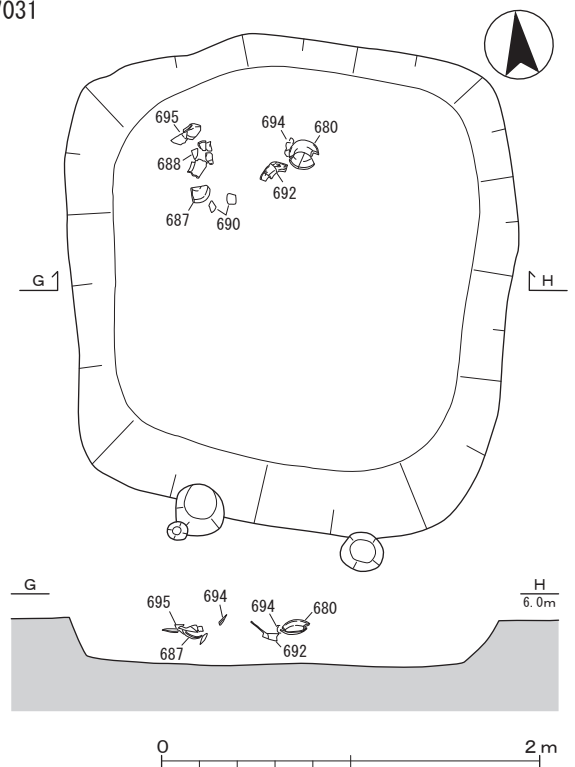
1. 10YR5/2 灰黄褐色シルトと2. 5Y6/4にぶい黄色シルトの混成土
2. N6 灰色極細砂と粘土質シルトの互層



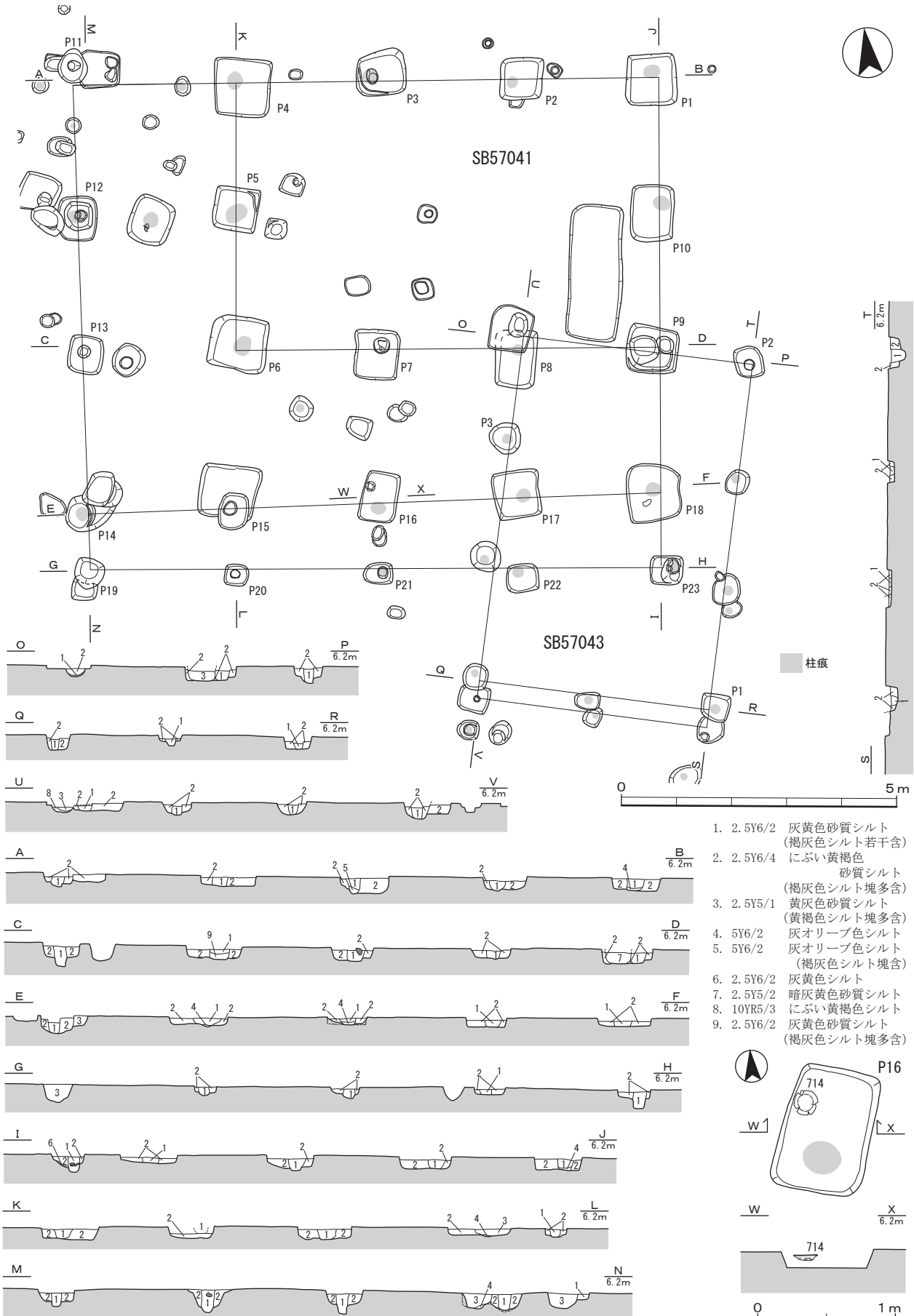
SD57032



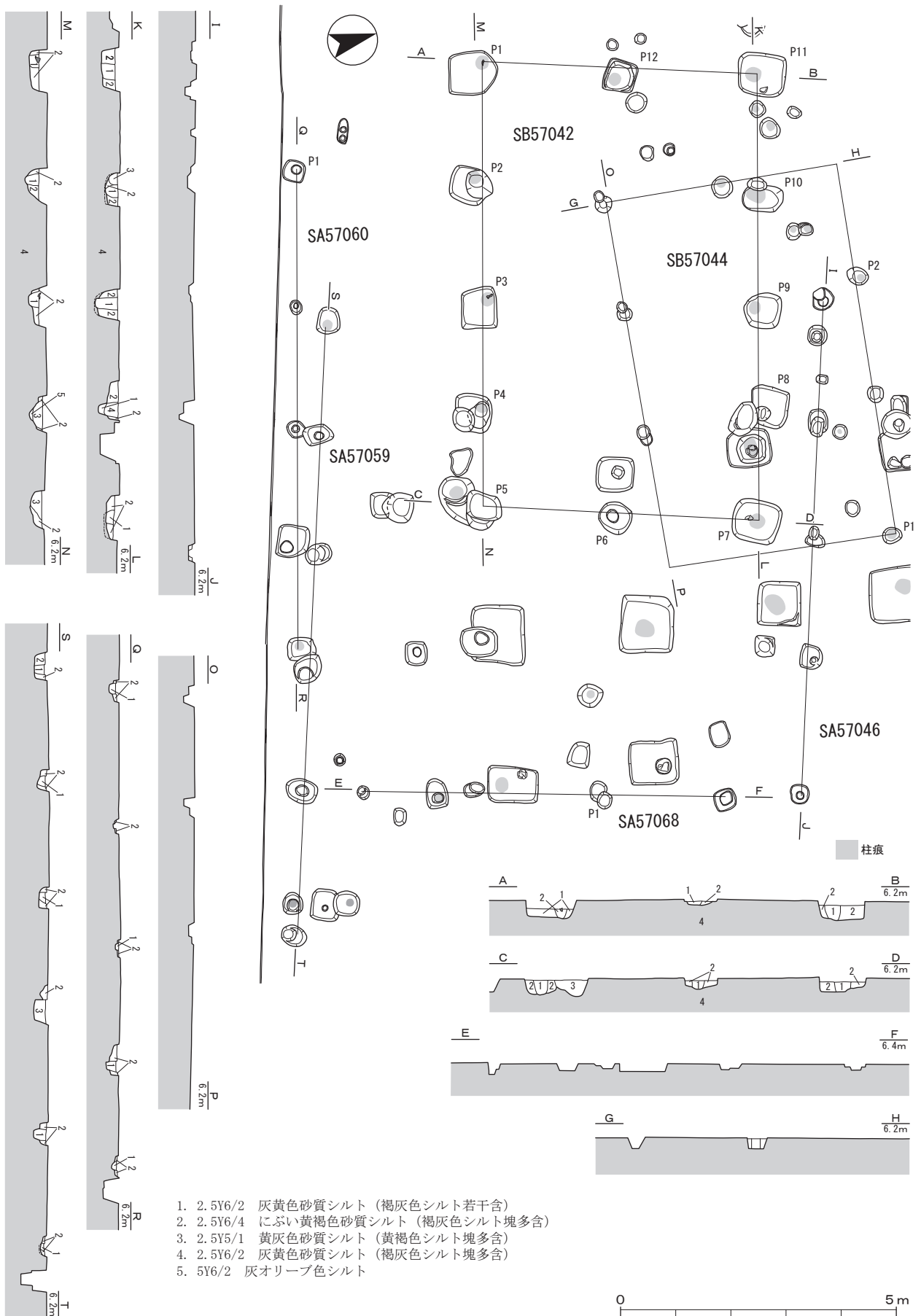
SK57031



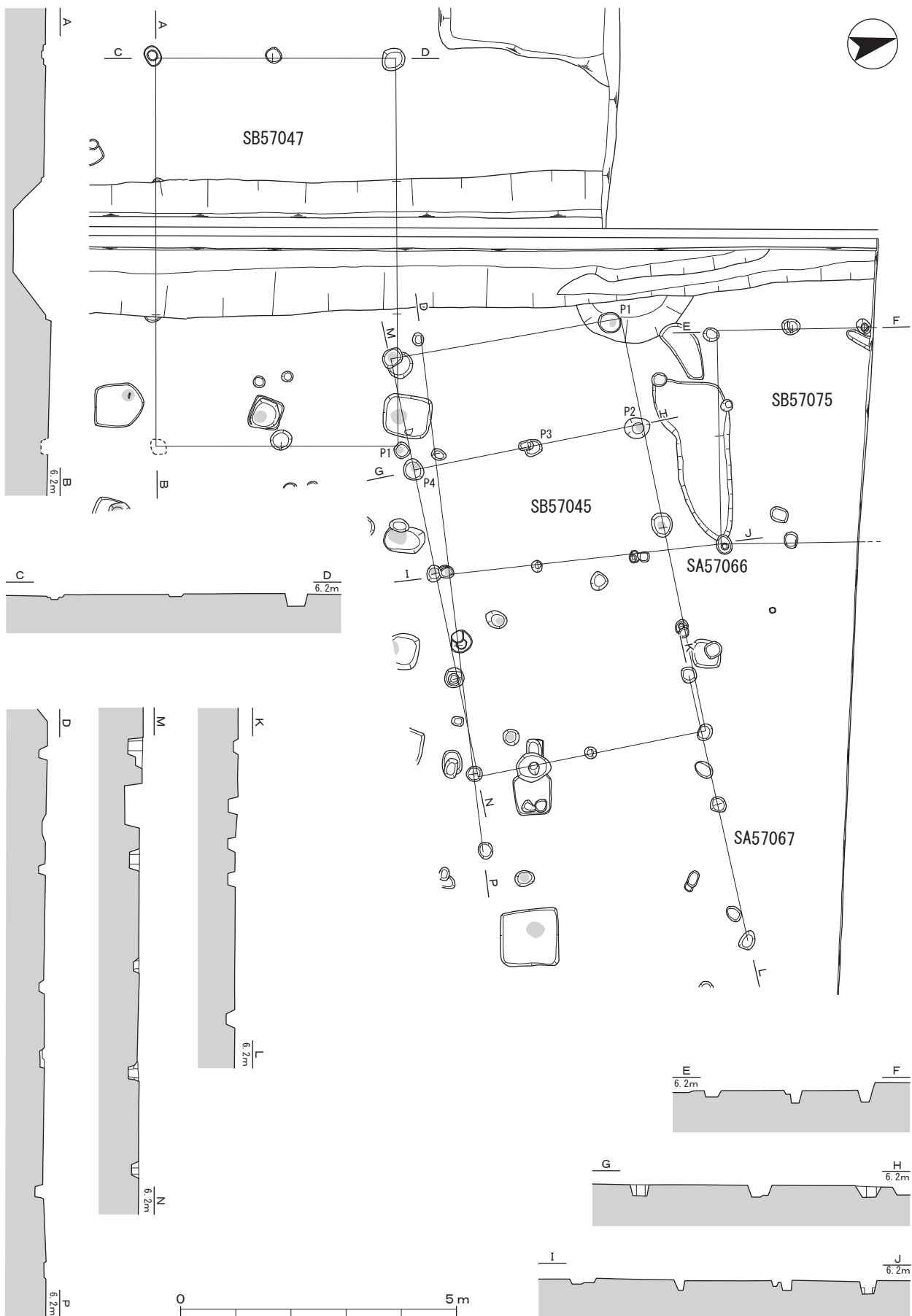
第 74 図 SE 57006・SK 57012 (1:50)、SK 57031・SD 57032 遺物出土状況図 (1:40)



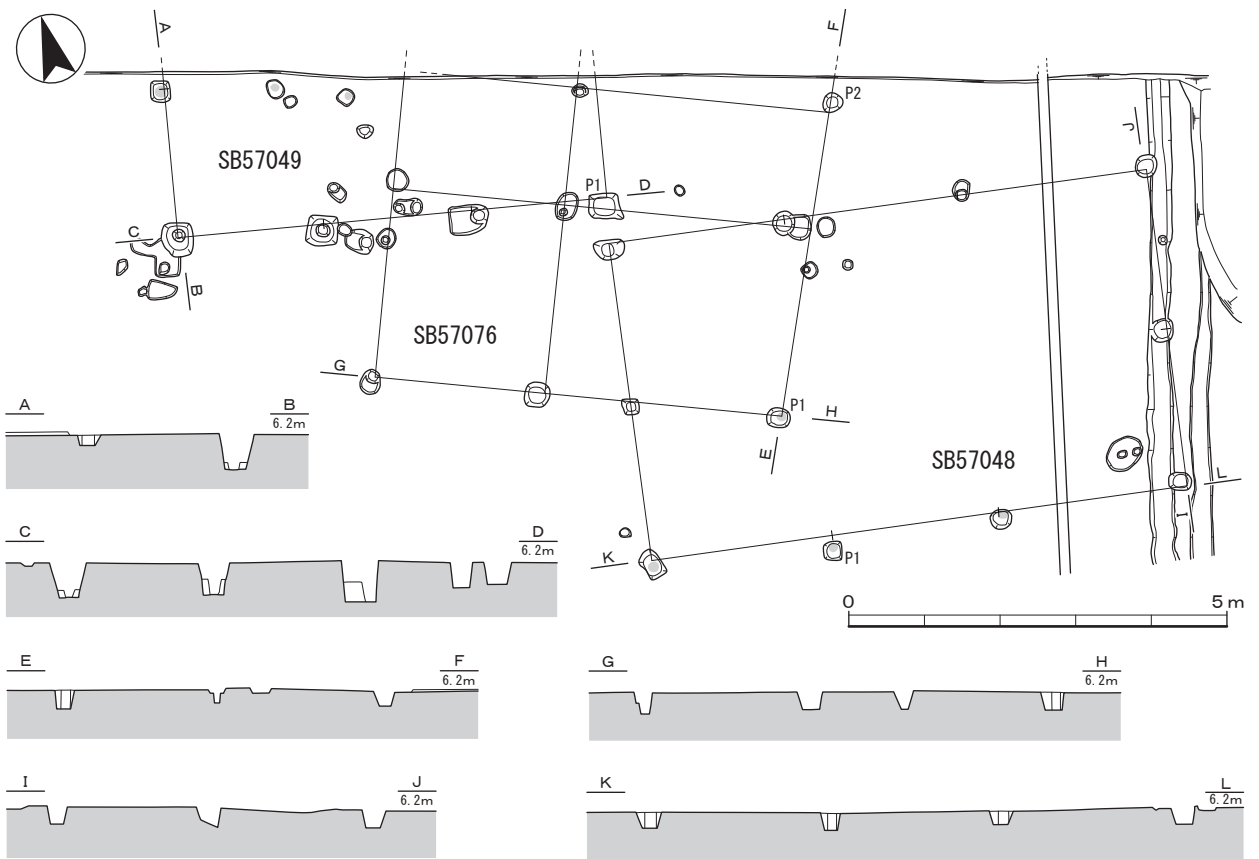
第75図 SB 57041・57043 (1:100)、SB57041ピット遺物出土状況図 (1:40)



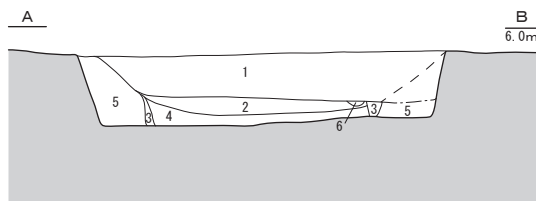
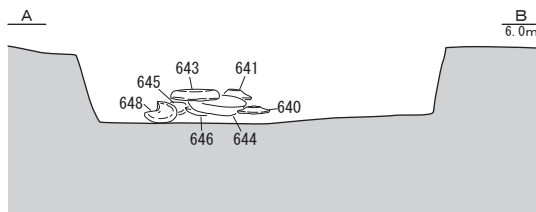
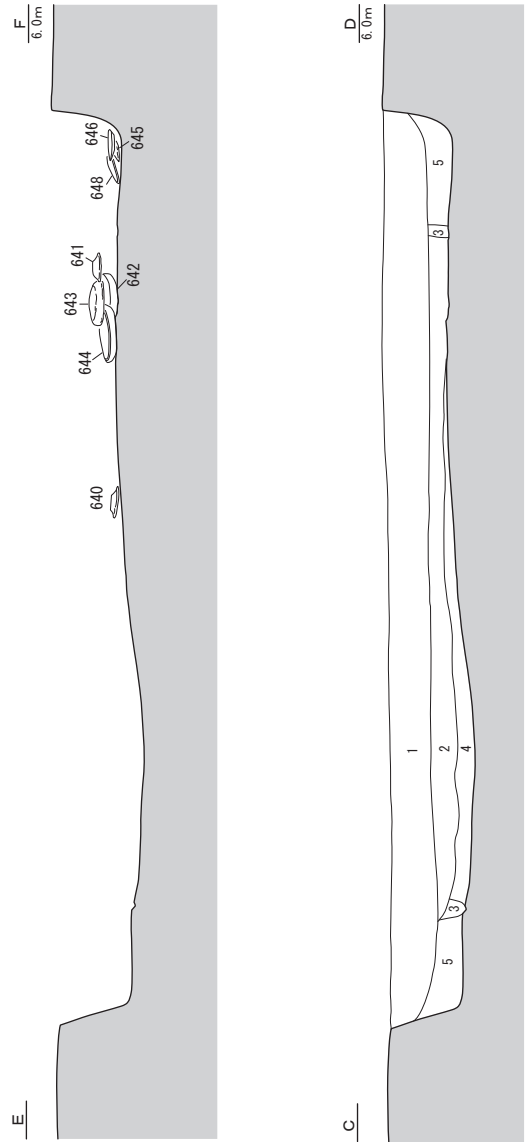
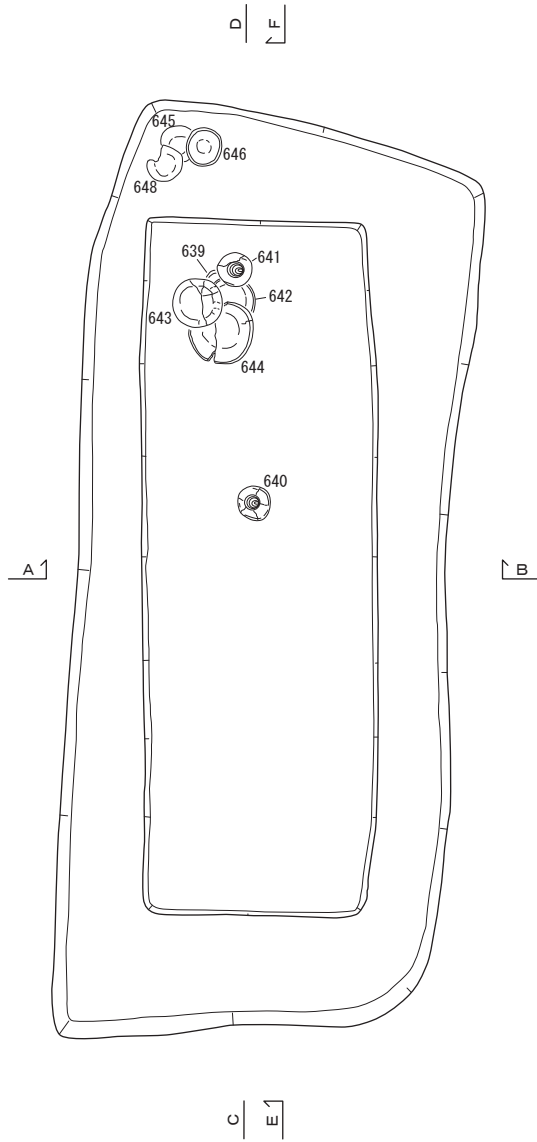
第76図 SB 57042・57044、SA 57046・57059・57060・57068 (1:100)



第 77 图 S B 57045 · 57047 · 57075、S A 57066 · 57067 (1:100)



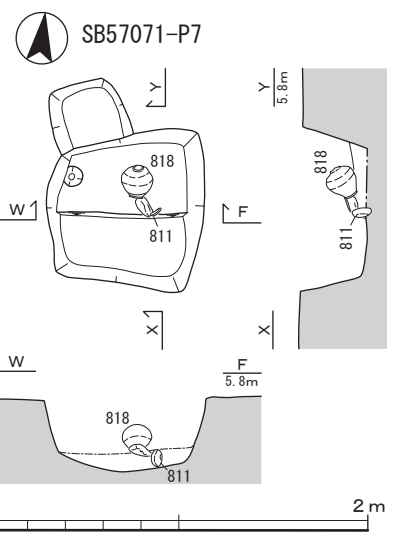
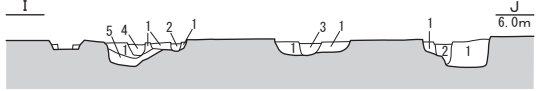
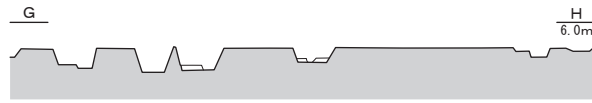
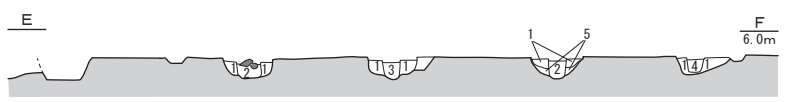
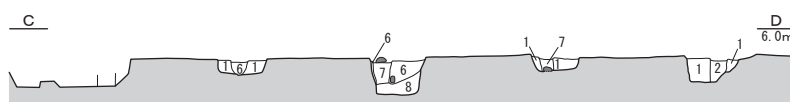
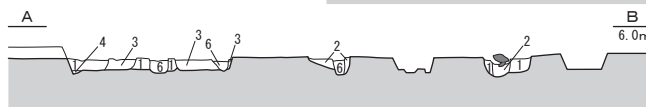
第 78 図 SB 57048・57049・57076 (1:100)



1. 10YR6/1 褐灰色シルト (黄褐色・暗褐色シルト塊多含)
2. 2.5Y6/2 灰黄色シルト (黄褐色・暗褐色シルト塊多含)
3. 2.5Y7/1 灰白色粘土<木棺の腐植痕>
4. 2.5Y6/1 黄灰色粘土質シルト (浅黄色シルト塊含)
5. 2.5Y5/3 黄褐色シルトと7.5YR4/1褐灰色シルトの混成土<裏込め土>
6. N6 灰色粘土質シルト<木痕跡か>

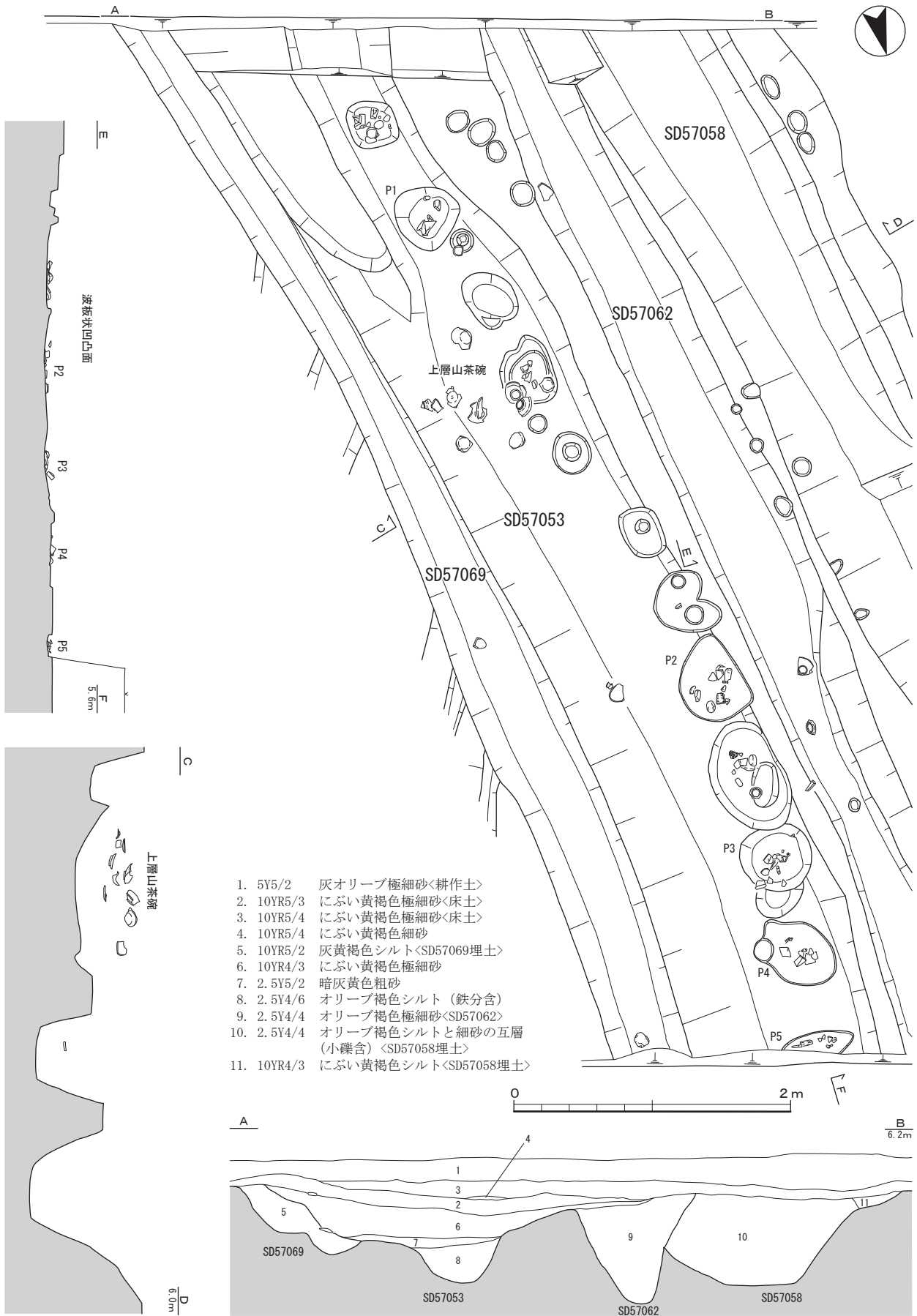


第 79 図 S X 57022 (1:20)



- 1. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 7. 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト
- 2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 5. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 8. 10YR4/4 褐色シルト
- 3. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 6. 10YR4/3 黄褐色シルト

第80図 SB 57071・57074 (1:100)、SB 57071 ピット遺物出土状況図 (1:40)



第 81 図 S D 57053・57058・57062・57069 (1:40)

10. 8区（第82～87図）

（1）概要

遺跡西側、現代（ほ場整備前）の基幹水路に平行する、南東－北西方向の調査区である。

遺構は現耕土・床土直下（地表下50cm）の黄褐色シルトまたは褐色シルト層上で検出した。他の調査区に比べ、旧耕作土が何層もあり厚い。また、近世の水田跡もみられる。

全体に平安時代以降の溝や流路が錯綜しており、北西－南東方向の小溝群を南側のSR58026、北側のSR58009が分断し、それらの埋没後にSD58023やSD58017などの溝が掘削されている。こうした状況から、建物などの住居関連遺構は希薄であった。

下層確認はSR58026の断ち割りを兼ねて実施した。縄文時代の遺構・遺物は確認できなかったが、自然木を含む泥炭質の黒褐色～黒色粘土質シルトがみられ、遺跡中央に比べ低湿な環境であると推測された（第84図83～85層、写真図版65）。

（2）遺構

SD58001 8区北を条里東西方向に横切る溝で、幅40cm、深さ20cm程度である。SD58002・58003・58004より後出の遺構である。

SD58002・58003・58004 8区北で検出した南北方向の溝群で、南側延長上でSD58005・58007・58008に続くと思われる。SD58002のみ南東端が東へ向きを変えるが、他はSR58009に切られる。

SD58002は幅80cm、深さ35cmで、SD58004は幅80cm、30cmでSD58002に合流する。

いずれも出土遺物は少なく、白磁片が出土したのみである。

SD58005・58007（写真図版64） 8区中央の調査区東端で検出した南北方向の溝で、両者は一連の溝と考えられる。深さ40cm未満、埋土はシルトである。

出土遺物は少なく、古代の土師器甕や皿等が出土した。

SD58006・58008（第86図、写真図版64） 調査区中央で検出した南北方向の溝である。SD58005・58007も含め、4条のほぼ同規模の溝が並走し、いずれもSR58009・58026に先行する溝である。

出土遺物は少ない。

SR58009 8区北で検出した幅8m、深さ1.5m以上の自然流路で、底面の確認には至っていない。埋土はシルト・砂質シルト主体である（第84図）。

8区北の遺構では最も後出で、近世の陶器が若干出土しており、近世に埋没したとみられる。

混入遺物には、縄文土器や古代の土師器・須恵器などがある。

SD58010 8区中央で検出した東西方向の溝である。直交するSD58008等より後出で、SD58006に先行する。幅1m、深さは35cm程度である。

埋土はシルトで、須恵器壺や土師器甕片が出土した。

SK58012 8区中央で検出した直径80cm、不整形円形の土坑である。深さ35cmを測る。

土師器の小片が出土した。

SX58013（第87図、写真図版65） 8区中央で検出した長方形土坑で、確認は得られていないが、平面形から土壙墓の可能性も考えられる。

掘方は長さ135cm、幅50cmで、深さ22cmを測る。土層観察では、木棺の腐食痕などは確認できなかった。埋土はブロック土混じりのシルト単層である。

北東隅から平安時代後期の土師器甕（828）、中央から土師器杯（827）が出土しており、両者とも完形に近く、正位で底から若干浮いた位置に置かれる。土師器甕は外面に煤が付着しており、使用されたものである。

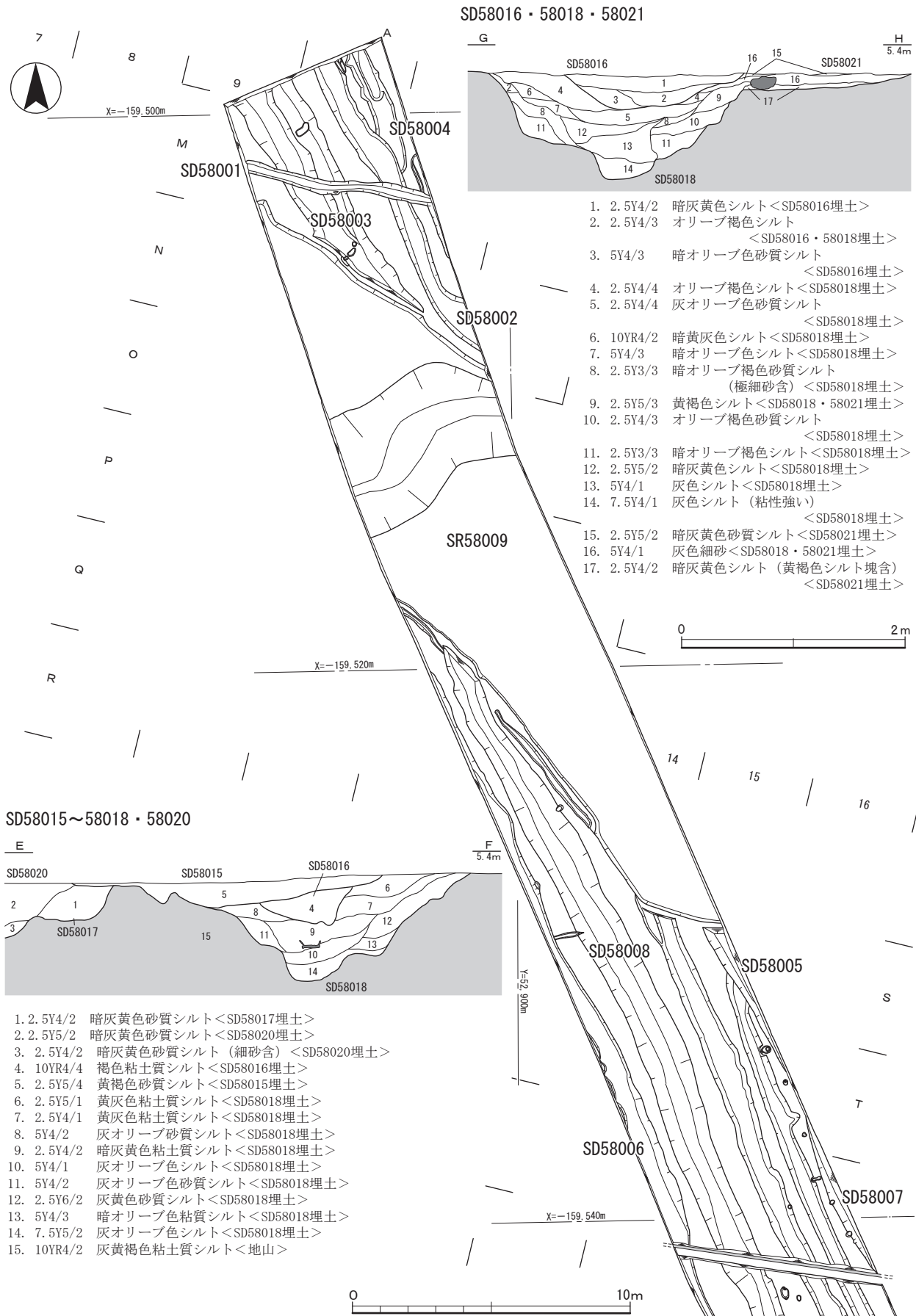
SD58015（第83図、写真図版65） 8区南端付近に広がる深さ20cmの落ち込みで、条里方向に沿った水田の地割である。一部に幅60cmの畦畔がみられた。

SD58018・58020等、南側の溝群を覆っており、出土遺物からも近世の水田と考えられる。

SD58016（第83図、写真図版63・65） 8区南で検出した浅い南北方向の溝である。SD58018の上面で検出し、調査区南端付近で途絶える。SD58018の埋没最終段階を表しているものと考えられる。幅は90cm～1.6m、深さ20cmである。

平安時代の土師器、灰釉陶器、黒色土器等が出土しているが、SD58018出土遺物より若干時期が降る傾向にある。

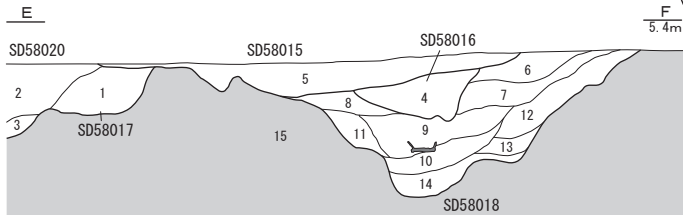
SD58017（写真図版63） 8区南端で検出した溝である。調査区端にあり、後出のSD58020に大半を削



SD58016・58018・58021

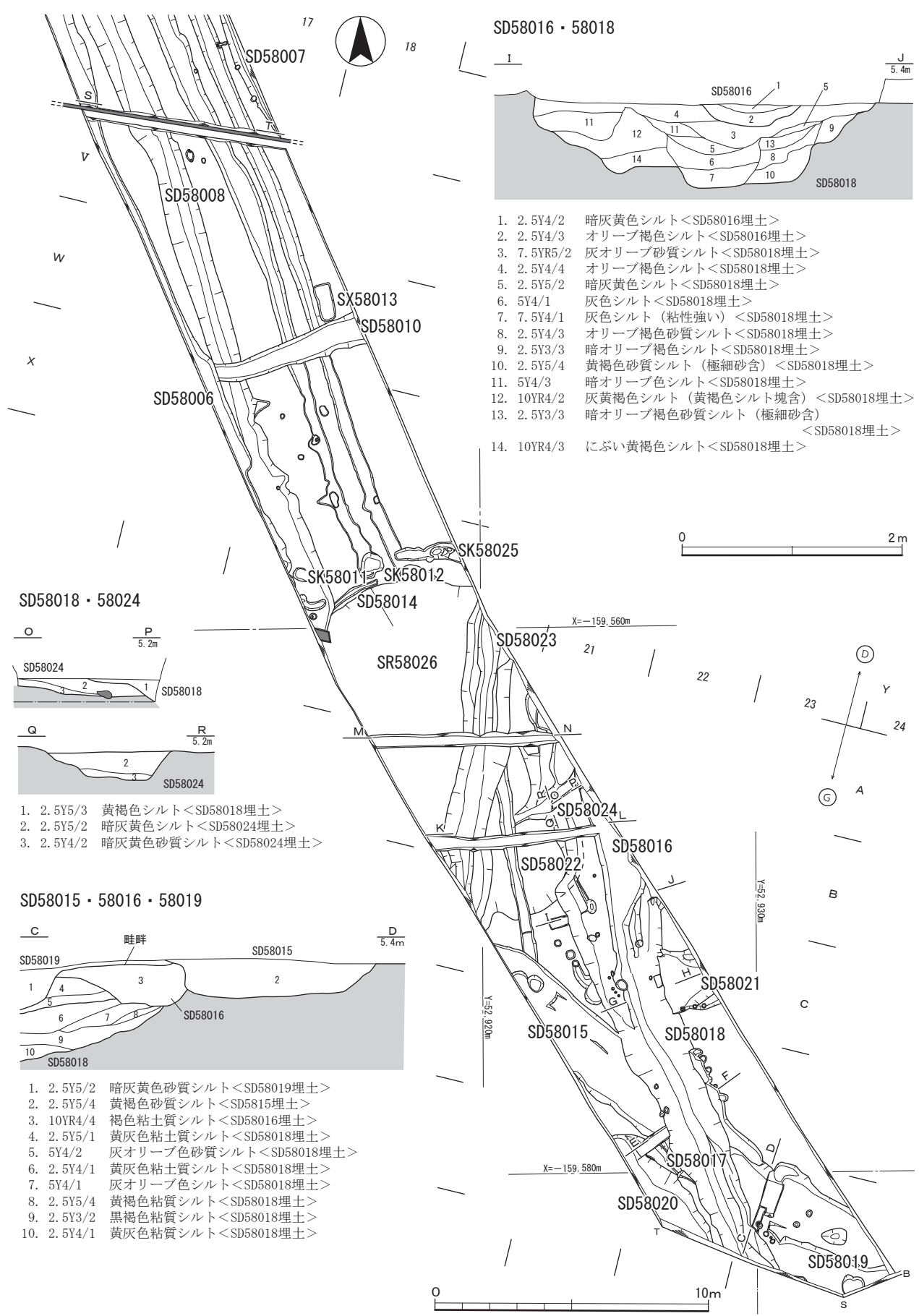
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト<SD58016埋土>
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
<SD58016・58018埋土>
3. 5Y4/3 暗オリーブ色砂質シルト
<SD58016埋土>
4. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト<SD58018埋土>
5. 2.5Y4/4 灰オリーブ色砂質シルト
<SD58018埋土>
6. 10YR4/2 暗黄灰色シルト<SD58018埋土>
7. 5Y4/3 暗オリーブ色シルト<SD58018埋土>
8. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト
(極細砂含) <SD58018埋土>
9. 2.5Y5/3 黄褐色シルト<SD58018・58021埋土>
10. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト
<SD58018埋土>
11. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト<SD58018埋土>
12. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト<SD58018埋土>
13. 5Y4/1 灰色シルト<SD58018埋土>
14. 7.5Y4/1 灰色シルト (粘性強い)
<SD58018埋土>
15. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト<SD58021埋土>
16. 5Y4/1 灰色細砂<SD58018・58021埋土>
17. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (黄褐色シルト塊含)
<SD58021埋土>

SD58015~58018・58020

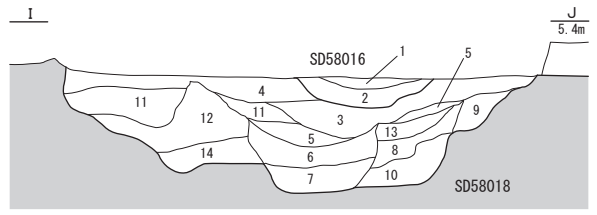


1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト<SD58017埋土>
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト<SD58020埋土>
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト (細砂含) <SD58020埋土>
4. 10YR4/4 褐色粘土質シルト<SD58016埋土>
5. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト<SD58015埋土>
6. 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト<SD58018埋土>
7. 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト<SD58018埋土>
8. 5Y4/2 灰オリーブ砂質シルト<SD58018埋土>
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト<SD58018埋土>
10. 5Y4/1 灰オリーブ色シルト<SD58018埋土>
11. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト<SD58018埋土>
12. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト<SD58018埋土>
13. 5Y4/3 暗オリーブ色粘質シルト<SD58018埋土>
14. 7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト<SD58018埋土>
15. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト<地山>

第 82 図 8 区遺構全体図① (1:200)、S D 58015 ~ 58018・58020・58021 断面図 (1:50)

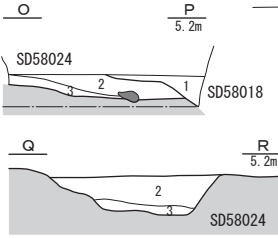


SD58016・58018



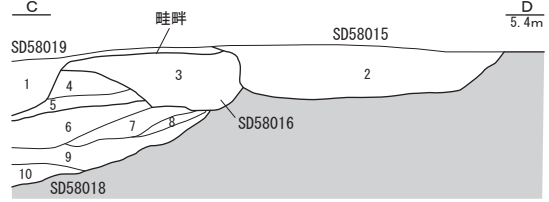
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト<SD58016埋土>
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト<SD58016埋土>
3. 7.5YR5/2 灰オリーブ砂質シルト<SD58018埋土>
4. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト<SD58018埋土>
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト<SD58018埋土>
6. 5Y4/1 灰色シルト<SD58018埋土>
7. 7.5Y4/1 灰色シルト(粘性強い)<SD58018埋土>
8. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト<SD58018埋土>
9. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト<SD58018埋土>
10. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト(極細砂含)<SD58018埋土>
11. 5Y4/3 暗オリーブ色シルト<SD58018埋土>
12. 10YR4/2 灰黄褐色シルト(黄褐色シルト塊含)<SD58018埋土>
13. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト(極細砂含)<SD58018埋土>
14. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト<SD58018埋土>

SD58018・58024



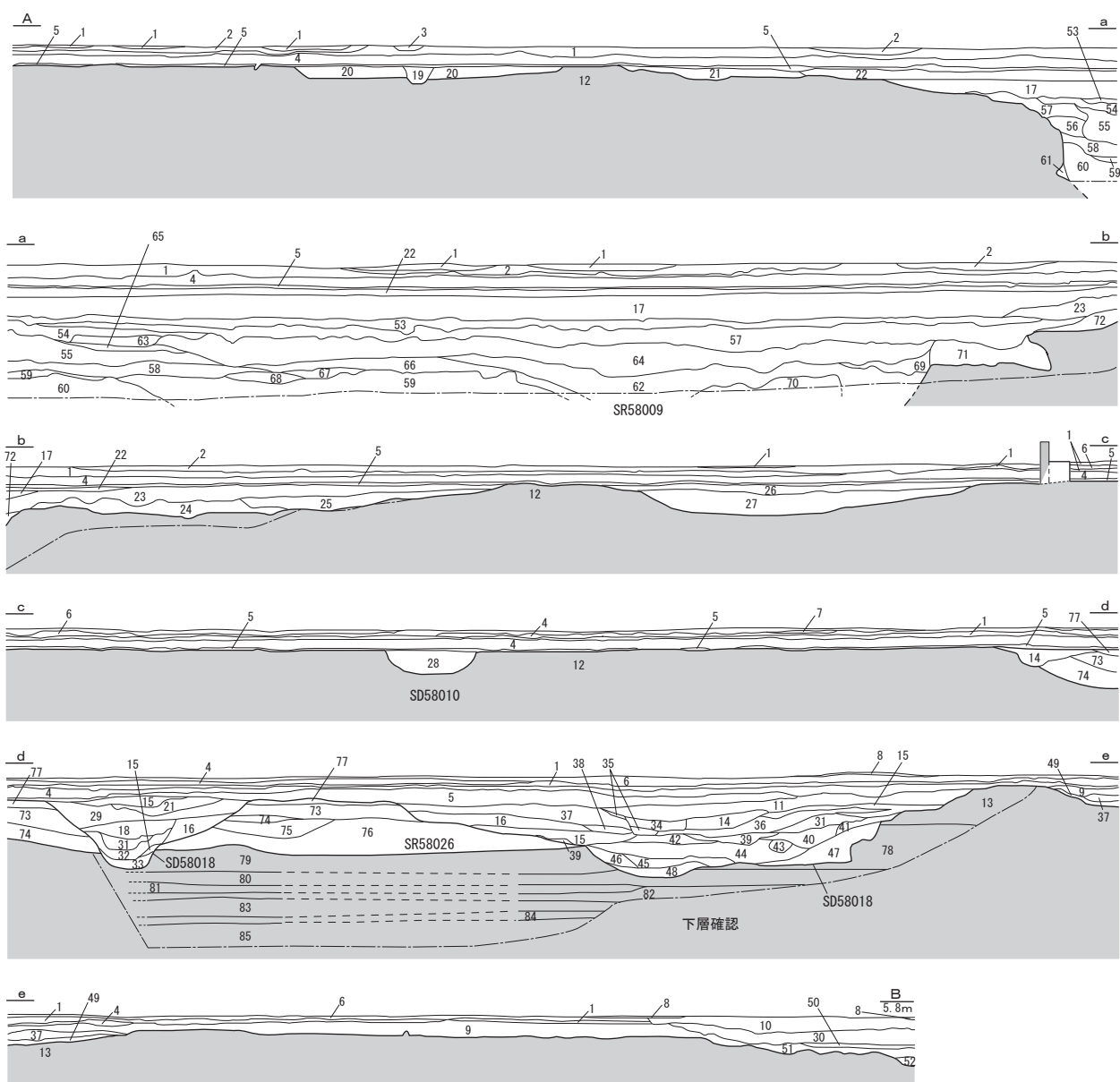
1. 2.5Y5/3 黄褐色シルト<SD58018埋土>
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト<SD58024埋土>
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト<SD58024埋土>

SD58015・58016・58019



1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト<SD58019埋土>
2. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト<SD5815埋土>
3. 10YR4/4 褐色粘土質シルト<SD58016埋土>
4. 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト<SD58018埋土>
5. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト<SD58018埋土>
6. 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト<SD58018埋土>
7. 5Y4/1 灰オリーブ色シルト<SD58018埋土>
8. 2.5Y5/4 黄褐色粘質シルト<SD58018埋土>
9. 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト<SD58018埋土>
10. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト<SD58018埋土>

第 83 図 8 区遺構全体図② (1:200)、SD 58015・58016・58018・58019・58024 断面図 (1:50)



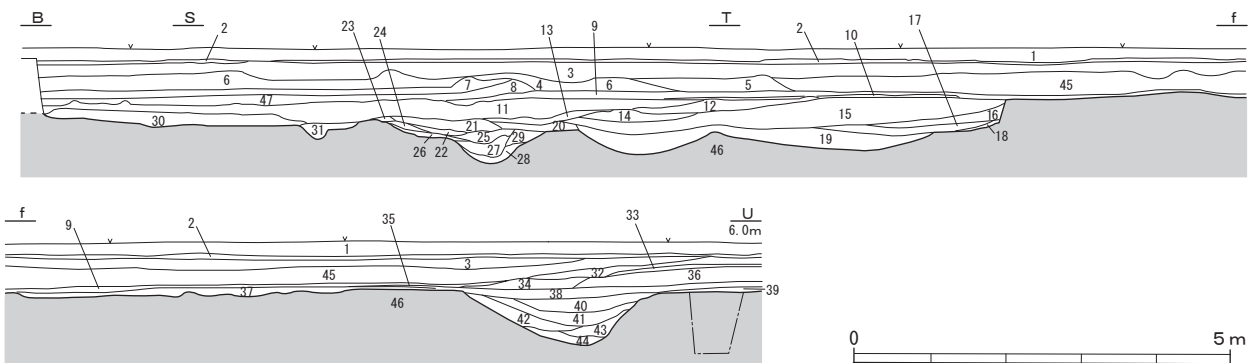
- | | |
|---|---|
| 1. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト<旧耕作土> | 26. 2.5Y6/4 黄色シルト (暗褐色シルト塊含) <SD58007埋土> |
| 2. 2.5Y5/3 黄褐色シルト<床土> | 27. 10YR3/3 暗褐色シルト<SD58007埋土> |
| 3. 5Y6/2 灰オリブ砂質シルト<旧耕作土> | 28. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト+2.5Y5/3黄褐色シルト
(暗褐色シルト含) <SD58010埋土> |
| 4. 2.5Y5/3 黄褐色シルト<旧耕作土> | 29. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト<SD58023埋土> |
| 5. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト<旧耕作土> | 30. 10YR4/4 褐色砂質シルト (黄褐色シルト塊含) |
| 6. 2.5Y5/4 黄褐色シルト<旧床土> | 31. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (明褐色シルト含)
<SD58018・58023埋土> |
| 7. 2.5Y5/4 黄褐色シルト<旧耕作土> | 32. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (明褐色シルト若干含) <SD58023埋土> |
| 8. 2.5Y4/6 オリブ褐色砂質シルト<床土> | 33. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (黄褐色砂質シルト含) <SD58023埋土> |
| 9. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト<旧耕作土> | 34. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト (明褐色シルト含) <SD58016埋土> |
| 10. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト (土器片含) | 35. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト (明褐色シルト含)
<SD58016・58018埋土> |
| 11. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト<旧耕作土> | 36. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト<SD58018埋土> |
| 12. 10YR3/2 黒褐色シルト<基盤層> | 37. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト<SD58018・58021埋土> |
| 13. 10YR4/4 褐色シルト<基盤層> | 38. 2.5Y4/3 オリブ褐色砂質シルト<SD58018埋土> |
| 14. 2.5Y4/3 オリブ褐色シルト<SD58018・58025埋土> | 39. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (明褐色シルト含) <SD58018埋土> |
| 15. 2.5Y5/3 黄褐色シルト<SD58018・58023埋土> | 40. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト (明褐色シルト含) <SD58018埋土> |
| 16. 2.5Y5/4 黄褐色シルト<SD58018・58023埋土> | 41. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (明褐色シルト含) <SD58018埋土> |
| 17. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト<SR58009埋土> | 42. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト (明褐色シルト含) <SD58018埋土> |
| 18. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト<SD58023埋土> | 43. 7.5YR4/3 褐色シルト (粘性やや強め) <SD58018埋土> |
| 19. 2.5Y4/4 オリブ褐色シルト<SD58001埋土> | 44. 10YR5/2 灰黄褐色粘土 (明褐色シルト含) <SD58018埋土> |
| 20. 10YR4/2 灰黄褐色シルト<SD58004埋土> | |
| 21. 2.5Y6/3 灰黄褐色シルト<SD58002・58023埋土> | |
| 22. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト<SR58009埋土> | |
| 23. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト (暗褐色シルト含) <SD58005埋土> | |
| 24. 10YR3/3 暗褐色シルト+2.5Y5/3黒褐色シルト<SD58005埋土> | |
| 25. 10YR3/3 暗褐色シルト (黄色シルト含) <SD58005埋土> | |



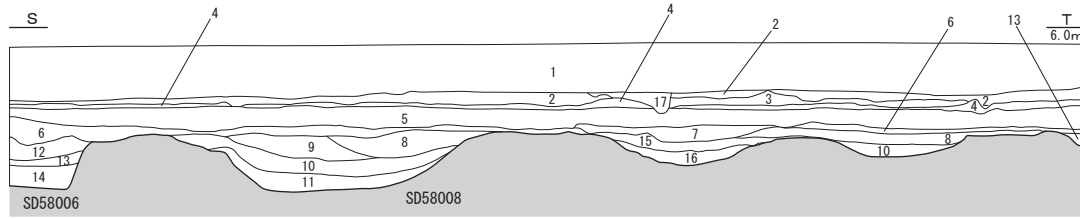
第84図 8区東壁土層断面図 (1:100)

45. 7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト (極細砂多含、明褐色シルト含)
<SD58018埋土>
46. 7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト (明褐色シルト含) <SD58018埋土>
47. 7.5YR5/6 明褐色砂質シルト <SD58018埋土>
48. 7.5YR5/6 明褐色砂質シルト (オリーブ黒色砂質シルト含)
<SD58018埋土>
49. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト (細砂含) <SD58021埋土>
50. 2.5Y5/2 暗灰色砂質シルト (近世遺物含)
51. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (灰色細砂含) <SD58015埋土>
52. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (灰色シルト含) <SD58019埋土>
53. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト (黄褐色砂質シルト含)
<SR58009埋土>
54. 2.5Y4/1 黄灰色シルト (黄褐色砂質シルト含) <SR58009埋土>
55. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト (黄褐色砂質シルト含)
<SR58009埋土>
56. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (粘性強め) <SD58008埋土>
57. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (黄褐色砂質シルト含) <SR58009埋土>
58. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト <SR58009埋土>
59. 5BG4/1 暗青灰色砂質シルト <SR58009埋土>
60. 7.5Y5/1 灰色粘土 (暗褐色+黄褐色シルト含) <SR58009埋土>
61. N/6/1 灰色砂質シルト <SR58009埋土>
62. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト <SR58009埋土>
63. 2.5Y5/1 黄灰色シルト (黄褐色砂質シルト含) <SR58009埋土>
64. 10YR4/1 褐灰色シルト (黄褐色砂質シルト含) <SR58009埋土>
65. 5Y4/2 灰オリーブ砂質シルト (黄褐色砂質シルト含)
<SR58009埋土>
66. 10YR4/1 褐灰色粘土 (黄褐色砂含) <SR58009埋土>
67. 5BG4/1 暗青灰色砂 <SR58009埋土>
68. 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 <SR58009埋土>
69. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト (黄褐色砂含、粘性強い)
<SR58009埋土>
70. 10BG4/1 暗青灰色砂 <SR58009埋土>
71. 5Y5/2 灰オリーブ砂質シルト (黄褐色砂含) <SR58009埋土>
72. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト <SR58009埋土>
73. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (赤褐色シルト含)
<SR58026埋土・検出面>
74. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (赤褐色シルト含) <SR58026埋土>
75. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
(暗褐色シルト・オリーブ褐色シルト多含) <SR58026埋土>
76. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (赤褐色シルト・褐色シルト含)
<SR58026埋土>
77. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (河川堆積) <SR58026埋土>
78. 10YR4/4 褐色シルト
79. 10YR4/6 褐色砂質シルト
80. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト (極細砂含)
81. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト (極細砂含)
82. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (極細砂含)
83. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト
84. 10YR2/1 黒色粘土質シルト (極細砂含)
85. 5Y3/2 オリーブ黒色粘土質シルト

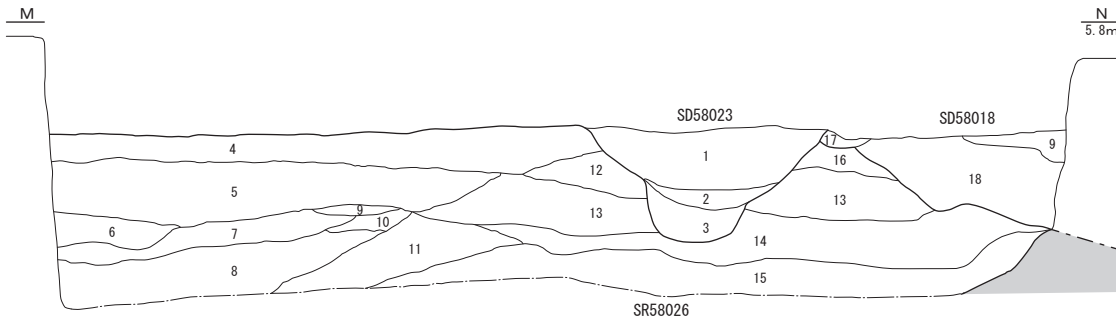
8区南～西壁



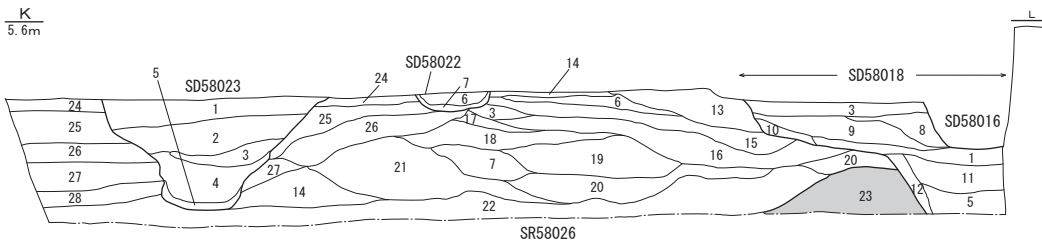
1. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質シルト <耕作土>
2. 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト <床土、東壁の8に対応>
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト (土器片含) <東壁の10に対応>
4. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト
5. 5Y6/4 オリーブ黄色砂質シルト (灰色シルト含)
6. 10YR4/4 褐色砂質シルト (黄褐色シルト塊・土器片含)
<東壁の30に対応>
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト (寛永通宝出土) <東壁の50に対応>
8. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (灰色細砂含)
9. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト <SD58015埋土>
10. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト <旧床土> <SD58015埋土>
11. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (灰色シルト塊含)
<SD58019埋土、東壁の52に対応>
12. 5Y5/2 灰オリーブ色砂質シルト <SD58020埋土>
13. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト (黄褐色シルト・暗褐色シルト含)
<SD58020埋土>
14. 2.5Y6/2 灰黄色シルト (黄褐色シルト塊含) <SD58020埋土>
15. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (黄褐色シルト塊含) <SD58020埋土>
16. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト <SD58020埋土>
17. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂 (鉄分沈着) <SD58020埋土>
18. 2.5Y4/1 黄灰色シルト <SD58020埋土>
19. 2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト (細砂含) <SD58020埋土>
20. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト <SD58020埋土>
21. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト <SD58018埋土>
22. 5Y4/1 灰色砂質シルト <SD58018埋土>
23. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト <SD58018埋土>
24. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (粘性あり) <SD58018埋土>
25. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト <SD58018埋土>
26. 10YR3/3 暗褐色シルト <SD58018埋土>
27. 10YR5/1 褐灰色シルト (粘性あり) <SD58018埋土>
28. 10YR5/6 黄褐色シルト <SD58018埋土>
29. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (粘性あり) <SD58018埋土>
30. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト (灰色シルト塊含) <SD58019埋土>
31. 5Y5/1 灰色シルト <SD58019埋土>
32. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト <旧耕作土>
33. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト <旧床土>
34. 5Y5/2 灰オリーブ砂質シルト <旧耕作土>
35. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト <SD58015埋土>
36. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト <旧耕作土>
37. 5Y5/2 灰オリーブシルト (黄褐色シルト塊含) <SD58015埋土>
38. 2.5Y5/3 黄褐色シルト <河川堆積層>
39. 2.5Y5/6 黄褐色シルト <河川堆積層>
40. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト <SD58023埋土>
41. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (微砂含) <SD58023埋土>
42. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト <SD58023埋土>
43. 2.5Y5/1 黄灰色シルト (粘性あり) <SD58023埋土>
44. 10YR5/1 褐灰色シルト (粘性あり) <SD58023埋土>
45. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト (黄褐色シルト塊含)
46. 10YR4/4 褐色シルト <基盤層>
47. 2.5Y5/3 黄褐色シルト <SD58015埋土、東壁の51に対応>



- | | |
|---|--|
| 1. コンクリート | 10. 10YR4/4 褐色シルト<SD58008埋土等> |
| 2. 2.5Y5/3 黄褐色シルト<旧耕作土> | 11. 10YR3/3 暗褐色シルト<SD58008埋土> |
| 3. 2.5Y5/4 黄褐色シルト<旧耕作土> | 12. 10YR3/2 黒褐色シルト<SD58008埋土> |
| 4. 2.5Y6/4 黄色シルト<旧床土> | 13. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト<SD58006・58007埋土> |
| 5. 2.5Y5/3 黄褐色シルト<旧耕作土> | 14. 10YR3/3 暗褐色シルト(明褐色シルト含)<SD58006埋土> |
| 6. 10YR5/4 黄褐色シルト<旧床土> | 15. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト(暗褐色シルト含) |
| 7. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト<旧耕作土> | 16. 10YR4/2 灰黄色シルト(黄褐色シルト含) |
| 8. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト(灰黄色シルト含)
<SD58008埋土等> | 17. 2.5Y6/2 灰黄色シルト<攪乱> |
| 9. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト<SD58008埋土> | |



- | | |
|---|--|
| 1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト<SD58023埋土> | 10. 5Y4/1 灰色砂質シルト<SR58026埋土> |
| 2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト<SD58023埋土> | 11. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト<SR58026埋土> |
| 3. 2.5Y5/1 黄灰色シルト<SD58023埋土> | 12. 5Y4/3 暗オリーブシルト<SR58026埋土> |
| 4. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト<SR58026埋土> | 13. 5Y4/2 灰オリーブシルト(黄褐色シルト塊含)<SR58026埋土> |
| 5. 2.5Y5/3 黄褐色シルト<SR58026埋土> | 14. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト(黄褐色シルト塊含)<SR58026埋土> |
| 6. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト<SR58026埋土> | 15. 5Y5/1 灰色シルト<SR58026埋土> |
| 7. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト<SR58026埋土> | 16. 10YR5/2 灰黄褐色シルト(灰黄色シルト塊含)<SR58026埋土> |
| 8. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト<SR58026埋土> | 17. 10YR4/4 褐色シルト<SD58018埋土> |
| 9. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト<SR58026、SD58018埋土> | 18. 10YR3/3 暗褐色シルト(黄灰色シルト塊多含)<SD58018埋土> |



- | | |
|---|--|
| 1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト<SD58023・58018埋土> | 15. 10YR5/2 灰黄褐色シルト(灰黄色シルト塊含)<SR58026埋土> |
| 2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト<SD58023埋土> | 16. 2.5Y5/3 黄褐色シルト(黄色シルト塊含)<SR58026埋土> |
| 3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト<SD58023・58018・SR58026埋土> | 17. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト(黄褐色シルト塊含)<SR58026埋土> |
| 4. 2.5Y5/1 黄灰色シルト<SD58023埋土> | 18. 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂質シルト<SR58026埋土> |
| 5. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト<SD58023・28018埋土> | 19. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト(黄褐色シルト塊・灰黄色シルト塊含)
<SR58026埋土> |
| 6. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト<SD58022・SR58026埋土> | 20. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト(黄褐色シルト塊含)<SR58026埋土> |
| 7. 2.5Y6/2 灰黄色シルト<SD58022・SR58026埋土> | 21. 5Y4/2 灰オリーブシルト(黄褐色シルト塊含)<SR58026埋土> |
| 8. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト<SD58018埋土> | 22. 5Y5/1 灰色シルト<SR58026埋土> |
| 9. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト(黄褐色シルト塊含)
<SD58018埋土> | 23. 10YR4/4 褐色シルト<基盤層> |
| 10. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト<SD58018埋土> | 24. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト<SR58026埋土> |
| 11. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト<SD58018埋土> | 25. 2.5Y5/3 黄褐色シルト<SR58026埋土> |
| 12. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト(黄褐色シルト塊含)<SD58018埋土> | 26. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト<SR58026埋土> |
| 13. 10YR3/3 暗褐色シルト(黄灰色シルト塊多含)<SR58026埋土> | 27. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト<SR58026埋土> |
| 14. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト<SR58026埋土> | 28. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質シルト<SR58026埋土> |



第 86 図 8 区東西土層図断面図 (1:100)

平されるため詳細は不明である。埋土は砂質シルトで、深さは検出面から 30 cm 程度である。

S D 58018 (第 83 図、写真図版 63・65) 8 区南で検出した南北方向の溝で、S R 58026 の埋没後に掘削されている。幅は 1.2 ～ 2.2 m で、北東へ向かうにつれ幅を広げる。深さは 70 cm 前後である。埋土はシルト主体で、砂は含まれない。

土層断面観察によれば、一定埋没が進むごとに再掘削され、次第に規模を縮小させている。最終的に、最上層に S D 58016 が形成される。

出土遺物は、飛鳥～奈良時代から平安時代末のものを含むが、主体は平安時代中期の土師器、黒色土器、灰釉陶器等である。なかでも、墨書土器「平成」(876)の出土が特筆されよう。志摩式製塩土器や土錘なども出土した。

以上から、平安時代中期以降に機能した溝と考えられるが、先行する S R 58026 との時期差はほとんどなく、S R 58026 埋没後、間もなく S D 58018 が掘削されたと考えられる。

S D 58019 (第 83 図) 8 区南端で検出した浅い溝である。調査区内で幅 1.5 m、深さ 30 cm 程度である。

土師器や山茶碗が出土した。

S D 58020 (第 82 図) 8 区南西端で検出した溝である。調査区内で幅 2 m、深さ 50 cm 以上である。埋土は、2 層に分かれ、下層には細砂を含む。

中世 IV 期の土師器鍋等が出土している。

S D 58021 (第 82 図、写真図版 65) 8 区南で検出した東西方向の溝で、S D 58018 に合流する。深さは 15 cm と浅い。

平安時代後期の遺物が出土している。

S D 58022 (第 86 図) 8 区南部で検出した溝で、S D 58023 と合流している。S R 58026 埋没後に形成された遺構である。幅 50 cm、深さ 10 cm である。

埋土はシルト主体で、中世の陶器鉢などが出土している。

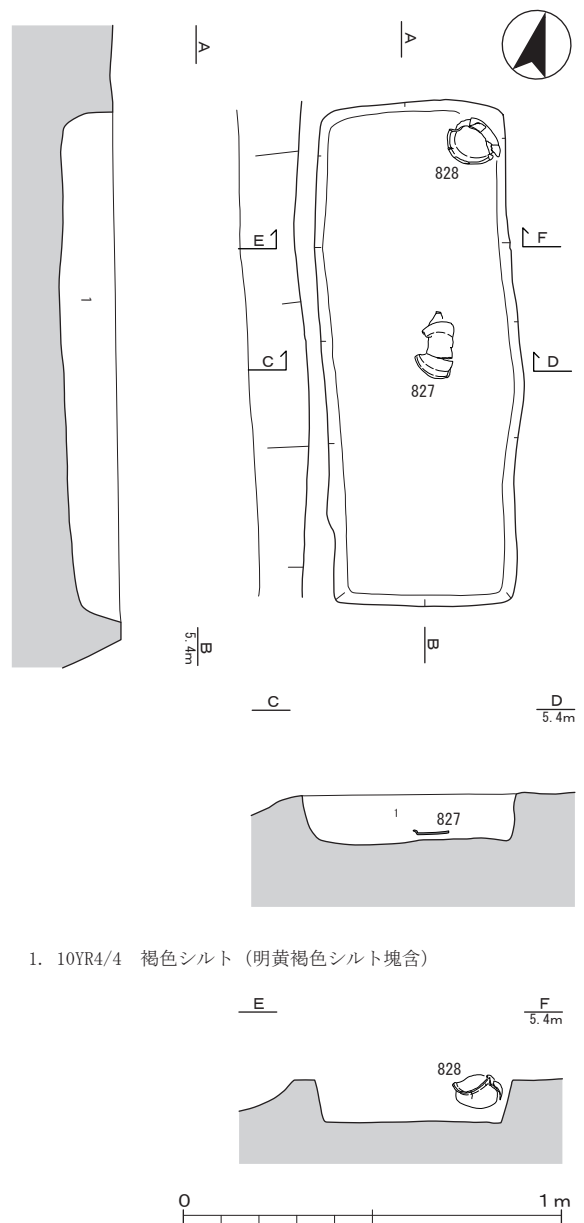
S D 58023 (第 86 図、写真図版 65) 8 区南で検出した条里南北方向の溝である。幅 1.6 m、深さ 70 cm で、中央が一段深く、一定埋没した後に拡張されたと思われる。

中世の山茶碗等が出土している。

S R 58026 (第 86 図) 8 区南で検出した自然流路で

ある。幅約 13 m、深さ 1 m 以上で、完掘は断念した。東西方向の流路にみえるが、調査区東壁付近は浅くなり、この付近で大きく蛇行している可能性が高い。埋土はシルト～砂質シルトで、砂や礫は少ない。埋没後、S D 58018・58023 等の溝群が形成される。

埋土から平安時代中期の土師器が出土した。



1. 10YR4/4 褐色シルト (明黄褐色シルト塊含)

第 87 図 S X 58013 (1:20)

11. 9区（第88～93図）

（1）概要

遺跡北部、立田集落の南側にある南北方向の調査区で、北側は6次3-4区、西側は7次9区、南側は1次4区と接する。

遺構は現代耕土・床土直下（地表下30cm）のにぶい黄橙色砂質シルト層上で検出した。調査区南側は有機物の多い褐色シルト層上で遺構面で、南東-北西方向に走る溝が多数みられる。また、SD 59010以北は平安時代の掘立柱建物や土坑が多数認められる。建物には大型建物SB 59044が含まれ、ピットからの遺物量も多く、6区・7区と並んで建物が密集するエリアである。ただし、SB 59044ピットの遺存状況から、一帯は50～60cm程度削平されているとみられ、小規模な建物や一部の柱列は把握しがたい。

調査区中央は弥生時代終末期～古墳時代の自然流路SR 59020・59055が南東-北西方向に走る。SR 59055は、幅約22mの大規模な流路である。同方向の溝は、奈良・平安時代にも多数存在しており、水路が長期にわたり踏襲され続けたことがわかる。

下層確認は調査区東壁沿いの南北2ヶ所で実施した。北側は遺構面から約3m下で自然木を多く含む暗色の泥層となった（東壁北部20・21層）。湿地の堆積であろう。南側（写真図版70）は遺構面から2.6m下で礫層（東壁南部37層）に達し、やや上位に黒色シルトの暗色帯（同35層）がみられた。

各層とも縄文時代の遺物は希薄であった。

（2）遺構

SD 59001 ク-O5グリッドで検出した、長さ3mほどの溝である。幅60cm、深さは検出面から10cmに満たない浅いものである。方向は条里に沿う。

平安時代末の遺物が出土した。

SD 59002 調査区北東端をやや蛇行しながら北流する溝である。幅30～40cm、深さは25cm程度で、断面形はV字にちかい。

平安時代後期の土師器が出土している。

SD 59003 調査区北部で検出した延長約6m、幅1m前後、深さ10cm未満の溝である。北東の延長上にあるSD 59004と一連の溝である可能性が高い。

鉄滓（909）が出土している。

SD 59004 SD 59003の延長にあたる溝である。幅約50cm、深さ約10cmを測る。SD 59003・59004とも平安時代後期の土師器が出土した。

SD 59005・59008 9区北東端で検出した溝である。当初、2条の溝として把握したが、掘削の過程で同一のものであることが分かった。調査区端のため、全幅は不明であるが、断面形からの推測で幅3mに達するとみられる。深さも1mに及ぶ大規模な溝である。6次調査で延長を確認している。

平安時代末～鎌倉時代の遺物が出土した。

SD 59006 9区北で検出した東西方向の小溝で、調査区東端付近で鉤状に屈曲する。幅20cm、10～20cmを測る。SD 59007より後出の遺構である。

平安時代後期～末の遺物が出土した。

SD 59007（第93図） 9区北で検出した東西方向の溝である。幅30cm、深さ20cmを測り、断面形はV字形である。SB 59051、SD 59006に先行する遺構で、南にあるSB 59041と方位が揃い、区画溝の可能性はあるが、主体となる遺物の時期は若干異なる。

完形の土師器杯など、平安時代後期の土師器が出土した。

SD 59009 ク-S5グリッドで検出した不定形な溝である。大半が調査区外にあり、土坑の可能性もある。幅約50cm、深さは10cm未満の浅いもので、方向は条里に沿う。

SD 59010 9区中央部を東西に横切る溝で、SR 59055の上面にある。幅1.5m前後、深さ約40cmを測る。埋土は粗砂や小礫を含むシルトが主体で、急激に埋没したようである。古墳時代の土器が出土している。

SD 59011（写真図版68） 9区中央を東西に横断する溝で、SR 59055の上面にある。幅1.5m、検出面からの深さは50cmを測る。埋土は3層に分かれ、いずれもシルトである。

飛鳥～奈良時代の遺物が出土した。

SD 59012（写真図版68） 9区中央を東西に横切る溝で、SR 59055の上面にある。幅は3m、深さ40cmで、幅に比して非常に浅いものである。

平安時代後期の土師器などが出土した。

SK 59013 9区中央東端で検出した不整形土坑である。深さは5cm未満の浅いものであるが、奈良時代の土師器などが比較的多く出土した。

SD 59014 調査区中央部を東西に横断する溝であるが、北岸は後世の溝に侵食されている。深さは約 25 cmで溝底は平坦である（第 89 図）。埋土はシルトの単層である。

SK 59015 調査区南で検出した長さ 2.2 m、幅 80 cmの楕円形土坑である。深さは約 20 cmの浅いものである。長軸方向は条里に沿う。平安時代中期の土器が出土した。

SD 59016 調査区南、ク-Yラインで検出した東西方向の大溝である。南岸はSD 59017に切られるが、幅 3～4 m、深さは 90 cmに達する。

埋土は上下 2 層に分かれ、砂または砂質土で埋没する。古墳時代、古代の土器が出土した。

SD 59017 9区南、D-Aラインで検出した東西方向の溝である。SD 59016より後出の遺構で、幅 2.6 m、深さは 80 cmで、断面形はV字状にちかい。埋土には砂や小礫を含む。

古代の土師器などが出土した。

SD 59018 調査区南端で検出した南北方向の溝である。SD 59023に切られる。幅 60～30 cm、深さは 10 cmに満たない。平安時代の灰釉陶器が出土した。

SD 59019 9区南、D-Aラインで検出した東西方向の溝である。幅 70 cm、深さは 24 cmで、緩やかにカーブする。埋土は上下 2 層に分かれ、いずれもシルトである。古代の土師器片が出土している。

SR 59020 9区中央、ク-Xラインで検出した流路または溝である。幅 1.5～2.5 m、深さ約 70 cmを測る。埋土はシルトで、最下層は還元色を呈する。上面に奈良時代のSB 59049・59050があり、それ以前の遺構と推測される。

SF 59021（第 93 図、写真図版 70）9区南で検出した隅丸長方形の火処で、掘方は長さ 90 cm、幅 60 cm、深さが 5 cmである。底面中央が直径 30 cmの円形に被熱する。土坑西側から奈良時代の長胴甕などが出土しており、竪穴住居のカマド残欠の可能性が高い。

本遺構に重複して不定形土坑SK 59013があり、付近に奈良時代の竪穴住居が存在したとみられる。

SD 59022（写真図版 68）調査区中央、ク-Vラインで検出した溝である。当初、SD 59012と一体としていたが、断面観察の結果、別遺構と判断した。北側がSD 59012に切られるが、幅 2.5 m前後と推測さ

れる。深さは約 50 cmで、埋土はシルト主体である。

古代の土師器などが出土している。

SD 59023（第 93 図、写真図版 69・70）9区南端で検出した溝で、並行する 3 条（SD 59027・59035）の内で最も後出の溝である。幅 1.4 m、深さ 40 cmを測る。埋土は最下層が砂、他はシルトで、一定埋没した後に掘り返されている。

平安時代後期～末の土師器や灰釉陶器が出土した。

SK 59024・59025 9区中央、ク-W 6 グリッドで検出した、隣接する 2 基の土坑である。直径 60 cm～1.5 mの楕円または不整形円形を呈し、深さは約 10 cmと浅いものである。

いずれも奈良時代の遺構と考えられる。

SK 59026・59028 9区中央、ク-X 6 グリッドで検出した 2 基の土坑である。直径 60 cm～90 cmの不整形円形を呈し、深さは 10～20 cm程度の浅いものである。

SK 59024・59025と同じく、奈良時代の遺構と推測される。

SD 59027（第 93 図、写真図版 69・70）9区南端で検出した南北方向の溝である。幅約 2 m、深さ 40～50 cmを測り、溝肩は緩やかに立ち上がる。近接して同方向の溝SD 59035・59023があり、遺構の形成はSD 59035、SD 59027、SD 59023の順である。

北岸を中心に杭の痕跡が無数にあり、護岸がなされていたとみられる。

埋土はシルトが主体で、遺物は奈良時代・平安時代前～中期のものが混在しており、完形品など比較的残存度の良好な土師器碗や皿が出土している。「平」を記した墨書土器が、複数出土した点は特筆されよう。

SD 59029 調査区南端を東西に横切る小規模な溝である。幅 40 cm、検出面からの深さは 10 cmに満たない。条里方向に沿っており、中世の遺構である可能性が高い。SD 59018より後出の遺構である。

SK 59030・59031 調査区南で検出した、隣接する 2 基の土坑である。両者ともSD 59023により北半を欠失している。短径は 60 cm、長径は 1 m以上に及ぶものと推測されるが、溝の可能性もある。深さは 20～40 cmを測る。古代の土師器片が出土した。

SD 59032 調査区南西、D-C 5 グリッドで一部を検出した溝である。深さ 10 cm程度の浅いものである。

奈良時代から平安時代後期の遺物が混在しており、墨書土器「□平」などが出土している。

S K 59033・59041 (第93図、写真図版70) 調査区北部で検出した重複する2基の小土坑である。S K 59033は直径60 cmの円形で、深さ50 cmを測る。S K 59041は平面形直径70 cm、深さ40 cmで、遺構の切り合いからS K 59041が先行する。

両者とも埋土下層に薄い炭層が認められ、S K 59033から焼骨片が出土しているが、側壁や底面は赤化しておらず、火を用いたとしても弱いものであろう。

S K 59033上層では土師器杯がみられたが、他にも平安時代後期の土師器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、土錘6個体などが出土した。この2基の土坑は、建物廃絶時の地鎮がみられるS B 59051の内部にあることから、地鎮関連遺構の可能性があろう。

S K 59034 (第93図) 9区北で検出した長さ1.9 m、幅90 cmの不整形な土坑である。深さ10 cm程度と浅い。大型建物S B 59044内に位置し、小片ではあるが緑釉陶器の皿(1022)が出土している。他に、土錘が7個体出土しており注目される。

S D 59035 (第93図、写真図版69) 9区南端、S D 59027と一部重複する溝で、S D 59027に先行する。幅1.2 m、深さ40 cmを測る。埋土はシルト・砂質シルト主体で、奈良～平安時代前期の土師器が出土した。

S D 59036 調査区中央で検出した溝である。調査区外から南西へ3 mほど延びた地点で途切れる。幅20 cm、深さは10 cm程度である。同様な規模のS D 59006と直交しており、関連する区画溝の可能性はある。

平安時代の土師器片が出土した。

S K 59037 調査区北部で検出した不定形な土坑である。深さは5 cm未満で削平により痕跡をとどめる程度である。古代の長胴甕片が出土しており、S K 59013と同様に、竪穴住居の痕跡かもしれない。

S K 59039 (第93図、写真図版67) 9区中央、S B 59045内で検出した長さ2.1 m、幅1.5 mの隅丸方形の土坑である。深さ20 cm程度で、埋土は砂質土とシルトの上下2層に分かれる。平安時代後期の土師器や灰釉陶器が出土した。なお、北側と南西側に、不定形なS K 59040・S K 59038が接する。

S B 59042 (第91図) 9区北で梁行2間、桁行1間分を確認した側柱建物である。主軸はN22° E、ピット

掘方は直径20～30 cmの円形で、柱間寸法は2.1 m(7尺)である。

平安時代後期の土師器や灰釉陶器が出土した。

S B 59043 (第91図、写真図版68) 9区北で梁行2間、桁行1間分を確認した建物である。主軸はN11° Eをとる。ピット掘方は直径20～30 cmの円形で、柱間寸法は2.1 m(7尺)の等間である。

平安時代中期の土師器が出土しており、重複するS B 59042に先行する建物とみられる。

S B 59044 (第92図、写真図版67) 9区中央で検出した大型の掘立柱建物である。身舎は3間以上×2間、主軸はN5° Eの東西棟で、北側に庇が付く。建物の規模や出土遺物から、この付近の中心的な建物と推測される。

身舎のピット(P1～P8)は掘方一辺80 cm～1 mの方形で、妻側柱P4は一辺45 cmである。間仕切りや束柱は確認できない。ピットは深さ15～25 cm程度しか残存せず、一帯は大きく削平を受けた可能性が高い。柱痕跡は直径約25 cmで、抜き取り痕もみられるが、同位置で建て替えた形跡はない。柱間寸法は2.1 m(7尺)等間である。

北側の庇(P9～12)は、直径30 cmのピットで構成される。庇の北側には平行する溝S D 59007があり、S B 59044に対応する区画溝の可能性はある。

ピット掘方・抜き取り痕から、平安時代中期の土師器や灰釉陶器、緑釉陶器が出土した。

S B 59045 (第92図) 9区中央で検出した2間以上×2間の側柱建物である。主軸はN21° Eの東西棟で、9区の建物のなかでは条里方向に比較的近く、15 m北にあるS B 59042と棟方向が揃う。

ピット掘方は直径25 cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径15 cmの円形である。柱間寸法は2.1 m(7尺)等間である。ピットから平安時代後期の土師器、土錘が出土している。建物内にはS K 56038・59039などの不定形な土坑があり、概ね同時期の遺構である。

S D 59046 調査区北東端付近を蛇行する溝である。幅25 cm、深さは検出面から10 cm程度の浅いもので、古代の土師器片が出土している。

S K 59047 調査区北端で検出した土坑である。調査区端のため全形は不明であるが、隅丸方形を呈すると推測される。

S A 59048 (第 92 図) S B 59044・59045 付近で 4 間分を検出した条里南北方向の柱列である。調査区外へ続き、掘立柱建物となる可能性もあろう。主軸は N15° E で、ピット掘方は直径 35～50 cm の円形または隅丸方形である。直径 15 cm の柱痕跡を検出しているが、上部に拳大の礫を置くものが多いことから、柱は抜き取られたと考えられる。柱間寸法は 2.4 m (8 尺) 等間である。ピットから平安時代後期の土師器等が出土した。

S B 59049・59050 (第 91 図) 9 区中央で検出した桁行 3 間、梁行 2 間の側柱建物である。主軸は N20° W の南北棟で、2 棟が重複しており、同位置での建替えとみられる。ピットは直径 35～50 cm の円形で、柱間は 1.5 m (5 尺) の等間である。

古墳時代の溝 S D 59016 埋没後の遺構で、奈良時代の土師器が出土している。

S B 59051 (第 92 図、写真図版 70) 9 区中央で検出した梁行 2 間、桁行 1 間以上の側柱建物で、主軸は N4° E の東西棟とみられる。ピット掘方は直径 30～50 cm の円形で、柱痕跡は直径 20 cm 前後、柱間寸法は 2.4 m (8 尺) である。

主に西側柱のピット 3 基 (P1～P3) から平安時代後期の土師器が出土しており、いずれも建物廃絶時の地鎮に伴う土器の埋納であろう。特に北西隅の P1 では、上層から完形の土師器杯 17 枚、ロクロ土師器皿 1 枚が折り重なるように出土した。また、最下層の柱当たり付近に正位で 1 枚を置く。土器は正位のものが多いが、逆位のものも含まれる。この他にも土師器杯片が多数出土しており、埋納された土師器杯の数はさらに多かったと推測される。

P2・P3 でも、柱抜き取り後とピット埋没後に土師器杯を埋置したとみられる。

S K 59052 (第 93 図) 調査区中央部で検出した小ピットで、直径 30 cm、深さ 20 cm を測る。

底部から土師器杯と黒色土器碗 (1102・1103) が出土した。

S K 59053 (第 93 図) 9 区北、S B 59043 の内側で検出したやや大型のピットである。一辺 80 cm の方形で、柱痕跡に相当する位置から拳大の石が出土している。周囲に並ぶピットはない。平安時代後期の土師器などが出土した。

S K 59054 調査区中央で検出した、南北に 2 m ほど延びる溝状の不定形な土坑である。幅は南端で 40 cm を測るが、北端では 10 cm 未満まで狭まる。深さも検出面から 10 cm 未満の浅いものである。

S R 59055 9 区中央で確認した幅約 22 m の自然流路で、南東―北西方向に流れる。調査区東壁での断ち割りによる土層の確認に留め、完掘はしていない。

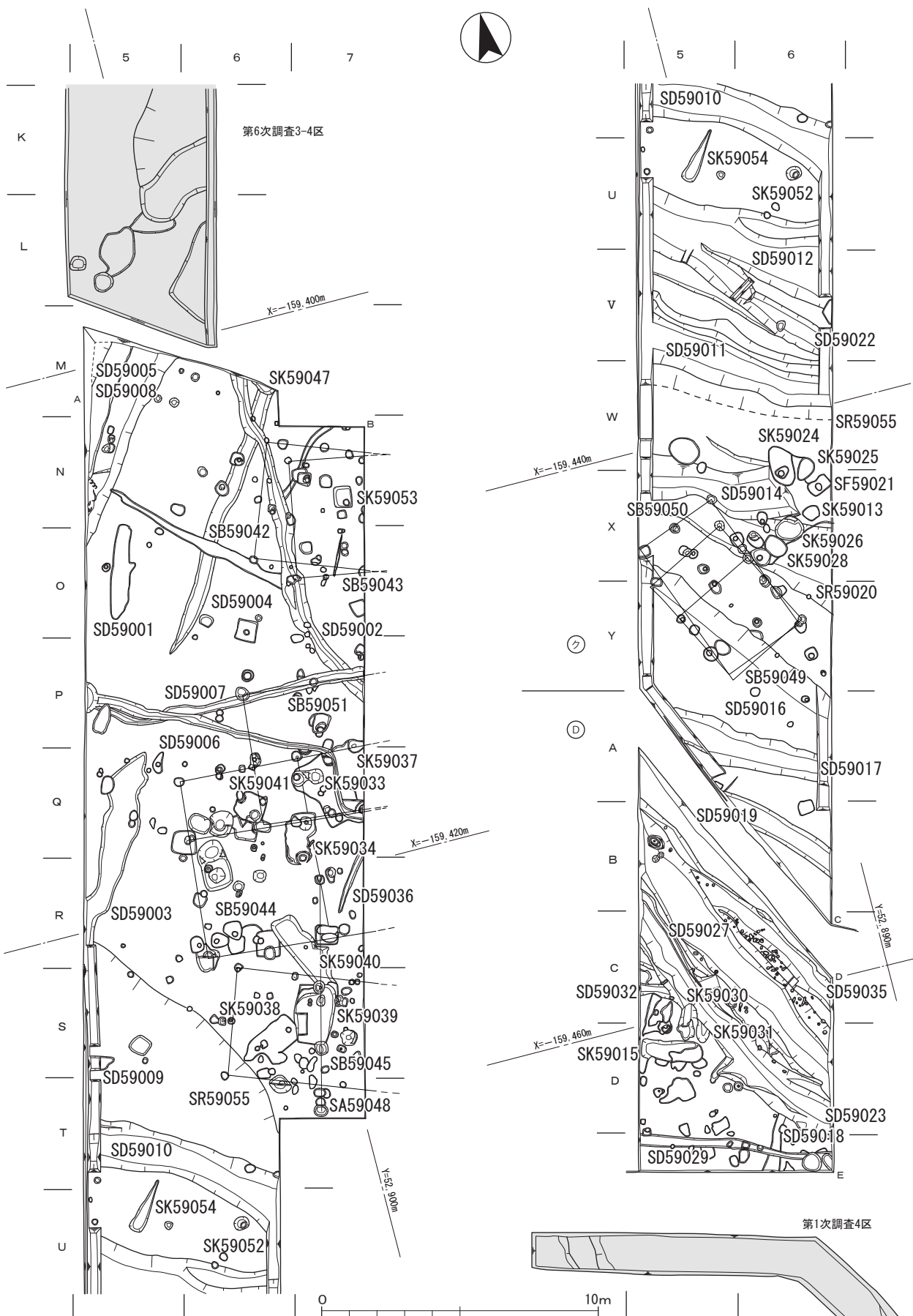
埋土は下層が細砂と粗砂の互層、上層が細砂で (第 89 図)、埋没の最終段階には、上面に数条の溝が形成されたようである。南側に接する S R 59020、S D 59016 もこうした溝のひとつであろう。

遺物は出土していないが、7-1 区や 4 区でも確認した、弥生～古墳時代の自然流路とみられる。

9 区北の平安ピット・土坑埋土に砂が多く混じるのは、本流路のオーバーフローが基盤となったためであろう。
(櫻井・森川)

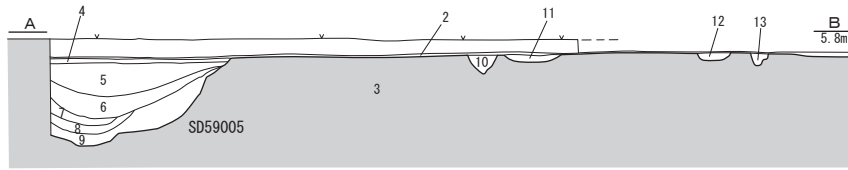
註

- (1) 三重県松阪農林商工環境事務所・協和地研株式会社『朝見上地区県営経営体育成基盤整備事業地質調査業務委託報告書』2011 年。
- (2) 三重県埋蔵文化財センター『堀町遺跡 (第 5 次) 発掘調査報告』2015 年。
同書中で遺跡周辺のボーリングデータを示している。
- (3) 松阪市建設部建築課・協和地研株式会社『松阪市立朝見小学校校舎改築工事に伴う地質調査』1998 年。
- (4) 松阪市建設部建築住宅課・協和地研株式会社『松阪市立掃水小学校校舎改築に伴う地質調査報告書』1999 年。
- (5) 丸栄調査設計株式会社『松阪市立機殿小学校屋内運動場新築に伴う地質調査報告書』松阪市、1981 年。
なお、註 3～5 のボーリングデータは松阪市教育委員会教育総務課および松阪市営繕課より提供を受けた。
- (6) 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告 I』2001 年。
- (7) 伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古 2、2008 年。



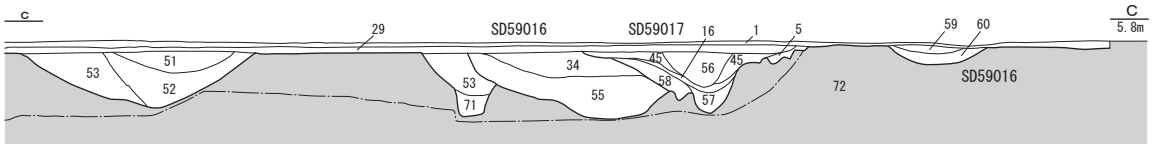
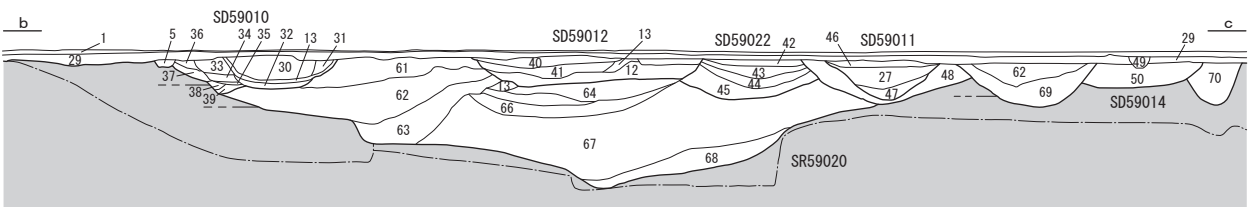
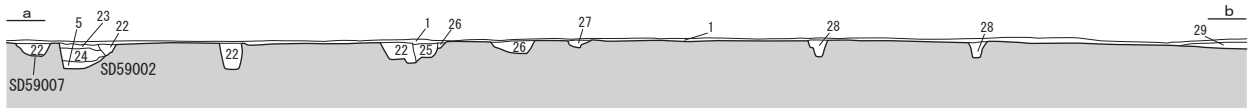
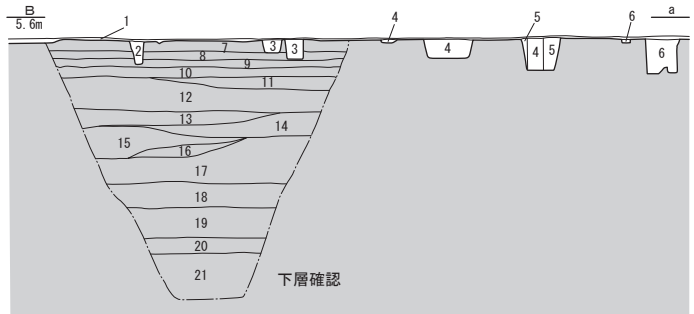
第 88 図 9 区遺構全体図 (1:200)

北壁



- | | |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 1. 10YR5/1 褐灰色砂質土<耕作土> | 8. 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト<SD59005埋土> |
| 2. 7.5YR6/8 橙色粘質土<床土> | 9. 10YR4/6 褐色砂質シルト<SD59005埋土> |
| 3. 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト (小石含) <基盤層> | 10. 10YR4/6 にぶい黄褐色砂質シルト<SD59002埋土> |
| 4. 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質土<SD59005埋土> | 11. 10YR5/4 明黄褐色シルト<SD59004埋土> |
| 5. 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質土<SD59005埋土> | 12. 10YR5/2 灰黄褐色シルト<SD59046埋土> |
| 6. 10YR5/4 にぶい黄橙色砂質シルト<SD59005埋土> | 13. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 |
| 7. 10YR5/3 にぶい黄橙色砂質シルト<SD59005埋土> | |

東壁北部



- | | |
|---|--|
| 1. 7.5YR6/8 橙色粘質土<床土> | 14. 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト |
| 2. 10YR5/3 にぶい黄橙色砂質土 | 15. 10YR6/8 明黄褐色粘質シルト |
| 3. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 | 16. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト<SD59017埋土他> |
| 4. 10YR3/2 黒褐色砂質土<SB59043埋土他> | 17. 10YR5/8 黄褐色粘質シルト |
| 5. 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト<SD59002埋土他> | 18. 10YR4/6 褐色粘質シルト |
| 6. 10YR3/4 暗褐色砂質土 | 19. 10G5/1 緑灰色シルト |
| 7. 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト<基盤層> | 20. 5BG3/1 暗青灰色砂質シルト |
| 8. 10YR7/8 黄褐色シルト | 21. 5P3/1 暗紫灰色砂質シルト (自然木含) |
| 9. 10YR7/2 にぶい黄褐色シルト | 22. 10YR4/1 褐灰色砂質土<SD59002・59007・SB59044柱穴埋土他> |
| 10. 7.5YR4/3 褐色シルト | 23. 10YR5/6 黄褐色シルト<SD59002埋土> |
| 11. 10YR7/4 にぶい黄橙色シルト | 24. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト<SD59002埋土> |
| 12. 10YR4/4 褐色砂質シルト<SD59012他埋土> | |
| 13. 10YR4/3 にぶい黄橙色砂質シルト<SD59010・59012他埋土> | |

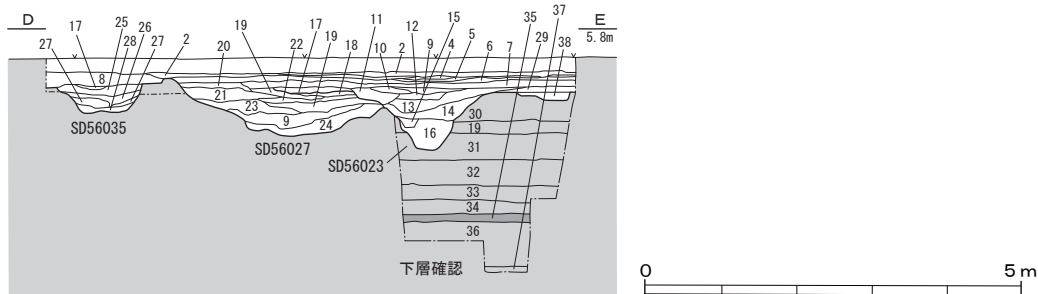


第 89 図 9 区北壁・東壁土層断面図① (1:100)

東壁北部

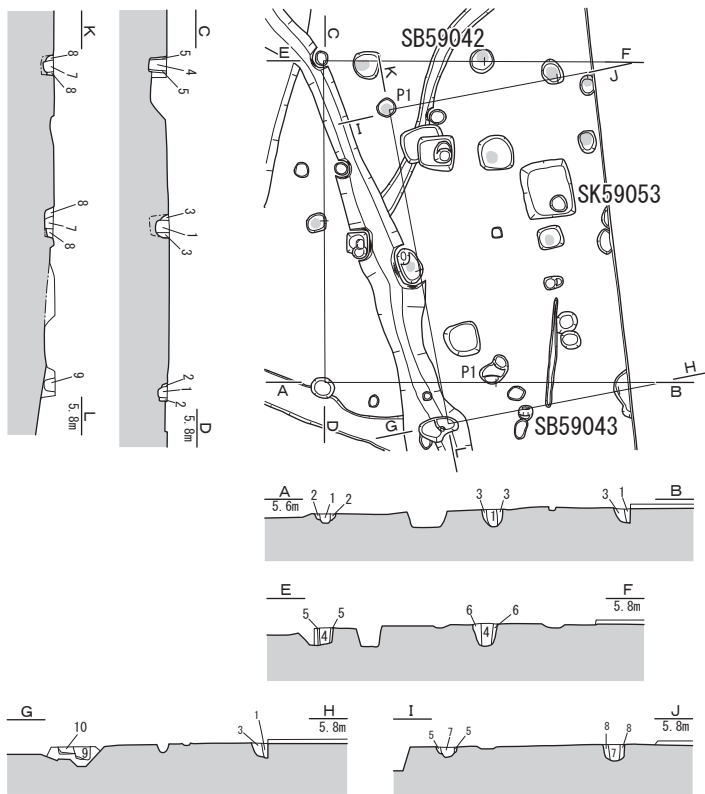
- | | |
|---|---|
| 25. 10YR4/2 灰黄褐色シルト<SD59006埋土> | 49. 5Y5/6 明赤褐色砂質土(焼土含)<SF59021埋土> |
| 26. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト<SK59037, SD59036埋土> | 50. 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト<SD59014埋土> |
| 27. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト<SD59011埋土他> | 51. 7.5YR5/4 にぶい褐色砂質シルト<SR59020埋土> |
| 28. 10YR3/3 暗褐色砂質土 | 52. 7.5YR5/2 灰褐色砂質シルトと粘質シルトの互層<SR59020埋土> |
| 29. 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂(小石含) | 53. 7.5YR6/2 灰褐色砂質シルト<SR59020埋土他> |
| 30. 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂(小石含)<SD59010埋土> | 54. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト(粗砂含)<SD59016埋土> |
| 31. 10YR5/2 灰黄褐色粗砂(小石含)<SD59010埋土> | 55. 10YR6/1 褐灰色砂質土<SD59016埋土> |
| 32. 10YR4/4 褐色砂質シルト(粗砂混)<SD59010埋土> | 56. 10YR5/2 灰黄褐色シルト(小石含)<SD59017埋土> |
| 33. 10YR4/2 灰黄褐色シルト(小石含)<SD59010埋土> | 57. 7.5YR5/2 灰褐色粘質シルト(細砂含)<SD59017埋土> |
| 34. 10YR4/6 褐色シルト<SD59010埋土> | 58. 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質シルト(粗砂含)<SD59017埋土> |
| 35. 10YR3/4 暗褐色シルト<SD59010埋土> | 59. 10YR6/2 灰黄褐色シルト<SD59019埋土> |
| 36. 10YR4/4 褐色粗砂(小石含)<SD59010埋土> | 60. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト<SD59019埋土> |
| 37. 10YR4/1 褐灰色砂礫<SD59010埋土> | 61. 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂 |
| 38. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト(小石含)<SD59010埋土> | 62. 7.5YR4/4 褐色細砂 |
| 39. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト(小石含)<SD59010埋土> | 63. 10YR4/4 褐色細砂 |
| 40. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト(小石含)<SD59012埋土> | 64. 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 |
| 41. 10YR4/6 褐色砂質シルト<SD59012埋土> | 65. 10YR3/4 暗褐色粗砂 |
| 42. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト(小石含)<SD59022埋土> | 66. 10YR4/1 褐灰色粗砂(砂礫含) |
| 43. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト(小石含)<SD59022埋土> | 67. 10YR5/2 灰黄褐色細砂(粘質シルト含)と粗砂の互層 |
| 44. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト(小石含)<SD59022埋土> | 68. 7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土と細砂の互層 |
| 45. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト(小石含)<SD59017・59022埋土> | 69. 7.5YR4/3 褐色砂質シルト |
| 46. 10YR5/6 黄褐色砂質シルト<SD59011埋土> | 70. 7.5YR6/2 灰褐色シルト |
| 47. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト<SD59011埋土> | 71. 7.5YR5/3 にぶい褐色粘質シルト |
| 48. 10YR4/4 褐色砂質シルト | 72. 7.5YR4/2 灰褐色シルト<基盤層> |

東壁南部

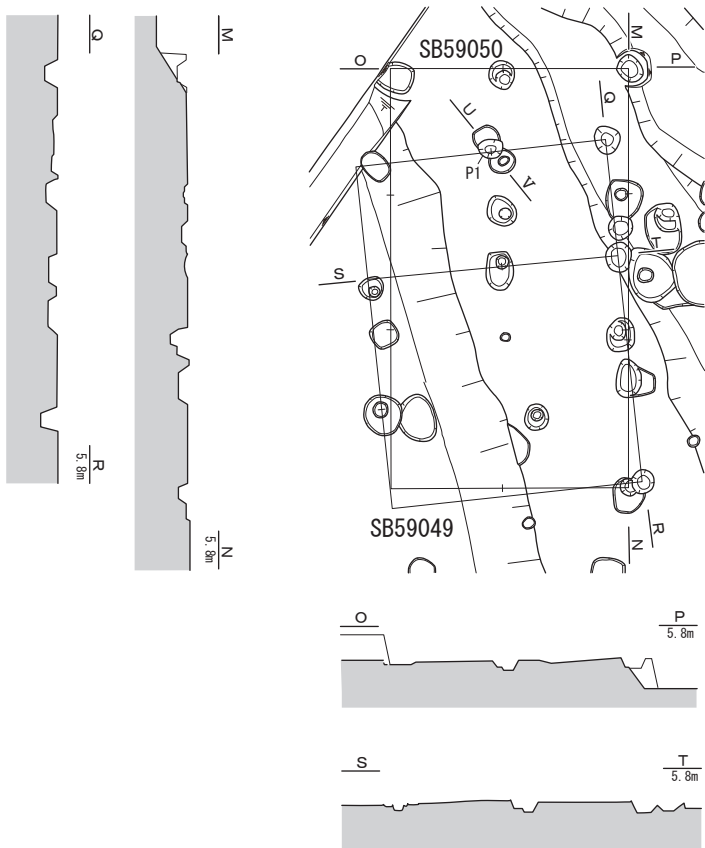


- | | |
|--|---|
| 1. 10YR5/1 褐灰色砂質土<耕作土> | 20. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト(細砂含)<SD59027埋土> |
| 2. 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質土<床土> | 21. 10YR7/3 にぶい黄褐色粘質シルト<SD59027埋土> |
| 3. 7.5YR6/6 橙色シルト | 22. 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト<SD59027埋土> |
| 4. 7.5YR6/2 灰褐色シルト | 23. 10YR5/2 灰黄褐色細砂<SD59027埋土> |
| 5. 7.5YR6/1 褐灰色シルト | 24. 10YR7/2 にぶい黄褐色粘質シルト<SD59027埋土> |
| 6. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト | 25. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト(小石含)<SD59035埋土> |
| 7. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト | 26. 10YR4/6 褐色シルト(細砂含)<SD59035埋土> |
| 8. 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質土(小石含) | 27. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト(粗砂含)<SD59035埋土> |
| 9. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト(細砂含)<SD59023・59027埋土> | 28. 10YR4/4 褐色シルト<SD59035埋土> |
| 10. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト(細砂含)<SD59023埋土> | 29. 10YR5/1 褐灰色粗砂 |
| 11. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト(細砂含)<SD59023埋土> | 30. 7.5YR4/3 褐色シルト<基盤層> |
| 12. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト<SD59023埋土> | 31. 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質シルト |
| 13. 10YR6/2 灰黄褐色シルト<SD59023埋土> | 32. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト |
| 14. 10YR6/1 褐灰色シルト<SD59023埋土> | 33. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト |
| 15. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト<SD59023埋土> | 34. 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト |
| 16. 10YR4/4 褐色砂礫<SD59023埋土> | 35. 10YR2/1 黒色粘質土(小石含) |
| 17. 10YR6/2 灰黄褐色シルト(小石含)<SD59027・59035埋土> | 36. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト |
| 18. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト(粗砂含)<SD59027埋土> | 37. 2.5GY6/1 オリーブ灰色礫 |
| 19. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質シルト<SD59027埋土他> | 38. 褐灰色土 |

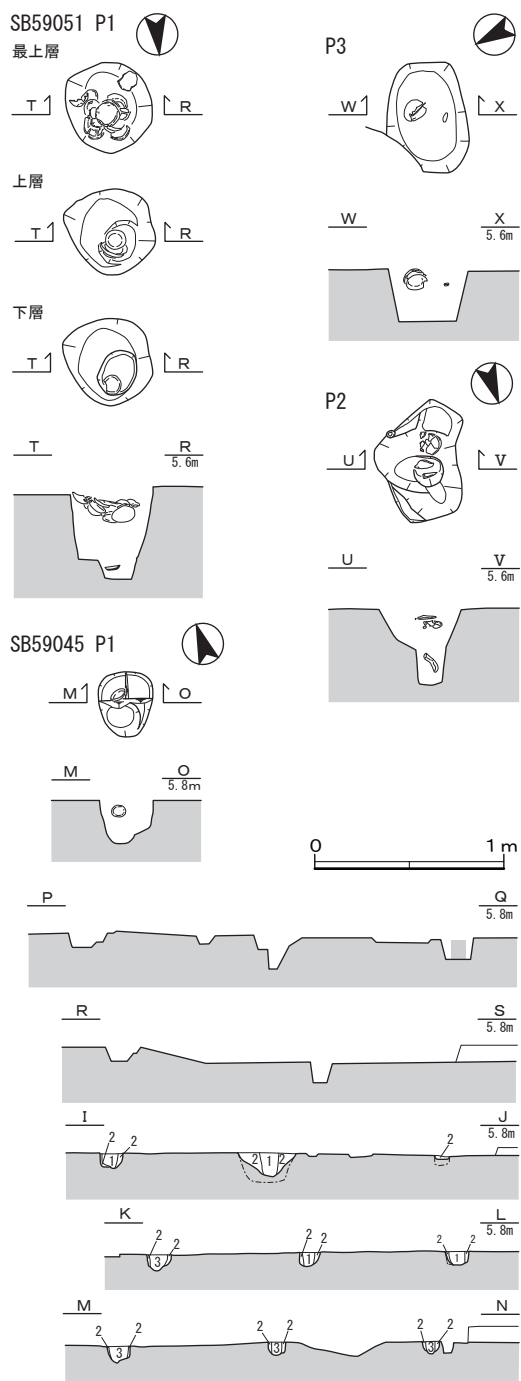
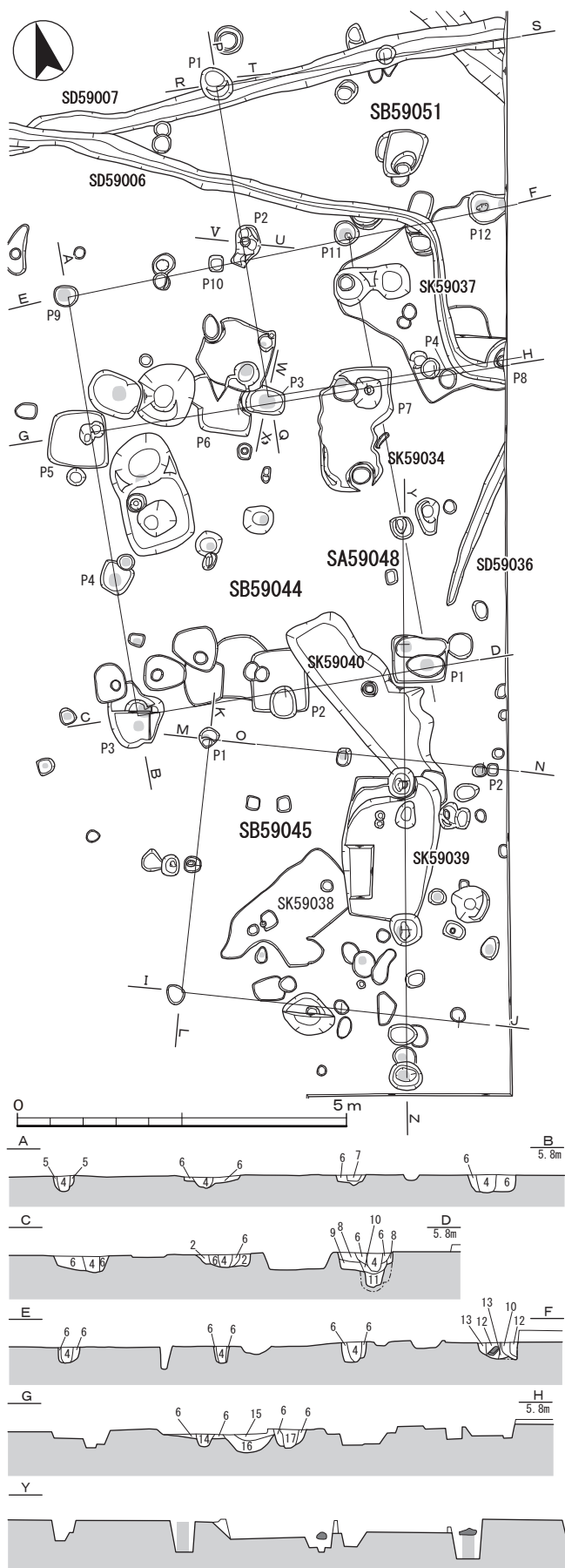
第90図 9区北壁・東壁土層断面図②(1:100)



1. 10YR4/1 褐灰色砂質土
2. 10YR5/2 にぶい黄褐色砂質土
3. 10YR5/2 にぶい黄褐色砂質土
(にぶい黄橙色土塊含)
4. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
7. 10YR5/1 褐灰色砂質土
8. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土
9. 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト
10. 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト



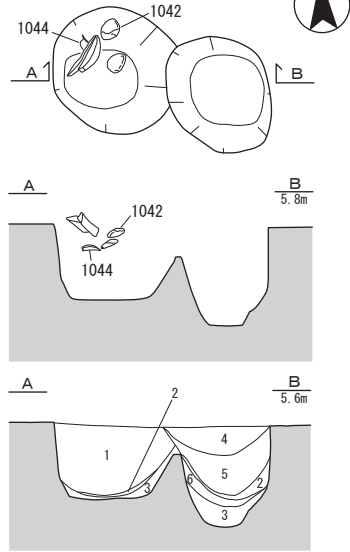
第91図 SB 59042・59043・59049・59050 (1:100)、ピット遺物出土状況図 (1:40)



1. 10YR4/4 褐色砂質土
2. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 (焼土含)
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土 (焼土含)
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
7. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
8. 10YR4/6 褐色シルト
9. 10YR4/4 褐色シルト
10. 10YR5/2 灰黄褐色シルト
11. 10YR3/2 黒褐色シルト
12. 10YR5/1 褐灰色砂質土
13. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
14. 10YR3/4 暗褐色砂質土
15. 10YR3/3 暗褐色砂質土 (焼土含)
16. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
17. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 (炭含)

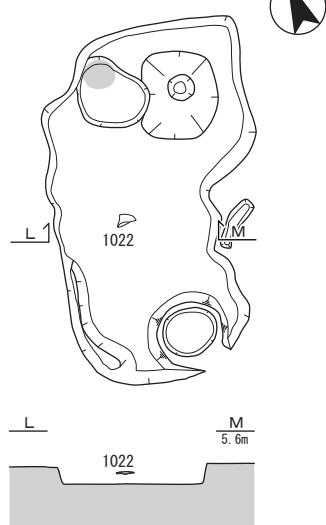
第 92 図 S B 59044・59045・59051、S A 59048 (1:100)、ピット遺物出土状況図 (1:40)

SK59033・59041

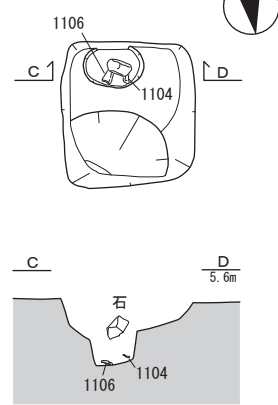


1. 10YR7/3 にぶい黄橙色砂質土 (炭含)
2. 炭
3. 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト
4. 10YR7/4 にぶい黄橙色砂質土 (炭含)
5. 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト
6. 10YR6/2 灰黄褐色シルト

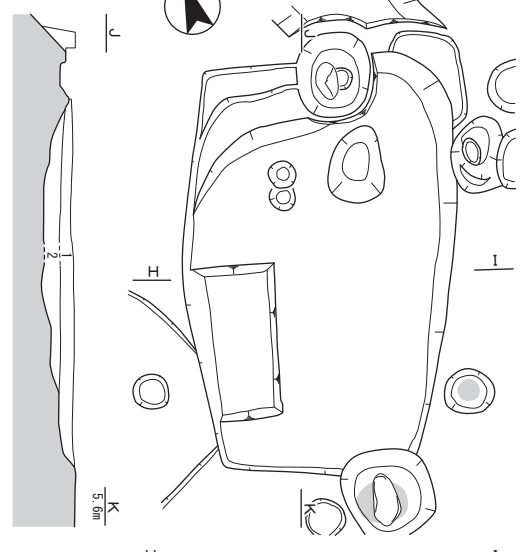
SK59034



SK59053

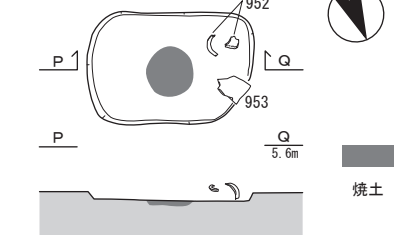


SK59039

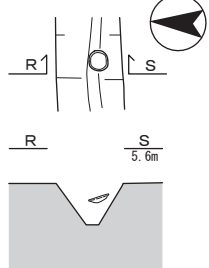


1. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
2. 10YR6/8 明黄褐色シルト (灰黄褐色粗砂含)

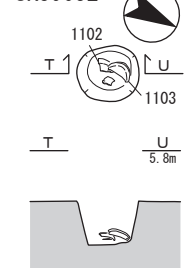
SF59021



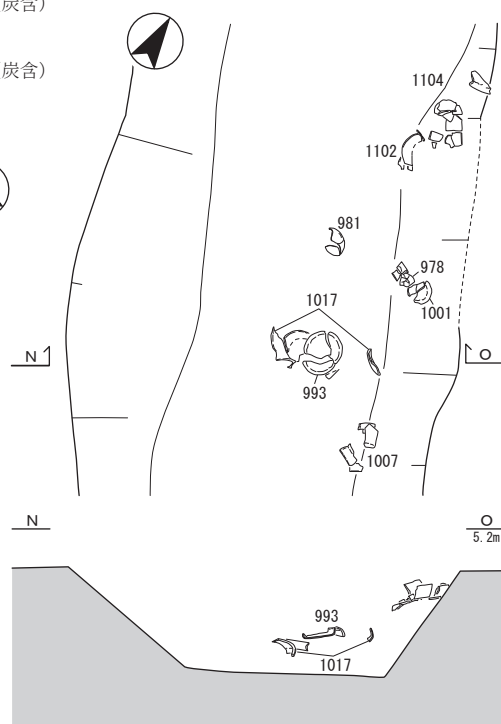
SD59007



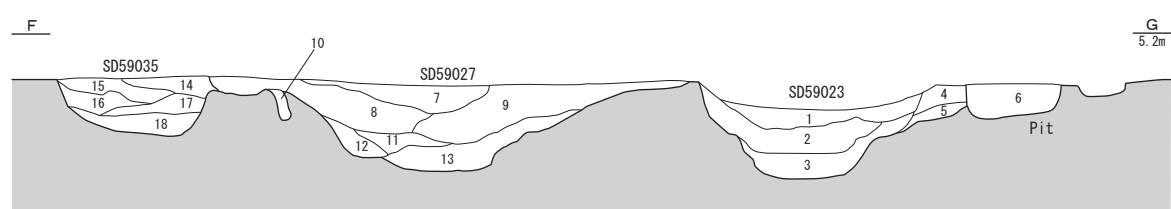
SK59052



SD59027



SD59023・SD59027・SD59035



- | | | |
|---|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト 2. 5Y5/2 灰オリーブシルト 3. 5Y4/1 灰色微砂 (極細砂、暗褐色シルト塊含) 4. 5Y4/2 灰オリーブ細砂 5. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 6. 2.5Y5/1 黄灰細砂 | <ol style="list-style-type: none"> 7. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 8. 7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト (細砂含) 9. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (細砂含) 10. 2.5Y6/2 灰黄色シルト<杭跡> 11. 5Y5/1 灰色シルト (細砂含) 12. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 13. 7.5Y5/1 灰色シルト | <ol style="list-style-type: none"> 14. 2.5Y4/1 黄灰色シルト 15. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (細砂含) 16. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (極細砂含) 17. 2.5Y4/1 黄灰色細砂 18. 5Y5/1 灰色砂質シルト (極細砂含) |
|---|---|---|



第 93 図 SK 59033 他遺物出土状況、SD 59023・59027・59035 断面図 (1:40)

第2表 遺構一覧表

番号	調査区	グリッド	時代	主な出土遺物	備考 切り合いは(古→新)
SD 51001	1-4	チ-K14他	奈良～ 平安	奈良土師器・須恵器	→SD51008・51009・51012・51021・SK51018
SD 51002	1-1～ 1-4	チ-K16他	平安末 以降	山茶碗、平瓦	現水路の前身か 糸里坪境溝。検出遺構で最も新しい
SD 51003	1-4	チ-I8・9 J7・8	平安	土師器片	SD51004・51007→SD51003
SD 51004	1-4	チ-IJ8 K8・9	平安	古墳時代土師器(混入)	箱掘り状の溝 SD51003→SD51004
SD 51005	1-4	チ-K7～9 J9～12 他	平安中	土師器、須恵器	SD51004・51007・51010・51011・51019・ 51020・51021・51029→SD51005→SD51002
SD 51006	1-4	チ-JK7			大型土坑の可能性あり。SD51007→SD51006→SD51005
SD 51007	1-4	チ-JK7・8	弥生～ 古墳	土師器	SD51007→SD51003・51005
SD 51008	1-4	チ-G～K14	中世?	土師器、須恵器(混入)	幅60cm、深さ30cm、SD51001上面で検出、中世耕作溝か
SD 51009	1-4	チ-IJ14	中世?		幅20cm、SD51001上面で検出、中世耕作溝か
SD 51010	1-4	チ-JK10	奈良	土師器	SD51010→SD51019・51005
SD 51011	1-4	チ-IJK10・11	奈良	土師器	SD51011→SD51005
SD 51012	1-4	チ-I～K13	平安	土師器・須恵器	→SD51005・51013 SD51001→
SD 51013	1-4	チ-J12・13	平安	土師器	SD51021から派生する溝 SD51012→
SD 51014	1-4	チ-JK15	中世?		中世耕作溝か
SD 51015	1-4	チ-JK16	中世?		中世耕作溝か
SD 51016	1-4	チ-IJ15・16 HK16	鎌倉	山茶碗	
SX 51017	1-4	チ-IH15 J15・16	弥生後～ 終末期	土師器高杯、台付甕	方形周溝墓 →SD51024・51002
SK 51018	1-4	チ-I14	中世?		炭を多く含む →SD51001
SD 51019	1-4	チ-IJ10 K10・11			→SD51005・51011 SD51010→
SD 51020	1-4	チ-I11・12 G13、J11 他	弥生～ 古墳	弥生後期土器、土師器台付甕	SD51011底面で確認した溝 →SD51029・51005・51001、SD51021→
SD 51021	1-4	チ-H12・13 IJ11・12	平安	土師器小片	浅い。SD51011から派生 SD51013→
SD 51022	1-4	チ-G14・15	中世?	須恵器	中世耕作溝か SD51008・51001→
SZ 51023	1-4	チ-GH15		土師器	→SD51002
SD 51024	1-4	チ-GH15	弥生?		→SD51002・51017
SK 51025	1-4	チ-H13		土師器片、砥石	炭混じり SD51021→
SD 51026	1-4	チ-F13	中世?		中世耕作溝か SE51028→SD51026→SD51002
SD 51027	1-4	チ-F12・13 G12・13	中世?		中世耕作溝か →SD51002・51026
SE 51028	1-4	チ-F12・13	平安前	土師器、灰釉陶器、井戸枠材	縦・横板組井戸、水溜は割り抜き 一度改修された可能性が高い
SX 51029	1-4	チ-F～H13	弥生 終末期	土師器広口壺	方形周溝墓 →SD51002・51005・51020
SK 51030	1-1	ス-E11		土師器小片	→SD51002
SD 51031	1-1	ス-H10・11 I10		土師器小片	→SD51002
SD 51032	1-1	ス-I11			→SD51002
SD 51033	1-1	ス-I10・11 J10			
SD 51034	1-1	ス-IJ10	鎌倉		
SD 51035	1-1	ス-JL10			
SE 51036	1-1	ス-LM10・11	古代?	弥生土器(混入)	井戸枠抜き取り SD51037→SE51036
SD 51037	1-1	ス-KL11 MN10・11			SK51042→ →SK51036

番号	調査区	グリッド	時代	主な出土遺物	備考 切り合いは(古→新)
SD 51038	1-1	ス-Q10・11			→SD51002
SD 51039	1-1	ス-R10・11			→SD51002
SD 51040	1-1	ス-RS 10~11	古代	須恵器	→SD51002
SK 51041	1-1	ス-KL11		土師器杯(混入か)	→SD51002 SX51042に統合、北側周溝か
SX 51042	1-1	ス-L10・11 他	弥生後期 後半	弥生土器(完形多い)	方形周溝墓の西側周溝、7.5YR5/1褐色シルト単層、→ SD51037、SK51036
SD 51043	1-3	チ-A12 B12・13	鎌倉 中世II	山茶碗、青磁碗、嘉祐通宝	SD51001の延長? SD51044→、→SD51002
SD 51044	1-3	ス-Y13・14 チ-A13・14	弥生~ 古墳	土師器小型器台、甕	SD51043・51002下で確認
SD 51045	1		平安	土師器、瓦	SD51001より派生する溝
SZ 51046	1-4	チ-H・G13	縄文中期末~ 後期初頭	縄文土器、石器	下層遺構、土器・礫の集中
SD 52001	2	ネ-N12~15 M13~15	中~ 近世		不定形な遺構、SR52003・SD52004・52008・52009→
SD 52002	2	ネ-LM14	中~ 近世	土師器、瓦(混入)	不定形な遺構、→SD52001
SR 52003	2	ネ-M14・15 他	中世IV 以降	16c以降の土師器鍋 天目茶碗	東端の流路。砂で埋没。→SD52001 SD52006・52013・SD52019・52020・52022→
SD 52004	2	ネ-LM13 他	古墳 ~飛鳥	土師器、須恵器	幅4m。中層から須恵器、→SD52001・52008・52009・ SA52011・SD52012・52013・52015
SD 52005	2	ネ-HI12 他	古墳	土師器	
SD 52006	2	ネ-C12・13 E12・13 他	古墳	朱付着土器(混入か)、S字甕	南北方向の溝 SD52016→52006
- 52007	2	-	-	-	欠番
SD 52008	2	ネ-MN13	中~近世		幅60cm、深さ20cm未満 SD52001・52004・52009→
SD 52009	2	ネ-MN13 L12・13	平安前	土師器杯	SD52004→SD52009→SD52010
SD 52010	2	ネ-L12・13	中世か		SD52009→
SA 52011	2	ネ-M12・13	近世か		3間分の柱列 SD52004→
SD 52012	2	ネ-L12・13	中世か	土師器	SD52004・52009・52015→
SD 52013	2	ネ-K12・13	平安前 ~中	土師器、灰釉陶器	→SR52003 SD52004→
SD 52014	2	ネ-L13・14 他	中~近世		不定形な溝 SD52015→
SD 52015	2	ネ-L13 K13他		土師器小片	SD52004→ →SD52009・52012・52014
SD 52016	2	ネ-F12・13 G12・13他	古墳	土師器	→SD52006
SD 52017	2	ネ-E13他	古墳	土師器	→SD52006
SD 52018	2	ネ-D13他	古墳	土師器壺、台付甕	→SD52006
SX 52019	2	ナ-T13・14 V13・14 他	弥生 終末期	土師器台付甕、内湾口縁壺	方形周溝墓、南側に陸橋部か SD52019 → SD52020・52006
SD 52020	2	ナ-RS13・14、 TU14	古墳	土師器高杯	SD52019 → SD52020
SD 52021	2	ネ-AB13			幅30~40cm、深さ10cmの素掘溝
SD 52022	2	ナ-M12~15 T14~15 他	古代	土師器、須恵器	→SR52003 SD52023・52025→
SD 52023	2	ナ-N13~14 O13~14			→SD52022・SA52024
SA 52024	2	ナ-N11~13 O13~15	中世末 ~近世		26間の柱列 SD52022・52023・52025→
SD 52025	2	ナ-N12・13 O13	古代?		→SD52022・SA52024
SD 52026	2	ナ-MNO 13・14	古代	土師器	SD52022の西側
SD 52027	2	ナ-MNO 14~15			SD52022の東側
SD 52028	2	ナ-M12~15 N12~15		土師器	

番号	調査区	グリッド	時代	主な出土遺物	備考 切り合いは(古→新)
SD 53001	3	ワ-R15・16 ワ-A19他	平安後 ～末	土師器、灰釉陶器	SD53007→ →SD53008
SD 53002	3	ワ-Y13～15 他	弥生終末期 ～中世	青銅鏡3、弥生～古墳時代土器 古代～中世土器・陶器	
SD 53003	3	ワ-Y21～22 他	鎌倉	山茶碗、瓦等	
SE 53004	3	ワ-X17	平安後 ～末	灰釉陶器、山茶碗、瓦	円形 水溜は曲物か
SD 53005	3	ワ-T16他	平安末	土師器	素掘溝
SD 53006	3	ワ-V19他	平安末	土師器	素掘溝 SD53007→、→SD53008
SD 53007	3	ワ-T18他	平安後 ～末	土師器	二股に分岐するSD →SD53001・53006
SD 53008	3	ワ-014～16	平安末	山茶碗	東西溝 SD53001・53006・53009→
SD 53009	3	ワ-015	鎌倉	灰釉陶器	SD53003の延長か →SD53009
SD 53010	3	ワ-E15・16	平安末	土師器	SD53011→
SD 53011	3	北端～ ワ-G15	平安後 ～末	山茶碗、土師器、白磁碗 馬歯、管玉	→SD53010・SK53012・SD53014
SK 53012	3	ワ-CD15	平安末 中世Ib	瓦、山茶碗、土師器	SD53011→
SD 53013	3	ワ-G15・16 J15	平安後 ～末	瓦、山茶碗	
SD 53014	3	リ-Y15・16	室町以降	土師器、山茶碗	SD53011・53015→
SD 53015	3	リ-Y15 ワ-C15	平安末 中世I	土師器皿	SD53011内水路 →SD53014
SD 53016	3	リ-Y15・16 ワ-A15・16			SD53011内水路
SD 54001	4-1	カ-N2・3 03・4、P4	平安末 ～鎌倉	山茶碗	→SD54002
SD 54002	4-1	カ-N2・3		土師器	SD54001→
SD 54003	4-1	オ-N021 カ-0P2 他	奈良	土師器	SD54007→
SK 54004	4-1	オ-N22	平安後	土師器	
SE 54005	4-1	オ-022 P22・23	奈良	土師器、須恵器	
SK 54006	4-1	オ-N20・21	室町 中世IV	土師器鍋	
SD 54007	4-1	オ-NOP23	古代	土師器片	→SD54003
SK 54008	4-1	オ-019・20 P19・20			一辺70cmの隅丸方形、深さ25cm、埋土に礫を多く含む
SD 54009	4-1	オ-017	平安後	土師器	
SK 54010	4-1	オ-018・19 P18・19			幅50cm、深さ20cm、埋土は礫
SD 54011	4-1 4-3	オ-M14・15 015・16 他	飛鳥	土師器(弥生～飛鳥)	→SD54014
SD 54012	4-1	オ-N11・12 OP11	古代	土師器	
SD 54013	4-1	オ-N14 013・14	中世		→SB54041
SD 54014	4-3	オ-LMN15 NOP16他	古墳～ 飛鳥	土師器	SD54011→
SD 54015	4-1	オ-M17 N16～17	室町		SD54017・54016→
SD 54016	4-1	オ-N16			→SD54015
SD 54017	4-1	オ-N16	中世		→SD54015
SD 54018	4-1	オ-JK17			
SK 54019	4-1	オ-K17・18 L17	平安後		直径2m、深さ10cm前後の不定形な落ち込み
SK 54020	4-1	オ-J17	平安末 ～鎌倉	山茶碗、常滑	
SD 54021	4-1	オ-HI16 J17	室町		→SK54022

番号	調査区	グリッド	時代	主な出土遺物	備考 切り合いは(古→新)
SK 54022	4-1	オ-I16	平安末 ～鎌倉	山茶碗	SD54021→
SK 54023	4-1	オ-J17	室町		
SD 54024	4-2	オ-F14 G14・15、H15	鎌倉	山茶碗	
SD 54025	4-2	オ-E12	平安後 ～末	土師器	
SD 54026	4-3	オ-DE11	中世?		幅30cm、深さ10cm未満
SD 54027	4-2	オ-E13			
SD 54028	4-3	オ-E6	室町		→SK54029
SK 54029	4-3	オ-E6			SD54028→
SK 54030	4-3	オ-E7	室町		直径90cm～1.5mの楕円形、深さ5cm未満
SE 54031	4-1	オ-N05	平安中	土師器、灰釉陶器 志摩式製塩土器、曲物	縦板・横板組
SK 54032	4-1	オ-05	平安前	土師器	直径は1.5m
SK 54033	4-1	オ-N6・7		土師器	SD54035→
SK 54034	4-1	オ-N6	平安後 ～末	土師器	一辺1m、深さ30～40cm
SR 54035	4-1	オ-NOP 5～7	弥生～ 古墳	土師器	→SE54033 幅10m以上、延長部は6次SR63008
SE 54036	4-4	ク-A18 B18～19	平安後 ～末	土師器、灰釉陶器、山茶碗 井戸枠材	縦板・横板組
SD 54037	4-4	ク-B16～18	平安中 ～後		
SD 54038	4-4	ク-BC15			深さ2～3cmの不定形な落ち込み
SB 54039	4-1	オ-024・25 P24・25	古代	土師器	2間×2間の総柱建物 N39° W
SE 54040	4-4	ク-A18 B18・19	平安後 ～末	楕形滓	→SE54036
SB 54041	4-1	オ-OP15 NOP14、N13	平安後 ～末	土師器	3×2間、N24° W、南北棟 SD54013→
SB 54042	4-1	オ-N12・13 O12・13	平安後 ～末	土師器	3間×1間、N10° W、南北棟
SB 54043	4-1	オ-08・9 P8	平安後	土師器	3間×1間、N2° E、東西棟
SE 55001	5	ケ-Y12	飛鳥～ 奈良	土師器、土錘	円形
SD 55002	5	E-E12・13			
SD 55003	5	ケ-M12・13 N12			
SD 55004	5	ケ-D12～13	室町 中世IV	山茶碗、常滑片口鉢、土師器	条里坪境溝
SB 55005	5	ケ-JKL 12～13	平安前 ～中	土師器杯、灰釉陶器	4間×2間、N20° E、南北棟、大型ピット →SD55007
SD 55006	5	ケ-G13	中世?		幅20cm、深さは10cm未満の浅い素掘溝
SD 55007	5	ケ-I12 J11・12、K11	中世?		SD55006の延長部分か SB55005→
SK 56001	6	テ-M22・23	平安末	土師器、灰釉陶器	SK56002・56024→
SK 56002	6	テ-M22・23	中世前期		→SK56001・56020 SK56024→
SE 56003	6	テ-LM20・21	平安末 中世I b	土師器、山茶碗	縦・横板組井戸、水溜めは曲物 SK56015→
SE 56004	6	テ-K L 20・21	鎌倉 中世II a	土師器、山茶碗、青磁	石組井戸、水溜めは曲物 SK56019→
SD 56005	6	テ-KL23	中世?		SE56006→
SE 56006	6	テ-KLM 23・24	平安中	墨書土器「七西井」、土師器、緑 釉陶器、志摩式製塩土器	縦板・横板組井戸 →SD56005・SK56022・56007
SK 56007	6	テ-KL24	平安中	土師器、砥石	焼土多い、SE56006→ →SD56008・56009
SD 56008	6	テ-KL24	中世 後期?		SK56007→

番号	調査区	グリッド	時代	主な出土遺物	備考 切り合いは(古→新)
SD 56009	6	テ-KL24・M25	中世 後期?		幅20～60cm、5cm未満 SK56007・SD55017→
SK 56010	6	テ-M22・23	平安末 中世 I	土師器、山茶碗	SK56001・56002・56014・56020～56022・56024の集合体
SK 56011	6	テ-LM25	奈良～ 平安前	土師器皿・甕	浅い溝状の落ち込み。短径50cm、長さ3m、深さ約10cm
SK 56012	6	テ-KL22	平安末 中世 I	土師器	浅い土坑、SD56026・SB56035→
SK 56013	6	テ-MN25 ト-MN1	中世 後期	土師器、山茶碗	耕土下から掘られる。SD56016→
SK 56014	6	テ-M23・24		土師器	
SK 56015	6	テ-LM19・20	平安	土師器	方形。→SE56003・SB56035
SD 56016	6	ト-L2・3 M1～3			浅い落ち込み、下面にPit。→SB56034
SD 56017	6	テ-K24・25		須恵器	浅いシミ状、→SD56009
SK 56018	6	テ-KL19・20	平安	土師器、灰釉陶器	浅い土坑、SB56035→
SK 56019	6	テ-K20・21 L20	中世	土師器、志摩式製塩土器	→SE56004 SB56035→
SK 56020	6	テ-M22・23	中世	山茶碗	方形、SK56002・56024・SD56026→
SK 56021	6	テ-LM23	中世	山茶碗、土師器	方形、SK56022→
SK 56022	6	テ-LM23	中世	山茶碗	方形、→SK56021 SE56006→
SD 56023	6	テ-L21 M21・22	平安	灰釉陶器、須恵器、土錘	浅い(10YR5/1褐灰色砂質シルト単層)、SB56035→ →SE56003
SK 56024	6	テ-M22・23	中世	土師器、山茶碗	→SK56001・56002・56020 SD56026→
SD 56025	6	テ-M21		瓦	→SB56064
SX 56026	6	テ-KL21・22 M22～24 他	弥生 終末期	土師器壺	方形周溝墓 →SK56012・56020・56024・SB56035
SX 56027	6	テ-M15～17 L16～19他	弥生 終末期	土師器台付甕、赤彩壺、高杯 上層に7世紀土器	方形周溝墓、延長部分を7次調査で確認 →SK56028・SB56064
SK 56028	6	テ-M19	飛鳥～ 奈良	土師器、須恵器	SD56027→
SE 56029	6	テ-KL15・16	飛鳥～ 奈良	須恵器、土師器、椀形滓 砥石	上層に土器集中 SD56033→
- 56030	6	-	-	-	欠番 SD56033に統合
SK 56031	6	テ-L13	近世	土師器焙烙、常滑火鉢	SD56033→
SK 56032	6	テ-L13	飛鳥～ 奈良	土師器	SD56033→
SD 56033	6	テ-K14～17 L13～16	古墳～飛鳥	土師器杯(混入か)	→SE56029・SK56031・SK56032
SB 56034	6	ト-L2・3 M1・2	平安中	土師器、灰釉陶器	4間分の柱列、N13° W、東西棟か SD56016→
SB 56035	6	テ-LM22	平安中 ～後期	土師器、志摩式製塩土器	やや柱穴大、複数棟重複か。SK56015・SB56063・SD56026→ SB56035→SK56012・56018・56019・SD56023
SF 56036	6	テ-L24	奈良	土師器皿・甕	焼土坑(カマド残欠か)
SX 56037	6	テ-M17	縄文 中期末	縄文土器深鉢	埋設土器(逆位)、検出面やや下で、胴部が外側に倒れている
SZ 56038	6	テ-LM15	縄文 後期初頭	縄文土器	下層 浅い落ち込み
SZ 56039	6	テ-K19・20	縄文		下層 浅い落ち込み
SK 56040	6	テ-M15	縄文 後期初頭～ 前葉	縄文土器	下層
SK 56041	6	テ-K20	縄文	縄文土器	下層 焼土混じる
SZ 56042	6	テ-L19	縄文	縄文土器	下層 浅い落ち込み
SZ 56043	6	テ-L20	縄文		下層 浅い落ち込み
SZ 56044	6	テ-MN16	縄文		下層 浅い落ち込み
SZ 56045	6	テ-K22	縄文		下層 浅い落ち込み

番号	調査区	グリッド	時代	主な出土遺物	備考 切り合いは(古→新)
SZ 56046	6	テ-KL23・24	縄文後期 初頭～前葉	縄文土器	下層 浅い落ち込み
SZ 56047	6	テ-L15	縄文 中期末	縄文土器	下層 包含層内の遺物集中を屋内土坑と誤認
SF 56048	6	テ-M22	縄文		下層 炉跡の被熱面のみ
SF 56049	6	テ-L23	縄文		下層 炉跡の被熱面のみ
SF 56050	6	テ-L21	縄文		下層 炉跡の被熱面のみ
SF 56051	6	テ-L20	縄文		下層 炉跡の被熱面のみ
SF 56052	6	テ-L17	縄文		下層 炉跡の被熱面のみ
SF 56053	6	テ-L17	縄文		下層 炉跡の被熱面のみ
SF 56054	6	テ-L16	縄文		下層 炉跡の被熱面のみ
SF 56055	6	テ-L25	縄文		下層 炉跡の被熱面のみ
SF 56056	6	テ-LM22	縄文		下層 炉跡の被熱面のみ
SX 56057	6	テ-M18	縄文	縄文土器	下層 深鉢底部が正位置で出土。埋設土器か
SK 56058	6	テ-L16	縄文		下層 石囲炉残欠か。被熱は不明瞭
SK 56059	6	テ-L16	縄文		下層 土器多い
SK 56060	6	テ-L23	縄文 中期中葉	縄文土器(咲畑式)	下層、SE56006西肩で確認していた浅い土坑、炭化物の年代 測定実施
SK 56061	6	テ-KL25 ト-KL1	縄文 後期初頭～ 前葉	縄文土器	埋積浅谷の落ち際、焼土含む。直下にSF56062
SF 56062	6	テ-KL25	縄文		石囲炉
SB 56063	6	テ-L21 M21・22	平安	灰釉陶器	→SB56035 SD56023→、2×2間以上、N20° W
SB 56064	6	テ-M19～21	平安中	土師器	SD56027・56025→ 桁行2間以上、N10° W、南北棟か
SB 56065	6	テ-L15 M14・15	平安	土師器、灰釉陶器	2間×1間、N3° E
SB 56066	6	ト-L3	平安後		1間以上
SD 57001	7-1	テ-JK4・5 LM5	室町 中世IVa	土師器、青磁片、山茶碗 碗形滓	箱掘り状、条里方向
SD 57002	7-1	テ-L11・12 M11, N11・12	鎌倉 中世II	山茶碗、常滑製品、砥石	SD57015→
SD 57003	7-1	テ-LM3		山茶碗	攪乱か
SD 57004	7-1	テ-L2・3 M2・3			浅い溝で痕跡程度を検出、SD57003→ →SD57009
SD 57005	7-1	テ-J1 K1・2、L2	室町 中世III～IV	16c 土師器	
SE 57006	7-1	テ-J9・10 9.	鎌倉 中世II	山茶碗、白磁 渥美産陶器、山茶碗	円形
SD 57007	7-1	テ-J2・3 KLM3	室町 中世IV	土師器、山茶碗、土錘	→SD57003 SD57009→
SD 57008	7-1	ツ-L23～25、 テ-L1他	室町 中世IV	土師器	
SD 57009	7-1	テ-J2・3 KLM3	室町 中世III	土師器	底面農具痕顕著 SD57004・57011・SK57026→SD57009→SD57003・57007
SD 57010	7-1	テ-M6・7	中世	土錘	
SD 57011	7-1	テ-L3	中世?		幅60cm、深さ5cmの不整形な溝 →SD57009
SK 57012	7-1	ツ-LM21	中世 後期		井戸状の土坑
SK 57013	7-1	テ-LM9			長径1.8m、短径1.3m、深さ10～20cmの楕円形 10YR5/2灰黄褐色シルト単層
SK 57014	7-1	テ-K8		縄文土器、製塩土器片	長径1.2m、短径60cm、深さ10cmの楕円形
SD 57015	7-1	テ-M9～11 N9～11		土師器	→SD57002
SD 57016	7-1	テ-M5			→SD57001・SK57019

番号	調査区	グリッド	時代	主な出土遺物	備考 切り合いは(古→新)
SD 57017	7-1	ツ-HI17 JK18他	平安中	土師器、灰釉陶器、緑釉陶器 墨書土器「美カ」	SB57041～57043の区画溝か
SD 57018	7-1	ツ-H～L17 L18			SD57020・57021→
SK 57019	7-1	テ-M5			→SD57001 SD57016→
SD 57020	7-1	ツ-JKL17 L18			→SD57018
SD 57021	7-1	ツ-JKL18			→SD57017・57023・57018
SX 57022	7-1	ツ-J16	平安末 中世 I b	土師器皿	木棺墓、供献土器あり
SD 57023	7-1	ツ-JK18 KL19		土師器壺	→SD57017 SD57021→
SK 57024	7-1	ツ-I12	平安末	鉄滓、灰釉陶器	→SB57075 2.5Y6/2灰黄色シルト単層
SD 57025	7-1	ツ-H～L11	室町	山茶碗、瓦	SK57039・SB57047→
SK 57026	7-1	テ-K3	室町	土師器	5Y5/2灰オリーブ砂質シルト単層 →SD57009
SK 57027	7-1	ツ-I9～10 J9～10			攪乱
SD 57028	7-1	ツ-IJKL9			→SK57027
SD 57029	7-1	ツ-IJK4～5	室町	土師器、青磁、山茶碗	→SD57035
SD 57030	7-1	ツ-IJ5 K5・6			
SK 57031	7-1	ツ-J1	平安後	土師器、黒色土器 灰釉陶器	10YR4/2灰黄褐色砂質土単層
SD 57032	7-1	ツ-I1・2 H-I25	鎌倉 中世 II a	土師器、瓦器、山茶碗 土錘	
SD 57033	7-1	ツ-I2・3 J2・3、K3			
SD 57034	7-1	ツ-I3	中世	山茶碗	深さ10cm未満の不定形な溝 →SD57035
SD 57035	7-1	ツ-I3・4 J4、K4・5			攪乱(旧水道管の掘方)
SK 57036	7-1	ツ-IJ4		土師器	→SD57035 10YR7/2にぶい黄橙色砂質土単層
SD 57037	7-1	ツ-IJ3・4			→SD57035
SD 57038	7-1	H-H21 IJ21～22			
SK 57039	7-1	ツ-I11			→SD57025 SD57040・SB57045→
SD 57040	7-1	ツ-I11・12			幅40cm、延長1m、深さ5cm未満 →SK57039
SB 57041	7-1	ツ-L14～16 IJK13～16	平安中	墨書土器「保平カ」、灰釉陶器 志摩式製塩土器、土錘、鉄刀子	身舎2×3間、N8° E、東西棟、→SB57042・57043 二面庇+南側に縁ないし孫庇、大型ピット
SB 57042	7-1	ツ-JK12～14	平安中	土師器、緑釉陶器 灰釉陶器	2×4間、N17° E、東西棟、大型ピット SB57041→
SB 57043	7-1	ツ-JKL 15～17	平安中	土師器	2×3間、N17° E、南北棟、大型ピット SB57041→
SB 57044	7-1	ツ-I14 JK12～14	平安後 ～末	土師器	2×3～4間?、N7° E、東西棟
SB 57045	7-1	ツ-IJ12・13	平安後	土師器、灰釉陶器 黒色土器	2×3間、N3° E、東西棟 →SK57039
SA 57046	7-1	ツ-IJ 13～15	平安中		2×3～4間?
SB 57047	7-1	ツ-JK 10～12	平安末	山茶碗	2×3間、N15° E、東西棟
SB 57048	7-1	ツ-I8～9、 J7～9、K8～9	平安末	土師器	2×3間、N10° E、東西棟
SB 57049	7-1	ツ-I6～7	平安後	土師器	2×3間、N12° E、東西棟
SD 57050	7-1	H-HI20 J20～21			
SD 57051	7-2	H-HIJ 17・18	室町	山茶碗	
SD 57052	7-2	H-HIJ17	室町		
SD 57053	7-2	H-HI15～16 J16	平安末	瓦器、土師器、緑釉陶器 山茶碗、瓦、馬歯	波板状凹凸面を持つ道路遺構、延長は6次SZ65004(両側側溝)、馬歯出土

番号	調査区	グリッド	時代	主な出土遺物	備考 切り合いは(古→新)
SD 57054	7-2	H-H9・10 IJ10	平安末	山茶碗	SD57064・57070・SB57073→
SD 57055	7-2	H-H16 I16・17、J17			SD57056・57057・57061→
SD 57056	7-2	H-HI16			→SD57055・57069
SD 57057	7-2	H-HI16			→SD57055・57061・57069
SD 57058	7-2	H-HI15 J15・16	平安後	黒色土器、土師器 灰釉陶器	
SA 57059	7-1	ツ-L13～15			SA57060→
SA 57060	7-1	ツ-L12～14		土師器、土錘	→SA57059
SD 57061	7-2	H-HIJ16 HI17			→SD57055・57069 SD57057→
SD 57062	7-2	H-HIJ15 IJ16	平安末 ～鎌倉	山茶碗、土師器	
SD 57063	7-2	H-HIJ10	室町		幅20cm
SD 57064	7-2	H-H9 I9・10、J10	平安末	石鎌(混入)、椀形滓 山茶碗、灰釉陶器	→SD57054
SD 57065	7-2	H-HI7	中世?		
SA 57066	7-1	ツ-HI12 J11～14			2～3間分の柱列 SA57046→
SA 57067	7-1	ツ-HI3 I12～14			
SA 57068	7-1	ツ-JKL15	平安中	土師器、墨書土器「十」	
SD 57069	7-2	H-HIJ16	平安末	山茶碗	SD57056・57057・57061→
SD 57070	7-2	H-J10	平安中	灰釉陶器壺、土師器杯	SD57064底面で確認した浅い不定形な溝 幅40cm、深さ10cm程度
SB 57071	7-2	H-I10	平安中	土師器、灰釉陶器壺 黒色土器	4×2間、N7° E、東西棟、大型ピット →SB57074・SD57054・57064
SD 57072	7-3	H-GH1 G-GH25	平安末	土師器	
- 57073	7	-	-	-	欠番 SB57071北西に建物を想定したが、抹消
SB 57074	7-2	H-I11他	平安後 ～末		5×3間、N3° E、東西棟 SB57071→
SB 57075	7-1	ツ-HI1・12 I12	平安末		桁行2間以上、梁行2間、N12° E、南北棟 SK57024→
SB 57076	7-1	ツ-IJ8	平安末 中世 I	土師器、黒色土器	桁行2間以上、梁行2間の総柱建物 N23° E、南北棟
SR 57077	7-1	H-I23他	弥生～ 古墳		幅24m以上の自然流路、上面に平安遺構 延長は6次SR65027・65028・65032
SD 58001	8	D-M9～11			SD58002・58003・58004→
SD 58002	8	D-L10 M10・11、N11			→SD58001
SD 58003	8	D-LM9・10 N10・11		弥生土器	→SD58001・58003
SD 58004	8	D-M11	鎌倉		
SD 58005	8	D-S15 T15・16	古代		→SR58009
SD 58006	8	D-QR12 RS13他			SD58008・58010→ →SK58011
SD 58007	8	D-T16 U16・17	古代	土師器	
SD 58008	8	D-R12～14 S13～15他			→SD58006・SR58009・SD58010・SK58011
SR 58009	8	D-M9・10 NO10～12他	近世	土師器	SD58003・58005・58008→
SD 58010	8	D-WX17・18	古代	土師器、須恵器	→SD58006・58008
SK 58011	8	D-Y18			攪乱
SK 58012	8	D-Y19			
SX 58013	8	D-W18	平安後	土師器皿・甕	土壌墓の可能性あり

番号	調査区	グリッド	時代	主な出土遺物	備考 切り合いは(古→新)
SD 58014	8	D-Y19 G-A19	平安後	土師器片	幅20～30cm、深さは5cm
SD 58015	8	G-C21 D21～23他	近世		近世の水田跡、SD58016・58018・58022→ →SD58019
SD 58016	8	G-D23 E23・24	平安後	土師器、黒色土器、墨書土器 灰釉陶器、志摩式製塩土器	SD58015の下層中央部 SD58018→SD58016→SD58015
SD 58017	8	G-E22～24			SD58020→
SD 58018	8	G-A20・21 D22・23他	平安中	墨書土器「平成」他、 灰釉陶器、志摩式製塩土器 椀形滓、砥石	SD58021・58024→ →SD58015・58016
SD 58019	8	G-E24・25 F24・25	室町		SD58018の続きか? SD58015→
SD 58020	8	G-E22・23	室町 中世IV	土師器鍋	SD58017の下層
SD 58021	8	G-C22・23	平安後	土師器	→SD58018
SD 58022	8	G-B20・21 C21	鎌倉	土師器、陶器	SD58023・58024→ →SD58015
SD 58023	8	G-ABC20 D-Y20	平安末	山茶碗、土師器	SR58026→ →SD58022
SD 58024	8	G-B21	平安中		幅1.1m、深さ25cm →SD58018・58022
SK 58025	8	D-Y19・20			
SR 58026	8	G-A19・20 B19～21他	平安中		断割で確認 →SD58023
SD 59001	9	ク-N05	平安末	土錘	
SD 59002	9	ク-MN06 OP7	平安後	土師器	SD59004・59046→ →SD59007・SB59042・59043
SD 59003	9	ク-QR5	平安	鉄滓	
SD 59004	9	ク-MN6 OP5・6	平安		→SD59002・SK59047
SD 59005	9	ク-MN05	鎌倉	土師器、黒色土器 山茶碗、瓦	SD59008と同一
SD 59006	9	ク-P5～7 Q7	平安後 ～末	灰釉陶器	SD59007・SK59037→
SD 59007	9	ク-P5～7	平安後 ～末	土師器、灰釉陶器 土錘	→SB59051 SD59002→
SD 59008	9	ク-N5	平安末 ～鎌倉	土師器・山茶碗	SD59005と同一
SD 59009	9	ク-S5			
SD 59010	9	ク-T5・6 U6	古墳		
SD 59011	9	ク-V5・6 W5・6	飛鳥～ 奈良	土師器・須恵器	
SD 59012	9	ク-U5・6 V5・6	平安後		
SK 59013	9	ク-WX6	奈良	土師器	→SD59014
SD 59014	9	ク-W5・6 X5・6、Y6		土師器広口壺	→SB59050・SK59013
SK 59015	9	D-D5	平安		SK59030→
SD 59016	9	ク-X5、Y5・6 D-A5・6、B6	古代		→SB59049・59050
SD 59017	9	D-A5・6	古代	土師器	
SD 59018	9	D-DE6	平安中		→SD59023 SD59029→
SD 59019	9	D-A5・6 B6	古代		
SR 59020	9	ク-R5 S～X5・6	弥生～ 古墳		
SF 59021	9	ク-X6	奈良	土師器	焼土
SD 59022	9	ク-U5 V5・6	飛鳥	土師器	
SD 59023	9	D-BC5 D5・6	平安後 ～末	須恵器、灰釉陶器、鉄滓	SD59018・59027・59032・SK59030・SK59031→
SK 59024	9	ク-WX6	奈良	土師器	

番号	調査区	グリッド	時代	主な出土遺物	備考 切り合いは(古→新)
SK 59025	9	ク-WX6	奈良	土師器長胴甕	
SK 59026	9	ク-X6	奈良	須恵器	
SD 59027	9	D-C5・6 B5、D6	奈良～ 平安	墨書土器「平」	→SD59023 SD59035→
SK 59028	9	ク-X6	奈良		
SD 59029	9	D-E5・6	中世?	土師器	→SD59018
SK 59030	9	D-CD5	奈良		→SD59023・SK59015
SK 59031	9	D-D5	奈良		→SD59023
SD 59032	9	D-C5	奈良～ 平安後期	土師器、墨書土器「□平」 須恵器	→SD59023
SK 59033	9	ク-Q7	平安後	土師器、緑釉陶器、土錘	SK59037→ 焼骨片あり
SK 59034	9	ク-QR6・7	平安中 ～後	土師器、須恵器、緑釉陶器 鉄滓	
SD 59035	9	D-BCD5・6	平安前	土師器、須恵器	→SD59027
SD 59036	9	ク-QR7	平安中?		
SK 59037	9	ク-PQ7	奈良?		→SD59006・SK59033・59041・SB59044 焼土あり
SK 59038	9	ク-S6・7	平安後		SK59039→
SK 59039	9	ク-S7	平安後	鉄釘片、土師器	→SK59038・SA59048 SK59040→
SK 59040	9	ク-R6・7	平安後		→SK59039
SK 59041	9	ク-Q6・7	平安後	土師器、黒色土器、緑釉陶器 灰釉陶器	SK59037→
SB 59042	9	ク-N06・7	平安後	土師器	SD59002→
SB 59043	9	ク-N06・7	平安中	土師器鍋、土錘	梁行2間、桁行1間 SD59002→
SB 59044	9	ク-Q5～7 R6・7、P7	平安中	土師器、緑釉陶器、灰釉陶器 土錘	3間以上×2間+北庇、N5° E、東西棟、大型ピット SK59037→SB59044→SB59051
SB 59045	9	ク-S6・7 R6、T7	平安後	土師器、土錘	2間以上×2間、N21° E、東西棟
SD 59046	9	ク-N6・7			→SD59002
SK 59047	9	ク-M6			SD59004→
SA 59048	9	ク-R7他	平安後		4間分 SK59039・SB59044→
SB 59049	9	ク-XY5他	奈良	土師器	桁行3間、梁行2間、N26° W、南北棟 SD59016・SB59050→
SB 59050	9	ク-X5・6他	奈良		桁行3間、梁行2間、N20° W、南北棟 SD59014・59016→SB59050→SB59049
SB 59051	9	ク-PQ6・7	平安後	土師器、灰釉陶器、土錘	梁行2間、桁行1間以上、N4° E、東西棟 北西隅(P1)に土器埋納、SD59007・SB59044→
SK 59052	9	ク-U6	平安	土師器、黒色土器	小ピット (U6-Pit2)
SK 59053	9	ク-N7	平安後	土師器	小ピット (N7-Pit5)
SK 59054	9	ク-U5			幅10～40cmの溝状
SR 59055	9	ク-S5～W6	弥生～ 古墳		幅約22mの自然流路

IV 遺物

1. 出土遺物の概要

第5次調査の出土遺物は縄文～室町時代の土器・陶磁器・瓦・石製品・鉄製品・木製品などで、総量はコンテナ換算で286箱(756.5kg)(整理前、木製品を除く)である。そのほか、井戸枿材を中心とする大量の木製品がある。

ここでは、上層で検出した弥生時代以降の土器・陶磁器等(土製品・石製品・金属製品等を含む)と木製品、下層出土の縄文土器・石器の順に示す。各遺物の詳細は遺物観察表(第4表)を参照されたい。

出土遺物の概略は以下のとおりである⁽¹⁾。

縄文時代 遺構一括資料はないものの、1区・6区下層包含層から縄文時代中期末～後期前葉の土器・石器が一定量出土している。

弥生・古墳時代 弥生時代後期・終末期の方形周溝墓出土土器が特筆される。他に溝や流路出土の弥生～古墳時代の土師器・須恵器がある。弥生時代後期の遺物は少なく、弥生時代前～中期の遺物はない。

飛鳥・奈良時代 飛鳥時代はS E 56029上層出土遺物が良好な資料である。暗文を施す土師器杯A・C、皿Aなど精製品のほか、無文粗製の杯G(いわゆるいなか椀)の出土も目立つ。飛鳥・奈良時代の遺物は、主に4区や9区にみられる。

平安時代 3区出土の青銅鏡2面が特筆される。

土器は平安時代前・中期(9～10世紀前半)の土師器杯が多く、「平」を記した墨書土器が複数みられる。黒色土器のほか、中・南勢地域では珍しい瓦器も若干出土している。

施釉陶器は、緑釉陶器が各区で散見され、第2次調査地のようなまとまった量はないものの、取手付瓶などの優品が含まれる。

古代の瓦片は各調査区で出土するが、特に遺跡南東の3区に多い。3区出土の軒平瓦2点はいずれも付近に存在した大雷寺廃寺の軒平瓦と同型式である。

平安時代末以降 土師器は中世I期(11世紀後半～12世紀)が主体で、山茶碗は藤澤編年第4・5

型式が圧倒的多数を占めており、いずれも渥美型である。

第6型式以降の山茶碗、中世II期(13世紀)の土器や常滑製品は少なく、室町時代や戦国期の遺物もほとんどない。これは朝見上地区遺跡群のなかでも堀町遺跡・中坪遺跡と大きく異なる点である。

2. 弥生時代以降の遺物

(1) 土器・陶磁器等

①遺構

S D 51001 (第94図) 大半が上層出土で、奈良時代を中心とする遺物である。

1・2は土師器杯A。1は内面に螺旋状暗文、外面下半はケズリを施す。2はナゲ調整の杯である。3～6は土師器甕で、3・4は内面上半までヘラケズリが及ぶ。3は外面にヘラ描きがある。9は土師器杯あるいは皿片で外面に記号状の線刻を施す。10は土師器高杯。11は土師器甕または鍋で外面にヘラ描きがある。7は外面に波状文を施す須恵器甕、8・12は須恵器瓶類である。12はフラスコ瓶か。肩部に円形浮文と櫛歯刺突文がみられる。13・14は平瓦。ともに凹面は布目痕、凸面にタタキ具の縄目痕を残す。

S D 51002 (第95図) 下層出土遺物が多いが、26～28、32・33など古代の土器と、30・31など中世の遺物が混在している。

26～28は土師器杯。26は内面に放射状暗文を施し外面はケズリ。26は斎宮I期、27・28はII期の杯・皿である。29～31は山茶碗で、30・31は第4型式の山茶碗。33は陶器瓶類。34・35は平瓦で、34の凸面はタタキ後ケズリで仕上げる。

S D 51004 (第94図) いずれもS D 51007からの混入遺物とみられる。

15は短く外反する弥生時代後期の高杯、16は古墳時代中・後期の土師器高杯脚部である。

S D 51005 (第94図) 平安時代前・中期の土師器が主体である。18～22は土師器杯で斎宮II-3～4

段階のもの。23～24は土師器甕で同じく斎宮Ⅱ-3～4段階、17は8～9世紀前半の須恵器杯蓋である。

S D 51007 (第95図) 36は土師器高杯。外面にまばらなミガキを施す。古墳時代初頭～前期のもの。

S D 51008 (第95図) 37・38は斎宮Ⅰ期の土師器甕である。ともにS D 51001からの混入か。

S D 51010 (第95図) 39は土師器杯。7世紀末から8世紀初めごろのもの。

S D 51011 (第95図) 図示したのはすべて上層出土の土師器である。

40・41は杯Cで、内面に放射状暗文を施す。40は暗文と見込み中央の境界に線刻を入れ、底部外面はケズリ、41は外面ケズリ後ミガキとする。42～44は粗製の土師器杯で、42は見込みに線刻を施す。いずれも7世紀末から8世紀初めごろのもの。45～47は土師器甕で、球胴の47は底部外面にヘラ描きを施す。48は土師器鍋。

S D 51012 (第96図) 49は斎宮Ⅱ-4～Ⅲ期の土師器甕。10世紀代のもの。

S D 51013 (第96図) 50は土師器杯。斎宮Ⅱ-4段階にあたり、10世紀前半のもの。

S X 51017 (第96図) 57～61は周溝上層の出土遺物であるが、山中式の高杯脚部(57)や有稜高杯(58)、廻間Ⅰ～Ⅱ式併行の高杯(59)、古墳時代前期のS字甕D類(60)と様々な時期のものがある。61は砥石の小片である。

S D 51020 (第96図) 様々な時期の土器が混在している。64・66～70・72は弥生時代後～終末期の土器で、68の受口状口縁甕など後期のものが多い。壺72は、肩部を刻み状の刺突文で区画し、その内部を細かい櫛状具で横位に施文する。63・65は椀形高杯、71は肩部にヘラ描き沈線のある宇田型甕で古墳時代中～後期のもの。62は平安時代の土師器杯Aで斎宮Ⅱ-3段階、9世紀後半のもの。

S D 51022 (第96図) 55は須恵器瓶類で、S D 51001出土の12と調整や胎土、文様が類似しているため、同一個体の可能性がある。

S Z 51023 (第96図) 51・52は土師器杯G。いずれも斎宮Ⅰ-2段階のもので、8世紀前半のもの。54も同時期の土師器甕である。53は弥生時代後期の台付鉢でS D 51020等からの混入である。

S D 51024 (第96図) 73は弥生時代後～終末期の高杯である。

S K 51025 (第96図) 56は砥石としたが、下層の縄文時代石皿の混入かもしれない。

S E 51028 (第96図) 77・83は掘方、79・86・87は井戸枠内、他は井戸枠検出前の出土遺物である。

78～80・82は土師器杯A、81は土師器杯Cで、81は内面に放射状暗文、82は内面に放射状、口縁内面には螺旋状暗文を施す。いずれも斎宮Ⅰ-4～Ⅱ-1段階のもの。77は土師器皿で、見込みに螺旋状暗文を施す。内面は煤が付着している。83・84は土師器皿で、83は内面に線刻がある。85は灰釉陶器中椀で、灰釉はハケ塗りとする。86～90は土師器甕で、井戸枠内出土の球胴甕86・87は釣瓶かもしれない。

以上は8世紀末～9世紀前半の遺物群である。

S X 51029 (第97図) 方形周溝墓周溝の土器である。100は広口壺で、胴部下半はケズリ・ミガキとし、肩部に櫛描文と櫛歯による羽状文がある。101は混入の甕である。

S E 51036 (第96図) 74～76はいずれもS X 51042から混入した弥生時代後～終末期の土器であろう。内湾口縁壺74はやや時期が下がり終末期のもの。甕76は外面下半をケズリとする。

S D 51040 (第97図) 108は古代の須恵器甕。

S K 51041 (第97図) 99は土師器杯。斎宮Ⅱ-3段階、9世紀後半のもの。

S X 51042 (第97図) 下層出土遺物が主体である。いずれも弥生時代後期後半の土器で、完形やそれに近いものを含む。

109・110・111は有稜高杯。内外面を密なミガキで調整する。109は杯部が深く柱状部は広がり気味である。112～114は無文の壺、116は有文の壺である。114は丸底であるが、底部は分厚く粗い作り。115はく字状口縁の台付甕である。

S D 51043 (第97図) 平安時代末～鎌倉時代の遺物を中心に、古代の土師器や須恵器が混じる。

92・93は山茶碗。92は藤澤編年の第6型式、93は第4・5型式ごろにあたり、12世紀後半から13世紀前半ごろのもの。95は青磁椀で、見込みに片彫りの花文がみられる。98は北宋銭(嘉祐通宝)

で初鑄年は1056年。94・96は須恵器杯で7～9世紀のもの。97は古代の土師器甕である。

S D 51044 (第97図) 105・106は土師器甕である。107は土師器の器台か。

S D 51045 (第97・98図) 104は斎宮Ⅰ-2段階の土師器皿A。内面にまばらな放射状暗文を施す。102・103は土師器甕である。117は古代の平瓦片。

S R 52003 (第98図) 123は平安時代中～後期の土師器杯、124は灰釉陶器椀である。125は瀬戸美濃天目茶碗で、大窯期のものか。溝の機能・廃絶時期を示す。126は中世Ⅳ期の土師器鍋で、図示したもの以外にも16世紀以降の土師器鍋がある。

S D 52004 (第98図) 古墳時代を中心に、飛鳥時代の遺物もみられる。130・131・133は土師器高杯脚部で古墳時代のもの。134は高杯としたが、壺かかもしれない。135・136・141・142は壺で、142は二重口縁壺である。132・138・139・140は土師器甕で、132は台付甕の台部、137はいわゆる宇田型甕、140はS字甕C類である。127は椀、128・129は7世紀末の土師器杯Gである。

S D 52005 (第98図) 143は台付甕で古墳時代中～後期のもの。

S D 52006 (第98図) 弥生時代終末期～古墳時代前期の土師器がみられる。118は高杯で、S D 52019から混入した可能性が高い。杯部内面に水銀朱が付着している。119は高杯または台付鉢。120は小型壺である。121は壺片で、肩部に楡描文・刺突文を施す。122は短い台部の付く甕である。

S D 52008 (第98図) 153は土師器杯A。斎宮Ⅱ-3段階ごろのもの。

S D 52009 (第98図) 154は土師器杯A。153と同じくⅡ-3段階にあたり、9世紀後半ごろのもの。

S D 52013 (第98図) 150・151は斎宮Ⅱ-3段階の土師器杯A。152は053号窯式の灰釉陶器椀である。

S D 52016 (第98図) 古墳時代の土師器がみられる。144は丸底鉢で内外面を密なミガキで調整する。145は土師器椀。146・147は台付甕で端部を折り返す。148は広口壺で、148は内外面にミガキ調整を施す。

S D 52017 (第98図) 古墳時代前期の土師器がみ

られる。156・157は台付甕で、156はS字甕D類、157はC類である。158は広口壺で、口縁部外面と端部に刺突文を施す。

S D 52018 (第98図) 167は古墳時代前期の小型丸底壺である。

S X 52019 (第98図) 遺物は上層から出土した。弥生時代終末期の土師器がみられる。164は台付甕。165は内湾口縁壺。内外面に密なミガキ調整を施す。166は緑泥片岩の板材で、使用痕はないが大型石包丁や砥石などの破片であろうか。

S D 52020 (第98図) 弥生時代終末期の高杯脚部(155)がある。

S D 52022 (第98図) 古墳時代中期以降の土器がみられる。160は高杯で、古墳時代中～後期のもの。161は須恵器杯蓋で5世紀末。162・163は6世紀以降の土師器甕である。

S D 52026 (第99図) 古墳時代の土師器がみられる。168は椀で中期以降。169・170は台付甕で、169はS字甕D類にあたる。

S D 52027 (第99図) 171は土師器杯G。斎宮Ⅰ期、7世紀後半から8世紀ごろのもの。172は土師器高杯。173は台付甕でS字甕C類にあたる。古墳時代前期のもの。174は6～7世紀の土師器甕。

S D 52028 (第98図) 159は土師器台付甕。S字甕C類か。古墳時代前期のもの。

S D 53001 (第99図) 175～178は土師器杯A。175・177は斎宮Ⅱ-4段階、176はⅢ-2段階。179は須恵器瓶。斎宮Ⅱ-1・2段階、9世紀前半ごろのもの。180は土師器甕で斎宮Ⅲ-2段階、11世紀中ごろのもの。181は刀子で、先端部は欠損している。182は鉄釘。183は扁平な砥石である。184～186は古代の平瓦で細かく破砕される。いずれも凹面に布目痕が残る。

S D 53002 (第99～100図) 最下層(187)、下層(188～211)、上層(214～233)、最上層(212・213)に分けて記述する。

187は最下層、溝の底面付近で出土した素文鏡で、直径7cm、鏡胎は厚さ2mmと非常に薄く、ブロンズ病が進行し残りが悪い(写真図版80)。外縁は平縁、紐は鏡胎の薄さに反して半球形のしっかりしたものである。鏡面の反りは失われ、潰れた状態であっ

た。紐の特徴や下層出土土器の年代から、弥生時代終末期～古墳時代の小型仿製鏡の可能性が高いが、素文鏡にしては面径が大きく、外縁の断面形状もやや違和感がある。蛍光X線による成分分析⁽²⁾(第3表)の結果、銅・錫・鉛が主成分で、わずかにヒ素が含まれることがわかった。

188～211は下層の遺物である。弥生時代終末期から古墳時代前期を中心に、5～7世紀代の土器もみられる。土師器は弥生時代終末期から古墳時代前期のものが多い。188・189・191・192は高杯、190は小型器台である。193・194は小型壺。甕はS字甕B・C類(201・202)の他、布留系の甕(197)もみられる。198・207～211は壺で、211は櫛描文と同工具の刺突文を施す。須恵器は陶邑TK47型式の蓋杯(195)や、溝底付近から出土した7世紀後半の短頸壺(196)がある。

214～233は上層の遺物で、様々な時代の遺物が混在しているが、9世紀から中世前期(214～217)、西肩部土器集中および同時期の遺物(223～226・228・231・232)、下層と同様の弥生時代終末期～古墳時代の土師器・須恵器(220～222・227等)の3群に大別される。平安時代以降の遺物は黄灰色シルト出土で、214・215は斎宮Ⅱ-3段階の土師器杯、灰釉陶器皿217は9世紀後半のもの。216は第5型式の山茶碗。他は褐色砂中の遺物である。223～226は7世紀末の土師器甕で、西肩部からまとまって出土した。223・226は外面にヘラ描きがある。218は須恵器杯で5世紀後半。219は鞆羽口。220は土師器台付甕、227は布留系甕か。221は高杯あるいは小型器台脚部。222・230は壺で、222は小型壺である。233は土錘。

212・213は最上層出土の青銅鏡である。212は瑞花円鏡で、面径10.2cm、鏡胎厚さ0.7cm、重さ191.6g、ほぼ完形である(写真図版78)。円形の青銅鏡で、外縁は三角縁、外区に唐草、やや狭めの内区には瑞花文の花を省略し、葉のみを描く。界圏は段がつき、外区の唐草文は偏向唐草に近い。紐座は花形座で先端は平坦である。鏡胎は重厚で鏡上がりは良好である。図上方に鏡掛の湯口が残り、透過X線画像ではこの付近にスが多く認められる(写真図版78)。また、外縁端面や鏡背面に粗い研磨痕が

残り、鏡として実用に至らず埋置されたとみられる。

212と同文様の八稜鏡は日光男体山山頂遺跡⁽³⁾などに例があり、八稜鏡を元に同一工房で製作された変形鏡とみられるが、円鏡とするものは全国的にも希少である。平安京内の鋳物工房だけでなく、地方の工房で独自に鏡生産が行われていた可能性も考えられよう。文様など細部の特徴から、213とはほぼ同時期(10世紀後半)の製作とみられる。

蛍光X線による成分分析(第3表)の結果、銅・鉛・ヒ素が主成分で、特に鉛の含有率が高いことが判明している。また、錫はほとんど含まれない。

213は瑞花双鳥八稜鏡(写真図版79)で、面径8.7cm、重さ35.6gを測る。外縁の一部が欠損している。全体にひび割れて出土したため、保存処理にあたり欠損部を埋め、外縁部も補って補強・復元した。内区には瑞花文と2羽の鳥(鳳凰)をあしらう。鳥文は、それぞれ天地を逆位とし、頭一尾が直線的となっている。二羽の尾羽の表現が異なっており、雌雄を表現している可能性がある。外区の唐草文は点文となって形骸化している。杉山洋氏の八稜鏡編年⁽⁴⁾ではIV期(10世紀後半)に相当し、長野県吉田川西遺跡などに類似例がある。212に比べて薄手のつくりで、錆や割れはあるものの、鏡上がりは良い。八稜鏡の出土は県内24例目(発掘調査では4例目)である⁽⁵⁾。

蛍光X線による成分分析によれば、銅・鉛・ヒ素が主成分で、錫をほとんど含まない(第3表)。また、212に比べ銅の比率がやや高い。

第3表 青銅鏡の蛍光X線分析結果

元素	瑞花円鏡 212		瑞花双鳥八稜鏡 213		素文鏡 187
	鏡背	鏡面	破面	鏡背	破面
Cu	23	19	51	48	49
Pb	49	52	33	32	15
Sn	5	6	0	0	25
As	20	21	14	14	6
Hg	0	0	0	0	0
Fe	1	1	1	4	0
Ni	0	0	0	0	0
Bi	1	1	0	0	0
Ag	1	1	0	1	1
Sb	0	0	0	0	1

S D 53003 (第 100 図) 234 は丸瓦。235 は第 6 型式の山茶碗。236 は平安時代の土師器甕である。主に 12 ～ 13 世紀の遺物がみられる。

S E 53004 (第 101 ～ 102 図) 上層から下層まで、12 世紀～ 13 世紀の遺物がみられる。

251 は最下層の遺物で、第 5 型式の山茶碗。底部外面に「大」の墨書がある。252 ～ 257 は中・下層出土。252 は白磁碗である。253 ～ 256 は山茶碗。253 のみ藤澤編年の第 3 型式、それ以外は第 5 型式である。257 は古代の平瓦。

258 ～ 296 は中層以上の遺物で、258 はロクロ土師器台付小皿。斎宮第 III 期のもの。259 は平安時代後期のロクロ成形土師器碗である。灰釉陶器碗 264 も同時期のもの。260 ～ 263・265 ～ 276 は第 4 ・ 5 型式の山茶碗で、263 は高台内に「○」の墨書がある。なお、山茶碗は内面に煤が付着するものが複数ある。277 は渥美長頸壺、278・279 は片口鉢であろう。280 も格子目叩きのある壺片。281・282 は鉄製釘。283 ～ 285・287 ～ 292・294・295 は古代の平瓦で、打ち欠き痕があり細かく破碎されたようである。286・293 は丸瓦、296 は軒平瓦。内区に変形均整唐草文、外区下縁には鋸歯文を施す。同型のものが大雷寺廃寺で出土している⁽⁶⁾。

S D 53005 (第 100 図) 237・238 は斎宮 III 期の土師器甕である。

S D 53006 (第 101 図) 248 は中世 II 期の土師器皿。

S D 53007 (第 101 図) 247 は斎宮 III 期の土師器甕。

S D 53009 (第 101 図) 249 は 053 号窯式の灰釉陶器皿で 10 世紀前半のもの。他に中世の遺物片がある。

S D 53010 (第 101 図) 250 は中世 I 期の土師器鍋で 12 世紀以降のもの。

S D 53011 (第 103 図) 平安時代後期～末の遺物が混在している。297 ～ 304 は土師器杯・皿で斎宮 III - 1・2 段階。305 はロクロ土師器皿である。306 ～ 308 は土錘。309・310・311 は H72 号窯式の灰釉陶器碗・皿である。312 は青磁碗。313・314 は第 5 型式の山茶碗。315 は管玉である。316 は須恵器壺。317 ～ 319 は陶器壺類、320 も陶器壺で渥美産か。

S K 53012 (第 101 図) 239 は中世 I 期の土師器皿、243 は中世 I b 期の土師器鍋である。240 ～ 242 は第 4 型式の山茶碗。244 は土錘。245・246 は平瓦。

S D 53013 (第 103 図) 327 ～ 329 は第 4 型式の山茶碗。330 は平瓦。

S D 53014 (第 103 図) 325 はロクロ成形の土師器碗で斎宮 III 期のもの。

S D 53015 (第 103 図) 326 は中世 I 期の土師器皿。

S D 54001 (第 103 図) 331 は第 4 型式の山茶碗。332 は平瓦である。

S D 54002 (第 103 図) 333 は土師器杯 G。斎宮 I - 2 段階、8 世紀前半のもの。

S D 54003 (第 103 図) 334 は土師器皿 A。斎宮 I - 3 段階、8 世紀後半のもの。

S K 54004 (第 103 図) 335 は土師器皿、336 は土師器鍋で中世 I 期のもの。

S E 54005 (第 104 図) 7 世紀中葉から 8 世紀前半の遺物群である。

348 ～ 350・352 ～ 354・357 は土師器杯 G。352 は外面にヘラ描きが見られる。351 は土師器杯 A である。355 は混入の土師器高杯。356 は土師器皿で斎宮 I - 2・3 段階のもの。362 は甕で、内面に縦方向のケズリが見られる。364 ～ 366 は土師器甕。367 は土師器鍋。358 ～ 361、368・369 は須恵器で、358 は杯 H 蓋。359 は高杯蓋、360 は有蓋高杯である。361 は杯蓋で 8 世紀のもの。368 は甕で頸部が直立ぎみに立ち上がる。369 は壺である。

S K 54006 (第 103 図) 337 は K90 号窯式の灰釉陶器皿。9 世紀後半のもの。

S D 54009 (第 103 図) 338 は土師器杯。斎宮 I - 2 段階ごろのもの。

S D 54011 (第 103 図) 339 は土師器杯。347 は土師器甕。いずれも斎宮 I - 2・3 段階、8 世紀のもの。340 ～ 346 は弥生時代終末期～古墳時代の土師器である。345 は台付甕で、S 字甕 B 類か。346 は口縁部がやや内湾する鉢である。

S D 54014 (第 104 図) 弥生時代終末期～古墳時代の土師器が見られる。370 は甕、371・372 は台付甕で、371 は S 字甕 B 類。373 は有段高杯か。

S K 54020 (第 105 図) 390 は第 4 型式の山茶碗。

S D 54021 (第 105 図) 平安時代前・中期の土師器甕 391・392 が出土している。

S K 54022 (第 105 図) 393 は山茶碗で、見込みに重ね焼き痕がある。

S D 54023 (第 105 図) 394 は第 5 型式の山茶碗である。

S D 54024 (第 105 図) 395 ～ 397 は第 5 型式の山茶碗。397 は下層出土である。

S D 54025 (第 105 図) 398 は古代の土師器高杯。

S E 54031 (第 104 図) 374 は掘方出土の灰釉陶器碗。375 ～ 386 は井戸枠内出土遺物で、375 ～ 380 は土師器杯 A で斎宮Ⅱ - 4 段階。375 の外面底部に吉祥句の墨書があるが判読できない。381・382 は志摩式製塩土器である。383 ～ 386 は斎宮Ⅱ - 4 段階の土師器甕。他に、土師器 387・388、須恵器壺 389 などがある。概ね 10 世紀前半の遺物群であろう。

S K 54032 (第 105 図) 399 は土師器杯で、斎宮Ⅱ - 4 段階、10 世紀前半ごろのもの。

S K 54033 (第 105 図) 400 は平底の土師器壺または鉢で古代のものか。

S R 54035 (第 105 図) 下層・最下層から弥生時代終末期～古墳時代の土師器が出土している。

401 は壺または高杯で、内面をベンガラで彩色する。402 は高杯か。403 はく字状口縁の甕である。404 は広口壺で口縁部内面と端部に刺突文を施す。405 は甕で、口縁部および肩部に刺突文を施す。

S E 54036 (第 105 図) 井戸枠内、掘方ともに斎宮Ⅲ期の土師器や百代寺窯式の灰釉陶器、初期山茶碗がみられる。

406・407 は斎宮Ⅲ期のロクロ土師器で、406 は碗である。408 は輔羽口の先端付近で黒色に変化している。409・410 は陶器壺・須恵器甕である。413 は土師器甕で斎宮Ⅲ - 2 段階、414 は灰釉陶器碗。

415 ～ 419 は井戸枠検出後、枠内から出土した遺物である。415 は無釉の山茶碗、416・417 は百代寺窯式の灰釉陶器である。418 はロクロ土師器の碗である。419 は古代の平瓦で、凸面に煤が付着する。

S E 54040 (第 105 図) 425 は斎宮Ⅱ - 4 ～Ⅲ - 1 段階の土師器甕。426 は碗形滓の小片である。

S B 54041 (第 105 図) 422 ～ 424 は土師器皿・杯で斎宮Ⅲ期、平安時代後期のもの。

S B 54042 (第 105 図) 420 は土師器杯 A。421 は土師器甕で斎宮Ⅲ - 2 段階、11 世紀中ごろのもの。

S E 55001 (第 105 図) 445 は寸胴形の鉢である。448・449 は土師器甕で、7 世紀後半から 8 世紀ご

ろのもの。450 は土鍾。446・447 は混入であるが、付近に古墳時代遺構の存在を示唆する。

S D 55004 (第 105 図) 427 は第 5 型式の山茶碗である。428 は常滑片口鉢で第 8 型式以降のもの。図示したもの以外に、中世後期の土師器鍋片がある。

S B 55005 (第 105 図) 429・430・432・435・436・438・442 は掘方、他は柱抜き取り痕出土であるが、遺物相に明確な差は認められないため、一括して記述する。出土ピットは観察表を参照されたい。

土師器杯・甕は概ね斎宮Ⅱ - 4 段階に位置づけられる。436 ～ 440 は灰釉陶器碗で K90 ～ 053 号窯式。土器・陶器の時期は 10 世紀前半を主体とするが、灰釉陶器の一部は 9 世紀後半に遡る可能性がある。

S K 56001 (第 106 図) 451 は斎宮Ⅲ - 2 段階のロクロ土師器碗である。452 は山茶碗で 11 世紀中ごろから 12 世紀のもの。

S K 56002 (第 106 図) 453 は陶器壺類。中世のものか。

S E 56003 (第 106 図) 上層出土の遺物が多い。485 ～ 487 はロクロ土師器皿である。488 もロクロ土師器皿か。いずれも中世Ⅰ期のもの。490 は大ぶりの土鍾である。491・493 ～ 496・499 ～ 503 は第 4・5 型式の山茶碗で、492 は無釉の耳皿。497 は灰釉陶器碗、504 は中世Ⅰ b 期の土師器鍋である。

S E 56004 (第 106 図) 中世Ⅱ期の南伊勢系土師器、第 6 型式の山茶碗などがみられる。505 ～ 508 は土師器皿で中世Ⅱ a 期。509 ～ 512・514 は山茶碗で、第 5・6 型式がみられる。511 の高台内には墨書「十」とある。513 は薄手の白磁碗。515 は青磁碗で見込みに花文がみられる。516 は陶器鉢。517 は中世Ⅱ a 期の南伊勢系土師器鍋である。

S E 56005 (第 106 図) 454 は陶器壺の底部である。455 は第 4 ～ 5 型式の山茶碗。

S E 56006 (第 106 図) 456 ～ 459 は土師器杯で、斎宮Ⅱ - 4 段階に位置づけられる。456・457 は井戸枠痕内の上層から出土した。杯 456 の底部外面には野太く「七西井」の墨書がある。

458 は井戸枠内下層出土で内面に放射状暗文、見込みに螺旋状暗文を施す。他に志摩式製塩土器(464)を伴う。

緑釉陶器碗(460)、土師器甕(462)は掘方上層

からの出土である。461は須恵器壺、463は甕である。
S K 56007 (第106図) 平安時代後期から末の遺物が混在している。465～467・469～471は土師器杯で、斎宮Ⅱ-4～Ⅲ-1段階のもの。皿468は中世のものであろう。472は台付鉢。473は第4型式の山茶碗である。474・475は土師器鉢である。476は粗目の砥石で、非常に重量がある。

S K 56010 (第106図) 中世Ⅰ期の土師器や山茶碗などがみられる。480は土師器皿、482は土師器鍋である。481は第4型式の山茶碗。

S K 56011 (第106図) 483・484は土師器甕で、いずれも斎宮Ⅱ期、8世紀末から9世紀初めごろのものであろう。

S K 56012 (第107図) 531は中世Ⅰ期の土師器鍋である。

S K 56013 (第106図) 477は灰釉陶器椀。10世紀後半ごろのもの。

S K 56014 (第106図) 478は土師器皿A。内面にまばらな放射状暗文を施す。斎宮Ⅰ-3段階、8世紀後半ごろのもの。479は土師器壺か。

S K 56015 (第107図) 518は土師器杯A。519・520は土師器甕。いずれも斎宮Ⅱ-1段階、8世紀末から9世紀初めごろのもの。

S K 56018 (第107図) 521は土師器甌の底部である。522は灰釉陶器椀で、053号窯式前後のもの。526は須恵器杯B。斎宮編年Ⅰ-1・2段階、8世紀ごろのもの。

S K 56019 (第108図) 580は志摩式製塩土器。581は古代の土師器甕である。

S K 56020 (第107図) 546は土師器甕。口縁部の形状からみて、斎宮Ⅱ-2段階、9世紀中ごろのもの。

S K 56021 (第107図) 527～529は第4型式の山茶碗で、527は輪花・灰釉がみられる。530は中世Ⅰ期の土師器鍋である。12世紀中葉のもの。

S K 56022 (第107図) 532は第4型式の山茶碗。

S D 56023 (第107図) 539はK90号窯式の灰釉陶器段皿である。540・541は須恵器瓶類。542は土鍾。

S K 56024 (第107図) 523は土師器皿。524は山茶碗。藤澤編年第5型式にあたり12世紀後半ごろのもの。525は土師器鍋。口縁端部を内側へ折り込む形状からみて南伊勢中世Ⅰ期にあたり、12世紀

中ごろのもの。

S D 56025 (第108図) 縄叩きの平瓦579がある。

S X 56026 (第107図) いずれも周溝出土の弥生時代終末期の土師器壺である。547は南側周溝出土で、ハケ調整・無文の広口壺である。548は下層確認中に東側周溝底の掘り残しから出土した。外面はミガキ、肩部に櫛描文を施す。

S X 56027 (第108図) 565は西側周溝、563・569・571・572は北側周溝、561・562・564・566・567・573は東側周溝のそれぞれ上層から出土した、弥生時代終末期の土師器である。

無文ないし装飾の少ない広口壺561～564が主体で、561・563は下半をミガキで仕上げるが、他はハケ調整のみである。561・562は口縁端部を拡張し、561は刺突で施文するが、562は無文で、頸部は強く立ち上がる。566は赤彩のある広口壺で、肩部に櫛描直線文・刺突による鋸歯文・円形浮文がある。肩～胴部と口縁内面をベンガラで赤彩し、肩部の鋸歯文・円形浮文にも赤彩がある。

台付甕はく字状口縁の571、S字甕B類569がある。高杯は有稜高杯572、椀形高杯573・574がみられる。568は平底の鉢である。有稜高杯572、S字甕B類569などから、概ね濃尾平野の廻間Ⅱ式前半に併行する土器群とみられる。

570・577・578は西側周溝上層出土の土器群で、7世紀後半の土師器杯(578)、甕(570)、須恵器杯ないし皿(577)である。

S K 56028 (第107図) いずれも8世紀前後のもので、上層出土遺物が多い。土師器は杯(533)、甌(535・536)、甕(537・538)があり、斎宮Ⅰ-2～Ⅱ-1段階のものである。534は須恵器杯蓋である。

S E 56029 (第109図) 582～602・607は最上層土器集中の遺物である。582は土師器杯C。582の内面に放射状暗文を施す。583～595は土師器杯G。いずれも斎宮Ⅰ-1段階、7世紀末から8世紀初頭のもの。583の底部外面には線刻を施す。

596～601は須恵器杯。599は須恵器杯蓋で口縁部にかえりをもつ。601は須恵器杯B。須恵器も土師器と同じく、7世紀末から8世紀初頭ごろのものである。

602は土師器甌。603～606は上層出土の土師器

甕である。607 は須恵器甕。608 は砂岩製の砥石で、土器と同じく破砕されている。609 は薄い椀形滓の小片である。

S K 56031 (第 107 図) 556 は土師器皿、557 は常滑製品で火鉢か。558 は南伊勢系土師器の焙烙である。いずれも近世の遺物である。

S K 56032 (第 107 図) 543 は土師器杯 G。544・545 は土師器甕で、いずれも外面にヘラ描きがある。斎宮 I - 1・2 段階、7 世紀後半から 8 世紀中葉のものである。

S D 56033 (第 107 図) 549 はピット等からの混入である。平安時代前～中期の土師器杯で、底部内面に螺旋状暗文を施す。

S B 56034 (第 107 図) 559 は土師器杯で、斎宮 II - 4 段階。560 はやや深さのある灰釉陶器段皿である。

S B 56035 (第 107 図) 550～552 は土師器杯、554 は土師器甕で、斎宮 II - 3・4 段階に位置づけられる。553 は志摩式製塩土器の底部である。

S F 56036 (第 109 図) 610・611 は奈良時代の土師器杯である。610 は内面に放射状暗文、見込みに螺旋状暗文を施す。611 は内面に二段の放射状暗文、見込みに螺旋状暗文を施す。いずれも底部外面をケズリとする。斎宮 I - 2 段階、8 世紀前半のもの。

S B 56063 (第 109 図) 混入遺物の S 字甕 (612) がある。

S B 56064 (第 109 図) 614～617 は土師器杯で、いずれも斎宮 II - 3・4 段階、9 世紀後半～10 世紀前半のもの。617 は内面に放射状暗文を施す。

S B 56065 (第 109 図) 613 は土師器杯で、斎宮 III - 1 段階、10 世紀後半ごろのもの。

S D 57001 (第 109 図) 中世 IV a 期 (15 世紀末) の南伊勢系土師器がみられる。630 は口径 9 cm の土師器皿、634 は小型の鍋、635 は下層出土の羽釜で器壁はごく薄い。

山茶碗 (633) や青磁 (632) など、中世 II 期の遺物も下層に一定量みられる。636 は小型の椀形滓である。631 は古代の土師器椀で混入であろう。

S D 57002 (第 109 図) 618 は第 6 型式の山茶碗。619 は古代の土師器甕である。620 は砂岩製の砥石。

S D 57005 (第 109 図) 中世 IV 期の土師器鍋類 (629) がある。また、図示したもの以外に中世 III 期

の土師器などが出土している。

S E 57006 (第 109 図) 621 は中世 II 期の土師器皿である。622 は白磁椀で薄手のもの。623 は渥美産の陶器鉢、624・625 は第 5 型式の山茶碗である。

S D 57007 (第 109 図) 626 は第 5 型式の山茶碗。627 は土鍾である。

S D 57010 (第 109 図) 土鍾 (637) などが出土している。

S D 57017 (第 110 図) 653・654 は斎宮 II - 3・4 段階の土師器杯である。655 は土師器杯または皿の底部片で、外面に墨書がある。字下半が欠けているが、「美カ」。なお、「美」は 1・2 次調査でも出土している。656 は土師器甕である。657 は須恵器瓶類。

この他、猿投産の緑釉陶器把手付瓶 (658) は特筆すべき遺物である。摩滅により釉は剥落している。

S X 57022 (第 110 図) 639～644 は棺内供献土器で、小皿 (639～641) のうち、640・641 はロクロ土師器である。642～644 は口径 15cm 前後の皿。

645～648 は棺外供献土器である。すべて小皿で、口縁端部を強くヨコナデする。

棺内・棺外ともに中世 I b 期 (12 世紀後半) に位置づけられる。649 は上層出土の土師器鍋である。

S D 57023 (第 110 図) 650 は混入遺物で、古墳時代前期のいわゆる柳ヶ坪型壺である。

S K 57024 (第 110 図) 666 は K90 号窯式の灰釉陶器皿である。

S D 57025 (第 110 図) 667・668 は第 4 型式の山茶碗である。669 は古代の平瓦で細かく破砕される。

S K 57026 (第 110 図) 651 は口径 11cm の土師器皿で中世 III 期のもの。652 は陶器の瓶類あるいは鉢。

S D 57029 (第 110 図) 659 は中世の土師器小皿である。660 は同安窯系の青磁椀で外面に楯目文がみられる。661～663 は第 4・5 型式の山茶碗。664 は南伊勢系土師器鍋で中世 II a 期。665 は中世 I 期の土師器鍋である。

S K 57031 (第 110 図) 680 は土師器台付椀。斎宮 III 期のもの。681 はロクロ土師器の台付椀である。682・683 は斎宮 III - 2 段階のロクロ土師器杯で、683 はごく短い台が付く。684 は内黒の黒色土器台付椀で、見込みに螺旋状暗文がみられる。685 は灰釉陶器深碗で、底部に焼成後穿孔を施す。686～689

は百代寺窯式の灰釉陶器碗である。690も碗。691は大型の土師器鉢である。692～695は土師器甕で、斎宮Ⅲ-2段階ごろのもの。

全体として11世紀前半代の遺物が多くみられる。

S D 57032 (第110図) 696～698は土師器皿、703は中世Ⅱa期の南伊勢系土師器鍋である。699は瓦器碗である。700～702は第4・5型式の山茶碗。704・705は土鍾である。

12世紀後半から13世紀前半の遺物群である。

S D 57036 (第110図) 679は斎宮Ⅲ期の土師器皿。**S B 57041 (第111図)** 706・708・714・724・726・727・730は掘方、707・710・722・723・728・729は柱痕出土遺物であるが、遺物の時期に大きな差は認められないため、一括して記述する。出土ピットの詳細は遺物観察表を参照されたい。

706～716は土師器杯で、706の体部内面にまばらな放射状暗文を施す。714は掘方出土で底部外面に「保平_カ」の墨書がある。1文字目が不鮮明である。717は土師器杯あるいは皿。外面に墨書があるが判読できない。722～726は土師器甕。727は甌である。これらは斎宮Ⅱ-4段階に位置づけられる。

718～720は053号窯式の灰釉陶器皿・碗である。721は志摩式製塩土器。728・729は土鍾である。730は鉄刀子で先端は欠損する。

土器、陶器の時期は概ね10世紀前半に位置づけられよう。また、志摩式製塩土器や土鍾の出土は、建物の性格を考える上で重要である。

S B 57042 (第110図) 673～675は土師器杯、678は土師器甕で斎宮Ⅱ-4段階。676は緑釉陶器の段皿、677は三日月高台の灰釉陶器皿で、K90～053号窯式のもの。675は掘方、674・676は柱痕から出土した。

S B 57043 (第110図) 670～672は土師器杯で斎宮Ⅱ-4段階。670・672は柱痕出土である。

S B 57044 (第112図) 771～774は土師器杯で、同一ピットの柱痕から出土した。斎宮Ⅲ-1段階のもの。775は口縁部が直立する土師器甕である。

S B 57045 (第112図) 776は斎宮Ⅲ期の土師器杯である。777は灰釉陶器碗で灰釉は漬け掛け。10世紀代のものであろう。778・779は黒色土器で、778は杯、779は台付碗とともに両黒である。いずれも斎宮Ⅲ-1段階、10世紀後半ごろのもの。

S B 57047 (第112図) 780は初期の山茶碗である。

S B 57048 (第112図) 781は斎宮Ⅲ期の土師器皿。

S B 57049 (第112図) 782は斎宮Ⅱ-4～Ⅲ-1段階の土師器杯である。

S D 57051 (第112図) 783は第5型式の山茶碗。

S D 57053 (第111図) 平安時代末の遺物を主体として、平安時代後期の遺物が若干混じる。

732・733は土師器皿・杯、734～736はロクロ土師器杯等で、斎宮Ⅲ～中世Ⅰ期のもの。731は瓦器碗である。738～758は上層から出土した渥美型第4・5型式の山茶碗である。739・740・745など輪花や灰釉漬け掛けのものが含まれる。皿755・756は無高台である。759は陶器鉢。760～763は中世Ⅰb期の土師器鍋で12世紀ごろのもの。764は古代の平瓦である。737は磁器皿だが近世の混入か。

765～770は波板状凹凸面（溝内ピット）の遺物で、細かく破砕されている。上層遺物に比べ古相の遺物が多い。765は緑釉陶器瓶類で、外面は著しく摩滅する。766・767は第3・4型式の山茶碗である。768は渥美産甕。769は須恵器ないし中世の陶器甕である。770は古代の平瓦片である。

S D 57054 (第112図) 784・785は第4型式の山茶碗で、784は輪花がみられる。

S D 57058 (第112図) 786は内黒の黒色土器台付碗で、内面に螺旋状暗文がみられる。斎宮Ⅲ-1段階、10世紀後半ごろのもの。787はロクロ土師器皿で柱状の台が付く。788は灰釉陶器碗である。789は土師器甕。灰釉陶器を除き、いずれも平安時代後期、斎宮Ⅲ期のものである。

S A 57060 (第112図) 790は土師器杯で、斎宮Ⅱ-3・4段階のものか。791は土鍾である。

S D 57062 (第112図) 792は土師器小皿、793はロクロ土師器皿で中世Ⅰb～Ⅱa期のもの。794は山茶碗第4型式、795は口縁部が直立する土師器鍋である。12世紀後半ごろの遺物群であろう。

S D 57064 (第112図) 796はロクロ土師器の台付皿、797～801は第4型式の山茶碗である。802・803は灰釉陶器瓶類。804は小ぶりの碗形洋である。

S A 57068 (第112図) 805は土師器杯あるいは皿小片。外面に「十」とみられる墨書がある。

S D 57069 (第112図) 806はロクロ土師器碗であ

る。胎土は精良で白色のもの。807は第4型式の山茶碗である。

S B 57071 (第112図) 808～810は土師器杯、815・816は土師器甕で、斎宮Ⅱ-3・4段階のもの。813は内黒の黒色土器碗で、放射状・螺旋状暗文がみられる。814は土錘。817・818は灰釉陶器瓶類で、K90号窯式ごろのものか。818は灰釉ハケ塗り、口縁部を打ち欠いている。土師器・灰釉陶器とも、概ね9世紀後半から10世紀前半に位置づけられよう。

出土ピットの詳細は遺物観察表を参照されたい。
ロクロ土師器812のみ、側柱以外のピットから出土しており、他と時期が異なる遺物である。

S D 57072 (第112図) 819はロクロ土師器杯、820は土師器甕で斎宮Ⅲ-2段階、11世紀中ごろのもの。

S B 57076 (第112図) 821は土師器杯、822は内黒の黒色土器台付碗で、斎宮Ⅲ-1段階、10世紀後半ごろのもの。

S D 58003 (第112図) 823は弥生土器の甕底部で中期以前のものであろう。

S D 58007 (第112図) 824は土師器杯の小片で、斎宮Ⅲ期のものである。

S D 58009 (第112図) 825は弥生土器鉢か。

S D 58010 (第112図) 826は弥生時代後期のく字状口縁甕で、口縁端部に刻みを施す。

S X 58013 (第112図) 827は土師器杯で、斎宮Ⅱ-4～Ⅲ-1段階、10世紀のもの。828は小型の土師器甕で底部をわずかに欠くが、完形に近い。外面に煤が付着する。

S D 58015 (第112図) 829は三日月高台の灰釉陶器碗ないし皿である。

S D 58016 (第112図) 平安時代中～後期の遺物群である。830～841は土師器杯で、斎宮Ⅱ-3～4段階。835・840のように薄手で二段ナデ状のものが目立つ。843は土師器台付碗で斎宮Ⅲ-1段階。844は内黒の黒色土器で、ごく低い高台が付く。斎宮Ⅱ-4段階ごろのもの。845は土師器杯あるいは皿片で外面に墨書がある。846は三日月高台の灰釉陶器碗である。847・848は志摩式製塩土器で口縁部が分厚いもの。849・850は土師器甕である。

S D 58018 (第113図) 平安時代中期を主体としつつ、様々な時代の遺物が混在している。853～

876は土師器杯で、853は内面底部に螺旋状暗文を施す。854・855は内面に放射状暗文、854の見込みに螺旋状暗文を施す。876の外底部には「平成」の墨書がある。これらは斎宮Ⅱ-4段階、10世紀前半に位置づけられよう。877・878・879は土師器杯あるいは皿片で、877の外面には「乃カ」、878の外面には「平」、879の外面には「大」の墨書がある。

880は内黒の黒色土器碗である。881は土師器台付碗。882・883は灰釉陶器碗、884は深碗で、灰釉陶器は053号窯式以降のものが主体である。885・886は土師器鉢である。

887～889は志摩式製塩土器で、口縁部が大きく肥厚するものと先すぼみのものがある。890は須恵器甕または瓶。891～899は土師器甕で、平安時代前期までのもの(891～893)と、平安時代中期以降のもの(894～899)がある。900は古代の平瓦。

901は小ぶりの椀形滓である。902は砂岩製の砥石で、主面・側面に使用痕光沢がみられる。

S D 58020 (第112図) 851は土師器鍋で中世Ⅰ期のもの。852は第4型式の山茶碗である。

S D 58021 (第114図) 904は土師器杯、905は土師器甕で、いずれも斎宮Ⅲ-2段階のもの。

S D 58022 (第114図) 903は斎宮Ⅱ期の土師器甕。

S D 58023 (第114図) 906は第4型式の山茶碗、907は中世Ⅰ期の土師器鍋である。

S D 58026 (第114図) 土錘908が出土している。

S D 59002 (第114図) 913は土師器杯で口径が小さい。図示したもの以外に平安時代前～後期の遺物がある。

S D 59003 (第114図) 909は鉄滓ないし鉄塊系遺物で、酸化土砂が付着し、球形を呈する。

S D 59005 (第114図) 平安時代後期や中世Ⅰb～Ⅱa期の遺物が混在している。917は中世Ⅰ期のロクロ土師器皿である。918は丸底の土師器の壺で古代のものか。919は内黒の黒色土器碗で斎宮Ⅲ期のもの。920～923は第4・5型式の山茶碗である。924～926は中世Ⅰb～Ⅱa期の土師器鍋。927は陶器鉢か。928・929は古代の瓦片である。

S D 59006 (第114図) 910は灰釉陶器碗で053号窯式のもの。

S D 59007 (第114図) 平安時代後期の遺物がみ

られる。930は土師器椀で斎宮Ⅲ-2段階、932～935は土師器杯で斎宮Ⅲ期のもの。936もこの時期のロクロ土師器杯である。937は土鍾。938は灰釉陶器深椀で、H72号窯式であろう。

S D 59008 (第114図) 939・941は中世Ⅰb期の土師器皿・鍋である。942～946は山茶碗で、初期のものから第6型式まで時期幅がある。945は内面に煤が付着する。

S D 59011 (第114図) 911は土師器杯G。斎宮Ⅱ期以前か。912も同時期の須恵器杯蓋である。

S D 59012 (第114図) 914は斎宮Ⅱ期の土師器甕である。図示したもの以外に、平安時代後期の遺物がある。

S K 59013 (第114図) 915・916は斎宮Ⅰ期の土師器杯で奈良時代のもの。

S D 59014 (第114図) 947は弥生時代後期の広口壺で、口縁端部を拡張、垂下させる。

S D 59017 (第114図) 948は弥生土器高杯で弥生後期後半のもの。949は古代の土師器甕である。

S F 59021 (第114図) いずれも奈良時代の土師器である。950は皿で、内面に放射状暗文を施す。斎宮Ⅰ-3段階、8世紀後半ごろのもの。951～952は土師器甕、953は甗または長胴甕である。952・953は内面に幅狭のケズリがみられる。

S D 59022 (第114図) 954は粗製の土師器杯Gで、斎宮Ⅰ期、7世紀後半ごろのもの。

S D 59023 (第114図) 955は須恵器瓶の頸部片で平安時代以降のもの。956は053号窯式以降の灰釉陶器椀で、内面に煤が付着する。

S K 59024 (第114図) 957は土師器皿で、見込みに線刻を施す。斎宮Ⅰ-3段階、8世紀後半のもの。

S K 59025 (第114図) 958は古代の長胴甕である。

S K 59026 (第114図) 959は高台を付した須恵器椀である。奈良時代のもの。

S D 59027 (第115図) 様々な時期の遺物がみられるが、平安時代前～中期の遺物を主体とし、飛鳥・奈良時代のものも一定みられる。

978・989～993は土師器皿で、978は内面に放射状暗文、見込みに螺旋状暗文、底部外面に線刻を施す。斎宮Ⅰ期のもの。979・980・982・984～988は土師器杯Aで、いずれも斎宮Ⅱ期におさまるもの

である。979・980は内面に放射状暗文を施す。

981は土師器杯Gで内面に煤が付着する。7世紀後半から8世紀前半ごろのもの。1010もこの時期の甕である。983は杯類のなかでは新しく、斎宮Ⅲ期以降。987も斎宮Ⅲ期以降のものか。994・995は土師器杯あるいは皿片。いずれも外面に「□平」の墨書がある。996は土師器杯蓋の摘み部。997は土製品で用途は不明。元の形状も不明確である。998～1000は須恵器杯蓋、1001～1004は須恵器杯で8～9世紀前半のもの。1005は土師器甗。1006は鉢、1007～1013は土師器甕で、斎宮Ⅱ期のもの。1014は土師器鍋。1015～1018は須恵器の貯蔵具類で、1015・1017は甕。1017は口縁部内面に線刻を施す。1016は短頸壺、1018は横瓶である。

S K 59033 (第114図) 960～966は土師器杯あるいは皿、969は甕、967は台付椀で斎宮Ⅲ-1・2段階、10世紀後半から11世紀中ごろのもの。968は緑釉陶器椀で近江産か。

970～977は土鍾で、9区の土坑・ピットには土鍾が多くみられる。

S K 59034 (第116図) 1019・1020は斎宮Ⅲ-1段階の土師器杯、1021は須恵器杯蓋片で内面に線刻を施す。1022は緑釉陶器段皿でK90号窯式。緑釉の色調は薄い。1023・1024は土師器甕で、1023は土師器杯と同時期のもの。

1025～1029は土鍾である。

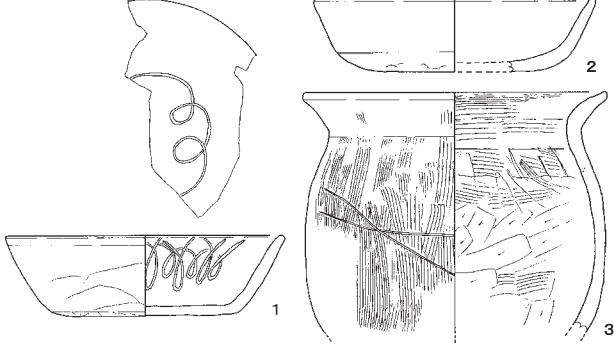
S D 59035 (第116図) 1030は土師器杯A。斎宮Ⅱ-1段階、8世紀末から9世紀初めごろのもの。1031は須恵器杯蓋。9世紀以降のもの。1032は土師器皿A。斎宮Ⅱ-1段階ごろのもの。

S K 59039 (第116図) 1033はロクロ土師器椀。1034は土師器杯で斎宮Ⅲ-2段階、11世紀中ごろのもの。1035は土師器甕。

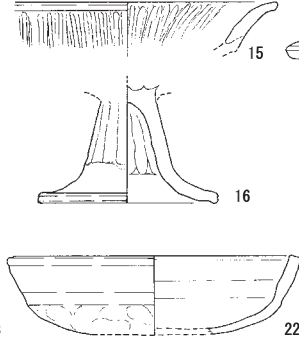
S K 59041 (第116図) 1036～1040は斎宮Ⅲ期の土師器杯。1041・1042は黒色土器椀で、1041は両黒、1042は内黒である。いずれも斎宮Ⅲ-1～2段階のもの。1043は近江産の緑釉陶器小椀、1044はH72号窯式の灰釉陶器椀である。これらは10世紀後半から11世紀初頭ごろの遺物群である。

S B 59042 (第116図) 1045は掘方出土の土師器杯で、斎宮Ⅲ期。

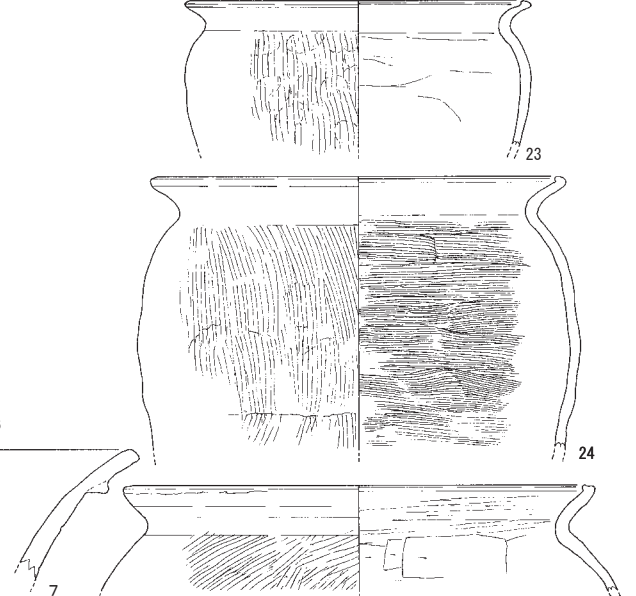
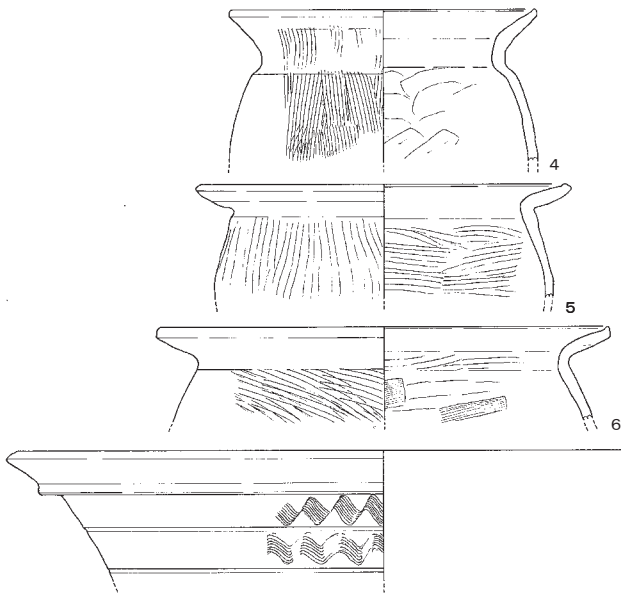
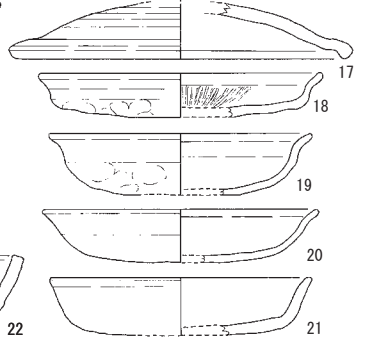
SD51001 (1~14)



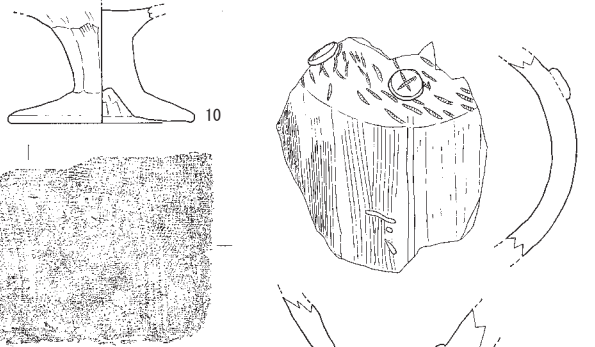
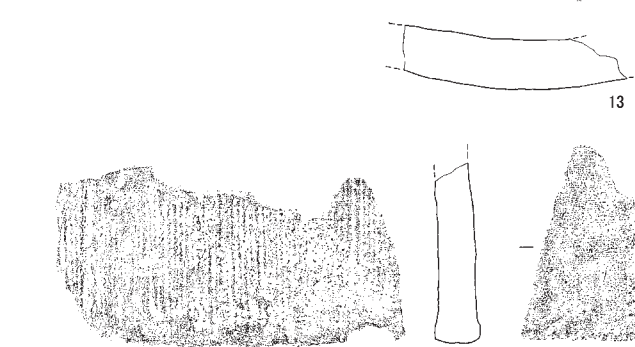
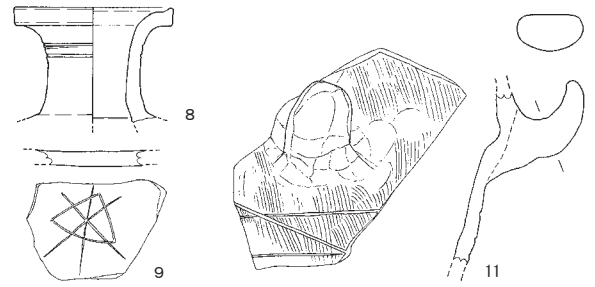
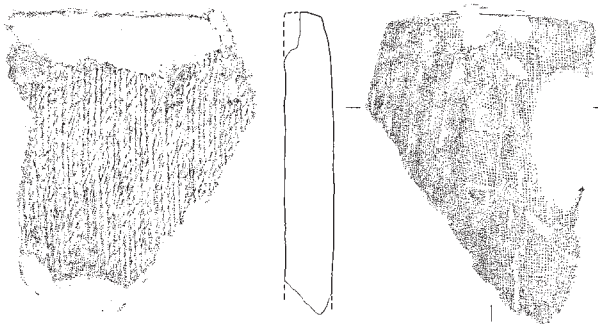
SD51004 (15·16)



SD51005 (17~25)



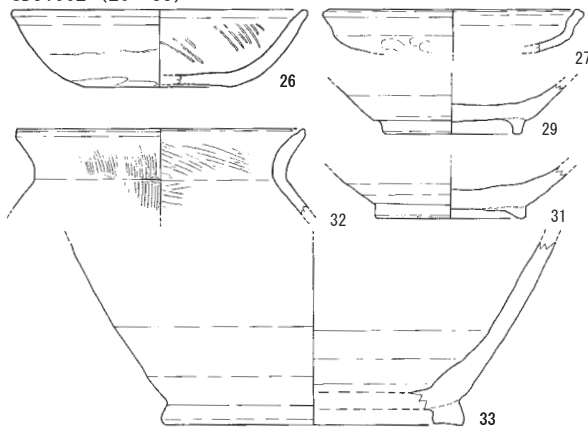
0 (1:4) 20cm 25



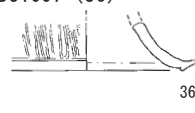
0 (1:4) 20cm

第94图 土器・陶磁器等 1区① (1:4)

SD51002 (26~35)



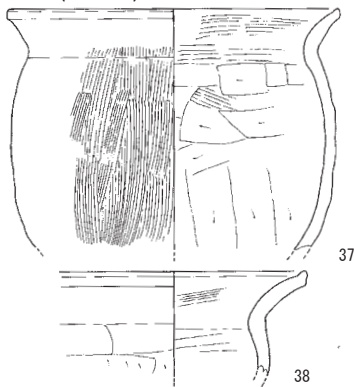
SD51007 (36)



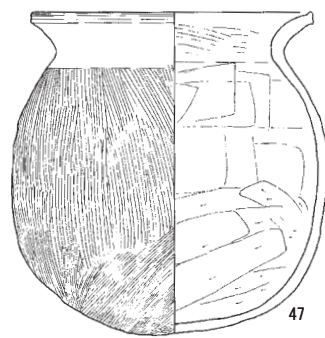
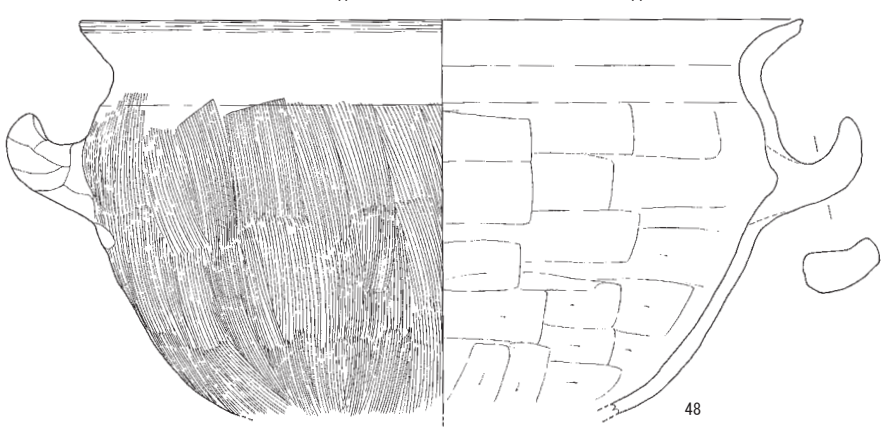
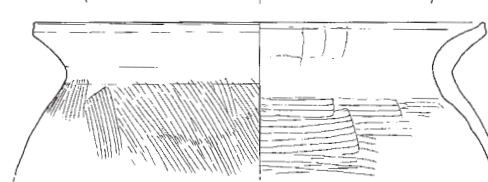
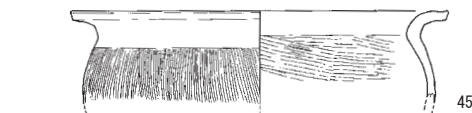
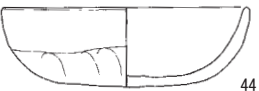
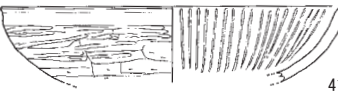
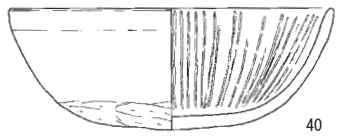
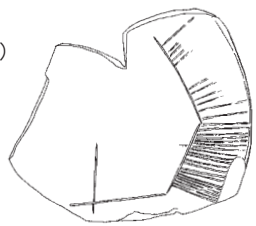
SD51010 (39)



SD51008 (37·38)

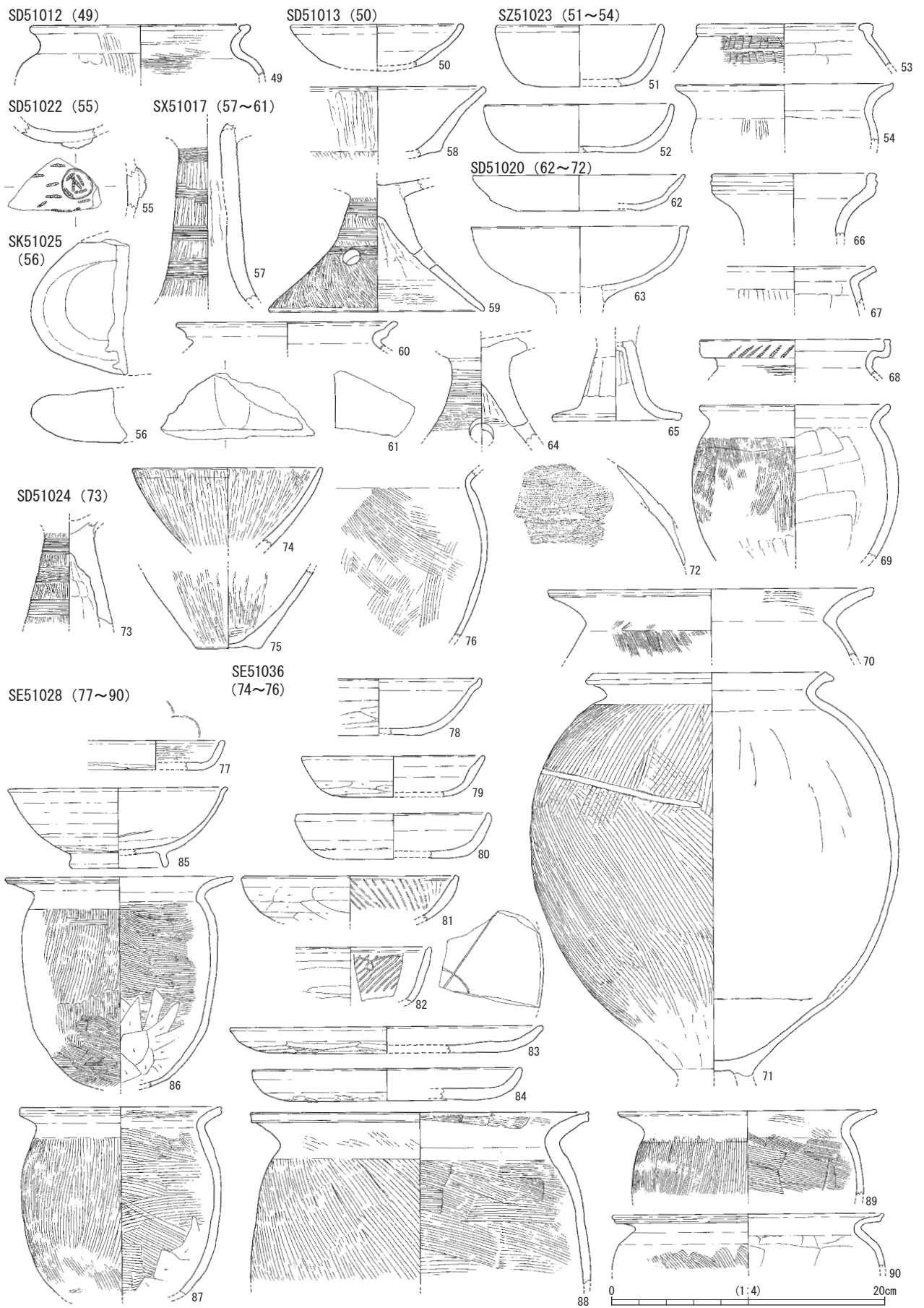


SD51011 (40~48)



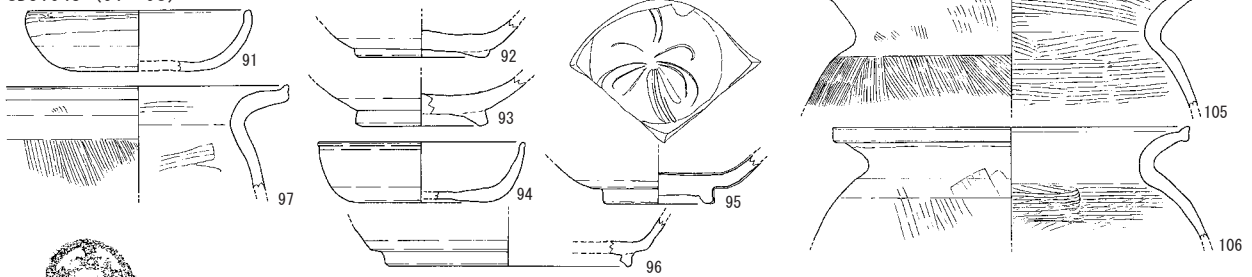
0 (1:4) 20cm

第95図 土器・陶磁器等 1区② (1:4)



第96图 土器・陶磁器等 1区③ (1:4)

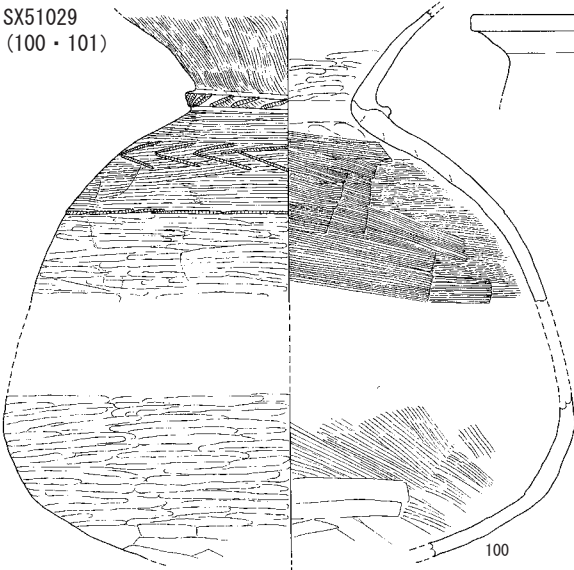
SD51043 (91~98)



SD51041 (99)



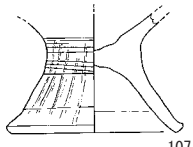
SX51029 (100 · 101)



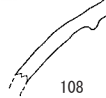
SD51045 (102~104)



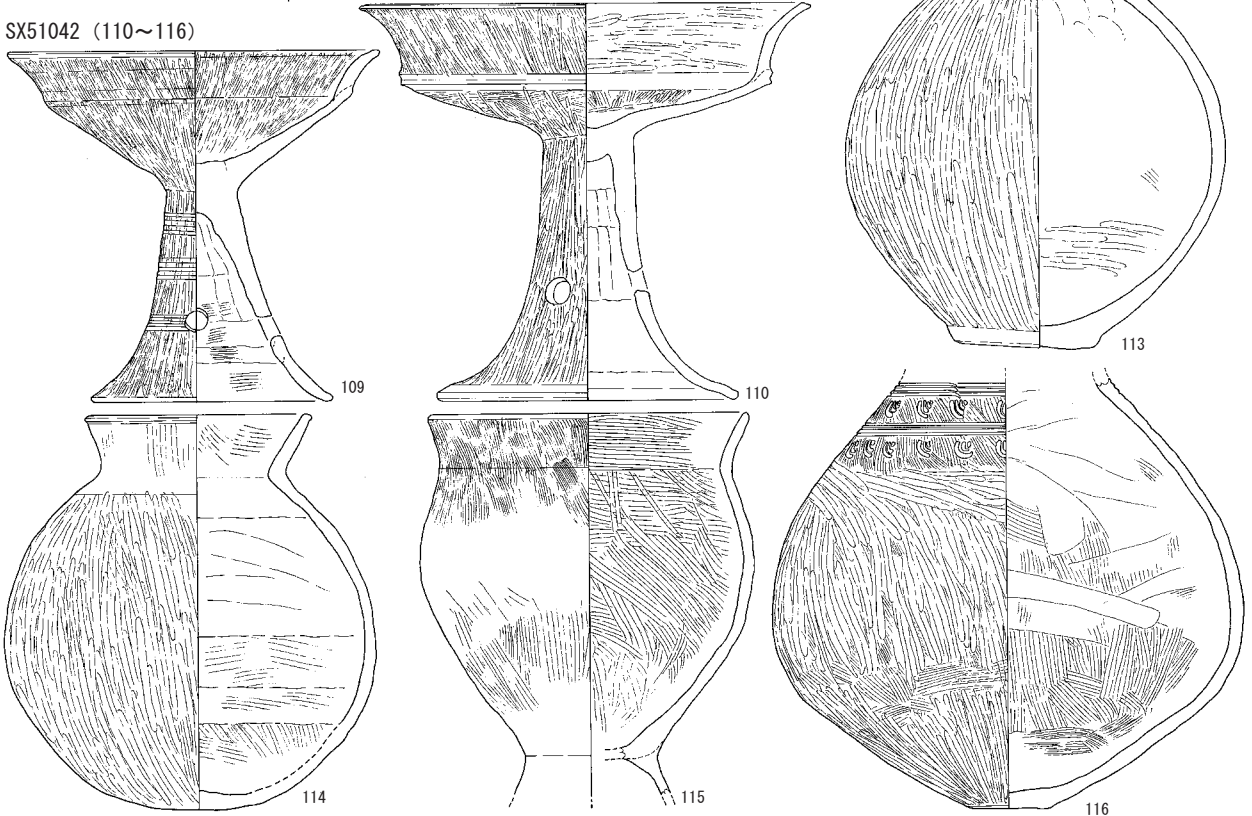
SD51044 (105~107)



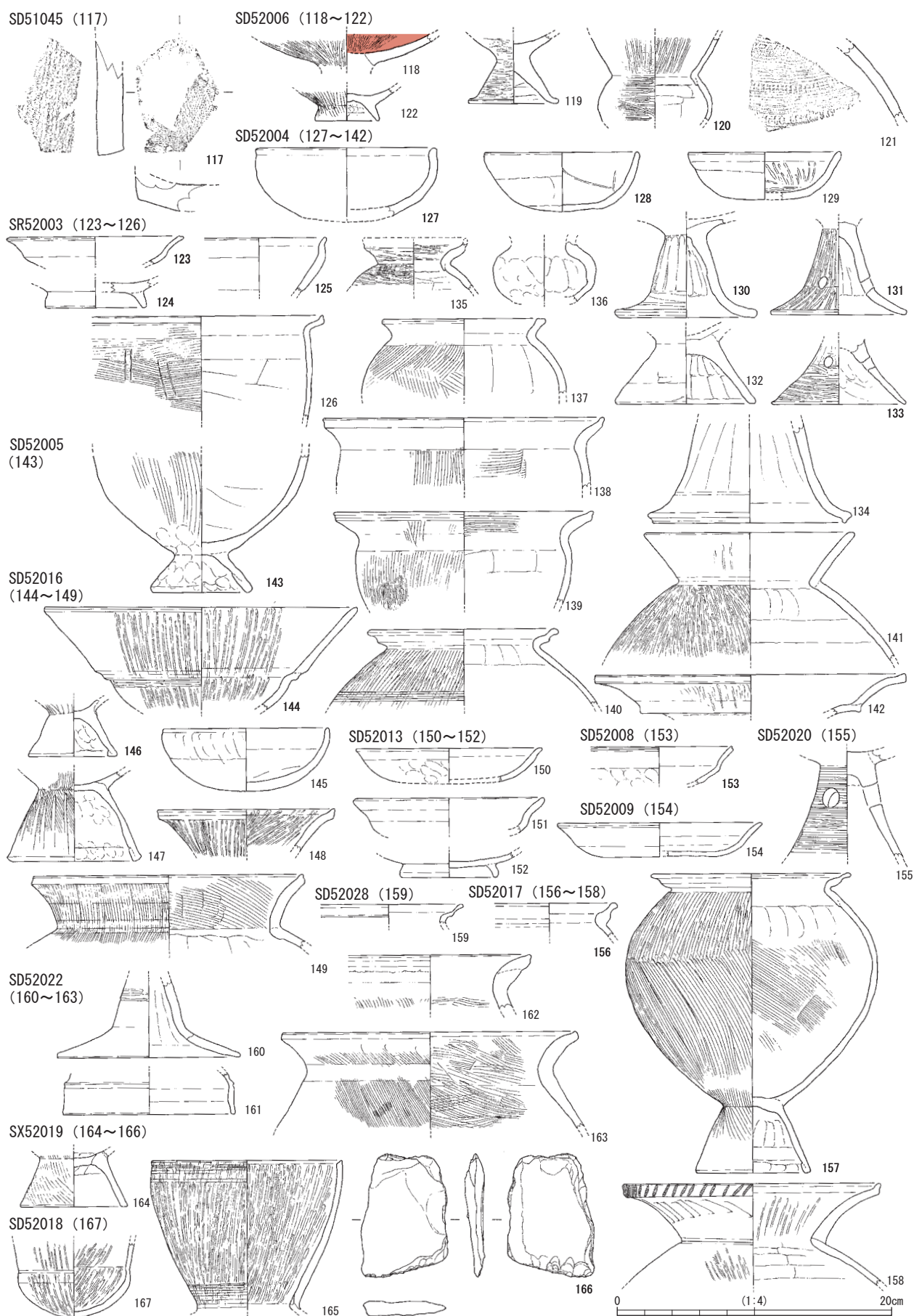
SD51040 (108)



SX51042 (110~116)

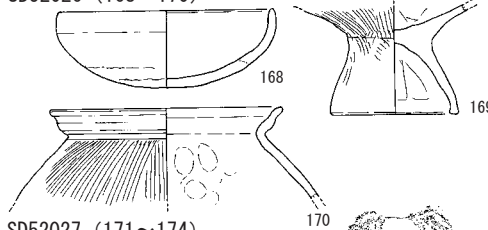


第97図 土器・陶磁器等 1区④ (1:4、98は1:2)

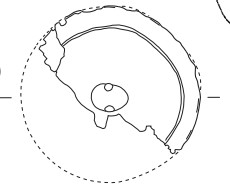


第98図 土器・陶磁器等 1区⑤・2区① (1:4)

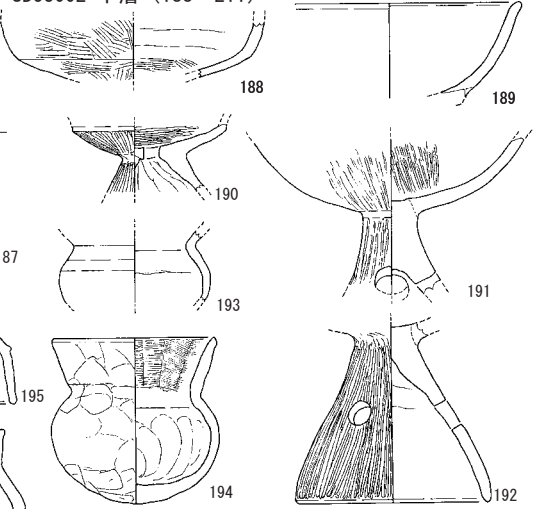
SD52026 (168~170)



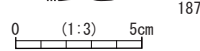
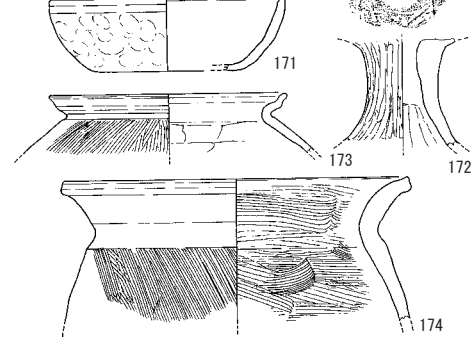
SD53002 最下層 (187)



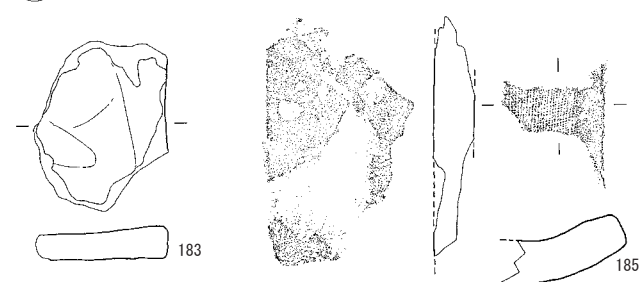
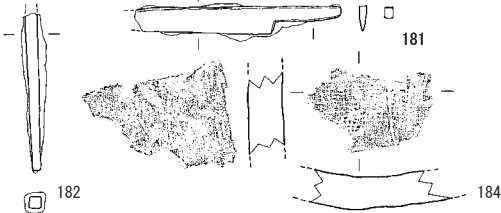
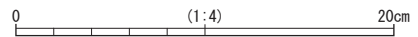
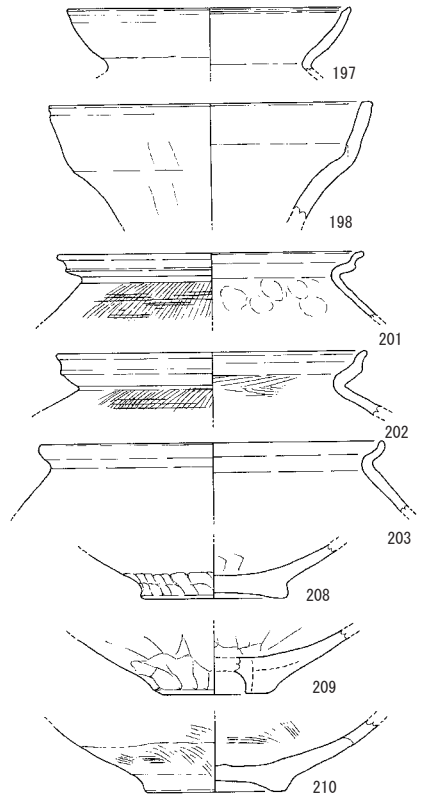
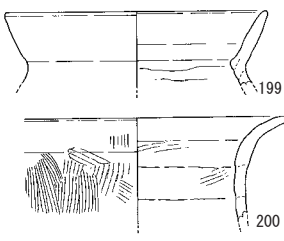
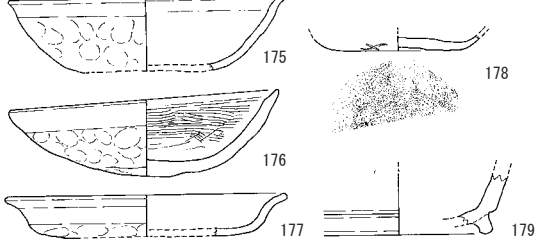
SD53002 下層 (188~211)



SD52027 (171~174)

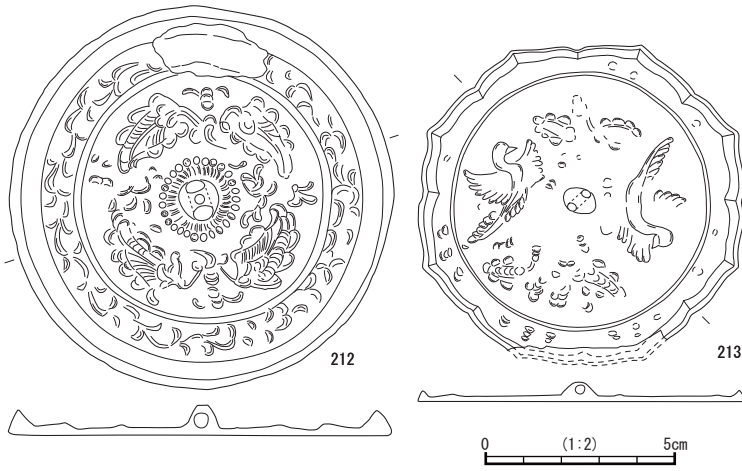


SD53001 (175~186)

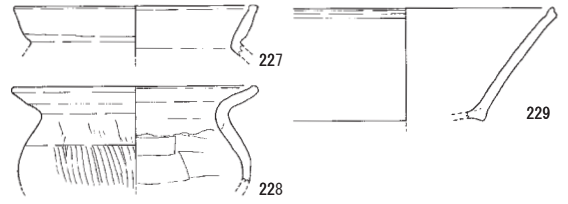
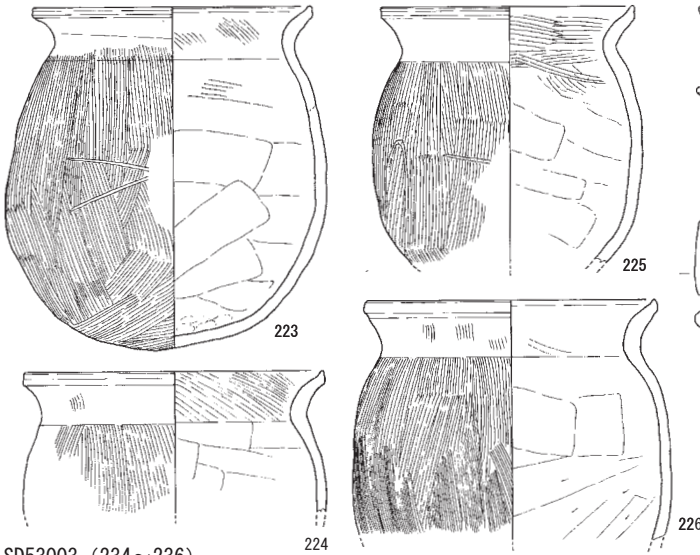
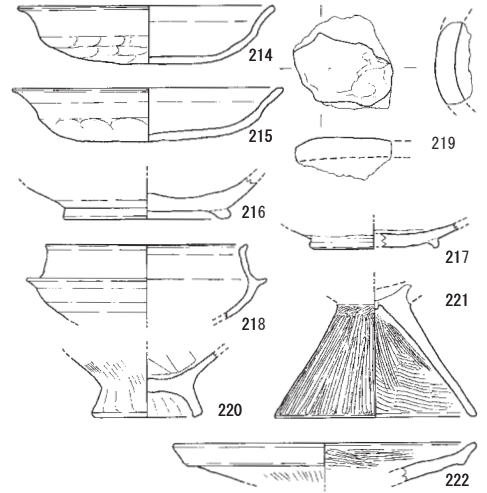


第99図 土器・陶磁器等 2区②・3区① (1:4、187は1:3)

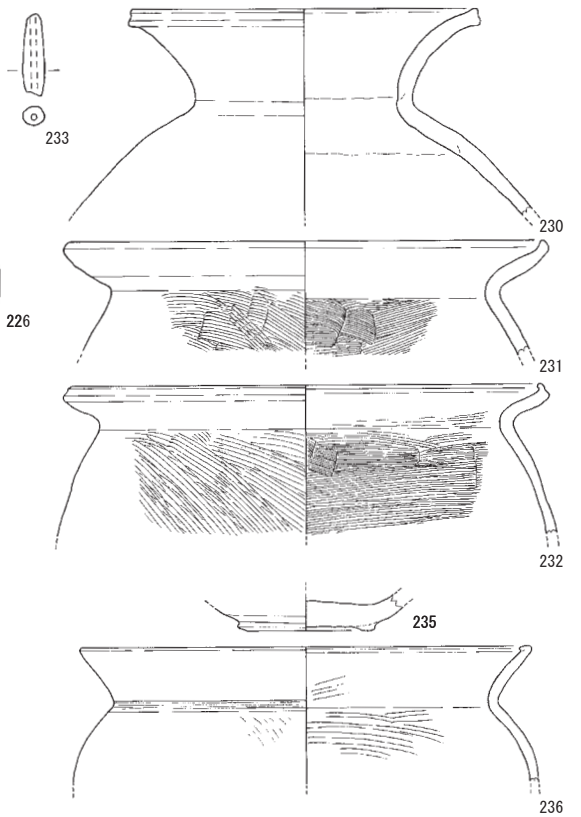
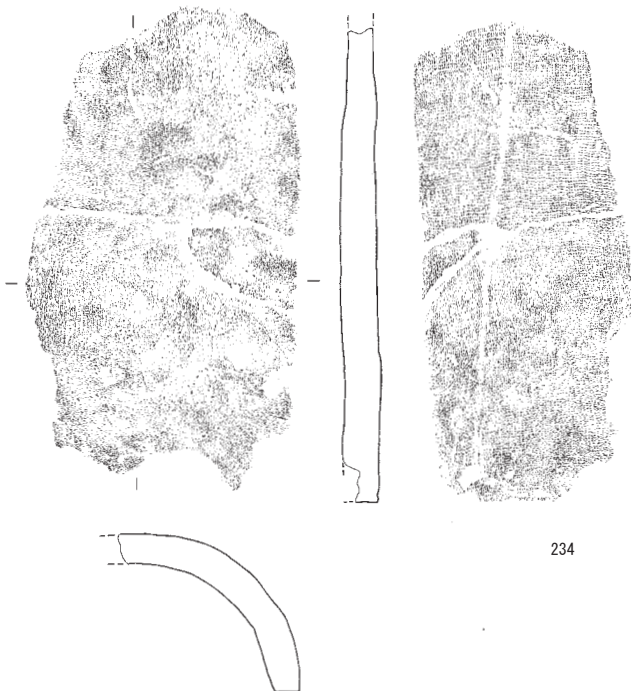
SD53002 最上層 (212・213)



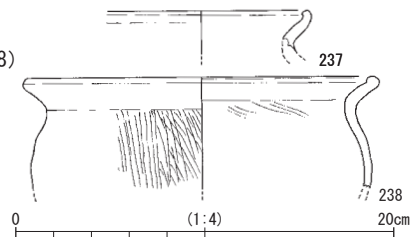
SD53002 上層 (214~233)



SD53003 (234~236)

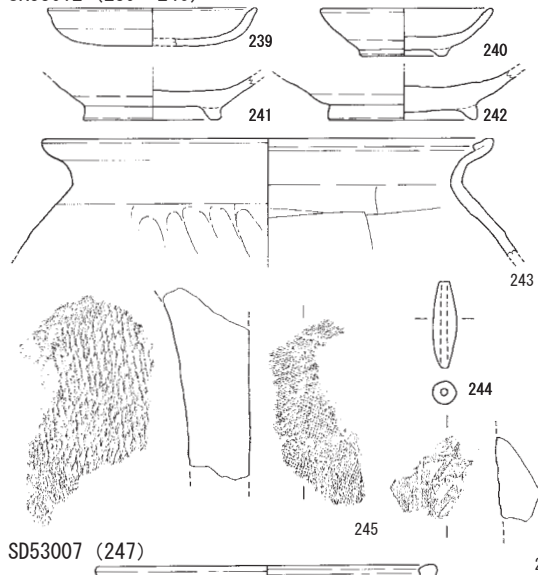


SD53005 (237・238)

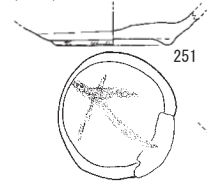


第100図 土器・陶磁器等 3区② (1:4、212・213は1:2)

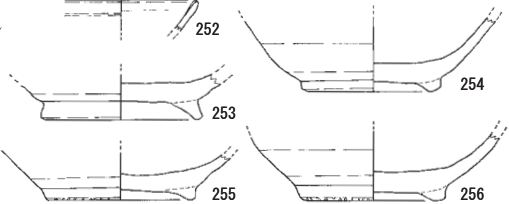
SK53012 (239~246)



SE53004 最下層 (251)



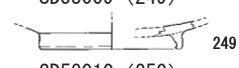
SE53004 中・下層 (252~257)



SD53006 (248)



SD53009 (249)



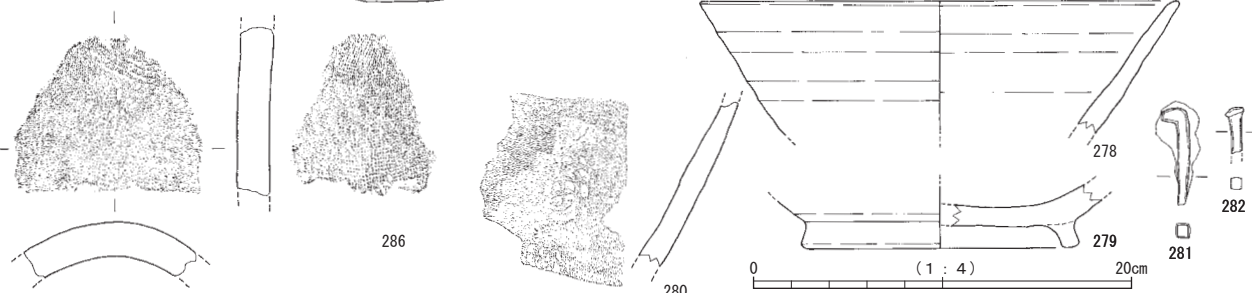
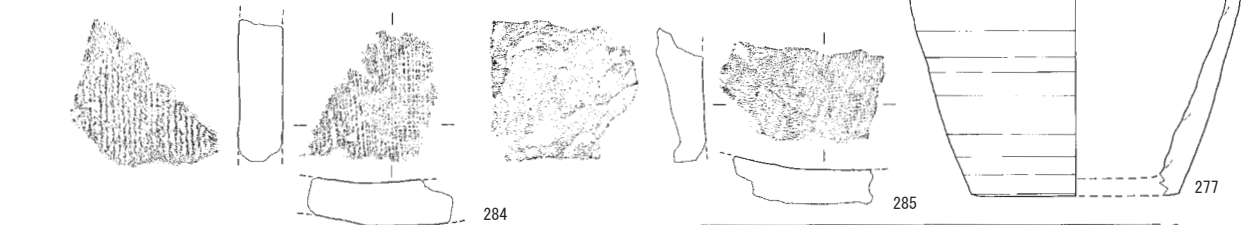
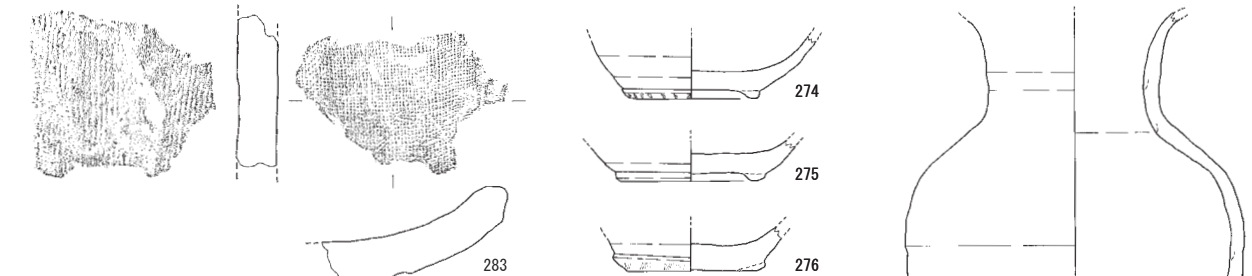
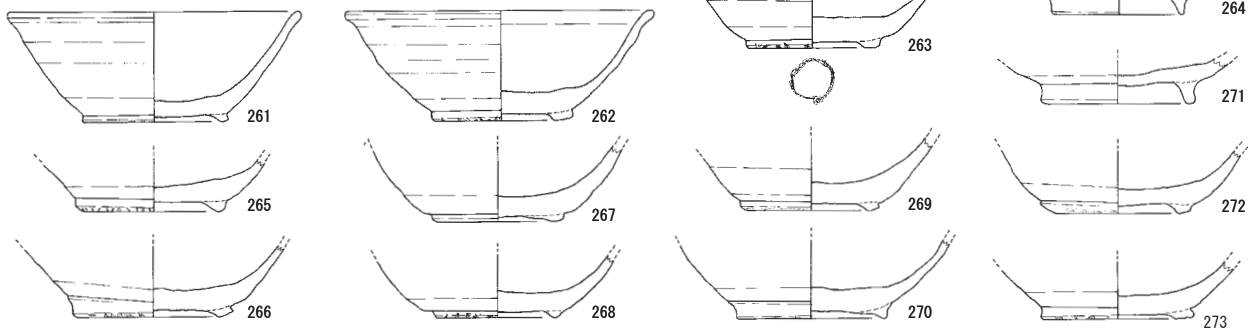
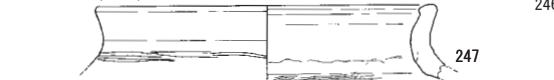
SD53010 (250)



SE53004 (258~286)

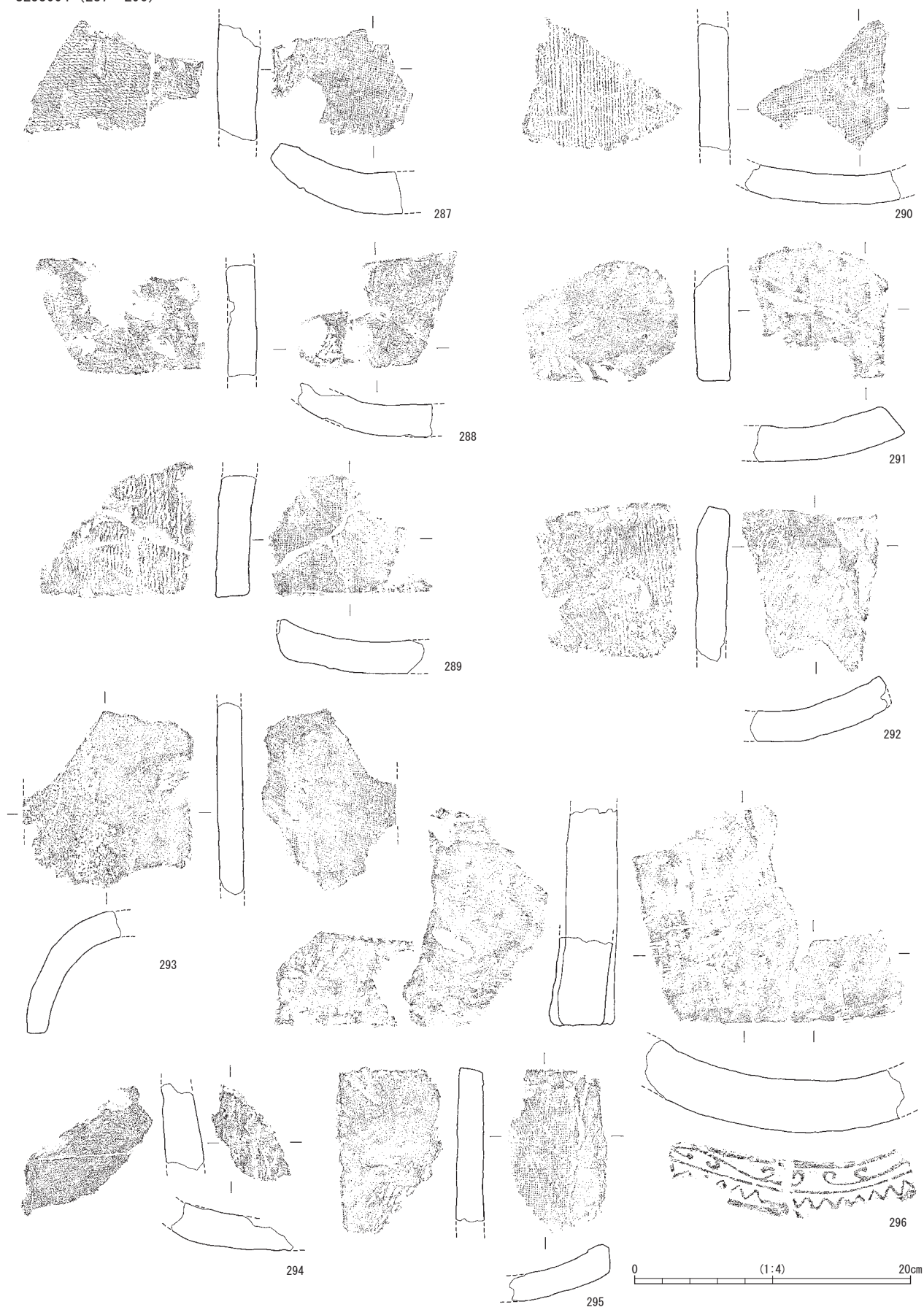


SD53007 (247)

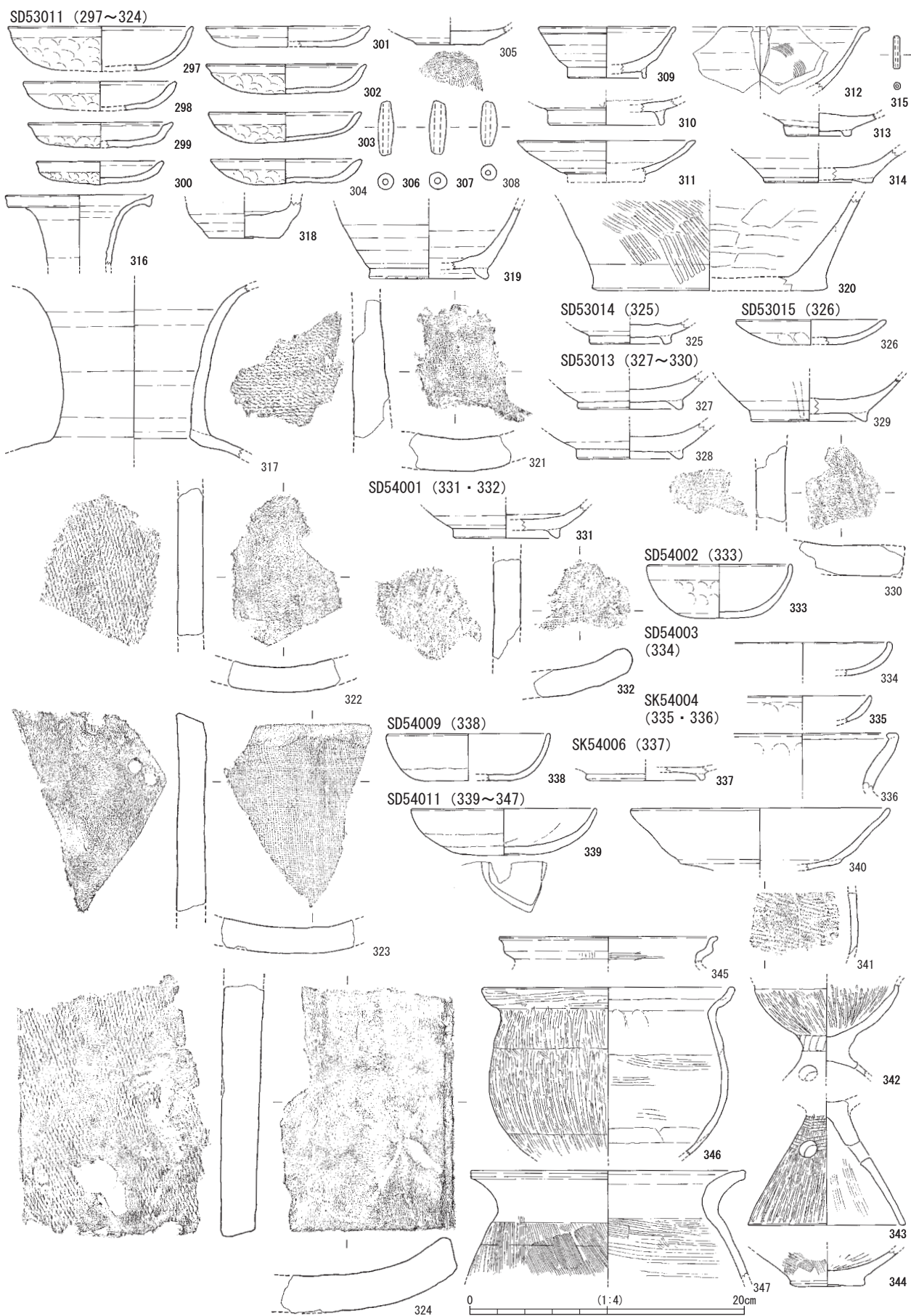


第101図 土器・陶磁器等 3区③ (1:4)

SE53004 (287~296)

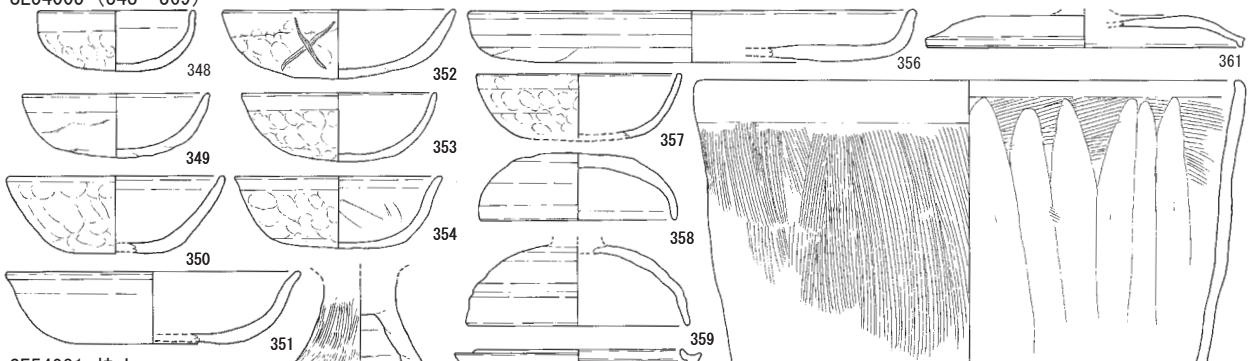


第 102 図 土器・陶磁器等 3区④ (1:4)



第103图 土器・陶磁器等 3区⑤・4区① (1:4)

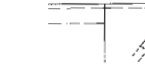
SE54005 (348~369)



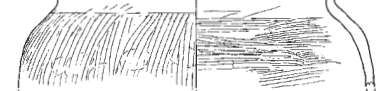
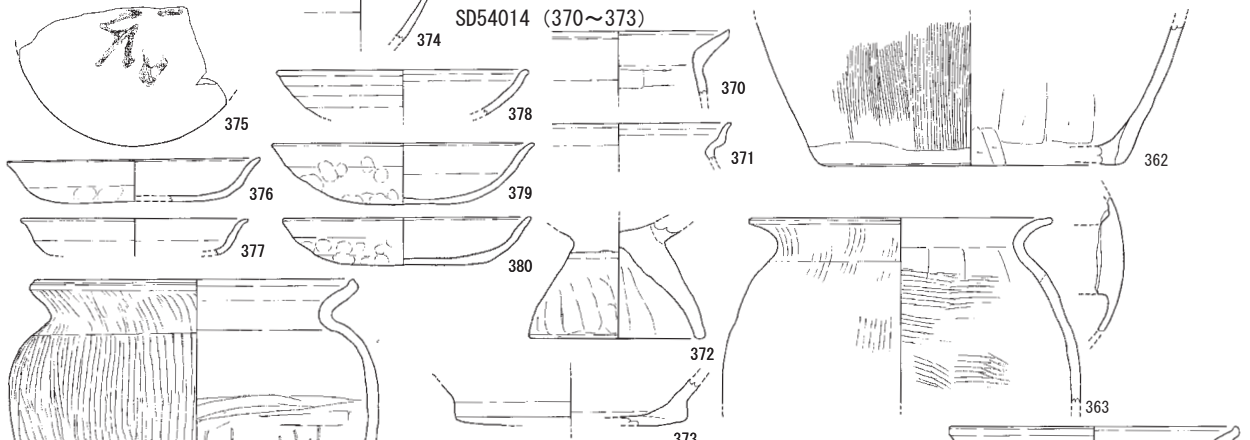
SE54031 粹内 (375~386)



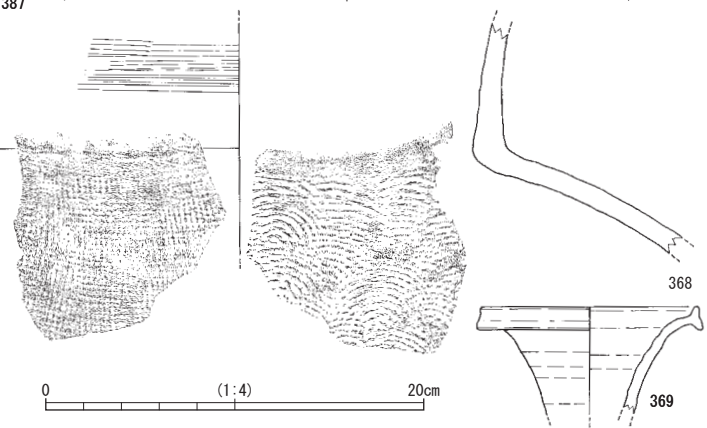
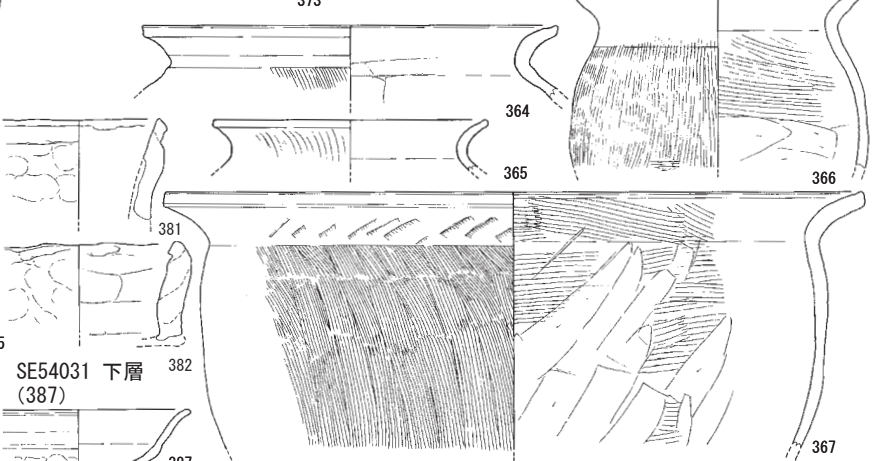
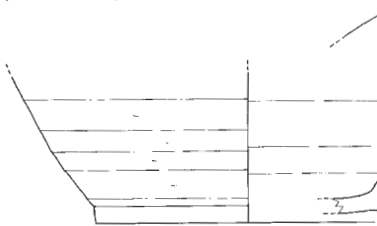
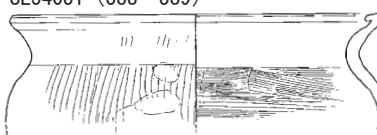
SE54031 掘方 (374)



SD54014 (370~373)

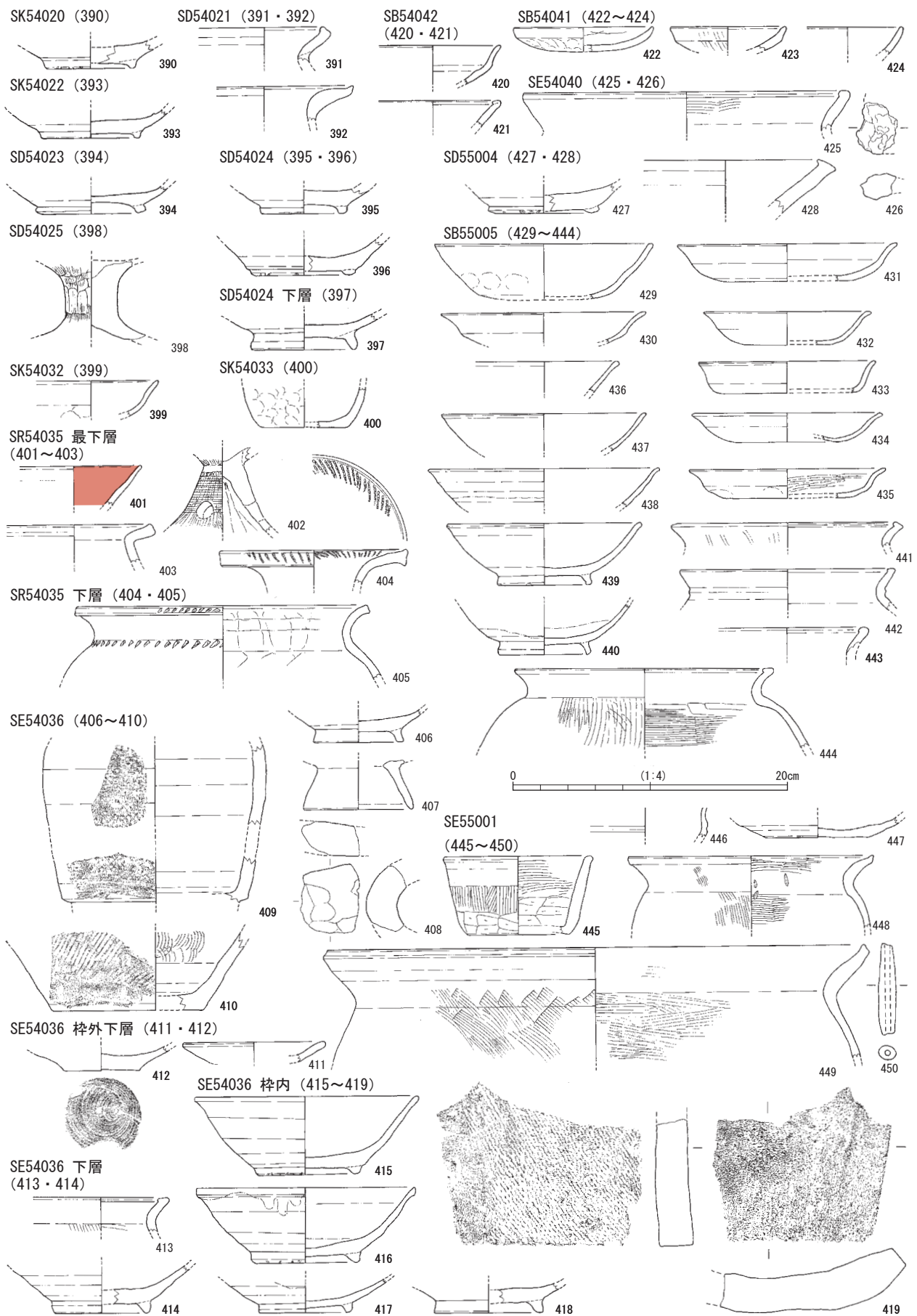


SE54031 (388~389)

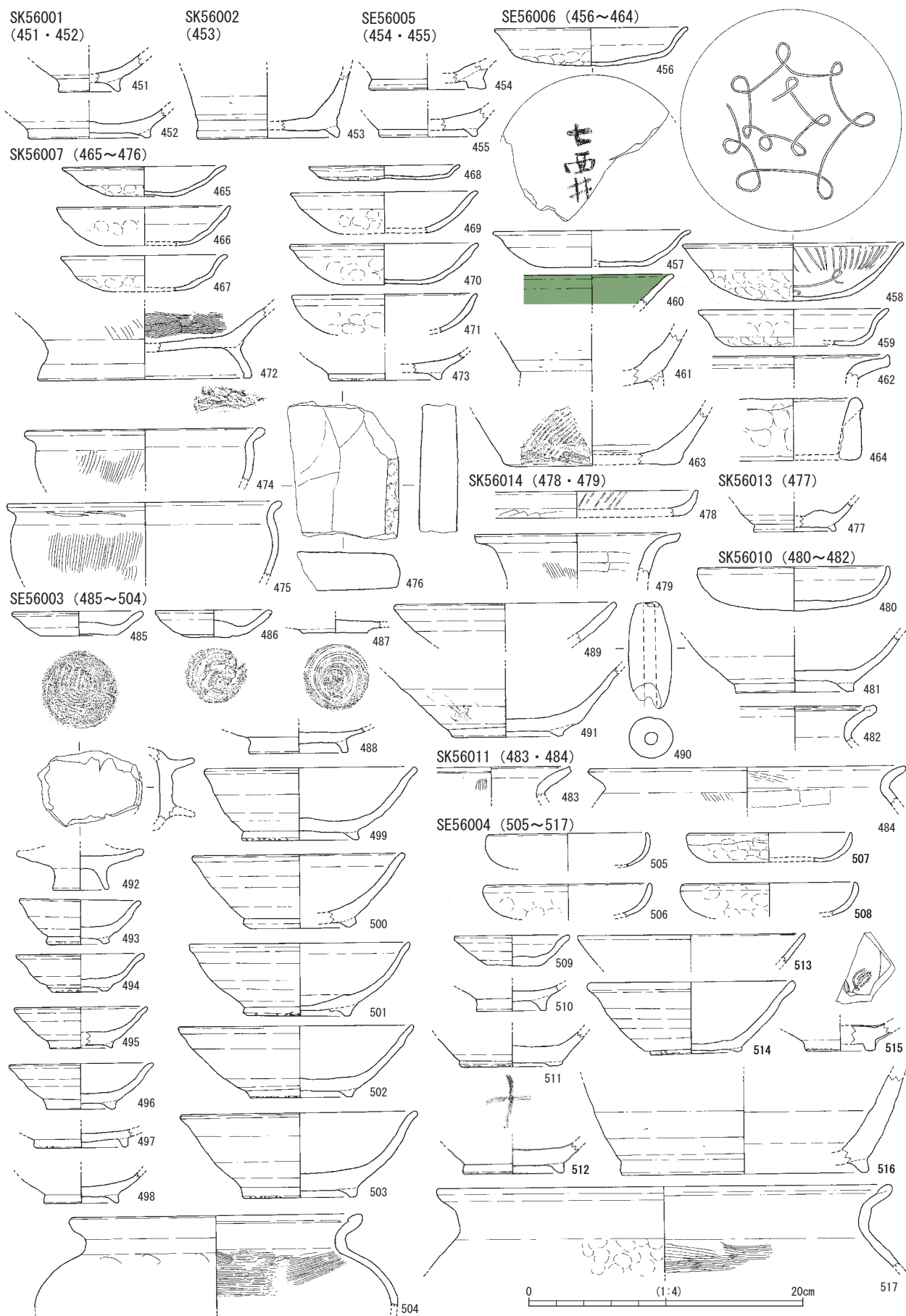


0 (1:4) 20cm

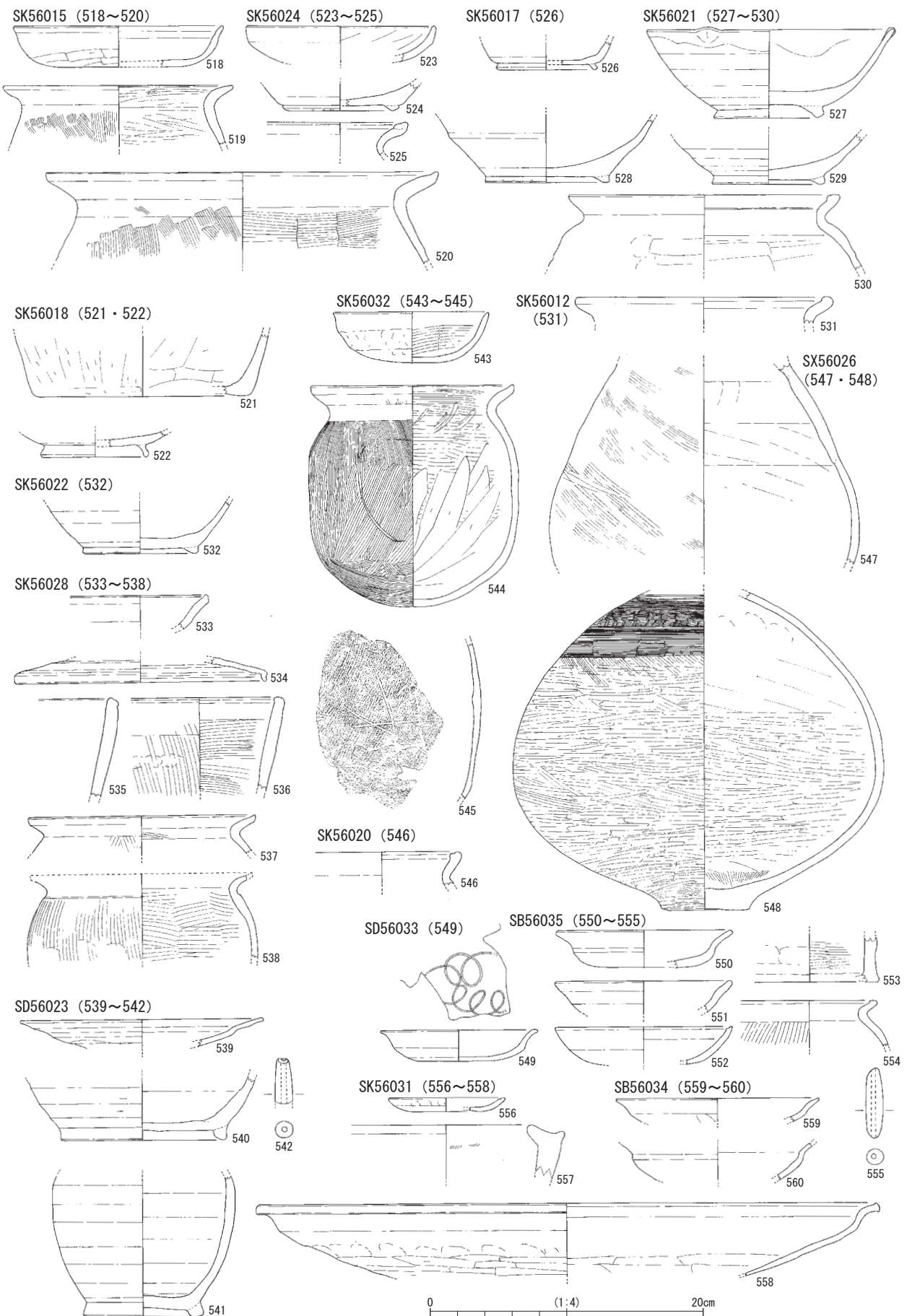
第104図 土器・陶磁器等 4区② (1:4)



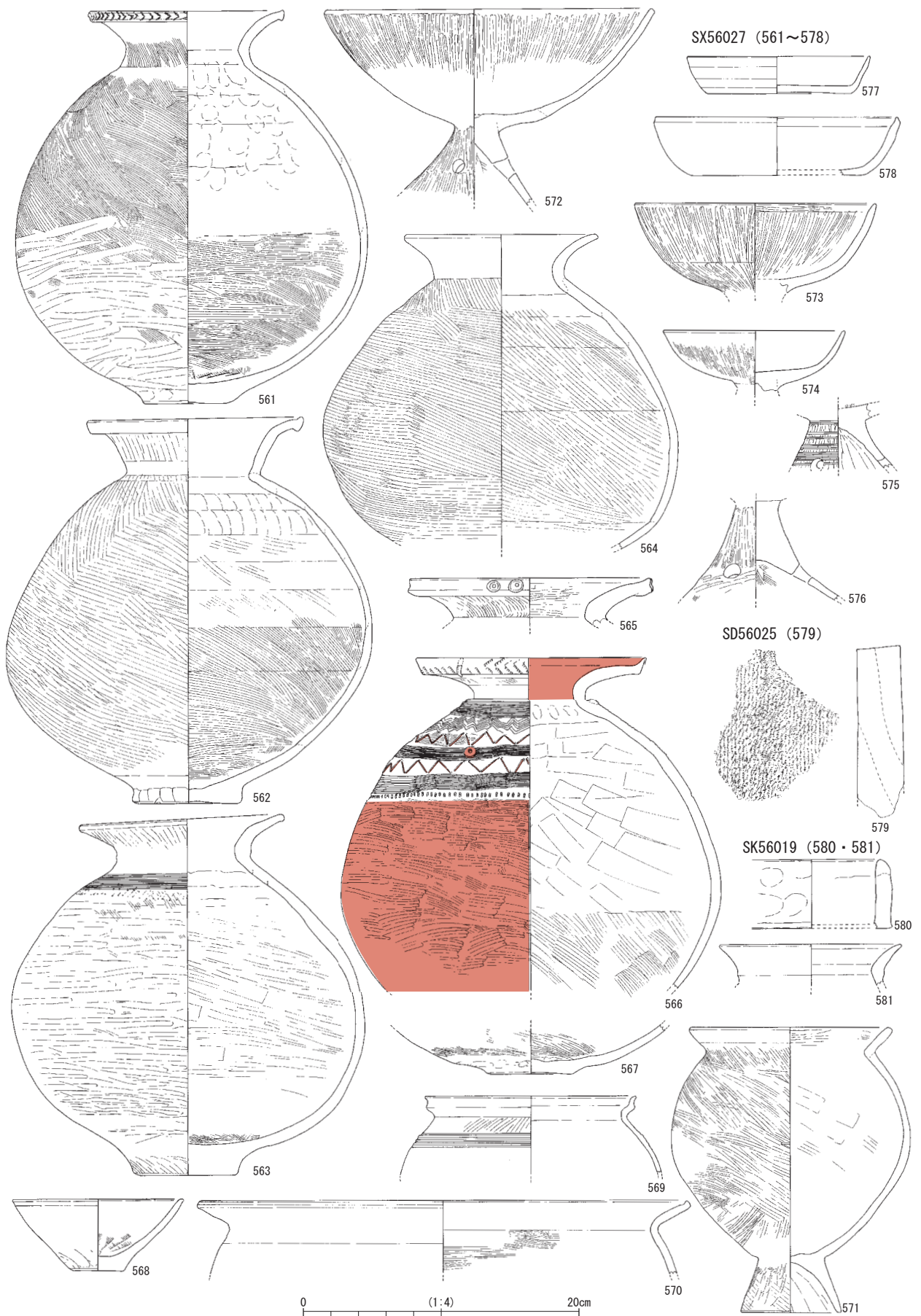
第105図 土器・陶磁器等 4区③・5区 (1:4)



第 106 図 土器・陶磁器等 6区① (1:4)

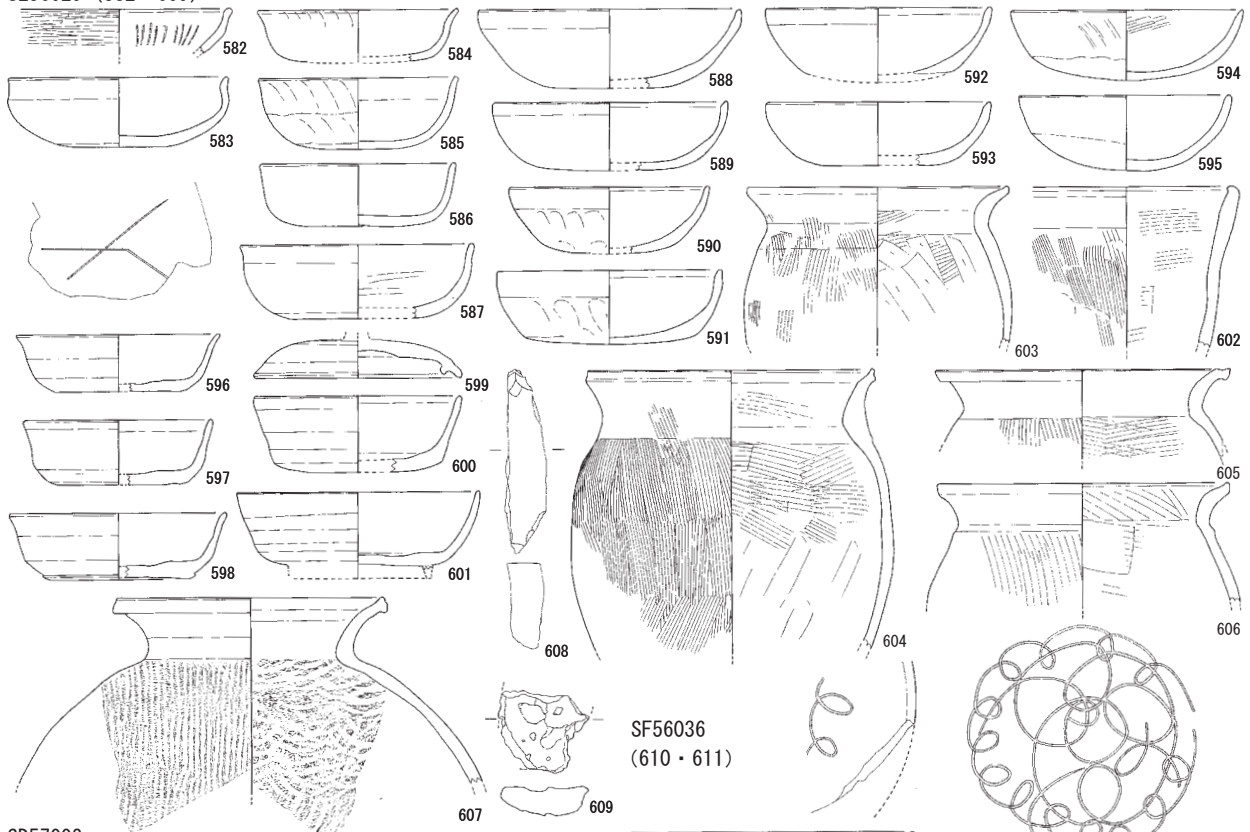


第107图 土器・陶磁器等 6区② (1:4)



第108図 土器・陶磁器等 6区③ (1:4)

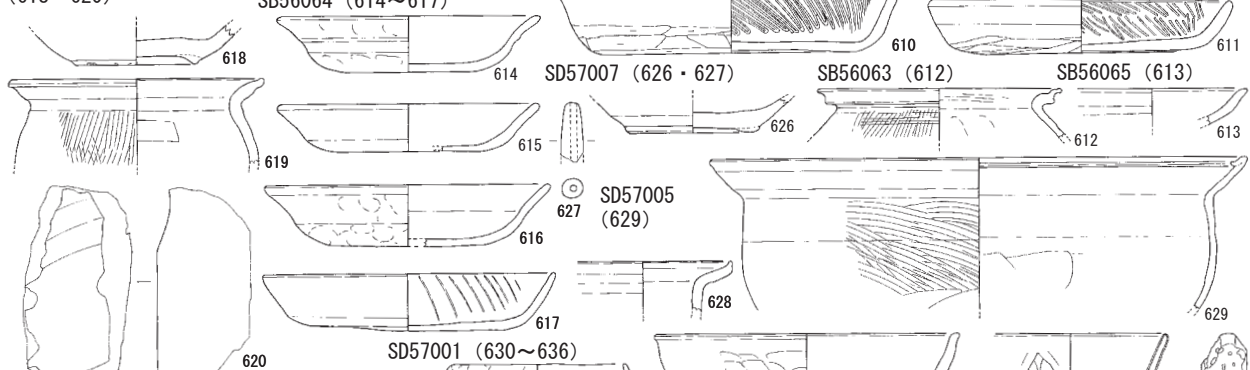
SE56029 (582~609)



SF56036
(610 · 611)

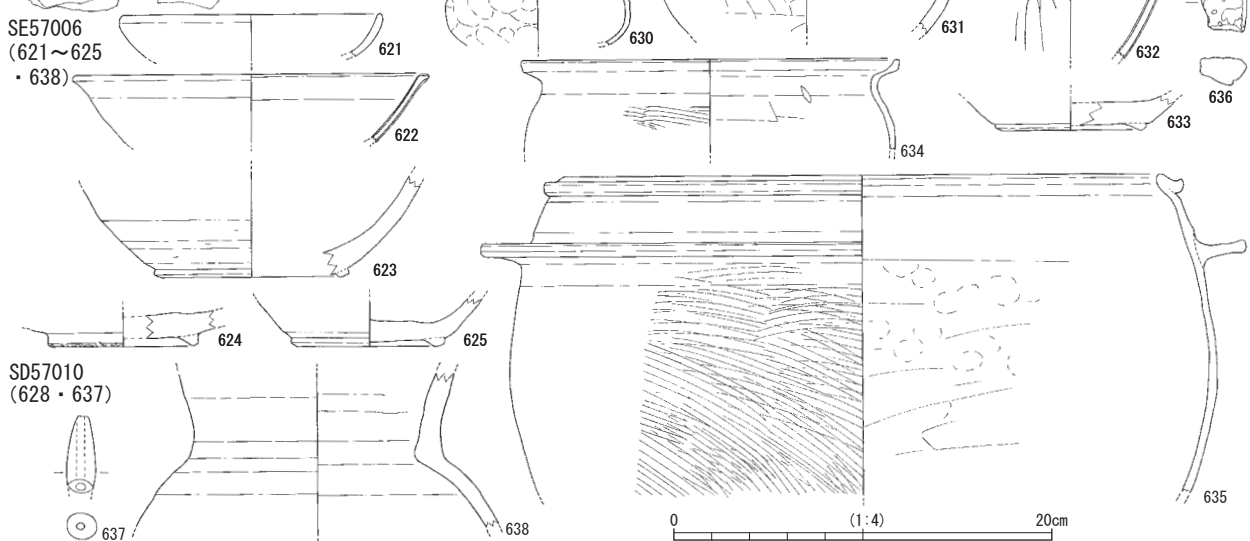
SD57002
(618~620)

SB56064 (614~617)



SE57006
(621~625
· 638)

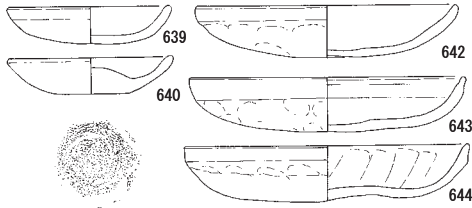
SD57010
(628 · 637)



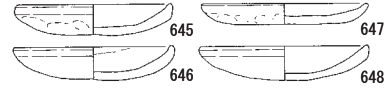
0 (1:4) 20cm

第109图 土器・陶磁器等 6区④・7区① (1:4)

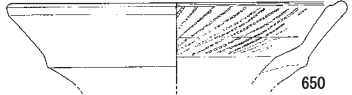
SX57022 棺内 (639~644)



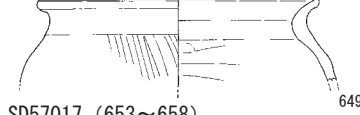
SX57022 棺外 (645~648)



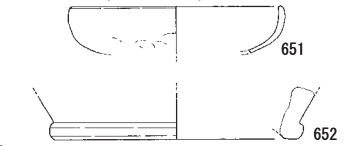
SD57023 (650)



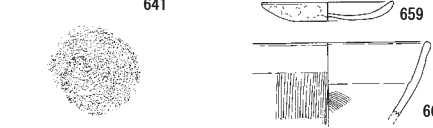
SX57022 上層 (649)



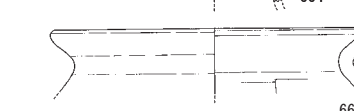
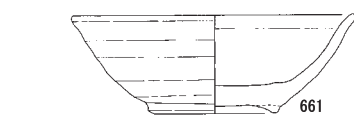
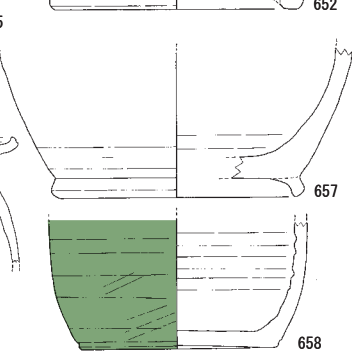
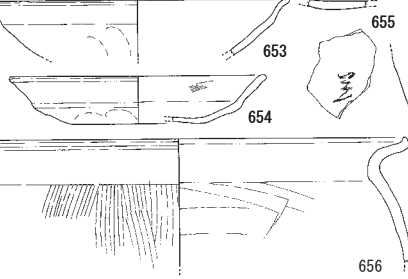
SK57026 (651・652)



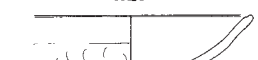
SD57029 (659~665)



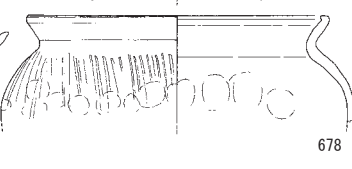
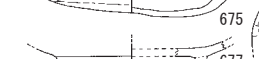
SD57017 (653~658)



SB57043 (670~672)



SB57042 (673~678)



SD57036 (679)



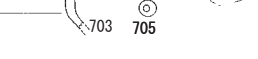
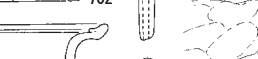
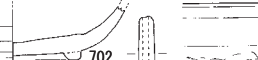
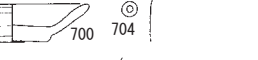
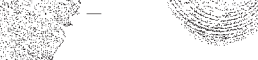
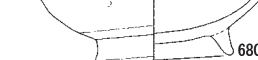
SK57024 (666)



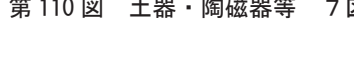
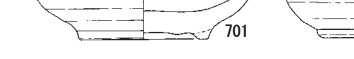
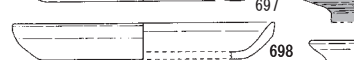
SD57025 (667~669)



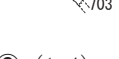
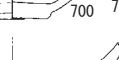
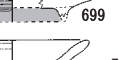
SK57031 (680~695)



SD57032 (696~705)

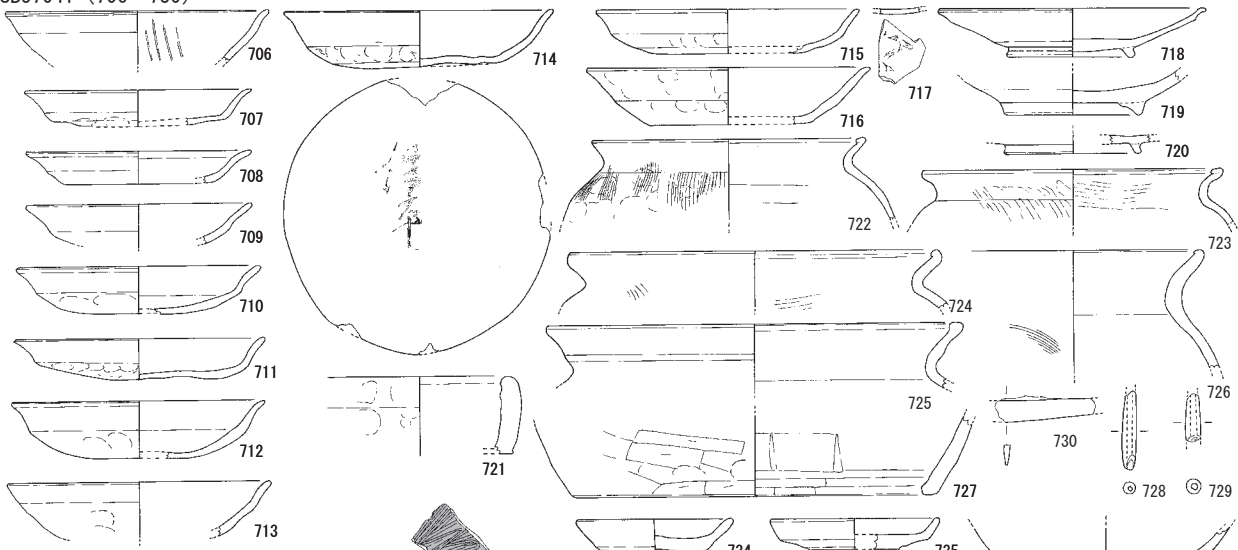


669

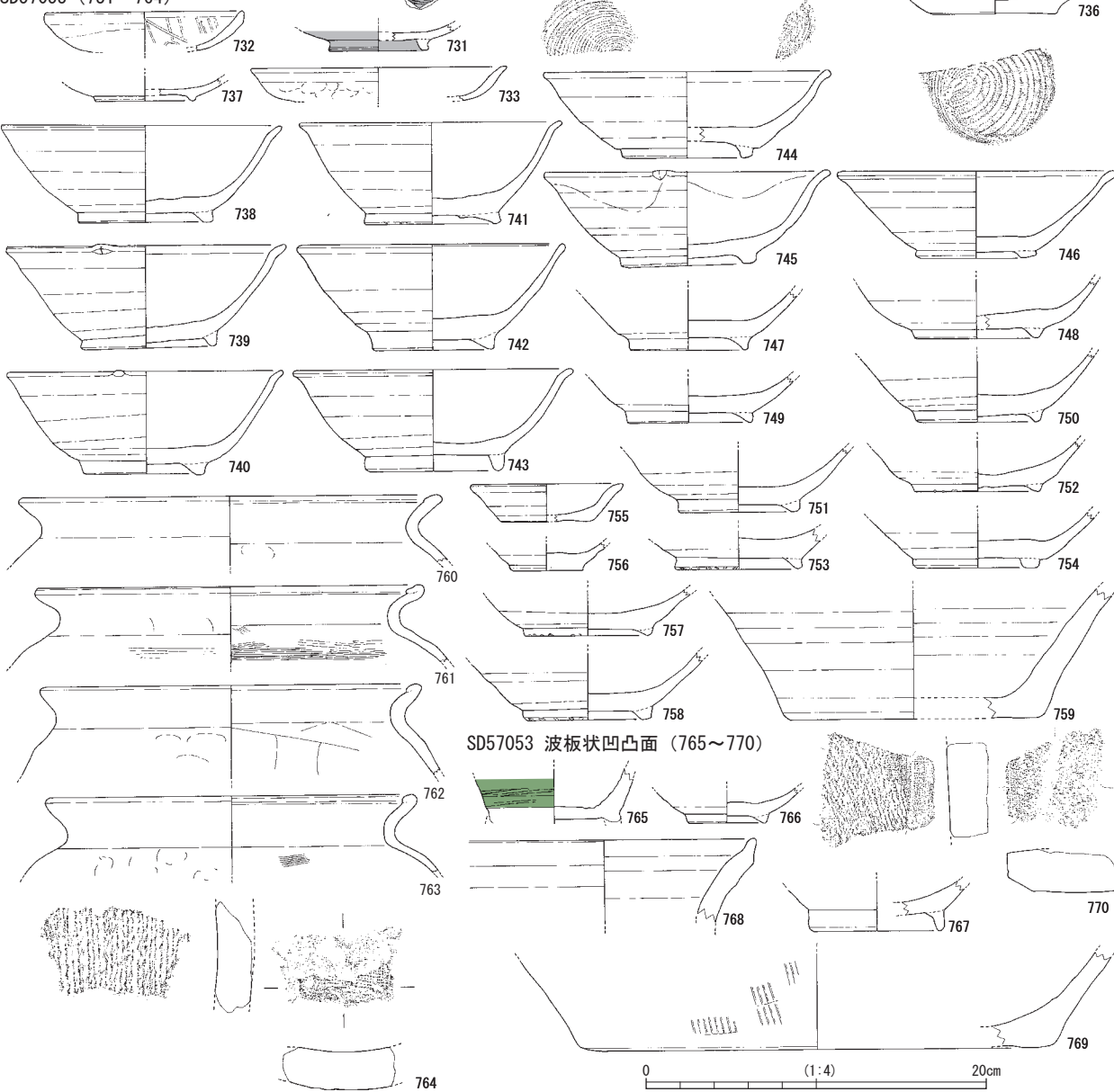


第110図 土器・陶磁器等 7区② (1:4)

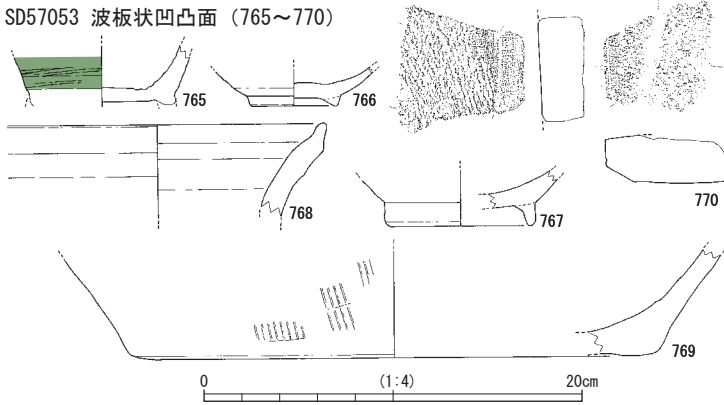
SB57041 (706~730)



SD57053 (731~764)

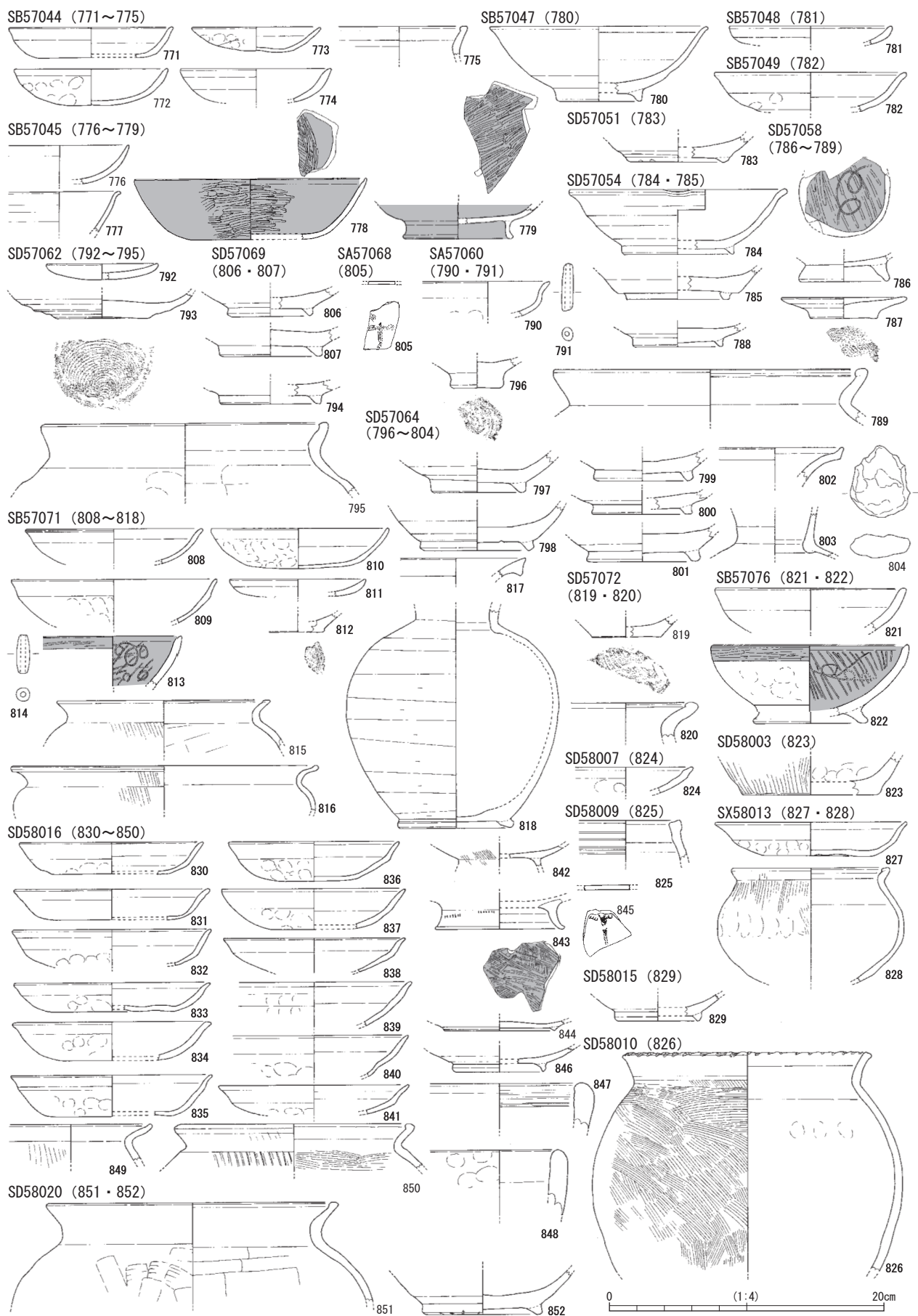


SD57053 波板状凹凸面 (765~770)



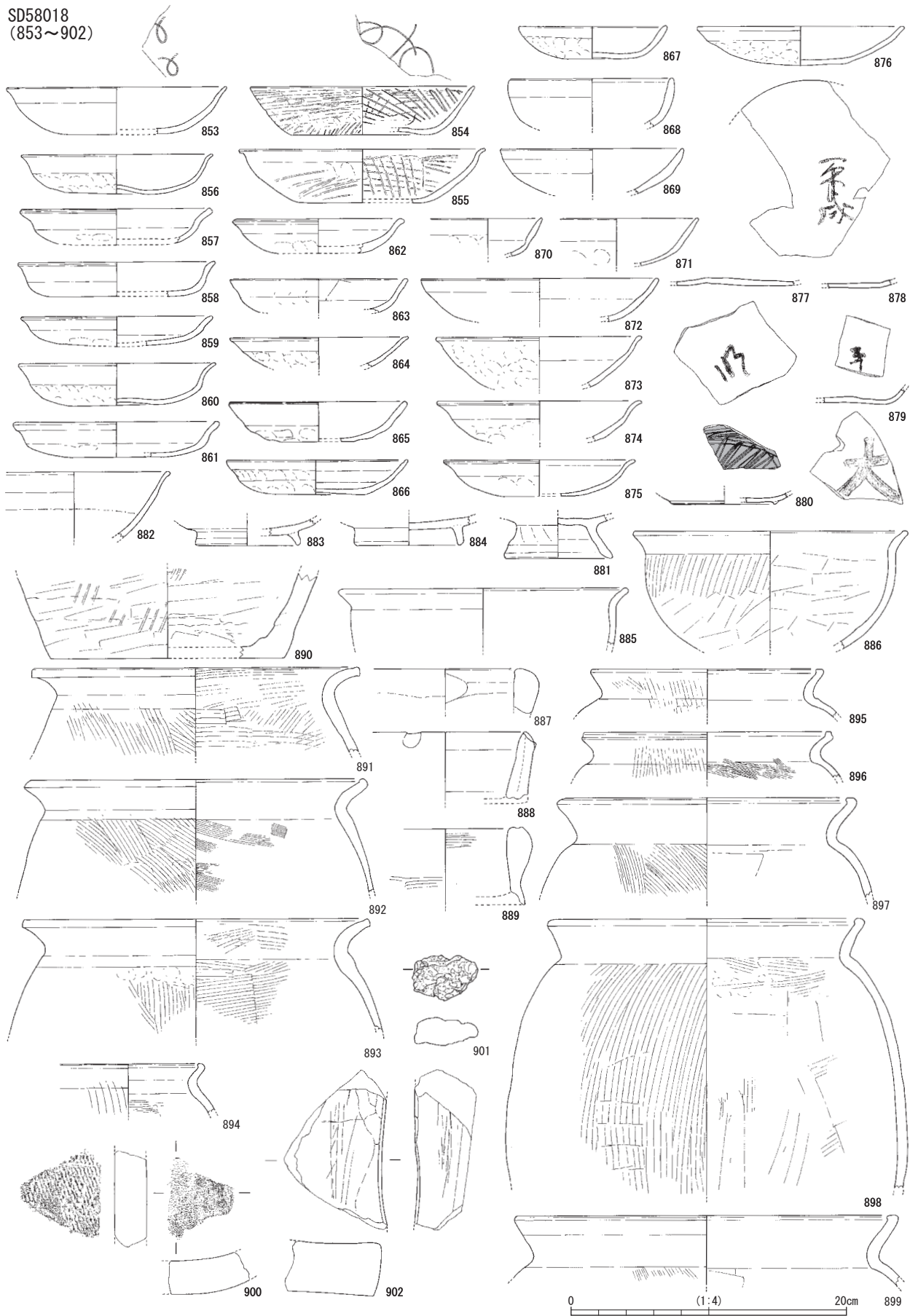
0 (1:4) 20cm

第111图 土器・陶磁器等 7区③ (1:4)

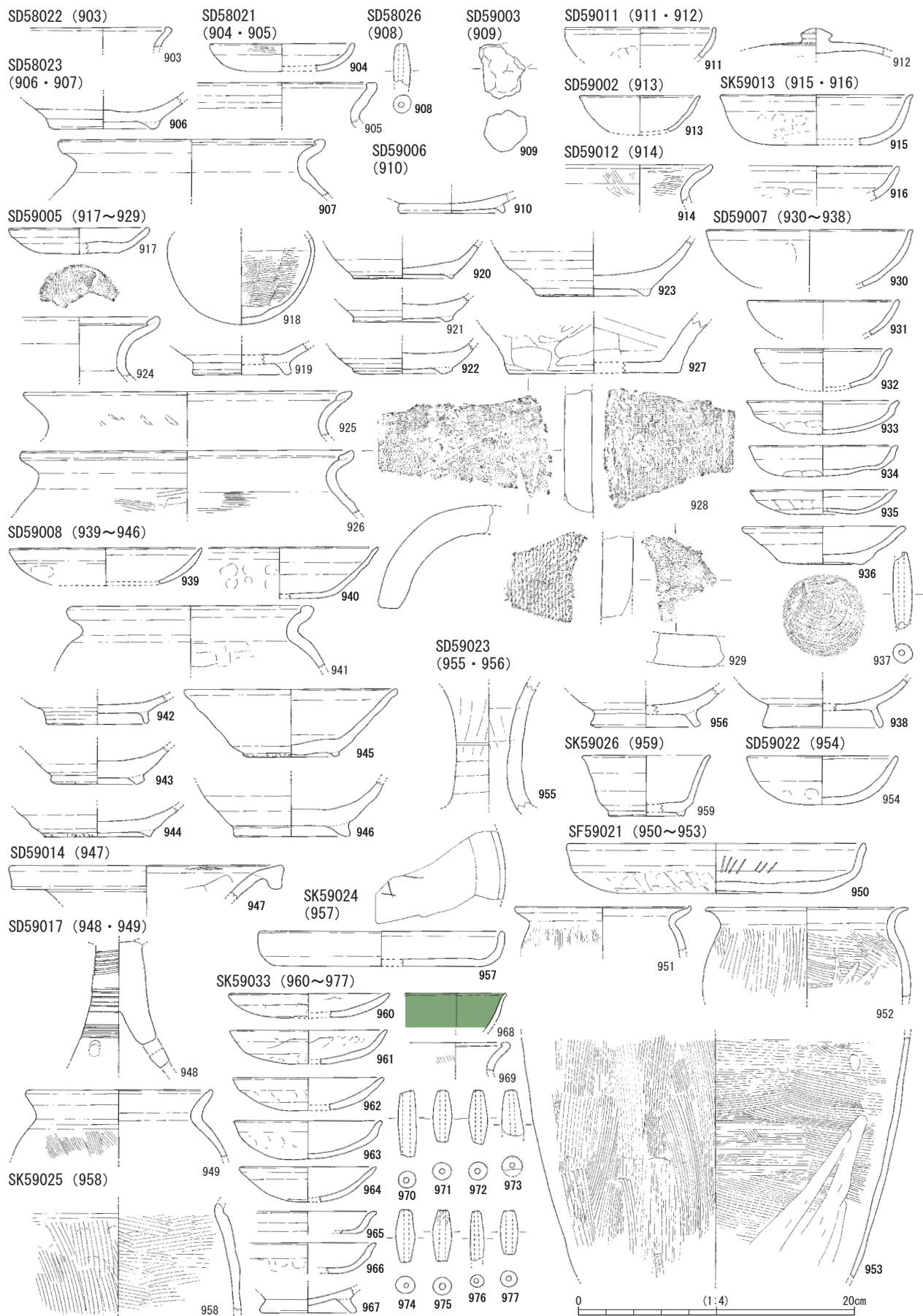


第112図 土器・陶磁器等 7区④・8区① (1:4)

SD58018
(853~902)

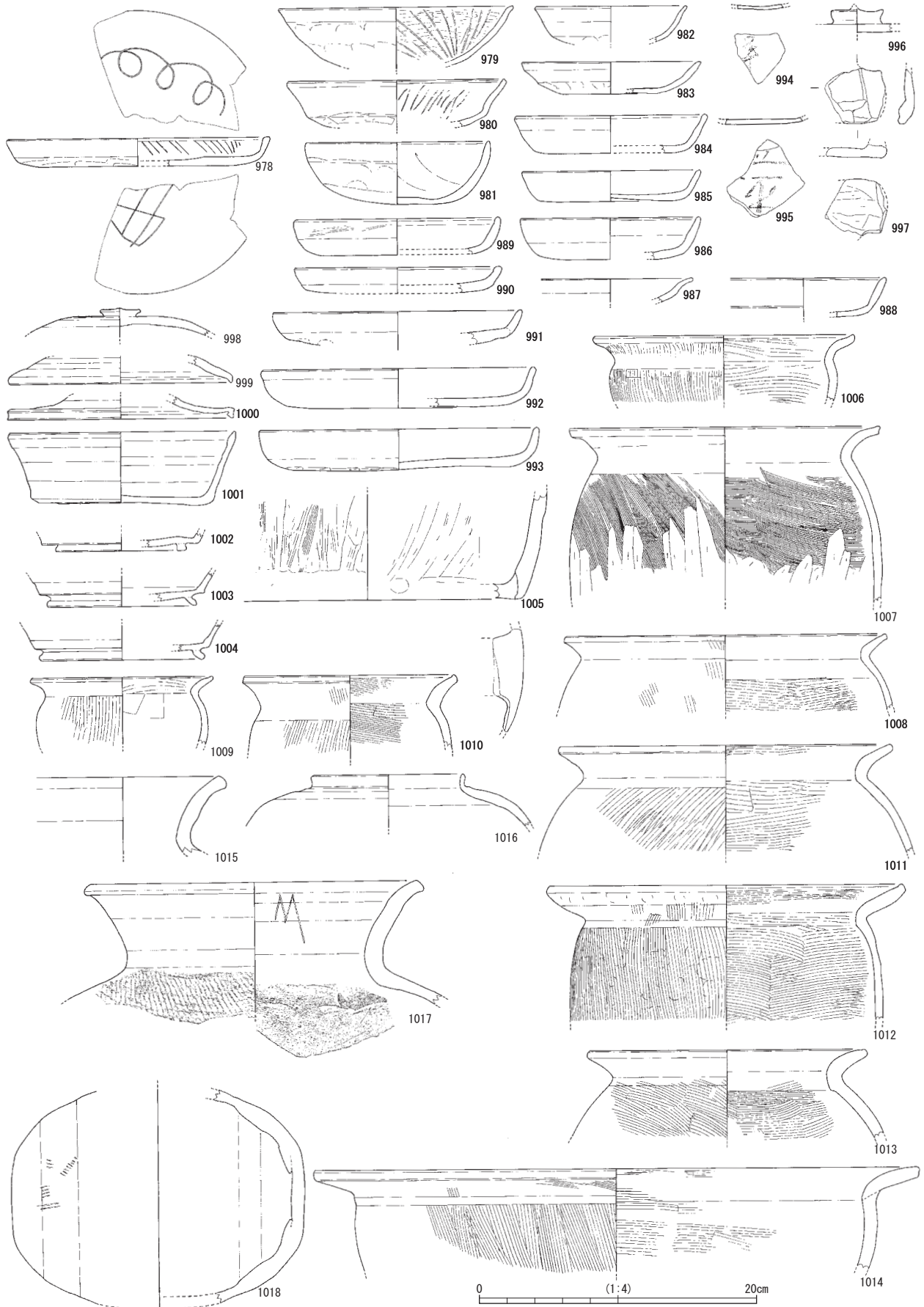


第113图 土器・陶磁器等 8区② (1:4)

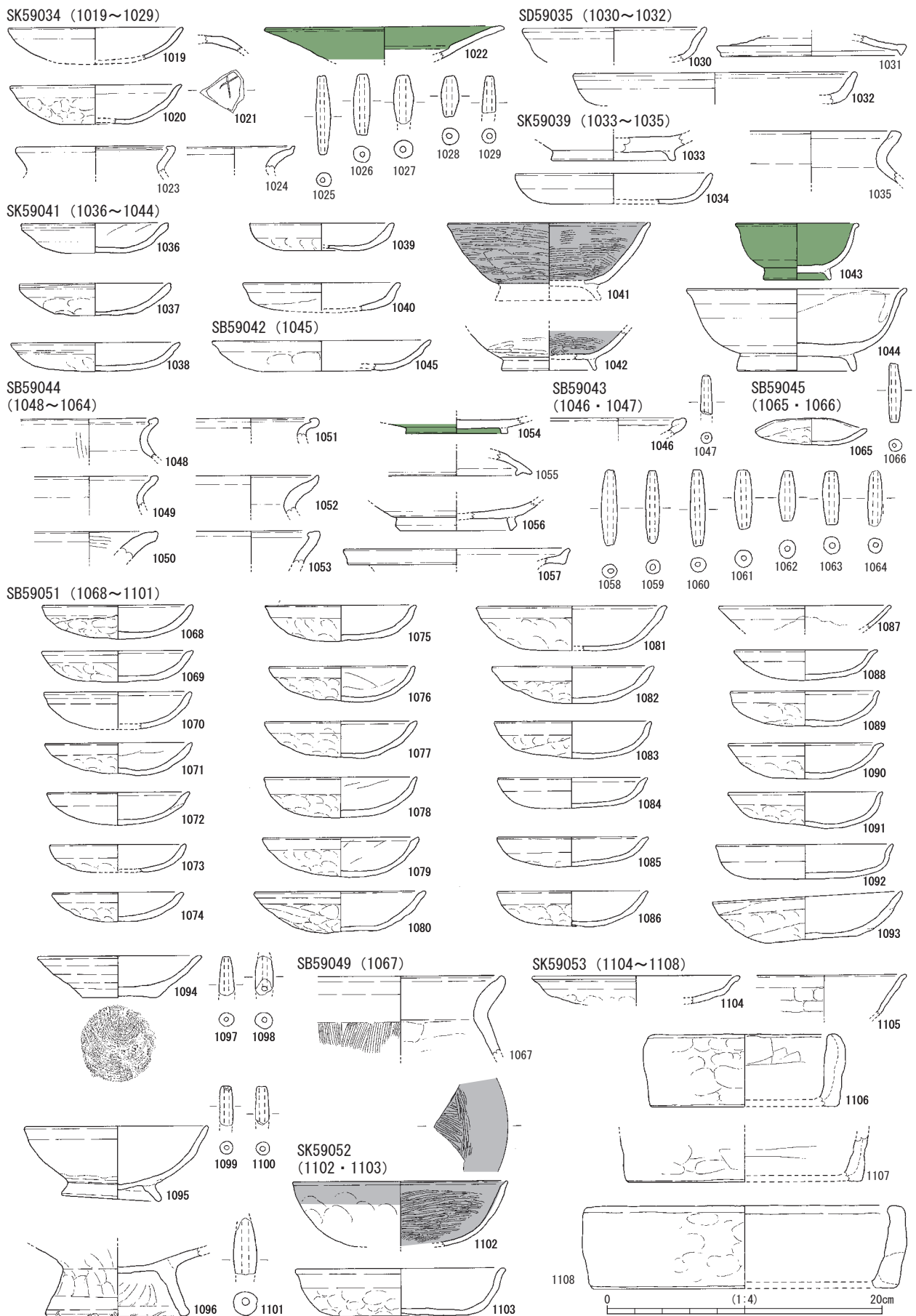


第114図 土器・陶磁器等 8区③・9区① (1:4)

SD59027 (978~1018)

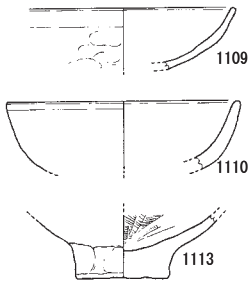


第115图 土器・陶磁器等 9区② (1:4)

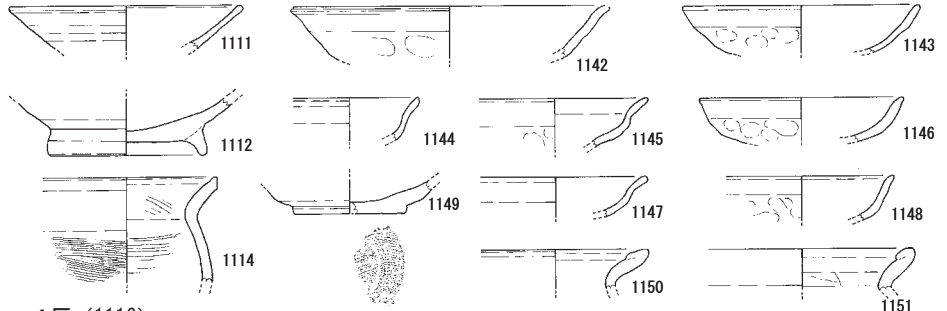


第116図 土器・陶磁器等 9区③ (1:4)

1区 (1109~1114)



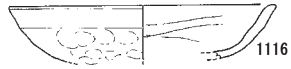
9区 (1142~1177)



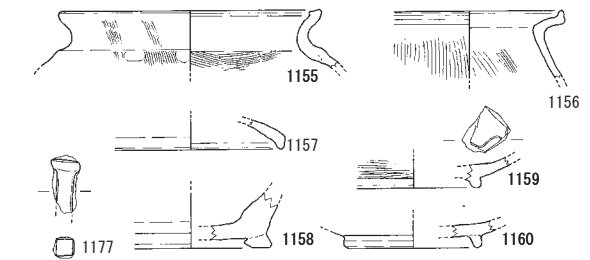
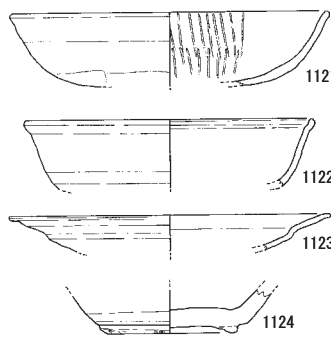
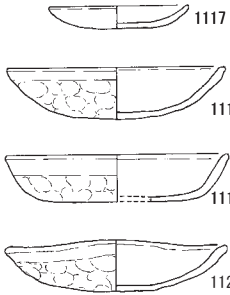
2区 (1115)



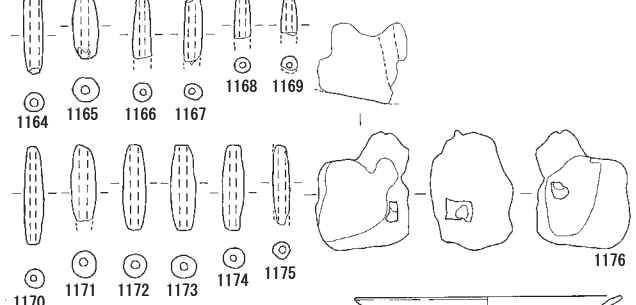
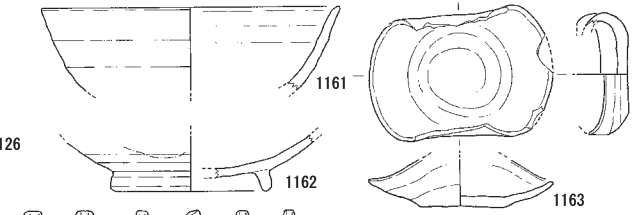
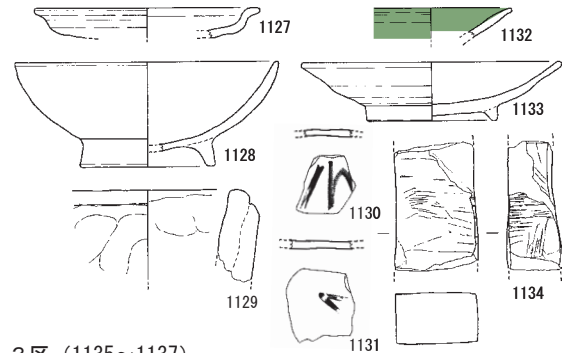
4区 (1116)



6区 (1117~1126)



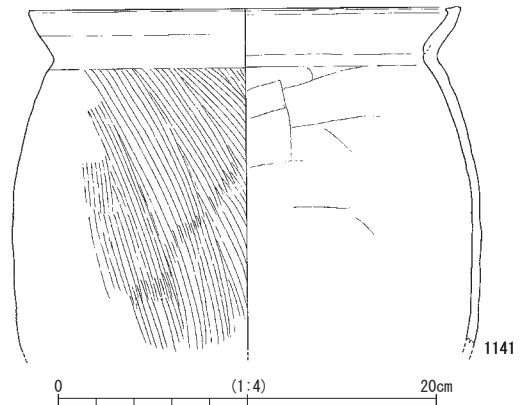
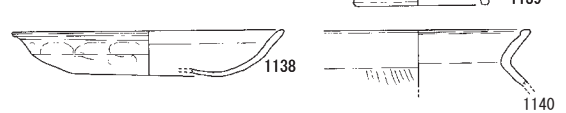
7区 (1127~1134)



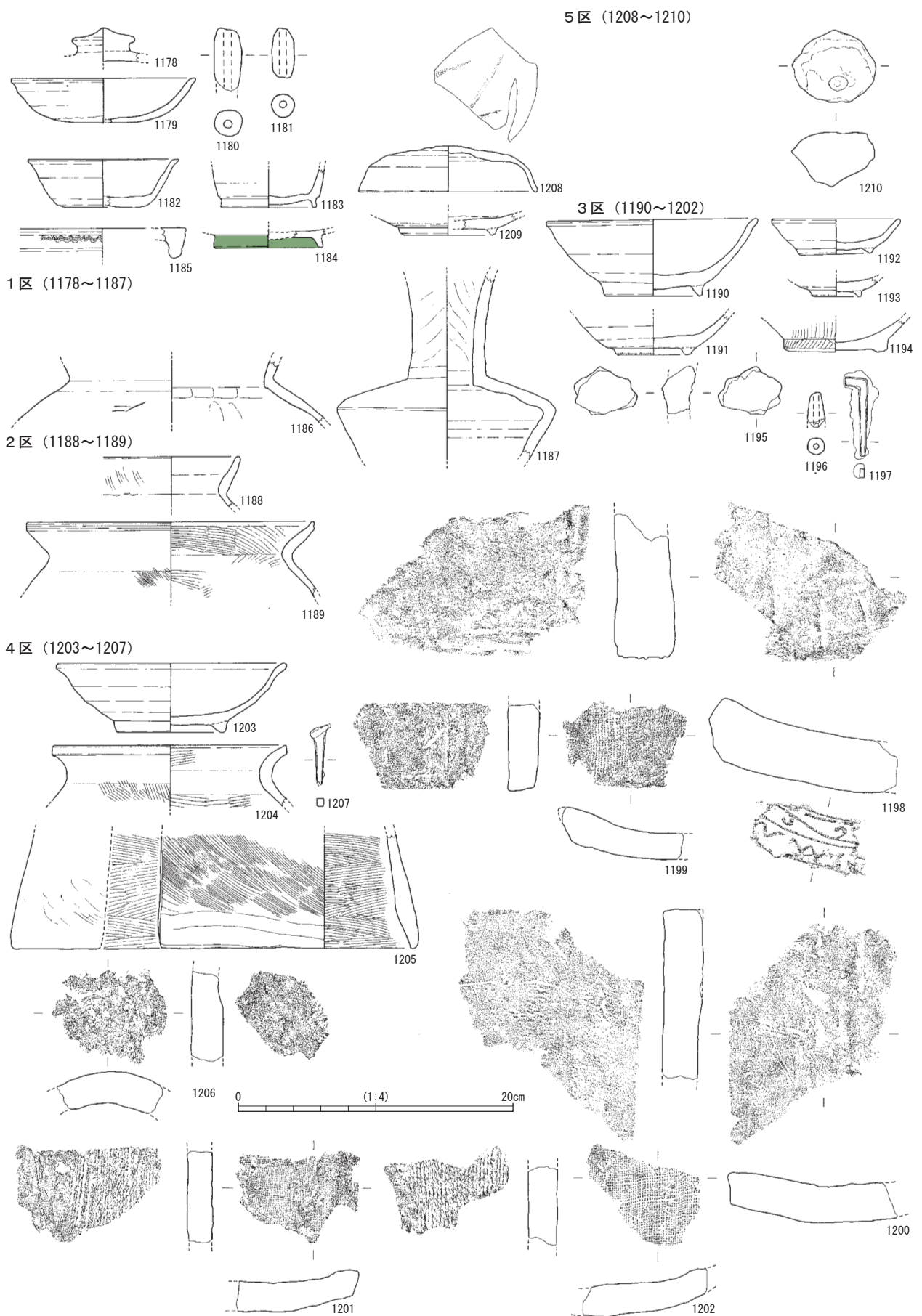
3区 (1135~1137)



5区 (1138~1141)



第117図 土器・陶磁器等 その他ピット (1:4)



第118図 土器・陶磁器等 包含層等① (1:4)

S B 59043 (第116図) 1046は土師器甕あるいは鍋。1047は土錘。

S B 59044 (第116図) 平安時代中期とその前後の遺物がみられる。

1048～1053は土師器甕で、斎宮Ⅱ-3～Ⅲ-1段階までやや時期幅がある。1054は緑釉陶器椀で、高台置付も施釉される。1056は053号窯式の灰釉陶器椀、1057は灰釉陶器壺の口縁端部である。1058～1064は土錘で、長さ4cmを境として2種類に分けられる。

須恵器杯蓋(1055)は周辺からの混入であろう。

S B 59045 (第116図) 1065は土師器皿で斎宮Ⅲ期のもの。1066は土錘である。

S B 59049 (第116図) 1067は土師器甕。斎宮Ⅱ期のもの。図示したものの他にも、奈良時代とみられる土師器甕片が出土している。

S B 59051 (第116図) 1068・1069・1099・1101はP2、1080・1096はP3、1087・1097・1100はP4、

他はP1の一括埋納遺物である。

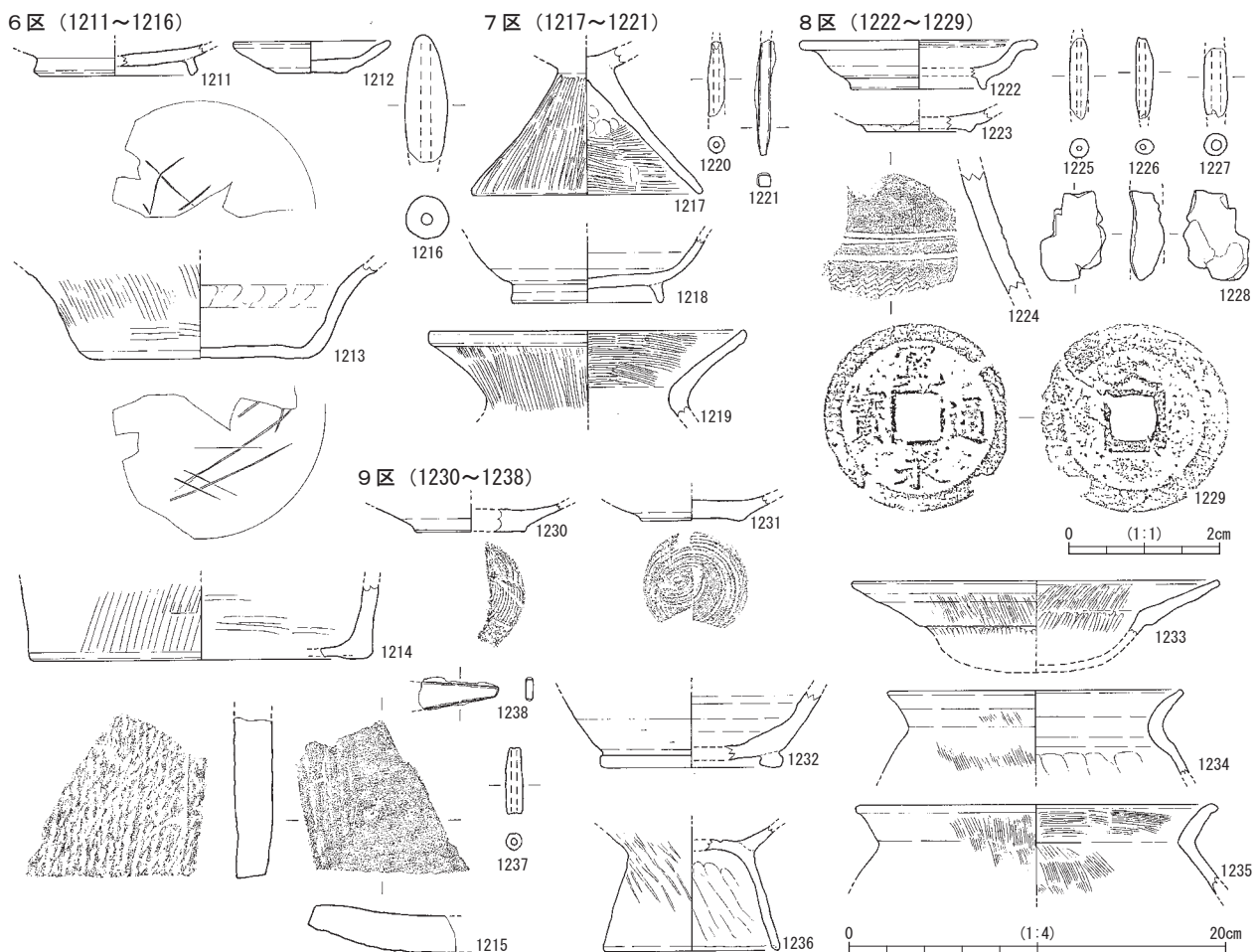
1068～1086・1088～1093は土師器杯で、いずれも斎宮Ⅲ-2段階のもの。油煙や煤などの使用痕はない。1094はロクロ土師器杯、1095・1096は土師器台付椀である。1087は灰釉陶器椀で釉は漬け掛け。概ね平安時代後期、11世紀前半の遺物群であろう。

1097～1101は土錘で、各ピットにみられる。

S K 59052 (第116図) 1102は内黒の黒色土器杯、1103は土師器杯で斎宮Ⅱ-4段階のもの。10世紀前半の土器である。

S K 59053 (第116図) 1104・1105は土師器杯で斎宮Ⅱ-3～4段階、9世紀後半から10世紀前半ごろのもの。1106～1108は志摩式製塩土器。

その他ピット(第117図) 1109～1177は掘立柱建物以外の各区ピットの遺物である。1109～1116は1～4区ピットの遺物で、1区は建物が明確でないが、飛鳥～奈良、平安、中世各期の遺物がある。



第119図 土器・陶磁器等 包含層等② (1:4、1229は1:1)

1138～1141は5区S B 55005南妻側柱に隣接するピットから出土した遺物で、9世紀後半から10世紀前半のものである。

1117～1125は6区ピット出土である。1121は土師器杯で内面に放射状暗文を施す。須恵器杯(1122)や灰釉段皿(1123)のほか、中世の山茶碗(1124)などがある。1125・1126は古代の土師器甕。

1128～1134は7区建物付近のピット出土遺物で、1127土師器皿は口縁部を強くヨコナデする。1128は、糸切り底の土師器台付椀。1129は志摩式製塩土器。1130・1131は平安時代の土師器杯あるいは皿片で、いずれも外面に墨書があるが判読できない。1132は緑釉陶器皿、1133は灰釉陶器皿である。1134は白色の凝灰岩製砥石で、ノミによる成形痕と使用痕光沢がみられる。

1142～1177は9区ピット出土遺物で、平安時代前～後期の土師器・須恵器・灰釉陶器がまんべんなく出土している。またピット出土の土錘(1164～1175)が多い点も特筆される。灰釉陶器1159は陰刻花文がある。1163は無高台の耳皿である。1176は円孔のある土製品で、用途は不明。

②包含層等(第118・119区)

完形に近いもの、出土数の少ない遺物、遺構との関係がうかがえるものを中心に図示した。

1184は緑釉陶器で皿か。1194は白磁椀の底部である。1195・1228は冶金関係遺物で、1195は3区で出土した溶解炉の炉壁片、5区の1210は塊状の土製品である。1228は8区の鑄造関連遺物で、坩堝ないし溶解炉の小片。

古代の瓦は主に3区のものを図示した。なお、今回の調査では中世の瓦はまったく出土していない。1198は軒平瓦で、S D 53004出土軒平瓦同様、大雷寺廃寺と同型式である。1199～1202は平瓦。1206は4区、1215は6区出土の瓦片である。

1208は5区出土の須恵器杯蓋で、外面に火襷の痕跡が残る。1213は6区出土の土師器鉢で、見込みに線刻がある。底部外面は線刻状の痕跡があるが、作業台等の圧痕かもしれない。1222は大窯期の瀬戸美濃灰釉折縁皿で、条里坪境付近の攪乱から出土した。

1217・1219は7-1区、1233～1236は9区の自然流路S R 59055周辺から出土した弥生時代終末期～

古墳時代の土器で、流路の時期を示す遺物である。

(土橋・櫻井)

(2) 木製品

今回の調査地は基盤層の地下水位が低く、遺構内は好気的な環境にあったため、木製品の残りは悪い。回収した木製品は井戸杵材が大半で、その中には建築部材の転用品が含まれる。井戸杵材の樹種はスギが多く、若干ヒノキ属がみられる。このうち、加工痕や部材の特徴がよく残るものを中心に図化した。

なお、井戸杵は材同士の接合関係が判明するものがあり、井戸製作や木材の転用プロセスを詳細に把握できる点は特筆される。

日常雑器は井戸水溜や釣瓶に転用された曲物、曲物底板がある程度で、他の道具は出土していない。

以下、遺構ごとに説明する。

S E 51028(第120・121区) 1239～1244は井戸杵縦板で、上部は腐食で失われる。いずれも板目の割材で、表面・側面は割肌のままとし、下端をオノ(チョウナまたはヨキ)で粗く削ぎ落とす。1241・1242は下部に櫓穴や溝状加工がみられ、垂直材など建築部材を分割した可能性がある。

1245・1246は横板で、同一母材から分割されたものか。腐食が著しいが、表裏にチョウナの加工痕がみられ、それぞれ一か所に柄穴がみられる。

1248～1251は相欠き仕口をもつ土居桁で、両面をチョウナで粗く加工する。1247は掘方出土の井戸杵材で、前身井戸に伴うものであろう。

1252・1254～1256は下部横板で、追桁目～桁目板の両端をノコギリ等で欠き込んでいる。比較的表面調整が丁寧で、建築部材の転用かもしれない。

1253は横棧で、仕口付近の木表を半円形に薄く削ぐ。同様の加工は、中坪遺跡1次S E 52(奈良時代)などにもみられ、仕口の噛み合わせを調整したものであろうか。

1257～1265は井戸杵最下部の補強材(裏込め)で、板の端材が多く一端にオノの切断痕、もう一端にノコギリの切断痕がみられる。1265は欠き込み仕口がある転用材である。これらは、井戸杵製作時に板材や建築部材を現地合わせで切断した際に生じた残材の可能性があろう。

1266は井戸最下部の水溜で、直径約62cm、高さ

約 71cm のクスノキ科ニッケイ属材を削り抜く。地面に打ち込むため下端を薄く削ぎ、表面は内外面ともチョウナで粗く加工し仕上げている。下端には 1ヶ所、水通しのための欠き込みがある。上端はやや丸みがあり、円筒形の同材を積んだ当たり痕であろうか。前身井戸からの転用の可能性があろう。

SE 54031 (第 121 ~ 123 図) 1267 は井戸枠内出土の曲物で、底板が残る。釣瓶に用いたものか。

1268 ~ 1277 は縦板である。主として割肌のままの板目材を用い、同一母材から割り裂いた兄弟材が含まれ、以下のものは接合も可能である。

・ 1269 - 1273

・ 1270 - 1277

他に、1274 も 1269 - 1273 と類似し、同一母材の可能性もある。1275 のみヒノキ属。

1278 ~ 1295 は横板・横板で、割肌のままの板目材にノミ・ノコギリで欠込仕口を設ける。1285 のみヒノキ属で他はスギ。長手の母材を中央で半裁したものや、厚手の母材を割り裂いたものが含まれ、接合するものがある。堀町遺跡にもみられた兄弟材を対向して配置する井戸枠製作パターンが朝見遺跡でも採用されていることがわかる。材の兄弟関係は以下のとおりである。

縦板

・ 1269 - 1273 - 1274 ? (割裂)

・ 1270 - 1277 (割裂)

横板・横板

・ 1278 - 1282 (切断か)

・ 1280 - 1287 (切断か)

・ 1281 - 1289 (切断か)

・ 1283 - 1288 (切断か)

・ 1284 - 1291 (割裂)

・ 1286 - 1290 (切断か)

・ 1294 - 1295 (切断か)

SE 54036 (第 124・125 図) すべて井戸の部材である。1296 ~ 1304 は上部縦板で、総じて残りが悪い。主にスギの板目材を用いるが、1296・1299・1303 はヒノキ属、1304 はコウヤマキである。1300 はチョウナで丁寧加工されており、建築部材を割り裂いた可能性がある。

1305 ~ 1308 は下部縦板で、厚さ約 6 cm、幅約

80cm (年輪数 160 前後) の重厚なスギ柱目材である。小口はノコギリで整えられ、表裏と側面をチョウナで丁寧加工する。小口付近に柄穴と蟻溝状の加工がみられ、建築部材 (床板等) の転用と考えられる。腐食のため接合関係は判然としないが、木取りや加工の特徴は酷似しており、兄弟材ないし使用位置が近い建築部材の可能性が高い。1309 は横板である。

1310 ~ 1313 は横板で、1310・1312 はヒノキ属。いずれもチョウナで表裏・側面を丁寧加工しており、横板を掛けるための欠き込みを設ける。長手の板材をノコギリで 2 分割して対向配置しており、以下のとおり接合する。

・ 1310 - 1312

・ 1311 - 1313

1314・1315 は水溜として積み上げられていた曲物で、共にスギ製の板目材を用い、タガは端部面取りのないものである (堀町遺跡分類の I 類)。1314 は下段の曲物で、下部のタガが 1 段残り、底板固定の木釘穴はない。1315 は上段の曲物で、3 段のタガを 2 本の楔で固定する。底板固定の木釘のほか、各タガにもタガと側板を固定した木釘がみられ、度々補修された後、井戸に用いられたと推測される。

SE 56003 (第 126 図) すべて井戸材で、腐食のため残りは悪い。1316 ~ 1322 は縦板でスギ板目材を用い、下端はオノで粗く裁ち落とす。1323・1324 は横板ないし土居桁で、腐食著しい。

1325 は水溜に用いた曲物の残骸である。樹種はスギで木釘穴が複数みられる。

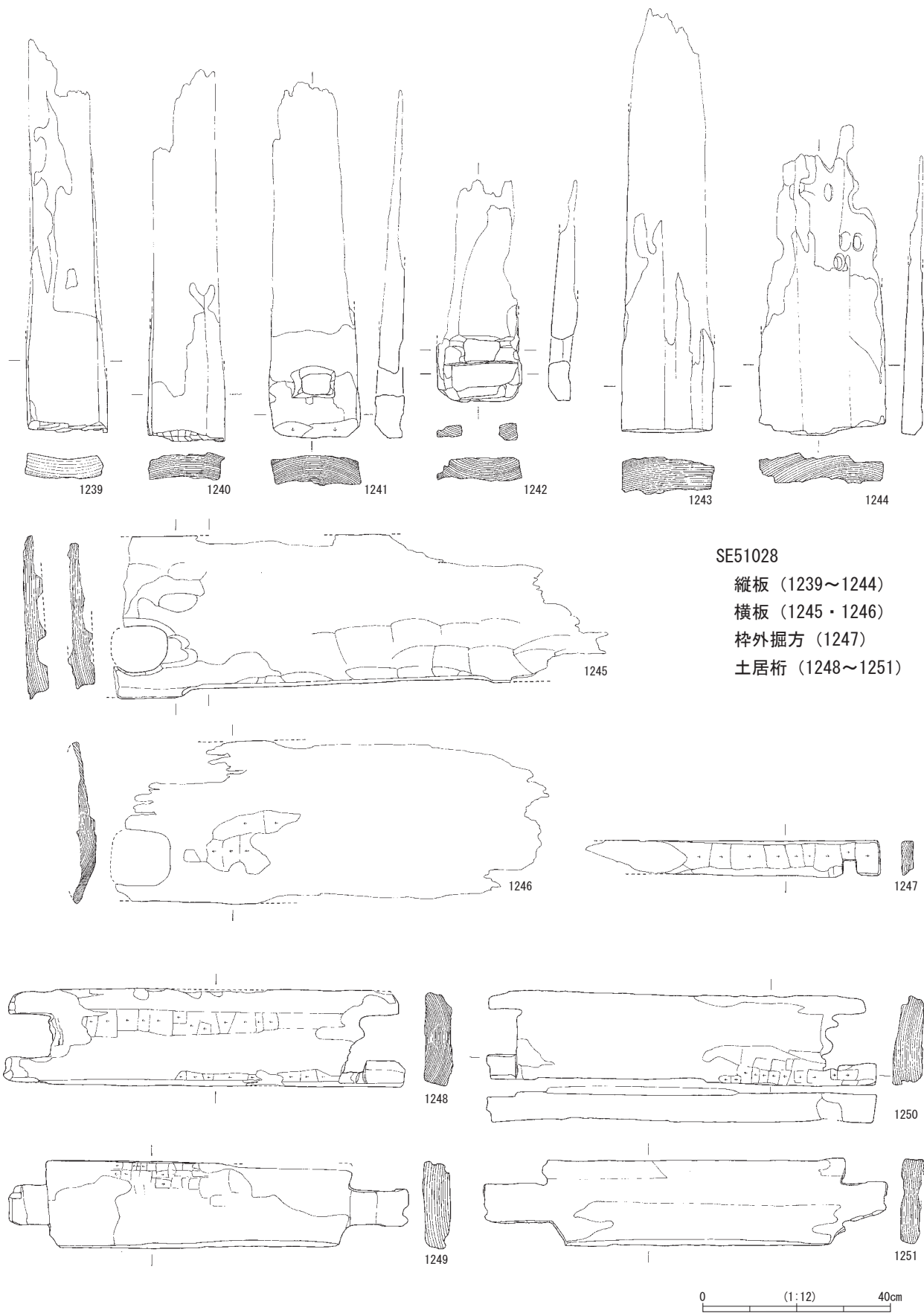
SE 56004 (第 126 図) 1326 は最下部の水溜に用いた曲物で、下段のタガ付近が残る。下端に木釘穴が多数あり、補修を繰り返した後、井戸に供されたとみられる。1327 は曲物底板で、平面形は楕円形である。内面側に黒色の付着物がみられる。

SE 56006 (第 126 図) 1328 は土居桁で、両端に欠き込み仕口を設ける。樹種はヒノキ属。

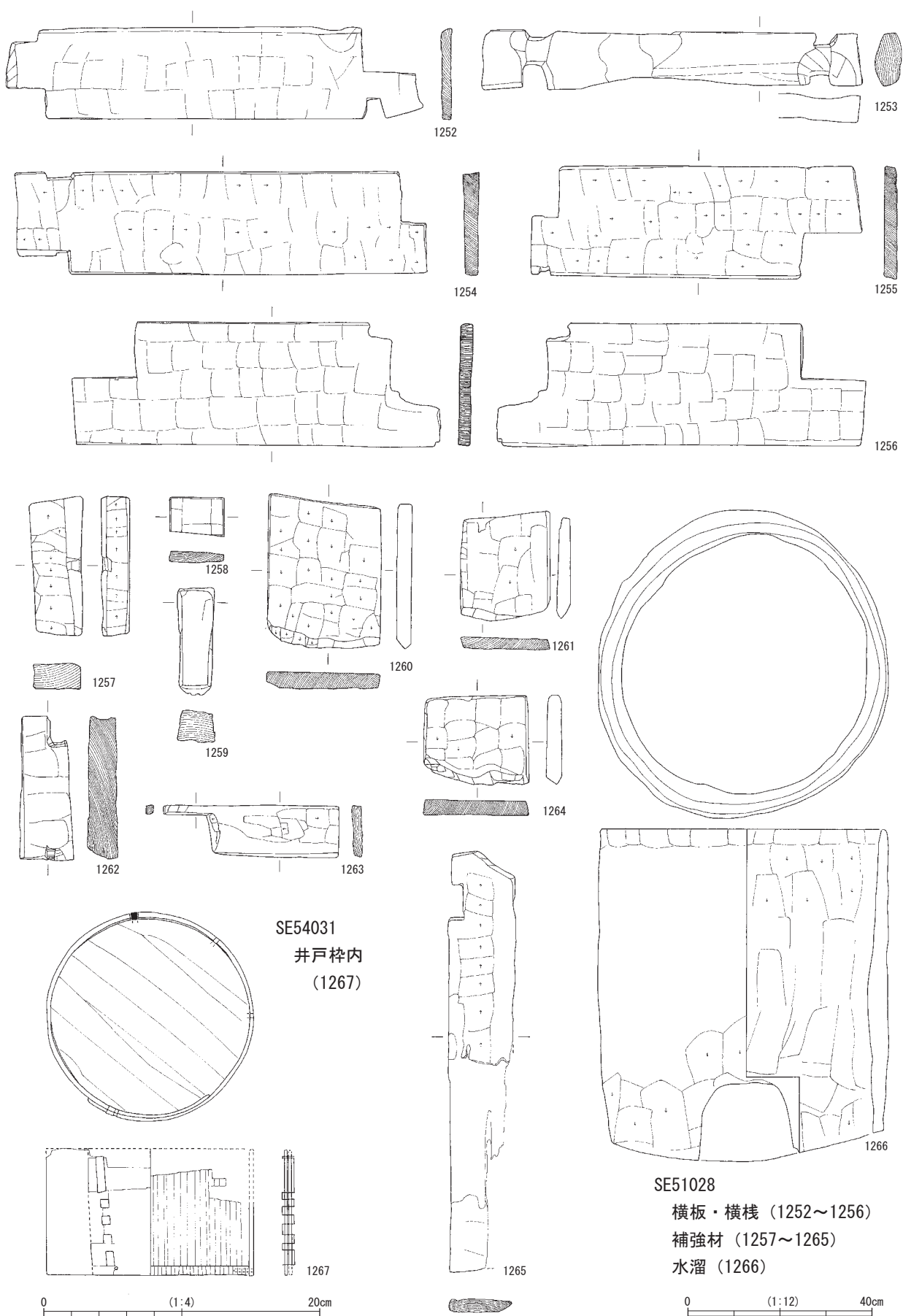
(3) 動物遺体

3・7・9 区でウマ臼歯などが出土している⁽⁷⁾。いずれも細かく割れ、残りは悪い (写真図版 98)。調査区ごとに概要を記述する。

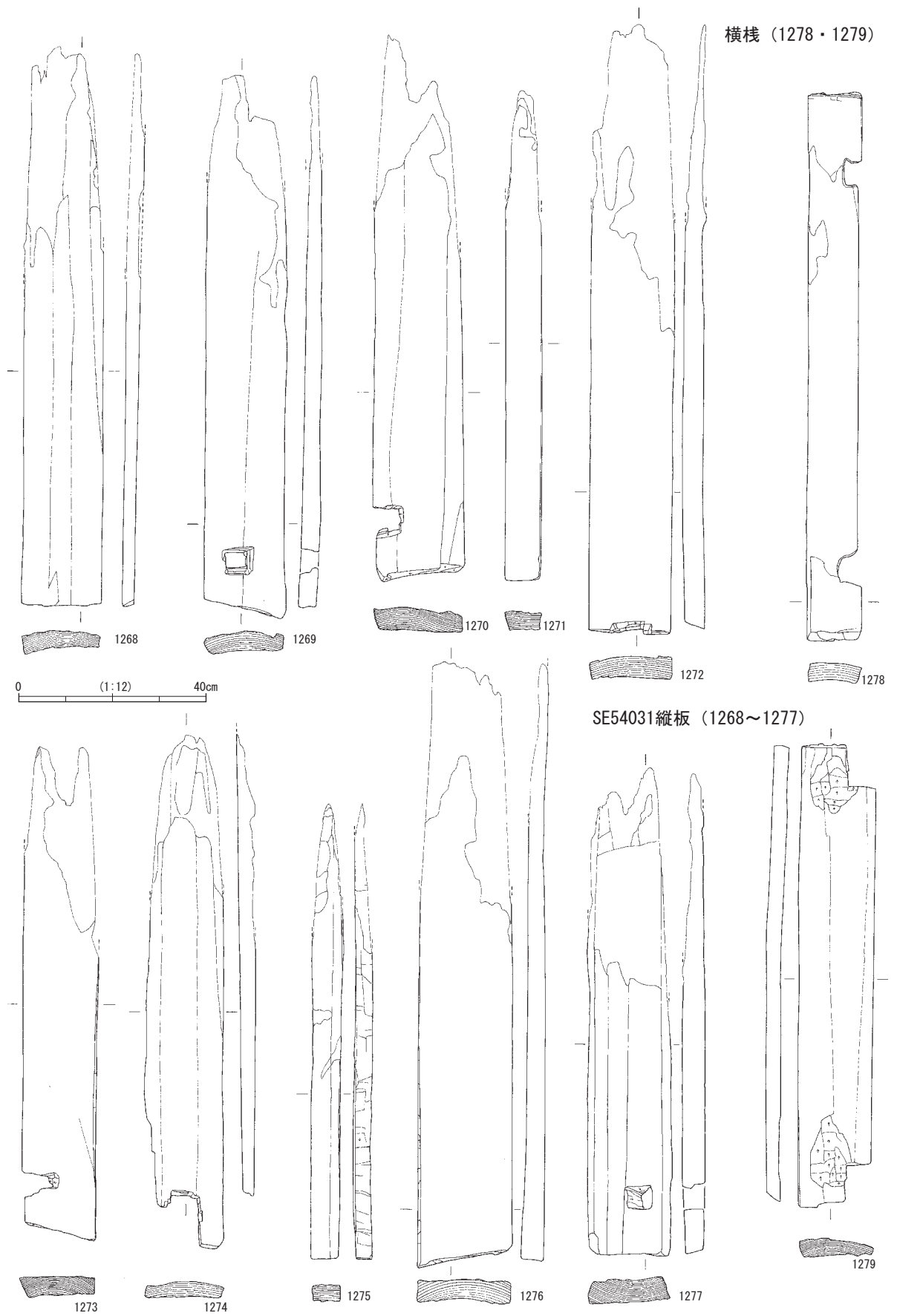
3 区 SD 53011 や溝内堆積である SK 53012 から大型哺乳類の骨や臼歯が出土しているが、同定は困



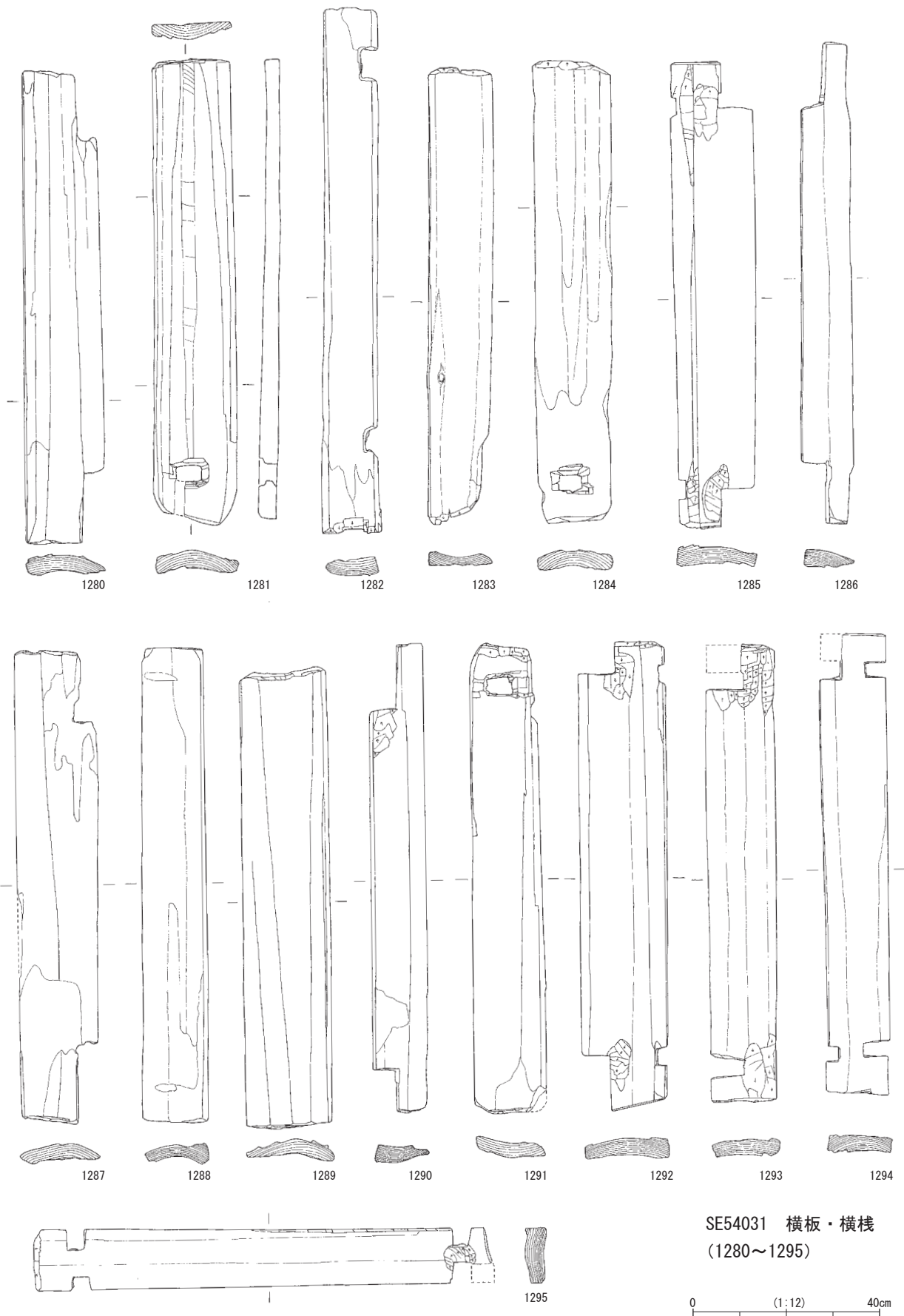
第 120 図 木製品 1 区① (1:12)



第121図 木製品 1区②・4区① (1:12、1267は1:4)



第122図 木製品 4区② (1:12)

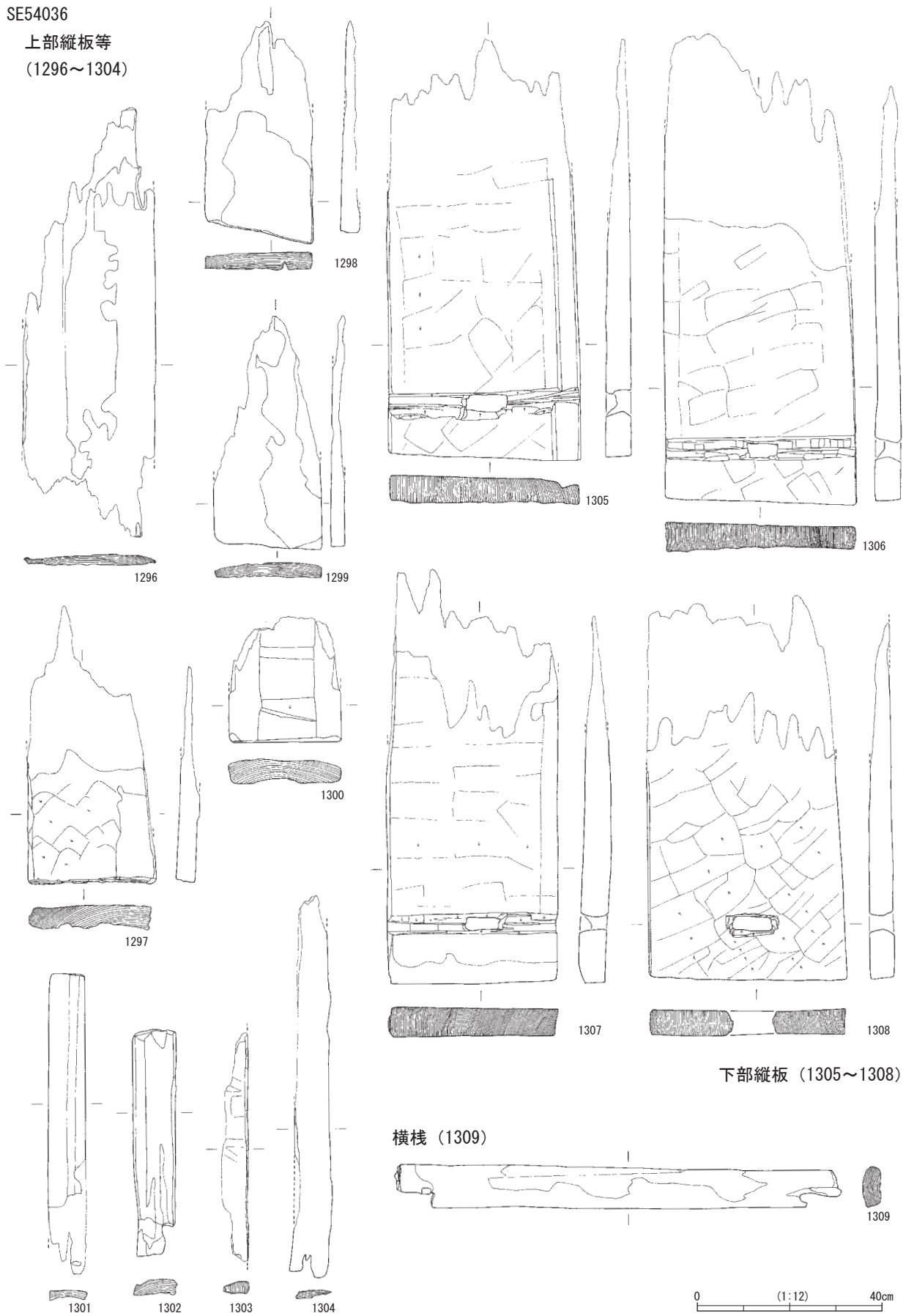


SE54031 横板・横棧
(1280~1295)

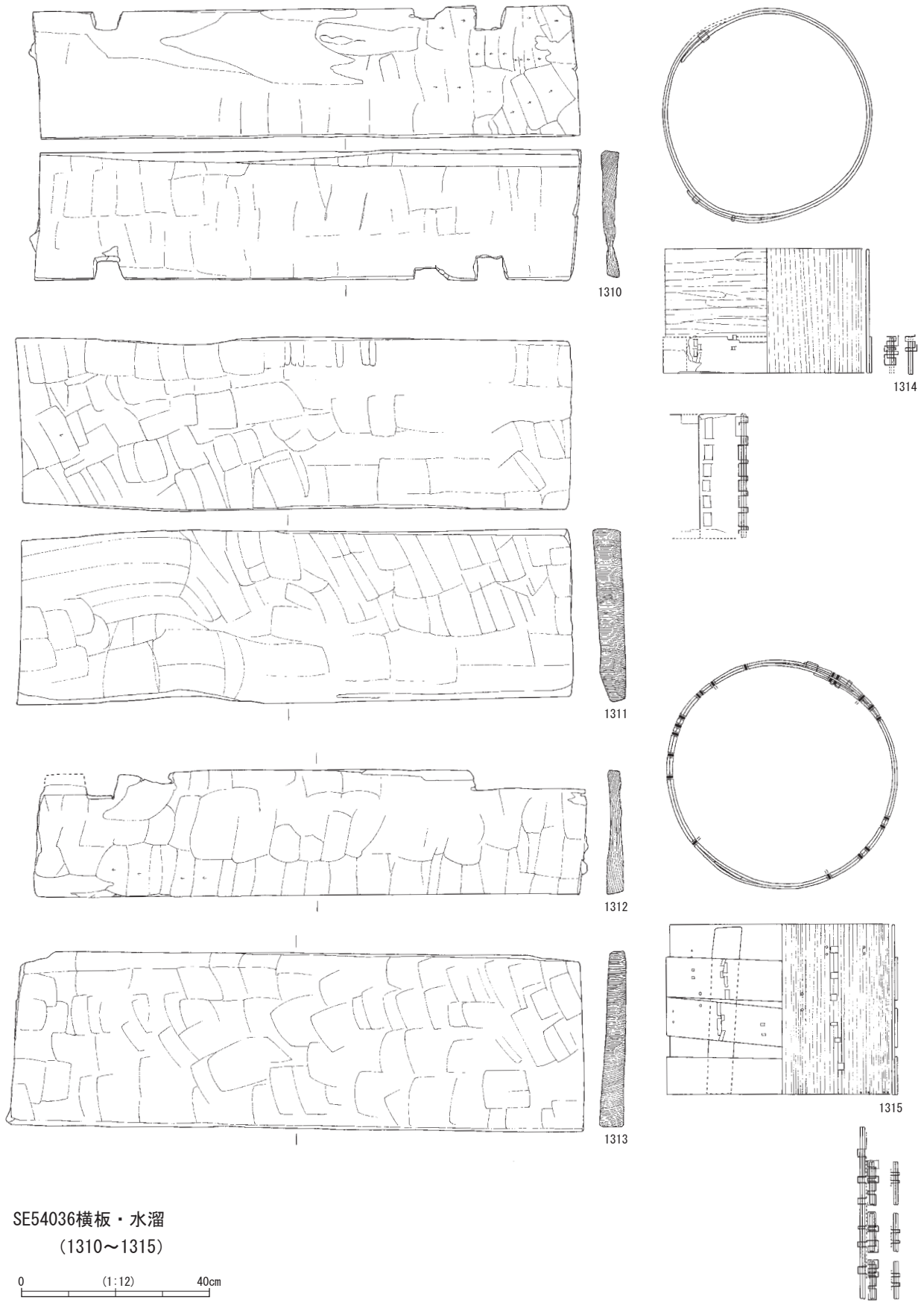
第 123 図 木製品 4区③ (1:12)

SE54036

上部縦板等
(1296~1304)

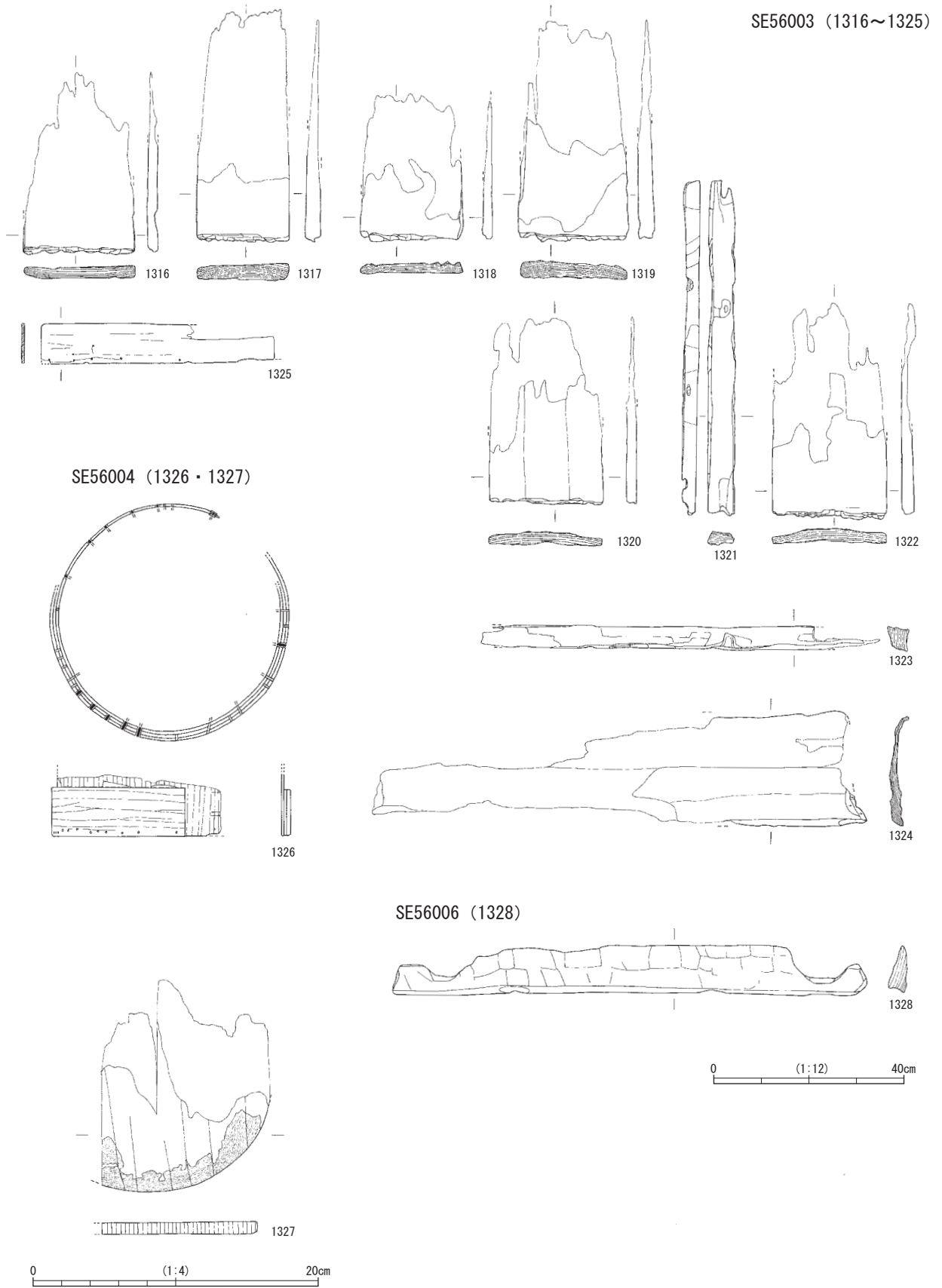


第124図 木製品 4区④ (1:12)



SE54036横板・水溜
(1310~1315)

第125図 木製品 4区⑤ (1:12)



第126図 木製品 6区 (1:12、1327は1:4)

難なものが多い。これらは溝に投棄されたか、流水により周辺から流入したものであろう。

S D 53005 のウマ臼歯は全長 6.5cm、S D 53001 青灰色砂出土ウマ臼歯は全長 3.5cm で老齡馬の可能性がある。

7 区 S D 57053・57062 関連で、ウマの臼歯が複数出土しており、特に S D 57053 内の波板状凹凸面からの出土（第 81 図）が特筆される。S D 57053-P4 では、ウマ上下顎臼歯が混在している。残存長は 5.5～6.5cm。P5 も臼歯で、残存長 3.5cm である。

9 区 S K 59033 から焼骨小片が出土したが、動物種は不明である。（櫻井）

3. 縄文時代の遺物

本節では、下層出土の縄文土器・石器を扱う。

各調査区のうち、遺構が確認できたのは 1 区と 6 区だけであったため、1 区と 6 区についてはそれぞれ遺構出土遺物と包含層出土遺物（6 区については埋積浅谷出土遺物も含む）を地区ごとに解説し、その他の地区出土のものは一括して扱う。

朝見遺跡では、縄文時代の遺物は上層遺構（弥生時代～中世）に混入のかたちでも多く出土したが、明らかに時期の異なる遺構への混入遺物は、当該の遺構出土遺物から分離して包含層と同じ扱いとし、「包含層等」として一括した。

以下、1 区、6 区、その他調査区の順で解説を加える。包含層等の個々の出土地点は遺物観察表に記したので必要の際は参照されたい。

（1）縄文土器

①縄文土器の分類（第 127 図）

朝見遺跡 5 次出土縄文土器の主体的な所属時期は中期末にあり、一部後期初頭から前葉のものを含む。無文土器の一部など、どちらに帰属するのかがいまいひとつ不明なものもあるが、有文土器についてはほぼ時期的な分別が可能である。

以下、縄文土器の記載をできるだけ簡潔に行うため、最初に量的主体をなす中期末（一部後期初頭を含む可能性がある）の土器を中心に、朝見遺跡 5 次調査出土縄文土器の形式分類を提示する。分類にあたっては、京都大学埋蔵文化財研究センターから

1980 年に刊行された北白川追分町縄文遺跡の調査における土器分類⁽⁸⁾を参考としながら、主に器形及び文様の特徴をもとに分類した。

ただし、浅鉢については、深鉢に比べて大形破片が乏しく、小破片の場合深鉢との分別がいまいひとつ不明なものが多い。そのため、分類は最小限にとどめた。以下、その概要を延べる。

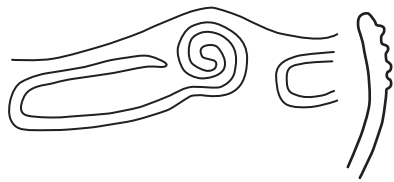
深鉢 A 類 口縁下にすぐ渦巻区画文による文様帯をもつものを一括した。口縁全体が緩やかに波打つ波状口縁と主文様部の頂部のみが僅かに立ち上がる波状口縁のほか、平縁も存在する。主文様の渦巻文と従文様の楕円形区画文が一体化したものから、主文様と従文様が分帯化したものがあり、文様表出も隆帯を多用するものから、沈線ないしは条線によるものがある。

文様帯の分帯化と文様表出の違いから、深鉢 A 類を 1～5 に細分する。

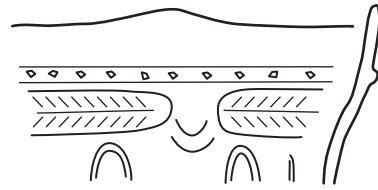
- A 1 主文様と従文様が連結し、文様表出を隆帯のみで行うもの。
- A 2 主文様と従文様は連結しているが、文様表出を隆帯に加え沈線で行うもの。
- A 3 主文様と従文様は連結しているが、文様表出が沈線のみで行うもの。
- A 4 主文様と従文様が独立し、文様表出は沈線のみで行うもの。口縁部文様帯の下位に多重沈線による連弧文を配するものもある。
- A 5 主文様と従文様の区別自体が不明瞭となり、横位展開する多重沈線の連弧文や条線文と組みあうもの。

深鉢 B 類 口縁部直下に無文帯をもち、その下位に区画文間のつなぎ部に橋状把手を配した口縁部文様帯が続くもの、もしくは口縁部文様帯が省略されて無文帯の下に直接胴部文様帯が続くものを一括した。胴部文様は、縦方向の蕨手沈線と長楕円形区画文の中に綾杉文を入れることを基本とする。緩やかな波状口縁をもつものと、平縁のものがある。橋状把手及び文様帯の状況などから、5 類に分類した。

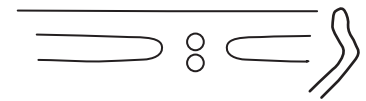
- B 1 橋状把手をもつもの。
- B 2 橋状把手が退化して縦隆帯化し、上面に凹点を入れるもの。
- B 3 隆帯も消失し、橋状把手の名残はなくなる



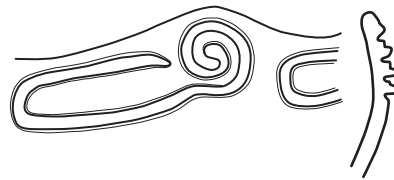
深鉢 A 1



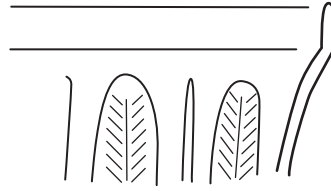
深鉢 B 3



浅鉢 A 1



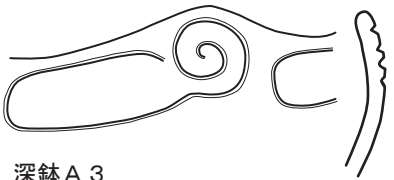
深鉢 A 2



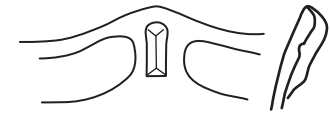
深鉢 B 4



浅鉢 A 2



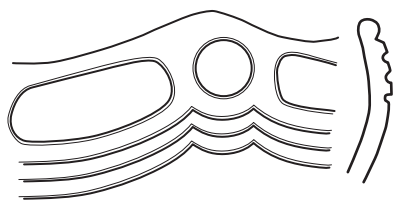
深鉢 A 3



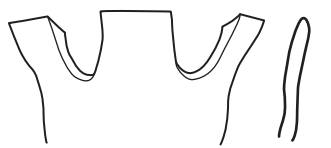
深鉢 B 5



浅鉢 B 1



深鉢 A 4



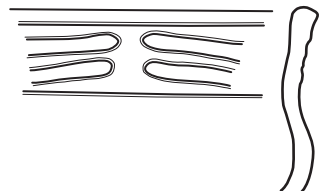
深鉢 C



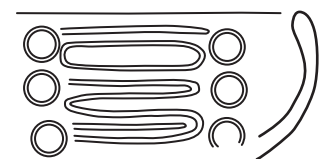
浅鉢 B 2



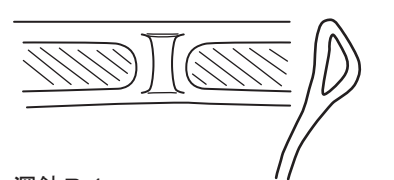
深鉢 A 5



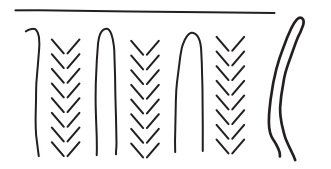
深鉢 D



浅鉢 C 1



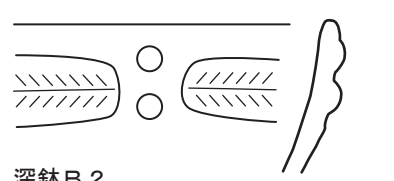
深鉢 B 1



深鉢 E



浅鉢 C 2



深鉢 B 2

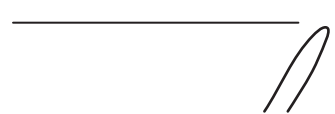


深鉢 F



浅鉢 D 1

第 127 図 縄文土器の分類



浅鉢 D 2

が、口縁下の無文帯と口縁部文様帯は残るもの。

B 4 口縁部文様帯が消失し、口縁部無文帯の下位に直接胴部文様が続くもの。

B 5 口縁直下の無文帯がなく、口縁直下に口縁部文様帯が直接続くが、つなぎ部に橋状把手の名残の縦隆帯が残るもの。A類との折衷的なもの。

深鉢C類 山形（富士山形）に突起する口縁部をもつ有文深鉢。

深鉢D類 口縁部文様帯に横沈線と横長の楕円文を組み合わせる配した平縁の有文深鉢、もしくはそれが崩れ、沈線のみもしくは横長楕円区画文となったもの。

深鉢E類 口縁部文様帯が省略され、本来胴部文様だったものが口縁直下から配された有文深鉢。

深鉢F類 口縁、胴部ともに文様をもたず、器面をナデ・縄文・条線等で調整しただけの無文深鉢を一括した。

浅鉢A類 口縁部がく字形に屈折する浅鉢を一括した。文様の有無から2細分する。

A 1 有文のもの。

A 2 無文のもの。

浅鉢B類 口縁部が屈折することなく、緩やかな半球形に立ち上がる有文浅鉢を一括した。口縁部無文帯の有無から2細分する。

B 1 有文のうち、口縁外面に無文帯をもたないもの

B 2 有文のうち、口縁外斜面に無文帯をもつもの

浅鉢C類 口縁部が内湾気味に立ち上がる浅鉢。文様の有無から2細分する。

C 1 有文のもの

C 2 無文のもの

浅鉢D類 体部から口縁部にかけて外側へ直線的、あるいはやや外反気味に開いて立ち上がる浅鉢を一括した。文様の有無から2分類する。

D 1 有文のもの。

D 2 無文のもの。

以下、朝見遺跡5次調査出土の縄文土器は、上記の分類に大略従い、上記分類に合致しないものや後

期前葉のものについては適宜個別に対応・記述することとする。

② 1 区出土遺物

S Z 51046 (第128～134 図) 1329～1471は包含層中の遺物集中として把握されたもので、上位の暗褐色シルト（「黒褐色」として取り上げたものを含む）と、下位の「黄褐色シルト」に分けて取り上げたが、上位と下位で明瞭な遺物時期の相違が認められず、また時代順が逆転している事例も認められたことから、ここでは一括して扱う。

1329～1372は深鉢A類である。1329と1365はA 1（1365は浅鉢A 1の可能性もある）、1332～1338・1346・1358はA 2、1331・1339～1345・1353はA 3、1347・1359～1362はA 4、1348～1350・1356はA 5で、その他の破片はA 3～A 5のいずれかに帰属するとみられるが、小片のため細かい分類は不明である。

このうち、1330～1334・1359～1360は口縁部と胴部を隆帯で区画する深鉢である。1330は主文様と従文様の渦巻区画文の下位に、1359～1360は沈線による区画文内に半截竹管を刺突する。小片だが、1361も半截竹管による刺突を伴う。

1347と1348はA 4とA 5に振り分けたが、やや肥厚する口縁外面を無文としており、B類の特徴も併せ持つ。口縁部文様帯の下部に多重沈線による連弧文を入れた1347、口縁部文様帯の簡略化がさらに進行して主文様を条線で描き、口縁部文様帯の下部に崩れた渦巻風の横位条線文を描く1348、口縁部の文様帯がさらに押し上がり、幅も細くなった1349、本来の文様帯部が消失し、沈線による渦巻文と多重沈線連弧文を組み合わせた1350などは、文様帯が上部にせり上がっていく動きと捉えることができ、一定の時間的変遷を追える資料として評価できるかもしれない。

1364は、胎土に赤色粒を多く含む。1365は、貝殻圧痕による擬縄文が口縁部の内外に残る。

1373・1375・1376・1380～1387・1389・1392・1393は深鉢B類である。つなぎ部に橋状把手が残る1373は、深鉢B 1であるが口縁外面の無文帯が狭く、A類と折衷的なあり方を示す。1375は無文帯下位に刺突列が付加され隆帯上凹点は沈線による二重弧線へ、1376はつなぎ部のアクセントが消失

し、横位展開する楕円形区画文が連続する。これらは、基本的には1373から1376へ変遷していくとみられる。

1380～1386も、基本的にこの流れと照応するとみられ、1380～1382は深鉢B2、1383～1385は小片のため細かい分類は難しいが、1386は口縁部文様帯がなく、口縁無文帯の直下に竹管を施した区画隆帯を配して胴部文様そのままつながる深鉢B4である。1387・1389・1392・1393は深鉢B4で、口縁部無文帯の直下に胴部文様が接続するか、無文である。1387と1392は口縁無文帯と胴部の間に隆帯を添付し、区分をより明瞭化している。ただし、1387は羽頂部に隆帯を収束させてきており、これ自体を口縁部文様とみると、A類との親和性が高くなる。

1374・1377～1379・1388・1390・1391は浅鉢で、1374は浅鉢A1、1377～1379、1388は浅鉢B1、1390は浅鉢D2、1391は浅鉢A2である。このうち1374は、口縁直下の無文帯が明瞭で、本来橋状把手であったものが隆帯上の凹点に置き換わったもので、深鉢B1類との親和性をもつ。1388・1390・1391も同様に深鉢B類、とりわけB4類との親和性をもつ。

1394は、沈線による文様が入った波状口縁片、1395は口縁部文様帯がなく、肥厚させた口唇部に蕨手沈線と竹管刺突、楕円形区画内に半截竹管刺突をもち、その下位に胴部文様が直接繋がるもので、これらも浅鉢の可能性もある。

1396～1400は、深鉢C類である。1399は隆帯を伴うが、その他は沈線で文様を表出し、分帯化した渦巻文や区画文を施文する。

1401～1404は深鉢D類である。最も残りが良い1403は、口縁部文様帯として沈線間に細長い楕円区画文を上下2段に配し、単節LRを地文とする。

1405～1414は、口縁・胴部の破片である。1405は口唇を欠くが、口縁文様帯として沈線による楕円区画文、胴部に縦位区画楕円文を配する。1406も口唇を欠くが、内面に綾杉文を配した円形区画文を沈線で描き、横に連続させた口縁部片とみられる。1407～1409は胴部に綾杉文をもつもので、1408はそれを縦隆帯で区画する。

1415～1420は深鉢E類である。頸部から口縁部に向かってラップ状に開く1415・1418と、やや内

湾気味に立直する1416～1417・1419～1420がある。胴部文様は、縦長の蕨手沈線ないし長楕円区画に綾杉文が組みあうが、綾杉文は1415・1416のような下向きと、1418のような上向きが併存する。

1421～1433は胴部片である。このうち1421～1430は綾杉文を配するもので、1424は縦隆帯、その他は縦沈線で綾杉間を区画する。1431～1433も沈線を配した土器で、1431は壺の胴部片とみたが、口縁部片の可能性もある。1433は蕨手沈線が入る土器で、沈線内に綾杉もしくは多重短斜沈線を充填している。

1434～1452は無文深鉢（深鉢F）である。ナデもしくは条線による調整が多いが、1443・1444は巻貝腹縁の回転による擬縄文、1447は無節縄文、1440～1441・1448などは研磨を施している。このうち1440は、口径が狭く、コップ状の器形をなす。1453は深鉢の脚台である。刺突列と沈線で加飾している。1454～1470は底部片である。このうち1454は、底部外面に網代痕を残す。

1471は後期の縁帯文土器で、広瀬土壙40段階⁽⁹⁾のものに相当しよう。重弧状沈線の口縁部突起を有し、口唇上端面を形成して、そこに沈線と刻みを施している。

1区包含層等（第135図） 1472～1479は口縁部片である。1472は深鉢A2、1473は浅鉢A、1474は口縁直下に凹線気味の2条沈線を引き、その間に押圧状の刻み列を施した深鉢片で、前述の深鉢分類には合致しない。1475は凹点の周囲に刻目隆帯を貼付した口縁部片、1476・1479～1482は深鉢B類で、口縁端部の残る1476は口縁直下に文様帯がきて、つなぎの縦隆帯が配されたB5類となる。1478は横方向に穿孔が開く橋状把手、1483・1486は綾杉文をもつ口縁部片、1484は胴部片である。

1477と1485は晩期の突帯文土器で、口縁部の残る1477は口唇部と刻目突帯が一体化してヨコナデが施された近畿系の長原式⁽¹⁰⁾に類似する。直線的な肩部をもつ1485も同時期として矛盾はない。

③6区出土遺物

S X 56037（第135図） 1487は3波頂の波状口縁に分帯化した主文様と従文様を沈線で描いた深鉢A4であるが、その下部に横方向に開く橋状把手をつ

なぎとした2条隆帯を貼付し、波頂部は上方隆帯からJ字文を派生させている。つまり、2段構成の口縁部文様帯を形成している。胴部は、3条の蕨手沈線と下部を頂点とした綾杉文を組み合わせている。

S Z 56038 (第136図) 小破片ばかりで、若干混入もある。1488は後期中津式である。1489は磨消縄文内に刺突文を列状に付加したもののだが、口唇の処理や器面調整に中期末的要素も残り、中期末か後期の判断が難しい。

1490～1504は中期末に属する。162は刺突を施した蛇行隆帯を口縁部に沿って貼付した深鉢口縁部、1491～1497は無文の口縁部であるが、1492は口縁を肥厚させた無文帯となっており、深鉢B4の可能性もある。1493は口縁内側に内斜面があり、浅鉢かもしれない。1499～1503は口唇が欠損した口縁部片と胴部片で、1500は深鉢B類の口縁下部から胴上部片、1499は沈線区画の下部に重連弧文沈線を引き、胴部に綾杉を配した深鉢A4ないしはA5に復元できよう。1504は底部片で、底部外面に不明瞭ながら網代痕跡らしき圧痕が残る。

S K 56040 (第136図) 1505は口唇を肥厚させて内面に内斜面をもち、刺突と沈線で加飾し、胴部に端部を入り組みにした大振りのJ字文等を横位展開させた文様を施す。胴部文様に古い様相を残すが、口縁の特徴は広瀬土壙40段階の縁帯文成立期とみてよかろう。

S K 56041 (第136図) 1508は隆帯による渦巻文をもつが、口縁直下に無文帯があり、深鉢B類になるとみられる。1506・1507・1509はいずれも小片だが沈線による文様施文で、深鉢A3もしくはA4に相当するであろう。

S Z 56042 (第136図) 1510は深鉢口縁部片で、上端面を構成する口縁部に小突起をもち、沈線で文様を描く。1511は縦沈線に縄文RLを縦方向に施す。1512は底部片である。

S Z 56046 (第136図) 1513は中津式、1514は肩部に3条沈線を配し、胴部に渦巻文を配した広瀬土壙40段階の深鉢片、1515は内外に研磨痕が残る無文深鉢、1516は条線を施した粗製深鉢である。

時期差があるが、いずれも後期初頭～前葉の所産であろう。

S Z 56047 (第137図) 1517は浅鉢A2で、口唇端と肩部に刺突列が入り、その間に縄文LRを充填する。1518は深鉢A5で、波頂部の主文様の区画はあるが、従文様の区画はなく、刺突だけが施される。胴部には、蛇行沈線や蕨手沈線、沈線、逆U字沈線などを縦位施文し、横に連続していく。

1519・1520は深鉢C類、1521は口縁端部が若干開き気味で、浅鉢D1もしくは深鉢E類、1522～1523・1525は深鉢Fで、1522・1523は口縁部が立直するタイプ、1525が外反するタイプである。

1524は胴部片で、3条の縦沈線もしくは蕨手沈線に縄文LRを組み合わせている。1526は底部片である。

S X 56057 (第138図) 1527は体半部の残存で、縦方向の弱い沈線が粗い間隔で入っている。底部外面には、ドーナツ状に刺突状の圧痕のようなものが入っている。

S K 56060 (第138図) 1528は頸部に幅6mm弱の沈線を1本単位で引いたものが現況で3条分残り、小片で詳細は不明だが緩やかな連弧文を形成するとみられる。この沈線は、「幅がやや広く、浅い沈線であるが、角が直立したシャープな沈線」という東海地方西部の特徴的なものとされるものに合致し、瀨瀬・高橋両氏の「中富・神明式」土器の2期新⁽¹¹⁾(広義の「咲畑式」)に特徴的とされる沈線とみられる。

S K 56061 (第138図) 有文土器は、後期前葉の枠内ながら若干の時間幅をもつ。1529は3条沈線の磨消縄文で福田KⅡ式⁽¹²⁾、体上部片の1530は磨消縄文を施した中津式である。1532は、小波頂に凹点を囲む重円弧文を配した北白川上層式1期⁽¹³⁾

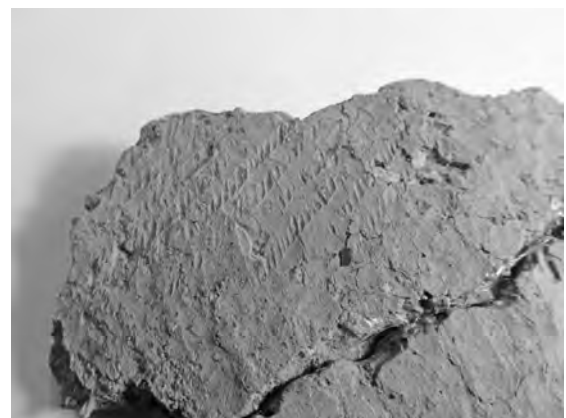


写真2 縄文土器(1536)施文状況

の縁帯文土器で、地文に縄文LRを充填している。

1533～1535は無文深鉢で、口縁の残る1533は緩やかな波状口縁、1534は内外に二枚貝条痕を施す。1535は1531・1532と同じ特徴をもち、同一個体の可能性がある。1536は、直線的に外に開く体下半部をもつ深鉢で、外面縦方向、内面横方向に研磨が施され、上部は無節の縄文を横方向に回転施文している（写真2）。

6区下層ピット（第139図） 1537～1540は確実に縄文遺構と判断できたピットの出土遺物である。

1537は平縁の口縁部片で、沈線による区画文を施した深鉢A4である。1538は外面に縄文を充填した沈線区画を配した浅鉢E1とみられる。図面左端も沈線区画文が続く。1539は外開きの口縁端部に沈線を入れた縁帯文土器の口縁部片で、後期前葉の所産であろう。1540は胴部片で、内面を研磨し、外面に2枚貝条痕を施す。

6区埋積浅谷（第139図） 1541は、ボール状の器形をもつ中津式の浅鉢で、沈線によるJ字もしくはO字かとみられる文様を施す。1542・1543も中津式である。内側に肥厚する口縁部片の1542は緩やかな波状を呈し、紡錘文を垂下させている。胴部片の1543は、紡錘文による磨消縄文の下部に区画縄文帯を連結し、体部文様帯を閉じている。1544も中津式とみられる磨消縄文であるが、縄文帯を区画する沈線末端が若干途切れている。

1545は、胴部が張った壺もしくは浅鉢で、縄文RLを地文として施した上に、竹管刺突を入れた沈線による長方形区画文を描く。

1546は、口縁部から一段下位の隆帯に向けて、欠損するが橋状把手が付き、さらにその下に円孔が穿たれて注口部が付される注口土器である。注口部を囲む文様は、低い隆帯の貼付により形成されている。

1547は、外反する口縁部の端部を少し摘み上げて縁帯化した半精製深鉢で、口縁から垂下する条線と、胴部に渦巻状に描く条線で文様効果を醸している。

1548・1549は、縄文LRを全面施文した胴部片であるが、口縁部が不明のため、有文土器かどうかはわからない。

1550～1553は無文土器の口縁部片である。1550は外面を研磨、1551は口縁内外に縄文を施す浅鉢

D2であろう。1552と1553はナデ調整で、1552は口縁部を肥厚させている。

1554～1556は底部片。外面に研磨痕がある1555は底部に網代痕跡、1554は底部に縄文が残る。

6区灰褐色～黄褐色シルト（第140・141図） 1557～1589は6区北壁5～8層相当の包含層出土遺物で、中期末から後期前葉の土器が混在している。

1557～1572は有文土器で、1566までが中期末、1567からが後期に属する。1557は、上面に刺突を加えた蛇行隆帯を貼付した土器で、1475や1490と同じ特徴をもつ。1558は深鉢Dとみられるが、波頂部の直下を刺突で加飾する。1559は、口縁外斜面に縦方向の刻目隆帯を貼付する土器で、その両脇を沈線で施文する。浅鉢の可能性もある。1560は深鉢A5、1561は山形波頂をもつ深鉢Cである。

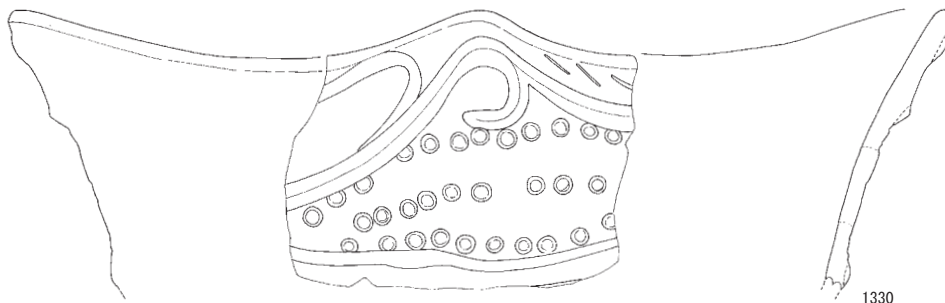
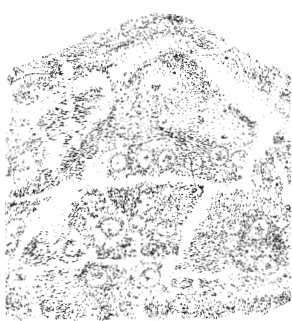
1562は端部を欠くが、多重沈線の連弧文は口縁部文様とみられ、深鉢A5に相当しよう。連弧文の合わせ部と胴部文様の間に小さな「C」字沈線をアクセントで貫入させている。1563・1564も端部を欠くが口縁部で、1563は口縁部と胴部の境界に竹管刺突を施した隆帯で区画した深鉢、1564は沈線で緩やかな楕円区画を描いて内部を条線で充填している。

1565はやや上げ底気味の底部で、胴部文様の縦沈線が残る。1566は、透かしをもつ脚台である。

1567～1569は、後期初頭の中津式である。1567は、O字文と横長楕円文、横沈線を組み合わせた浅鉢C1である。1568・1569は胴部片で、1568は沈線による施文、1569は沈線区画内に縄文を充填した磨消縄文である。

1570～1572は縁帯文期の口縁部片である。1570は口縁部上端面を形成して刺突を施し、突起を付加している。1571は、口縁直下に刻目隆帯を貼付する土器、1572は摘み上げた口縁端部に刻みを施すもので、ともに関東の堀之内式系統の深鉢とみられる⁽¹⁴⁾。

1573～1583は無文土器もしくは縄文施文の半精製土器である。1573・1578・1582はナデ調整、1574・1576・1577は外面に条線を施す深鉢である。このうち1576は、条線を口縁部横、その下位に曲線を含む斜めで施し、文様効果を出している。1576～1578、1582はいずれも口縁部がやや肥厚気味で、

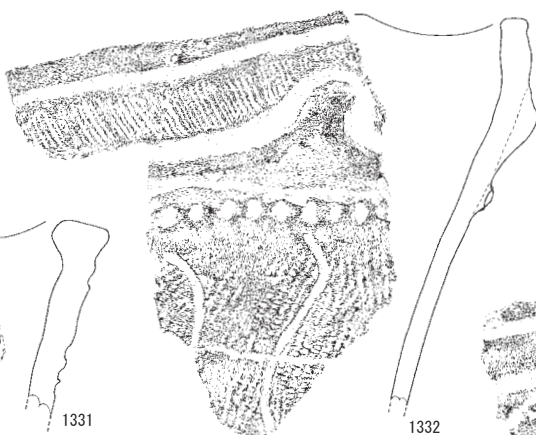


1330

SZ51046 (1330~1346)



1329



1331



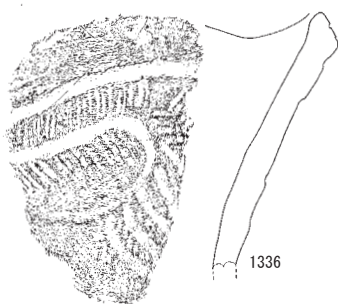
1333



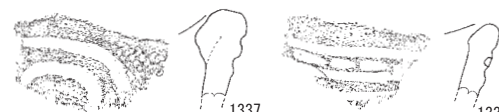
1334



1335

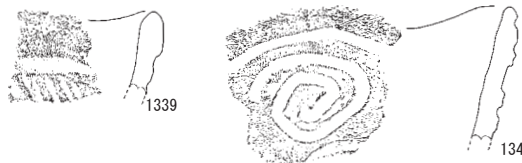


1336



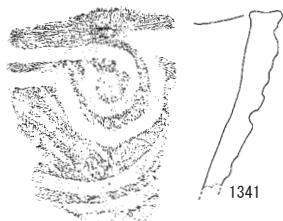
1337

1338



1339

1340



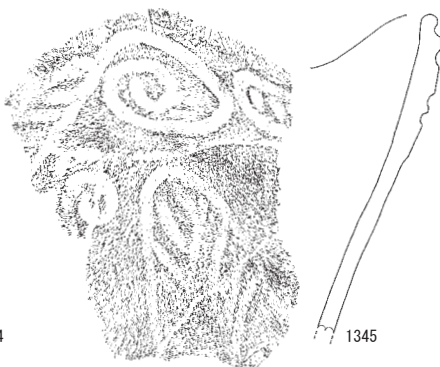
1341



1342



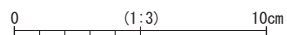
1343



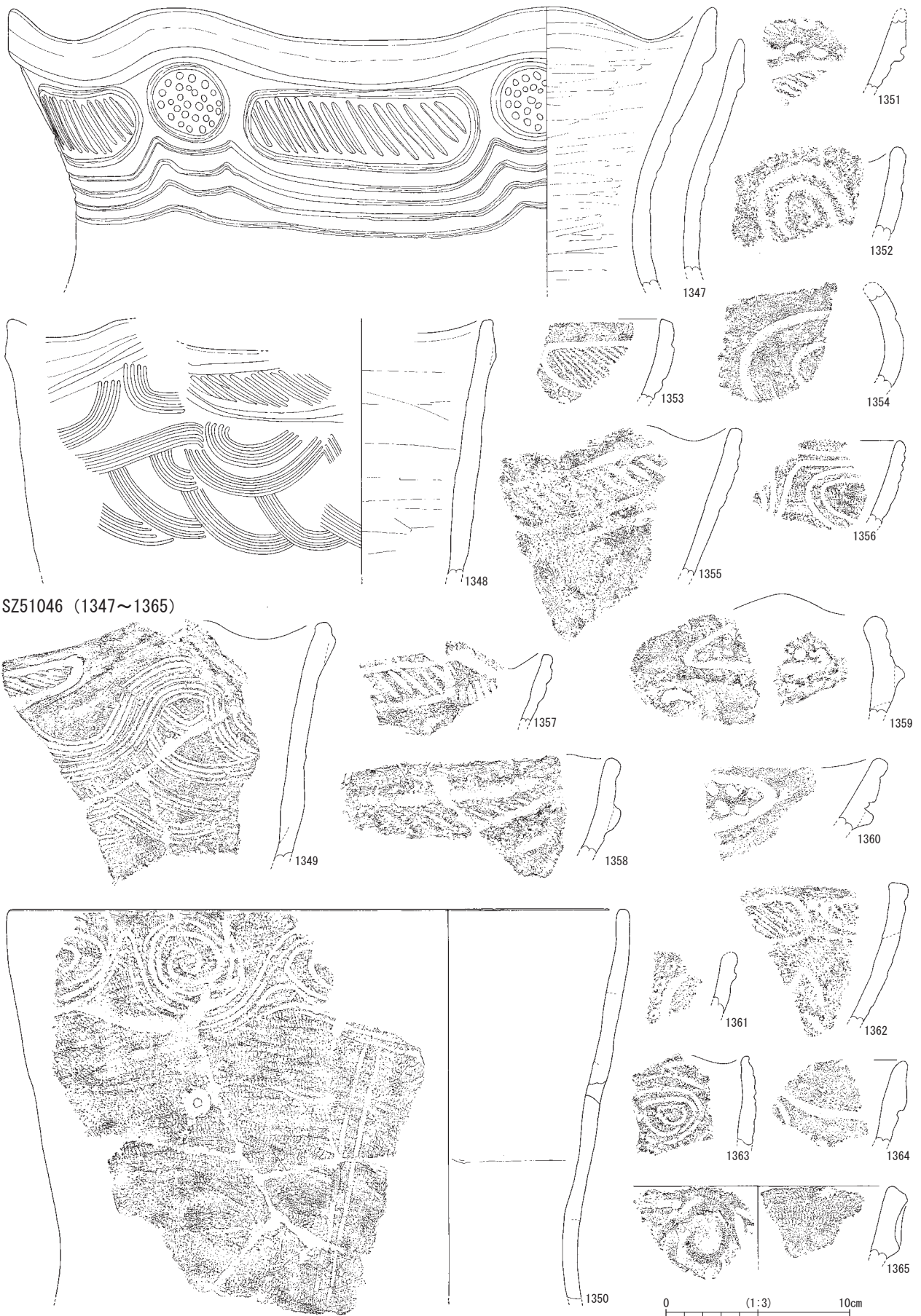
1345



1346

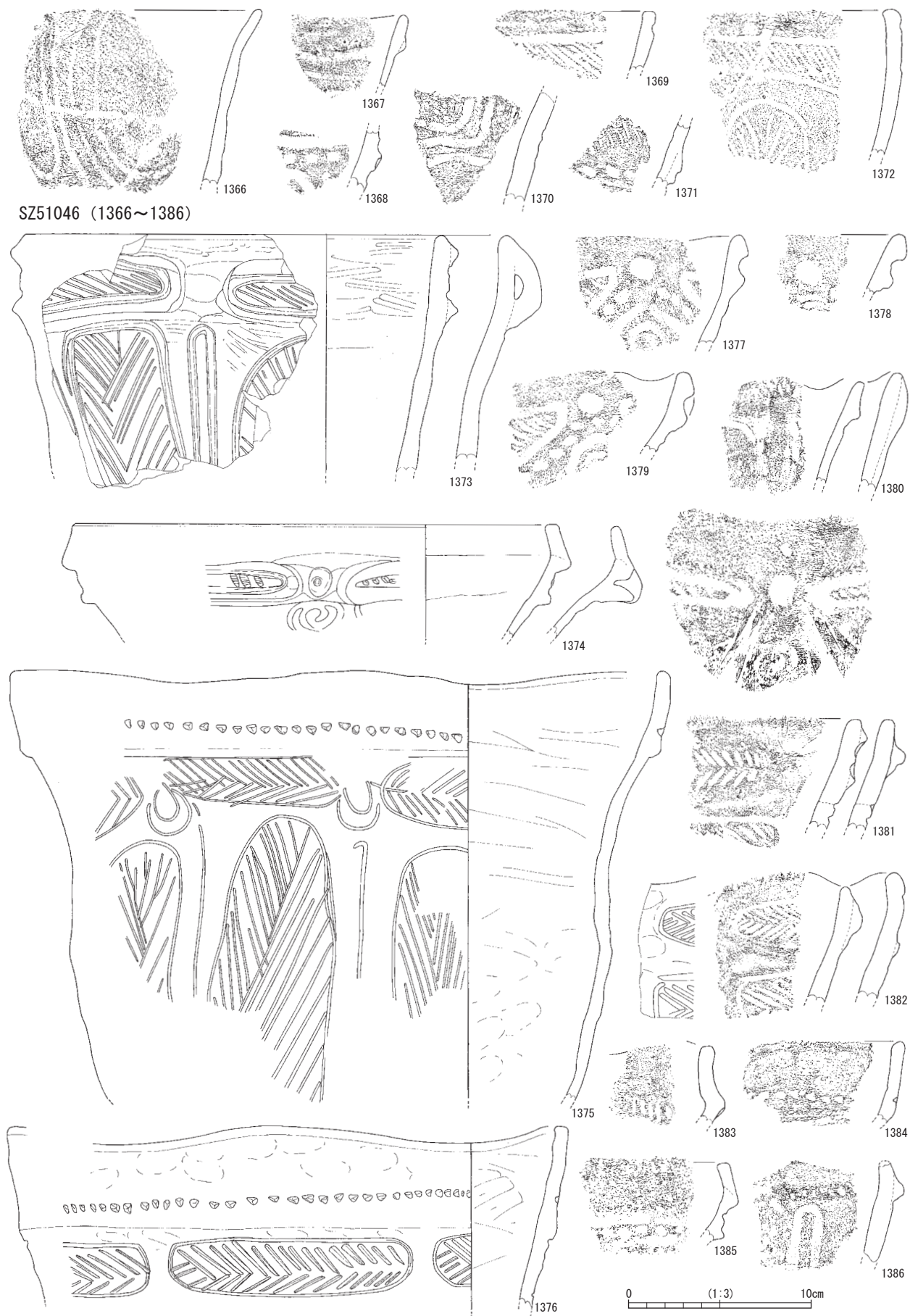


第 128 図 縄文土器 1 区① (1:3)



SZ51046 (1347~1365)

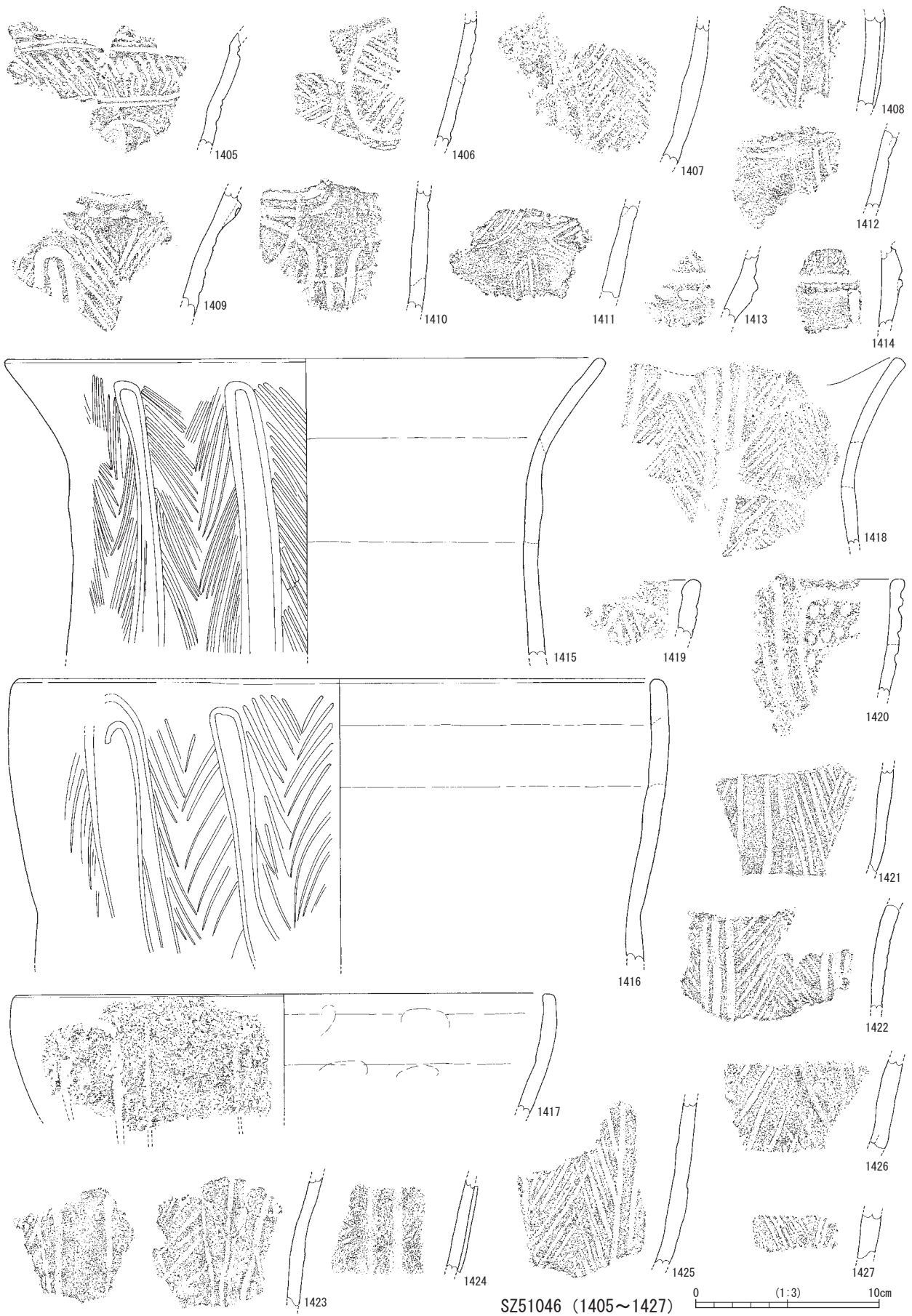
第 129 図 繩文土器 1 区② (1:3)



第130図 縄文土器 1区③ (1:3)



第 131 図 縄文土器 1 区④ (1:3)



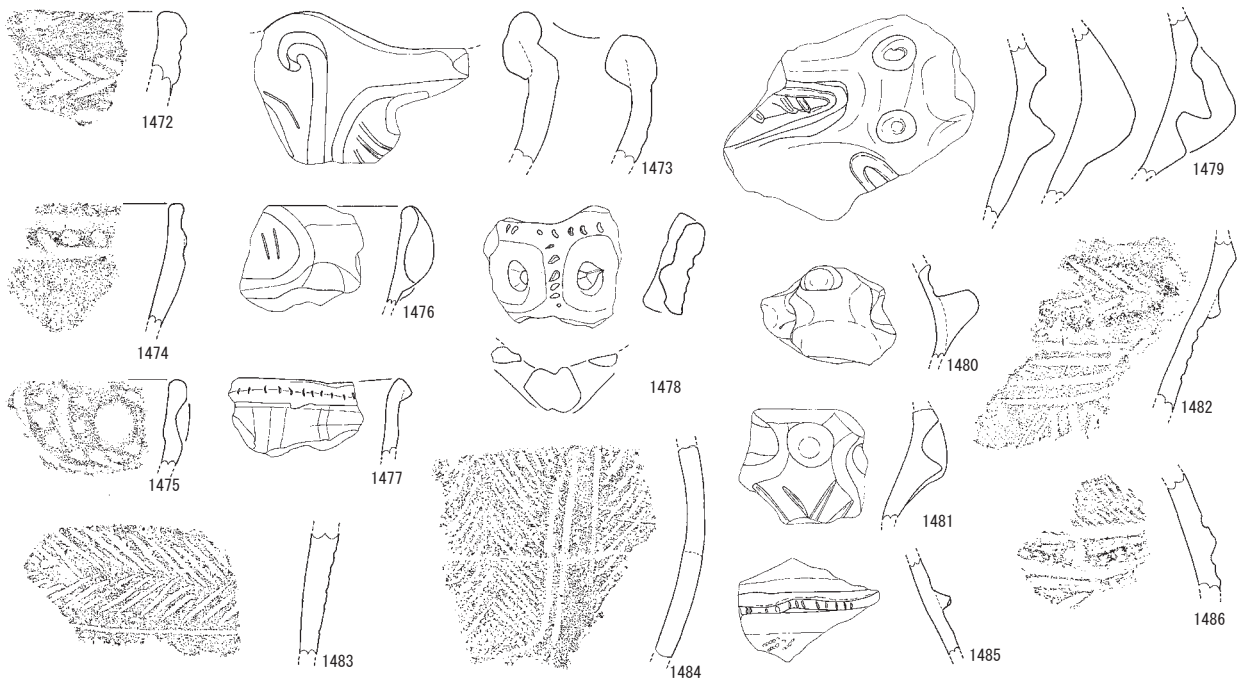
第 132 図 縄文土器 1 区⑤ (1:3)



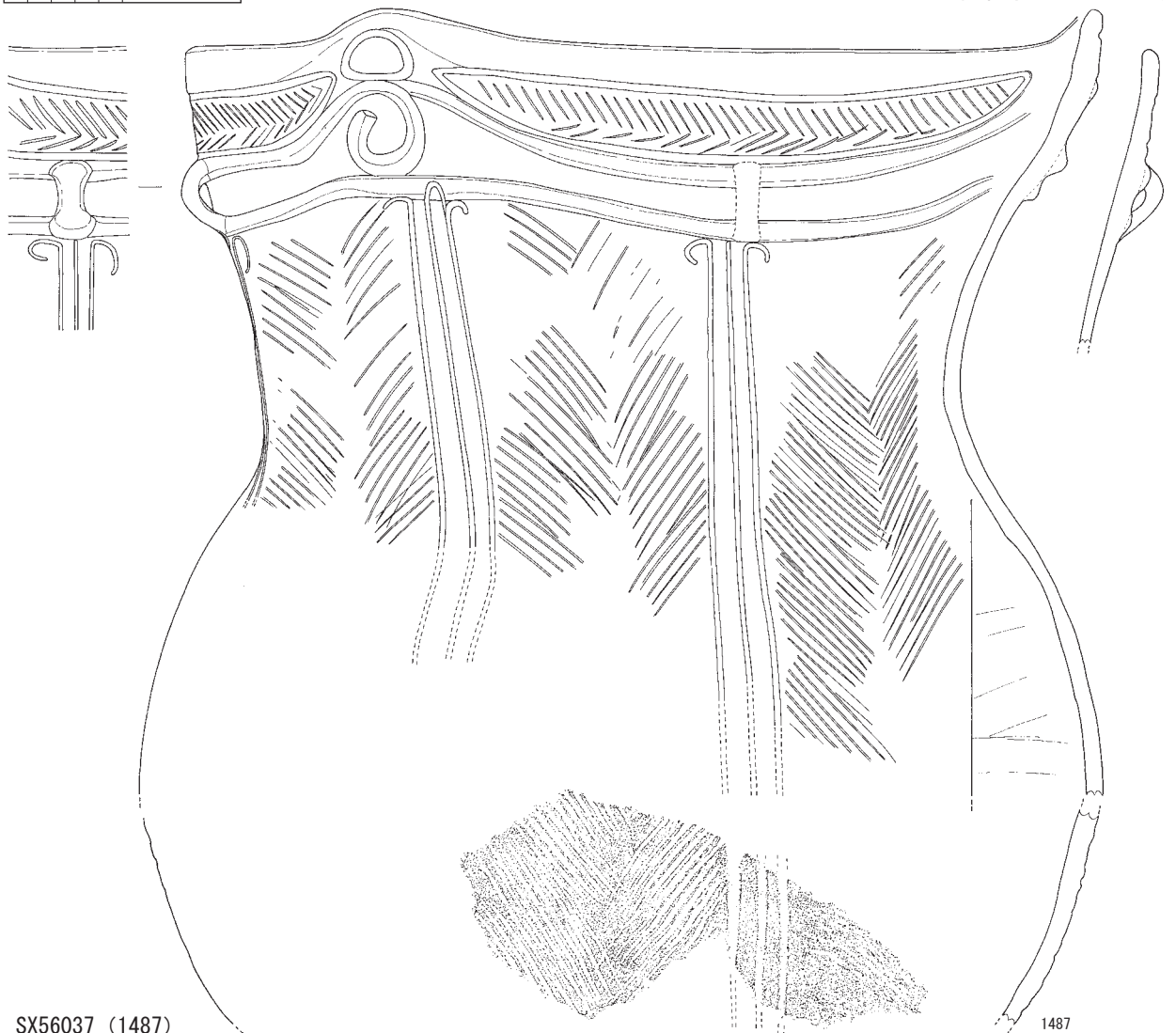
第 133 図 縄文土器 1 区⑥ (1:3)



第 134 図 縄文土器 1 区⑦ (1:3)

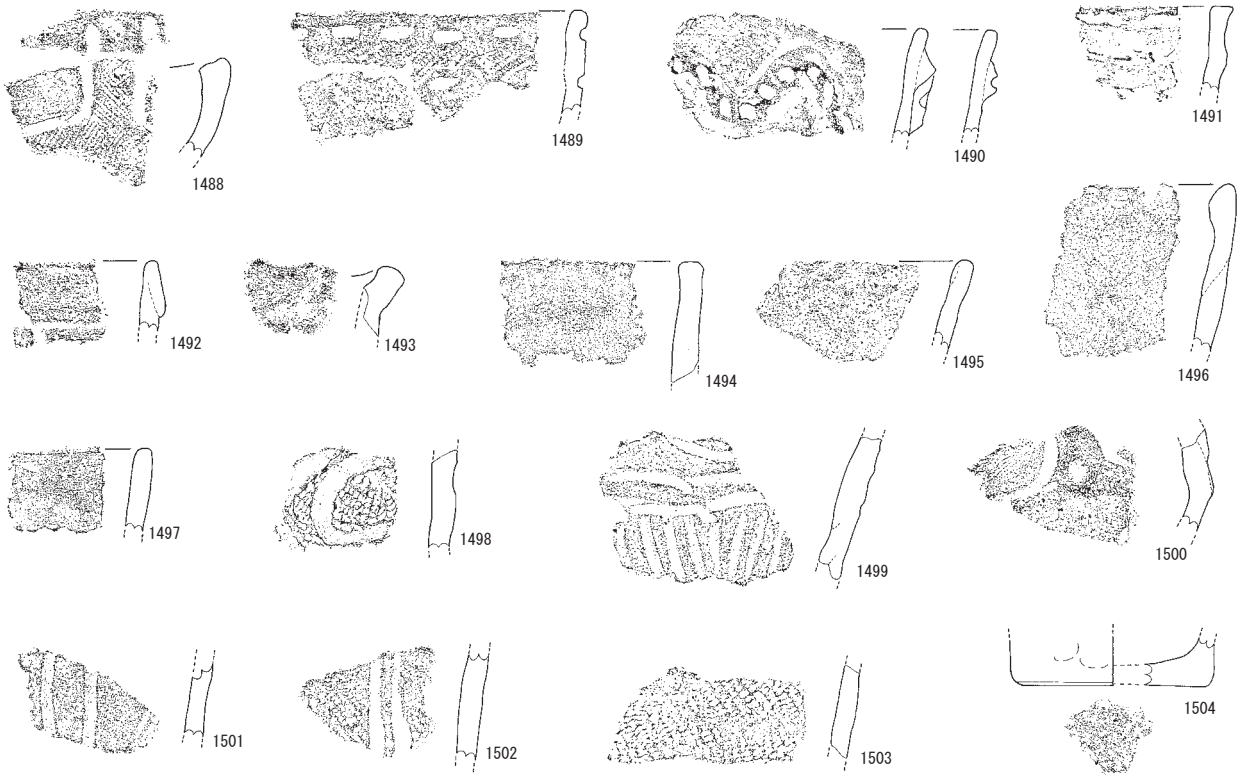


1区包含層等 (1472~1486)

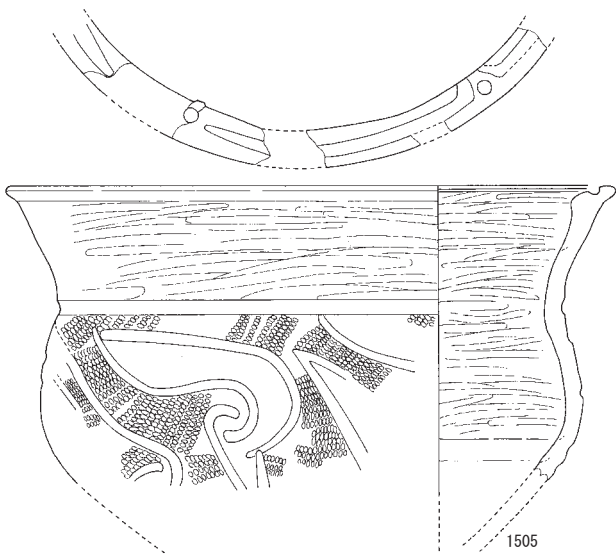


SX56037 (1487)

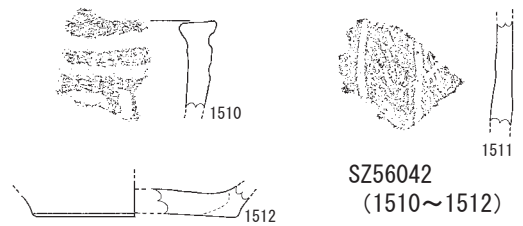
第135図 縄文土器 1区⑧・6区① (1:3)



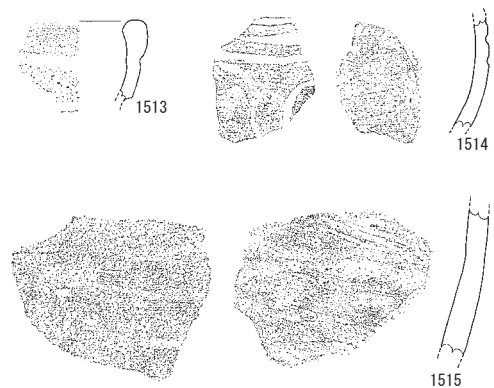
SZ56038 (1488~1504)



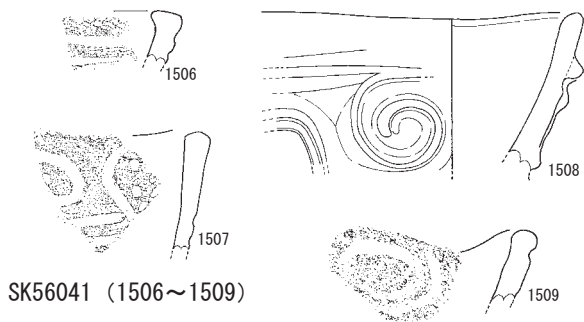
SK56040 (1505)



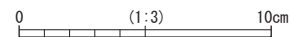
SZ56042 (1510~1512)

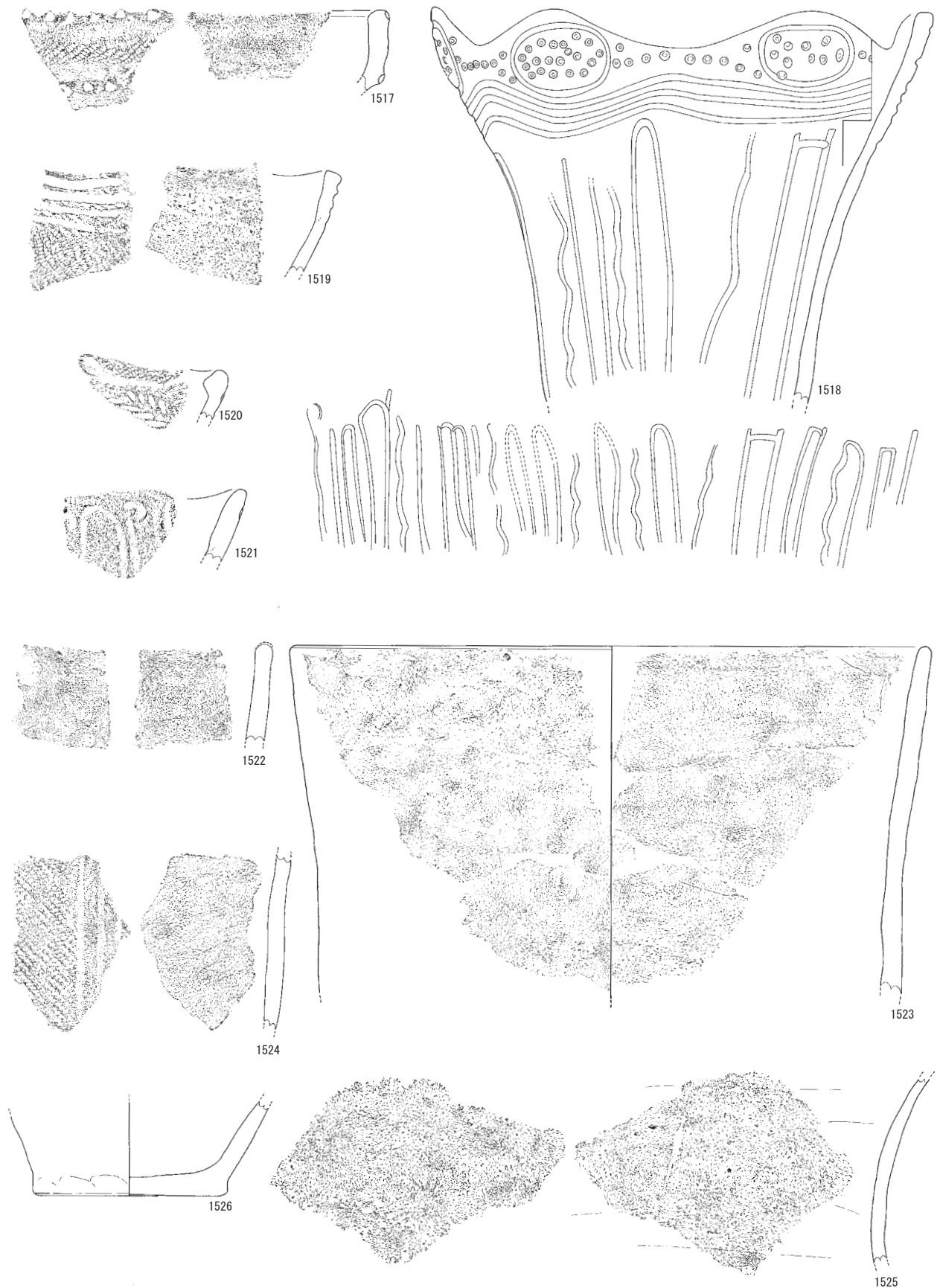


SZ56046 (1513~1516)

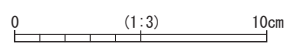


SK56041 (1506~1509)

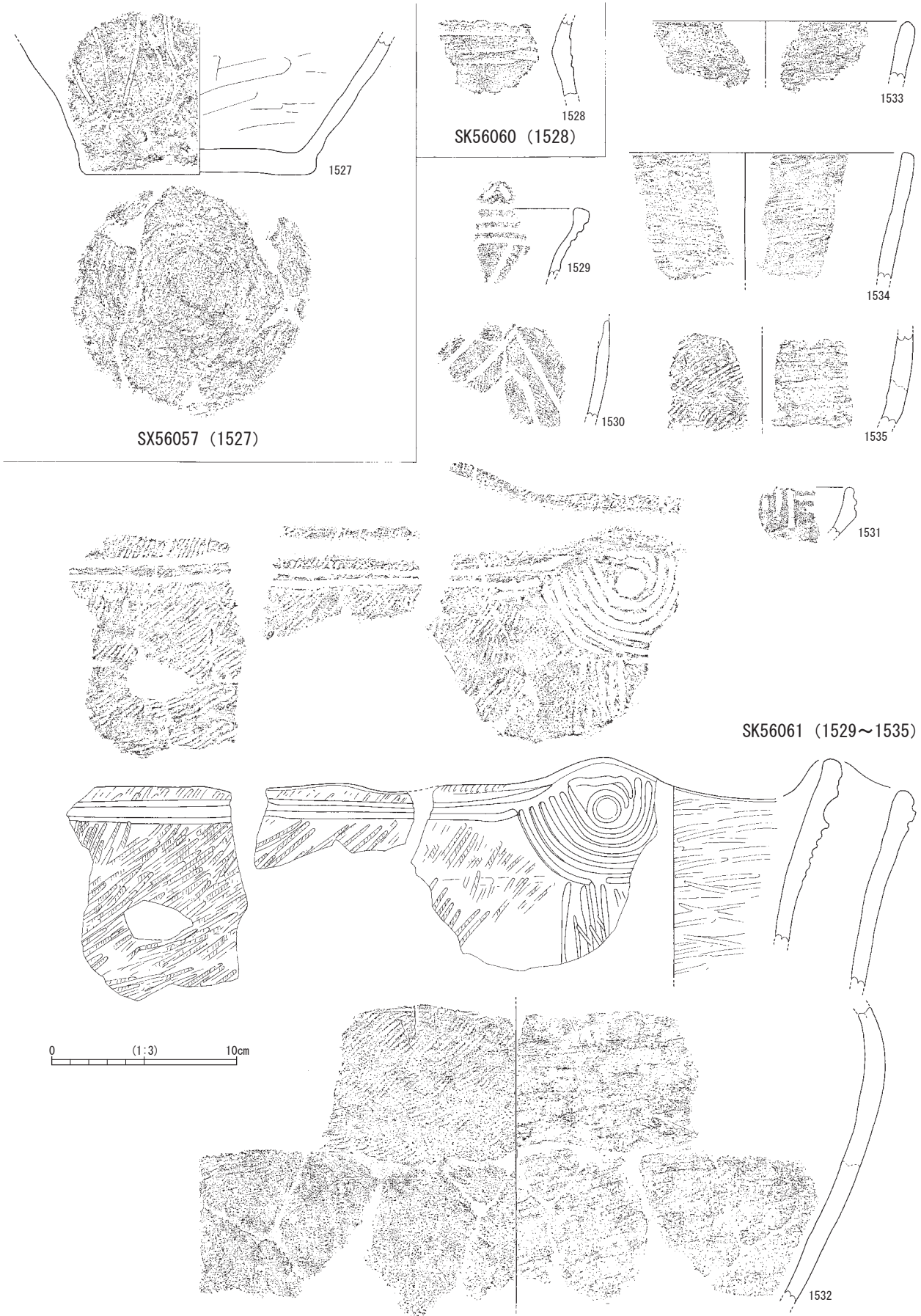




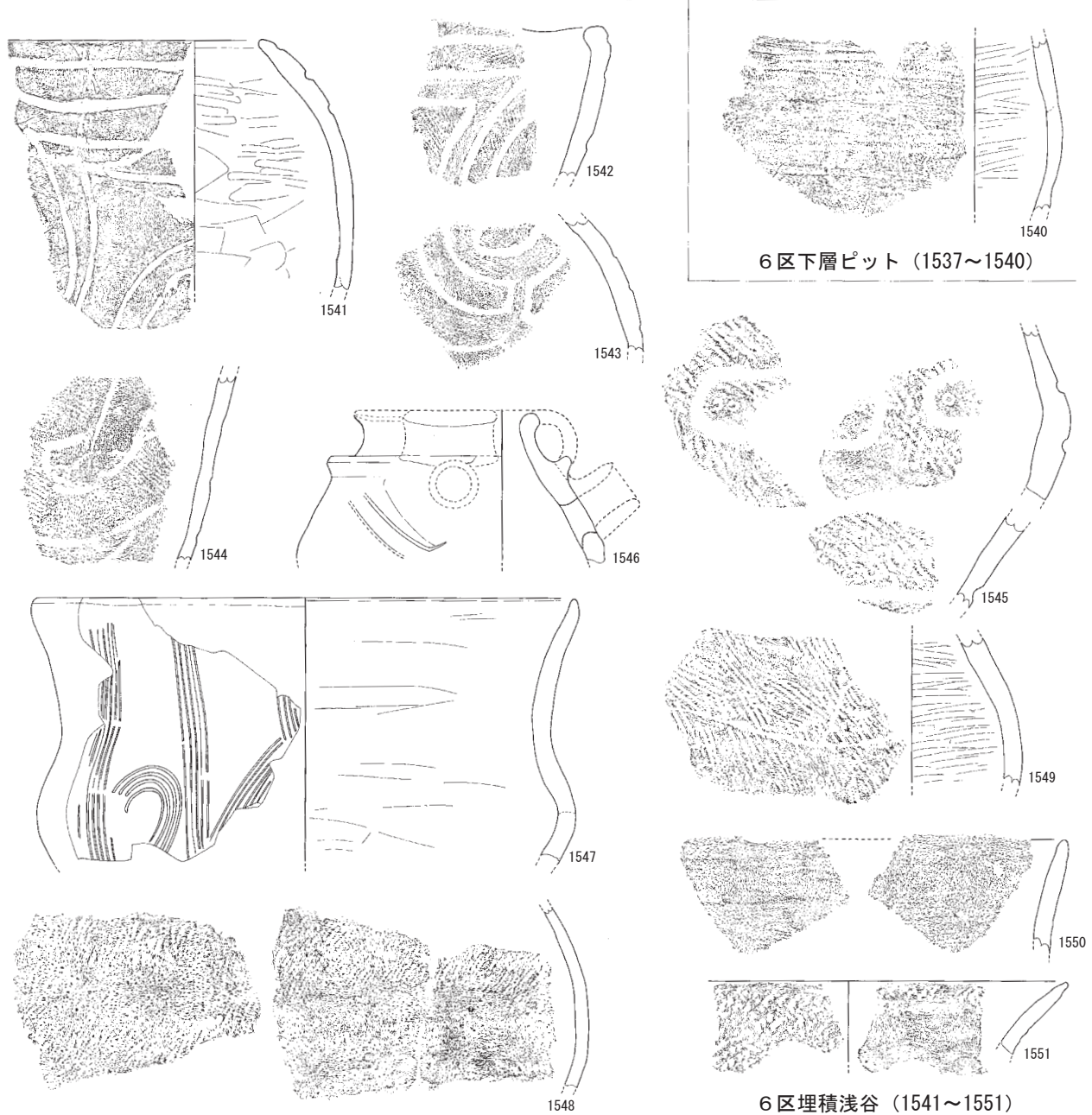
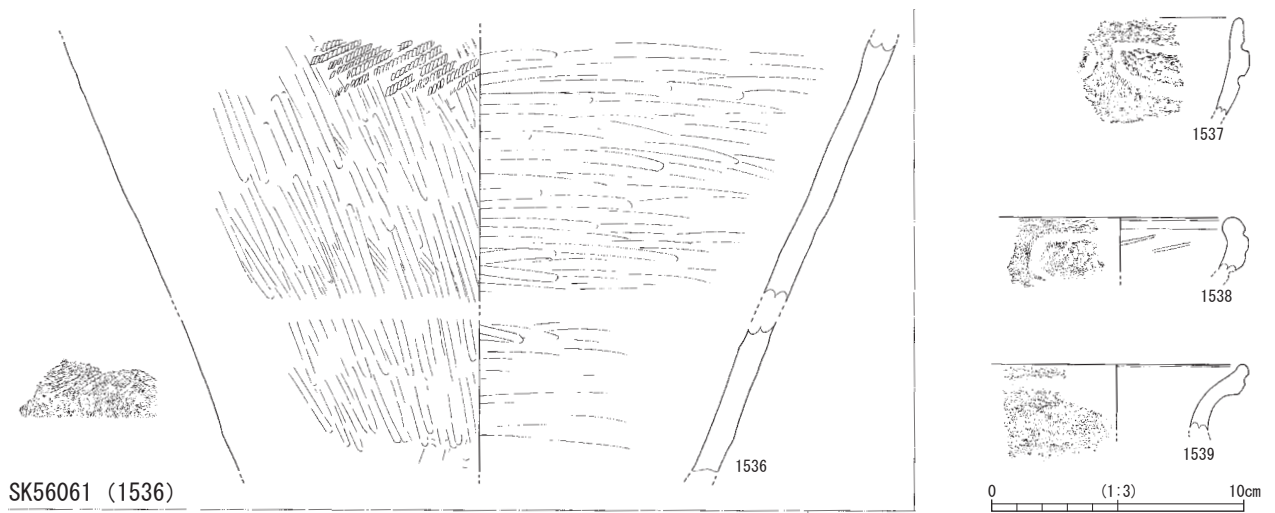
SZ56047 (1517~1526)



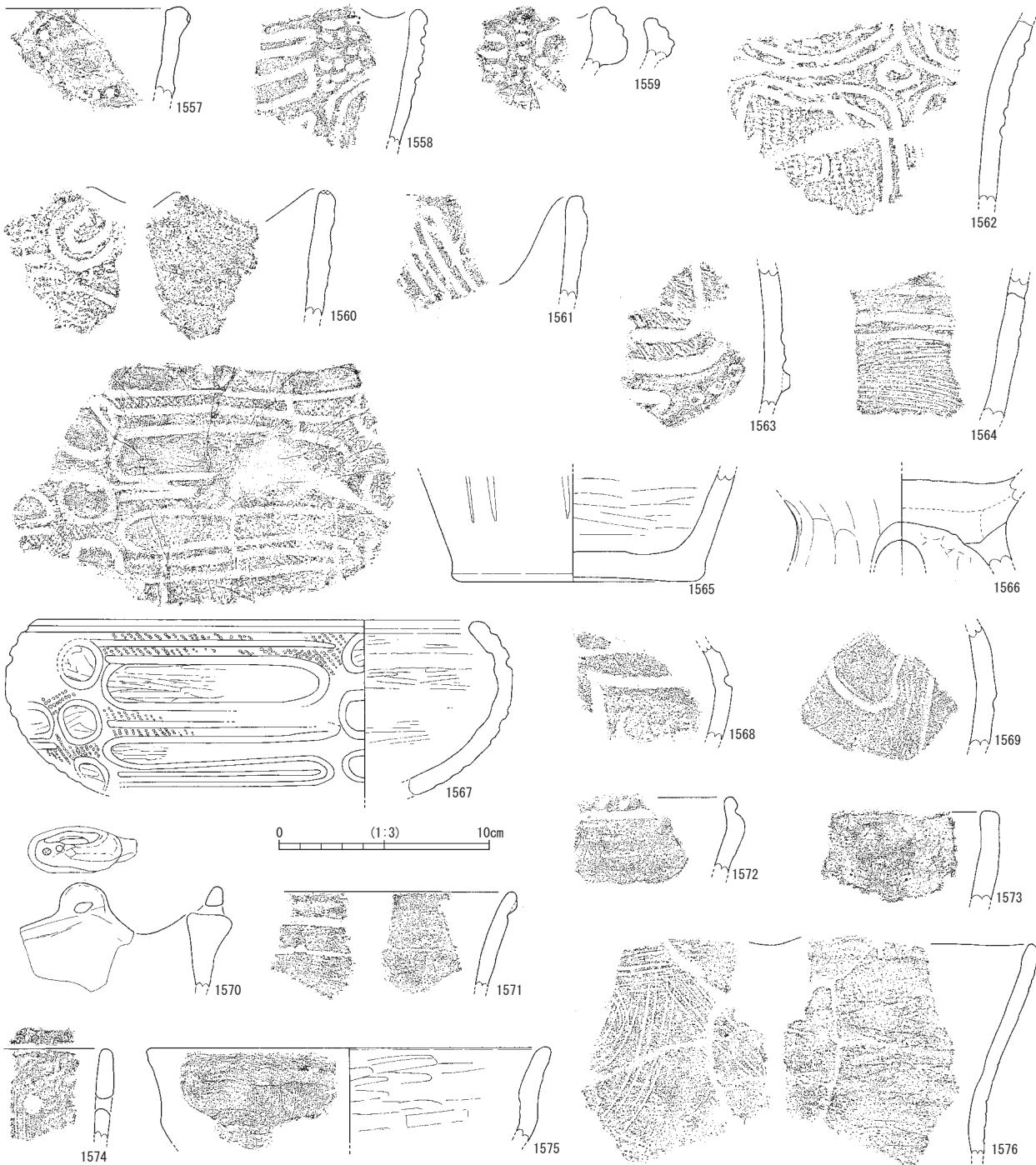
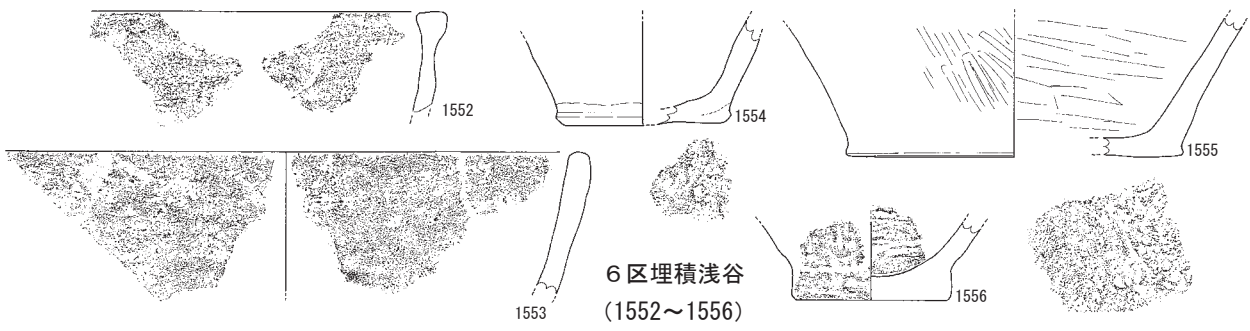
第 137 図 縄文土器 6区③ (1:3)



第 138 図 縄文土器 6区④ (1:3)

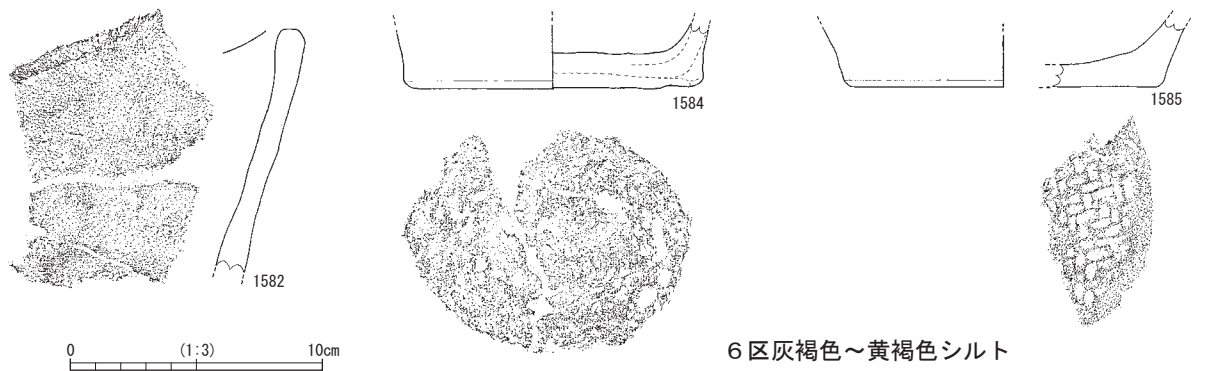
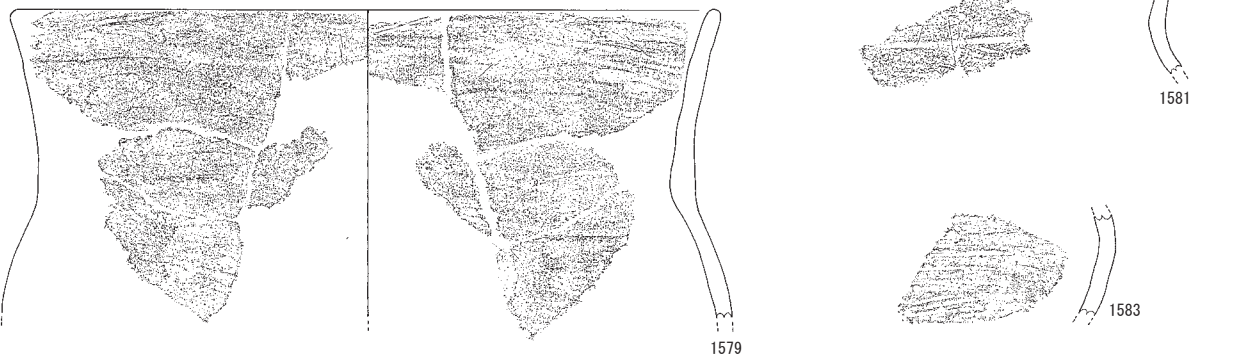
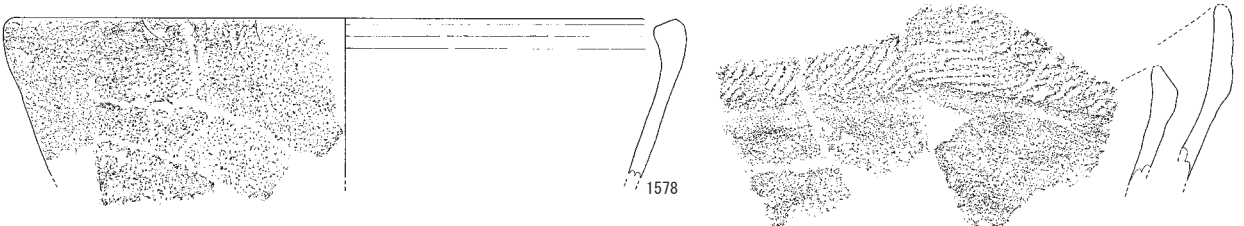
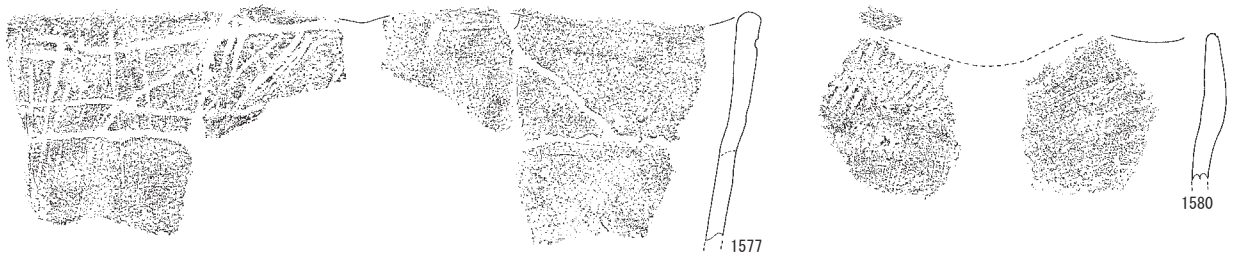


第139図 縄文土器 6区⑤ (1:3)



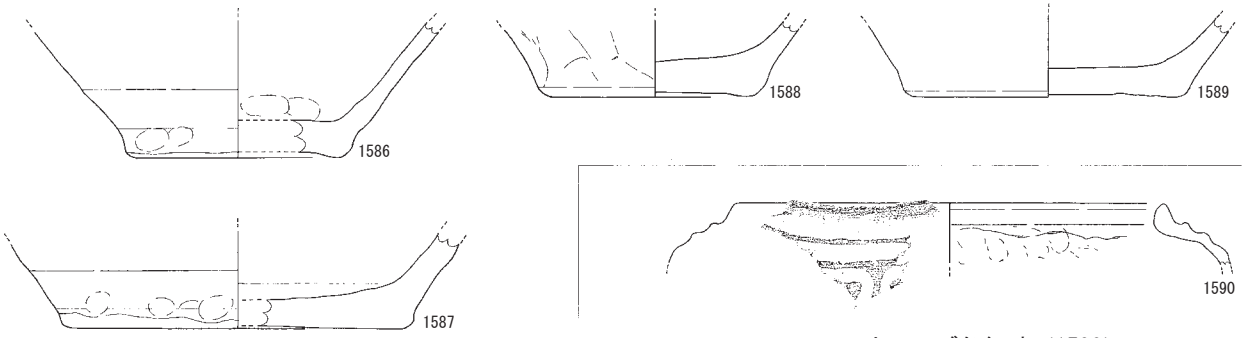
6区灰褐色～黄褐色シルト
(1557~1576)

第140図 縄文土器 6区⑥ (1:3)



0 (1:3) 10cm

6区灰褐色～黄褐色シルト
(1577～1589)

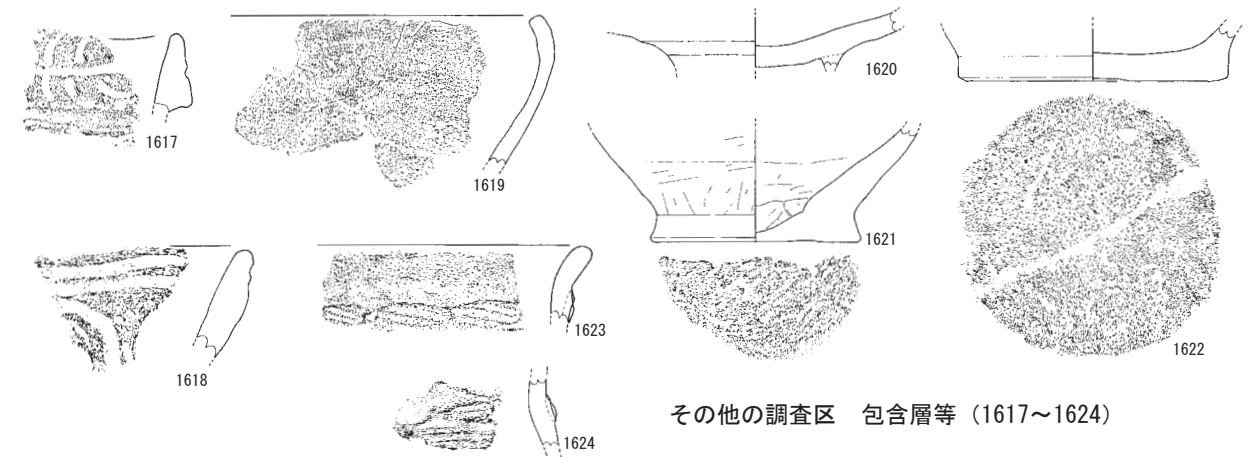


6区灰オリーブ色細砂 (1590)

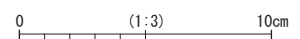
第141図 縄文土器 6区⑦ (1:3)



6区包含層等 (1591~1616)



その他の調査区 包含層等 (1617~1624)



第142図 縄文土器 6区⑧・その他 (1:3)

頸部が若干くびれる器形も含め後期の所産と考えられる。

1575 は浅鉢で、内外に研磨を施している。1579 も内外に粗い研磨を施した深鉢で、後期に属するものであろう。

1580～1581 は口縁外面と体部に縄文LRを施し、明部を無文とする波状口縁深鉢である。後期前葉の縁帯文期に属する土器であらう。

1583 は条痕を施した胴部片である。

1584～1589 は底部で、1584 は繊維状の圧痕、1585 は網代痕が残る。

6区最下層（第141図） 1590 は6区北壁12層の灰オリーブ色細砂から出土した土器である。端部が立ち上がる袋状の口縁部に隆帯を貼付して施文する深鉢で、いわゆる咲畑式⁽¹⁵⁾に属する中期中葉の所産とみられる。

6区包含層等（第142図） 弥生時代の方形周溝墓などの上層遺構面よりも上位の包含層や、弥生時代以降の遺構に混入するかたちで出土した縄文土器を一括した。1591・1592・1594～1596・1604 は深鉢A4もしくはA5に相当しよう。1593 は、端部を欠損するが口縁部片とみられ、垂下させた端部を渦巻状に振じる刺突隆帯を中心に弧状沈線を引く。

1597～1600・1603 は浅鉢もしくは鉢である。このうち1597 は、蓋受状の突帯を口縁内側に巡らす。1599 は、外面に縦条線を施し、口縁内側に肥厚させた内斜面を形成し、そこに3条沈線を描くもので、広瀬土壙40段階の土器の特徴をもつ。1603 は横方向に開口する橋状把手を口縁部に付加する。

1601 と1602 は無文土器の口縁部片で、1601 は口唇と外面に縄文LRを施文する。

1605～1609 は胴部片である。1605～1606 は、崩れてはいるが綾杉状に沈線を引いた土器、1607 は半截竹管状工具を格子状に引いた土器、1608 は縄文施文の土器、1609 は綾杉文と縄文を組み合わせた土器である。

1610 は深鉢脚台で、縄文地に長楕円区画の磨消縄文を施す。1611～1616 は底部である。このうち、1613 は底部外面に圧痕状の痕跡が残る。1615 は底部付近に補修孔をもつ。

④その他の調査区

包含層等（第142図） 1617～1624 は1区・6区以外から出土した縄文土器を一括している。遺構に伴うものはない。

1617～1622 は中期末に属する。1617 は、三角状に肥厚させた口縁外面に葉脈状の沈線を引いたもの、1618 は有文深鉢A3もしくはA4、1619 は外面をケズリ調整した浅鉢C2、1620～1622 は底部で、1620 は粘土紐を円形の高台状に貼り付ける。

1623～1624 は、晩期の突帯文土器で、ともに突帯上に二枚貝条痕による刻目をつける。口縁部片の1623 は、丸く収めた端部からやや下がった位置に突帯を貼付している。1624 は肩部片で、体部と肩部の境界は明瞭に区画されている。（穂積）

（2）石器・土製品

①概要と石器組成

機能が判明する石器はすべて図化し、主要な剥片・碎片を含め88点を示した。いずれも中期末から後期初頭・前葉の石器である。

大半の石器は6区の包含層および埋積浅谷から出土しており、遺構から出土したものは非常に少ない。1区では、6区に比べ数が少ないものの、SZ51046（土器集中）付近から石鏃・磨石・敲石・打欠石錘・切目石錘がひとつおとり出土している。土製品は土器片錘（1652）1点のみである。

本次調査の石器組成を第143図に示す。組成の中心となるのは堅果類等の調理具（磨石・敲石・石皿等）で、全体の4割を占める。漁撈具（石錘）がそれに次いで多い。報告済みの第6次調査（縄文後期初頭中心）でもほぼ同じ傾向がみられるが、より低地に所在する堀町遺跡では、石錘が卓越するという違いがある（VI章で詳述）。

遺跡は標高10m以下の低地にあるが、石器組成は丘陵・段丘上の遺跡と大きく異なるところはないといえよう⁽¹⁶⁾。

なお、1区・6区の遺物包含層は重機で掘削したため、小型の剥片石器の回収率が低くなった点は注意されたい。

石器の利用石材は、打製は主にサヌカイトである。礫石器は砂岩のほか、変塩基性岩や変成岩、花崗岩、花崗閃緑岩がみられ、主に櫛田川下流域で得られる石材が用いられているようであるが、磨製石斧など

変塩基性岩の一部は、宮川流域から搬入されている可能性もある。

以下、調査区ごとにまとめて記述する。

② 1区出土遺物（第144図）

1625～1629はS Z 51046出土。1625は平面五角形の有茎鏃でサヌカイト製。1626は黒色がかった半透明色の剥片で、黒曜石の可能性もある。黒曜石は6次調査で出土している。1627は線刻礫としたが、単に脈石に亀裂が入った自然石かもしれない。

1630～1633はS Z 51046周辺の上層遺構や基盤層の出土遺物である。1632は凹基式石鏃、1633は今回出土した石錘では最小のものである。

③ 6区出土遺物（第144～150図）

1634は下層ピットの底に埋置されていた磨石で、磨面の使用痕が顕著である。

1635～1655は埋積浅谷出土で、打欠石錘が多いが、磨石・石皿類も一定みられる。1635～1637は磨石で、砂岩自然礫の幅広面を使用している。1635は敲石としても使用している。1638も敲石で、棒状礫の側縁に敲打痕がみられる。1639はRFで、サヌカイトの貝殻状剥片の縁辺に微細剥離がみられる。

1640～1651は打欠石錘で、いずれも葉理のある砂岩や変成岩の扁平な礫を素材とし、両短辺を打ち欠いている。1652は土器片錘で、土器を打欠成形したのち、切目を入れる。

1653～1655は石皿で、概ね同形同大のものである。

1656～1692は下層遺物包含層の遺物である。凹基式石鏃1657のほか、石鏃や石錘の未成品1656・

1658、石核・剥片・碎片がある。サヌカイト石核1662は爪状の礫表皮が残る。1663は変塩基性岩の定角式磨製石斧である。1664～1673は石錘で、1664のみ切目、あとは打欠石錘である。1674～1684は磨石・敲石等で、1674・1676・1675・1680のように磨石から敲石に転用されているものが目立つ。敲石の敲打痕はあばた状で、楔形石器製作時の両極打法に伴う筋状の敲打痕はみられない。1680は敲打により欠損し、多面体敲石のようなサイズと形状を呈する。1682は変塩基性岩の棒状礫を用いた石棒かもしれない。1685～1692は石皿・台石等で、扁平な板石を用いるものが多いが、1689は塩基性岩の重厚な角礫である。1690も塩基性岩。

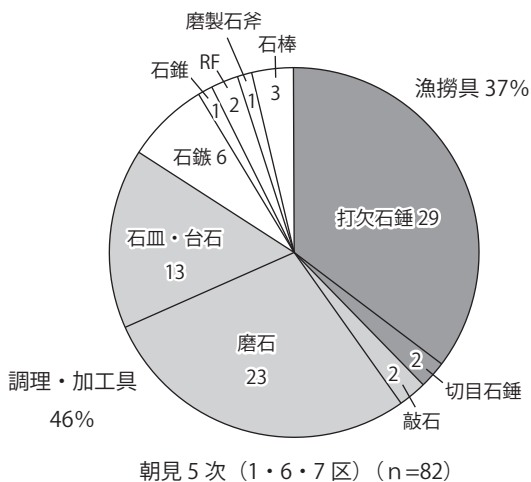
1693～1709は上層遺構混入や廃土のもの。1694はサヌカイト石核で、爪状の礫表皮が残る。1695はRFで、緻密な砂岩の貝殻状剥片を使用している。1706は磨石を打欠石錘に転用する。1709は石棒の未成品か。変塩基性岩の棒状礫を素材とし、礫の稜線部分に敲打痕が集中する。

④ 7区出土遺物（第150図）

1710・1711は上層遺構混入遺物、1712・1713は表土出土で、6区に近い箇所でも得られたものが多い。1710のみ遺跡西側の7-2区で出土したやや大ぶりの有茎鏃である。縄文草創期～早期など、縄文時代でも古相のものかもしれない⁽¹⁷⁾。（櫻井）

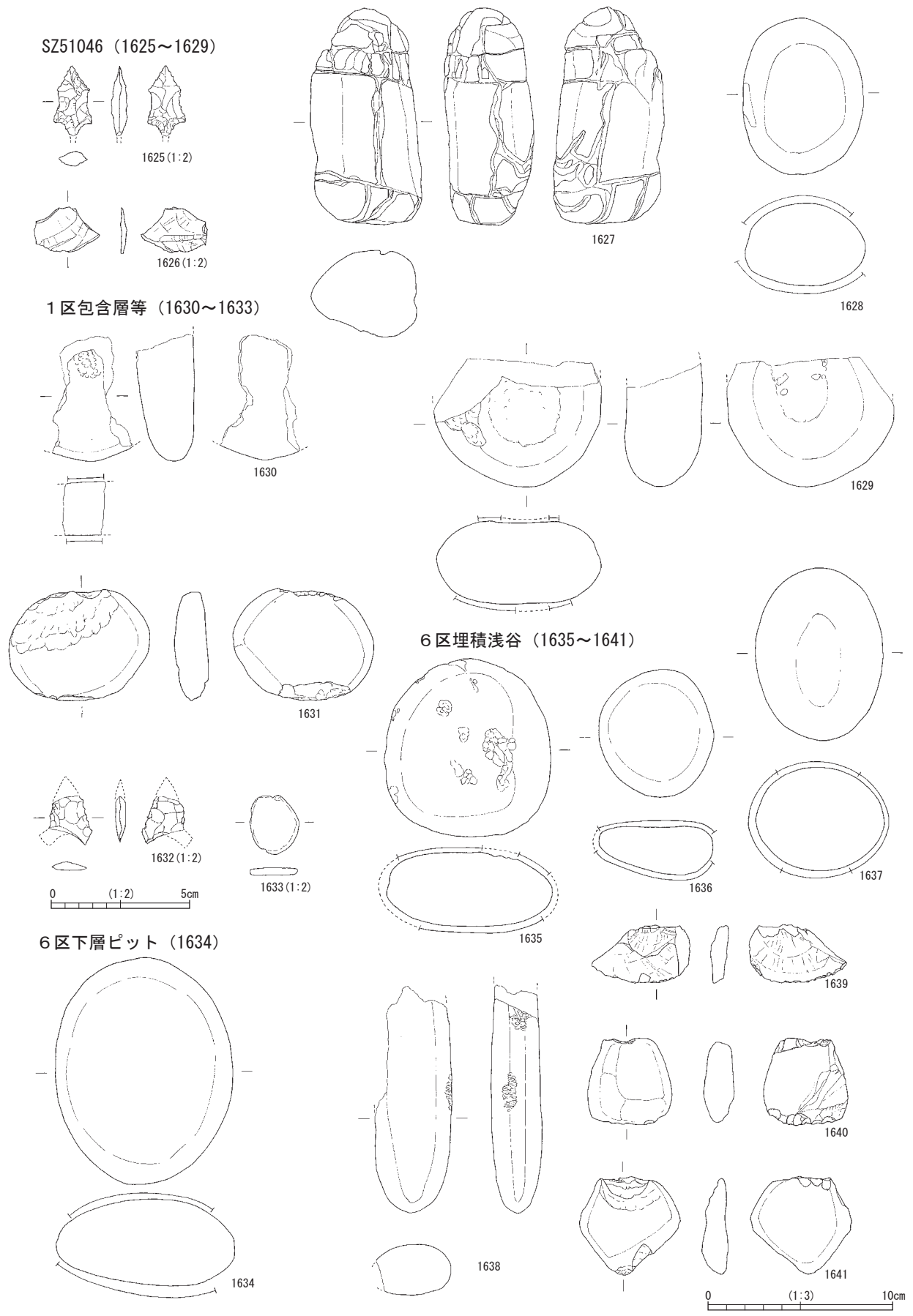
註

- (1) 土器等の分類・編年については以下の文献による。
- 弥生・古墳時代の土師器：三重県埋蔵文化財センター『村竹コノ遺跡』2000年/愛知県埋蔵文化財センター『廻間遺跡』1990年。
 - 古代の土師器：斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告I』2001年。
 - 須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981年/東海土器研究会『須恵器生産の出現から消滅』（第1回東海土器研究会資料）2000年/愛知県『愛知県史』別編窯業1（古代猿投系）、2015年。
 - 灰釉陶器：檜崎彰一「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告』Ⅲ、愛知県教育委員会、1983年/愛知県『愛知県史』別編窯業1（古代猿投系）、2015年。

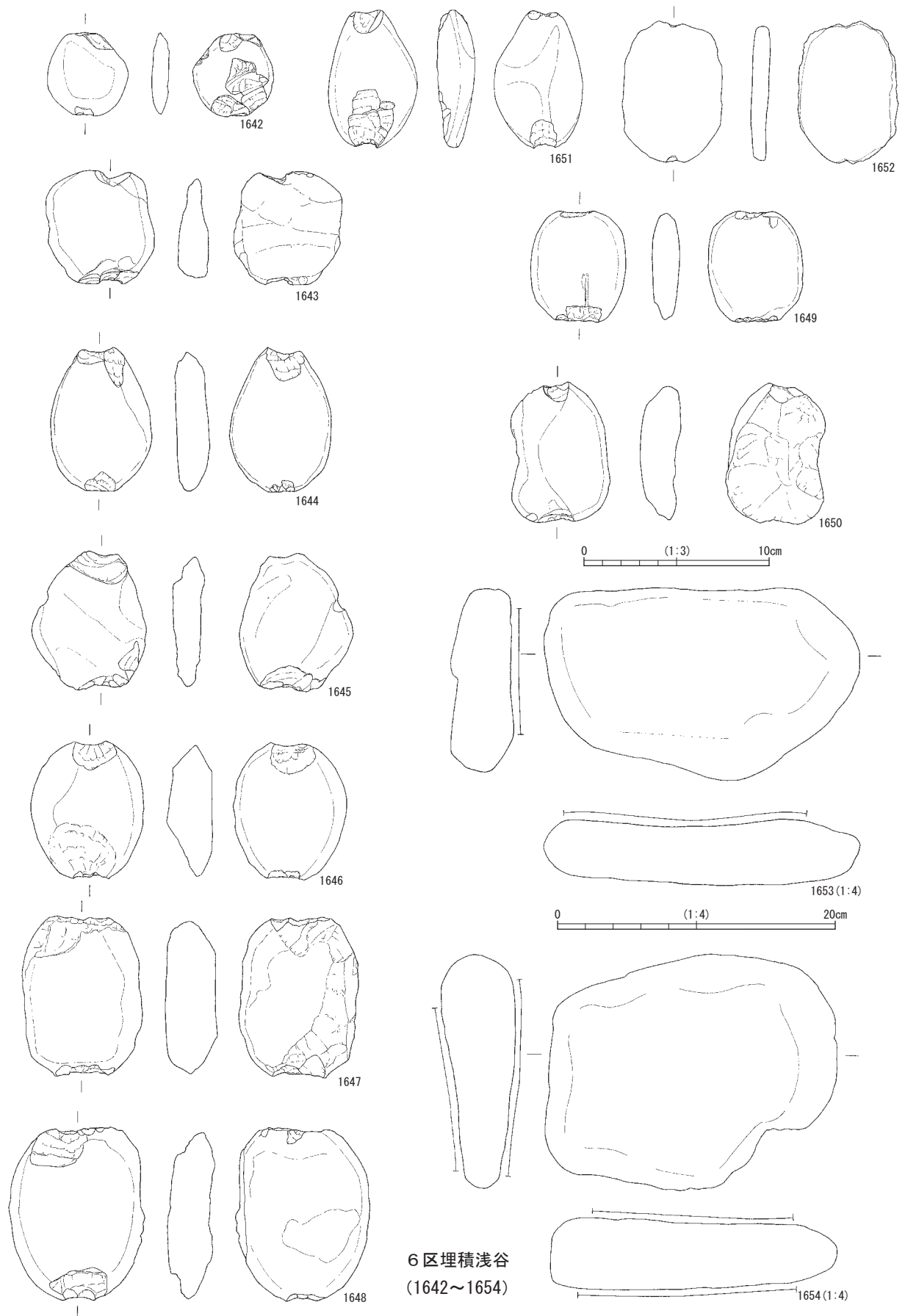


第143図 朝見遺跡（第5次）の石器組成

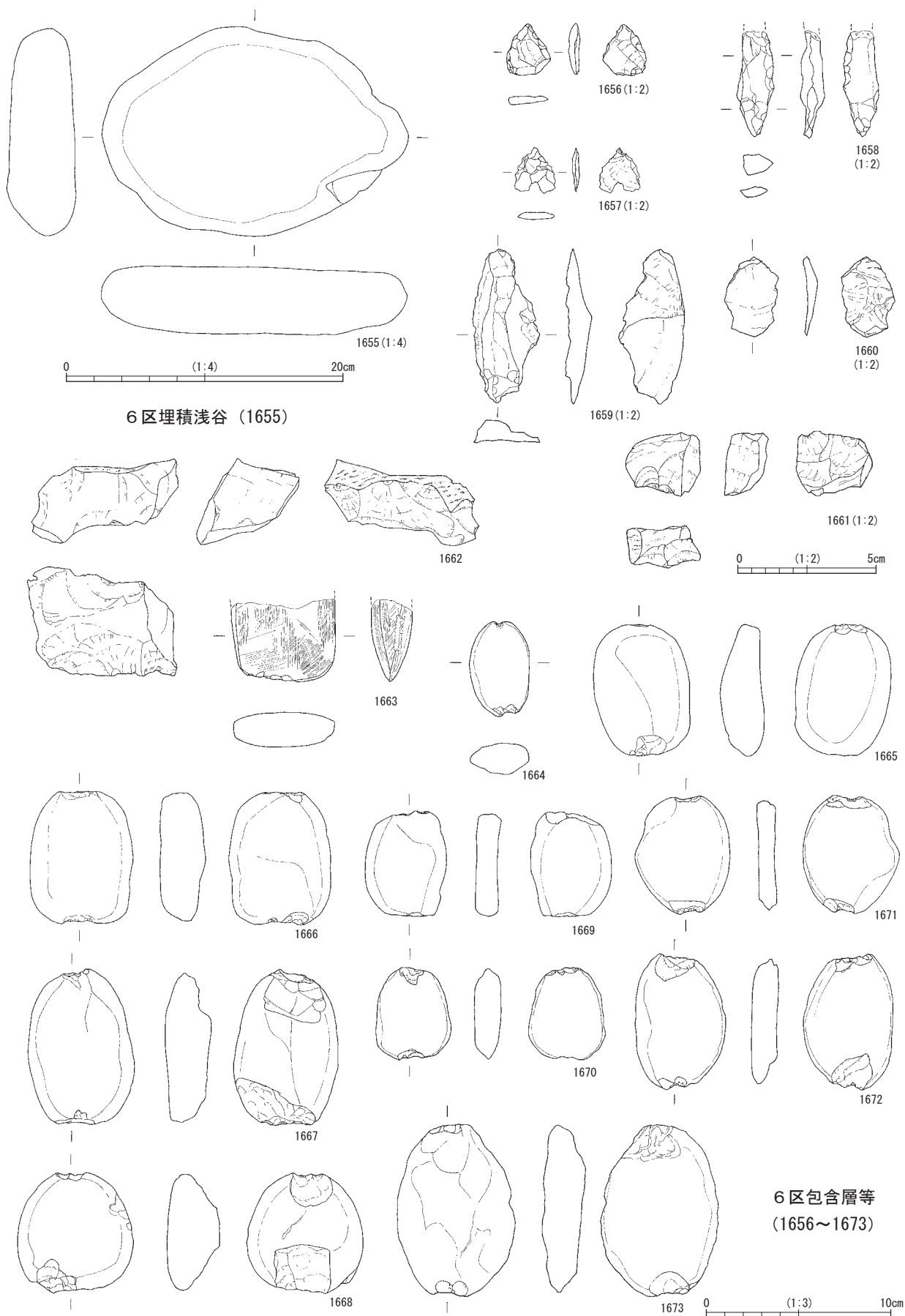
- 中世土器：伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古2、三重県、2008年 / 伊藤裕偉「中世成立期における伊勢の土器相」『嶋抜Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター、2000年。
- 山茶碗：藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』3、三重県埋蔵文化財センター、1994年。
- 古瀬戸～瀬戸美濃大窯：藤澤良祐「瀬戸美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯、2002年 / 「古瀬戸前期・中期・後期様式の編年」『中世瀬戸窯の研究』高志書院、2008年。 / 愛知県『愛知県史』別編窯業2（瀬戸系）、2007年。
- 常滑：愛知県『愛知県史』別編窯業3（中世・近世常滑系）、2012年。
- 貿易陶磁：太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XV』2000年。
- (2) 蛍光X線による成分分析は、三重県総合博物館の協力を得た。測定装置：SEA1200VX ID_1443、測定日は2014年8月21日である。他に、土器566の赤色顔料（ベンガラ）も三重県総合博物館での分析による。
- なお、鏡の特徴や類例について、杉山洋氏（奈良文化財研究所、当時）、内川隆志氏（國學院大學博物館）の教示を得た。
- (3) 奈良文化財研究所『日光二荒山神社中宮祠宝物館所蔵男体山山頂遺跡出土鏡の研究』2014年。
- (4) 杉山洋「今様の鏡と古躰の鏡－出土八稜鏡より見た平安時代の鏡－」『MUSEUM』481、東京国立博物館、1993年。
- (5) 中森成行「和鏡」『三重県史』資料編考古2、三重県、2008年。
- (6) 松阪市『松阪市史』第二巻資料編考古、1978年 / 三重県『三重県史』資料編考古2、2008年。
- (7) 動物遺体について、丸山真史氏（東海大学）の教示を得た。
- (8) 泉拓良・家根祥多「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ－北白川追分町縄文遺跡の調査－』京都大学埋蔵文化財研究センター、1985年。
- (9) 千葉豊「緑帯土器の成立と展開」『史林』76巻6号、史学研究会、1989年。
- (10) 家根祥多「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』雄山閣、1981年。
- (11) 額綱茂・高橋健太郎「中富式・神明式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション、2008年。
- (12) 石田由紀子「中津・福田Ⅱ式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション、2008年。
- (13) 泉拓良「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』雄山閣、1981年。
- (14) 北白川上層式と堀之内式の併行関係の概要は、前掲註13文献に指摘がある。
- (15) 泉拓良「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観 中期Ⅱ』小学館、1988年。
- (16) 関西縄文文化研究会『縄文時代の石器Ⅱ－関西の縄文前・中期』（関西縄文文化研究会資料）2003年。
- (17) 田部剛士氏（鈴鹿市文化スポーツ部文化財課）の教示による。



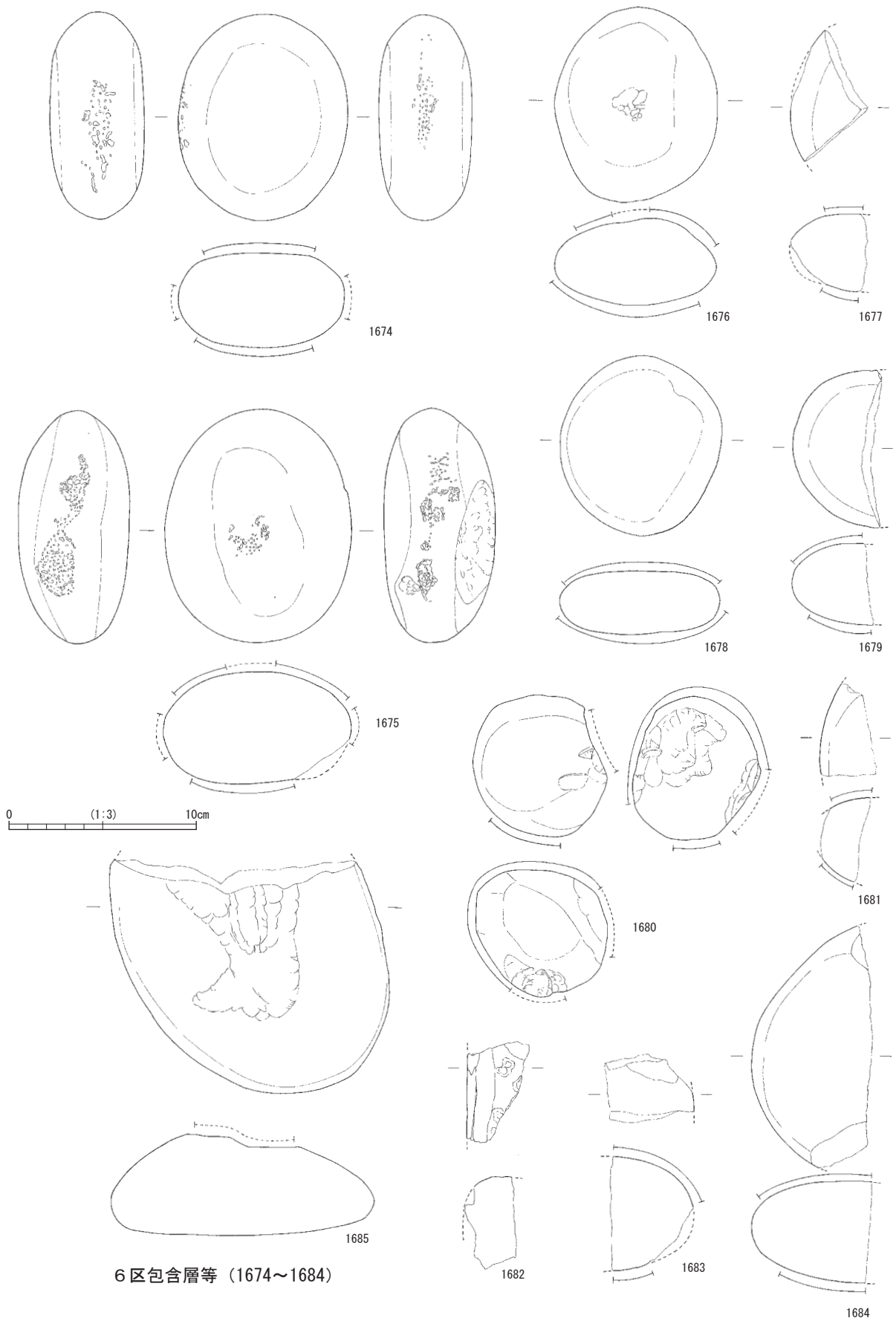
第144図 石器 1区・6区① (1:3、剥片石器 1:2、断面周囲の破線は敲打、実線は擦痕)



第145図 石器 6区② (1:3、石皿1:4、1652は土製品)

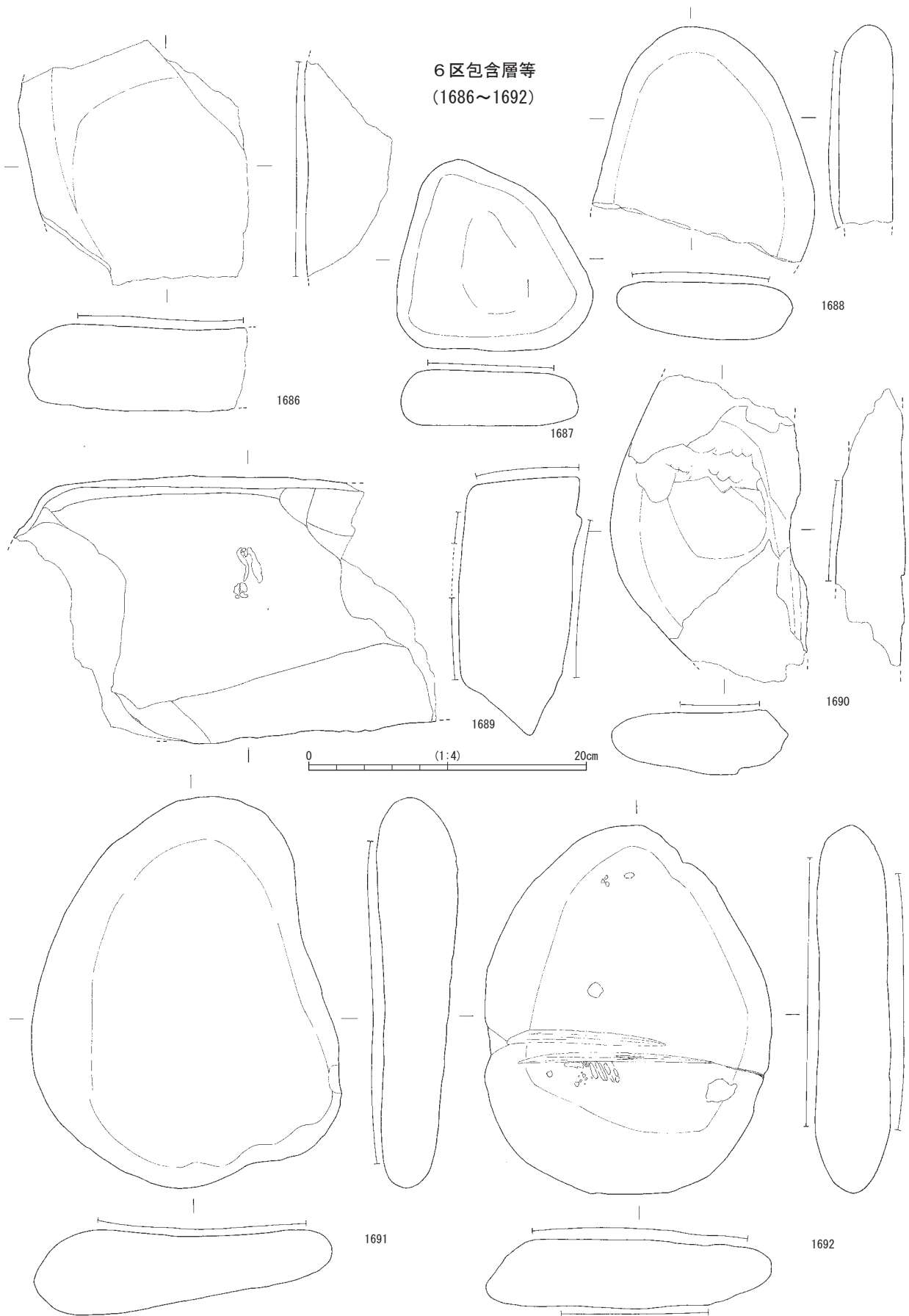


第146图 石器 6区③ (1:3、剥片石器1:2、石皿1:4)

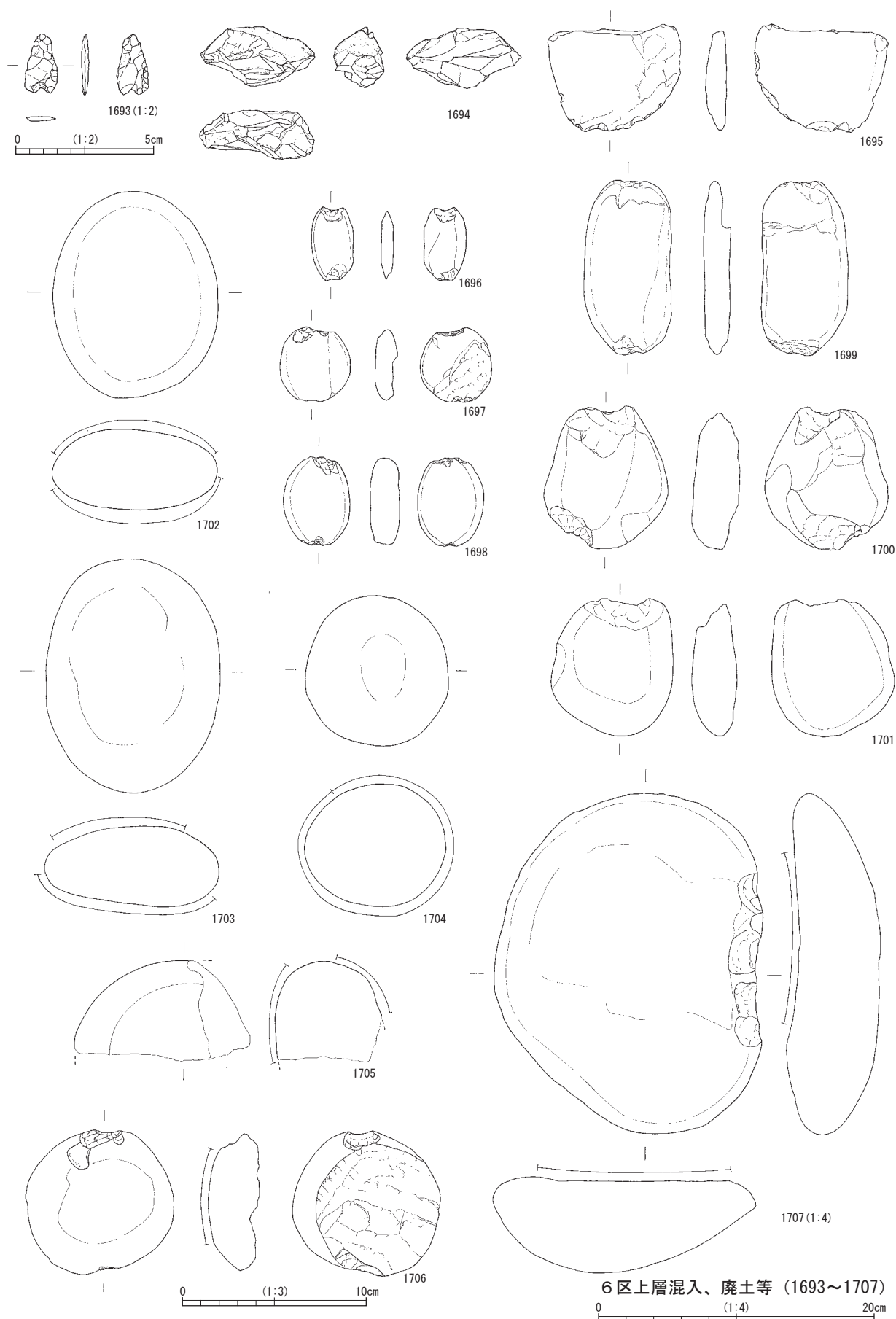


第147図 石器 6区④ (1:3)

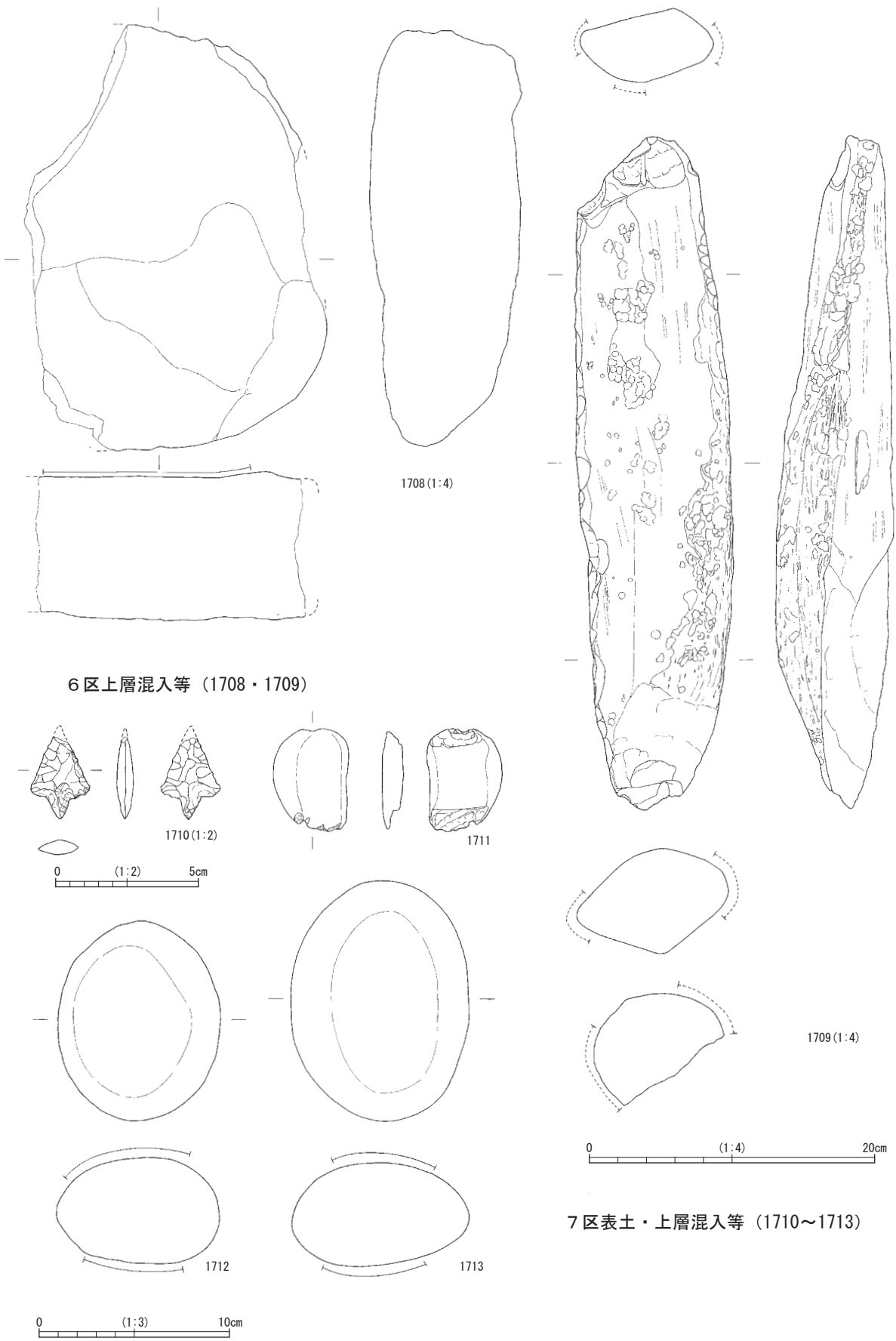
6区包含層等
(1686~1692)



第148図 石器 6区⑤ (1:4)



第149図 石器 6区⑥ (1:3、剥片石器 1:2、石皿 1:4)



第150図 石器 6区⑦・7区 (1:3、剥片石器1:2、石皿・石棒1:4)

第4表 遺物観察表

①土器・陶磁器等

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項	
								口径	底径	器高				
1	004-03	土師器	杯	1	チ-K13・14	SD51001上層	2/12	16.0	-	4.0	内:コナテ、螺旋状暗文 外:ズリ、コナテ	橙		
2	002-03	土師器	杯	1	チ-H14・15	SD51001上層	3/12	14.8	-	3.8	内:テ、コナテ 外:サエ、テ、コナテ	橙		
3	001-03	土師器	甕	1	チ-L14・15	SD51001上層	口縁~胴部 2/12	16.0	-	12.6	内:ズリ、ゆ後工器具テ、コナテ 外:ウ、コナテ	にぶい 橙	外面にへ描き	
4	001-01	土師器	甕	1	チ-H14・15	SD51001上層	口縁~胴部 3/12	16.0	-	8.0	内:ズリ、工器具テ、コナテ 外:ウ、コナテ	にぶい 橙		
5	005-01	土師器	甕	1	チ-G14・15	SD51001	口縁~胴部 3/12	19.4	-	5.8	内:ウ、コナテ 外:ウ、コナテ	浅黄橙		
6	001-02	土師器	甕	1	H14	SD51001上層	口縁部3/12	24.0	-	5.0	内:工器具テ、コナテ 外:ウ、コナテ	にぶい 黄橙		
7	003-04	須恵器	甕	1	チ-J14・15	SD51001上層	口縁部2/12	38.8	-	6.8	内:コナテ 外:コナテ、突帯、沈線、波状文	灰		
8	003-02	須恵器	瓶	1		SD51001	口縁~頸部 11/12	8.3	-	5.8	内:コナテ 外:コナテ、沈線	灰白		
9	003-01	土師器	杯?	1	チ-H14・15	SD51001上層	底部片	-	-	-	外:記号状の線刻	にぶい 橙		
10	001-04	土師器	高杯	1	1-4北	SD51001下層	脚部6/12	-	9.7	6.0	内:ズリ、コナテ 外:ウ、コナテ	橙		
11	004-05	土師器	甕	1	チ-G14	SD51001	把手部片	-	-	-	内:工器具テ 外:ウ、へ描き	浅黄橙		
12	002-02	須恵器	提瓶	1	チ-G14	SD51001上層	胴部片	-	-	-	内:コナテ 外:コナテ、刺突、円形浮文	灰白	フラスコ瓶か	
13	003-03	瓦	平瓦	1	チ-H14	SD51001上層	1/6	-	-	厚2.5	凹面:布目 凸面:縄叩き	灰白		
14	002-01	瓦	平瓦	1	チ-H14	SD51001上層	1/6	-	-	厚1.8	凹面:布目 凸面:縄叩き	灰白		
15	008-06	弥生土器	高杯	1	チ-J8	SD51004	杯部片	-	-	-	内:シキ、コナテ 外:シキ、コナテ	にぶい 黄橙		
16	008-07	土師器	高杯	1	チ-K9	SD51004	脚部~底部 5/12	-	9.4	6.0	内:コナテ 外:テ、コナテ	橙		
17	008-08	須恵器	杯蓋	1	チ-K9	SD51005	3/12	17.2	-	3.0	内:コナテ 外:コナテ、ウコナテ	灰白		
18	009-04	土師器	杯	1	チ-I13	SD51005	2/12	14.8	-	2.4	内:シキ、コナテ 外:サエ、テ、コナテ	橙		
19	009-05	土師器	杯	1	チ-J9	SD51005	4/12	13.8	-	3.2	内:テ、コナテ 外:サエ、テ、コナテ	橙		
20	009-03	土師器	杯	1	チ-J10	SD51005	4/12	14.4	-	2.8	内:テ、コナテ 外:サエ、テ、コナテ	橙		
21	010-02	土師器	杯	1	チ-H13	SD51005	1/12	13.8	-	3.0	内:テ、コナテ 外:テ、コナテ	橙		
22	010-01	土師器	杯	1	チ-G13	SD51005	4/12	14.7	-	4.1	内:テ、コナテ 外:サエ、テ、コナテ	橙		
23	009-02	土師器	甕	1	チ-J10	SD51005	口縁~胴部 2/12	17.7	-	7.8	内:テ、コナテ 外:ウ、コナテ	にぶい 橙		
24	010-03	土師器	甕	1	チ-I13	SD51005	口縁~胴部 2/12	23.1	-	14.4	内:ウ、コナテ 外:ウ、コナテ	にぶい 黄橙		
25	009-01	土師器	甕	1	チ-J9	SD51005	口縁~頸部 3/12	24.0	-	5.6	内:工器具テ、コナテ 外:ウ、コナテ	にぶい 橙		
26	004-01	土師器	杯	1	SD51002 北端断削下層	2/12	15.4	-	4.0	4.0	内:テ、コナテ、放射状暗文 外:ズリ、テ、コナテ	橙		
27	008-03	土師器	杯	1	SD51002	2/12	13.0	-	2.4	2.4	内:テ、コナテ 外:サエ、テ、コナテ	橙		
28	008-04	土師器	杯	1	SD51002	小片	-	-	2.2	2.2	内:コナテ 外:サエ、テ、コナテ	橙		
29	008-02	山茶碗	椀	1	SD51002	底部4/12	-	6.8	2.6	2.6	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	灰白		
30	005-04	山茶碗	椀	1	SD51002下層	底部5/12	-	7.4	2.0	2.0	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	灰白		
31	008-01	山茶碗	椀	1	チ-EF13	SD51002	底部9/12	-	7.5	2.9	2.9	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕、シテ痕	灰白	
32	008-05	土師器	甕	1	SD51002	口縁~胴部 2/12	15.0	-	4.4	4.4	内:工器具テ、ウ、コナテ 外:ウ、コナテ	にぶい 黄橙	外面に煤付着	
33	005-03	陶器	瓶	1	SD51002下層	胴部~底部 1/12	-	15.6	9.4	9.4	内:コナテ 外:コナテ	灰白		
34	007-01	瓦	軒平瓦	1	SD51002 北端断削下層	小片	-	-	厚4.2	厚4.2	凹面:布目、ズリ 凸面:ズリ、テ	橙		
35	006-01	瓦	平瓦	1	SD51002 北端断削	1/4	-	-	厚2.3	厚2.3	凹面:布目、ズリ 凸面:縄叩き、テ、ズリ	橙		
36	011-03	土師器	高杯	1	チ-K8	SD51007	脚部片	-	-	-	内:テ、コナテ 外:シキ、コナテ	明赤褐		
37	013-01	土師器	甕	1	チ-I14	SD51008	口縁~胴部 1/12	17.2	-	12.6	12.6	内:ゆ後ズリ、コナテ 外:ウ、コナテ	橙	外面に煤付着
38	011-04	土師器	甕	1	チ-H14	SD51008	口縁部片	-	-	-	内:ウ、コナテ 外:工器具テ、コナテ	にぶい 黄橙		
39	013-02	土師器	杯	1	チ-K10	SD51010	3/12	10.8	-	4.1	4.1	内:テ、コナテ 外:サエ、テ、コナテ	にぶい 橙	
40	012-01	土師器	杯	1	チ-J11	SD51011上層	2/12	16.8	-	6.3	6.3	内:コナテ、線刻、放射状暗文 外:ズリ、コナテ	橙	
41	013-03	土師器	杯	1	チ-J11	SD51011上層	口縁部2/12	17.8	-	3.4	3.4	内:コナテ、放射状暗文 外:ズリ、コナテ、シキ	橙	
42	012-03	土師器	杯	1	チ-J11	SD51011上層	7/12	12.1	-	3.5	3.5	内:テ、コナテ、線刻 外:サエ、テ、コナテ	浅黄橙	
43	012-02	土師器	杯	1	チ-K11	SD51011上層	5/12	11.8	-	3.2	3.2	内:摩滅 外:サエ、工器具テ、コナテ	橙	
44	013-04	土師器	杯	1	チ-K11	SD51011上層	3/12	12.8	-	4.1	4.1	内:テ、コナテ 外:サエ、テ、コナテ	灰白	
45	011-02	土師器	甕	1	チ-K11	SD51011下層	口縁部3/12	19.6	-	4.6	4.6	内:ウ、コナテ 外:ウ、コナテ	浅黄橙	
46	011-01	土師器	甕	1	チ-K11	SD51011上層	口縁部3/12	23.6	-	8.0	8.0	内:ウ、コナテ 外:ウ、コナテ	浅黄橙	
47	015-01	土師器	甕	1	チ-K11	SD51011上層	8/12	14.5	-	16.7	16.7	内:ズリ、工器具テ、コナテ 外:ウ、コナテ	橙	底部外面にへ描き
48	014-01	土師器	鍋	1	チ-K11	SD51011上層	8/12	37.8	-	20.2	20.2	内:ズリ、工器具テ、コナテ 外:ウ、コナテ	浅黄橙	把手付
49	016-07	土師器	甕	1	チ-K13	SD51012	1/12	15.5	-	4.0	4.0	内:工器具テ、ウ、コナテ 外:ウ、コナテ	浅黄橙	
50	016-08	土師器	杯	1	チ-J12	SD51013	3/12	12.5	-	3.4	3.4	内:テ、コナテ 外:サエ、テ、コナテ	浅黄色	
51	019-06	土師器	杯	1	チ-H15	SZ51023	1/12	12.0	-	4.5	4.5	内:テ、コナテ 外:テ、コナテ	浅黄	
52	019-03	土師器	杯	1	チ-H15	SZ51023	1/12	13.8	-	3.5	3.5	内:テ、コナテ 外:テ、コナテ	浅黄	
53	019-04	土師器	台付鉢	1	チ-H15	SZ51023	口縁部1/12	12.6	-	3.2	3.2	内:工器具テ、コナテ 外:コナテ、塵状文	橙	
54	020-02	土師器	甕	1	チ-H15	SZ51023	口縁部1/12	15.8	-	4.2	4.2	内:テ、コナテ 外:ウ、コナテ	にぶい 黄橙	
55	020-07	須恵器	瓶	1	チ-G14	SD51022	胴部片	-	-	-	内:コナテ 外:コナテ、刺突、円形浮文	灰白		
57	016-02	弥生土器	高杯	1	チ-H15	SX51017 No2	脚部12/12	-	-	12.6	12.6	内:テ 外:シキ、櫛描直線文	にぶい 橙	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
58	016-03	土師器	高杯	1	チ-J16	SX51017	杯部片	-	-	-	内:摩滅 外:滲き	にぶい 橙	
59	016-04	土師器	高杯	1	チ-J16	SX51017	脚部12/12	-	15.7	9.3	内:行'、ヨナテ' 外:ハ、シキ、ヨナテ'、櫛描直線文	にぶい 橙	透孔3カ所
60	016-01	土師器	台付甕	1	ネ-F13	SX51017	口縁部1/12	16.0	-	1.8	内:ヨナテ' 外:ヨナテ'	にぶい 黄橙	
62	020-03	土師器	杯	1	チ-G13	SD51020	1/12	15.4	-	2.6	内:行'、ヨナテ' 外:行'、ヨナテ'	橙	
63	020-04	土師器	高杯	1	チ-H13	SD51020	杯部1/12	15.9	-	5.6	内:行'、ヨナテ' 外:行'、ヨナテ'	橙	楕形
64	020-06	土師器	高杯	1	チ-G14	SD51020	脚部片	-	-	-	内:ハ 外:櫛描直線文	橙	透孔4方
65	020-05	土師器	高杯	1	チ-H13	SD51020	脚部6/12	-	9.3	5.4	内:行'、ヨナテ' 外:工具行'、ヨナテ'	橙	
66	019-05	弥生土器	壺	1	チ-G13	SD51020	口縁部1/12	11.8	-	4.6	内:行'、ヨナテ' 外:行'、回線文	にぶい 橙	
67	018-04	土師器	甕	1	チ-G13	SD51020	口縁部片	-	-	-	内面:工具行'、ヨナテ' 外面:ハ、ヨナテ'	橙	
68	019-02	弥生土器	甕	1	チ-H13	SD51020	口縁部1/12	13.8	-	2.4	内:行'、ヨナテ' 外:櫛描直線文、ヨナテ'、刺突	灰白	
69	019-01	土師器	甕	1	チ-H13	SD51020	口縁部脚部 1/12	13.6	-	11.2	内:工具行'、ヨナテ' 外:ハ、ヨナテ'	明赤褐	
70	020-01	土師器	甕	1	チ-G13	SD51020	口縁部1/12	23.8	-	5.0	内:ハ、ヨナテ' 外:ハ、ヨナテ'	浅黄橙	
71	017-01	土師器	台付甕	1	チ-I11	SD51020	4/12	16.8	-	29.2	内:行'、工具行'、ヨナテ' 外:ハ、ヨナテ'、ハ、ヨナテ'	にぶい 黄橙	外面に煤付着
72	019-07	土師器	壺	1	チ-H13	SD51020	肩部片	-	-	-	内:ハ 外:ハ、櫛描文、刺突	にぶい 黄褐	
73	018-03	土師器	高杯	1	チ-H15	SD51024	脚部片	-	-	-	内:行' 外:ハ後シキ、櫛描直線文	橙	
74	025-02	土師器	壺	1	ス-M11	SE51036	口縁部2/12	13.8	-	5.8	内:ヨナテ'、シキ 外:ヨナテ'、シキ	浅黄橙	
75	025-04	弥生土器	壺	1	ス-M11	SE51036	底部8/12	-	4.6	-	内:シキ 外:シキ	浅黄橙	
76	025-03	弥生土器	甕	1	ス-M11	SE51036	胴部片	-	-	-	内:ハ 外:ハ、ハ、ハ	浅黄橙	
77	022-04	土師器	皿	1	チ-F12・13	SE51028掘方	小片	-	-	2.9	内:シキ、ヨナテ'、螺旋状暗文 外:工具行'、ヨナテ'	にぶい 橙	
78	021-05	土師器	杯	1	チ-F13	SE51028	小片	-	-	-	内:行'、ヨナテ'、螺旋状暗文 外:ハ、ハ、ハ、ヨナテ'	橙	
79	022-03	土師器	杯	1	チ-F12・13	SE51028 井戸枠内	口縁部2/12	13.2	-	3.0	内:行'、ヨナテ' 外:ヨナテ'、ハ、ハ	にぶい 橙	内面に煤付着
80	021-02	土師器	杯	1	チ-F12・13	SE51028	3/12	14.0	-	3.3	内:行'、ヨナテ' 外:ハ、ハ、ハ	灰白	
81	018-02	土師器	杯	1	チ-F13	SE51028	2/12	15.5	-	3.4	内:ヨナテ'、放射状暗文 外:ハ、ハ、ハ	橙	
82	022-05	土師器	杯	1	チ-F13	SE51028上層	小片	-	-	-	内:ヨナテ'、放射状・螺旋状暗文 外:ヨナテ'	にぶい 橙	
83	023-01	土師器	皿	1	チ-F12・13	SE51028上層	1/12	13.0	-	1.9	内:行'、ヨナテ'、線刻 外:ハ、ハ、ハ、ヨナテ'	にぶい 橙	
84	021-04	土師器	皿	1	チ-F12・13	SE51028	1/12	19.6	-	2.3	内:ヨナテ' 外:ハ、ハ、ハ	橙	
85	021-01	灰釉陶器	碗	1	チ-F13	SE51028	2/12	15.8	7.0	5.8	内:ハ、ハ、ハ 外:ハ、ハ、ハ、灰釉ハケ塗り	灰白	
86	022-01	土師器	甕	1	チ-F12・13	SE51028 井戸枠内	口縁部脚部 2/12	16.4	-	15.4	内:ハ、ハ、ハ、ヨナテ' 外:ハ、ハ、ハ、ヨナテ'	にぶい 黄褐	
87	022-02	土師器	甕	1	チ-F12・13	SE51028 井戸枠内	口縁部脚部 3/12	14.6	-	13.4	内:ハ、ハ、ハ、ヨナテ' 外:ハ、ハ、ハ、ヨナテ'	にぶい 黄褐	
88	018-01	土師器	甕	1	チ-F12・13	SE51028	口縁部脚部 2/12	24.8	-	12.0	内:ハ、ハ、ハ 外:ハ、ハ、ハ	浅黄橙	
89	276-02	土師器	甕	1		SE51028	口縁部1/12	18.8	-	6.3	内:ハ、ハ、ハ 外:ハ、ハ、ハ	橙	
90	021-03	土師器	甕	1	チ-F13	SE51028	口縁部2/12	19.8	-	4.0	内:工具行'、ヨナテ' 外:ハ、ハ、ハ	浅黄	
91	029-05	土師器	杯	1	チ-B12	SD51043	2/12	11.6	-	3.2	内:行'、ヨナテ' 外:ヨナテ'	浅黄橙	
92	030-03	山茶碗	碗	1	チ-B12	SD51043	底部12/12	-	6.7	2.0	内:ハ、ハ、ハ、自然釉 外:ハ、ハ、ハ	灰白	
93	029-06	山茶碗	碗	1	チ-B12	SD51043	底部3/12	-	6.2	2.6	内:ハ、ハ、ハ、輪碾痕 外:ハ、ハ、ハ	灰白	
94	030-05	須恵器	杯	1	チ-A12	SD51043	2/12	10.8	-	3.2	内:ハ、ハ、ハ 外:ハ、ハ、ハ、ハ、ハ切り	灰白	
95	030-02	青磁 (中国)	碗	1	チ-B12	SD51043	底部8/12	-	5.3	2.4	内:施釉、片彫り花文 外:施釉、削出高台	オリーブ 灰	
96	030-04	須恵器	杯	1	チ-A12	SD51043	底部1/12	-	12.7	3.2	内:ハ、ハ、ハ 外:ハ、ハ、ハ、底部ハ切り	灰白	
97	029-04	土師器	甕	1	チ-A12	SD51043断割	口縁部片	-	-	-	内:ハ、ハ、ハ 外:ハ、ハ、ハ	にぶい 橙	
99	024-03	土師器	杯	1	ス-L11	SX51041	1/12	11.9	-	1.9	内:行'、ヨナテ' 外:行'、ヨナテ'	浅黄橙	
100	024-01	土師器	壺	1	チ-H13	SX51029 No1	頸部 12/12	-	-	-	内:ハ、ハ、ハ、ハ、ハ 外:ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、刺突	にぶい 橙	
101	023-02	土師器	甕	1	チ-F13	SX51029	口縁部脚部 3/12	14.2	-	5.0	内:ハ、ハ、ハ、ヨナテ' 外:ハ、ハ、ハ、ヨナテ'	灰黄褐	
102	004-04	土師器	甕	1	チ-G14	SD51045 (SD51001分岐)	口縁部2/12	17.0	-	3.4	内:ハ、ハ、ハ 外:ハ、ハ、ハ	にぶい 橙	
103	005-02	土師器	甕	1	チ-G14	SD51045 (SD51001分岐)	口縁部2/12	12.6	-	4.2	内:ハ、ハ、ハ 外:ハ、ハ、ハ	浅黄橙	
104	004-02	土師器	皿	1	チ-G14	SD51045 (SD51001分岐)	2/12	20.0	-	2.2	内:行'、ヨナテ'、放射状暗文 外:ハ、ハ、ハ、ハ、ハ	橙	
105	029-01	土師器	甕	1	チ-A12	SD51044	口縁部脚部 6/12	19.8	-	6.4	内:ハ、ハ、ハ 外:ハ、ハ、ハ	浅黄橙	
106	029-02	土師器	甕	1	チ-A12	SD51044	口縁部脚部 2/12	18.8	-	5.6	内:ハ、ハ、ハ 外:ハ、ハ、ハ	浅黄橙	
107	029-03	土師器	器台	1	チ-A12	SD51044	台部6/12	-	8.7	6.4	内:行' 外:行'、櫛描直線文、シキ、ヨナテ'	橙	
108	024-02	須恵器	甕	1	ス-S10	SD51040	口縁部片	-	-	-	内:ハ、ハ、ハ 外:ハ、ハ、ハ	灰白	
109	026-02	弥生土器	高杯	1	ス-L10・11	SX51042 No4	10/12	19.2	12.6	18.5	内:ハ、ハ、ハ、ヨナテ' 外:ヨナテ'、ハ、ハ、直線文	にぶい 橙	透孔4方
110	030-01	弥生土器	高杯	1	ス-M10・11	SX51042 No2	4/12	23.2	16.0	20.9	内:ハ後シキ 外:ハ後シキ、ヨナテ'	橙	
111	027-01	弥生土器	高杯	1	ス-M10・11	SX51042	口縁部片	-	-	-	内:シキ 外:シキ	にぶい 褐	
112	028-01	弥生土器	壺	1	ス-M10・11	SX51042 No6	口縁部脚部 10/12	13.8	-	9.4	内:ハ、ハ、ハ、ヨナテ' 外:ハ、ハ、ハ、ヨナテ'	浅黄橙	
113	026-01	弥生土器	壺	1	ス-M10・11	SX51042 No1	12/12	10.2	6.0	24.0	内:工具行'、ハ、ハ、ハ、ヨナテ' 外:ハ、ハ、ハ、ヨナテ'	橙	
114	025-01	弥生土器	壺	1	ス-M10・11	SX51042 No5	10/12	11.6	-	20.2	内:ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ヨナテ' 外:ハ、ハ、ハ、ヨナテ'	浅黄橙	外面に黒斑
115	027-03	弥生土器	台付甕	1	ス-M10・11	SX51042 No6	4/12	16.7	-	20.0	内:ハ 外:ハ	にぶい 黄橙	
116	027-02	弥生土器	壺	1	ス-M10・11	SX51042 No3	8/12	-	4.4	22.4	内:ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ 外:ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、櫛描直線文、扇形文	にぶい 黄橙	外面に黒斑

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
117	007-02	瓦	平瓦	1	チ-G14	SD51045 (SD51001分岐)	小片	-	-	厚1.8	内面:布目 外面:縄目	橙	
118	067-03	土師器	高杯	2	ナ-V14	SD52006下層	杯部3/12	-	-	2.4	内:流 ^ナ キ 外:流 ^ナ キ	明赤褐	内面に朱付着
119	067-04	土師器	高杯	2	ネ	SD52006	脚部10/12	-	6.5	5.0	内:流 ^ネ キ 外:流 ^ネ キ,コナテ ^ネ	にぶい 黄橙	
120	067-06	土師器	壺	2	ネ-W14	SD52006上層	胴部3/12	-	-	6.2	内:行 ^ネ ,流 ^ネ キ 外:流 ^ネ キ	明赤褐	
121	067-07	土師器	壺	2	ナ-T14	SD52006下層	肩部片	-	-	-	内:行 ^ナ ,テ ^ナ 外:欄描直線文、刺突	にぶい 橙	
122	067-05	土師器	台付甕	2	ネ	SD52006	台部7/12	-	4.5	2.4	内:行 ^ネ 外:ウ ^ネ ,テ ^ネ	にぶい 黄橙	
123	065-04	土師器	杯	2	ネ-L14	SR52003	口縁部2/12	12.4	-	2.0	内:行 ^ネ ,コナテ ^ネ 外:行 ^ネ ,コナテ ^ネ	にぶい 橙	
124	065-05	灰軸陶器	椀	2	ネ-L14	SR52003 灰色粘砂	底部1/12	-	7.2	2.0	内:コナテ ^ネ 外:コナテ ^ネ ,糸切痕	灰白	内面摩耗
125	063-04	陶器 (瀬戸黄瀬)	天目茶碗	2	ネ-K14	SR52003 灰色粘砂	口縁部片	-	-	-	内:鉄軸 外:鉄軸	赤褐	
126	063-05	土師器	鍋	2	ネ-K14	SR52003 灰色粘砂	口縁～胴部片	-	-	-	内:工具テ ^ネ ,コナテ ^ネ 外:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ	灰	
127	067-01	土師器	椀	2	ネ-J12・13	SD52004下層 最下層	口縁部4/12	12.8	-	5.2	内:コナテ ^ネ 外:コナテ ^ネ	橙	
128	064-02	土師器	椀	2	ネ-MN12・13	SD52004上層	11/12	11.1	-	4.3	内:工具テ ^ネ ,テ ^ネ ,コナテ ^ネ 外:行 ^ネ ,テ ^ネ ,コナテ ^ネ	灰白	
129	064-03	土師器	椀	2	ネ-MN12・13	SD52004上層	5/12	11.0	-	3.5	内:工具テ ^ネ ,コナテ ^ネ ,流 ^ネ キ 外:行 ^ネ ,テ ^ネ ,コナテ ^ネ	浅黄橙	
130	066-05	土師器	高杯	2	ネ-MN12・13	SD52004下層	脚部9/12	-	10.0	7.1	内:行 ^ネ 外:行 ^ネ ,コナテ ^ネ	橙	
131	066-06	土師器	高杯	2	ネ-J12・13	SD52004下層 最下層	脚部4/12	-	9.8	-	内:行 ^ネ ,コナテ ^ネ 外:流 ^ネ キ,コナテ ^ネ	黄灰	透孔3方
132	063-03	土師器	台付甕	2	ネ-G13・14	SD52004上層	台部8/12	-	9.8	5.4	内:工具テ ^ネ 外:工具テ ^ネ ,コナテ ^ネ	にぶい 橙	
133	066-02	土師器	高杯	2	ネ-C14	SD52004上層	脚部6/12	-	9.6	4.8	内:行 ^ネ ,テ ^ネ ,コナテ ^ネ 外:流 ^ネ キ	にぶい透	透孔3方
134	064-04	土師器	高杯	2	ネ-MN12・13	SD52004上層	脚部1/12	-	14.0	7.4	内:コナテ ^ネ 外:コナテ ^ネ	橙	壺の可能性あり
135	066-01	土師器	壺	2	ネ-B15	SD52004	口縁～胴部 9/12	7.4	-	3.8	内:工具テ ^ネ ,流 ^ネ キ 外:流 ^ネ キ	にぶい 黄橙	
136	066-04	土師器	壺	2	ネ-F13・14	SD52004下層	胴部4/12	-	-	4.4	内:行 ^ネ ,テ ^ネ 外:行 ^ネ	にぶい 黄橙	
137	065-03	土師器	台付甕	2	ネ-MN12・13	SD52004上層	口縁部3/12	11.6	-	5.6	内:工具テ ^ネ ,コナテ ^ネ 外:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ	灰黄褐	外面に煤付着
138	066-03	土師器	甕	2	ネ-C14	SD52004上層	口縁部2/12	20.4	-	5.0	内:工具テ ^ネ ,コナテ ^ネ 外:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ	にぶい 黄橙	
139	063-02	土師器	甕	2	ネ-F13・14	SD52004中層	口縁～胴部 1/12	18.8	-	6.6	内:工具テ ^ネ ,ウ ^ネ ,コナテ ^ネ 外:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ	浅黄橙	
140	065-02	土師器	台付甕	2	ネ-G13	SD52004上層	口縁部1/12	13.2	-	5.6	内:行 ^ネ ,テ ^ネ ,コナテ ^ネ 外:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ ,コナテ ^ネ	浅黄橙	外面に煤付着
141	065-01	土師器	壺	2	ネ-J12・13	SD52004中層	口縁部1/12	15.0	-	8.8	内:コナテ ^ネ 外:流 ^ネ キ,コナテ ^ネ	橙	
142	063-01	土師器	壺	2	ネ-B14	SD52004上層	口縁部1/12	22.6	-	3.0	内:行 ^ネ 外:コナテ ^ネ ,流 ^ネ キ	橙	二重口縁壺
143	067-02	土師器	台付甕	2	ネ-H12・112	SD52005	胴～台部 6/12	-	7.0	10.0	内:行 ^ネ 外:行 ^ネ ,テ ^ネ ,ウ ^ネ	灰黄	外面に煤付着
144	069-03	土師器	鉢	2	ネ-G13・14	SD52016上層	2/12	22.8	-	7.6	内:コナテ ^ネ ,流 ^ネ キ 外:コナテ ^ネ ,流 ^ネ キ	浅黄橙	
145	069-04	土師器	椀	2	ネ-G13・14	SD52016下層	2/12	12.0	-	4.6	内:行 ^ネ 外:行 ^ネ ,コナテ ^ネ	橙	
146	068-07	土師器	台付甕	2	ネ-F13	SD52016	台部12/12	-	6.2	4.0	内:行 ^ネ ,テ ^ネ 外:行 ^ネ	褐灰	
147	068-06	土師器	台付甕	2	ネ-F13	SD52016	台部8/12	-	9.2	6.6	内:行 ^ネ ,コナテ ^ネ 外:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ	にぶい橙	
148	069-02	土師器	壺	2	ネ-G13・14	SD52016上層	口縁部2/12	12.8	-	3.6	内:コナテ ^ネ ,流 ^ネ キ 外:コナテ ^ネ ,流 ^ネ キ	橙	
149	069-01	土師器	甕	2	ネ-G13・14	SD52016下層	口縁～胴部 3/12	19.6	-	5.6	内:工具テ ^ネ ,ウ ^ネ ,コナテ ^ネ 外:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ	橙	
150	068-04	土師器	杯	2	ネ-K13	SD52013	口縁部2/12	13.5	-	2.6	内:行 ^ネ ,コナテ ^ネ 外:行 ^ネ ,コナテ ^ネ	にぶい橙	
151	068-05	土師器	杯	2	ネ-K13	SD52013上層	口縁部2/12	13.8	-	-	内:コナテ ^ネ 外:行 ^ネ ,コナテ ^ネ	にぶい橙	
152	068-03	灰軸陶器	椀	2	ネ-K12	SD52013下層	底部5/12	-	7.0	2.0	内:コナテ ^ネ 外:コナテ ^ネ	灰白	
153	068-01	土師器	杯	2	ネ-M13	SD52008	小片	-	-	-	内:行 ^ネ ,コナテ ^ネ 外:行 ^ネ ,コナテ ^ネ	にぶい橙	
154	068-02	土師器	杯	2	ネ-M13	SD52009	8/12	15.0	-	2.5	内:行 ^ネ ,コナテ ^ネ 外:行 ^ネ ,コナテ ^ネ	橙	
155	070-05	土師器	高杯	2	チ-J11	SD52020	脚部片	-	-	-	内:行 ^ネ 外:欄描直線文	橙	透孔3方
156	069-05	土師器	台付甕	2	ネ-E13	SD52017	口縁部片	-	-	-	内:コナテ ^ネ 外:コナテ ^ネ	黄灰	
157	064-01	土師器	台付甕	2	ネ-E13	SD52017上層	4/12	14.0	9.8	21.7	内:工具テ ^ネ ,行 ^ネ ,テ ^ネ ,コナテ ^ネ 外:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ	にぶい褐	外面に煤付着
158	070-01	土師器	壺	2	ネ-E13	SD52017	口縁～胴部 6/12	18.6	-	7.4	内:工具テ ^ネ ,コナテ ^ネ ,流 ^ネ キ 外:工具テ ^ネ ,コナテ ^ネ ,流 ^ネ キ,刺突	橙	
159	073-04	土師器	甕	2	ナ-M12・13	SD52028	口縁部片	-	-	-	内:コナテ ^ネ 外:コナテ ^ネ	にぶい 黄橙	
160	070-04	土師器	高杯	2	ナ-O15	SD52022	脚部1/12	-	13.2	5.6	内:行 ^ネ ,コナテ ^ネ 外:行 ^ネ ,コナテ ^ネ ,流 ^ネ キ	橙	
161	071-02	須恵器	杯蓋	2	ナ-O15	SD52022	口縁部1/12	12.4	-	2.0	内:コナテ ^ネ 外:コナテ ^ネ	灰白	
162	072-01	土師器	甕	2	ナ-P15	SD52022	口縁部片	-	-	-	内:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ 外:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ	浅黄橙	
163	072-02	土師器	甕	2	ナ-O15	SD52022	口縁～胴部 1/12	21.4	-	7.0	内:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ 外:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ	浅黄橙	
164	070-03	土師器	台付甕	2	ナ-U14	SX52019	台部3/12	-	7.6	4.0	内:行 ^ネ ,コナテ ^ネ 外:ウ ^ネ	橙	
165	071-01	土師器	壺	2	ナ-V14	SX52019上層 No 1	口縁部6/12	13.8	-	10.8	内:流 ^ネ キ,コナテ ^ネ 外:流 ^ネ キ,コナテ ^ネ	橙	内湾口縁壺
167	070-02	土師器	壺	2	ネ-E14	SD52018	胴部～ 底部片	-	-	5.2	内:流 ^ネ キ 外:カスリ後流 ^ネ キ	橙	
168	072-03	土師器	椀	2	ナ-M13・14	SD52026	4/12	13.2	-	4.1	内:行 ^ネ ,コナテ ^ネ 外:コナテ ^ネ	にぶい橙	
169	072-05	土師器	台付甕	2	ナ-O14	SD52026	台部5/12	-	6.7	5.6	内:工具テ ^ネ ,カスリ 外:行 ^ネ ,ウ ^ネ	にぶい 黄橙	
170	072-04	土師器	台付甕	2	ナ-O14	SD52026	口縁～胴部 3/12	12.2	-	5.0	内:行 ^ネ ,テ ^ネ ,コナテ ^ネ 外:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ	にぶい 黄橙	
171	073-03	土師器	杯	2	ナ-N15	SD52027	3/12	10.2	-	3.8	内:行 ^ネ ,コナテ ^ネ 外:行 ^ネ ,コナテ ^ネ	浅黄橙	
172	073-02	土師器	高杯	2	ナ-MN15	SD52027	脚部10/12	-	-	-	内:行 ^ネ ,テ ^ネ 外:ウ ^ネ 後流 ^ネ キ	橙	杯部との接合部に刻み
173	073-01	土師器	台付甕	2	ナ-MN15	SD52027	口縁～胴部 3/12	12.4	-	3.4	内:工具テ ^ネ ,コナテ ^ネ 外:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ	褐灰	
174	072-06	土師器	甕	2	ナ-O15	SD52027砂層	口縁～胴部 1/12	18.2	-	7.6	内:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ 外:ウ ^ネ ,コナテ ^ネ	灰白	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
175	075-05	土師器	杯	3	ワ-Y18・19	SD53001上層	2/12	14.6	-	4.8	内:コテ 外:コテ	橙	
176	075-03	土師器	杯	3	ワ-V18	SD53001上層	7/12	14.2	-	4.5	内:コテ 外:コテ	浅黄橙	
177	075-06	土師器	杯	3	ワ-S16	SD53001下層	2/12	14.6	-	2.3	内:コテ 外:コテ	橙	
178	075-02	土師器	杯	3	ワ-V18	SD53001上層	底部12/12	-	5.6	-	内:コテ 外:コテ	橙	
179	075-04	須恵器	瓶	3	ワ-O14・15	SD53001	底部小片	-	-	-	内:コテ 外:コテ	灰白	
180	075-01	土師器	甕	3	ワ-V18	SD53001上層	10/12	17.6	-	18.8	内:工具 外:コテ	にぶい橙	
184	074-02	瓦	平瓦	3	ワ-Q15	SD53001上層	小片	-	-	厚1.7	内面:布目 凸面:縄目	にぶい黄橙	
185	074-03	瓦	平瓦	3	ワ-X18	SD53001上層	小片	-	-	厚2.2	内面:布目 凸面:コテ	にぶい黄橙	
186	074-01	瓦	平瓦	3	ワ-X18・19	SD53001上層	小片	-	-	厚2.6	内面:布目 凸面:縄目	にぶい黄橙	
188	079-02	土師器	高杯	3	ワ-A15	SD53002下層 灰色砂礫	底部3/12	-	-	3.0	内:コテ 外:コテ	明赤褐	
189	079-08	土師器	高杯	3	ワ-A14	SD53002下層 灰色砂礫	杯部片	-	-	-	内:コテ 外:コテ	明褐	
190	079-04	土師器	器台	3	ワ-X14・15	SD53002下層 灰色砂礫	台部片	-	-	3.6	内:コテ 外:コテ	明褐	
191	083-05	土師器	高杯	3	ワ-A15	SD53002下層 灰色砂礫	杯~脚部片	-	-	8.0	内:コテ 外:コテ	橙	透孔4方
192	078-05	土師器	高杯	3	ワ-X14・15	SD53002下層 灰色砂礫	脚部4/12	-	10.0	9.6	内:コテ 外:コテ	にぶい橙	透孔3方
193	080-01	土師器	壺	3	ワ-A14	SD53002下層 灰色砂礫	胴部3/12	-	-	3.6	内:コテ 外:コテ	明褐	
194	078-06	土師器	壺	3	ワ-A15	SD53002下層 灰色砂礫	11/12	8.5	-	8.8	内:工具 外:工具	にぶい橙	
195	080-02	須恵器	杯蓋	3	ワ-Y15	SD53002下層 灰色砂礫	2/12	12.2	-	4.1	内:コテ 外:コテ	灰	
196	077-02	須恵器	短頸壺	3	ワ-Y15	SD53002下層 灰色砂礫	11/12	11.0	6.5	9.6	内:コテ 外:コテ	灰白	
197	079-03	土師器	甕	3	ワ-A15	SD53002下層 灰色砂礫	口縁部2/12	15.0	-	3.4	内:コテ 外:コテ	灰黄橙	布留系
198	082-03	土師器	壺	3	ワ-Y15	SD53002下層 灰色砂礫	口縁部1/12	17.0	-	6.0	内:コテ 外:コテ	橙	
199	079-07	土師器	甕	3	ワ-A14	SD53002下層 灰色砂礫	口縁~頸部 1/12	13.8	-	4.0	内:コテ 外:コテ	にぶい黄橙	
200	084-03	土師器	甕	3	ワ-W14	SD53002下層 灰色砂礫	口縁部片	-	-	-	内:コテ 外:コテ	暗褐	
201	078-02	土師器	台付甕	3	ワ-A15	SD53002下層 灰色砂礫	口縁~頸部 1/12	16.1	-	3.4	内:コテ 外:コテ	にぶい黄橙	
202	078-01	土師器	台付甕	3	ワ-A15	SD53002下層 灰色砂礫	口縁~頸部 2/12	16.2	-	3.4	内:コテ 外:コテ	にぶい黄橙	
203	078-03	土師器	甕	3	ワ-A15	SD53002下層 灰色砂礫	口縁~頸部 2/12	18.0	-	3.6	内:コテ 外:コテ	にぶい黄橙	
204	083-06	土師器	鉢	3	ワ-Y15	SD53002下層 灰色砂礫	底部11/12	-	3.3	2.0	内:工具 外:コテ	浅黄橙	
205	078-04	土師器	台付甕	3	ワ-Y14	SD53002下層 灰色砂礫	台部9/12	-	8.0	5.0	内:コテ 外:コテ	にぶい黄橙	
206	083-03	土師器	壺	3	ワ-Y15	SD53002下層 灰色砂礫	底部10/12	-	8.5	2.8	内:コテ 外:コテ	にぶい黄橙	
207	079-05	土師器	壺	3	ワ-X14	SD53002下層 灰色砂礫	底部6/12	-	6.3	1.6	内:工具 外:コテ	にぶい黄橙	
208	083-02	土師器	壺	3	ワ-X14	SD53002下層 灰色砂礫	底部7/12	-	7.4	2.6	内:工具 外:コテ	浅黄橙	
209	079-06	土師器	壺	3	ワ-X14	SD53002下層 灰色砂礫	底部4/12	-	5.4	3.2	内:工具 外:コテ	にぶい黄橙	上げ底
210	083-01	土師器	壺	3	ワ-Y15	SD53002下層 灰色砂礫	底部10/12	-	7.0	3.6	内:コテ 外:コテ	にぶい黄橙	
211	082-05	土師器	壺	3	ワ-Y15	SD53002下層 灰色砂礫	胴部片	-	-	-	内:コテ 外:コテ	浅黄橙	
214	076-04	土師器	杯	3		SD53002上層	4/12	13.4	-	3.1	内:コテ 外:コテ	橙	
215	076-02	土師器	杯	3		SD53002上層	10/12	14.2	-	2.8	内:コテ 外:コテ	にぶい橙	
216	080-05	山茶碗	椀	3	拡張区	SD53002上層 黄灰色シト	底部6/12	-	8.2	2.2	内:コテ 外:コテ	灰白	
217	081-01	灰釉陶器	皿	3	拡張区	SD53002上層 黄灰色シト	底部5/12	-	6.3	1.4	内:コテ 外:コテ	灰白	
218	079-01	須恵器	杯	3	ワ-X14・15	SD53002下層 褐色砂質土	3/12	10.6	-	4.0	内:コテ 外:コテ	灰	
219	110-03	土製品	輪羽口	3	拡張区	SD53002上層 黄灰色シト	小片	-	-	-		灰白	
220	084-04	土師器	台付甕	3	ヨ-A14	SD53002上層 褐色砂質土	台部8/12	-	5.4	3.0	内:コテ 外:コテ	にぶい黄橙	
221	080-03	土師器	高杯	3	ワ-Y14	SD53002上層 褐色砂質土	脚部9/12	-	10.6	6.8	内:コテ 外:コテ	灰褐	
222	080-04	土師器	壺	3	ワ-Y15	SD53002上層 褐色砂質土	口縁部2/12	16.0	-	2.0	内:コテ 外:コテ	にぶい黄橙	
223	076-01	土師器	甕	3	ワ-Y14	SD53002上層 褐色砂質土	11/12	14.6	-	18.1	内:工具 外:コテ	灰黄褐	
224	082-02	土師器	甕	3	ワ-Y14	SD53002上層 褐色砂質土	口縁~胴部 1/12	15.8	-	7.6	内:工具 外:コテ	灰白・橙	
225	076-03	土師器	甕	3	ワ-Y14	SD53002上層 褐色砂質土	口縁~胴部 9/12	13.4	-	13.6	内:工具 外:コテ	灰褐	
226	082-01	土師器	甕	3	ワ-Y14	SD53002上層 褐色砂質土	口縁~胴部 1/12	15.2	-	12.6	内:工具 外:コテ	浅黄橙	
227	084-05	土師器	甕	3	ワ-A15	SD53003上層	口縁部1/12	12.8	-	2.6	内:コテ 外:コテ	橙	
228	110-02	土師器	甕	3	拡張区	SD53002上層 黄灰色シト	口縁部2/12	12.8	-	5.0	内:コテ 外:コテ	にぶい黄橙	
229	082-04	土師器	高杯	3	ワ-A15	SD53002下層 灰色砂礫	口縁部片	-	-	-	内:コテ 外:コテ	にぶい赤褐	
230	077-01	土師器	壺	3	拡張区	SD53002上層 褐色砂質土	口縁~胴部 7/12	18.2	-	10.5	内:コテ 外:コテ	浅黄橙	
231	080-06	土師器	甕	3	拡張区	SD53002上層 黄灰色シト	口縁~頸部 1/12	25.2	-	6.0	内:コテ 外:コテ	にぶい黄橙	
232	081-02	土師器	甕	3	拡張区	SD53002上層 黄灰色シト	口縁~胴部 2/12	24.8	-	8.0	内:コテ 外:コテ	にぶい橙	
233	083-04	土製品	土錘	3		SD53002上層	3/4	長4.3	幅1.2	-	コテ	灰白	重さ5.0g
234	085-01	瓦	丸瓦	3	ワ-W20	SD53003	1/2	-	-	厚1.8	内面:布目 凸面:縄目	にぶい黄橙	
235	084-02	山茶碗	椀	3	ワ-X21	SD53003	底部10/12	-	6.5	1.8	内:コテ 外:コテ	灰白	
236	084-01	土師器	甕	3	ワ-W20	SD53003	口縁~胴部 1/12	23.8	-	7.2	内:コテ 外:コテ	浅黄	
237	098-02	土師器	甕	3	ワ-S15	SD53005	口縁部片	-	-	-	内:コテ 外:コテ	にぶい橙	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
238	098-01	土師器	甕	3	ワ-A17	SD53005	口縁～胸部 1/12	18.2	-	5.6	内:工具?、ヨナテ 外:ウ、ヨナテ	浅黄橙	
239	104-02	土師器	皿	3	ワ-C15-16	SK53012	2/12	10.9	-	2.0	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	浅黄橙	
240	104-04	山茶碗	皿	3	ワ-C15	SK53012	口縁1/12 底部9/12	8.9	4.3	2.5	内:ヨナテ 外:ヨナテ	灰白	
241	105-03	山茶碗	椀	3	ワ-C15-16	SK53012	底部10/12	-	7.0	1.6	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕	灰白	
242	104-05	山茶碗	椀	3	ワ-C15-16	SK53012	底部4/12	-	7.7	2.4	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕	灰白	
243	104-01	土師器	鍋	3	ワ-C15-16	SK53012	口縁～肩部 2/12	24.0	-	6.0	内:工具?、ヨナテ 外:サ、テ、ヨナテ	にふい 黄橙	外面に煤付着
244	104-03	土製品	土鍾	3	ワ-D15	SK53012	完形	長4.6	幅1.3	-	サ、テ	浅黄橙	重さ5.5g
245	107-01	瓦	軒平瓦	3	ワ-C15-16	SK53012	小片	-	-	厚2.4	凹面:布目 凸面:縄叩き	灰	瓦当部は欠損
246	107-03	瓦	平瓦	3	ワ-C15-16	SK53012	小片	-	-	厚2.2	凹面:欠損 凸面:格子目叩き	浅黄橙	
247	098-04	土師器	甕	3	ワ-T18 S17	SD53007	口縁部4/12	18.0	-	4.0	内:ウ、テ、ヨナテ 外:ヨナテ	にふい 黄橙	
248	098-03	土師器	皿	3	ワ-V19	SD53006	口縁部片	-	-	-	内:ヨナテ 外:サ、テ、ヨナテ	にふい 黄橙	
249	098-05	灰軸陶器	皿	3	ワ-O15	SD53009	底部1/12	-	7.5	1.4	内: 外:	灰白	
250	098-06	土師器	鍋	3	ワ-O15	SD53010	口縁部片	-	-	-	内:ヨナテ 外:ヨナテ	にふい 黄橙	外面に煤付着
251	096-02	山茶碗	椀	3	ワ-X17	SE53004 最下層	底部10/12	-	6.0	1.8	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕、ミシラ痕	灰白	高台内に墨書「大」
252	092-02	白磁 (中国)	椀	3	ワ-X17	SE53004 下層	口縁部片	-	-	-	施軸	灰白	
253	093-03	山茶碗	椀	3	ワ-X17	SE53004 下層	底部2/12	-	8.0	2.4	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕	灰白	内面に煤付着
254	091-02	山茶碗	椀	3	ワ-X18	SE53004 下層	底部12/12	-	7.4	3.8	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕	灰白	内面に煤付着
255	091-05	山茶碗	椀	3	ワ-X17	SE53004 中層	底部12/12	-	8.0	2.6	内:ヨナテ 外:ヨナテ、ミシラ痕	灰白	
256	091-06	山茶碗	椀	3	ワ-X17	SE53004 中層	底部12/12	-	7.7	3.4	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕、ミシラ痕	灰白	
257	094-01	瓦	平瓦	3	ワ-Y18	SE53004 下層	小片	-	-	厚2.1	凹面:テ 凸面:縄叩き	浅黄橙	
258	095-05	クロコ土師器	台付皿	3	ワ-X18	SE53004 上層	底部3/12	-	4.4	2.4	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕	浅黄橙	
259	092-03	クロコ土師器	椀	3	ワ-X17	SE53004 中層	底部8/12	-	5.6	2.4	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切後テ	灰白	
260	095-04	山茶碗	皿	3	ワ-X18	SE53004 中層	10/12	8.5	4.3	2.3	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕	灰白	
261	097-02	山茶碗	椀	3	ワ-Y17	SE53004 掘方上層	11/12	15.4	7.5	5.8	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕	灰白	
262	097-01	山茶碗	椀	3	ワ-Y18	SE53004 掘方	11/12	16.2	6.3	5.8	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕、ミシラ痕	灰白	
263	096-01	山茶碗	椀	3	ワ-Y18	SE53004 掘方	底部12/12	-	6.6	3.4	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕、ミシラ痕	灰白	高台内に墨書「〇」
264	094-03	灰軸陶器	椀	3	ワ-X17	SE53004 中層	底部12/12	-	6.3	2.8	内:ヨナテ、サ、テ、ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕	オリブ 灰	
265	091-03	山茶碗	椀	3	ワ-X17	SE53004 中層	底部12/12	-	7.9	2.4	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕、ミシラ痕	灰白	
266	097-04	山茶碗	椀	3	ワ-Y17	SE53004 中層	底部10/12	-	7.5	3.6	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕、ミシラ痕	灰白	
267	096-05	山茶碗	椀	3	ワ-X17	SE53004 中層	底部5/12	-	6.2	3.8	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切後テ	灰白	内面に煤付着
268	097-05	山茶碗	椀	3	ワ-Y17	SE53004 掘方上層	底部12/12	-	6.2	3.6	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕、ミシラ痕	灰白	
269	091-04	山茶碗	椀	3	ワ-X17	SE53004 中層	底部12/12	-	7.2	3.6	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切後テ	灰白	
270	097-03	山茶碗	椀	3	ワ-Y17	SE53004 掘方上層	底部10/12	-	7.6	4.2	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕	灰白	
271	095-03	山茶碗	椀	3	ワ-X17	SE53004 中層	底部5/12	-	7.7	2.4	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕	灰白	
272	097-06	山茶碗	椀	3	ワ-Y18	SE53004 掘方	底部12/12	-	6.5	3.4	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕、砂粒痕	灰白	内面に煤付着
273	096-03	山茶碗	椀	3	ワ-X17	SE53004 上層	底部7/12	-	7.5	3.0	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕、ミシラ痕	灰白	内面に煤付着
274	091-01	山茶碗	椀	3	ワ-X17	SE53004 中層	底部12/12	-	7.3	2.8	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕、ミシラ痕	灰白	
275	096-04	山茶碗	椀	3	ワ-Y18	SE53004 掘方	底部8/12	-	7.2	2.2	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切痕	灰白	内面に煤付着
276	092-01	山茶碗	椀	3	ワ-X17	SE53004 中層	底部12/12	-	8.2	2.2	内:ヨナテ 外:ヨナテ、糸切後テ、砂粒痕	灰白	
277	095-01	陶器 (海美)	壺	3	ワ-X17	SE53004 中層	底部1/12	-	9.4	24.6	内:ヨナテ 外:ヨナテ、ヨナテ	にふい 赤褐	
278	092-05	陶器 (海美)	鉢	3	ワ-X17	SE53004 中層	口縁部1/12	25.3	-	7.0	内:ヨナテ 外:ヨナテ	灰	
279	095-02	陶器 (海美)	鉢	3	ワ-X17	SE53004 中層	底部4/12	-	14.0	3.4	内:ヨナテ 外:ヨナテ、ヨナテ	灰白	
280	092-04	陶器	壺	3	ワ-X17	SE53004 中層	胴部片	-	-	-	内:ヨナテ 外:ヨナテ、格子目叩き	灰白	
283	090-01	瓦	平瓦	3	ワ-X17	SE53004 中層	小片	-	-	厚2.1	凹面:布目 凸面:縄叩き	浅黄橙	
284	088-03	瓦	平瓦	3	ワ-X17	SE53004 中層	小片	-	-	厚2.4	凹面:布目 凸面:縄叩き	灰	
285	086-02	瓦	軒平瓦	3	ワ-X17	SE53004 中層	瓦当部片	-	-	-	凹面:布目 凸面:	にふい 橙	瓦当面剥離
286	093-01	瓦	丸瓦	3	ワ-X17	SE53004 中層	小片	-	-	厚1.7	凹面:布目 凸面:縄叩き	灰	
287	090-02	瓦	平瓦	3	ワ-X17	SE53004 掘方	小片	-	-	厚2.8	凹面:布目 凸面:縄叩き	灰白	
288	094-02	瓦	平瓦	3	ワ-X17	SE53004 掘方	小片	-	-	厚2.0	凹面:テ 凸面:クスリ	灰白	
289	089-02	瓦	平瓦	3	ワ-X17	SE53004 掘方	小片	-	-	厚2.3	凹面:布目 凸面:縄叩き	橙	
290	089-01	瓦	平瓦	3	ワ-Y17	SE53004 掘方上層	小片	-	-	厚2.1	凹面:布目 凸面:縄叩き	灰	
291	087-01	瓦	平瓦	3	ワ-Y17	SE53004 掘方上層	小片	-	-	厚2.5	凹面:布目、テ 凸面:テ	灰白	
292	087-02	瓦	平瓦	3	ワ-Y17	SE53004 掘方	小片	-	-	厚2.3	凹面:布目 凸面:縄叩き、クスリ	にふい 橙	
293	088-01	瓦	丸瓦	3	ワ-X17	SE53004 掘方	小片	-	-	厚1.8	凹面:布目 凸面:テ	灰白	
294	093-02	瓦	平瓦	3	ワ-X17	SE53004 掘方	小片	-	-	厚2.5	凹面:布目 凸面:縄叩き	浅黄橙	
295	088-02	瓦	平瓦	3	ワ-Y17	SE53004 掘方上層	小片	-	-	厚1.9	凹面:布目、テ 凸面:縄叩き、テ	橙	
296	086-01	瓦	軒平瓦	3	ワ-Y17	SE53004 掘方上層	1/6	-	-	厚4.1	凹面:布目、テ 凸面:テ	橙	均整唐草文

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
297	102-01	土師器	杯	3	ワ-D15・16	SD53011	10/12	13.4	-	5.2	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	にふい 黄橙	
298	102-06	土師器	杯	3	ワ-D15・16	SD53011	4/12	11.0	-	2.1	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	淡橙	
299	102-05	土師器	杯	3	ワ-D15・16	SD53011	5/12	10.4	-	1.9	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	にふい 橙	
300	102-07	土師器	皿	3	ワ-D15・16	SD53011	ほぼ完形	9.0	-	1.7	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	にふい 黄橙	
301	106-05	土師器	皿	3	ワ-C-D15	SD53011	1/12	12.0	-	1.5	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ヨナ行'	浅黄橙	
302	102-02	土師器	杯	3	ワ-D15・16	SD53011	11/12	11.6	-	2.1	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	にふい 黄橙	
303	102-03	土師器	杯	3	ワ-D15・16	SD53011	6/12	11.0	-	2.2	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	にふい 黄橙	
304	102-04	土師器	杯	3	ワ-D15・16	SD53011	6/12	10.8	-	1.8	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	にふい 橙	
305	102-08	クロロ土師器	皿	3	ワ-A15	SD53011 灰白色ツト	底部5/12	-	4.8	1.4	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'、糸切痕	浅黄橙	
306	101-04	土製品	土錘	3	ワ-D15	SD53011	完形	長4.9	幅1.2	-	行'	灰黄	重さ4.7 g
307	101-03	土製品	土錘	3		SD53011 青灰色ツト	完形	長3.9	幅1.3	-	行'	黄灰	重さ5.0 g
308	101-02	土製品	土錘	3	ワ-B15	SD53011	完形	長3.3	幅1.2	-	行'	褐灰	重さ3.6 g
309	103-03	灰軸陶器	小椀	3	ワ-C15・16	SD53011	3/12	9.8	5.5	3.8	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'、糸切痕	灰白	
310	103-06	灰軸陶器	椀	3	ワ-A15	SD53011 青灰色砂	底部2/12	-	8.2	1.8	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'	灰 オリーブ	
311	103-07	灰軸陶器	皿	3	ワ-C15・16	SD53011	1/12	13.0	-	2.4	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'、ヨナズリ	灰黄	
312	098-07	青磁 (中国)	椀	3	ワ-C15・16	SD53011	口縁部片	-	-	-	内:施釉、花文 外:ヨナズリ、施釉	灰白	
313	102-09	山茶碗	椀	3	ワ-B15	SD53011 青灰色砂	底部3/12	-	4.4	1.6	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'、糸切痕	灰白	
314	103-02	山茶碗	椀	3	ワ-C15・16	SD53011	底部4/12	-	7.6	2.2	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'、糸切痕	灰白	
316	106-01	須恵器	壺	3	ワ-C15	SD53011 青灰色砂	口縁部1/12	10.6	-	5.0	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'	黄灰	
317	101-01	陶器	壺	3	ワ-A15	SD53011 青灰色砂	頸部5/12	-	頸部 11.5	12.6	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'	灰白	
318	103-05	陶器	壺	3	ワ-B15	SD53011 青灰色砂	底部10/12	-	5.2	2.6	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'、糸切痕	灰白	
319	103-04	陶器	壺	3	ワ-C15・16	SD53011	底部3/12	-	8.5	5.0	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'、糸切痕、モシ'う痕	灰白	
320	103-01	陶器	壺	3	ワ-A15	SD53001 青灰色砂	底部1/12	-	17.0	6.6	内:工具行' 外:行'、モシ'う痕	黄灰	
321	099-02	瓦	平瓦	3	ワ-A15	SD53011 青灰色砂	小片	-	-	厚2.3	凹面:布目 凸面:縄目	灰白	
322	100-02	瓦	平瓦	3	ワ-A15	SD53011	小片	-	-	厚1.9	凹面:布目、ナ行' 凸面:縄目	灰	
323	100-01	瓦	平瓦	3	ワ-E15	SD53011	小片	-	-	厚2.0	凹面:布目 凸面:縄目	灰白	
324	099-01	瓦	平瓦	3	ワ-D16	SD53011 灰色砂	1/3	-	-	厚2.7	凹面:布目、ナ行' 凸面:縄目	灰白	
325	106-03	クロロ土師器	椀	3	ワ-Y15	SD53014	底部5/12	-	5.5	1.6	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'、糸切痕	橙	
326	106-04	土師器	皿	3	ワ-B15・16	SD53016	2/12	10.8	-	1.8	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	浅黄橙	
327	105-04	山茶碗	椀	3	ワ-G15	SD53013	底部10/12	-	7.2	2.4	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'、糸切痕	灰白	
328	105-05	山茶碗	椀	3	ワ-H15	SD53013	底部5/12	-	7.4	2.6	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'、糸切痕	灰白	
329	106-02	山茶碗	椀	3	ワ-G15	SD53013	底部5/12	-	8.4	3.2	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'、糸切痕、モシ'う痕	灰白	
330	107-02	瓦	平瓦	3	ワ-G15	SD53013	小片	-	-	厚2.0	凹面:布目 凸面:縄目	黒褐色	
331	109-01	山茶碗	椀	4	カ-03	SD54001下層 灰黄褐色土	底部1/12	-	7.2	2.6	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'、糸切痕	灰白	
332	111-02	瓦	平瓦	4	カ-03	SD54001下層 灰黄褐色土	小片	-	-	厚1.9	凹面:布目 凸面:ナズリ	灰白	
333	109-02	土師器	杯	4	オ-022	SD54002	3/12	10.4	-	3.9	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	浅黄橙	
334	109-05	土師器	皿	4	カ-01	SD54003	小片	-	-	-	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	にふい 黄橙	
335	109-07	土師器	皿	4	オ-N22	SK54004	小片	-	-	-	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	にふい 橙	
336	109-06	土師器	鍋	4	オ-N22	SK54004	口縁部片	-	-	-	内:ヨナ行' 外:行'、ヨナ行'	灰白	
337	117-03	灰軸陶器	皿	4	オ-N20	SK54006	底部1/12	-	8.0	1.0	内:ヨナ行' 外:貼付高台	灰白	
338	115-04	土師器	杯	4	オ-017	SD54009	1/12	11.8	-	3.4	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ヨナ行'	にふい 橙	
339	115-05	土師器	杯	4	オ-016	SD54011褐灰	1/12	13.4	-	3.4	内:ヨナ行' 外:行'、ヨナ行'、う描き	浅黄橙	
340	116-04	土師器	高杯	4	オ-016	SD54011	杯部1/12	18.8	-	4.4	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ヨナ行'	浅黄橙	
341	116-06	土師器	甕	4	オ-N16	SD54011	胴部片	-	-	-	内:行' 外:行'	橙	
342	116-03	土師器	高杯	4	オ-E9	SD54011	胴～台部片	-	-	6.6	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、黒斑	橙	または台付鉢
343	116-05	土師器	高杯	4	オ-016	SD54011 No1	脚部10/12	-	11.0	9.0	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、モシ'う	橙	透孔3方
344	115-03	弥生土器	壺	4	オ-M15	SD54011	底部12/12	-	4.4	2.4	内:行' 外:行'	橙	
345	116-02	土師器	台付甕	4	オ-E9	SD54011	口縁部1/12	15.8	-	2.0	内:行'、ヨナ行' 外:ヨナ行'	暗灰	
346	115-01	土師器	鉢	4	オ-E9	SD54011	口縁～胴部 2/12	18.0	-	12.2	内:工具行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	浅黄橙	器形は台付甕に近い
347	117-01	土師器	甕	4	オ-016	SD54011褐灰	口縁～肩部 1/12	20.0	-	7.8	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ヨナ行'	浅黄橙	
348	112-07	土師器	杯	4	オ-P22	SE54005	9/12	8.1	-	3.1	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	にふい 黄橙	
349	113-03	土師器	杯	4	オ-P22	SE54005	9/12	9.7	-	3.4	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'	浅黄橙	内外面摩滅
350	112-08	土師器	杯	4	オ-P22	SE54005	3/12	11.4	-	4.1	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	橙	
351	112-05	土師器	杯	4	オ-P22	SE54005	3/12	15.4	-	3.8	内:ヨナ行' 外:ヨナ行'	橙	内外面摩滅
352	113-04	土師器	杯	4	オ-P22	SE54005	2/12	12.2	-	3.7	内: 外:う描き	橙	内外面摩滅
353	113-01	土師器	杯	4	オ-P22	SE54005	7/12	10.2	-	4.1	内:行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	浅黄橙	
354	113-02	土師器	杯	4	オ-P22	SE54005	7/12	11.0	-	3.8	内:工具行'、ヨナ行' 外:行'、ナ行'、ヨナ行'	橙	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
355	112-02	土師器	高杯	4	オ-P22	SE54005	脚部2/12	-	-	5.2	内:ナ 外:ナ、ヨナ	浅黄橙	
356	113-05	土師器	皿	4	オ-P22	SE54005	5/12	23.6	-	2.7	内:ヨナ 外:ヨナ、ナ、ヨナ	橙	内外面摩滅
357	112-06	土師器	杯	4	オ-P22	SE54005	3/12	10.7	-	3.4	内:ナ 外:ナ、ナ、ヨナ	浅黄橙	
358	117-04	須恵器	杯蓋	4	オ-P22	SE54005上層	4/12	10.2	-	3.5	内:ヨナ 外:ヨナ、ナ、ナ	灰	
359	117-05	須恵器	杯蓋	4	オ-P22	SE54005	1/12	11.6	-	4.2	内:ヨナ 外:ヨナ、ナ、ヨナ	灰	
360	112-01	須恵器	有蓋 高杯	4	オ-022	SE54005	杯~脚部 6/12	11.1	-	5.0	内:ヨナ 外:ヨナ、ナ、ヨナ	灰	
361	117-06	須恵器	杯蓋	4	オ-P22	SE54005	2/12	16.0	-	1.7	内:ヨナ 外:ヨナ	灰	
362	114-01	土師器	甌	4	オ-P22	SE54005	口縁部3/12 底部2/12	28.0	15.0	-	内:ナ、ナ、ヨナ 外:ナ、ヨナ	にぶい 黄橙	
363	115-02	土師器	甌	4	カ-0P22	SE54005	口縁~胴部 2/12	15.8	-	9.8	内:ナ、ヨナ 外:ナ、ナ、ヨナ	浅黄橙	
364	112-04	土師器	甌	4	オ-P22	SE54005	口縁~頸部 3/12	22.0	-	4.0	内:工具ナ、ヨナ 外:ナ、ヨナ	にぶい 黄橙	
365	112-03	土師器	甌	4	オ-P22	SE54005	口縁部3/12	14.4	-	2.6	内:ナ、ヨナ 外:ナ、ヨナ	にぶい 黄橙	
366	116-01	土師器	甌	4	オ-022	SE54005 No1	口縁~胴部 11/12	15.2	-	9.6	内:ナ、ナ、ヨナ 外:ナ、ヨナ	にぶい 黄橙	
367	108-01	土師器	鍋	4	オ-022	SE54005 上層	口縁~胴部 2/12	36.8	-	13.6	内:ナ、ナ、ヨナ 外:ナ、ヨナ	浅黄橙	
368	108-02	須恵器	甌	4	オ-022	SE54005	頸部2/12	-	頸部 28.4	11.4	内:ナ、ナ、ヨナ 外:ナ、ナ、ヨナ	灰	
369	117-02	須恵器	壺	4	オ-022	SE54005 上層	口縁~頸部 4/12	11.4	-	5.6	内:ナ 外:ナ	灰白	
370	118-09	土師器	甌	4	オ-N15	SD54014	口縁部片	-	-	-	内:工具ナ、ヨナ 外:ヨナ	にぶい、褐	
371	118-10	土師器	台付甌	4	オ-E10	SD54014	口縁部片	-	-	-	内:ナ 外:ナ	浅黄橙	
372	119-04	土師器	台付甌	4	オ-E10	SD54014	台部8/12	-	9.0	6.1	内:ナ 外:ナ	にぶい 黄橙	外面に煤付着
373	119-06	土師器	高杯	4	オ-M16	SD54014	杯部片	-	-	-	内:ナ 外:工具ナ、ヨナ	浅黄橙	
374	118-11	灰軸陶器	椀	4	オ-05	SE54031 盤方	口縁部片	-	-	-	内:ナ 外:ナ	灰白	
375	121-04	土師器	杯	4	オ-05	SE54031中央 灰色粘質土	7/12	14.2	-	2.5	内:ナ、ヨナ 外:ナ、ナ、ヨナ	橙	底部外面に墨書(吉祥句)
376	119-01	土師器	杯	4	オ-N05	SE54031 枠内	4/12	13.4	-	2.3	内:ナ、ヨナ 外:ナ、ナ、ヨナ	浅黄橙	
377	119-05	土師器	杯	4	オ-05	SE54031 枠内	口縁部2/12	12.0	-	2.0	内:ナ 外:ナ	にぶい 黄橙	
378	120-06	灰軸陶器	椀	4	オ-05	SE54031 枠内	口縁部1/12	13.2	-	2.5	内:ナ 外:ナ	灰白	
379	119-03	土師器	杯	4	オ-05	SE54031 枠内	12/12	13.8	-	3.2	内:ナ、ヨナ 外:ナ、ヨナ	にぶい、橙	
380	119-02	土師器	杯	4	オ-05	SE54031 枠内	10/12	13.6	-	2.5	内:ナ、ヨナ 外:ナ、ナ、ヨナ	にぶい、橙	
381	120-02	志摩式 製塩土器		4	オ-05	SE54031 枠内	小片	-	-	-	内:ナ 外:ナ	にぶい、褐	
382	120-03	志摩式 製塩土器		4	オ-05	SE54031 枠内	小片	-	-	-	内:ナ 外:ナ	にぶい、橙	
383	120-01	土師器	甌	4	オ-05	SE54031 枠内	11/12	16.8	-	15.6	内:工具ナ、ヨナ 外:ナ、ナ、ヨナ	にぶい 黄橙	内面底に炭化物付着
384	120-05	土師器	甌	4	オ-05	SE54031 枠内	口縁~胴部 3/12	15.2	-	3.4	内:ナ、ヨナ 外:ナ、ヨナ	浅黄橙	
385	120-04	土師器	甌	4	オ-05	SE54031 枠内	口縁~胴部 4/12	15.0	-	5.6	内:工具ナ、ナ、ヨナ 外:ナ、ヨナ	灰黄褐	
386	121-01	土師器	甌	4	オ-05	SE54031 枠内	口縁~胴部 2/12	15.7	-	6.0	内:工具ナ、ヨナ 外:ナ、ヨナ	にぶい 黄橙	内面に炭化物付着
387	121-05	土師器	杯	4	オ-05	SE54031 下層	小片	-	-	-	内:ナ、ヨナ 外:ナ、ナ、ヨナ	にぶい 黄橙	
388	121-02	土師器	甌	4	オ-05	SE54031 枠内	口縁~胴部 2/12	19.2	-	5.7	内:工具ナ、ヨナ 外:ナ、ヨナ	にぶい 黄橙	
389	121-03	須恵器	瓶	4	オ-05	SE54031	底部1/12	-	16.0	7.9	内:ナ 外:ナ、ナ、ヨナ	灰白	
390	118-06	山茶碗	椀	4	オ-J17	SK54020	底部4/12	-	6.4	-	内:ナ 外:ナ、ナ、ヨナ	灰白	
391	118-08	土師器	甌	4	オ-I16	SD54021	口縁部片	-	-	-	内:ナ 外:ナ	橙	
392	119-07	土師器	甌	4	オ-I17	SD54021	口縁部片	-	-	-	内:ナ 外:ナ	灰白	
393	118-02	山茶碗	椀	4	オ-I16	SK54022	底部5/12	-	7.0	2.0	内:ナ 外:ナ、ナ、ヨナ	灰白	見込みに重ね焼き痕
394	118-04	山茶碗	椀	4	オ-G14	SD54023	底部4/12	-	7.0	2.0	内:ナ 外:ナ、ナ、ヨナ	灰白	
395	118-03	山茶碗	椀	4	オ-G15	SD54024	底部6/12	-	5.8	1.8	内:ナ 外:ナ、ナ、ヨナ	灰白	
396	118-01	山茶碗	椀	4	オ-G15	SD54024	底部5/12	-	7.4	2.6	内:ナ 外:ナ、ナ、ヨナ	灰白	
397	118-05	山茶碗	椀	4	オ-G14	SD54024 下層	底部12/12	-	7.2	2.2	内:ナ 外:ナ、ナ、ヨナ	灰白	見込みに重ね焼き痕
398	118-07	土師器	高杯	4	オ-E12	SD54025	脚部片	-	-	-	内:ナ 外:ナ	浅黄橙	
399	121-06	土師器	杯	4	オ-05・6	SK54032	小片	-	-	-	内:ナ、ヨナ 外:ナ、ナ、ヨナ	橙	
400	121-07	土師器	壺	4	オ-N7	SK54033	底部4/12	-	6.2	2.9	内:ナ 外:ナ	にぶい 黄橙	または鉢
401	122-03	土師器	壺	4	オ-07	SR54035 最下層硬層	口縁部片	-	-	-	内:ナ 外:ナ	にぶい 黄橙	
402	122-04	土師器	高杯	4	オ-07	SR54035 最下層硬層	脚部片	-	-	-	内: 外:ナ、ナ、ヨナ	にぶい 黄橙	透孔3方
403	122-02	土師器	甌	4	オ-07	SR54035 最下層硬層	口縁部片	-	-	-	内: 外:ナ	にぶい 橙	
404	122-05	土師器	壺	4	オ-07	SR54035 下層砂礫	口縁部2/12	13.6	-	2.6	内:ナ、ナ、ヨナ 外:ナ、ナ、ヨナ	にぶい 橙	
405	122-01	土師器	甌	4	オ-07	SR54035 下層砂礫	口縁~頸部 2/12	21.2	-	5.9	内:ナ、ナ、ヨナ 外:ナ、ナ、ヨナ	にぶい 黄橙	
406	123-06	ロクロ土師器	椀	4	ク-B18	SE54036	底部3/12	-	6.3	2.4	内:ナ 外:ナ、ナ、ヨナ	浅黄橙	
407	125-02	ロクロ土師器	台付皿	4	ク-B18	SE54036	台部2/12	-	7.8	3.5	内:ナ 外:ナ	浅黄橙	
408	124-01	土製品	輪切口	4	ク-B18	SE54036	先端付近 小片	-	-	厚2.3	-	橙	外面が黒化
409	123-05	陶器	壺	4	ク-B18	SE54036	胴部片	-	-	-	内:ナ 外:ナ	灰	
410	124-03	須恵器	甌	4	ク-B19	SE54036	底部3/12	-	11.0	5.6	内:ナ 外:ナ	にぶい 橙	
411	125-06	ロクロ土師器	皿	4	ク-B18	SE54036 外下層 青灰粘質土	口縁部2/12	10.2	-	1.4	内:ナ 外:ナ	灰黄	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
412	123-07	ロクロ土師器	皿	4	ク-B18	SE54036	底部9/12	-	5.5	1.6	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕	にぶい 黄橙	
413	125-05	土師器	甕	4	ク-B18	SE54036下層	口縁部片	-	-	-	内:コナテ 外:コナテ	にぶい 黄橙	
414	123-04	灰軸陶器	椀	4	ク-B18	SE54036下層	底部3/12	-	6.5	3.6	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕	灰白	
415	123-02	山茶碗	椀	4	ク-B18	SE54036 No1	口縁部6/12 底部完形	16.2	7.3	5.7	内:ロコナテ、灰軸 外:ロコナテ、糸切痕、モシクワ痕	灰白	内面に黒色付着物
416	123-01	灰軸陶器	椀	4	ク-B18	SE54036 No2	ほぼ完形	16.0	7.3	5.4	内:ロコナテ、灰軸 外:ロコナテ、糸切痕、モシクワ痕	明 オリーブ	または初期山茶碗
417	123-03	灰軸陶器	椀	4	ク-B18	SE54036枠内	底部6/12	-	6.5	2.4	内:ロコナテ 外:ロコナテ、灰軸	灰黄	
418	125-03	ロクロ土師器	椀	4	ク-B18	SE54036枠内	底部3/12	-	7.8	2.1	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕	灰白	
419	124-02	瓦	平瓦	4	ク-B18	SE54036枠内 土器No1	1/4	-	-	厚2.4	凹面:布目 凸面:縄叩き	にぶい 橙	
420	109-08	土師器	杯	4	オ-N13	SB54042-P1 (オ-N13P1t3)	小片	-	-	-	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、コナテ	にぶい 橙	
421	109-09	土師器	甕	4	オ-N13	SB54042-P2 (オ-N13P1t1)	口縁部片	-	-	-	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、コナテ	浅黄橙	
422	125-01	土師器	皿	4	オ-P14	SB54041-P3 (オ-P14P1t1)	3/12	10.1	-	1.8	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、ナテ、コナテ	灰白	
423	109-03	土師器	皿	4	オ-P15	SB54041-P2 (オ-P15P1t3)	口縁部2/12	8.3	-	1.6	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、コナテ	灰白	
424	109-04	土師器	杯	4	オ-P15	SB54041-P1柱痕 (オ-P15P1t2)	小片	-	-	-	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、コナテ	浅黄橙	
425	125-04	土師器	甕	4	ク-B18	SE54040	口縁部1/12	23.6	-	2.9	内:ナテ、コナテ 外:コナテ	浅黄橙	
426	636-03	その他	鉄滓	4	ク-B19	SE54040	小片	3.6	2.5	1.8			23.3g 椀形滓、下面が強く磁着
427	129-05	山茶碗	椀	5	ケ-D13	SD55004	底部3/12	-	7.0	2.2	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕、モシクワ痕	灰白	
428	128-06	陶器 (常滑)	片口鉢	5	ケ-D12・13	SD55004	口縁部片	-	-	-		灰褐	
429	129-01	土師器	杯	5	ケ-J13	SB55005-P10榎方 (ケ-J13P1t2)	1/12	15.9	-	-	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、ナテ、コナテ	浅黄橙	
430	126-05	土師器	杯	5	ケ-J13	SB55005-P10榎方 (ケ-J13P1t2)	1/12	14.8	-	2.3	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、コナテ	橙	
431	126-02	土師器	杯	5	ケ-K12	SB55005-P3柱痕 (ケ-K12P1t1)	小片	-	-	2.7	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、コナテ	浅黄橙	
432	129-03	土師器	杯	5	ケ-L12	SB55005-P5榎方 (ケ-L12P1t2)	1/12	11.8	-	2.4	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、コナテ	にぶい 黄橙	
433	126-04	土師器	杯	5	ケ-L12	SB55005-P5柱痕 (ケ-L12P1t2)	1/12	12.8	-	2.3	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、コナテ	浅黄橙	
434	129-02	土師器	杯	5	ケ-L12	SB55005-P5柱痕 (ケ-L12P1t2)	2/12	13.6	-	2.1	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、コナテ	灰白	
435	127-05	土師器	杯	5	ケ-L13	SB55005-P7榎方 (ケ-L13P1t1)	1/12	14.2	-	2.1	内:工具ナテ、コナテ 外:ナテ、ナテ、コナテ	にぶい 橙	
436	130-03	灰軸陶器	椀	5	ケ-J12	SB55005-P5榎方 (ケ-J12P1t2)	口縁部片	-	-	-	内:ロコナテ 外:ロコナテ	灰白	
437	130-04	灰軸陶器	椀	5	ケ-J13	SB55005-P10柱拵取 (ケ-J13P1t2)	口縁部1/12	14.8	-	3.5	内:ロコナテ 外:ロコナテ	灰白	
438	130-02	灰軸陶器	椀	5	ケ-K12	SB55005-P3榎方 (ケ-K12P1t1)	口縁部2/12	16.6	-	2.8	内:ロコナテ 外:ロコナテ	灰白	
439	130-05	灰軸陶器	椀	5	ケ-K13	SB55005-P8柱拵取 (ケ-K13P1t2)	口縁部1/12 底部12/12	14.0	6.5	4.5	内:ロコナテ 外:ロコナテ	灰白	
440	130-06	灰軸陶器	椀	5	ケ-J13	SB55005-P10柱拵取 (ケ-J13P1t2)	9/12	-	6.2	-	内:ロコナテ 外:ロコナテ	灰白	
441	128-04	土師器	甕	5	ケ-K12	SB55005-P3柱痕 (ケ-K12P1t1)	口縁部2/12	16.6	-	1.8	内:コナテ 外:ナテ、コナテ	浅黄橙	
442	128-02	土師器	甕	5	ケ-J12	SB55005-P5榎方 (ケ-J12P1t2)	口縁部 1/12	15.6	-	3.0	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、コナテ	浅黄橙	
443	127-04	土師器	甕	5	ケ-L12	SB55005-P5柱痕 (ケ-L12P1t2)	口縁部片	-	-	-	内:コナテ 外:コナテ	にぶい 橙	
444	128-01	土師器	甕	5	ケ-K13	SB55005-P8拵取 (ケ-K13P1t2)	口縁～胴部 1/12	18.6	-	5.7	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、コナテ	にぶい 黄橙	口縁部外面に煤付着
445	126-03	土師器	鉢	5	ケ-Y12	SE55001	1/12	10.6	7.4	5.7	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、コナテ	浅黄橙	
446	129-07	須恵器	杯蓋	5	ケ-Y12	SE55001	口縁部片	-	-	-	内:コナテ 外:コナテ	灰	
447	129-06	須恵器	杯身	5	ケ-Y12	SE55001	底部3/12	-	7.4	2.0	内:コナテ 外:コナテ、ハチ切り	灰	
448	128-03	土師器	甕	5	ケ-Y12	SE55001	口縁～胴部 2/12	17.8	-	5.3	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、コナテ	橙	
449	126-01	土師器	甕	5	ケ-Y12	SE55001	口縁～肩部 1/12	39.4	-	8.2	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、コナテ	浅黄橙	
450	129-04	土製品	土鏝	5	ケ-Y12	SE55001	完形	長6.6	幅1.3	-		橙	重さ7.7g
451	132-05	ロクロ土師器	椀	6	テ-M22	SK56001	底部1/12	-	4.4	2.7	内:ロコナテ 外:ロコナテ	浅黄橙	
452	132-03	山茶碗	椀	6	テ-M22・23	SK56001	底部4/12	-	8.7	2.0	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕	灰白	
453	132-02	陶器	壺	6	テ-M22・23	SK56002	底部片	-	11.0	4.7	内:ロコナテ 外:ロコナテ、リ	灰白	
454	137-01	陶器	壺	6	テ-KL23	SD56005	底部3/12	-	8.4	1.9	内:ロコナテ 外:ロコナテ、自然釉	灰白	
455	137-02	山茶碗	椀	6	テ-KL23	SD56005	底部片	-	6.8	2.0	内:ロコナテ 外:ロコナテ	灰白	
456	138-03	土師器	杯	6	テ-L23	SE56006 井戸枠内	4/12	14.0	-	2.8	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、ナテ、コナテ	にぶい 橙	底部外面に墨書「七西井」
457	138-02	土師器	杯	6	テ-L23	SE56006 井戸枠内	1/12	14.2	-	2.7	内外とも摩滅	にぶい 黄橙	
458	138-01	土師器	杯	6	テ-L23	SE56006 井戸枠内下層	完形	16.0	-	4.2	内:螺旋状・放射状暗文 外:ナテ、ナテ、コナテ	にぶい 橙	
459	137-03	土師器	杯	6	テ-L23・24	SE56006	7/12	13.8	-	3.7	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、ナテ、コナテ	橙	
460	137-07	緑釉陶器	椀	6	テ-L24	SE56006 掘方上層	口縁部片	-	-	-	内:ロコナテ 外:ロコナテ	オリーブ 黄	または皿
461	137-05	須恵器	壺	6	テ-L24	SE56006 掘方上層	底部2/12	-	10.4	-	内:ロコナテ 外:ロコナテ、リ	灰	
462	137-06	土師器	甕	6	テ-L23	SE56006 掘方上層	口縁部片	-	-	-	内:コナテ 外:コナテ	にぶい 黄橙	
463	137-04	須恵器	甕	6	テ-L23・24	SE56006上層	底部1/12	-	12.0	4.1	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、ナテ	灰白	
464	138-04	志摩式 製塩土器		6	テ-L23	SE56006 井戸枠内	小片	-	-	-	内:ナテ 外:ナテ、ナテ	橙	
465	139-06	土師器	杯	6	テ-KL24	SK56007	3/12	11.8	-	2.2	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、ナテ、コナテ	にぶい 黄橙	
466	139-08	土師器	杯	6	テ-KL24	SK56007	4/12	12.6	-	2.8	内:ナテ、コナテ 外:摩滅	にぶい 橙	
467	140-03	土師器	杯	6	テ-KL24	SK56007	1/12	12.0	-	2.6	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、ナテ、コナテ	にぶい 黄橙	
468	139-04	土師器	皿	6	テ-KL24	SK56007	1/12	10.8	-	1.1	内:ナテ、コナテ 外:ナテ、ナテ、コナテ	にぶい 黄橙	呑み火

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
469	140-02	土師器	杯	6	テ-KL24	SK56007	3/12	13.5	-	3.0	内:ナナナ 外:ナナナ、コナナ	浅黄橙	
470	139-03	土師器	杯	6	テ-KL24	SK56007	2/12	13.6	-	3.0	内:ナナナ 外:ナナナ、コナナ	にぶい 黄橙	
471	139-07	土師器	杯	6	テ-KL24	SK56007	1/12	13.4	-	2.9	内:ナナナ 外:ナナナ、コナナ	にぶい 橙	
472	140-01	土師器	台付鉢	6	テ-KL24	SK56007	底部1/12	-	15.4	5.2	内:ナ 外:ナ、ナ	にぶい 黄橙	
473	139-05	山茶碗	椀	6	テ-KL24	SK56007	底部片	-	8.0	2.0	内:コナナ 外:コナナ	灰白	
474	139-02	土師器	鉢	6	テ-KL24	SK56007	口縁～胴部 1/12	16.8	-	3.9	内:ナナナ 外:ナ、コナナ	にぶい 黄橙	
475	139-01	土師器	鉢	6	テ-KL24	SK56007	口縁～胴部 2/12	20.0	-	5.5	内:ナナナ 外:ナ、コナナ	にぶい 黄橙	
477	143-04	灰軸陶器	椀	6	テ-M25 I-M1	SE56013	底部3/12	-	6.0	2.2	内:コナナ、施軸 外:コナナ、糸切後ナ	灰白	
478	141-04	土師器	皿	6	テ-M23	SK56014	口縁部片	-	-	-	内:コナナ、放射状暗文 外:ナ、コナナ	橙	
479	141-05	土師器	壺	6	テ-M23	SK56014	口縁部3/12	15.0	-	3.4	内:工具ナ、コナナ 外:ナ、コナナ	橙	
480	141-01	土師器	皿	6	テ-M23・24	SK56010	3/12	13.8	-	3.2	内:ナナナ 外:ナナナ、コナナ	灰白	
481	143-02	山茶碗	椀	6	テ-M22・23	SK56010	底部5/12	-	8.4	4.1	内:コナナ 外:コナナ、糸切後ナ	灰白	
482	140-05	土師器	鍋	6	テ-M22・23	SK56010	口縁部片	-	-	-	内:コナナ 外:コナナ	にぶい 黄橙	
483	142-04	土師器	甕	6	テ-LM25	SK56011	口縁部片	-	-	-	内:コナナ 外:ナ、コナナ	にぶい 黄橙	
484	142-02	土師器	甕	6	テ-LM25	SK56011	口縁部 2/12	23.0	-	3.0	内:工具ナ、ナ、コナナ 外:ナ、コナナ	浅黄橙	
485	133-02	クロ土師器	皿	6	テ-M20	SE56003	完形	9.4	5.6	1.8	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕	浅黄橙	
486	134-06	クロ土師器	皿	6	テ-M20	SE56003	口縁部9/12 底部12/12	8.4	4.2	2.0	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕	橙	
487	134-07	クロ土師器	皿	6	テ-M20	SE56003下層	底部12/12	-	4.9	1.0	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕	にぶい 橙	
488	134-05	クロ土師器	皿	6	テ-M20	SE56003	底部6/12	-	7.2	1.8	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕	にぶい、褐	または椀
489	132-04	クロ土師器	椀	6	テ-M20	SE56003上層	口縁部3/12	16.0	-	2.9	内:コナナ 外:コナナ	浅黄橙	または皿
490	133-01	土製品	土鍾	6	テ-LM20	SE56003 北側上層	一部欠損	長7.8	幅3.1	-	ナ、ナ	浅黄橙	重さ61.1g
491	131-04	山茶碗	椀	6	テ-LM20	SE56003 北側上層	底部12/12	-	7.5	5.0	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕	灰白	外面に墨痕
492	134-08	陶器	耳皿	6	テ-LM20	SE56003 北側上層	下部6/12	-	4.0	2.9		灰黄	
493	132-06	山茶碗	小椀	6	テ-M20	SE56003上層	完形	8.9	4.1	5.2	内:コナナ、灰軸 外:コナナ、糸切後ナ	灰 オリーブ	
494	134-04	山茶碗	小皿	6	テ-M20	SE56003	口縁部6/12 底部10/12	9.2	4.0	2.7	内:コナナ 外:コナナ、モシナ痕	灰白	
495	134-02	山茶碗	小皿	6	テ-LM20	SE56003 北側上層	口縁部1/12 底部5/12	9.6	2.4	3.0	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕	灰	
496	132-01	山茶碗	小椀	6	テ-M20	SE56003上層	口縁部1/12 底部12/12	10.4	4.7	3.3	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕	灰白	
497	134-03	灰軸陶器	椀	6	テ-LM20	SE56003 北側上層	底部4/12	-	6.2	1.3	内:コナナ 外:コナナ	灰白	
498	135-02	山茶碗	椀	6	テ-M20	SE56003 井戸枠内	底部10/12	-	5.4	2.2	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕、モシナ痕	褐灰	
499	131-03	山茶碗	椀	6	テ-LM20	SE56003 北側上層	3/12	15.2	8.4	5.3	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕、モシナ痕	灰白	
500	135-01	山茶碗	椀	6	テ-M20	SE56003 井戸枠内	口縁部2/12 底部3/12	15.2	7.9	5.3	内:コナナ 外:コナナ、モシナ痕	灰	
501	134-01	山茶碗	椀	6	テ-L20・21	SE56003上層	口縁部3/12 底部7/12	16.0	7.2	5.3	内:コナナ 外:コナナ、モシナ痕	灰白	
502	131-01	山茶碗	椀	6	テ-M20	SE56003	3/12	17.1	7.1	5.1	内:コナナ 外:コナナ、モシナ痕	灰白	
503	131-02	山茶碗	椀	6	テ-M20	SE56003上層	3/12	17.1	8.0	6.2	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕、モシナ痕	灰白	
504	133-03	土師器	鍋	6	テ-M20	SE56003上層	口縁～肩部 2/12	21.0	-	7.0	内:ナ、コナナ 外:コナナ	浅黄橙	外面に煤付着
505	135-06	土師器	皿	6	テ-L21	SE56004	口縁部2/12	11.6	-	2.5	内:ナ、コナナ 外:ナ、コナナ	灰白	
506	135-04	土師器	皿	6	テ-L21	SE56004	口縁部2/12	12.0	-	2.5	内:ナ、コナナ 外:ナ、コナナ	灰白	
507	136-05	土師器	皿	6	テ-K21	SE56004 内側	口縁～胴部 4/12	11.8	-	2.1	内:ナ、コナナ 外:ナ、コナナ	にぶい 黄橙	内面に煤付着
508	135-05	土師器	皿	6	テ-L21	SE56004	口縁部1/12	12.4	-	2.5	内:ナ、コナナ 外:ナ、コナナ	灰白	
509	135-07	山茶碗	小皿	6	テ-L21	SE56004	口縁部7/12 底部12/12	8.4	4.2	2.3	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕	灰白	
510	135-08	山茶碗	椀	6	テ-L21	SE56004	底部5/12	-	5.0	1.8	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕	黄灰	
511	136-02	山茶碗	椀	6	テ-L21	SE56004 掘方上層	底部9/12	-	7.0	2.5	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕	灰白	高台内に墨書「十」
512	136-04	山茶碗	椀	6	テ-L21	SE56004 内側	底部12/12	-	7.2	2.2	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕、砂粒痕	灰白	
513	136-06	白磁 (中国)	椀	6	テ-L21	SE56004 内側	口縁部1/12	16.6	-	2.2	内:コナナ 外:コナナ	灰白	
514	136-03	山茶碗	椀	6	テ-K21	SE56004 掘方上層	11/12	14.8	6.2	5.3	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕、モシナ痕	灰白	
515	136-07	青磁 (中国)	椀	6	テ-L21	SE56004 内側	底部4/12	-	4.6	2.0	内:花文 外:コナナ	オリーブ 灰	
516	135-03	陶器	鉢	6	テ-L21	SE56004	底部1/12	-	17.8	7.2	内:コナナ 外:コナナ、コナナ	黄灰	
517	136-01	土師器	鍋	6	テ-L21	SE56004 掘方上層	口縁～頸部 1/12	33.0	-	5.8	内:ナ、コナナ 外:ナ、コナナ	にぶい 黄橙	
518	141-02	土師器	杯	6	テ-L20	SK56015	3/12	15.2	-	3.0	内:ナ、コナナ 外:ナ、コナナ	橙	
519	141-03	土師器	甕	6	テ-LM20	SK56015	口縁～胴部 2/12	16.8	-	4.4	内:ナ、コナナ 外:ナ、コナナ	浅黄橙	外面に煤付着
520	142-01	土師器	甕	6	テ-LM20	SK56015	口縁～頸部 2/12	28.8	-	5.6	内:ナ、コナナ 外:ナ、コナナ	にぶい 黄橙	煤付着
521	143-06	土師器	甕	6	テ-K20	SK56018	底部2/12	-	15.4	4.5	内:ナ 外:ナ、ナ	にぶい 黄橙	
522	143-03	灰軸陶器	椀	6	テ-K20	SK56018	底部2/12	-	7.6	1.8	内:コナナ 外:コナナ、糸切後ナ	灰白	
523	145-03	土師器	皿	6	テ-M22	SK56024	口縁部3/12	13.8	-	2.6	内:ナ、コナナ 外:ナ、コナナ	灰白	
524	144-07	山茶碗	椀	6	テ-M22	SK56024	底部片	-	7.6	2.0	内:コナナ 外:コナナ、糸切痕、モシナ痕	灰白	
525	145-04	土師器	鍋	6	テ-M26	SK56024	口縁部片	-	-	-	内:コナナ 外:コナナ	灰黄褐	
526	143-05	須恵器	杯	6	テ-K20	SK56018	底部2/12	-	7.2	2.1	内:コナナ 外:コナナ	灰	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
527	144-03	山茶碗	椀	6	テ-L23	SK56021	口縁部3/12 底部12/12	18.0	7.5	6.5	内:ロコナテ、灰軸漬け掛け 外:ロコナテ、糸切痕、灰軸	黄灰	輪花3方
528	144-04	山茶碗	椀	6	テ-L23	SK56021	底部8/12	-	8.8	4.6	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕、モシクワ痕	灰 オリーブ	
529	144-05	山茶碗	椀	6	テ-L23	SK56021	底部12/12	-	7.5	3.6	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕、砂粒痕	灰白	
530	142-03	土師器	鍋	6	テ-KM25	SK56021	口縁～肩部 1/12	19.8	-	5.5	内:工具テ、ヨコテ 外:工具テ、ヨコテ	にぶい 黄橙	
531	143-01	土師器	鍋	6	テ-L22	SK56012	口縁部1/12	18.6	-	1.9	内:ヨコテ 外:ヨコテ	浅黄橙	
532	144-06	山茶碗	椀	6	テ-M23	SK56022	底部12/12	-	8.0	3.8	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕、モシクワ痕	灰白	
533	158-01	土師器	杯	6	テ-M19	SK56028上層	口縁部片	-	-	-	内:ヨコテ 外:ヨコテ	橙	
534	157-02	須恵器	蓋	6	テ-M19	SK56028上層	口縁部1/12	18.8	-	1.6	内:ロコナテ、ロコナテリ 外:ロコナテ	灰白	
535	158-02	土師器	瓶	6	テ-M19	SK56028	口縁部片	-	-	-	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	にぶい 黄橙	
536	158-03	土師器	瓶	6	テ-M19	SK56028	口縁部片	-	-	-	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	にぶい 黄橙	
537	157-01	土師器	甕	6	テ-M19	SK56028上層	口縁部2/12	16.6	-	2.8	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	にぶい 黄橙	
538	156-03	土師器	甕	6	テ-M19	SK56028上層	口縁～胴部 3/12	-	-	-	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	にぶい 橙	
539	145-02	灰軸陶器	段皿	6	テ-L21	SD56023	口縁部1/12	17.6	-	2.0	内:ロコナテ、灰軸ゆ塗り 外:ロコナテ、ロコナテリ、灰軸	灰白	
540	144-02	須恵器	瓶	6	テ-L21	SD56023	底部9/12	-	11.8	4.6	内:ロコナテ 外:ロコナテリ	灰	
541	144-01	須恵器	瓶	6	テ-L21	SD56023	胴部～底部 6/12	-	13.3	10.3	内:ロコナテ 外:ロコナテ、ロコナテリ、糸切痕	灰白	
542	145-05	土製品	土鉢	6	テ-L21	SD56023	1/2	長3.3	幅1.3	-	様、テ	灰白	4.0g
543	161-03	土師器	杯	6	テ-L13	SK56032	11/12	11.3	-	3.7	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	灰白	
544	162-01	土師器	甕	6	テ-L13	SK56022	10/12	14.8	-	16.2	内:テ、ヨコテ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	浅黄橙	
545	161-02	土師器	甕	6	テ-L13	SK56032	胴部片	-	-	-	内:工具テ 外:テ、ヨコテ	浅黄橙	外面にテ描き
546	142-05	土師器	甕	6	テ-M23	SK56020	口縁部片	-	-	-	内:ヨコテ 外:ヨコテ	にぶい 黄橙	
547	147-01	土師器	壺	6	テ-M23	SX56026	胴部片	-	-	-	内:テ 外:テ	橙	
548	146-01	土師器	壺	6	テ-L24	SX56026	胴～底部 12/12	-	5.2	23.1	内:テ、ヨコテ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ、ヨコテ	にぶい 黄橙	
549	161-04	土師器	杯	6	テ-K14～17	SD56033	1/12	11.4	-	2.3	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	浅黄橙	
550	194-04	土師器	杯	6	テ-L22	SB56035-P1掘方 (テ-L22P1t6)	1/12	12.6	-	2.7	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	橙	
551	193-05	土師器	杯	6	テ-M21	SB56035 (テ-M21P1t3)	口縁部1/12	12.8	-	2.3	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	橙	
552	195-05	土師器	杯	6	テ-L22	SB56035-P1掘方 (テ-L22P1t6)	口縁部1/12	-	-	-	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	浅黄橙	
553	194-06	志摩式 製塩土器		6	テ-L22	SB56035-P1掘方 (テ-L22P1t6)	小片	-	-	-	内:テ 外:テ、ヨコテ、モシクワ痕	明赤褐	
554	195-04	土師器	甕	6	テ-L22	SB56035-P1掘方 (テ-L22P1t6)	口縁部片	-	-	-	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	浅黄橙	
555	194-05	土製品	土鉢	6	テ-M22	SB56035 (テ-M22P1t2)	完形	長5.1	幅1.3	-	テ	浅黄橙	重さ5.7g
556	160-07	土師器	小皿	6	テ-L13	SK56031	2/12	8.4	-	1.0	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	橙	
557	159-06	陶器 (常滑)	火鉢	6	テ-L13	SK56031	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ	浅黄橙	
558	161-01	土師器	焙烙	6	テ-L13	SK56031	3/12	45.6	-	5.3	内:テ、ヨコテ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ、ヨコテ	黒褐	
559	193-06	土師器	杯	6	ト-L2	SB56034-P1 (ト-L2P1t3)	口縁部1/12	14.8	-	1.7	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	橙	
560	195-02	灰軸陶器	段皿	6	ト-M2	SB56034-P2掘方 (ト-M2P1t1)	胴部片	-	-	-	内:ロコナテ、灰軸ゆ塗り 外:ロコナテ	灰白	
561	152-01	土師器	壺	6	テ-L18・19	SX56027	5/12	14.0	6.0	28.4	内:テ、ヨコテ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ、ヨコテ	浅黄橙	
562	149-01	土師器	壺	6	テ-L18・19	SX56027	口縁部5/12 底部12/12	15.5	7.2	27.9	内:テ、ヨコテ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ、ヨコテ	浅黄橙	
563	154-01	土師器	壺	6	テ-L17	SX56027	ほぼ完形	14.6	6.8	25.5	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ、ヨコテ	浅黄橙	
564	148-01	土師器	壺	6	テ-L18・19	SX56027	口縁部～胴部 12/12	13.7	-	22.8	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	にぶい 橙	
565	151-05	土師器	壺	6	テ-N15	SX56027上層	口縁～頸部 3/12	17.2	-	3.5	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	にぶい 褐	
566	150-01	土師器	壺	6	テ-L18・19	SX56027	口縁部3/12 胴部12/12	16.8	-	24.0	内:工具テ、ヨコテ、赤彩 外:テ、ヨコテ、ヨコテ、赤彩	明赤褐	ペンガラで赤彩
567	154-02	土師器	壺	6	テ-L18・19	SX56027	底部片	-	6.0	3.3	内:テ 外:テ、ヨコテ	灰白	
568	151-02	土師器	鉢	6	テ-M19	SX56027	口縁4/12 底部12/12	12.4	3.6	5.2	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	にぶい 黄橙	
569	151-04	土師器	台付甕	6	テ-L17	SX56027	口縁～胴部 7/12	15.2	-	5.6	内:磨滅 外:テ、ヨコテ	灰黄	
570	151-03	土師器	甕	6	テ-N15	SX56027	口縁～頸部 2/12	35.6	-	5.3	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	にぶい 橙	
571	153-04 153-05	土師器	台付甕	6	テ-L17	SX56027	口縁部2/12 台部12/12	14.3	7.3	16.5 4.5	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	浅黄橙	
572	153-03	土師器	高杯	6	テ-L17	SX56027	杯部6/12	23.7	-	14.2	内:テ 外:テ	橙	透孔3方
573	151-01	土師器	高杯	6	テ-L18・19	SX56027	杯部9/12	17.4	-	6.5	内:テ、ヨコテ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ、ヨコテ	にぶい 橙	
574	153-01	土師器	高杯	6	テ-M19	SX56027	杯部3/12	13.1	-	4.2	内:磨滅 外:テ	灰白	
575	152-02	土師器	高杯	6	テ-L18・19	SX56027 土器集中	脚部片	-	-	-	内: 外:テ、ヨコテ	にぶい 橙	
576	153-02	土師器	高杯	6	テ-M19	SX56027	脚部片	-	-	-	内: 外:テ、ヨコテ	浅黄橙	透孔3方
577	155-02	須恵器	杯	6	テ-N15	SX56027	11/12	13.2	-	2.7	内:ロコナテ 外:ロコナテ	褐灰	
578	155-04	土師器	杯	6	テ-N15	SX56027	4/12	17.6	-	4.2	磨滅	橙	
579	145-01	瓦	平瓦	6	ツ-L11	SD56025	小片	-	-	-	凹面:布目 凸面:縄叩き	灰	
580	142-06	志摩式 製塩土器		6	テ-K20	SK56019	小片	-	-	-	内:テ 外:テ	橙	
581	141-06	土師器	壺	6	テ-K20	SK56019	口縁部1/12	13.0	-	3.0	内:ヨコテ 外:ヨコテ	橙	
582	160-06	土師器	杯	6	テ-L14・15	SE56029上層	口縁部片	-	-	-	内:テ、ヨコテ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ、ヨコテ	橙	
583	160-03	土師器	杯	6	テ-KL15・16	SE56029	1/12	11.4	-	3.6	内:テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	灰白	底部外面にテ描き

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
584	157-04	土師器	杯	6	テ-KL15・16	SE56029	2/12	10.5	-	2.8	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	橙	
585	157-03	土師器	杯	6	テ-KL15・16	SE56029	2/12	10.3	-	3.7	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	浅黄橙	
586	160-02	土師器	杯	6	テ-KL15・16	SE56029	1/12	10.2	-	3.3	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	浅黄橙	
587	160-04	土師器	杯	6	テ-KL15・16	SE56029	1/12	12.2	-	3.9	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	にぶい 橙	
588	155-03	土師器	杯	6	テ-KL15・16	SE56029	3/12	13.8	-	4.1	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	浅黄橙	
589	155-05	土師器	杯	6	テ-KL15・16	SE56029	6/12	12.3	-	3.6	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	浅黄橙	
590	157-05	土師器	杯	6	テ-KL15・16	SE56029	1/12	10.4	-	3.5	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	橙	
591	155-06	土師器	杯	6	テ-L15・16	SE56029	3/12	11.8	-	3.9	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	灰白	
592	155-08	土師器	杯	6	テ-KL15・16	SE56029	3/12	11.8	-	3.4	摩滅	浅黄橙	
593	160-01	土師器	杯	6	テ-L15・16	SE56029	2/12	11.8	-	3.3	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	浅黄橙	
594	155-07	土師器	杯	6	テ-KL15・16	SE56029	4/12	12.2	-	3.7	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	浅橙	
595	160-05	土師器	杯	6	テ-KL15・16	SE56029	4/12	11.0	-	4.0	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	浅黄橙	
596	159-05	須恵器	杯	6	テ-L14・15	SE56029上層	口縁部1/12 底部4/12	10.6	6.4	3.0	内:ロカテ 外:ロカテ、ハテ切り	灰	
597	159-02	須恵器	杯	6	テ-L14・15	SE56029上層	口縁部4/12 底部3/12	9.8	6.4	3.4	内:ロカテ 外:ロカテ、ハテ切り、ロカテリ	灰	
598	159-04	須恵器	杯	6	テ-L15・16	SE56029	口縁部1/12 底部4/12	11.4	7.2	3.5	内:テ、ヨナテ 外:ロカテ、ハテ切り	灰白	
599	159-03	須恵器	蓋	6	テ-KL15・16	SE56029	11/12	10.8	-	2.0	内:ロカテ 外:ロカテ、ロカテリ	灰	
600	155-09	須恵器	杯	6	テ-KL15・16	SE56029	1/12	10.7	-	4.0	内:ロカテ 外:ロカテ、ハテ切り	灰白	
601	155-01	須恵器	杯	6	テ-L15・16	SE56029	6/12	12.8	-	4.0	内:ロカテ 外:ロカテ	灰白	
602	158-04	土師器	甌	6	テ-KL15・16	SE56029	口縁部片	-	-	-	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	浅黄橙	
603	156-02	土師器	甌	6	テ-KL15・16	SE56029	口縁～胴部 5/12	13.7	-	8.3	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	にぶい 橙	
604	156-01	土師器	甌	6	テ-L16	SE56029上層	口縁～胴部 9/12	15.0	-	14.8	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	浅黄橙	
605	156-04	土師器	甌	6	テ-L15	SE56029上層	口縁部1/12	15.6	-	4.7	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	浅黄橙	
606	156-05	土師器	甌	6	テ-L16	SE56029上層	口縁部1/12	15.3	-	6.3	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	にぶい 黄橙	
607	159-01	須恵器	甌	6	テ-KL15・16	SE56029	口縁～胴部 1/12	14.0	-	9.8	内:ロカテ、当て具痕(同心円状) 外:ロカテ、ハテ	灰白	
609	636-01	その他	鉄滓	6	テ-L15・16	SE56029	1/2	4.0	4.8	1.5			34.4g 瓶形滓、やや強く磁着
610	163-02	土師器	杯	6	テ-L24	SF56036	7/12	19.6	-	4.6	内:ヨナテ、放射状・螺旋状暗文 外:テ、ヨナテ	橙	
611	163-03	土師器	杯	6	テ-L24	SF56036	12/12	15.8	-	2.9	内:ヨナテ、放射状・螺旋状暗文 外:テ、ヨナテ	橙	
612	194-01	土師器	台付甌	6	テ-M22	SB56063-P1 (テ-M22P1t3)	口縁部1/12	12.8	-	2.6	内:テ、ヨナテ 外:ヨナテ、ハテ	浅黄橙	
613	195-06	土師器	杯	6	テ-M14	SB56065-P1 (テ-M14P1t6)	口縁部片	-	-	-	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	灰白	
614	193-03	土師器	杯	6	テ-M19	SB56064-P1撮方 (テ-M19P1t1)	2/12	13.6	-	2.5	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	橙	
615	193-02	土師器	杯	6	テ-M19	SB56064-P1 (テ-M19P1t1)	2/12	13.6	-	2.5	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	橙	
616	162-02	土師器	杯	6	テ-M19	SB56064-P1柱痕 (テ-M19P1t1)	3/12	15.0	-	3.3	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	にぶい 橙	
617	193-07	土師器	杯	6	テ-M21	SB56064-P2柱痕 (テ-M21P1t1)	4/12	15.4	-	3.0	内:テ、ヨナテ、放射状暗文 外:テ、ヨナテ	橙	
618	197-04	山茶碗	椀	7	テ-N11・12	SD57002	底部6/12	-	6.4	2.1	内:ロカテ 外:ロカテ、糸切痕、モシク痕	灰白	
619	197-06	土師器	甌	7	テ-N11・12	SD57002	口縁～胴部 3/12	13.3	-	4.5	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	にぶい 橙	
621	198-02	土師器	皿	7	テ-J9・10 K9	SE57006	口縁部1/12	13.8	-	2.2	内:テ、ヨナテ 外:摩滅	浅黄橙	
622	198-03	白磁 (中国)	椀	7	テ-J9・10 K9	SE57006	口縁部1/12	18.8	-	3.6	施軸	浅黄	
623	197-07	陶器 (瀬美)	鉢	7	テ-J9・10 K9	SE57006	底部2/12	-	9.6	5.3	内:ロカテ 外:ロカテ、ロカテリ、モシク痕	灰	
624	198-05	山茶碗	椀	7	テ-J9・10 K9	SE57006	底部5/12	-	7.8	1.8	内:ロカテ 外:ロカテ、糸切痕、モシク痕	黄灰	
625	198-04	山茶碗	椀	7	テ-J9・10 K9	SE57006	底部12/12	-	7.8	2.5	内:ロカテ 外:ロカテ、糸切痕	灰白	
626	198-07	山茶碗	椀	7	テ-M3	SD57007	底部10/12	-	6.2	1.8	内:ロカテ 外:ロカテ、糸切痕	灰	
627	198-08	土製品	土鉢	7	テ-M3	SD57007	1/2	長3.1	幅1.2	-	テ	灰白	3.1g
628	198-10	土師器	甌	7	テ-M6	SD57010	口縁部片	-	-	-	内:ヨナテ 外:ヨナテ	橙	
629	198-01	土師器	鍋	7	テ-J1	SD57005	口縁～胴部 1/12	28.4	-	8.0	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	にぶい 黄橙	
630	197-01	土師器	皿	7	テ-M5	SD57001下層	口縁部3/12	9.0	-	2.6	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	浅黄橙	
631	196-03	土師器	椀	7	テ-M5	SD57001	口縁部1/12	16.0	-	3.7	内:ヨナテ 外:テ、ヨナテ	にぶい 橙	
632	197-02	青磁 (中国)	椀	7	テ-K5	SD57001下層	口縁部片	-	-	-	内:青磁軸 外:青磁軸、磁蓋弁文	オリーブ灰	
633	197-03	山茶碗	椀	7	テ-K5	SD57001下層	底部3/12	-	7.4	1.8	内:ロカテ 外:ロカテ、砂粒痕	灰白	
634	196-02	土師器	鍋	7	テ-M5	SD57001	口縁～頸部 2/12	20.2	-	4.8	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	にぶい 黄橙	
635	196-01	土師器	羽釜	7	テ-M5	SD57001下層	口縁～胴部 2/12	32.0	-	16.8	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	浅黄橙	外面に煤付着
636	636-04	その他	鉄滓	7	テ-M5	SD57001下層	小片	3.4	2.4	1.4			15.8g 磁着弱く、やや緑がかかる
637	198-09	土製品	土鉢	7	テ-M6	SD57010	2/3	長4.1	幅1.6	-	テ	にぶい 黄橙	
638	198-06	陶器 (瀬美)	壺	7	テ-J9・10 K9	SE57006	頸部2/12	-	-	-	内:ロカテ、自然軸 外:ロカテ	灰	
639	199-08	土師器	小皿	7	ツ-J12	SX57022 棺内No6	12/12	9.0	-	2.0	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	灰白	
640	200-05	ロクロ土師器	小皿	7	ツ-J16	SX57022 棺内No1	11/12	8.6	-	1.9	内:ロカテ 外:ロカテ、糸切痕	浅黄橙	
641	200-04	ロクロ土師器	小皿	7	ツ-J16	SX57022 棺内No3	12/12	8.8	-	1.7	内:ロカテ 外:ロカテ、糸切痕	浅黄橙	
642	200-03	土師器	皿	7	ツ-J12	SK57022 棺内No5	11/12	14.3	-	2.7	内:テ、ヨナテ 外:テ、ヨナテ	浅黄橙	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
643	201-01	土師器	皿	7	ツ-J12	SX57022 棺内No2	12/12	14.6	-	2.9	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
644	200-06	土師器	皿	7	ツ-J12	SX57022 棺内No4	11/12	15.0	-	3.0	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
645	199-05	土師器	小皿	7	ツ-J12	SX57022 棺外No9	11/12	8.4	-	1.6	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
646	199-07	土師器	小皿	7	ツ-J12	SX57022 棺外No7	11/12	8.9	-	1.8	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
647	201-02	土師器	小皿	7	ツ-J16	SX57022 裏込下層	4/12	8.6	-	1.1		にぶい 橙	
648	199-06	土師器	小皿	7	ツ-J12	SX57022 棺外No8	9/12	9.1	-	1.8	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
649	201-03	土師器	鍋	7	ツ-J16	SX57022	口縁~胴部 1/12	14.6	-	4.3	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	橙	
650	201-04	土師器	壺	7	ツ-L19	SD57023	口縁部1/12	18.6	-	4.4	内:ヨナナ、刺突 外:ヨナナ	にぶい 黄橙	
651	202-02	土師器	皿	7	テ-K3	SK57026	3/12	11.0	-	2.5	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	灰白	
652	202-03	陶器	瓶	7	テ-K3	SK57026	底部1/12	-	13.0	1.9	内: 外:ヨナナナナ	灰白	
653	199-03	土師器	杯	7	ツ-K18・19	SD57017	1/12	16.0	-	2.9	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	橙	
654	199-02	土師器	杯	7	ツ-L19	SD57017	3/12	13.6	-	2.5	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	褐灰	歪み大
655	199-04	土師器	皿	7	ツ-K18・19	SD57017	底部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	橙	底部外面に墨書「美の」
656	199-01	土師器	甕	7	ツ-L19	SD57017	口縁~胴部 1/12	24.2	-	6.6	内:工具ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	にぶい 黄橙	
657	200-02	須恵器	瓶	7	ツ-K18・19	SD57017	底部1/12	-	12.4	7.9	内:ヨナナ 外:ヨナナナナ	灰	
658	200-01	緑釉陶器	把手付瓶	7	ツ-L19	SD57017	底部2/12	-	10.5	6.6	内:ヨナナ、緑釉 外:ヨナナ、ヨナナ、緑釉	浅黄	猿投産 産地:灰白
659	203-01	土師器	小皿	7	ツ-15	SD57029	完形	6.8	-	1.0	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	にぶい 橙	歪み大
660	203-04	青磁 (中国)	碗	7	ツ-14・5	SD57029	小片	-	-	-	内:襷目 外:襷目	オリーブ 黄	同安窯系
661	202-05	山茶碗	碗	7	ツ-K5	SD57029	口縁部2/12 底部2/12	15.0	6.6	5.2	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	灰白	
662	202-06	山茶碗	碗	7	ツ-J5	SD57029	底部4/12	-	7.3	3.4	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕、まじり痕	灰白	
663	202-04	山茶碗	碗	7	ツ-K5	SD57029	底部5/12	-	6.4	2.6	内:ヨナナ、自然釉 外:ヨナナ、糸切痕、砂粒痕	灰白	
664	203-03	土師器	鍋	7	ツ-14・5	SD57029	口縁部片	-	-	-	内:ヨナナ 外:ヨナナ	にぶい 黄橙	
665	203-02	土師器	鍋	7	ツ-J5	SD57029	口縁~頸部 1/12	17.0	-	3.5	内:ナナ、ヨナナ 外:ヨナナ	にぶい黄褐	
666	201-05	灰釉陶器	皿	7	ツ-I12	SK57024	底部2/12	-	6.6	1.3	内:ヨナナ 外:ヨナナ	灰白	
667	201-07	山茶碗	碗	7	ツ-H11	SD57025	底部2/12	-	9.2	2.4	内:ヨナナ、自然釉 外:ヨナナ、糸切痕	灰白	
668	201-06	山茶碗	碗	7	ツ-I11	SD57025	底部5/12	-	7.6	4.3	内:ヨナナ、自然釉 外:ヨナナ、糸切痕、まじり痕	灰白	
669	202-01	瓦	平瓦	7	ツ-J11	SD57025	小片	-	-	厚3.1	内:布目 外:襷目	灰	
670	210-03	土師器	杯	7	ツ-L17	SB57043-P1柱痕 (ツ-L17P1t2)	2/12	13.8	-	2.6	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	にぶい 黄橙	
671	210-02	土師器	杯	7	ツ-J17	SB57043-P2 (ツ-J17P1t1)	口縁部片	-	-	-	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
672	210-06	土師器	杯	7	ツ-K15	SB57043-P3柱痕 (ツ-K15P1t4)	口縁部片	-	-	-	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	にぶい橙	
673	227-02	土師器	杯	7	ツ-J12	SB57042-P10 (ツ-J12P1t5)	2/12	12.0	-	2.2	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
674	210-07	土師器	杯	7	ツ-J12	SB57042-P10柱痕 (ツ-J12P1t5)	2/12	11.8	-	2.7	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	灰白	
675	208-02	土師器	杯	7	ツ-J14	SB57042-P7裾方 (ツ-J14P1t3)	5/12	13.5	-	2.9	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	淡橙	
676	227-01	緑釉陶器	段皿	7	ツ-J13	SB57042-P9柱痕 (ツ-J13P1t3)	口縁部2/12	16.7	-	1.4	内:ヨナナ 外:ヨナナ	灰白	
677	212-02	灰釉陶器	碗	7	ツ-K12	SB57042-P2 (ツ-K12P1t5)	底部2/12	-	7.4	1.4	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	灰白	
678	211-05	土師器	甕	7	ツ-K13	SB57042-P3 (ツ-K13P1t2)	口縁~頸部 3/12	15.4	-	5.6	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	にぶい 黄橙	
679	206-05	土師器	皿	7	ツ-IJ4	SK57036	1/12	11.0	-	1.6	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	灰白	
680	205-03	土師器	碗	7	ツ-J1	SK57031	口縁部9/12 底部10/12	14.5	7.1	6.4	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	にぶい 黄橙	
681	206-03	ククロ土師器	碗	7	ツ-J1	SK57031	底部3/12	-	6.8	2.3	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	にぶい 橙	
682	205-04	ククロ土師器	杯	7	ツ-J1	SK57031	底部10/12	-	6.0	2.4	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	浅黄橙	
683	205-05	ククロ土師器	杯	7	ツ-J1	SK57031	底部12/12	-	5.2	1.7	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	浅黄橙	
684	228-06	黒色土器	碗	7	ツ-J1	SK57031	底部片	-	-	-	内:漆、螺旋状暗文 外:ナナ	灰白	内黒
685	206-04	灰釉陶器	碗	7	ツ-J1	SK57031	底部8/12	-	7.1	2.9	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	褐灰	底部焼成後穿孔
686	206-02	灰釉陶器	碗	7	ツ-J1	SK57031	口縁部3/12 底部5/12	13.4	6.8	5.3	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	灰白	
687	206-01	灰釉陶器	碗	7	ツ-J1	SK57031	口縁部3/12 底部6/12	14.6	7.2	4.8	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	灰白	
688	224-03	灰釉陶器	碗	7	ツ-J1	SK57031	口縁部2/12	13.8	-	3.2	内:ヨナナ 外:ヨナナ	灰白	
689	228-05	灰釉陶器	碗	7	ツ-J1	SK57031	口縁部2/12	14.8	-	4.2	内:ヨナナ 外:ヨナナ	灰白	
690	224-05	灰釉陶器	碗	7	ツ-J1	SK57031	口縁部1/12	13.0	-	4.7	内:ヨナナ 外:ヨナナ	灰黄褐	
691	228-04	土師器	鉢	7	ツ-J1	SK57031	口縁部1/12	27.6	-	4.6	内:工具ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	にぶい 黄橙	
692	205-02	土師器	甕	7	ツ-J1	SK57031	口縁~胴部 3/12	11.6	-	6.8	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	にぶい 橙	
693	224-04	土師器	甕	7	ツ-J1	SK57031	口縁~胴部片	-	-	-	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	にぶい 黄橙	
694	205-01	土師器	甕	7	ツ-J1	SK57031	口縁~肩部 3/12	16.6	-	6.0	内:工具ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	橙	
695	204-06	土師器	甕	7	ツ-J1	SK57031	口縁~胴部片	-	-	-	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
696	228-03	土師器	皿	7	H-125 ツ-I1・2	SD57032	2/12	13.6	-	2.5	内:工具ナナ、ヨナナ 外:工具ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
697	228-02	土師器	皿	7	H-125 ツ-I1・2	SD57032	1/12	13.4	-	2.4	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
698	204-02	土師器	皿	7	H-125 ツ-I2	SD57032	2/12	13.8	-	1.9	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	灰白	
699	228-01	瓦器	碗	7	H-125 ツ-I1・2	SD57032	底部片	-	-	-	内:漆、螺旋状暗文 外:漆	灰	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
700	204-05	山茶碗	皿	7	ツ-I1	SD57032	口縁部9/12 底部12/12	8.0	3.2	2.0	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	灰白	
701	204-04	山茶碗	椀	7	H-125 ツ-I1・2	SD57032	底部5/12	-	6.6	3.6	内:コナテ、自然軸 外:コナテ	灰白	
702	204-03	山茶碗	椀	7	ツ-I1	SD57032	底部12/12	-	6.6	2.8	内:コナテ 外:コナテ	灰白	
703	204-01	土師器	鍋	7	ツ-I1	SD57032	口縁部2/12	22.4	-	3.2	内:テ、コナテ 外:テ、コナテ	灰白	
704	225-02	土製品	土錘	7	H-125 ツ-I1・2	SD57032	3/4	長3.3	幅0.9	-	テ	にふい 黄橙	重さ1.7g
705	225-01	土製品	土錘	7	H-125 ツ-I1・2	SD57032	完形	長4.4	幅1.0	-	テ	にふい 黄橙	重さ2.4g
706	226-06	土師器	杯	7	ツ-K15	SB57041-P7掘方 (ツ-K15P1t1)	1/12	13.8	-	2.7	内:テ、コナテ、放射状暗文 外:テ、テ、コナテ	にふい 橙	
707	207-01	土師器	杯	7	ツ-K16	SB57041-P23柱痕 (ツ-K16P1t2)	2/12	11.9	-	1.9	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
708	226-08	土師器	杯	7	ツ-I14	SB57041-P4掘方 (ツ-I14P1t2)	1/12	12.0	-	1.7	内:テ、コナテ 外:テ、コナテ	浅黄橙	
709	226-07	土師器	杯	7	ツ-K14	SB57041-P15 (ツ-K14P1t7)	1/12	12.0	-	2.1	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
710	226-05	土師器	杯	7	ツ-K15	SB57041-P16柱痕 (ツ-K15P1t2)	2/12	12.6	-	2.5	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	にふい 橙	
711	208-01	土師器	杯	7	ツ-K16	SB57041-P23 (ツ-K16P1t2)	2/12	13.1	-	2.1	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
712	226-04	土師器	杯	7	ツ-K16	SB57041-P23 (ツ-K16P1t2)	1/12	13.2	-	3.0	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
713	226-03	土師器	杯	7	ツ-I13	SB57041-P11 (ツ-I13P1t8)	1/12	14.0	-	2.9	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
714	208-05	土師器	杯	7	ツ-K15	SB57041-P16掘方 (ツ-K15P1t4)	11/12	14.1	-	3.0	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	灰白	底部外面に墨書「保平カ」
715	207-03	土師器	杯	7	ツ-K16	SB57041-P23 (ツ-K16P1t2)	1/12	13.8	-	2.3	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	橙	
716	207-02	土師器	杯	7	ツ-K16	SB57041-P23 (ツ-K16P1t2)	2/12	15.0	-	3.0	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
717	212-03	土師器	杯	7	ツ-J14	SB57041-P8 (ツ-J14P1t2)	底部片	-	-	-		浅黄橙	外面に墨書
718	207-04	灰軸陶器	皿	7	ツ-K15	SB57041-P7 (ツ-K15P1t1)	2/12	13.8	6.6	2.6	内:コナテ 外:コナテ、コナテ	灰白	重ね焼痕跡あり
719	207-05	灰軸陶器	椀	7	ツ-K14	SB57041-P6 (ツ-K14P1t2)	底部3/12	-	7.0	2.2	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	灰白	
720	226-09	灰軸陶器	椀	7	ツ-K15	SB57041-P7 (ツ-K15P1t1)	底部1/12	-	7.0	1.0	内:コナテ 外:コナテ	灰白	
721	209-05	志摩式 製塩土器		7	ツ-K15	SB57041-P7 (ツ-K15P1t1)	小片	-	-	-	内:テ 外:テ	橙	
722	209-03	土師器	甕	7	ツ-K16	SB57041-P23柱痕 (ツ-K16P1t2)	口縁～胴部 2/12	14.4	-	4.3	内:テ、コナテ 外:テ、コナテ	浅黄橙	
723	209-01	土師器	甕	7	ツ-I15	SB57041-P2柱痕 (ツ-I15P1t1)	口縁部1/12	15.8	-	2.8	内:板テ、テ、コナテ 外:テ、コナテ	浅黄橙	
724	209-02	土師器	甕	7	ツ-K15	SB57041-P7掘方 (ツ-K15P1t1)	口縁部2/12	19.4	-	3.0	内:テ、コナテ 外:テ、コナテ	淡橙	
725	226-01	土師器	甕	7	ツ-J16	SB57041-P10 (ツ-J16P1t2)	口縁部1/12	21.8	-	3.5	内:テ、コナテ 外:コナテ	灰白	
726	209-04	土師器	甕	7	ツ-K14	SB57041-P6掘方 (ツ-K14P1t2)	口縁部片	-	-	-	内:テ、コナテ 外:テ、コナテ	褐灰	
727	226-02	土師器	甕	7	ツ-K15	SB57041-P16掘方 (ツ-K15P1t2)	底部1/12	-	19.0	4.2	内:工具テ 外:テ、ズリ	橙	
728	208-04	土製品	土錘	7	ツ-K16	SB57041-P17柱痕 (ツ-K16P1t4)	ほぼ完形	長4.1	幅0.7	-	テ	灰白	重さ1.9g
729	208-03	土製品	土錘	7	ツ-K14	SB57041-P14柱痕 (ツ-K14P1t5)	1/2	長2.5	幅0.8	-	テ	黄灰	重さ1.2g
731	225-06	瓦器	椀	7	H-J16	SD57053 南側テグレンテ	底部2/12	-	5.8	1.4	内:テ、テ 外:テ	黄灰	
732	218-03	土師器	皿	7	H-I15	SD57053	1/12	11.6	-	2.3	内:コナテ 外:テ、コナテ	橙	
733	225-03	土師器	杯	7	H-J15・16	SD57053	口縁部1/12	15.0	-	2.0	内:コナテ 外:テ、テ、コナテ	にふい 黄橙	
734	218-01	クロロ土師器	小皿	7	H-I16	SD57053	口縁部1/12 底部7/12	8.7	5.5	1.7	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	浅黄橙	
735	218-02	クロロ土師器	小皿	7	H-I16	SD57053	3/12	8.8	4.6	1.6	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	浅黄橙	
736	210-01	クロロ土師器	杯	7	H-J16	SD57053	底部7/12	-	7.1	3.1	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	浅黄橙	
737	218-04	磁器	皿	7	H-J16 東半部	SD57053最上部	底部2/12	-	5.8	1.3		灰白	近世の遺物か
738	213-04	山茶碗	椀	7	H-IJ16	SD57053	4/12	16.4	8.0	5.8	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	灰白	
739	213-05	山茶碗	椀	7	H-IJ16	SD57053	5/12	16.4	7.5	6.1	内:コナテ、自然軸 外:コナテ、糸切痕	灰白	輪花
740	213-06	山茶碗	椀	7	H-IJ16	SD57053	4/12	16.2	6.5	6.1	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕、砂粒痕	灰白	輪花
741	213-02	山茶碗	椀	7	H-I16	SD57053	11/12	15.3	7.5	6.0	内:コナテ、自然軸 外:コナテ、糸切痕	灰白	
742	215-01	山茶碗	椀	7	H-J16	SD57053	5/12	15.4	6.8	6.1	内:コナテ、自然軸 外:コナテ	灰白	
743	213-01	山茶碗	椀	7	H-I15	SD57053	9/12	16.2	7.5	5.9	内:コナテ、自然軸 外:コナテ、糸切痕	灰白	
744	215-05	山茶碗	椀	7	H-IJ16	SD57053	3/12	16.8	7.0	5.0	内:コナテ 外:コナテ	灰白	内面に煤付着
745	213-03	山茶碗	椀	7	H-IJ16	SD57053	9/12	13.5	7.4	5.6	内:コナテ、自然軸 外:コナテ、糸切痕	灰白	輪花2
746	214-06	山茶碗	椀	7	H-J16	SD57053	口縁部2/12 底部12/12	16.0	6.2	6.1	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕、砂粒痕	灰白	輪花
747	214-05	山茶碗	椀	7	H-J16	SD57053	底部12/12	-	6.8	3.4	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	灰白	輪花
748	215-04	山茶碗	椀	7	H-IJ16	SD57053	底部5/12	-	7.2	3.4	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	灰白	
749	214-07	山茶碗	椀	7	H-J16	SD57053	底部12/12	-	7.1	2.2	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	灰白	
750	213-07	山茶碗	椀	7	H-IJ16	SD57053	底部12/12	-	6.6	4.0	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕、砂粒痕	灰白	
751	215-02	山茶碗	椀	7	H-IJ16	SD57053	底部12/12	-	7.0	3.7	内:コナテ 外:コナテ	灰白	
752	214-01	山茶碗	椀	7	H-I15	SD57053	底部12/12	-	7.0	3.0	内:コナテ、自然軸 外:コナテ、糸切痕、砂粒痕	灰白	
753	214-02	山茶碗	椀	7	H-I15	SD57053	底部6/12	-	7.1	2.3	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕、ミシテ痕	灰白	
754	214-04	山茶碗	椀	7	H-J16	SD57053	底部12/12	-	7.0	3.3	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	灰白	内面に煤付着
755	216-05	山茶碗	皿	7	H-I16	SD57053	4/12	8.8	5.0	2.2	内:コナテ、自然軸 外:コナテ、糸切痕	灰白	
756	218-06	山茶碗	皿	7	H-IJ15	SD57053最上層	底部11/12	-	4.1	1.7	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	灰白	
757	215-06	山茶碗	椀	7	H-IJ16	SD57053	底部10/12	-	7.4	2.7	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕、ミシテ痕	灰白	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
758	215-03	山茶碗	碗	7	H-IJ16	SD57053	底部12/12	-	7.0	3.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切後行、モシラ痕	灰白	
759	225-05	陶器	鉢	7	H-J16	SD57053 最上層東半部	底部2/12	-	14.4	7.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	にぶい 橙	
760	225-04	土師器	鍋	7	H-II5	SD57053	口縁～頸部 1/12	24.4	-	4.0	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ナ、ヨコナデ	にぶい 黄橙	
761	216-02	土師器	鍋	7	H-J16	SD57053	口縁～肩部 2/12	22.6	-	4.5	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ナ、ヨコナデ	にぶい 橙	
762	216-01	土師器	鍋	7	H-J16	SD57053最上層	口縁～肩部 1/12	22.0	-	5.3	内:工具ナ、ヨコナデ 外:ナ、ナ、ヨコナデ	にぶい 褐	口縁部に煤付着
763	216-03	土師器	鍋	7	H-I16	SD57053	口縁～肩部 1/12	21.6	-	4.6	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ナ、ヨコナデ	浅黄橙	
764	217-03	瓦	平瓦	7	H-I16	SD57053	小片	-	-	-	凹面:摩滅 凸面:縄叩き	橙	
765	216-04	緑釉陶器	瓶	7	H-II5	SD57053-P5 (H-II5P1t2)	底部片	-	-	-	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	浅黄橙	
766	216-06	山茶碗	小碗	7	H-I15	SD57053-P3 (H-II5P1t2)	底部3/12	-	4.4	2.0	内:ヨコナデ、自然釉 外:ヨコナデ、糸切痕	灰白	
767	214-03	山茶碗	碗	7	H-I15	SD57053-P2 (H-II5P1t3)	底部3/12	-	7.4	3.0	内:ヨコナデ、灰釉掛け掛け 外:ヨコナデ、糸切痕	灰白	輪花
768	218-05	陶器 (滷美)	甕	7	H-II5	SD57053-P5 (H-II5P1t2)	口縁部片	-	-	-	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	灰白	
769	217-01	陶器	甕	7	H-J16	SD57053-P1 (H-J16P1t1)	底部2/12	-	24.7	5.7	内:ナ 外:ナ	灰白	
770	217-02	瓦	平瓦	7	H-I15	SD57053-P3 (H-II5P1t2)	小片	-	-	-	凹面:摩滅 凸面:縄叩き	浅黄橙	
771	227-04	土師器	杯	7	ツ-I14	SB57044-P1柱痕 (ツ-I14P1t3)	1/12	11.8	-	2.2	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ヨコナデ	浅黄橙	
772	210-04	土師器	杯	7	ツ-I14	SB57044-P1柱痕 (ツ-I14P1t3)	5/12	11.0	-	2.6	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ナ、ヨコナデ	灰白	内外面に煤付着
773	210-05	土師器	杯	7	ツ-I14	SB57044-P1柱痕 (ツ-I14P1t3)	6/12	9.2	-	1.8	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ナ、ヨコナデ	浅黄橙	
774	227-03	土師器	杯	7	ツ-I14	SB57044-P1柱痕 (ツ-I14P1t3)	2/12	10.8	-	2.4	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ヨコナデ	灰白	
775	211-04	土師器	甕	7	ツ-J13	SB57044-P2 (ツ-J13P1t1)	口縁部片	-	-	-	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	浅黄橙	
776	211-03	土師器	杯	7	ツ-J12	SB57045-P4 (ツ-J12P1t10)	口縁部片	-	-	-	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ナ、ヨコナデ	浅黄橙	
777	212-01	灰釉陶器	碗	7	ツ-I12	SB57045-P3 (ツ-I12P1t5)	口縁部片	-	-	-	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	灰白	
778	212-07	黒色土器	杯	7	ツ-J11	SB57045-P1 (ツ-J11P1t1)	1/12	17.0	-	4.4	内:ナ、ナ、ヨコナデ 外:ナ、ナ、ヨコナデ	黒	内黒
779	212-06	黒色土器	碗	7	ツ-I12	SB57045-P2 (ツ-I12P1t2)	底部3/12	-	7.6	2.3	内:ナ、ナ、ナ 外:ナ、ナ、ナ	黒	内黒
780	211-07	山茶碗	碗	7	ツ-J12	SB57047-P1柱痕 (ツ-J12P1t3)	2/12	15.6	5.8	5.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	灰白	
781	211-02	土師器	皿	7	ツ-K8	SB57048-P1 (ツ-K8P1t2)	口縁部2/12	11.8	-	1.3	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ヨコナデ	浅黄橙	
782	211-01	土師器	杯	7	ツ-I7	SB57049-P1 (ツ-I7P1t1)	2/12	13.8	-	2.8	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ナ、ヨコナデ	にぶい 橙	全体に煤付着
783	211-06	山茶碗	碗	7	H-I18	SD57051	底部3/12	-	6.8	1.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切後行、モシラ痕	灰白	
784	218-07	山茶碗	碗	7	H-II10	SD57054	口縁部1/12 底部2/12	15.8	7.9	4.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	灰白	輪花
785	219-06	山茶碗	碗	7	H-I10	SD57054	底部5/12	-	7.4	2.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	灰白	
786	219-04	黒色土器	碗	7	H-I15	SD57058	底部6/12	-	6.3	1.9	内:ナ、螺旋状暗文 外:ナ	灰白	内黒
787	219-05	ロクロ土師器	皿	7	H-II5	SD57058	4/12	9.0	4.2	1.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切痕	灰白	
788	219-03	灰釉陶器	碗	7	H-II5	SD57058	底部12/12	-	6.1	1.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切痕	灰白	
789	219-01	土師器	甕	7	H-II5	SD57058	口縁～頸部 1/12	22.8	-	3.9	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ヨコナデ	にぶい 黄橙	外面に煤付着
790	222-06	土師器	杯	7	ツ-L12	SA57060-P1柱痕 (ツ-L12P1t1)	口縁部片	-	-	-	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ナ、ヨコナデ	橙	
791	221-08	土製品	土鏝	7	ツ-L12	SA57060-P1柱痕 (ツ-L12P1t1)	完形	長3.4	幅0.8	-	ナ	灰黄褐	重さ2.6g
792	222-04	土師器	皿	7	H-I15	SD57062	1/12	8.0	-	1.1	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ナ、ヨコナデ	浅黄橙	
793	221-01	ロクロ土師器	皿	7	H-I15	SD57062	底部5/12	-	6.7	1.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切痕	浅黄橙	
794	220-06	山茶碗	碗	7	H-I15	SD57062	底部4/12	-	7.0	2.1	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切痕	灰白	
795	219-02	土師器	甕	7	H-I15	SD57062	口縁～頸部 1/12	20.6	-	5.2	内:工具ナ、ヨコナデ 外:ナ、ナ、ヨコナデ	浅黄橙	外面に煤付着
796	221-03	ロクロ土師器	皿	7	H-II9・10	SD57064	底部5/12	-	3.4	2.1	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切痕	灰白	
797	220-02	山茶碗	碗	7	H-II9・10	SD57064	底部12/12	-	6.5	3.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切痕	灰白	内面に煤付着
798	220-01	山茶碗	碗	7	H-II9・10	SD57064	底部5/12	-	7.4	3.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切痕	灰白	内面に煤付着
799	220-03	山茶碗	碗	7	H-II9・10	SD57064	底部11/12	-	6.5	2.0	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切痕	灰白	
800	220-07	山茶碗	碗	7	H-II9・10	SD57064	底部3/12	-	7.0	1.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切痕	にぶい 黄橙	
801	220-04	山茶碗	碗	7	H-II6	SD57069	底部9/12	-	7.8	2.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切痕	灰白	
802	222-07	灰釉陶器	瓶	7	H-I19・10	SD57064	口縁部片	-	-	-	内:ヨコナデ、自然釉 外:ヨコナデ	灰白	
803	222-03	灰釉陶器	瓶	7	H-II9・10	SD57064	頸部6/12	-	-	-	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	灰白	
804	636-02	その他	鉄滓	7	H-II9・10	SD57064	小片	5.2	4.4	1.7			49.7g 碗形滓、下面がやや強く磁着
805	223-07	土師器	杯	7	ツ-K15	SA57068-P1 (ツ-K15P1t6)	底部片	-	-	-		にぶい 橙	墨書「十カ」
806	221-05	ロクロ土師器	碗	7	H-I15	SD57069	底部1/12	-	5.6	1.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切痕	灰白	
807	220-05	山茶碗	碗	7	H-I16	SD57069	底部12/12	-	6.7	1.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切痕	灰白	
808	227-06	土師器	杯	7	H-II11	SB57071-P3 (H-II11P1t1)	1/12	12.8	-	2.5	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ヨコナデ	浅黄橙	
809	222-02	土師器	杯	7	H-II12	SB57071-P5 (H-II12P1t1)	2/12	14.9	-	3.2	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ナ、ヨコナデ	にぶい 橙	
810	224-02	土師器	杯	7	H-II12	SB57071-P7 (H-II12P1t8)	10/12	13.0	-	2.9	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ナ、ヨコナデ	にぶい 橙	一部黒化
811	227-07	土師器	小皿	7	H-II12	SB57071-P7柱痕 (H-II12P1t8)	1/12	10.0	-	1.3	内:ナ、ヨコナデ 外:ナ、ヨコナデ	浅黄橙	
812	221-04	ロクロ土師器	皿	7	H-I10	SB57071内 (H-II10P1t2)	底部片	-	-	-	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、糸切痕	にぶい 橙	別SBの遺物か
813	221-06	黒色土器	碗	7	H-I11	SB57071-P9 (H-II11P1t7)	口縁部片	-	-	-	内:ナ、螺旋状暗文 外:ナ、ナ、ナ	にぶい 橙	内黒
814	221-07	土製品	土鏝	7	H-II11	SB57071-P3 (H-II11P1t1)	完形	長2.8	幅1.0	-	ナ	浅黄橙	重さ1.9g

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
815	222-01	土師器	甕	7	H-112	SB57071-P7 (H-112Pit8)	口縁～肩部 1/12	15.4	-	3.8	内:工具行、ヨコテ 外:内、ヨコテ	浅黄橙	
816	227-05	土師器	甕	7	H-112	SB57071-P7 (H-112Pit8)	口縁～頸部片	-	-	-	内:行、ヨコテ 外:内、ヨコテ	淡橙	
817	222-08	灰軸陶器	瓶	7	H-110	SB57071-P10 (H-110Pit1)	口縁部片	-	-	-	内:ヨコテ、自然軸 外:ヨコテ	灰白	
818	224-01	灰軸陶器	瓶	7	H-112	SB57071-P7 (H-112Pit8)	口縁部欠	-	8.2	15.8	内:ヨコテ 外:ヨコテ、ヨコテ、灰軸ゆ塗り	オリーブ 灰	
819	221-02	口クロ土師器	杯	7	H-11	SD57072	底部4/12	-	5.0	1.4	内:ヨコテ 外:ヨコテ、糸切痕	にぶい 橙	
820	222-05	土師器	甕	7	H-112	SD57072	口縁部片	-	-	-	内:ヨコテ 外:ヨコテ	にぶい 橙	
821	227-08	土師器	杯	7	ツ-18	SB57076-P1 (ツ-18Pit1)	2/12	13.8	-	3.1	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	
822	223-05	黒色土器	椀	7	ツ-18	SB57076-P2 (ツ-18Pit1)	2/12	14.2	8.0	5.7	内:漆、ヨコテ、暗文 外:漆、漆	灰黄褐	内黒
823	232-01	弥生土器	甕	8	D-N11	SD58003	底部3/12	-	9.8	2.7	内:行 外:内、行	にぶい 黄橙	
824	231-06	土師器	杯	8	D-U17	SD58007	口縁部片	-	-	-	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	
825	229-03	弥生土器	鉢	8	D-Q12	SR58009	口縁部片	-	-	-	内:ヨコテ 外:ヨコテ、櫛描文?	浅黄橙	
826	229-01	弥生土器	甕	8	D-X17	SD58010	口縁～胴部 3/12	17.4	-	15.9	内:行、斜、ヨコテ、刺突 外:内、ヨコテ	浅黄橙	
827	230-06	土師器	杯	8	D-W18	SX58013	5/12	13.8	-	2.5	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	
828	229-02	土師器	甕	8	D-W18	SX58013	ほぼ完形	11.4	-	8.2	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	にぶい 黄橙	外面に煤付着
829	232-05	灰軸陶器	椀	8	G-D23	SD58015	底部2/12	-	4.8	1.9	内:ヨコテ 外:ヨコテ	灰白	
830	230-03	土師器	杯	8	G-B21	SD58016	2/12	13.4	-	2.3	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	
831	230-08	土師器	杯	8		SD58016	2/12	14.0	-	2.2	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	にぶい 橙	
832	231-03	土師器	杯	8		SD58016	1/12	14.4	-	2.6	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	にぶい 黄橙	
833	230-05	土師器	杯	8		SD58016	1/12	14.2	-	2.1	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	淡橙	
834	230-04	土師器	杯	8		SD58016	1/12	14.0	-	2.8	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	内面に煤付着
835	230-01	土師器	杯	8		SD58016	3/12	14.6	-	3.0	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	にぶい 橙	
836	231-01	土師器	杯	8		SD58016	7/12	12.4	-	2.8	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	
837	230-02	土師器	杯	8		SD58016	2/12	13.4	-	2.9	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	
838	230-07	土師器	杯	8		SD58016	2/12	13.2	-	2.4	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	磨滅
839	231-02	土師器	杯	8		SD58016	口縁部片	-	-	-	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	
840	231-04	土師器	杯	8		SD58016	口縁部片	-	-	-	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	にぶい 黄橙	
841	231-05	土師器	杯	8	G-B21	SD58016	1/12	13.8	-	2.1	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	にぶい 黄橙	
842	231-09	土師器	台付甕	8		SD58016	台部片	-	-	-	内: 外:内、行	浅黄橙	
843	232-02	土師器	椀	8		SD58016	底部4/12	-	9.2	2.1	内: 外:内、行	灰黄橙	
844	232-06	黒色土器	椀	8		SD58016	底部2/12	-	8.2	0.8	内: 外:行	明褐	内黒
845	229-04	土師器	杯	8		SD58016	底部片	-	-	-	内:行 外:行	にぶい 黄橙	底部外面に墨書
846	232-04	灰軸陶器	椀	8		SD58016	底部4/12	-	6.4	2.0	内:ヨコテ 外:ヨコテ	灰白	
847	232-03	志摩式 製塩土器		8		SD58016	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行	にぶい 橙	
848	231-08	志摩式 製塩土器		8		SD58016	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行	浅黄橙	
849	231-07	土師器	甕	8		SD58016	口縁部片	-	-	-	内:行、ヨコテ 外:内、ヨコテ	浅黄橙	
850	229-05	土師器	甕	8		SD58016	口縁～頸部 1/12	16.8	-	3.3	内:内、ヨコテ 外:内、ヨコテ	にぶい 黄橙	
851	242-01	土師器	鍋	8	G-E22	SD58020	口縁～胴部 1/12	21.0	-	7.3	内:工具行、ヨコテ 外:行、斜、ヨコテ	にぶい 橙	
852	241-06	山茶碗	椀	8	G-E22	SD58020	底部5/12	-	8.0	3.2	内:ヨコテ 外:ヨコテ	灰白	
853	240-01	土師器	杯	8	G-C22	SD58018	1/12	15.8	-	3.4	内:行、ヨコテ、暗文 外:行、ヨコテ	橙	
854	233-08	土師器	杯	8	G-E23	SD58018	2/12	16.3	-	3.5	内:行、ヨコテ、漆、暗文 外:行、漆	橙	
855	239-06	土師器	杯	8	G-B22	SD58018	1/12	17.8	-	3.9	内:漆、ヨコテ、放射状暗文 外:行、漆、ヨコテ	にぶい 橙	
856	233-01	土師器	杯	8	G-C22	SD58018	6/12	13.8	-	2.9	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	
857	240-03	土師器	杯	8	G-C22	SD58018	2/12	13.6	-	2.5	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	
858	235-04	土師器	杯	8	G-C22	SD58018	2/12	14.2	-	2.5	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	にぶい 黄橙	
859	240-05	土師器	杯	8		SD58018	2/12	13.8	-	2.1	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	
860	233-02	土師器	杯	8	G-B22	SD58018	5/12	14.2	-	3.1	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	にぶい 黄橙	
861	241-05	土師器	杯	8	G-E24	SD58018	1/12	14.8	-	2.6	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	
862	239-05	土師器	杯	8	G-B22	SD58018	1/12	12.0	-	2.5	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	淡橙	
863	239-07	土師器	杯	8	G-C21	SD58018	1/12	12.8	-	2.5	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	
864	235-02	土師器	杯	8	G-B22	SD58018	4/12	12.9	-	2.2	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	にぶい 橙	
865	240-02	土師器	杯	8	G-C22	SD58018	1/12	12.6	-	2.9	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	橙	
866	233-03	土師器	杯	8	G-B22	SD58018	ほぼ完形	13.0	-	2.5	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	にぶい 橙	
867	233-04	土師器	杯	8		SD58018	完形	10.6	-	2.4	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	にぶい 黄橙	
868	241-04	土師器	杯	8	G-E23	SD58018	1/12	11.6	-	3.5	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	
869	240-06	土師器	杯	8		SD58018	1/12	13.2	-	3.3	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	にぶい 橙	
870	233-07	土師器	杯	8	G-C22	SD58018	口縁部片	-	-	-	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	浅黄橙	
871	233-06	土師器	杯	8	G-B22	SD58018	口縁部片	-	-	-	内:行、ヨコテ 外:行、ヨコテ	にぶい 橙	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
872	240-08	土師器	杯	8	G-B21	SD58018	1/12	17.2	-	3.1	内:ナナ 外:ナナ	にぶい橙	
873	235-01	土師器	杯	8	G-B21	SD58018	3/12	14.8	-	3.7	内:ナナ 外:ナナ	橙	
874	235-03	土師器	杯	8	G-D22	SD58018	4/12	14.8	-	2.9	内:ナナ 外:ナナ	にぶい 橙	
875	239-04	土師器	杯	8	G-B21	SD58018	1/12	13.8	-	2.6	内:ナナ 外:ナナ	浅黄橙	
876	235-05	土師器	杯	8	G-B21	SD58018	2/12	15.0	-	2.8	内:ナナ 外:ナナ	にぶい 黄橙	底部外面に墨書「平成」
877	235-06	土師器	杯	8	G-B22	SD58018	底部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	にぶい 橙	底部外面に墨書「乃」
878	237-04	土師器	杯	8	G-B21	SD58018	底部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	にぶい 橙	底部外面に墨書「平」
879	237-05	土師器	杯	8	G-B21	SD58018	底部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	浅黄橙	底部外面に墨書「大」
880	238-01	黒色土器	碗	8	G-C21	SD58018	底部片	-	7.4	0.9	内:ナナ 外:ナナ	明赤褐	内黒
881	240-07	土師器	碗	8		SD58018	台部8/12	-	7.7	2.9	内:ナナ 外:ナナ	浅黄橙	
882	240-04	灰釉陶器	碗	8	G-B21	SD58018	口縁部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	灰白	
883	236-02	灰釉陶器	碗	8	G-C22	SD58018アゼ	底部4/12	-	7.2	1.8	内:ナナ 外:ナナ	灰白	
884	236-03	灰釉陶器	碗	8	G-C21	SD58018	底部片	-	7.7	2.1	内:ナナ 外:ナナ	灰白	高台内に墨痕
885	236-04	土師器	鉢	8	G-B21	SD58018	口縁～頸部 3/12	20.8	-	4.2	内:ナナ 外:ナナ	にぶい 黄橙	
886	233-05	土師器	鉢	8	G-B22	SD58018	4/12	19.8	-	8.5	内:ナナ 外:ナナ	浅黄橙	
887	241-02	志摩式 製塩土器		8	G-C22	SD58018	口縁部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	橙	
888	241-01	志摩式 製塩土器		8	G-B22	SD58018	口縁部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	浅黄橙	
889	241-03	志摩式 製塩土器		8	G-C22	SD58018	口縁部片	-	-	-	内:工具ナ 外:ナナ	橙	
890	234-03	須恵器	甕	8	G-C21 A20	SD58018	底部3/12	-	17.0	6.6	内:ナナ 外:ナナ	灰	
891	234-01	土師器	甕	8	G-D23	SD58018	口縁～脚部 3/12	23.7	-	6.0	内:ナナ 外:ナナ	浅黄橙	
892	234-02	土師器	甕	8	G-B22	SD58018	口縁～脚部 2/12	24.1	-	8.3	内:ナナ 外:ナナ	浅黄橙	
893	237-01	土師器	甕	8	G-C22	SD58018	口縁～頸部 2/12	25.0	-	8.3	内:ナナ 外:ナナ	浅黄橙	
894	237-03	土師器	甕	8	G-C21	SD58018	口縁部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	にぶい 橙	
895	239-03	土師器	甕	8	G-C22	SD58018	口縁部2/12	16.7	-	3.5	内:ナナ 外:ナナ	橙	
896	239-02	土師器	甕	8	G-B22	SD58018	口縁部1/12	18.0	-	3.3	内:ナナ 外:ナナ	にぶい 橙	
897	237-02	土師器	甕	8	G-B22	SD58018	口縁～頸部 1/12	20.6	19.0	7.3	内:工具ナ 外:ナナ	にぶい 黄橙	
898	236-01	土師器	甕	8	G-B21	SD58018	3/12	22.2	-	20.0	内:ナナ 外:ナナ	にぶい 黄橙	外面に煤付着
899	239-01	土師器	甕	8	G-B21	SD58018	口縁部1/12	27.6	-	5.2	内:工具ナ 外:ナナ	浅黄橙	外面に煤付着
900	234-04	瓦	平瓦	8		SD58018	小片	-	-	-	内面:布目 凸面:縄叩き	にぶい 黄橙	
901	238-03	その他	鉄滓	8		SD58018		3.3	4.8	2.1			43g
903	242-04	土師器	甕	8	G-C21	SD58022	口縁部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	浅黄橙	
904	241-07	土師器	杯	8	G-C22-23	SD58021	1/12	10.4	-	2.0	内:ナナ 外:ナナ	浅黄橙	
905	241-08	土師器	甕	8	G-C22-23	SD58021	口縁部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	浅黄橙	
906	242-03	山茶碗	碗	8	G-A20	SD58023	底部11/12	-	7.5	2.4	内:ナナ 外:ナナ	灰白	
907	242-02	土師器	鍋	8	G-B20	SD58023	口縁～頸部 2/12	19.0	-	4.2	内:ナナ 外:ナナ	灰白	
908	242-05	土製品	土鏝	8	G-B20	SR58026	1/2	長3.0	幅1.3	-	ナナ	黒	重さ4.2g
909	636-05	その他	鉄滓	9	ク-Q5	SD59003	小片	3.9	3.1	3.0			31.6g 全体に土砂付着
910	245-04	灰釉陶器	碗	9	ク-P7	SD59006	底部1/12	-	7.5	1.5	内:ナナ 外:ナナ	灰白	
911	249-05	土師器	杯	9	ク-W5	SD59011	3/12	10.8	-	2.3	内:ナナ 外:ナナ	橙	
912	246-07	須恵器	杯蓋	9	ク-W5	SD59011	小片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	灰白	
913	245-05	土師器	杯	9		SD59002	2/12	8.8	-	2.6	内:ナナ 外:ナナ	浅黄橙	摩滅
914	249-08	土師器	甕	9	ク-W6	SD59012	口縁部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	明赤褐	
915	249-03	土師器	杯	9	ク-X6	SK59013	1/12	13.8	-	3.6	内:ナナ 外:ナナ	にぶい 黄橙	
916	249-07	土師器	杯	9	ク-X6	SK59013	口縁部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	橙	
917	245-02	ロクロ土師器	皿	9		SD59005	口縁部4/12 底部5/12	10.0	3.8	1.9	内:ナナ 外:ナナ	浅黄橙	
918	245-01	土師器	丸底壺	9		SD59005	底部4/12	-	-	6.4	内:ナナ 外:ナナ	橙	
919	244-03	黒色土器	碗	9		SD59005	底部2/12	-	7.0	2.2	内:ナナ 外:ナナ	にぶい 橙	内黒
920	243-06	山茶碗	碗	9		SD59005	底部5/12	-	7.0	2.5	内:ナナ 外:ナナ	灰白	
921	243-04	山茶碗	碗	9		SD59005	底部11/12	-	6.9	2.0	内:ナナ 外:ナナ	灰白	
922	243-05	山茶碗	碗	9	ク-N06	SD59005	底部4/12	-	6.0	2.2	内:ナナ 外:ナナ	灰白	
923	243-02	山茶碗	碗	9	ク-N5	SD59005	底部6/12	-	8.0	4.2	内:ナナ 外:ナナ	灰白	
924	245-03	土師器	鍋	9		SD59005	口縁部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	にぶい 黄橙	
925	244-04	土師器	鍋	9	ク-N5	SD59005	口縁～頸部 1/12	23.8	-	3.3	内:ナナ 外:ナナ	淡黄	
926	244-05	土師器	鍋	9	ク-N5	SD59005	口縁～頸部 4/12	24.0	-	4.6	内:ナナ 外:ナナ	にぶい 橙	
927	243-03	陶器	鉢	9	ク-N06	SD59005	底部2/12	-	12.4	4.5	内:ナナ 外:ナナ	灰白	
928	244-01	瓦	丸瓦	9		SD59005	小片	-	-	-	内面:布目 凸面:磨滅	にぶい 橙	
929	244-02	瓦	平瓦	9	ク-N6	SD59005	小片	-	-	-	内面:布目 凸面:縄叩き	橙	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
930	271-04	土師器	椀	9	ク-P7	SD59007	1/12	-	-	-	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
931	271-05	土師器	杯	9	ク-P7	SD59007	1/12	10.8	-	2.5	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	灰白	
932	271-07	土師器	杯	9	ク-P7	SD59007	2/12	9.8	-	2.8	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	灰白	
933	271-01	土師器	杯	9	ク-P6	SD59007	12/12	10.6	-	2.4	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
934	271-02	土師器	杯	9	ク-P7	SD59007	8/12	11.8	-	2.3	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
935	271-03	土師器	杯	9	ク-P7	SD59007	3/12	10.4	-	1.8	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	灰白	
936	272-01	口クロ土師器	杯	9	ク-P7	SD59007	5/12	11.5	6.0	2.7	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	灰白	
937	271-09	土製品	土鐘	9	ク-P6	SD59007	ほぼ完形	長5.5	幅1.4	-	ナナ、ナナ	浅黄橙	重さ9.2g
938	271-08	灰軸陶器	椀	9	ク-P5	SD59007	底部1/12	-	8.2	3.6	内:ヨナナ 外:ヨナナ	灰白	
939	249-02	土師器	皿	9	ク-N5	SD59008	1/12	14.0	-	2.6	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
940	249-06	土師器	杯	9	ク-M5	SD59008	口縁部片	-	-	-	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	橙	
941	247-03	土師器	鍋	9	ク-N5	SD59008	口縁部2/12 頸部2/12	17.2	-	4.6	内:工具ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	灰白	
942	246-02	山茶碗	椀	9	ク-N5	SD59008	底部8/12	-	7.0	2.1	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	灰白	
943	246-06	山茶碗	椀	9	ク-N5	SD59008	底部4/12	-	5.6	2.8	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	灰白	
944	246-05	山茶碗	椀	9	ク-N5	SD59008	底部11/12	-	7.4	2.2	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	灰白	
945	246-03	山茶碗	椀	9	ク-N15	SD59008	口縁部1/12 底部7/12	15.4	6.4	4.9	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	灰白	内面に煤付着
946	246-04	山茶碗	椀	9	ク-N5	SD59008	底部6/12	-	8.1	4.3	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	灰白	
947	249-01	弥生土器	壺	9	ク-X5	SD59014	口縁部3/12	19.6	-	2.5	内:ヨナナ 外:ヨナナ	にぶい 橙	
948	247-04	弥生土器	高杯	9	D-A6	SD59017	脚部片	-	-	-	内: 外:襷描直線文	浅黄橙	透孔3方
949	247-05	土師器	甕	9	D-A6	SD59017	口縁部3/12	13.4	-	4.9	内: 外:ヨナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	橙	
950	285-01	土師器	皿	9	ク-X6	SF59021	1/12	21.4	-	3.6	内:ヨナナ、放射状暗文 外:ナナ、ヨナナ	橙	内面に煤付着
951	247-02	土師器	甕	9	ク-X6	SF59021	口縁部4/12 頸部4/12	12.8	-	3.3	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	にぶい 黄橙	
952	247-01	土師器	甕	9	ク-X6	SF59021	口縁部2/12	14.4	-	6.5	内:ナナ、ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	にぶい 橙	
953	248-01	土師器	甕	9	ク-X6	SF59021	胴部片	-	-	-	内:ナナ、ナナ、ヨナナ 外:ナナ	橙	
954	249-04	土師器	杯	9	ク-V6	SD59022	2/12	10.8	-	3.5	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
955	252-06	須恵器	瓶	9	D-C5	SD59023	頸部片	-	-	-	内:ヨナナ 外:ヨナナ	灰	
956	246-01	灰軸陶器	椀	9	D-D6	SD59023	底部5/12	-	7.2	2.9	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	灰白	内面に煤付着
957	251-07	土師器	皿	9	ク-X6	SK59024	口縁部1/12	17.8	-	2.5	内:ナナ 外:ナナ	橙	見込み線刻
958	251-06	土師器	甕	9	ク-WX6	SK59025	胴部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	にぶい 黄橙	
959	252-05	須恵器	椀	9	ク-X6	SK59026	口縁部1/12 底部3/12	9.1	5.4	4.4	内:ヨナナ 外:ヨナナ	灰白	
960	257-11	土師器	皿	9	ク-Q7	SK59033	口縁部2/12	11.6	-	1.7	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	灰白	
961	257-08	土師器	杯	9	ク-Q7	SK59033	4/12	11.4	-	2.4	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	黄灰	
962	257-10	土師器	杯	9	ク-Q7	SK59033	口縁部2/12	10.9	-	2.4	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
963	256-02	土師器	杯	9	ク-Q7	SK59033	9/12	10.6	-	2.7	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
964	256-06	土師器	皿	9	ク-Q7	SK59033	4/12	9.9	-	2.5	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
965	257-04	土師器	杯	9	ク-Q7	SK59033	小片	-	-	-	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
966	257-05	土師器	杯	9	ク-Q7	SK59033	小片	-	-	-	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	灰白	
967	256-03	土師器	椀	9	ク-Q7	SK59033	底部6/12	-	6.6	1.8	内:ナナ 外:ナナ	浅黄橙	
968	259-09	緑釉陶器	椀	9		SK59033	口縁部片	-	-	-	内:ヨナナ 外:ヨナナ	オリーブ 灰	素地:にぶい黄橙色
969	257-01	土師器	甕	9	ク-Q7	SK59033	口縁部片	-	-	-	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
970	258-08	土製品	土鐘	9	ク-Q7	SK59033	完形	長4.75	幅1.3	-	ナナ、ナナ	にぶい 黄橙	重さ6.6g
971	258-03	土製品	土鐘	9	ク-Q7	SK59033	完形	長3.7	幅1.4	-	ナナ、ナナ	にぶい 黄橙	重さ5.8g
972	258-06	土製品	土鐘	9	ク-Q7	SK59033	完形	長3.9	幅1.3	-	ナナ、ナナ	灰黄	重さ5.1g
973	258-04	土製品	土鐘	9	ク-Q7	SK59033	2/3	長3.3	幅1.6	-	ナナ、ナナ	にぶい 黄橙	重さ5.3g
974	258-05	土製品	土鐘	9	ク-Q7	SK59033	完形	長3.7	幅1.4	-	ナナ、ナナ	にぶい 黄橙	重さ5.5g
975	258-02	土製品	土鐘	9	ク-Q7	SK59033	完形	長3.6	幅1.4	-	ナナ、ナナ	にぶい 黄橙	重さ5.0g
976	258-01	土製品	土鐘	9	ク-Q7	SK59033	5/6	長3.6	幅1.0	-	ナナ、ナナ	にぶい 黄橙	重さ2.9g
977	258-07	土製品	土鐘	9	ク-Q7	SK59033	完形	長3.1	幅1.3	-	ナナ、ナナ	にぶい 黄橙	重さ3.8g
978	252-07	土師器	皿	9	D-C5	SD59027	3/12	18.9	-	2.0	内:放射状暗文、螺旋状暗文 外:ナナ、ナナ	橙	底部外面に線刻
979	253-03	土師器	杯	9	D-B5	SD59027	2/12	16.8	-	4.2	内:ナナ、ヨナナ、放射状暗文 外:ナナ、ナナ	浅黄橙	
980	257-07	土師器	杯	9	D-C6	SD59027	口縁部2/12	15.6	-	3.4	内:ナナ、ヨナナ、放射状暗文 外:ナナ、ナナ	橙	
981	251-05	土師器	杯	9	D-C5	SD59027	7/12	13.2	-	4.5	内:ナナ 外:ナナ、ナナ	にぶい 橙	内面に煤付着
982	252-09	土師器	杯	9	D-C5	SD59027	1/12	10.9	-	2.5	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	にぶい 橙	
983	256-05	土師器	杯	9	D-C6	SD59027	3/12	12.8	-	2.3	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
984	253-05	土師器	杯	9	D-B6	SD59027	2/12	13.6	-	2.7	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	橙	
985	253-04	土師器	杯	9	D-B5	SD59027	5/12	12.8	-	2.2	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	橙	
986	251-03	土師器	杯	9	D-B5	SD59027	2/12	12.9	-	3.0	内:ナナ 外:ナナ	橙	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
987	254-06	土師器	杯	9	D-C6	SD59027	口縁部片	-	-	-	内:ヨナナ 外:ヨナナ	浅黄橙	
988	254-04	土師器	杯	9	D-B6	SD59027	小片	-	-	-	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	にぶい 黄橙	
989	253-02	土師器	皿	9	D-BC5	SD59027	2/12	14.6	-	2.6	内:ナナ 外:ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
990	252-08	土師器	皿	9	D-C6	SD59027	1/12	14.8	-	1.8	内:ナナ 外:ナナ、ヨナナ	橙	
991	251-04	土師器	皿	9	D-B6	SD59027	1/12	17.9	-	2.4	内:ナナ 外:ナナ、ナナ	橙	
992	253-06	土師器	皿	9	D-B5	SD59027	2/12	19.6	-	2.8	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	橙	
993	254-03	土師器	皿	9	D-C5	SD59027	6/12	20.1	-	3.0	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	橙	
994	255-04	土師器	杯	9	D-B5	SD59027	底部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ、ナナ	浅黄橙	底部外面に墨書「□平」
995	255-05	土師器	杯	9	D-B5	SD59027	底部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ、ナナ	浅黄橙	底部外面に墨書「□平」
996	256-04	土師器	蓋	9	D-C6	SD59027	擴み部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	橙	
997	257-09	土製品	不明	9	D-D6	SD59027		-	-	-	内:ナナ 外:ナナ	灰白	
998	252-04	須恵器	蓋	9	D-B6	SD59027	2/12	-	-	-	内:ヨナナ 外:ヨナナ	灰白	
999	252-03	須恵器	蓋	9	D-C6	SD59027	口縁部2/12	16.0	-	1.9	内:ヨナナ 外:ヨナナ、ヨナナ	灰	
1000	252-02	須恵器	蓋	9	D-C5-6	SD59027	口縁部4/12	16.0	-	1.6	内:ヨナナ 外:ヨナナ	灰	
1001	252-01	須恵器	杯	9	D-C5	SD59027	5/12	16.2	-	5.3	内:ヨナナ 外:ヨナナ、ヨナナ	灰白	
1002	257-02	須恵器	杯	9	D-D6	SD59027	底部2/12	-	9.3	1.2	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	灰	
1003	257-03	須恵器	杯	9	D-B5	SD59027	底部1/12	-	10.6	2.2	内:ヨナナ 外:ヨナナ、糸切痕	灰	
1004	254-02	須恵器	杯	9	D-C6	SD59027	底部1/12	-	11.4	2.5	内:ナナ 外:ナナ	灰	
1005	256-01	土師器	瓶	9	D-B6	SD59027	底部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ、ナナ	灰白	
1006	255-02	土師器	鉢	9	D-B6	SD59027	口縁部4/12	18.7	-	4.7	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
1007	255-03	土師器	甕	9	D-C6	SD59027	口縁～胴部 4/12	22.2	-	12.4	内:ナナ、ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
1008	251-02	土師器	甕	9	D-C6	SD59027	口縁部1/12	23.0	-	5.5	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	にぶい 橙	
1009	253-01	土師器	甕	9	D-B6	SD59027	口縁部1/12	13.0	-	4.9	内:工具ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	橙	
1010	250-04	土師器	甕	9	D-C6	SD59027	口縁部1/12	15.2	-	5.4	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	にぶい 橙	
1011	251-01	土師器	甕	9	D-B5	SD59027	口縁部1/12	24.0	-	7.8	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	灰白	
1012	250-01	土師器	甕	9	D-C5	SD59027	口縁～胴部 3/12	25.4	-	9.6	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	橙	
1013	250-03	土師器	甕	9	O-B5	SD59027	口縁部2/12	19.8	-	6.4	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	にぶい 橙	
1014	250-02	土師器	鍋	9	D-B5	SD59027	口縁部2/12	43.6	-	7.3	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	にぶい 黄橙	
1015	254-05	須恵器	甕	9	D-D6	SD59027	口縁部片	-	-	-	内:ヨナナ 外:ヨナナ	灰白	
1016	254-01	須恵器	短頸壺	9	D-BC5	SD59027	口縁部1/12	10.8	-	3.7	内:ヨナナ 外:ヨナナ	灰白	
1017	243-01	須恵器	甕	9	D-C5	SD59027	口縁～胴部 4/12	23.4	-	8.9	内:当て具痕(同心円)、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	灰	内面にM字状線刻
1018	255-01	須恵器	横瓶	9	D-B5	SD59027	胴部片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ、ナナ	灰白	
1019	257-06	土師器	杯	9	ク-Q7	SK59034	口縁部1/12	12.6	-	2.3	内:ナナ 外:ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
1020	259-04	土師器	杯	9	ク-Q7	SK59034	4/12	12.4	-	2.8	内:ナナ 外:ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
1021	259-01	須恵器	杯蓋	9	ク-Q7	SK59034	小片	-	-	-	内:ナナ 外:ナナ、ヨナナ	灰白	ナナ記号「×」
1022	259-05	緑釉陶器	段皿	9	ク-Q7	SK59034	口縁部2/12	17.5	-	2.4	内:ヨナナ 外:ヨナナ	オリーブ 灰	素地は灰白色
1023	259-03	土師器	甕	9	ク-Q7	SK59034	口縁部2/12	11.2	-	2.0	内:ヨナナ 外:ヨナナ	浅黄橙	
1024	259-02	土師器	甕	9	ク-Q7	SK59034	口縁部片	-	-	-	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ヨナナ	にぶい 黄橙	
1025	258-09	土製品	土錘	9	ク-Q7	SK59034	完形	長5.7	幅1.1	-	ナナ、ナナ	浅黄橙	重さ4.4g
1026	258-11	土製品	土錘	9	ク-Q7	SK59034	完形	長4.4	幅1.3	-	ナナ、ナナ	にぶい 黄橙	重さ5.9g
1027	258-10	土製品	土錘	9	ク-Q7	SK59034	ほぼ完形	長3.6	幅1.4	-	ナナ、ナナ	にぶい 黄橙	重さ5.0g
1028	258-13	土製品	土錘	9	ク-Q7	SK59034	完形	長3.0	幅1.3	-	ナナ、ナナ	にぶい 橙	重さ3.2g
1029	258-12	土製品	土錘	9	ク-Q7	SK59034	3/4	長2.7	幅1.0	-	ナナ、ナナ	淡黄	重さ2.5g
1030	259-08	土師器	杯	9	D-C6	SD59035	口縁部2/12	13.3	-	2.5	摩滅	橙	
1031	259-06	須恵器	杯蓋	9	D-BC6	SD59035	口縁部1/12	13.1	-	1.4	内:ヨナナ 外:ヨナナ	灰白	
1032	259-07	土師器	皿	9	D-C6	SD59035	口縁部1/12	20.4	-	2.3	摩滅	橙	
1033	260-01	口クロ土師器	碗	9	ク-S7	SK59039	底部1/12	-	8.8	2.0	内:ヨナナ 外:ヨナナ	浅黄橙	内面に油煙付着
1034	260-02	土師器	杯	9	ク-S7	SK59039	3/12	14.2	-	2.2	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	にぶい 橙	
1035	260-05	土師器	甕	9	ク-S7	SK59039	口縁部片	-	-	-	内:ヨナナ 外:ヨナナ	にぶい 黄橙	
1036	260-04	土師器	杯	9	ク-Q7	SK59041	3/12	10.7	-	2.2	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
1037	260-03	土師器	杯	9	ク-Q7	SK59041	4/12	11.0	-	2.3	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
1038	260-07	土師器	杯	9	ク-Q7	SK59041	4/12	12.2	-	2.1	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	灰白	内面に油煙付着
1039	260-06	土師器	杯	9	ク-Q7	SK59041	3/12	10.4	-	2.0	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	灰白	
1040	260-08	土師器	杯	9	ク-Q7	SK59041	3/12	11.4	-	2.0	内:ナナ、ヨナナ 外:ナナ、ナナ、ヨナナ	浅黄橙	
1041	261-02	黒色土器	碗	9	ク-Q7	SK59041	2/12	14.6	-	4.5	内:ナナ 外:ナナ、ナナ	黒	内黒
1042	261-03	黒色土器	碗	9	ク-Q7	SK59041	底部3/12	-	6.8	2.9	内:ナナ、暗文 外:ナナ、ナナ	橙	内黒
1043	261-04	緑釉陶器	小碗	9	ク-Q7	SK59041	1/12	8.7	4.7	4.1	内:ヨナナ、緑釉 外:ヨナナ、緑釉、貼付高台	オリーブ 灰	素地:浅黄橙色 釉調は濃い

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
1044	261-01	灰軸陶器	椀	9	ク-Q7	SK59041	5/12	15.8	8.4	5.9	内:コナテ、灰軸液け掛け 外:コナテ、糸切痕	灰白	
1045	261-05	土師器	杯	9	ク-Q7	SB59042-P1掘方 (ク-Q7P112)	1/12	15.8	-	2.2	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	黒褐	外面が黒化
1046	261-06	土師器	甕	9	ク-N6	SB59043-P1柱痕 (ク-N6P110)	口縁部片	-	-	-	内:コナテ 外:コナテ	灰白	
1047	269-06	土製品	土鏝	9	ク-N6	SB59043 (ク-N6P116)	1/2	長2.8	幅0.9	-	テ、神土	にぶい 橙	重さ1.8g
1048	262-02	土師器	甕	9	ク-R7	SB59044-P1 (ク-R7P117)	口縁部片	-	-	-	内:コナテ 外:コナテ	浅黄橙	
1049	263-02	土師器	甕	9	ク-R7	SB59044-P1b柱痕 (ク-R7P119)	口縁部片	-	-	-	内:コナテ 外:コナテ	にぶい 橙	
1050	263-01	土師器	甕	9	ク-Q7	SB59044-P7掘方 (ク-Q7P111)	口縁部片	-	-	-	内:テ、コナテ 外:コナテ	橙	
1051	263-04	土師器	甕	9	ク-Q7	SB59044-P7 (ク-Q7P111)	口縁部片	-	-	-	内:コナテ 外:コナテ	にぶい 黄橙	
1052	263-05	土師器	甕	9	ク-Q6	SB59044-P5 (ク-Q6P117)	口縁部片	-	-	-	内:コナテ 外:コナテ	にぶい 黄橙	
1053	263-03	土師器	甕	9	ク-P7	SB59044-P12 (ク-P7P112)	口縁部片	-	-	-	内:コナテ 外:コナテ	にぶい 黄橙	
1054	263-08	緑釉陶器	椀	9	ク-R7	SB59044-P1 (ク-R7P117)	底部3/12	-	7.4	1.1	内:緑釉 外:糸切痕、貼付高台、緑釉	オリーブ 黄	素地:灰白 高台内・貼付も施釉
1055	262-01	須恵器	杯蓋	9	ク-Q7	SB59044-P7掘方 (ク-Q7P111)	口縁部片	-	-	-	内:コナテ 外:コナテ	灰	
1056	263-07	灰軸陶器	椀	9	ク-R7	SB59044-P1c柱痕 (ク-R7P110)	底部2/12	-	8.2	2.1	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	灰白	
1057	263-06	灰軸陶器	壺	9	ク-P7	SB59044-P12b (ク-P7P119)	口縁部1/12	16.4	-	1.2	内:コナテ 外:コナテ	灰白	
1058	264-06	土製品	土鏝	9	ク-R7	SB59044-P1b ク-R7P119柱痕	完形	長5.5	幅1.1	-	テ、神土	灰白	重さ4.8g
1059	264-07	土製品	土鏝	9	ク-R7	SB59044-P1b ク-R7P119柱痕	完形	長5.3	幅1.0	-	テ、神土	浅黄橙	重さ4.0g
1060	262-03	土製品	土鏝	9	ク-R7	SB59044-P1 (ク-R7P117)	完形	長5.6	幅1.1	-	テ、神土	浅黄橙	重さ4.7g
1061	262-08	土製品	土鏝	9	ク-R7	SB59044-P1 (ク-R7P117)	完形	長4.3	幅1.2	-	テ、神土	灰白	重さ5.1g
1062	264-08	土製品	土鏝	9	ク-Q5	SB59044-P9柱痕 (ク-Q5P116)	完形	長3.6	幅1.3	-	テ、神土	にぶい 黄橙	重さ5.1g
1063	262-07	土製品	土鏝	9	ク-R7	SB59044-P1 (ク-R7P117)	完形	長3.9	幅1.2	-	テ、神土	灰白	重さ5.1g
1064	262-04	土製品	土鏝	9	ク-R7	SB59044 (ク-R7P111)	ほぼ完形	長4.0	幅1.1	-	テ、神土	浅黄橙	重さ3.7g
1065	264-05	土師器	皿	9	ク-R6	SB59045-P1 (ク-R6P117)	12/12	7.6	-	2.0	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	橙	
1066	269-09	土製品	土鏝	9	ク-S7	SB59045-P2 (ク-S7P112)	完形	長4.3	幅0.9	-	テ、神土	黒	重さ2.9g
1067	269-01	土師器	甕	9	ク-X5	SB59049-P1 (ク-X5P115)	口縁部片	-	-	-	内:テ、コナテ 外:コナテ	にぶい 橙	
1068	268-01	土師器	杯	9	ク-Q6	SB59051-P2 (ク-Q6P111)	5/12	11.0	-	2.5	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	にぶい 黄橙	
1069	268-04	土師器	杯	9	ク-Q6	SB59051-P2 (ク-Q6P111)	5/12	10.8	-	2.2	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	にぶい 橙	
1070	268-05	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	2/12	10.6	-	2.7	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
1071	267-01	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	12/12	10.5	-	2.4	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
1072	267-03	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	6/12	10.3	-	2.4	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
1073	267-05	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	3/12	9.8	-	2.0	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
1074	267-04	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	5/12	9.4	-	2.1	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	橙	
1075	266-07	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	9/12	10.9	-	2.2	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
1076	264-03	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	12/12	10.5	-	2.6	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	橙	
1077	266-05	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	12/12	11.1	-	2.6	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
1078	265-04	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	12/12	11.1	-	2.9	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	灰白	
1079	264-04	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	12/12	11.3	-	2.7	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	にぶい 黄橙	
1080	268-03	土師器	杯	9	ク-Q6	SB59051-P3 (ク-Q6P111)	7/12	12.4	-	3.0	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	橙	
1081	267-06	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	1/12	13.6	-	3.2	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	にぶい 黄橙	
1082	265-03	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	11/12	11.8	-	2.7	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
1083	266-03	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	12/12	11.4	-	2.7	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
1084	266-02	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	10/12	10.7	-	2.2	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
1085	266-01	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	6/12	10.8	-	2.2	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	灰白	
1086	265-02	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	11/12	10.8	-	2.6	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
1087	269-03	灰軸陶器	椀	9	ク-Q7	SB59051-P4 (ク-Q7P116)	口縁部1/12	12.4	-	1.7	内:コナテ、灰軸液け掛け 外:コナテ、灰軸	灰白	
1088	266-06	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	11/12	10.3	-	2.2	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	橙	
1089	264-02	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	12/12	10.8	-	2.6	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
1090	266-04	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	11/12	11.1	-	2.6	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
1091	265-01	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	12/12	11.0	-	2.6	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	灰白	
1092	265-05	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	12/12	12.8	-	2.5	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	灰白	
1093	264-01	土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	10/12	13.8	-	3.4	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	灰白	
1094	267-02	口ク口土師器	杯	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	口縁部3/12 底部12/12	11.7	5.4	3.0	内:コナテ 外:コナテ、糸切痕	浅黄橙	
1095	265-06	土師器	台付椀	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	10/12	13.4	7.0	5.5	内:テ 外:テ、コナテ	灰白	
1096	268-07	土師器	台付椀	9	ク-Q6	SB59051-P3 (ク-Q6P111)	底部9/12	-	10.3	5.0	内:テ、コナテ 外:テ、テ、コナテ	浅黄橙	
1097	269-07	土製品	土鏝	9	ク-Q7	SB59051-P4 (ク-Q7P116)	1/2	長2.8	幅1.1	-	テ、神土	浅黄橙	重さ2.0g
1098	269-04	土製品	土鏝	9	ク-P6	SB59051-P1 (ク-P6P112)	1/2	長2.8	幅1.3	-	テ、神土	にぶい 黄橙	重さ3.3g
1099	269-05	土製品	土鏝	9	ク-Q6	SB59051-P2 (ク-Q6P111)	1/2	長2.9	幅1.0	-	テ、神土	褐灰	重さ2.5g
1100	269-08	土製品	土鏝	9	ク-Q7	SB59051-P4 (ク-Q7P116)	1/2	長2.8	幅1.0	-	テ、神土	にぶい 黄橙	重さ2.1g

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
1101	271-10	土製品	土鍾	9	ク-Q6	SB59051-P2 (ク-Q6Pit1)	2/3	長4.1	幅1.7	-	内:ナシ 外:ナシ	浅黄橙	重さ10.9g
1102	269-02	黒色土器	杯	9	ク-U6	SK59052	口縁部4/12	15.5	-	4.7	内:ナシ、油ナシ 外:ナシ、ナシ	にぶい 黄橙	内黒
1103	268-02	土師器	杯	9	ク-U6	SK59052	5/12	15.0	-	3.4	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	にぶい 黄橙	
1104	268-06	土師器	杯	9	ク-N7	SK59053内 (ク-N7Pit5No1)	口縁部2/12	15.0	-	2.0	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	にぶい 橙	
1105	272-04	土師器	杯	9	ク-N7	SK59053内 (ク-N7Pit5柱痕)	口縁部片	-	-	-	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	橙	
1106	270-02	志摩式 製塩土器		9	ク-N7	SK59053	1/12	13.2	13.4	5.2	内:ナシ 外:ナシ、ナシ	橙	
1107	270-03	志摩式 製塩土器		9	ク-N7	SK59053	底部2/12	-	17.0	3.4	内:ナシ 外:ナシ、ナシ	にぶい 橙	
1108	270-01	志摩式 製塩土器		9	ク-N7	SK59053	1/12	22.0	22.0	6.0	内:ナシ 外:ナシ、ナシ	橙	
1109	028-05	土師器	杯	1	ス-J11	Pit1	口縁部片	-	-	-	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	浅黄橙	
1110	028-08	土師器	杯	1	チ-G13	Pit6	口縁部4/12	12.2	-	3.6	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	にぶい 黄橙	内面に煤付着
1111	028-03	灰軸陶器	碗	1	ス-L11	Pit1	口縁部4/12	12.0	-	2.4	内:ナシ 外:ナシ	灰白	
1112	028-02	灰軸陶器	碗	1	ス-N11	Pit1	底部12/12	-	8.0	3.2	内:ナシ 外:ナシ、糸切痕	灰白	
1113	028-06	土師器	甕	1	チ-J9	Pit1	台部片	-	5.0	-	内:工具ナシ 外:ナシ、工具ナシ	にぶい 黄橙	短い台部
1114	028-07	土師器	甕	1	チ-I13	Pit3	口縁~胴部片	-	-	-	内:工具ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	にぶい 黄橙	
1115	073-05	土師器	甕	2	ナ-O15	Pit1	口縁部片	-	-	-	内:ナシ 外:ナシ	にぶい 黄橙	
1116	028-04	土師器	杯	4	ス-L11	Pit1	口縁部1/12	14.3	-	3.2	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	浅黄橙	
1117	193-04	土師器	小皿	6	テ-R9	Pit3	3/12	7.3	-	1.2	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	灰白	
1118	162-05	土師器	杯	6	テ-L24	Pit1	9/12	11.6	-	2.7	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	にぶい 黄橙	
1119	162-04	土師器	杯	6	テ-L25	Pit3	3/12	11.7	-	2.5	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	灰白	
1120	163-01	土師器	皿	6	テ-M23	Pit9掘方	8/12	9.7	-	2.4	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	にぶい 黄橙	垂み大
1121	193-01	土師器	杯	6	テ-M10	Pit1	1/12	16.6	-	3.9	内:ナシ、放射状暗文 外:ナシ、ナシ	にぶい 橙	
1122	162-03	須恵器	杯	6	テ-M10	Pit3	3/12	15.2	-	3.6	内:ナシ 外:ナシ、ロウズリ	灰	
1123	195-03	灰軸陶器	段皿	6	テ-L21	Pit10	口縁部1/12	17.0	-	1.9	内:ナシ 外:ナシ、灰軸、塗り	灰白	
1124	195-01	山茶碗	碗	6	テ-L22	Pit12	底部8/12	-	6.7	2.3	内:ナシ 外:ナシ、糸切痕、ミヅウ痕	灰白	
1125	194-03	土師器	甕	6	テ-M24	Pit12	口縁部1/12	17.8	-	3.0	内:ナシ 外:ナシ	にぶい 橙	
1126	194-02	土師器	甕	6	テ-M15	Pit3	口縁部2/12	12.8	-	3.1	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	灰白	
1127	223-06	土師器	皿	7	ツ-J14	Pit4	1/12	11.8	-	1.6	内:ナシ 外:ナシ	にぶい 橙	
1128	223-04	土師器	碗	7	H-J12	Pit1	口縁1/12 底部6/12	14.0	7.0	5.5	内:ナシ 外:ナシ、ナシ	灰白	
1129	223-02	志摩式 製塩土器		7	ツ-J14	Pit1	小片	-	-	-	ナシ	にぶい 橙	
1130	212-04	土師器	杯	7	ツ-J14	Pit4掘方	底部片	-	-	-		にぶい 橙	外面に墨書
1131	212-05	土師器	杯	7	ツ-J14	Pit4	底部片	-	-	-		橙	外面に墨書
1132	223-03	緑軸陶器	皿	7	ツ-J14	Pit1	口縁部片	-	-	-	内:ナシ、緑軸 外:ナシ、緑軸	灰白	
1133	223-01	灰軸陶器	皿	7	ツ-J14	Pit1	口縁6/12 底部1/12	17.6	6.8	3.1	内:ナシ 外:ナシ	灰白	重ね焼き痕あり
1135	105-01	土師器	鍋	3	ワ-T15	Pit1	口縁部4/12	20.8	-	3.2	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	浅黄橙	外面に煤付着
1136	105-02	灰軸陶器	碗	3	ワ-N15	Pit1	底部1/12	-	7.5	1.4	内:ナシ 外:ナシ、糸切痕	灰白	
1137	110-01	瓦	平瓦	3	ワ-A18	Pit1	小片	-	-	-	凹面:布目 凸面:縄目	橙	
1138	127-02	土師器	杯	5	ケ-L12	Pit3土器2 SB55005隣接	8/12	14.4	-	2.4	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	橙	
1139	130-01	灰軸陶器	皿	5	ケ-Y13	Pit3土器1 SB55005隣接	8/12	14.0	6.8	2.6	内:ナシ 外:ナシ、灰軸	灰白	
1140	127-03	土師器	甕	5	ケ-L12	Pit3 SB55005隣接	口縁部片	-	-	-	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	灰白	
1141	127-01	土師器	長胴甕	5	ケ-L12	Pit3土器3 SB55005隣接	口縁~胴部 1/12	22.8	-	18.0	内:工具ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	褐灰	
1142	271-06	土師器	杯	9	ク-Q6	Pit4	1/12	16.6	-	2.8	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	橙	
1143	275-02	土師器	杯	9	ク-Q6	Pit12	2/12	12.5	-	2.5	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	にぶい 黄橙	
1144	274-09	土師器	杯	9	ク-Q7	Pit2	口縁部片	-	-	-	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	にぶい 橙	
1145	272-03	土師器	杯	9	ク-P7	Pit3	口縁部片	-	-	-	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	灰白	
1146	275-01	土師器	杯	9	ク-Q6	Pit12	2/12	10.7	-	2.4	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	にぶい 橙	
1147	274-13	土師器	杯	9	ク-R6	Pit6	口縁部片	-	-	-	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	橙	
1148	275-03	土師器	杯	9	ク-S7	Pit7	口縁部片	-	-	-	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	浅黄橙	
1149	272-02	ククロ土師器	杯	9	D-E6	Pit5	底部2/12	-	5.8	1.7	内:ナシ 外:ナシ、糸切痕	浅黄橙	
1150	275-07	土師器	甕	9	ク-O7	Pit6	口縁部片	-	-	-	内:ナシ 外:ナシ	灰白	
1151	272-05	土師器	甕	9	ク-N7	Pit7	口縁部片	-	-	-	内:ナシ 外:ナシ	にぶい 橙	
1152	274-12	土師器	甕	9	ク-R7	Pit6	口縁部片	-	-	-	内:ナシ 外:ナシ	浅黄橙	
1153	274-10	土師器	甕	9	ク-Q7	Pit2	口縁部片	-	-	-	内:ナシ 外:ナシ	浅黄橙	
1154	272-08	土師器	甕	9	ク-P7	Pit1	口縁部片	-	-	-	内:ナシ 外:ナシ	にぶい 黄橙	
1155	272-07	土師器	甕	9	ク-S7	Pit6	1/12	13.8	-	3.2	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	灰白	
1156	274-11	土師器	甕	9	ク-R6	Pit3掘方	口縁部片	-	-	-	内:ナシ、ナシ 外:ナシ、ナシ	褐灰	
1157	275-04	須恵器	蓋	9	ク-R7	Pit2	口縁部片	-	-	-	内:ナシ 外:ナシ	灰	
1158	275-10	陶器	瓶	9	ク-Q6	Pit9掘方	底部片	-	-	-	内:ナシ 外:ナシ、ナシ	灰白	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
1159	274-14	灰釉陶器	皿	9	ク-Q7	Pit13	口縁部片	-	-	-	内:ロコナテ、陰刻花文 外:ロコナテ	灰 オリーブ	
1160	275-05	灰釉陶器	椀	9	ク-R6	Pit3	底部1/12	-	6.8	1.4	内:ロコナテ 外:ロコナテ	灰白	
1161	275-09	灰釉陶器	椀	9	ク-Q6	Pit12	口縁部1/12	15.8	-	4.4	内:ロコナテ 外:ロコナテ	灰白	
1162	275-06	灰釉陶器	椀	9	ク-Q7	Pit6	底部2/12	-	8.0	2.9	内:ロコナテ、灰釉漬け掛け 外:ロコナテ、ロコナテ	灰白	
1163	275-08	灰釉陶器	耳皿	9	ク-Q7	Pit6掘方	底部12/12	-	4.4	2.6	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕	灰白	
1164	274-03	土製品	土鍾	9	ク-R7	Pit2	完形	長4.0	幅1.0	-	テ、神エ	浅黄橙	重さ3.3g
1165	274-05	土製品	土鍾	9	ク-Q7	Pit2	完形	長3.25	幅1.4	-	テ、神エ	灰黄	重さ4.5g
1166	274-01	土製品	土鍾	9	ク-Q7	Pit2	2/3	長3.3	幅1.0	-	テ、神エ	にぶい 黄橙	重さ2.7g
1167	274-07	土製品	土鍾	9	ク-S7	Pit7	2/3	長3.6	幅1.0	-	テ、神エ	黒	重さ2.6g
1168	274-04	土製品	土鍾	9	ク-Q7	Pit2	1/2	長2.2	幅0.9	-	テ、神エ	にぶい 黄橙	重さ1.1g
1169	274-08	土製品	土鍾	9	ク-Q6	Pit12	1/2	長2.1	幅0.9	-	テ、神エ	浅黄橙	重さ1.0g
1170	274-06	土製品	土鍾	9	ク-R6	Pit6	完形	長5.2	幅1.0	-	テ、神エ	浅黄橙	重さ4.4g
1171	271-11	土製品	土鍾	9	ク-N7	Pit7	完形	長4.0	幅1.4	-	テ、神エ	にぶい 橙	重さ5.4g
1172	262-05	土製品	土鍾	9	ク-R7	Pit1	完形	長4.5	幅1.2	-	テ、神エ	灰	重さ6.4g
1173	262-06	土製品	土鍾	9	ク-R7	Pit1	完形	長4.5	幅1.2	-	テ、神エ	灰白	重さ5.9g
1174	274-02	土製品	土鍾	9	ク-R7	Pit2	完形	長4.5	幅1.15	-	テ、神エ	浅黄橙	重さ5.2g
1175	271-12	土製品	土鍾	9	ク-N7	Pit11掘方	完形	長4.2	幅0.9	-	テ、神エ	黒褐	重さ2.2g
1176	273-01	土製品	不明	9	ク-N7	Pit2柱痕	-	長6.0	幅5.0	厚4.1		橙	径7mmの孔あり
1178	276-04	土師器	蓋	1		廢土	摘み部片	-	-	-	内:テ 外:テ	橙	
1179	278-03	土師器	杯	1		西壁	2/12	13.4	-	3.2	内:テ、ヨコテ 外:神エ、テ、ヨコテ	浅黄橙	
1180	286-04	土製品	土鍾	1		包含層	2/3	長4.6	幅2.0	-	神エ、テ	浅黄橙	重さ15.3g
1181	276-05	土製品	土鍾	1		廢土	完形	長3.6	幅1.7	-	テ、神エ	褐灰	重さ9.8g
1182	277-02	須恵器	杯	1		表土	3/12	10.8	-	3.5	内:ロコナテ 外:ロコナテ、ヘリ切り	灰	
1183	277-05	須恵器	鉢	1		廢土	底部4/12	-	6.8	2.8	内:ロコナテ 外:ロコナテ、ヘリ切り	灰褐	高台内摩耗、転用破か?
1184	278-04	緑釉陶器	皿	1		表土	底部1/12	-	7.7	1.4	内:ロコナテ 外:ロコナテ	緑	素地:灰白色
1185	278-02	弥生土器	壺	1		表土	口縁部片	-	-	-	内:ヨコテ 外:ヨコテ、波状文、沈線	浅黄橙	
1186	276-03	土師器	壺	1		廢土	頸部片	-	-	-	内:テ、神エ 外:テ	浅黄橙	
1187	277-01	須恵器	長頸壺	1		表土	頸部片	-	-	-	内:ロコナテ 外:ロコナテ	灰白	
1188	278-01	土師器	甕	2	ネ-F13	包含層	小片	-	-	-	内:ヨコテ 外:ヨコテ	浅黄橙	
1189	276-01	土師器	甕	2		廢土	口縁部2/12	20.8	-	5.5	内:ヨコテ 外:ヨコテ	にぶい 橙	
1190	277-03	山茶碗	椀	3		表土	3/12	15.3	6.9	5.7	内:ロコナテ 外:ロコナテ	灰白	
1191	280-02	山茶碗	椀	3		廢土	底部12/12	-	4.8	2.9	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕、まじり痕	灰白	
1192	277-04	山茶碗	皿	3		包含層	4/12	9.2	4.9	2.6	内:ロコナテ 外:ロコナテ	灰白	
1193	280-04	山茶碗	小椀	3		表土	底部12/12	-	3.2	1.4	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕	灰白	見込みに重ね焼き痕
1194	280-07	白磁	椀	3		表土	底部3/12	-	6.6	2.2	内:施釉 外:ロコナテ	灰白	(削出高台)
1195	278-05	その他	溶解伊 伊壁	3		廢土	小片	-	-	-		-	
1196	276-06	土製品	土鍾	3	ワ-X20	包含層	1/2	長2.5	幅1.3	-	テ、神エ	灰白	重さ2.7g
1198	111-01	瓦	軒平瓦	3		表土	1/8	-	-	厚3.8	内面:摩滅 凸面:摩滅	灰黄	唐草文
1199	283-01	瓦	平瓦	3		表土	小片	-	-	厚2.2	内面:布目 凸面:縄叩き	灰褐	
1200	279-01	瓦	平瓦	3		表土	小片	-	-	厚2.5	内面:テ 凸面:縄叩き	灰白	
1201	282-02	瓦	平瓦	3		表土	小片	-	-	厚1.7	内面:布目 凸面:縄叩き	灰	
1202	283-02	瓦	平瓦	3		表土	小片	-	-	厚2.0	内面:布目 凸面:縄叩き	灰	
1203	280-01	山茶碗	椀	4		表土	1/12	16.4	7.4	5.0	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕	灰白	
1204	281-01	土師器	甕	4		中央部北側壁	口縁部2/12	16.9	-	4.5	内:ヨコテ 外:ヨコテ	灰白	
1205	281-03	土師器	移動式 竈	4		中央部北側壁	底部	-	29.2	8.4	内:ヨコテ 外:ヨコテ	にぶい 橙	
1206	282-03	瓦	丸瓦	4	ク-B15	包含層	小片	-	-	厚2.2	摩滅	にぶい 黄橙	
1208	281-04	須恵器	杯蓋	5		表土	2/12	13.0	-	3.3	内:ロコナテ 外:ロコナテ、ヘリ切り	灰	外面に火傷
1209	280-05	灰釉陶器	椀	5		表土	底部4/12	-	6.1	1.6	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕	灰白	
1210	282-04	土製品	不明	5	ケ-I12	灰褐色/外	完形	-	-	-		にぶい 黄橙	重さ76.9g 酸化土砂付着
1211	280-06	灰釉陶器	椀	6		表土	底部4/12	-	8.0	1.6	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕	灰白	見込みに高台に重ね焼き痕
1212	280-03	山茶碗	皿	6		廢土	3/12	8.1	3.5	1.7	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕	灰白	
1213	283-03	土師器	鉢	6		表土	底部3/12	-	11.4	5.0	内:テ、麻刻 外:テ、ハ	橙	底部外面に圧痕?
1214	281-02	土師器	鉢	6		灰黄褐色/外	底部2/12	-	17.5	4.0	内:ヨコテ 外:ヨコテ	にぶい 黄橙	
1215	282-01	瓦	平瓦	6		廢土	小片	-	-	厚1.7	内面:布目 凸面:縄叩き	灰白	
1216	281-05	土製品	土鍾	6		包含層	3/4	長6.7	幅2.3	-	テ、神エ	にぶい 黄橙	重さ31.0g
1217	286-02	土師器	高杯	7		北側サブトレ 褐灰砂	脚部2/12	-	12.0	7.8	内:神エ、ハ 外:ヨコテ	橙	
1218	284-01	灰釉陶器	椀	7	H-J12	包含層	底部4/12	-	7.8	3.4	内:ロコナテ 外:ロコナテ、糸切痕	灰白	見込みに重ね焼き痕

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
1219	285-05	土師器	壺	7	ツ-J2	包含層	口縁部1/12	18.6	-	4.6	内:ロコナナ 外:ロコナナ	黒褐	
1220	286-06	土製品	土鍾	7	ツ-J1	包含層	2/3	長3.9	幅0.9	-	材質, 打	にぶい 黄橙	重さ2.1g
1222	284-04	陶器 (瀬戸美濃)	皿	8	G-E24	西側崩乱	2/12	12.0	7.0	2.6	内:灰釉 外:灰釉	灰白	折縁皿
1223	284-03	陶器 (瀬戸美濃)	皿	8	G-E23	段下げ	底部3/12	-	5.4	1.2	内:灰釉 外:灰釉, 削出高台	灰白	
1224	284-05	須恵器	壺	8		断割り	口縁部片	-	-	-	内:ロコナナ 外:ロコナナ, 沈線, 櫛描文	灰白	
1225	286-07	土製品	土鍾	8	G-D22	段下げ	2/3	長4.3	幅1.0	-	材質, 打	にぶい 黄橙	重さ3.3g
1226	286-03	土製品	土鍾	8		断割り	ほぼ完形	長4.3	幅0.9	-	材質, 打	浅黄橙	重さ3.0g
1227	286-08	土製品	土鍾	8		表土	2/3	長3.7	幅1.3	-	材質, 打	褐灰	重さ5.2g
1228	284-08	その他	溶解部 如壁	8	北半		小片	-	-	厚1.8		橙	内面溶融しガラス化
1230	284-07	ロクロ土師器	皿	9	ク-M5	包含層	底部5/12	-	5.8	1.5	内:ロコナナ 外:ロコナナ, 糸切痕	淡黄	
1231	284-06	ロクロ土師器	皿	9	ク-M5	包含層	底部9/12	-	5.2	1.3	内:ロコナナ 外:ロコナナ, 糸切痕	淡黄	
1232	284-02	灰釉陶器	壺	9		表土	底部4/12	-	9.0	4.0	内:ロコナナ 外:ロコナナ, ロコナナリ, 糸切痕	灰白	
1233	285-03	土師器	鉢	9	北東部	表土	口縁部1/12	19.4	-	2.9	内:シキ 外:シキ	にぶい 黄橙	浅い丸底鉢
1234	285-02	弥生土器	甕	9	南	表土	口縁部2/12	15.4	-	4.5	内:ロコナナ 外:ロコナナ	橙	
1235	285-04	弥生土器	甕	9	ク-X5	西側トレンチ	口縁部1/12	18.6	-	4.7	内:ロコナナ 外:ロコナナ	にぶい 黄橙	外面に煤付着
1236	286-01	土師器	台付甕	9	ク-UV5	西側トレンチ 下層細砂	台部3/12	-	9.2	6.6	内:打 外:ロコナナ	にぶい 黄橙	
1237	286-05	土製品	土鍾	9	ク-S5	包含層	2/3	長3.5	幅0.9	-	材質, 打	灰黄褐	重さ2.5g
1329	057-02	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 隆帯	浅黄橙	
1330	045-01	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 黄褐色シトNo28	口縁部片	-	-	-	内:摩滅 外:沈線, 竹管文	灰	波状口縁
1331	042-02	縄文土器	深鉢	1	チ-H13	SZ51046 暗褐色シトNo12	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 沈線, 縄文	にぶい 黄	波状口縁
1332	042-01	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 No18	口縁部片	-	-	-	内:打 外:凹線, 斜行線, 沈線, 刺突	にぶい 黄	波状口縁
1333	054-03	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シト土器No17	口縁部片	-	-	-	内:摩滅 外:打, 沈線, 隆帯, 刺突	橙	
1334	043-03	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:沈線, 隆帯, 刺突	にぶい 黄	
1335	051-05	縄文土器	深鉢	1	1-4区	SZ51046 黄褐色シト	胴部片	-	-	-	内:打 外:打, 沈線	橙	
1336	043-02	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:沈線, 斜行線	にぶい 黄橙	波状口縁
1337	055-05	縄文土器	深鉢	1	チ-H12・13	SZ51046 暗褐色土	口縁部片	-	-	-	内:打 外:縄文RL, 沈線	にぶい 黄	
1338	060-04	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シトNo24	口縁部片	-	-	-	内: 外:沈線, 刺突	にぶい 黄	
1339	048-03	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 沈線, 斜行線	にぶい 黄橙	
1340	046-02	縄文土器	深鉢	1	チ-I12	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 沈線(渦文)	浅黄橙	波状口縁
1341	046-04	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シトNo28	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 沈線, 刺突	黒褐	波状口縁
1342	032-02	縄文土器	深鉢	1	チ-I13	SZ51046 黄褐色シトNo2	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 沈線	にぶい 黄橙	
1343	049-05	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内: 外:沈線(渦文)	にぶい 黄橙	
1344	052-06	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 斜行線, 沈線, 隆帯, 刺突	明黄褐	
1345	040-02	縄文土器	深鉢	1	チ-I13	SZ51046 黄褐色シトNo9	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 打, 沈線	にぶい 黄	波状口縁
1346	031-01	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シトNo22	胴部片	-	-	-	内:打 外:沈線, 刺突, 綾杉文	灰白	外面下部に煤付着
1347	038-02	縄文土器	深鉢	1	チ-G12・13	SZ51046 暗褐色シトNo22	口縁~胴部 10/12	38.0	-	15.0	内:シキ 外:打, 沈線, 刺突	にぶい 黄橙	波状口縁
1348	043-01	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	口縁~胴部片	-	-	-	内:打 外:打, 隆帯, 櫛描文	にぶい 黄	波状口縁
1349	042-03	縄文土器	深鉢	1	チ-G12	SZ51046 暗褐色シトNo27	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 隆帯, 沈線, 櫛描文	にぶい 赤褐	波状口縁
1350	041-01	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シトNo21	口縁~胴部 1/12	33.2	-	21.0	内:打 外:打, 沈線, 疑縄文	黒褐	焼成後穿孔(補修孔)
1351	051-02	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 綾杉文, 沈線, 隆帯, 刺突	にぶい 黄	
1352	048-05	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:沈線	にぶい 黄橙	
1353	052-03	縄文土器	深鉢	1	チ-H12	SZ51046 暗褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 斜行線, 沈線, 竹管文	褐灰	
1354	042-04	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:シキ 外:打, 沈線	にぶい 黄	
1355	034-02	縄文土器	深鉢	1	チ-I13	SZ51046 黄褐色シトNo3	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 打, 沈線, 刺突	にぶい 黄橙	波状口縁
1356	039-02	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:沈線, 疑縄文	黒褐	
1357	052-07	縄文土器	深鉢	1	チ-F13	SZ51046 黄褐色シトNo4	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 沈線, 斜行線	灰黄褐	
1358	031-02	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 沈線, 刺突, 隆帯	にぶい 黄	
1359	053-02	縄文土器	深鉢	1	チ-I13	SZ51046 黄褐色シトNo9	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 打, 隆帯, 沈線, 竹管文	にぶい 黄	波状口縁
1360	044-04	縄文土器	深鉢	1	チ-I12	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 沈線, 刺突, 隆帯	にぶい 黄	
1361	056-05	縄文土器	深鉢	1	チ-G12	SZ51046 黒褐色土	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 沈線, 竹管文	にぶい 黄橙	
1362	052-08	縄文土器	深鉢	1	チ-I13	SZ51046 黄褐色シトNo8	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 沈線, 斜行線	にぶい 黄	
1363	049-04	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:沈線(渦文)	にぶい 黄橙	
1364	061-05	縄文土器	深鉢	1	チ-H13	SZ51046 暗褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:摩滅 外:沈線, 綾杉文	にぶい 黄	胎土に赤色粒多含
1365	055-07	縄文土器	深鉢	1	チ-H12・13	SZ51046 暗褐色土	口縁部片	-	-	-	内:疑縄文 外:渦文, 隆帯	にぶい 黄	
1366	036-02	縄文土器	深鉢	1	チ-G12	SZ51046 暗褐色シトNo26	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 沈線	にぶい 黄	
1367	051-06	縄文土器	深鉢	1	1-4区	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 打, 隆帯	褐	
1368	050-06	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:打 外:打, 沈線, 隆帯, 刺突	にぶい 黄橙	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
1369	046-03	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行、ヨコ行 外:ヨコ行、沈線	橙	
1370	059-04	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、縄文	にぶい 橙	
1371	048-06	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:摩滅 外:行、斜行線、沈線、刺突	にぶい 黄橙	
1372	035-02	縄文土器	深鉢	1	チ-I13	SZ51046 黄褐色No3	口縁部片	-	-	-	内:行 外:沈線、行	にぶい 褐	
1373	032-01	縄文土器	深鉢	1	チ-I12・13	SZ51046 (SD51020基盤層)	口縁～胴部 3/12	22.7	-	13.6	内:行、ヨコ行、 外:ヨコ行、沈線、綾杉文、隆帯	にぶい 黄橙	
1374	033-01	縄文土器	浅鉢	1	チ-I13	SZ51046 黄褐色No5	口縁部1/12	26.2	-	6.2	内:工具行、ヨコ行 外:沈線、刺突	浅黄橙	
1375	037-01	縄文土器	深鉢	1	チ-G12・13	SZ51046 暗褐色No22	口縁～胴部 2/12	35.4	-	22.4	内:行、行、工具行 外:刺突、沈線、綾杉文	灰黄褐	ゆるい波状口縁
1376	038-01	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 黄褐色No1	口縁部4/12	30.4	-	8.8	内:工具行、 外:沈線、刺突、綾杉文、隆帯	にぶい 黄橙	ゆるい波状口縁
1377	052-05	縄文土器	浅鉢	1	チ-G13	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	橙	
1378	050-05	縄文土器	浅鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、凹点	浅黄橙	
1379	052-04	縄文土器	浅鉢	1	チ-F13	SZ51046 暗褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、隆帯	にぶい 黄橙	
1380	051-08	縄文土器	深鉢	1	1-4区	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、隆帯、沈線	褐	
1381	058-07	縄文土器	深鉢	1	チ-I12・13	SZ51046 (SD51020基盤層)	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、隆帯、綾杉文	にぶい 黄橙	
1382	050-03	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、綾杉文	橙	波状口縁
1383	057-06	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 黄褐～暗褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、刺突	浅黄橙	
1384	055-02	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色土	口縁部片	-	-	-	内:工具行、ヨコ行 外:行、刺突	にぶい 黄褐	
1385	033-04	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 黄褐色No5	口縁部片	-	-	-	内:行、 外:ヨコ行、沈線、刺突	橙	
1386	054-02	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色No17	胴部片	-	-	-	内:行、 外:行、沈線、隆帯、刺突	橙	
1387	046-01	縄文土器	深鉢	1	チ-I13	SZ51046 黄褐色No8	口縁部片	-	-	-	内:行、ヨコ行 外:行、ヨコ行、隆帯、沈線	浅黄橙	波状口縁
1388	054-05	縄文土器	浅鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:摩滅 外:摩滅、沈線	にぶい 黄橙	
1389	051-04	縄文土器	深鉢	1	1-4区	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、行、隆帯、沈線	黒褐	
1390	050-04	縄文土器	浅鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、綾杉文	浅黄橙	波状口縁
1391	056-06	縄文土器	浅鉢	1	チ-G12・13	SZ51046 黒褐色No22	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、隆帯	灰白	波状口縁
1392	031-04	縄文土器	深鉢	1	チ-H12・13	SZ51046 黄褐色No10	口縁～胴部 2/12	21.4	-	13.4	内:行 外:行、隆帯、沈線(綾杉文)	明黄褐	波状口縁
1393	048-04	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行、ヨコ行 外:行、ヨコ行	灰黄褐	波状口縁
1394	048-02	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:摩滅	にぶい 褐	
1395	050-01	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、半裁竹管刺突	にぶい 黄橙	波状口縁
1396	059-03	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行、ヨコ行 外:行、ヨコ行、沈線	にぶい 褐	波状口縁
1397	044-03	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	にぶい 橙	波状口縁
1398	050-02	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	浅黄橙	波状口縁
1399	051-07	縄文土器	深鉢	1	1-4区	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、隆帯	にぶい 褐	
1400	036-01	縄文土器	深鉢	1	チ-G12	SZ51046 暗褐色No26	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、刺突	にぶい 黄橙	波状口縁
1401	053-04	縄文土器	深鉢	1	チ-H13	SZ51046 黄褐色No12	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、ヨコ行、沈線	橙	
1402	057-08	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	にぶい 橙	
1403	062-01	縄文土器	深鉢	1	チ-G12・13	SZ51046 暗褐色No22	口縁～胴部 3/12	21.8	-	11.5	内:行、 外:縄文(無節)、沈線	にぶい 赤褐	
1404	055-04	縄文土器	深鉢	1	チ-H12・13	SZ51046 暗褐色土	口縁部片	-	-	-	内:摩滅 外:沈線	にぶい 橙	
1405	055-03	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色土	口縁部片	-	-	-	内:行、行 外:行、沈線、綾杉文	にぶい 黄褐	
1406	056-03	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黒褐色土	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、綾杉文、沈線	にぶい 黄橙	
1407	052-02	縄文土器	深鉢	1	チ-H12・13	SZ51046 暗褐色No11	胴部片	-	-	-	内:行 外:行、綾杉文、沈線	灰黄褐	
1408	049-02	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:摩滅 外:沈線、綾杉文	にぶい 黄橙	
1409	051-01	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:綾杉文、隆帯、刺突	にぶい 黄橙	
1410	054-06	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色No1	胴部片	-	-	-	内: 外:縄文、沈線	にぶい 褐	
1411	049-03	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	胴部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	にぶい 黄橙	
1412	050-07	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	胴部片	-	-	-	内:行 外:沈線、疑縄文	にぶい 橙	
1413	051-03	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黒褐色土	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、綾杉文、沈線、隆帯、刺突	にぶい 黄橙	
1414	055-06	縄文土器	深鉢	1	チ-H12・13	SZ51046 暗褐色土	口縁部片	-	-	-	内:行 外:縄文、沈線、隆帯	にぶい 黄橙	
1415	039-01	縄文土器	深鉢	1	チ-I13	SZ51046 黄褐色No9	口縁～胴部 2/12	32.0	-	16.0	内:行、ヨコ行 外:ヨコ行、沈線、綾杉文	橙	
1416	040-01	縄文土器	深鉢	1	チ-I13	SZ51046 黄褐色No9	口縁～胴部 1/12	34.8	-	15.0	内:行、ヨコ行 外:ヨコ行、沈線、綾杉文	灰黄褐	
1417	034-01	縄文土器	深鉢	1	チ-I13	SZ51046 暗褐色No31	口縁部1/12	29.0	-	6.2	内:行、 外:行、行、沈線	褐灰	表面摩滅
1418	056-01	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黒褐色土	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、綾杉文	にぶい 黄橙	波状口縁
1419	045-04	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行、行、 外:ヨコ行、沈線、刺突	浅黄橙	
1420	057-01	縄文土器	深鉢	1	チ-G12・13	SZ51046 暗褐色No1	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、竹管文	橙	
1421	061-04	縄文土器	深鉢	1	チ-H13	SZ51046 暗褐色No1	胴部片	-	-	-	内:摩滅 外:沈線、綾杉文	灰黄褐	
1422	049-01	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色No1	胴部片	-	-	-	内:摩滅 外:沈線、綾杉文	にぶい 黄橙	
1423	061-02	縄文土器	深鉢	1	チ-H12	SZ51046 暗褐色No1	胴部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、綾杉文	にぶい 褐	
1424	056-04	縄文土器	深鉢	1	チ-F12	SZ51046 黒褐色No1	胴部片	-	-	-	内:行 外:行、隆帯	黒褐	
1425	060-02	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色No19	胴部片	-	-	-	内:摩滅 外:沈線、綾杉文	灰黄褐	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
1426	033-03	縄文土器	深鉢	1	チ-G12	SZ51046 暗褐色シトNo32	胴部片	-	-	-	内:行' 外:行'、沈線	浅黄橙	
1427	053-03	縄文土器	深鉢	1	チ-I13	SZ51046 黄褐色シトNo9	胴部片	-	-	-	内:行' 外:綾杉文	灰褐	
1428	044-01	縄文土器	深鉢	1	チ-F13	SZ51046 暗褐色シトNo30	胴部片	-	-	-	内:条痕、行' 外:沈線、綾杉文	黒褐	
1429	032-03	縄文土器	深鉢	1	チ-I13	SZ51046 黄褐色シトNo6	胴部片	-	-	-	内:行' 外:沈線、綾杉文	にぶい 黄橙	
1430	044-02	縄文土器	深鉢	1	チ-II12	SZ51046 黄褐色シト	胴部片	-	-	-	内:行' 外:行'、沈線	浅黄褐	
1431	057-03	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:工具行' 外:行'、沈線	浅黄橙	
1432	048-07	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	胴部片	-	-	-	内:摩滅 外:摩滅、沈線	にぶい 黄橙	
1433	035-03	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シトNo20	胴部片	-	-	-	内:行'、ヨコ行' 外:沈線、綾杉文	にぶい 黄橙	
1434	035-01	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シトNo20	口縁部2/12	20.6	-	12.2	内:行'、ヨコ行' 外:ヨコ行'、行'	橙	
1435	056-02	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黒褐色土	口縁部片	-	-	-	内:行' 外:行'、条線	にぶい 黄橙	
1436	056-07	縄文土器	深鉢	1	チ-G12・13	SZ51046 黒褐色シトNo22	口縁部片	-	-	-	内:行' 外:行'、沈線、隆帯	にぶい 黄橙	
1437	048-01	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:シキ、行' 外:摩滅	にぶい 黄橙	
1438	055-01	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:摩滅 外:摩滅	にぶい 黄褐	
1439	045-03	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:行'、ヨコ行' 外:行'、ヨコ行'	褐	
1440	031-03	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 黄褐色シト	口縁～胴部 2/12	15.0	-	13.0	内:行'、行'、ヨコ行' 外:行'、ヨコ行'、シキ	にぶい 橙	
1441	053-05	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シトNo17	胴部3/12	-	-	-	内:行' 外:行'、シキ	にぶい、褐	
1442	059-05	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シト	胴部3/12	-	-	-	内:行'、行' 外:行'	にぶい 黄褐	
1443	032-04	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シトNo23	胴部片	-	-	-	内:行' 外:疑縄文	にぶい 黄橙	
1444	060-03	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シト	胴部片	-	-	-	内:行' 外:疑縄文	にぶい 黄橙	
1445	060-05	縄文土器	深鉢	1	チ-G12	SZ51046 暗褐色シト	胴部片	-	-	-	内:行' 外:条線	にぶい黄褐	
1446	045-02	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 黄褐色シト	胴部片	-	-	-	内:行' 外:シキ	にぶい 黄橙	
1447	054-04	縄文土器	深鉢	1	チ-G12	SZ51046 暗褐色シト	胴部片	-	-	-	内:工具行' 外:縄文(無節)	にぶい、褐	
1448	059-06	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シト	胴部片	-	-	-	内:行' 外:行'、シキ	褐	
1449	034-03	縄文土器	深鉢	1	チ-G12	SZ51046 暗褐色シトNo32	胴部片	-	-	-	内:行'、シキ 外:条線	浅黄橙	
1450	061-01	縄文土器	深鉢	1	チ-II12	SZ51046 暗褐色シト	胴部片	-	-	-	内:行' 外:行'、行'	にぶい、橙 灰黄褐	外面に煤付着
1451	033-05	縄文土器	深鉢	1	チ-G12	SZ51046 暗褐色シトNo33	胴部片	-	-	-	内:行' 外:行'	明赤褐	
1452	057-07	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シトNo15	胴部片	-	-	-	内:行' 外:行'	橙	
1453	059-02	縄文土器	台形土器	1	チ-F13	SZ51046 暗褐色シト	口縁部3/12	10.4	-	2.5	内: 外:沈線、刺突	明褐	
1454	036-03	縄文土器	深鉢	1	チ-G12	SZ51046 暗褐色シトNo13	底部4/12	-	9.8	8.8	内:行' 外:行'、網代痕	にぶい 橙	
1455	047-06	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	底部4/12	-	11.8	4.4	内:行'、行' 外:摩滅	浅黄橙	
1456	047-05	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	底部4/12	-	11.0	2.6	内:摩滅 外:摩滅	明黄褐	
1457	047-07	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	底部4/12	-	10.0	1.8	内:行' 外:行'	浅黄橙	
1458	047-08	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	底部3/12	-	9.8	2.2	内:行' 外:行'	にぶい 黄橙	
1459	047-02	縄文土器	深鉢	1	チ-G12・13	SZ51046 暗褐色シトNo22	底部3/12	-	8.8	2.4	内:行'、行' 外:行'、行'	にぶい 黄橙	
1460	061-03	縄文土器	深鉢	1	チ-II12	SZ51046 暗褐色シト	底部2/12	-	8.2	2.5	内:行' 外:行'、行'	にぶい 黄橙	
1461	054-01	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シトNo17	底部4/12	-	10.0	-	摩滅	にぶい 黄橙	
1462	047-04	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	底部3/12	-	9.6	1.4	内:行' 外:摩滅	にぶい 黄橙	
1463	059-01	縄文土器	深鉢	1	チ-F13	SZ51046 暗褐色シト	底部3/12	-	11.8	2.5	内:行' 外:行'	明褐	
1464	053-01	縄文土器	深鉢	1	チ-I13	SZ51046 黄褐色シトNo9	底部12/12	-	11.5	4.0	内:行' 外:行'	にぶい 黄橙	
1465	047-01	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シトNo22	底部4/12	-	10.2	6.4	内:行'、行' 外:行'、行'	にぶい 黄橙	
1466	057-05	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 黄褐～暗褐色シト	底部1/12	-	-	1.8	内:行' 外:行'	橙	
1467	057-04	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色土	底部2/12	-	10.6	2.1	内:行' 外:行'	にぶい 黄橙	
1468	047-03	縄文土器	深鉢	1	1-4区北	SZ51046 黄褐色シト	底部2/12	-	9.5	4.2	内:行'、行' 外:行'、行'	にぶい 黄橙	
1469	052-01	縄文土器	深鉢	1	チ-II12・13	SZ51046 黄褐色シトNo10	底部2/12	-	7.6	4.5	内:行' 外:行'	橙	
1470	033-02	縄文土器	深鉢	1	チ-G12	SZ51046 暗褐色シトNo13	底部片	-	-	-	内:行' 外:行'	浅黄橙	
1471	060-01	縄文土器	深鉢	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:行'、シキ 外:行'、シキ、沈線	にぶい、褐	波状口縁
1472	023-04	縄文土器	深鉢	1	チ-II13	SD51029	口縁部片	-	-	-	内:行' 外:綾杉文	にぶい 黄橙	
1473	287-05	縄文土器	浅鉢	1	チ-I15	包含層	口縁部片	-	-	-	内:行' 外:隆帯、沈線	浅黄橙	
1474	058-04	縄文土器	深鉢	1	チ-II15	褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:行' 外:行'、沈線、刺突	橙	
1475	023-05	縄文土器	深鉢	1	チ-II13	SD51029	口縁部片	-	-	-	内:行' 外:行'、刺突	灰黄褐	
1476	058-02	縄文土器	深鉢	1	チ-II13	SD51020	口縁部片	-	-	-	内:行' 外:	にぶい 橙	
1477	287-02	縄文土器	深鉢	1	ス-K11	Pt12	口縁部片	-	-	-	内:行' 外:隆帯、刻み	灰黄褐	
1478	288-06	縄文土器	深鉢	1	1-4区	断割	口縁部片	-	-	-	内:行' 外:行'、刺突	橙	橋状部
1479	287-03	縄文土器	深鉢	1		断割	口縁部片	-	-	-	内:行' 外:隆帯、刺突	浅黄橙	
1480	058-01	縄文土器	深鉢	1	チ-II13	SD51020	口縁部片	-	-	-	内:行' 外:凹点	にぶい 黄橙	
1481	058-03	縄文土器	深鉢	1	チ-II13	SD51020	口縁部片	-	-	-	内:行' 外:凹点	にぶい、褐	
1482	016-05	縄文土器	深鉢	1	ホ-I15	SX51017	口縁部片	-	-	6.6	内:行' 外:羽状文、沈線	にぶい 黄橙	砂粒多い

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
1483	058-06	縄文土器	深鉢	1	チ-112・13	SD51020	胴部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、綾杉文	にぶい 黄橙	
1484	058-05	縄文土器	深鉢	1	チ-115	褐色/64	胴部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、綾杉文	橙	
1485	024-04	縄文土器	深鉢	1	ス-M10	SK51036	小片	-	-	-	内:行 外:行、突帯、柿	黒褐	
1486	023-06	縄文土器	深鉢	1	チ-113	SX51029	小片	-	-	-	内:行 外:隆帯、沈線	橙	
1487	169-01 168-03	縄文土器	深鉢	6	テ-M17	SX56037	口縁~胴部 5/12	38.5	-	33.0	内:行 外:綾杉文、隆帯、沈線	浅黄橙	
1488	174-04	縄文土器	深鉢	6	テ-LM15	SZ56038	口縁部片	-	-	-	内:行 外:漆、縄文、沈線	灰黄褐	
1489	174-01	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56038	口縁部片	-	-	-	内:行、ヨコ行 外:縄文、刺突	明赤褐	
1490	174-05	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56038	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、隆帯、刺突	明赤褐	
1491	175-05	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56038 北西側	口縁部片	-	-	-	内:行 外:ヨコ行、隆帯	明赤褐	
1492	174-03	縄文土器	深鉢	6	テ-LM15	SZ56038	口縁部片	-	-	-	内:ヨコ行 外:ヨコ行	にぶい 黄橙	
1493	174-07	縄文土器	深鉢	6	テ-LM15	SZ56038	口縁部片	-	-	-	内:行、行 外:行、行	にぶい 黄橙	波状口縁
1494	175-04	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56038 北西側	口縁部片	-	-	-	内:行 外:漆	にぶい 黄褐	
1495	175-02	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56038 北西側	口縁部片	-	-	-	摩擦	灰黄褐	
1496	175-01	縄文土器	深鉢	6	テ-LM15	SZ56038	口縁部片	-	-	-	内:行、ヨコ行 外:漆	明赤褐	
1497	174-06	縄文土器	深鉢	6	テ-LM15	SZ56038	口縁部片	-	-	-	内:行 外:漆	褐	
1498	174-09	縄文土器	深鉢	6	テ-LM15	SZ56038	胴部片	-	-	-	内:行 外:縄文、沈線	褐	
1499	175-06	縄文土器	深鉢	6	テ-M14・15	SZ56038アゼ	胴部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	灰褐	
1500	174-02	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56038	口縁~胴部片	-	-	-	内:行 外:沈線、縄文	にぶい褐	
1501	174-08	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56038	胴部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	褐	
1502	175-07	縄文土器	深鉢	6	テ-M14・15	SZ56038アゼ	胴部片	-	-	-	内:行 外:縄文、沈線	にぶい 橙	
1503	175-03	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56038 北西側	胴部片	-	-	-	内:行 外:縄文	にぶい 黄褐	
1504	175-08	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56038	底部1/12	-	7.0	1.9	摩擦、網代痕	明赤褐	
1505	164-01	縄文土器	鉢	6	テ-M15	SK56040	2/12	23.8	-	11.7	内:漆 外:漆、沈線、縄文	黒褐	
1506	179-07	縄文土器	深鉢	6	テ-K20	SK56041	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、縄文、沈線	黒褐	
1507	179-05	縄文土器	深鉢	6	テ-K20	SK56041	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	灰褐	
1508	178-01	縄文土器	深鉢	6	テ-K20	SK56041	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、隆帯	にぶい 黄橙	
1509	178-05	縄文土器	深鉢	6	テ-K20	SK56041	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	橙	
1510	176-02	縄文土器	深鉢	6	テ-L19	SZ56042	口縁部片	-	-	-	内:行 外:縄文、沈線	にぶい褐	
1511	176-03	縄文土器	深鉢	6	テ-L19	SZ56042	胴部片	-	-	-	内:行 外:縄文、沈線	褐	
1512	176-04	縄文土器	深鉢	6	テ-L19	SZ56042	底部3/12	-	8.0	1.3	内: 外:行	にぶい褐	
1513	179-03	縄文土器	深鉢	6	テ-K23	SZ56046	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	黄灰	
1514	177-07	縄文土器	深鉢	6	テ-K23	SZ56046	胴部片	-	-	-	内:漆 外:漆、沈線	黒褐	
1515	179-02	縄文土器	深鉢	6	テ-K23	SZ56046	胴部片	-	-	-	内:漆 外:漆	黒褐	
1516	177-08	縄文土器	深鉢	6	テ-K23	SZ56046	胴部片	-	-	-	内:漆 外:漆線	にぶい 黄橙	
1517	167-04	縄文土器	浅鉢	6	テ-L15	SZ56047	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、縄文、刺突	橙	
1518	165-01	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56047	口縁~胴部 12/12	26.6	-	20.8	内:行 外:行、沈線、竹管文	橙	
1519	166-03	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56047	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、縄文、沈線	明赤褐	
1520	168-02	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56047	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、縄文、刺突	黒褐	
1521	168-01	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56047	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	橙	
1522	167-03	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56047	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行	にぶい褐	
1523	166-01	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56047	口縁~胴部 1/12	33.4	-	18.4	内:工具行 外:漆痕、漆	黒褐	
1524	167-02	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56047	胴部片	-	-	-	内:漆 外:沈線、縄文	明赤褐	
1525	167-01	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56047	胴部片	-	-	-	内:行、条痕 外:行	橙	
1526	166-02	縄文土器	深鉢	6	テ-L15	SZ56047	底部12/12	-	9.3	5.0	内:行 外:行	にぶい 黄橙	
1527	176-01	縄文土器	深鉢	6	テ-M18	SX56057	底部10/12	-	12.1	7.3	内:行、行、工具行 外:行、行、沈線、台圧痕	にぶい 赤褐	
1528	186-05	縄文土器	深鉢	6	テ-M23	SK56060	胴部片	-	-	-	内:行、行 外:工具行	にぶい褐	
1529	173-06	縄文土器	深鉢	6	テ-K25 ト-K1	SK56061	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	にぶい褐	
1530	173-05	縄文土器	深鉢	6	テ-K25 ト-K1	SK56061	胴部片	-	-	-	内:漆 外:漆、縄文、沈線	にぶい 黄橙	
1531	173-03	縄文土器	深鉢	6	テ-K25 ト-K1	SK56061	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	灰黄褐	
1532	170-01 171-01	縄文土器	深鉢	6	テ-K25	SK56061	口縁~胴部 4/12	-	-	-	内:漆 外:縄文、沈線	灰黄	
1533	173-04	縄文土器	深鉢	6	テ-K25 ト-K1	SK56061	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行	にぶい 黄橙	
1534	173-01	縄文土器	深鉢	6	テ-K25	SK56061	胴部片	-	-	-	内:条痕、行、ヨコ行 外:条痕、ヨコ行	にぶい 黄橙	
1535	173-02	縄文土器	深鉢	6	テ-K25 ト-K1	SK56061	胴部片	-	-	-	内:漆 外:縄文	にぶい 黄橙	
1536	172-01	縄文土器	深鉢	6	テ-K25 ト-K1	SK56061	胴部片	-	-	-	内:漆 外:漆、縄文	にぶい 橙	
1537	189-03	縄文土器	深鉢	6	テ-L19	Pi1102	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、縄文、沈線	にぶい 赤褐	
1538	189-02	縄文土器	浅鉢	6	テ-N16	Pi1102	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、縄文、沈線	橙	
1539	189-01	縄文土器	深鉢	6	テ-L24	Pi1101	口縁部片	-	-	-	内:行、ヨコ行 外:ヨコ行、沈線	橙	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
1540	188-02	縄文土器	深鉢	6	テ-M17	Pit101	胴部片	-	-	-	内:テ 外:条痕	灰黄褐色	
1541	183-01	縄文土器	浅鉢	6	+14m	埋積浅谷?ト内 暗灰褐色シト	口縁~胴部片	-	-	-	内:テ、シキ 外:シキ、沈線	にぶい 橙	
1542	189-07	縄文土器	深鉢	6	テ-L25	埋積浅谷 灰黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:テ、ヨコテ 外:テ、沈線、縄文	にぶい 黄褐色	
1543	189-05	縄文土器	鉢	6	テ-L24・25	埋積浅谷 灰黄褐色~黄褐色シト	胴部片	-	-	-	内:テ 外:テ、縄文、沈線、シキ	にぶい 黄褐色	
1544	180-04	縄文土器	深鉢	6	テ-L25	埋積浅谷 黄褐色シト	胴部片	-	-	-	内:テ 外:沈線、縄文	にぶい 黄褐色	
1545	188-01	縄文土器	浅鉢	6	テ-L25	埋積浅谷 灰黄褐色シト	胴部片	-	-	-	内:テ、カズリ、シキ 外:縄文、沈線、竹管文	にぶい 黄褐色	
1546	192-03	縄文土器	注口土器	6	+14m	埋積浅谷 黄褐色~灰黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ	橙	橋状部・注口剥離
1547	192-01	縄文土器	深鉢	6	+14m	埋積浅谷 黄褐色~灰黄褐色シト	口縁~胴部 2/12	24.6	-	12.2	内:テ 外:テ、沈線	灰黄	
1548	182-03	縄文土器	深鉢	6	テ-K1.25	埋積浅谷 黄褐色シト	胴部片	-	-	-	内:テ 外:テ、縄文	にぶい 黄褐色	
1549	188-03	縄文土器	深鉢	6	テ-L25	埋積浅谷 灰黄褐色シト	胴部片	-	-	-	内:シキ 外:条痕	灰黄褐色	
1550	191-03	縄文土器	深鉢	6	+14m	埋積浅谷 溝状落込最下層	口縁部片	-	-	-	内:工具テ、ヨコテ 外:テ、シキ	明黄褐色	薄く煤付着
1551	188-04	縄文土器	浅鉢	6	テ-L24・25	埋積浅谷 灰黄褐色~黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:テ、縄文 外:縄文	褐灰	
1552	190-02	縄文土器	深鉢	6	+14m	埋積浅谷上層 灰褐色極細砂	口縁部片	-	-	-	内:工具テ、ヨコテ 外:テ、ヨコテ	橙	外面煤付着
1553	189-04	縄文土器	深鉢	6	テ-L34・35	埋積浅谷 灰黄褐色~黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ	灰黄褐色	
1554	187-04	縄文土器	深鉢	6	テ-LM25	埋積浅谷 灰黄褐色シト	底部2/12	-	6.0	4.0	内:テ 外:テ、縄文	にぶい 褐	
1555	187-02	縄文土器	深鉢	6	テ-L25	埋積浅谷 灰黄褐色シト	底部片	-	13.2	5.4	内:テ 外:テ、シキ、網代痕	にぶい 黄褐色	
1556	187-03	縄文土器	深鉢	6	テ-LM25	埋積浅谷 灰黄褐色シト	底部3/12	-	6.0	3.2	内:条痕 外:テ	にぶい 黄褐色	
1557	190-06	縄文土器	深鉢	6	テ-L25	灰黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:テ、ヨコテ 外:テ、刺突	にぶい 橙	
1558	184-02	縄文土器	深鉢	6	+34~49m	灰黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:沈線、刺突	にぶい 褐	
1559	185-02	縄文土器	深鉢	6	テ-K25	灰黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:沈線、刺突	灰黄褐色	波状口縁
1560	190-08	縄文土器	深鉢	6	テ-LM17	灰黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ、縄文、沈線	にぶい 褐	
1561	181-03	縄文土器	深鉢	6	+63.1m	灰黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ、沈線	灰黄褐色	波状口縁
1562	190-01	縄文土器	深鉢	6	テ-LM17	灰黄褐色シト	胴部片	-	-	-	内:テ 外:テ、縄文、沈線	褐	外面煤付着
1563	183-03	縄文土器	深鉢	6	+63.1m	灰黄褐色シト ?ト下層	胴部片	-	-	-	内: 外:沈線、条線、隆帯、竹管文	にぶい 黄褐色	
1564	043-04	縄文土器	深鉢	6	北壁	灰黄色シト	胴部片	-	-	-	内:テ 外:沈線、条線	にぶい 褐	
1565	187-01	縄文土器	深鉢	6	テ-L16	黄褐色シト	底部3/12	-	11.0	5.0	内:テ 外:テ、沈線	にぶい 橙	
1566	186-02	縄文土器	深鉢	6	テ-M15	黄褐色シト	脚台12/12	-	10.0	-	内:テ 外:テ、テ	にぶい 黄褐色	透孔4方
1567	185-01	縄文土器	鉢	6	テ-MN16・17	灰黄褐色シト	口縁~胴部 3/12	20.2	-	8.2	内:シキ 外:シキ、縄文、沈線	にぶい 橙	
1568	180-05	縄文土器	深鉢	6	+49~63m	灰黄褐色シト	胴部片	-	-	-	内:テ 外:テ、沈線	にぶい 橙	
1569	190-07	縄文土器	浅鉢?	6	+34m	黄褐色~灰黄褐色 シト	胴部片	-	-	-	内:テ 外:テ、沈線	浅黄	
1570	192-04	縄文土器	深鉢	6	+34m	黄褐色~灰黄褐色 シト	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ、刺突	にぶい 黄褐色	
1571	191-04	縄文土器	深鉢	6	+34m	黄褐色~灰黄褐色 シト	口縁部片	-	-	-	内:シキ、ヨコテ 外:テ、沈線	明赤褐	
1572	190-04	縄文土器	深鉢	6	東 南側?ト	黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ、沈線、刺突、シキ	にぶい 黄褐色	薄く煤付着
1573	184-03	縄文土器	深鉢	6	+45~63m	灰黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ、シキ	灰黄褐色	
1574	184-05	縄文土器	深鉢	6	テ-LM22・23	灰黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:条線	にぶい 橙	焼成後穿孔(補修孔)
1575	181-01	縄文土器	浅鉢	6	テ-L24	灰褐色極細砂	口縁部2/12	18.6	-	4.5	内:シキ、ヨコテ 外:シキ、ヨコテ	にぶい 黄褐色	
1576	191-01	縄文土器	深鉢	6	+34.0m付近	黄褐色~灰黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:シキ、ヨコテ 外:テ、沈線	にぶい 黄褐色	外面煤付着
1577	192-02	縄文土器	深鉢	6	+14m	黄褐色~灰黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ、沈線	にぶい 黄褐色	外面に煤付着
1578	180-02	縄文土器	深鉢	6	+49~63m	灰褐色シト	口縁部2/12	26.2	-	6.3	内:テ 外:テ	にぶい 褐	
1579	191-02	縄文土器	深鉢	6	+49.5m	?ト内 灰黄褐色砂質シト	口縁~胴部 2/12	27.4	-	12.1	内:カズリ 外:カズリ	にぶい 橙	
1580	190-03	縄文土器	深鉢	6	テ-N16	?ト 灰黄褐色シト	口縁部片	-	-	-	内:シキ 外:工具テ、縄文	にぶい 褐	波状口縁
1581	181-02	縄文土器	深鉢	6	テ-L24	黒褐色極細砂	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ、縄文、沈線	にぶい 黄褐色	波状口縁
1582	184-01	縄文土器	深鉢	6	+63.1m	灰黄褐色シト ?ト内下層	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ、テ	にぶい 黄褐色	波状口縁
1583	185-03	縄文土器	深鉢	6	テ-M25	灰黄褐色シト	胴部片	-	-	-	内: 外:シキ、条線	にぶい 橙	
1584	183-04	縄文土器	深鉢	6	+63.1m内	灰黄褐色シト ?ト下層	底部12/12	-	11.0	2.5	摩滅	にぶい 黄褐色	
1585	184-04	縄文土器	深鉢	6	+45~63m	灰黄褐色シト	底部3/12	-	12.0	2.7	摩滅、網代痕	橙	
1586	182-02	縄文土器	深鉢	6	+49~63m	灰黄褐色シト	底部8/12	-	8.0	5.3	内:テ、テ 外:テ、テ	橙	
1587	182-01	縄文土器	深鉢	6	テ-L18	黄褐色シト	底部6/12	-	13.0	3.8	内:テ 外:テ、テ	にぶい 橙	
1588	186-03	縄文土器	深鉢	6	テ-K25	黄褐色シト	底部12/12	-	7.9	3.0	内:テ 外:テ、テ	にぶい 黄褐色	
1589	185-04	縄文土器	深鉢	6	北壁	灰黄褐色シト	底部12/12	-	10.4	3.1	内:工具テ 外:磨滅	にぶい 橙	
1590	186-04	縄文土器	深鉢	6	北壁	灰オリーブ細砂	口縁部1/12	-	-	-	内:テ、テ 外:シキ、凹線	暗赤褐	キャリバー形
1591	288-02	縄文土器	深鉢	6	西	排土	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ、縄文	黄灰	
1592	287-06	縄文土器	深鉢	6	テ-K23	Pit1	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ、沈線	にぶい 黄褐色	
1593	190-05	縄文土器	深鉢	6	テ-L24	Pit5	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ、沈線	にぶい 黄褐色	
1594	178-03	縄文土器	深鉢	6	テ-K1.14	SD56033	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ、沈線	明赤褐	
1595	179-08	縄文土器	深鉢	6	テ-K1.14	SD56033	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ、沈線	黒褐	
1596	178-04	縄文土器	深鉢	6	テ-K1.14	SD56033	口縁部片	-	-	-	内:テ 外:テ、沈線	にぶい 橙	

NO	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施軸	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高			
1597	179-04	縄文土器	浅鉢	6	テ-KL14	SD56033	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行	浅黄橙	
1598	179-01	縄文土器	浅鉢	6	テ-KL14	SD56033	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	にぶい 黄橙	
1599	188-05	縄文土器	浅鉢	6	テ-M20	SE56003	口縁部片	-	-	-	内:行、沈線 外:行、条線	灰褐	波状口縁
1600	183-02	縄文土器	浅鉢	6	+63.1m	灰黄褐色 ツブ下層	口縁部片	-	-	-	表面摩滅	にぶい 黄橙	波状口縁
1601	288-07	縄文土器	深鉢	6	東	排土	口縁部片	-	-	-	内:行 外:縄文	にぶい 橙	
1602	143-07	縄文土器	深鉢	6	テ-K25	SD56017	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行	にぶい 黄橙	
1603	178-02	縄文土器	浅鉢	6	テ-L13	SD56033	口縁部片	-	-	-	内: 外:	橙	
1604	179-09	縄文土器	深鉢	6	テ-KL14	SD56033	胴部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	明赤褐	
1605	288-05	縄文土器	深鉢	6	テ-M7	Pi2	胴部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、綾杉文	褐灰	
1606	179-06	縄文土器	深鉢	6	テ-KL16	SD56033	胴部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	にぶい 褐	
1607	189-06	縄文土器	深鉢	6	東	排土	胴部片	-	-	-	内:行 外:行、条痕	灰黄褐	
1608	177-06	縄文土器	深鉢	6	テ-KL14	SD56033	胴部片	-	-	-	内:行 外:縄文	橙	
1609	186-01	縄文土器	深鉢	6	テ-M23	ツブ内下層	胴部片	-	-	-	内:行 外:縄文、沈線	にぶい 黄橙	
1610	178-06	縄文土器	深鉢	6	テ-K16	SD56033	脚台片	-	-	-	内:行 外:行、縄文	橙	
1611	177-05	縄文土器	深鉢	6	テ-KL14	SD56033	底部1/12	-	9.4	4.2	内:行 外:行	にぶい 橙	
1612	177-01	縄文土器	深鉢	6	テ-L16	SE56029上層	底部1/12	-	13.6	2.9	内:行 外:行	浅黄橙	
1613	143-08	縄文土器	深鉢	6	テ-K25	SD56017	底部片	-	-	-	内:行 外:行	にぶい 黄橙	
1614	177-04	縄文土器	深鉢	6	テ-M15	SD56027 ベース内断割	底部3/12	-	9.4	2.4	内:行 外:行	褐灰	
1615	177-02	縄文土器	深鉢	6	テ-KL15	SD56033	底部1/12	-	12.2	3.4	内:行 外:行	にぶい 黄橙	焼成後穿孔
1616	177-03	縄文土器	深鉢	6	テ-KL14	SD56033	底部4/12	-	8.6	2.8	内:行 外:行	にぶい 橙	
1617	181-04	縄文土器	深鉢	5	ケ-E13・14	暗褐色ツブ	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線、刺突	橙	
1618	288-04	縄文土器	深鉢	7	テ-K10	下層包含層 上位	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、沈線	浅黄橙	
1619	180-01	縄文土器	浅鉢	7	ツ-L18・19	下層ツブ	口縁部1/12	-	-	-	内:行 外:行	橙	
1620	287-04	縄文土器	鉢?	8	北側	廃土	底部片	-	-	-	内:行 外:行	黄灰	
1621	287-07	縄文土器	深鉢	5		表土	底部6/12	-	8.0	4.5	内:行、クマリ 外:行、クマリ	にぶい 黄橙	
1622	288-01	縄文土器	深鉢	7	テ-K10	下層包含層 上位	底部12/12	-	10.6	2.2	内:行 外:行、木葉痕?	橙	
1623	128-05	縄文土器	深鉢	5	ケ-Y13	SE55001	口縁部片	-	-	-	内:行 外:行、刻目突帯	にぶい 黄橙	
1624	287-01	縄文土器	深鉢	8	G-E25	段下げ	頸部片	-	-	-	内:行 外:条痕(二枚貝)、突帯	浅黄橙	

②木製品

NO	実測番号	器種	調査区	地区	遺構 層位	法量 (cm)			樹種	木取り	特記事項 (加工痕・継手等)
						長/径	幅/高	厚			
1239	023-02	井戸枠材 (縦板)	1	チ-F12 ・13	SE51028	83.1	17.0	4.5	スギ	板目	木口オノで切断
1240	022-02	井戸枠材 (縦板)	1	チ-F12 ・13	SE51028	78.5	15.4	5.7	スギ	板目	木口オノで切断
1241	016-01	井戸枠材 (縦板)	1	チ-F12 ・13	SE51028	76.0	19.0	6.2	スギ	板目	ノミで1ヶ所穿孔(楕円?)、木口オノで切断 建築部材転用か(柱?)
1242	028-01	井戸枠材 (縦板)	1	チ-F12 ・13	SE51028	47.0	18.0	5.5	スギ	中空目	鑿溝、ノミで1ヶ所穿孔(楕円?)、木口オノで切断 建築部材転用か
1243	026-01	井戸枠材 (縦板)	1	チ-F12 ・13	SE51028	89.5	19.5	7.5	スギ	板目	木口オノで切断
1244	016-02	井戸枠材 (横板)	1	チ-F12 ・13	SE51028	65.7	27.0	4.3	スギ	追柱目	腐食著しい、木口オノで切断
1245	032-01	井戸枠材 (横板)	1	チ-F12 ・13	SE51028	104.7	35.0	5.7	スギ	板目	腐食著しい、納穴1
1246	030-01	井戸枠材 (横板)	1	チ-F12 ・13	SE51028	92.0	14.5	4.0	スギ	板目	腐食著しい、納穴1、表面チョウナ
1247	033-02	井戸枠材 (横板)	1	チ-F12 ・13	SE51028	62.5	7.5	2.5	スギ	辺材	欠込、表面チョウナ
1248	013-03	井戸枠材 (土居桁)	1	チ-F12 ・13	SE51028	85.0	20.5	5.7	スギ	板目	両木口に欠込、表面チョウナ
1249	019-02	井戸枠材 (土居桁)	1	チ-F12 ・13	SE51028	84.2	18.7	5.9	スギ	板目	両木口に納、表面チョウナ
1250	019-01	井戸枠材 (土居桁)	1	チ-F12 ・13	SE51028	82.2	20.1	6.3	スギ	板目	両木口に欠込、表面チョウナ
1251	044-01	井戸枠材 (土居桁)	1	チ-F12 ・13	SE51028	85.2	18.4	5.0	スギ	板目	両端納、腐食著しい
1252	012-01	井戸枠材 (横板)	1	チ-F12 ・13	SE51028	89.8	20.0	2.4	スギ	中空目	欠込、表面チョウナ、木口オノで切断
1253	001-02	井戸枠材 (横板)	1	チ-F12 ・13	SE51028	82.0	12.9	5.7	スギ	辺材	欠込
1254	006-02	井戸枠材 (横板)	1	チ-F12 ・13	SE51028	9.7	6.4	2.9	スギ	追柱目	欠込、表面チョウナ
1255	014-02	井戸枠材 (横板)	1	チ-F12 ・13	SE51028	71.0	24.5	3.0	スギ	柱目	欠込、表面チョウナ、木口ノコギリで切断
1256	035-01	井戸枠材 (横板)	1	チ-F12 ・13	SE51028	79.7	26.9	3.0	スギ	柱目	欠込、表面・側面チョウナ、木口ノコギリで切断
1257	013-02	井戸枠材 (補強材)	1	チ-F12 ・13	SE51028 最下層西側	30.0	11.5	5.5	-	割材	表面・側面チョウナ 井戸枠製作時の端材か
1258	029-02	井戸枠材 (補強材)	1	チ-F12 ・13	SE51028 最下層西側	8.4	11.7	2.4	スギ	追柱目	表面チョウナ、木口ノコギリで切断 井戸枠製作時の端材か
1259	027-04	井戸枠材 (補強材)	1	チ-F12 ・13	SE51028 最下層西側	23.1	7.9	6.8	-	辺材	木口オノで切断
1260	014-03	井戸枠材 (補強材)	1	チ-F12 ・13	SE51028	31.5	24.5	3.4	スギ	追柱目	表面チョウナ、木口ノコギリ・オノで切断 井戸枠製作時の端材か
1261	027-02	井戸枠材 (補強材)	1	チ-F12 ・13	SE51028	23.6	19.2	2.9	スギ	追柱目	表面チョウナ、木口ノコギリ・オノで切断 井戸枠製作時の端材か
1262	015-04	井戸枠材 (補強材)	1	チ-F12 ・13	SE51028 最下層西側	31.1	11.6	6.3	スギ	追柱目	表面チョウナ、井戸枠製作時の端材か
1263	027-03	井戸枠材 (補強材)	1	チ-F12 ・13	SE51028 最下層西側	37.8	11.2	2.3	スギ	板目	欠込、表面チョウナ、木口ノコギリで切断
1264	017-03	井戸枠材 (補強材)	1	チ-F12 ・13	SE51028	19.5	22.6	3.5	スギ	柱目	表面チョウナ、木口ノコギリ・オノで切断 井戸枠製作時の端材か
1265	013-01	井戸枠材 (補強材)	1	チ-F12 ・13	SE51028 最下層西側	90.8	14.5	3.0	スギ	板目	欠込、表面チョウナ、木口オノで切断

NO	実測 番号	器種	調査区	地区	遺構 層位	法量(cm)			樹種	木取り	特記事項 (加工痕・継手等)
						長/径	幅/高	厚			
1266	045-01	井戸枳材 (水溜)	1	チ-12 ・13	SE51028	径 82.5	高 71.6	4.0	クスノキ科 ニッケイ属	一本剥抜	下端に欠込、内外面チョウナ
1267	289-02	曲物	4	オ-05	SE54031 枳内	径 15.0	高 9.2	0.7	底・側板とも アスナロ属	木釘4ヶ所、側板内面ケビキ、底板鉄状工具	
1268	020-01	井戸枳材 (縦板)	4	オ-05	SE54031	118.9	17.0	4.0	スギ	板目	表面割肌、木口オノで切断
1269	027-01	井戸枳材 (縦板)	4	オ-05	SE54031	114.9	17.7	4.8	スギ	板目	ノミで1ヶ所穿孔(楕穴?)、木口オノで切断 建築部材転用か、1273と接合
1270	003-01	井戸枳材 (縦板)	4	オ-05	SE54031	87.8	10.0	3.3	スギ	板目	ノミで1ヶ所穿孔(楕穴?)、木口オノで切断 1277と接合
1271	015-03	井戸枳材 (縦板)	4	オ-05	SE54031	103.6	7.8	4.1	スギ	辺材	
1272	024-02	井戸枳材 (縦板)	4	オ-05	SE54031	129.0	18.0	4.8	スギ	板目	木口オノで切断
1273	002-01	井戸枳材 (縦板)	4	オ-05	SE54031	104.5	15.0	4.0	スギ	板目	ノミで1ヶ所穿孔(楕穴?)、木口オノで切断 1269と接合
1274	017-02	井戸枳材 (縦板)	4	オ-05	SE54031	108.8	16.4	3.5	スギ	板目	表面割肌、木口オノで切断、ノミで1ヶ所穿孔(楕穴?) 1269・1273と類似し、同一母材の可能性
1275	012-03	井戸枳材 (縦板)	4	オ-05	SE54031	96.4	7.7	3.6	ヒノキ属	辺材	側面チョウナ
1276	022-01	井戸枳材 (縦板)	4	オ-05	SE54031	128.5	20.0	5.3	スギ	板目	側面チョウナ、木口オノで切断
1277	025-01	井戸枳材 (縦板)	4	オ-05	SE54031	103.9	18.0	5.0	スギ	板目	ノミで1ヶ所穿孔(楕穴?)、木口オノで切断 建築部材転用か、1270と接合
1278	021-02	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	116.0	11.5	4.0	スギ	板目	欠込、両木口オノで切断 1282と同一母材か
1279	009-01	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	98.5	15.5	4.0	スギ	板目	欠込、欠込周辺にチョウナまたはノミ、側面チョウナ、木口オノで切断
1280	017-01	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	100.5	16.9	4.3	スギ	板目	表面割肌、両木口オノで切断 1287と同一母材か
1281	021-01	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	99.3	17.5	4.0	スギ	板目	表面一部にチョウナ、木口オノで切断、ノミで1ヶ所穿孔(楕穴?) 1289と同一母材か
1282	018-02	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	111.5	12.5	4.0	スギ	板目	欠込、両木口オノで切断 1278と同一母材か
1283	010-02	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	97.4	14.0	3.0	スギ	板目	木口オノで切断 1288と同一母材か
1284	001-01	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	98.1	16.7	4.4	スギ	板目	ノミで1ヶ所穿孔(楕穴?)、両木口オノで切断 1291と接合
1285	024-01	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	99.1	17.9	4.6	ヒノキ属	板目	欠込、欠込周辺にチョウナまたはノミ、側面チョウナ、木口オノで切断
1286	020-02	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	102.5	11.3	4.0	スギ	辺材	欠込、表面割肌、側面チョウナ 1290と同一母材か
1287	025-02	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	100.8	17.5	3.5	スギ	板目	欠込、両木口オノで切断 1280と同一母材か
1288	014-01	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	100.9	13.8	4.5	スギ	板目	木口ノコギリで切断 1283と同一母材か
1289	015-01	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	98.1	19.0	4.6	スギ	板目	表面割肌、両木口オノで切断 1281と同一母材か
1290	006-01	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	99.5	11.7	3.5	スギ	板目	欠込 1286と同一母材か
1291	009-02	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	100.0	15.5	4.5	スギ	板目	ノミで1ヶ所穿孔(楕穴?)、木口オノで切断、側面チョウナ 1284と接合
1292	010-01	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	99.7	18.5	4.5	スギ	板目	欠込、欠込周辺にチョウナまたはノミ、側面チョウナ、木口オノで切断
1293	007-01	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	98.3	14.8	4.0	スギ	板目	欠込、欠込周辺にチョウナまたはノミ、側面チョウナ、木口オノで切断
1294	002-02	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	97.8	14.0	4.0	スギ	板目	欠込、両木口ノコギリで切断、側面チョウナ 1295と同一母材か
1295	007-02	井戸枳材 (横板)	4	オ-05	SE54031	84.0	8.0	5.5	スギ	板目	欠込、欠込周辺にチョウナまたはノミ、側面チョウナ、木口オノで切断、 1294と同一母材か
1296	030-02	井戸枳材 (縦板)	4	ク-B19	SE54036	92.0	28.5	2.0	ヒノキ属	板目	腐食著しい
1297	011-01	井戸枳材 (縦板)	4	ク-B19	SE54036	59.8	27.5	5.0	スギ	中空目	表面チョウナ、木口オノで切断
1298	031-02	井戸枳材 (縦板)	4	ク-B19	SE54036	47.8	23.2	3.9	ヒノキ属	板目	木口オノで切断
1299	029-01	井戸枳材 (縦板)	4	ク-B19	SE54036	50.3	23.3	3.2	ヒノキ属	板目	腐食著しい
1300	026-03	井戸枳材 (縦板)	4	ク-B19	SE54036	27.0	24.3	5.0	スギ	板目	木口ノコギリで切断 井戸枳製作時の端材か
1301	005-02	井戸枳材 (補強材)	4	ク-B19	SE54036	64.6	8.4	1.9	スギ	板目	腐食著しい
1302	026-02	井戸枳材 (横板)	4	ク-B19	SE54036	49.0	9.5	3.3	スギ	辺材	腐食著しい
1303	005-03	板材	4	ク-B19	SE54036 枳内	49.2	5.9	2.6	ヒノキ属	辺材	腐食著しい
1304	015-02	井戸枳材 (補強材)	4	ク-B19	SE54036	82.1	8.0	1.8	コウヤマキ	板目	腐食著しい
1305	036-01	井戸枳材 (縦板)	4	ク-B19	SE54036	90.4	41.3	6.0	スギ	柱目	表面チョウナ、木口ノコギリで切断、蟻溝、納穴1 建築部材転用か
1306	042-01	井戸枳材 (縦板)	4	ク-B19	SE54036	100.6	41.3	6.5	スギ	柱目	表面チョウナ、木口ノコギリで切断、蟻溝、納穴1 建築部材転用か
1307	038-01	井戸枳材 (縦板)	4	ク-B19	SE54036	88.5	36.5	6.5	スギ	柱目	表面チョウナ、木口ノコギリで切断、蟻溝、納穴1 建築部材転用か
1308	040-01	井戸枳材 (縦板)	4	ク-B19	SE54036	82.7	42.5	5.5	スギ	柱目	表面チョウナ、木口ノコギリで切断、納穴1 建築部材転用か
1309	003-02	井戸枳材 (横板)	4	ク-B19	SE54036	96.0	9.5	4.0	スギ	辺材	腐食著しい
1310	033-01	井戸枳材 (横板)	4	ク-B19	SE54036	116.5	27.5	3.8	ヒノキ属	板目	欠込、表面・側面チョウナ、木口オノで切断 1312と同一母材(ノコギリで切断)、建築部材転用か
1311	039-01	井戸枳材 (横板)	4	ク-B19	SE54036	117.5	36.8	7.2	スギ	柱目	表面チョウナ、木口ノコギリで切断 1313と同一母材(ノコギリで切断)、建築部材転用か
1312	023-01	井戸枳材 (横板)	4	ク-B19	SE54036	117.0	26.5	3.5	ヒノキ属	板目	欠込、表面・側面チョウナ(刃幅最大8.2cm) 1310と同一母材(ノコギリで切断)、建築部材転用か
1313	037-01	井戸枳材 (横板)	4	ク-B19	SE54036	121.8	38.6	5.7	スギ	柱目	表面チョウナ、木口ノコギリで切断 1311と同一母材(ノコギリで切断)、建築部材転用か
1314	041-01	曲物側板	4	ク-B19	SE54036	径 44.0	高 26.2	1.1	スギ	板目	タガ1段残存、外面鉄状工具、内面ケビキ
1315	034-01	曲物側板	4	ク-B19	SE54036	径 47.0	高 36.0	1.2	スギ	板目	タガ3段、横2、木釘穴計29ヶ所、タガは木釘で留める、内面ケビキ
1316	031-01	井戸枳材 (縦板)	6	テ-M20	SE56003	38.0	23.2	2.6	スギ	板目	木口オノで切断
1317	032-02	井戸枳材 (縦板)	6	テ-M20	SE56003	83.2	6.5	4.2	スギ	辺材	エツリ穴1
1318	004-02	井戸枳材 (縦板)	6	テ-M20	SE56003	30.7	21.5	2.3	スギ	板目	腐食著しい
1319	008-01	井戸枳材 (縦板)	6	テ-M20	SE56003	46.2	23.0	3.9	スギ	板目	腐食著しい
1320	004-01	井戸枳材 (縦板)	6	テ-M20	SE56003	39.2	23.8	2.9	スギ	板目	腐食著しい
1321	005-01	井戸枳材 (縦板)	6	テ-M20	SE56003	69.8	5.9	2.8	スギ	辺材	欠込、エツリ穴1
1322	018-01	井戸枳材 (縦板)	6	テ-M20	SE56003	103.2	23.5	2.5	スギ	板目	腐食著しい
1323	008-02	井戸枳材 (縦板)	6	テ-M20	SE56003	48.5	19.3	3.5	スギ	板目	腐食著しい
1324	019-03	井戸枳材 (縦板)	6	テ-M20	SE56003	45.3	23.7	3.0	スギ	板目	腐食著しい、木口オノで切断

NO	実測番号	器種	調査区	地区	遺構層位	法量 (cm)			樹種	木取り	特記事項 (加工痕・継手等)
						長/径	幅/高	厚			
1325	028-02	曲物側板	6	テ-M20	SE56003 最下層	48.5	8.5	0.6	スギ	柂目	タガの破片、木釘穴
1326	043-01	曲物側板	6	テ-L17	SE56004	径 50.0	高 13.0	2.0	ヒノキ属	柂目	タガ1段残存、外面銑状工具、内面ケビキ
1327	289-01	曲物底板	6	テ-L17	SE56004 石組内下層	径 18.0	-	1.8	アスナロ属	柂目	内面側に黒色塗布物、平面形は槽円形か
1328	012-02	井戸枠材 (土居桁)	6	テ-L23	SE56006	98.4	10.6	4.0	ヒノキ属	辺材	欠込

③石製品

NO	実測番号	器種	調査区	地区	遺構・層位	法量 (cm)			石材	特記事項
						長	幅	厚さ		
56	018-05	砥石	1	チ-H13	SK51025	9.8	7.3	4.0	花崗岩	330.0g、被熱、#80 縄文石皿か石皿が部材の可能性あり
61	016-06	砥石	1	チ-H15	SK51017	11.2	4.7	6.0	砂岩	320.2g、#120
166	071-03	大型石包丁?	2	ナ-V14	SK52019	8.9	6.3	1.1	緑泥片岩	97.2g、板状の破片
183	074-04	砥石	3	ワ-R15・16	SD53001上層	9.1	7.2	1.8	砂岩	135.4g、#40
315	101-05	管玉	3	ワ-B15	SD53011削削 青灰色砂	2.4	0.5	-	凝灰岩	0.9g
476	140-04	砥石	6	テ-KL24	SK56007	10.2	8.1	2.8		467.0g、#40、比重重い
608	615-02	砥石	6	テ-KL15・16	SE56029 最上層	9.7	2.2	4.4	砂岩	126.7g
620	197-05	砥石	7	テ-N11・12	SD57002	10.2	5.8	7.8	砂岩	363.5g、#180
902	238-02	砥石	8	L	SD58018	11.8	7.5	4.6	砂岩	396g、#320、被熱
1134	223-08	砥石	7	ツ-J2	Pit6	6.7	4.5	3.1	凝灰岩	131.6g、#600、白色、使用痕光沢あり
1625	603-03	石鏃	1	チ-H13	SZ51046 (SD51021基盤層)	2.5	1.3	0.6	サヌカイト	1.2g、有茎五角形
1626	601-02	剥片	1	チ-G13	SZ51046	2.4	1.6	0.2	チャート?	0.7g、透明度高く黒みがかかる 黒曜石の可能性あり
1627	621-01	線刻鏢?	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シト	11.7	6.1	4.6	花崗岩	471.7g 自然石の可能性もあり
1628	615-03	磨石	1	チ-G13	SZ51046 暗褐色シト	8.5	6.6	4.4	砂岩	330.7g、被熱
1629	629-01	磨石	1	チ-F12	SZ51046 暗褐色シト	6.9	9.0	4.6	砂岩	386.7g、約1/2残 砥石としても使用
1630	288-3	砥石	1	チ-I4	包含層	6.8	4.4	3.1	砂岩	99.6g
1631	609-01	打欠石鏢	1	チ-H13	黄褐色シト	6.0	7.2	1.8	砂岩	125.6g
1632	628-03	石鏃	1	チ-H13	SD51020	1.8	1.6	0.4	サヌカイト	0.8g、凹基
1633	024-05	切目石鏢	1	ス-M11	SK51036	2.2	1.7	0.3	緑泥片岩	1.5g
1634	609-04	磨石	6	テ-M17	Pit101	12.3	9.7	4.6	砂岩	780.5g
1635	617-04	磨石	6	テ-L24・25	埋積浅谷 黄褐色 ～灰黄褐色シト	9.6	9.1	4.0	砂岩または 火成岩	483.6g 砥石としても使用
1636	614-06	磨石	6	テ-LM25	埋積浅谷 灰黄褐色シト	6.9	6.3	2.6	砂岩	59.1g
1637	632-02	磨石	6	テ-LM25	埋積浅谷 灰黄褐色シト	9.3	7.0	5.6	砂岩	500.6g
1638	607-02	砥石	6	テ-KL24	埋積浅谷 黄褐色シト	12.3	4.2	2.6	緑泥片岩	228.9g
1639	614-04	RF	6	+14m	埋積浅谷 黄褐色シト	5.3	3.1	0.8	サヌカイト	18.5g、横刃形
1640	607-03	打欠石鏢	6	テ-L25	埋積浅谷 灰黄褐色シト	4.7	4.6	1.8	砂岩	45.0g
1641	618-03	打欠石鏢	6	テ-L25	埋積浅谷 灰黄褐色シト	5.3	5.5	1.4	珪質片岩	48.3g
1642	608-02	打欠石鏢	6	テ-M25	埋積浅谷 黄褐色シト	4.4	4.4	0.8	泥岩	25.5g
1643	617-02	打欠石鏢	6	テ-KL24	埋積浅谷 灰黄褐色シト	6.1	5.9	1.6	砂岩	77.7g
1644	626-03	打欠石鏢	6	東	埋積浅谷 黄褐色シト	7.8	5.6	1.8	砂岩	115.8g
1645	618-02	打欠石鏢	6	テ-L25	埋積浅谷 灰黄褐色シト	7.5	6.2	1.6	緑泥片岩	98.3g
1646	629-03	打欠石鏢	6	+14m	埋積浅谷 黄褐色シト	7.4	6.2	2.2	緑泥片岩	154.2g
1647	628-01	打欠石鏢	6	テ-L24・25	埋積浅谷 黄褐色 ～灰黄褐色シト	8.2	6.6	2.8	砂岩	242.5g
1648	618-04	打欠石鏢	6	テ-L25	埋積浅谷 灰黄褐色シト	9.4	7.4	2.0	砂岩	232.7g
1649	601-06	打欠石鏢	6	+4m付近	埋積浅谷 黄褐色シト	6.0	5.2	1.4	緑泥片岩	73.3g
1650	618-01	打欠石鏢	6	テ-L25	埋積浅谷 灰黄褐色シト	7.6	5.7	2.0	花崗岩	88.0g
1651	601-05	打欠石鏢	6	+14m付近	埋積浅谷上層 灰褐色極細砂	7.4	4.9	2.0		83.6g
1652	607-04	土器片鏢	6	テ-L25	埋積浅谷 灰黄褐色シト	7.6	3.5	0.8		47.4g
1653	613-01	石皿	6	+14m	埋積浅谷 黄褐色 ～灰黄褐色シト	22.7	13.9	4.6	砂岩	2.3kg、被熱
1654	606-01	石皿	6	テ-KL24	埋積浅谷 黄褐色シト	20.9	17.3	5.2	花崗岩	2.9kg
1655	605-01	石皿	6	テ-M25	埋積浅谷 黄褐色シト	22.1	15.2	4.8	砂岩	2.5kg
1656	619-01	石鏃	6	テ-K19・20	灰黄褐色シト	1.9	1.6	0.4	サヌカイト	1.1g、未成品か
1657	602-02	石鏃	6	テ-L25	灰黄褐色シト	1.7	1.5	0.2	サヌカイト	0.5g、凹基
1658	614-02	石鏃	6	+4m	黄褐色シト	4.0	1.4	0.6	サヌカイト	4.1g、未成品
1659	601-01	剥片	6	+34～46m	灰黄褐色シト	5.7	2.5	0.6	サヌカイト	9.7g
1660	610-02	剥片	6	+49～63m	灰黄褐色シト	3.0	2.0	0.2	サヌカイト	2.1g
1661	626-04	砕片	6	+34m	灰黄褐色シト	2.3	2.8	1.6	サヌカイト	11.2g、鏢の表皮残る(あばた状)
1662	628-04	石核	6	+34m	灰黄褐色シト	8.0	4.5	3.8	サヌカイト	155.2g、鏢の表皮残る(爪状)
1663	625-02	磨製石斧	6	テ-L16	黄褐色シト	4.5	5.5	0.9	変塩基性岩	81.8g
1664	625-01	切目石鏢	6	+34m	灰黄褐色シト	5.1	2.3	1.6	砂岩	40.6g
1665	604-02	打欠石鏢	6	+49～65m	灰黄褐色シト	7.1	5.3	2.4	砂岩	130.5g
1666	603-02	打欠石鏢	6	テ-MN16・17	灰黄褐色シト	7.2	5.6	2.4	花崗岩	150.7g
1667	617-01	打欠石鏢	6	+34m	灰黄褐色シト	8.4	5.3	2.4	緑泥片岩	160.9g
1668	602-05	打欠石鏢	6	+49～65m	灰黄褐色シト	6.5	6.3	2.8	砂岩	146.0g

NO	実測番号	器種	調査区	地区	遺構・層位	法量 (cm)			石材	特記事項
						長	幅	厚さ		
1669	608-01	打欠石鍾	6	+34~49m	灰黄褐色シタ	5.7	4.3	1.2	砂岩	50.7g、被熱
1670	625-03	打欠石鍾	6	+49~63m	灰黄褐色シタ	5.0	4.2	1.6	砂岩	42.4g
1671	626-02	打欠石鍾	6	+34m	黄褐色~ 灰褐色シタ	6.4	5.2	1.0	砂岩	52.1g
1672	626-01	打欠石鍾	6	+34m	黄褐色~ 灰褐色シタ	7.3	5.0	1.4	砂岩	78.9g
1673	609-02	打欠石鍾	6	テ-N17	黄褐色シタ	9.3	6.4	2.2	砂岩	170.9g
1674	630-02	磨石	6	+49~63m	灰黄褐色シタ	11.0	5.0	5.0	砂岩	734.4g 敲石としても使用
1675	631-01	磨石	6	+34m	黄褐色~ 灰黄褐色シタ	12.4	6.0	6.0	砂岩	1039.4g 敲石としても使用
1676	614-05	磨石	6	+49~63m	灰黄褐色シタ	10.4	8.8	4.6	砂岩	589.8g
1677	601-04	磨石	6	+34m付近	黄褐色~ 灰褐色シタ	7.0	4.2	4.0	砂岩	109.3g、小片
1678	602-01	磨石	6	+34~49m	灰黄褐色シタ	9.6	8.7	3.4	砂岩	418.5g
1679	610-01	磨石	6	+49~63m	灰黄褐色シタ	8.4	4.7	4.4	砂岩	194.6g、約1/2残
1680	627-02	磨石	6	+34m	灰黄褐色シタ	7.6	7.2	-	砂岩	495.3g 敲石としても使用
1681	609-03	磨石	6	テ-L24	灰黄褐色シタ	4.9	3.0	4.6	砂岩	68.4g、小片
1682	617-03	石棒?	6	+49m	灰黄褐色 砂質シタ	5.8	3.2	4.4	変塩基性岩	94.3g、小片
1683	619-02	磨石	6	+34m	灰黄褐色シタ	3.6	4.8	6.0	砂岩	120.9g、小片
1684	615-05	磨石	6	テ-K17	包含層	12.9	6.6	5.4	砂岩	599.5g、約1/2残
1685	627-01	凹石	6	+63m	灰黄褐色シタ	12.5	15.1	5.2	花崗岩	1.3kg、約1/2残
1686	623-01	石皿	6	テ-M16	灰黄褐色シタ	15.6	15.8	6.0	砂岩	2.4kg
1687	615-04	石皿	6	テ-L16	灰黄褐色シタ	13.8	14.2	4.0	砂岩	1260.4g
1688	611-02	石皿	6	+49~63m	灰黄褐色シタ	17.0	16.2	4.0	花崗岩	1.4kg
1689	620-01	石皿	6	+34m	灰黄褐色シタ	30.7	19.3	8.0	塩基性岩	8.2kg 台石としても使用
1690	610-03	石皿	6	+49~63m	灰黄褐色シタ	22.1	12.6	5.0	塩基性岩	2.1kg
1691	624-01	石皿	6	テ-L16	黄褐色シタ	28.3	21.4	3.0	花崗岩	5.2kg
1692	622-01	石皿	6	東	黄褐色シタ	26.8	20.6	5.0	花崗岩	4.7kg
1693	602-03	石鏝	6	テ-L24	SD56026	2.1	1.2	0.2	サヌカイト	0.6g、凹基
1694	603-04	石核	6	テ-M21	Pi119	6.3	3.3	2.6	サヌカイト	礫の表皮残る(爪状)
1695	615-01	RF	6	テ-L22	SK56012	7.2	5.8	1.2	砂岩	60.3g、横刃形
1696	629-02	打欠石鍾	6	テ-L24	SD56026	4.1	2.3	0.6	泥岩	8.9g
1697	601-03	打欠石鍾	6	テ-KL21	SD56026	4.1	3.9	1.2	泥岩	22.6g
1698	603-01	打欠石鍾	6		廃土	4.8	3.5	1.6	砂岩	40.0g
1699	628-02	打欠石鍾	6	テ-KL24	SK56007	9.5	4.8	1.6	緑泥片岩	106.6g
1700	619-04	打欠石鍾	6		廃土	7.8	6.8	2.4	チャート	150.7g
1701	614-03	打欠石鍾	6	テ-M16	SD56027上層	7.5	6.7	2.4	花崗岩	169.5g
1702	602-04	磨石	6	西	廃土	11.2	9.1	4.2	砂岩	659.7g
1703	614-01	磨石	6		廃土	12.7	9.5	4.2	砂岩	788.1g
1704	632-01	磨石	6	テ-KL14	SD56033	8.1	7.9	6.4	砂岩	599.2g
1705	619-03	磨石	6		廃土	9.5	5.5	5.6	砂岩	349.2g、小片
1706	607-01	磨石	6	東	廃土	7.9	8.1	2.8	砂岩	打欠石鍾に転用
1707	611-01	石皿	6	テ-L17・18	SD56027上層	18.5	14.7	5.0	花崗岩	1.9kg
1708	612-01	石皿	6	テ-L13	SK56032	22.4	15.9	7.8	火成岩	4.1kg
1709	616-01	石棒	6	テ-L18	SD56027	35.0	8.0	5.8	変塩基性岩	未成品か
1710	604-03	石鏝	7-2	H-H9	SD57064	2.8	2.1	0.6	サヌカイト	2.2g、有茎
1711	618-05	打欠石鍾	7	テ-L5	SD57001下層	5.4	4.0	1.0	砂岩	37.3g
1712	604-01	磨石	7		表土	10.5	8.6	5.4	砂岩	698.5g
1713	630-01	磨石	7		表土	12.6	9.3	5.2	砂岩	961.1g

④金属製品

NO	実測番号	器種	調査区	地区	遺構・層位	法量 (cm)			重量 (g)	特記事項
						長	幅	厚さ		
98	636-16	銅製品 銭貨(嘉祐通宝)	1	チ-A12	SD51043	径2.4	-	0.2	1.8g	北宋銭(1056年初鋳)
181	636-06	鉄製品 刀子	3	ヲ-A19	SD53001	10.9	1.5	0.5	13.0g	
182	636-10	鉄製品 釘	3	ヲ-X18	SD53001下層	8.3	0.6	0.6	6.4g	
187	635-01	銅製品 鏡(素文鏡)	3	ヲ-Y14	SD53002最下層	径4.7	-	0.2	18.6g	
212	633-01	銅製品 鏡(瑞花円鏡)	3	ヲ-Y15	SD53002最上層	径10.2	-	0.7	191.6g	完形 鋳込みのスが顕著、外縁に粗い研磨痕
213	634-01	銅製品 鏡(瑞花双鳥八稜鏡)	3	ヲ-Y15	SD53002最上層	径8.7	-	0.3	35.6g	外縁を一部欠損
281	636-11	鉄製品 釘	3	ヲ-X17	SE53004上層	5.1	1.4	0.6	8.0g	
282	636-14	鉄製品 釘	3	ヲ-X17	SE53004上層	2.4	1.0	0.6	1.6g	
730	636-07	鉄製品 刀子	7	ツ-K15	SD57041-P8掘方 (ツ-K15P15)	5.3	1.2	0.4	6.4g	
1177	636-15	鉄製品 釘	9	ヲ-A7	Pi16	2.7	1.5	0.9	6.7g	
1197	636-09	鉄製品 釘	3		廃土	5.6	1.6	0.4	25.0g	
1207	636-13	鉄製品 釘	4		旧耕作土	4.2	1.4	0.6	4.3g	
1221	636-12	鉄製品 釘	7		包含層	6.1	0.6	0.6	7.4g	
1229	242-06	銅製品 銭貨(寛永通宝)	8	G-E24	オリーブ 褐色シタ	径2.4	-	0.2	2.4g	
1238	636-08	鉄製品 刀子	9	ワ6・X6	包含層	4.2	1.3	0.4	5.6g	

V 自然科学分析

1. 分析の種類と対象

第5次調査に関して実施した自然科学分析は次項(1)～(3)の3つである。分析の委託先と内容は以下のとおり。

- ・株式会社パレオ・ラボ

放射性炭素年代測定(AMS法)、火山灰分析、花粉分析・珪藻分析・植物珪酸体分析

- ・パリーノ・サーヴェイ株式会社

木製品の樹種同定

(1) C14年代測定

6区縄文遺構や1区・5区の古土壌から得られた炭化材により、遺構や土層の放射性炭素年代を明らかにし、遺跡形成過程を知るための材料を得る。

6区縄文遺構は、層位的に古く、中期中葉頃の土器片が出土したSK56060とし、1区は遺物を多く含む古土壌、5区は基本層序VI層(砂礫層)直上の可能性のある古土壌(暗色帯)を選定した。結論を記すと、SK56060は中期中葉頃、1区古土壌も中期の年代を示したが、5区古土壌では、より上位の包含遺物の年代観よりも新しい年代値が得られ、層序認識に課題を残す結果となった(第III章7節)。

(2) 土壌分析(火山灰、花粉・珪藻・植物珪酸体)

土壌分析は複数の遺構で実施した。

- ・縄文時代の古環境と黒ボク土生成(3区)

3区では、基盤層中に黒ボク土に由来するとみられる黒色土が確認された。県内の黒ボク土は、度会郡大紀町野添大辻遺跡などの分析結果から、K-Ahなどの広域火山灰を層中に含むことや、草原環境下や人工的な火入れにより生成されることがわかっている。K-Ahを中心に火山灰の検出を試みるとともに、微化石の分析を行った。

- ・古墳時代前後の環境

SD52004を対象に、古代の条里施工前の環境に関するデータを得る。

- ・青銅鏡出土流路(SD53002)周辺の環境変遷

遺跡南東部(3区)、弥生時代～中世の遺物を含

む流路である。流路機能～廃絶時の古環境に関する資料を得ることを目的とした。微化石の遺存状況は不良であり、環境変遷にかかる具体的なデータは得られなかったが、埋没による水文環境の変化について間接的に知ることができ、青銅鏡出土の背景を探るためのデータが得られた。

- ・井戸機能～廃絶時(SE51028)の環境

遺跡東部(1区)、8世紀末～9世紀前半の井戸埋土を対象に微化石の分析を行った。

- ・縄文時代の環境変遷(1区・6区)

1区および6区埋積浅谷周辺の堆積土を対象として、微化石の分析を行った。微化石の遺存状況は不良であり、環境変遷にかかる具体的なデータは得られなかったが、全体として好気的な環境下にあり、埋積と土壌化が併行して進行する状況が、間接的に明らかになった。

(3) 木製品の樹種同定

樹種同定は、井戸枿材を中心とする報告遺物を対象とし、木材利用や植生に関する資料を得た。樹種同定結果は遺物観察表(第4表)に記載した。

(櫻井)

2. C14年代測定・土壌分析

株式会社パレオ・ラボ

本報告では、調査区の基盤層を主体とする堆積層と流路埋積層の層序・年代および古環境復元を目的として行われた自然科学分析の結果を示す。分析項目は、花粉分析・珪藻分析・植物珪酸体分析の微化石分析、放射性炭素年代測定(AMS法)、火山灰分析である。なお、朝見遺跡(第7次)調査区で検出された埋積土器内の堆積物のリン・カルシウム分析の比較検討用の試料として、6区北壁で採取した基盤層の堆積物(試料33)が採取されたが、その分析結果は、朝見遺跡(第7次)の報告書において示す。

分析試料の一覧を第5表に示す。試料の詳細は、各分析の報告において適宜述べる。

第5表 分析試料一覧

試料No.	種別	調査区・遺構・層位	分析項目と点数				
			AMS	花粉	珪藻	植物珪酸体	火山灰
1	炭化材	6区7 - M23 SK56060	1				
2	炭化材	1-4区北 西壁9層	1				
3	炭化材	5区E-C12東壁49層	1				
4	炭化材	5区E-C12東壁47層	1				
5	堆積物	3区南壁20層 (SD53002)		1	1	1	
6	堆積物	3区南壁17層 (SD53002)		1	1	1	
7	堆積物	3区南壁24層 (SD53002)		1	1	1	
8	堆積物	3区南壁26層 (SD53002)		1	1	1	
9	堆積物	3区南壁8層上位		1	1	1	1
10	堆積物	3区南壁8層中位		1	1	1	1
11	堆積物	3区南壁8層下位		1	1	1	1
12	堆積物	3区南壁7層		1	1	1	1
13	堆積物	3区南壁9層		1	1	1	1
14	堆積物	1-4区西壁5層		1	1	1	
15	堆積物	1-4区西壁6層		1	1	1	
16	堆積物	1-4区西壁7層		1	1	1	
17	堆積物	1-4区西壁8層		1	1	1	
18	堆積物	1-4区西壁9層		1	1	1	
19	堆積物	1-4区西壁10層		1	1	1	
20	堆積物	1-4区西壁11層		1	1	1	
21	堆積物	1-4区西壁12層		1	1	1	
22	堆積物	1-4区西壁13層		1	1	1	
23	堆積物	6区北壁東6層		1	1	1	
24	堆積物	6区北壁東7層		1	1	1	
25	堆積物	6区北壁東8層		1	1	1	
26	堆積物	6区北壁東9層		1	1	1	
27	堆積物	6区北壁東11層		1	1	1	
28	堆積物	6区北壁東12層		1	1	1	
29	堆積物	6区北壁東13層		1	1	1	
30	堆積物	6区北壁東14層		1	1	1	
31	堆積物	6区北壁西6層		1	1	1	
32	堆積物	6区北壁西7層		1	1	1	
33	堆積物	6区北壁西8層		1	1	1	
34	堆積物	6区北壁西10層		1	1	1	
35	堆積物	6区北壁西15層		1	1	1	
36	堆積物	6区ト-L1 埋積浅谷4層		1	1	1	
37	堆積物	6区ト-L1 埋積浅谷6層		1	1	1	
38	堆積物	6区ト-L1 埋積浅谷7層		1	1	1	
39	堆積物	2区 SD52004 2層		1	1	1	
40	堆積物	2区 SD52004 4層		1	1	1	
41	堆積物	2区 SD52004 5層		1	1	1	
42	堆積物	2区 SD52004 8層		1	1	1	
43	堆積物	2区 SD52004 10層		1	1	1	
44	堆積物	1区 SE51028 井戸枠内		1	1	1	

第6表 年代測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-36775	調査区：6区_テ-M23 遺構：SK56060 試料No. 1	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸： 1.2N)
PLD-36776	調査区：1-4区北 層位：西壁9層（黒褐色シ ルト） 試料No. 2	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸： 1.2N)
PLD-36777	調査区：5区_E-C12 層位：東壁49層 試料No. 3	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸： 1.2N)
PLD-36778	調査区：5区_E-C12 層位：東壁47層 試料No. 4	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸： 1.2N) 処理備考：土混じり、状態悪い

第7表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正 用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-36775 試料No. 1	-25.12 \pm 0.27	4176 \pm 25	4175 \pm 25	2876-2859 cal BC (12.2%) 2809-2752 cal BC (41.5%) 2722-2701 cal BC (14.5%)	2883-2836 cal BC (20.3%) 2816-2671 cal BC (75.1%)
PLD-36776 試料No. 2	-27.34 \pm 0.14	4107 \pm 23	4105 \pm 25	2848-2813 cal BC (19.0%) 2692-2690 cal BC (0.9%) 2679-2618 cal BC (37.2%) 2609-2583 cal BC (11.1%)	2859-2809 cal BC (24.0%) 2752-2721 cal BC (9.3%) 2702-2577 cal BC (62.1%)
PLD-36777 試料No. 3	-23.88 \pm 0.14	3438 \pm 23	3440 \pm 25	1768-1692 cal BC (68.2%)	1876-1841 cal BC (11.6%) 1820-1797 cal BC (4.2%) 1781-1682 cal BC (78.8%) 1674-1666 cal BC (0.8%)
PLD-36778 試料No. 4	-24.24 \pm 0.13	3449 \pm 23	3450 \pm 25	1867-1849 cal BC (12.4%) 1774-1736 cal BC (36.3%) 1716-1695 cal BC (19.5%)	1877-1840 cal BC (19.1%) 1823-1796 cal BC (8.6%) 1782-1690 cal BC (67.7%)

(1) C 14 年代測定 (AMS 法)

①方法

測定試料の情報、調製データは第6表のとおりである。また、炭化材の試料写真を第151図に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS:NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

②結果

第7表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、第152図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸

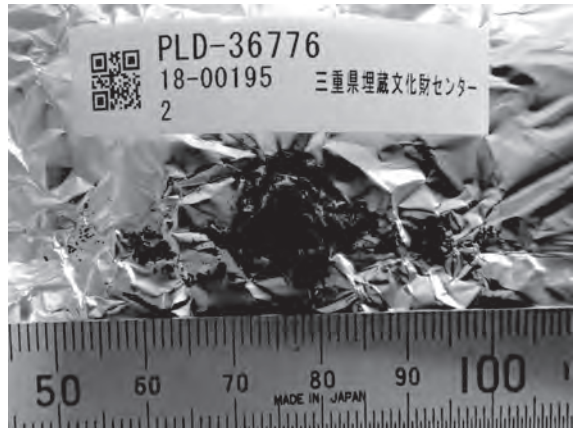
めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730



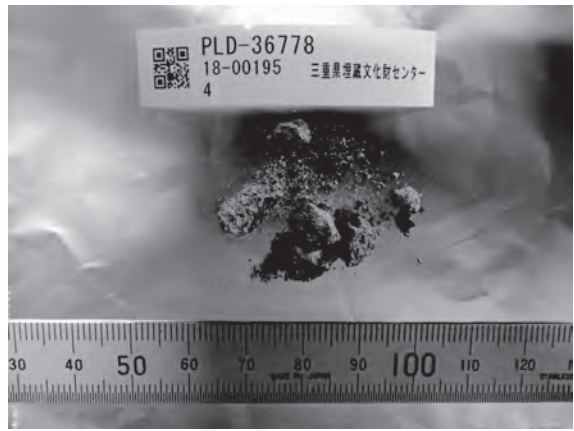
• 試料 No.1 (PLD-36775)



• 試料 No.2 (PLD-36776)

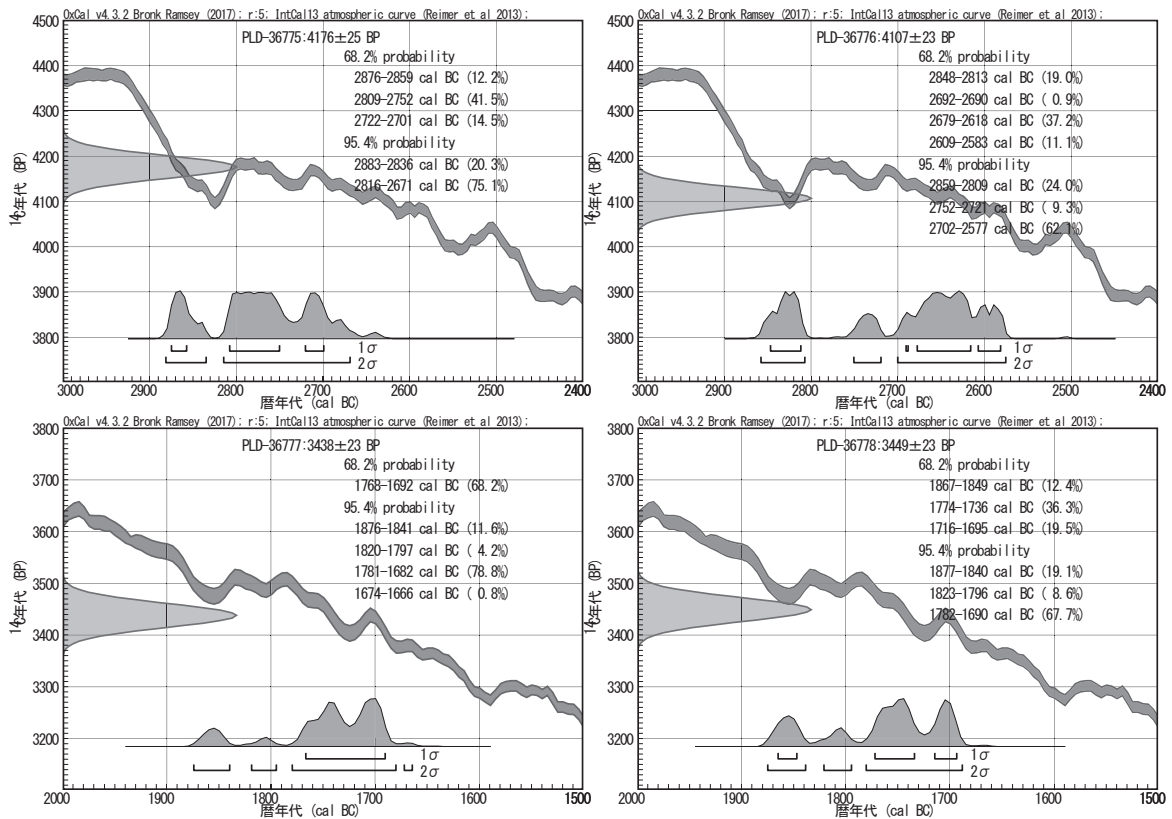


• 試料 No.3 (PLD-36777)



• 試料 No.4 (PLD-36778)

第 151 図 年代測定試料の写真



第 152 図 暦年較正結果

± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C 年代の暦年較正には OxCal4.3 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ¹⁴C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ¹⁴C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

③考察

幡中 (2012) による縄文土器編年と放射性炭素年代値の検討結果にもとづくと、今回得られた暦年代は、試料 No. 1 が縄文時代中期後半 (船元 IV 式と里木 II 式)、試料 No. 2 が縄文時代中期後半 (船元 IV 式と里木 II 式) から中期末 (北白川 C 式)、試料 No. 3 と No. 4 が縄文時代後期前葉 (北白川上層式 3 期) に対比される。

ただし、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。今回の試料は、すべて最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりも新しい年代であったと考えられる。

(パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ (伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・辻 康男))

(2) 火山灰分析

①方法

分析試料は、3 区南壁 7 層～9 層から採取された 5 点である (第 8 表)。

試料は、粒度分析を行って篩い分けした 4φ (0.063mm) 篩残渣を使用した。各試料を、恒温乾燥機 105 度、24 時間で乾燥して含水率を求めた。

4φ 篩残渣について、重液 (テトラプロモエタン、比重 2.96) を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。

軽鉱物については、水浸の簡易プレパラートを作製し、軽鉱物組成と火山ガラスの形態分類を行った。

火山ガラスの形態は、町田・新井 (2003) の分類基準に従って、バブル型平板状 (b1)、バブル型 Y 字状 (b2)、軽石型繊維状 (p1)、軽石型スポンジ状 (p2)、急冷破碎型フレーク状 (c1)、急冷破碎型塊状 (c2) に分類した。また、重鉱物については、封入剤レークサイドセメントを用いてプレパラートを作製し、斜方輝石 (Opx)、単斜輝石 (Cpx)、角閃石 (Ho)、ジルコン (Zr)、磁鉄鉱 (Mg) を同定・計数した。今回の分析試料で確認できた重軽鉱物と火山ガラスの写真を写真 3 に示し、同定の根拠とする。

また、試料 No. 9～11 の 4φ 残渣中の火山ガラスについては、横山ほか (1986) に従い、温度変化型屈折率測定装置 (MAIOT 2000: (株) 古澤地質製) を用いて屈折率測定を行った。

②結果

以下に、鉱物組成、火山ガラスの形態分類の特徴、火山ガラスの屈折率測定結果について述べる。

試料は、7 層が灰黄褐色の土壌質シルト、8 層が黒色～暗褐色の土壌、9 層がにぶい黄褐色のシルト質粘土である。

含水率は、13.69～33.72% であり、8 層中位が最も高い。重液分離では、いずれも軽鉱物の割合が高い (第 9 表)。

火山ガラスは全体的に少ないが、8 層中位において、バブル型平板状ガラス (b1) とバブル型 Y 字状ガラス (b2) がやや多く含まれていた。重鉱物は、全体的に角閃石が多く、斜方輝石や単斜輝石は極端に少ない。8 層中位においては、斜方輝石や単斜輝石がやや多かった (第 10 表)。

火山ガラスの屈折率測定では、8 層上位の火山ガラスが範囲 1.5057-1.5116 (平均 1.5083)、8 層中位が範囲 1.5058-1.5116 (平均 1.5086)、8 層下位が範囲 1.5061-1.5114 (平均 1.5088) であった (第 153 図)。

③考察

8 層中に含まれる火山ガラスは、ガラスの形態および屈折率 (範囲 1.5057-1.5116) から、鬼界アカホヤテフラ (K-Ah) と同定される。なお、火山ガラスが少ない点や、斜方輝石や単斜輝石が極端に少ない点から、一次的なテフラ層ではない可能性が考えられる。

鬼界アカホヤテフラ (K-Ah) は、南九州鬼界カル

デラから約 7,300 年前に噴出した降下軽石、火砕流堆積物とその降下火山灰をさす。このテフラは、輝石デイサイト質のガラス質テフラで、部層により大差なく、ほぼ均質である。バブル型の多い火山ガラスは、始良 Tn テフラ (AT) の火山ガラスと比べると、薄手で淡褐色を帯びるものがあり、屈折率もかなり高く、広いレンジをもつ (n : 1.508-1.516)。もつとも、完全には水和していないガラスの継目など、

ガラスの厚い部分の屈折率は低く、1.500 前後まである (町田・新井 2003)。(藤根 久・鈴木 正章)

(3) 微化石分析 (珪藻・花粉・植物珪酸体)

①方法

a) 珪藻分析

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

- ・湿潤重量約 1.0g を取り出し、秤量した後ビー

第 8 表 火山灰分析試料とその特徴

試料No.	位置	層位	堆積物の色調	篩分けによる
12	3区南壁	7層	灰黄褐色 (10YR 4/2) 土壤質シルト	max. 5mm 礫含む
9		8層上位	黒色 (7.5YR 2/1) 土壤、明黄褐色シルト塊混じる	
10		8層中位	黒色 (7.5YR 1.7/1) 土壤	max. 6mm 礫含む
11		8層下位	暗褐色 (10YR 3/3) 土壤	max. 5mm 礫含む
13		9層	にぶい黄褐色 (10YR 6/4) シルト質粘土、1mm以下の白色粒子混じる	max. 16mm 礫含む

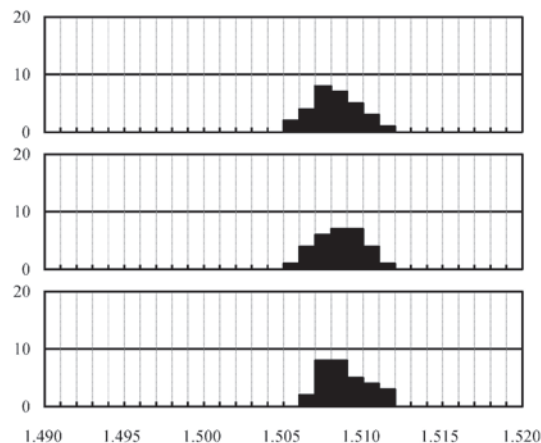
第 9 表 テフラ試料の湿式篩分け・重液分離の結果

試料No.	処理湿重 (g)	含水率 (%)	乾燥重量 (g)	砂粒分の粒度組成 (重量g)				軽・重鉱物組成 (重量g)	
				1φ	2φ	3φ	4φ	1φ	2φ
12	34.55	17.40	28.54	0.66	0.70	15.85	1.98	0.31	0.02
9	34.02	21.78	26.61	0.15	0.33	0.39	0.58	0.21	0.02
10	31.71	33.72	21.02	0.40	0.55	0.53	0.57	0.19	0.01
11	32.49	26.71	23.81	0.67	1.04	1.05	0.94	0.29	0.02
13	35.68	13.69	30.80	2.11	1.69	1.62	1.38	0.32	0.03

第 10 表 4φ篩残渣中の鉱物組成

分類群 分析No.	試料No.	石英 (Qu)	長石 (Pl)	雲母類 (Mi)	不明 (Opq)	火山ガラス			ガラス合計	軽鉱物合計	重鉱物						重鉱物の合計
						バブル (泡) 型		急冷破砕型			斜方輝石 (Opx)	単斜輝石 (Cpx)	角閃石 (Ho)	ジルコン (Zr)	磁鉄鉱 (Mg)	不明 (Opq)	
						平板状 (b1)	Y字状 (b2)										
1	12	3	30	23	286	1	1		2	344	3		174	2	3	61	243
2	9	13	51	3	260	4	2	1	7	334	7	2	155	1	24	56	245
3	10	19	49	5	251	5	6		11	335	11	6	160	2	13	48	240
4	11	14	39	6	268	4	2		6	333	2		186	1	10	36	235
5	13	6	27	7	303				0	343	1	4	178	2	12	44	241

分析No. 試料No. 測定対象



範囲(range)	平均(mean)	個数
1.5057 - 1.5116	1.5083	30
1.5058 - 1.5116	1.5086	30
1.5061 - 1.5114	1.5088	30

第 153 図 分析 No. 2 ~ No. 4 の火山ガラスの屈折率測定結果

カーに移して 30% 過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。

・反応終了後、水を加え、1 時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。

この作業を 20 回ほど繰り返した。

・懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

作製したプレパラートを顕微鏡下 600 ~ 1000 倍で観察し、プレパラートの 2/3 以上の面積について同定・計数した。顕微鏡は、三眼生物顕微鏡 (BX43 (珪藻) : オリンパス製) を使用した。珪藻殻は、完形と非完形 (原則として半分程度残っている殻) に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物 1 g 当たりの殻数を計算した。また、保存状態の良好な珪藻化石を選び、写真 4 に載せた。

b) 花粉分析

試料 (湿重量約 3 ~ 4 g) を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え、1 時間放置する。水洗後、比重分離 (比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離) を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理 (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎) を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。この残渣より適宜プレパラートを作製し、全面を検鏡した。顕微鏡は、三眼生物顕微鏡 (BH-2 (花粉) : オリンパス製) を使用した。また、保存状態の良好な花粉化石を選び、写真 5 に載せた。

c) 植物珪酸体分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する (絶対乾燥重量測定)。別に試料約 1 g (秤量) をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ (直径約 0.04mm) を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ~ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラート

を作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、写真 6 に載せた。

②結果

a) 珪藻分析

珪藻化石の環境指標種群 珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉 (1988) および安藤 (1990) が設定し、千葉・澤井 (2014) により再検討された環境指標種群に基づいた (第 11 表)。写真 4 に珪藻化石を示して同定の根拠とする。同定された種と環境指標種群の対応関係を結果表 (第 12 表) に示す。

なお、環境指標種群以外の珪藻種については、海水種は海水不定・不明種 (?)、淡水種は広布種 (W)、その他の種はまとめて不明種 (?) として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明 (?) として扱った。

結果 堆積物から検出された珪藻化石は、海水種が 1 分類群 1 属 1 種、淡水種が 47 分類群 28 属 31 種であった (第 12 表)。

これらの珪藻化石は、海水域における 1 環境指標種群 (C1) と、淡水域における 4 環境指標種群 (K、O、Qa、Qb) に分類された。珪藻化石群集の特徴からは、試料は I 帯と II 帯に分帯された (第 154 図)。

以下では、各珪藻帯における珪藻化石の特徴とその堆積環境について述べる。

・ I 帯 (試料 No. 44) : 1 区 S E 51028 井戸枠内

堆積物 1 g 中の珪藻殻数は 2.6×10^5 個、完形殻の出現率は 59.7% である。主に淡水種からなり、海水種をわずかに伴う。堆積物中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、陸生珪藻 A 群 (Qa) が多く、陸生珪藻 B 群 (Qb) を伴い、中～下流性河川指標種群 (K) や海水藻場指標種群 (C1) をわずかに伴う。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域環境が推定される。

・ II 帯 (試料 No. 43 ~ 45)

堆積物 1 g 中の珪藻殻数は 0 個 ~ 1.6×10^3 個、完形殻の出現率は 0% ~ 100% である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は全く含まれていないか非常に少ない。環境指標種群では、中～下流性河川指標種群 (K)、沼沢湿地付着生指標種群 (O)、

陸生珪藻 (Qa、Qb) がわずかに検出された。

珪藻化石の残存状況から、基本的に乾燥した陸域環境の可能性が考えられる。

b) 花粉分析

検鏡の結果、十分な量の花粉化石が得られた試料は4試料である。この4試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉30、草本花粉24、形態分類のシダ植物胞子2の総計66である。これらの花粉・シダ植物胞子の一覧を第13表に、花粉分布図を第155図に示した。

花粉分布図では、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を、草本花粉・胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン (-) で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科やマメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便

宜的に草本花粉に一括して入れてある。

c) 植物珪酸体分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(第14表)、分布図に示した(第156図)。

検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の7種類の機動細胞珪酸体の産出が確認できた。また、イネの籾殻で形成される珪酸体の破片(イネ穎破片)も確認された。

③考察

a) 珪藻分析

調査区の基盤層の縄文時代中期～平安時代以前の堆積層(試料No. 9～38)では、珪藻化石の保

第11表 珪藻化石の環境指標種群一覧

【外洋指標種群 (A)】 塩分濃度が35‰以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。
【内湾指標種群 (B)】 塩分濃度が26～35‰の内湾水中を浮遊生活する種群である。
【海水藻場指標種群 (C1)】 塩分濃度が12～35‰の水域の海藻や海草(アマモなど)に付着生活する種群である。
【海水砂質干潟指標種群 (D1)】 塩分濃度が26～35‰の水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミユナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。
【海水泥質干潟指標種群 (E1)】 塩分濃度が12～30‰の水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミナ主体の貝類相やカナなどの甲殻類が見られる。
【汽水藻場指標種群 (C2)】 塩分濃度が4～12‰の水域の海藻や海草に付着生活する種群である。
【汽水砂質干潟指標種群 (D2)】 塩分濃度が5～26‰の水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に付着生活する種群である。
【汽水泥質干潟指標種群 (E2)】 塩分濃度が2～12‰の水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。
【上流性河川指標種群 (J)】 河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体が岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによっては取られてしまうことがない。
【中～下流性河川指標種群 (K)】 河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。
【最下流性河川指標種群 (L)】 最下流部の三角洲の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。
【湖沼浮遊生指標種群 (M)】 水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。
【湖沼沼沢湿地指標種群 (N)】 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。
【沼沢湿地付着生指標種群 (O)】 水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。
【高層湿原指標種群 (P)】 尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。
【陸域指標種群 (Q)】 上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である(陸生珪藻と呼ばれている)。
【陸生珪藻A群 (Qa)】 耐乾性の強い特定のグループである。
【陸生珪藻B群 (Qb)】 A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

第12表-1 堆積物中の珪藻化石産出表① 種群は、千葉・澤井 (2014) による

No.	科群	分類群	種群	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
1	Cocconeis	scutellum	C1																					
2	Achnanthes	crenulata	W																					
3	A.	hurgenea	K																					
4	A.	irifata	W																					
5	A.	sublusconis	W			1																		
6	A.	spp.	?																					
7	Achnanthes	convergens	J																					
8	A.	minutissimum	Ob																					
9	Amphora	copulata	W		1																			
10	A.	montana	Oa																					
11	Caloneis	spp.	?																					
12	Cocconeis	placenticula	W																					
13	Cyclotella	atomus	W																					
14	C.	Cyclotella	L																					
15	Cymbella	meneghiniana	W																					
16	C.	Cymbella	W			1																		
17	C.	turgidula	K																					
18	Diadesmis	spp.	?																					
19	D.	confervacea	Ob																					
20	Diploneis	contorta	Oa																					
21	Ephemia	spp.	?																					
22	Eunecia	spp.	?																					
23	Frustulia	vulgaris	W																					
24	F.	spp.	?																					
25	Gomphonema	acuminatum	O																					
26	G.	parvulum	W																					
27	G.	spp.	?																					
28	Gyrosigma	spp.	?																					
29	Hantzschia	amphioxys	Qa																					
30	Liulicola	mulica	Oa		1																			
31	Melosira	varians	K																					
32	Navicula	eighensis	O																					
33	N.	spp.	?																					
34	N.	alpinum	Oa																					
35	N.	spp.	?																					
36	Nitzschia	nana	Ob																					
37	N.	palear	W																					
38	N.	spp.	?																					
39	Orithosira	roseana	Oa																					
40	Pinnularia	subcapitata	Ob																					
41	P.	spp.	?																					
42	Planolthidium	lancoletum	K																					
43	Reimera	sinuata	K																					
44	Stauroneis	smithii	W																					
45	S.	spp.	?																					
46	Suriella	spp.	?																					
47	Synedra	spp.	?																					
48	Tryblionella	debilis	Ob			1																		
49	?	Unknown	?																					
淡水藻類																								
中〜下流性河川																								
活況地付着生																								
陸生人許																								
陸生巨許																								
広布種																								
淡水不足・不明種																								
その他不明種																								
藻水種																								
淡水種																								
合計																								
壳形類の出現率(%)																								
堆積物1g中の殻数(個)																								
				1.3E+02	1.8E+03	2.3E+02	0.0E+00	1.4E+02	1.7E+02	1.3E+02	0.0E+00	1.8E+02	4.0E+02	2.0E+02	0.0E+00	7.8E+02	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	3.9E+02

第12表-2 堆積物中の珪藻化石産出表② 種群は、千葉・澤井 (2014) による

No.	分類群	種群	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	2	
1	Cocconeis	scutellum	C1																					
2	Achnantrines	crenulata	W																					
3	A.	hurgentica	K																					
4	A.	inflata	W																					
5	A.	subhiudsonis	W																					
6	A.	spp.	?																					
7	Achnantheidum	convergens	J																					
8	A.	minutissimum	Ob																					
9	Amphora	copuleta	W																					
10	A.	montana	Ca																					
11	A.	spp.	?																					
12	Cocconeis	placentula	W																					
13	Cyclotella	atomus	W		1																			
14	C.	meneghiniana	L																					
15	Cymbella	mesiana	W																					
16	C.	turgidula	K																					
17	C.	spp.	?							1														
18	Diadesmis	confervacea	Ob																					
19	D.	contorta	Ca																					
20	Diploeis	?	?																					
21	Ephremia	spp.	?																					
22	Eucotia	spp.	?																					
23	Frustulia	vulgaris	W																					
24	F.	spp.	?																					
25	Gomphonema	acuminatum	O																					
26	G.	parvulum	W																					
27	G.	spp.	?																					
28	Gyrosigma	spp.	?																					
29	Hantzschia	amphioxys	Ca																					
30	Luticola	mutica	Ca			1																		
31	Melosira	varians	K																					
32	Navicula	elgimensis	O																					
33	N.	spp.	?																					
34	Neidium	alpinum	Ca																					
35	N.	spp.	?																					
36	Nitzschia	nana	Ob																					
37	N.	paiea	W																					
38	N.	spp.	?																					
39	Orthosira	roeseana	Ca																					
40	Pinnularia	subcapitata	Ob																					
41	P.	spp.	?																					
42	Pleurothidium	larceolatum	K																					
43	Reimeria	sinuata	K																					
44	Stauroneis	smithii	W																					
45	S.	spp.	?																					
46	Surirella	spp.	?																					
47	Synedra	spp.	?																					
48	Tryblionella	debilis	Ob																					
49	Unknown	?	?																					
		海氷藻類	C1																					
		中〜下流性河川	K																					
		沼澤地付着生	O																					
		陸生A群	Oa			1																		
		陸生B群	Ob																					
		広布種	W			1																		
		淡水不足・不明種	?																					
		その他不明種	?																					
		海氷種	?																					
		淡水種	?																					
		合計		0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		出現率(%)		0.0	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		堆積物1g中の個数(個)		0.0E+00	6.8E+01	1.4E+02	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	8.1E+02	0.0E+00	1.0E+02	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	4.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	2.0E+02	1.3E+02	4.1E+02	2.8E+05	59.7

存状態が非常に不良であった。さらに、S D 53002 (試料 No. 5 ~ 8) でも保存状態が非常に不良であった。このような傾向は、花粉化石も同様である。珪藻化石と花粉化石の保存状態が不良であった要因については、花粉・植物珪酸体分析のところで詳しく述べる。ここでは、珪藻化石の保存状態が相対的に良好であった8~9世紀のS E 51028の井戸枠内の試料 No. 44の産状を検討する。

8~9世紀前半のS E 51028の井戸枠内からは、陸生珪藻 (Qa、Qb) の他に、中~下流性河川指標種群 (K) や海水藻場指標種群 (C1) などがわずかに検出された。井戸枠内は、閉鎖された極狭い堆積空間である。したがって、海水種や河川種は、井戸の側壁などの基盤層からの再堆積とみなされる。

井戸枠内の優占種群は、陸生珪藻 (Qa、Qb) である。湧水層に近いと考えられる井戸枠付近の側壁では、ジメジメした状態が維持されていたと推定される。

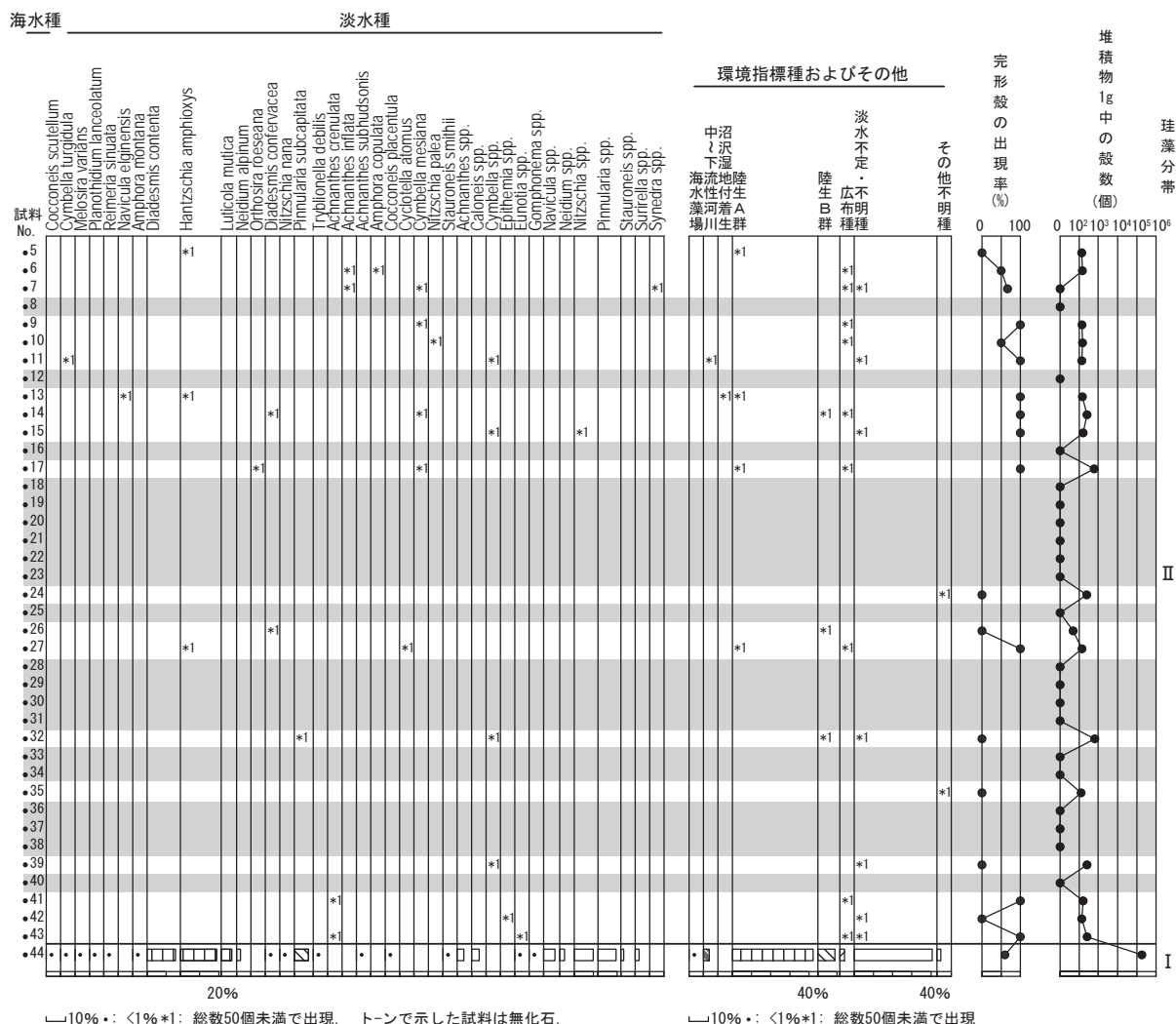
今回産出している陸生珪藻の多くは、この側壁からの堆積と推測される。

b) 花粉・植物珪酸体分析

上記したように、調査区の基盤層の縄文時代中期~平安時代以前と、溝S D 53002の堆積層では、花粉化石の保存状態が非常に不良であった。植物珪酸体についても、火山灰分析を行った層準のうち、黒ボク土の様相を示す3区南壁の8層 (試料 No. 9~11) 以外は、基本的に保存状態が不良である。

ここでは、遺構ごとの産状を考察し、その後に調査区の基盤層を含め、遺跡の立地環境との観点から、微化石の産状を検討する。

S D 52004 古墳時代から古代の溝埋土であるS D 52004の各層 (試料 No. 39~43) から産出する樹木花粉を見ると、スギ属やコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリ属、シイノキ属-マ



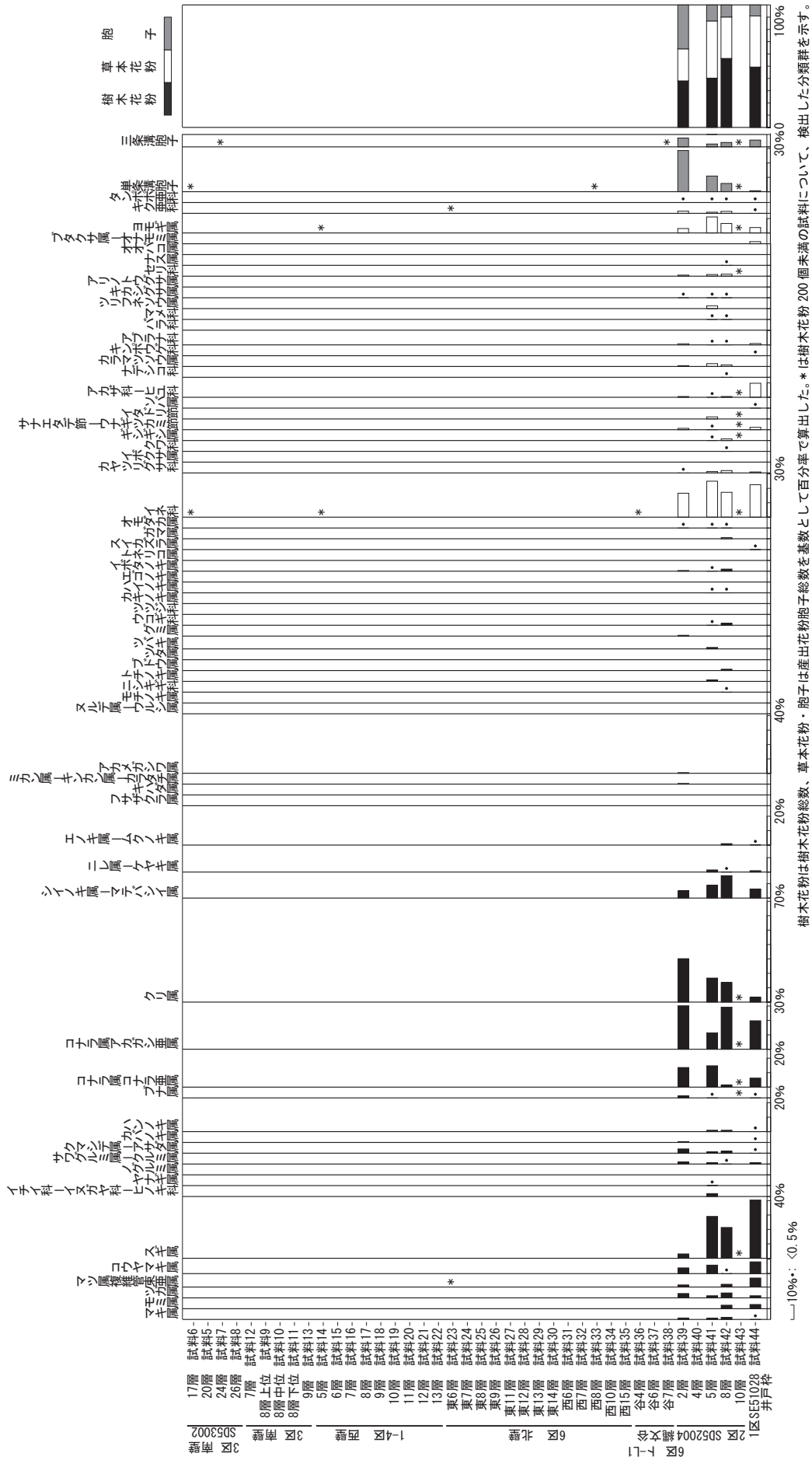
第 154 図 堆積物中の珪藻化石分布図 (主な分類群を表示)

第 13 表 -1 産出花粉孢子一覧表①

学名	和名	試料No.																
		6	5	7	8	12	9	10	11	13	14	15	16	17	18	19		
樹木																		
<i>Podocarpus</i>	マキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Abies</i>	モミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Tsuga</i>	ツガ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Taxaceae—Cephalotaxaceae—Cupressaceae	イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Salix</i>	ヤナギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pterocarya—Juglans</i>	サウグルミ属—クルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Carpinus—Ostrya</i>	クマシデ属—アサダ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Betula</i>	カバノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Fagus</i>	ブナ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Castanea</i>	クリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Castanopsis—Pasania</i>	シイノキ属—マテバシイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Ulmus—Zelkova</i>	ニレ属—ケヤキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Celtis—Aphananthe</i>	エノキ属—ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Citrus—Fortu. —Ponci.</i>	ミカン属—キンカン属—カラタチ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Mallotus</i>	アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Celastraceae	ニシキギ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Vitis</i>	ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Camellia</i>	ツバキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Araliaceae	ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Ligustrum</i>	イボタノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本																		
<i>Typha</i>	ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Gramineae	イネ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Moraceae	クワ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Rumex</i>	ギンギン属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria—Echinocaulon</i>	サナエタデ節—ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	イタドリ節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Chenopodiaceae—Amaranthaceae	アカザ科—ヒユ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Ranunculaceae	キンボウゲ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Brassicaceae	アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Leguminosae	マメ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Rotala</i>	キカシグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Apiaceae	セリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Solanum</i>	ナス属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Ambrosia—Xanthium</i>	ブタクサ属—オナモミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
Tubuliflorae	キク亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Liguliflorae	タンポポ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
シダ植物																		
monolete type spore	単条溝孢子	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
trilete type spore	三条溝孢子	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Arboreal pollen	樹木花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Nonarboreal pollen	草本花粉	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	
Spores	シダ植物孢子	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	4	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	
unknown	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

第 13 表 -2 産出花粉孢子一覧表②

和名	試料No.																										
	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44		
樹木																											
マキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	3	-	1		
モミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	6		
ツガ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	3	7	-	3		
マツ属複雑維管束亜属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	4	-	13		
コウヤマキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	-	12	1	-	17		
スギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	59	44	1	84		
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-		
ヤナギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-		
サワグルミ属-クルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	2	1	-	2		
クマシデ属-アサダ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	2	3	-	1		
カバノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1		
ハンノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	1		
ブナ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	1	-	1	1		
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	27	-	30	3	1	13		
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	61	-	23	60	1	41		
クリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	60	-	34	28	3	7		
シイノキ属-マテバシイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	-	18	32	-	13		
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	2		
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1		
ミカン属-キンカン属-カラタチ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
ニシキギ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-		
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-		
ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-		
ツバキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-		
グミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-	-		
ハイノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-		
イボタノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	3	-	-		
スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
草本																											
ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-		
オモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	1	-	-		
イネ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	87	126	63	5	95	
カヤツリグサ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	5	6	-	3		
クワ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-		
ギンギン属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4	4	-		
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	1	-	1	7		
イタドリ節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	-	4	-		
ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
アカザ科-ヒユ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	2	2	1	41		
ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-		
カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	10	4	-	-		
キンボウゲ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	2	1	-	4		
マメ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-		
ツリフネソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	-	-	-		
キカシグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	1	-	-		
セリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	6	5	1	-		
ナス属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-		
ブタクサ属-オナモミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6		
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	16	-	56	24	1	16		
キク亜科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	-	4	5	-	1		
タンポポ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	1	-	1		
シダ植物																											
単条溝孢子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	150	-	55	21	18	3		
三条溝孢子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	32	-	10	11	4	20	
樹木花粉	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	200	-	203	206	7	208		
草本花粉	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	137	-	236	124	17	176
シダ植物孢子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	182	-	65	32	22	23	
花粉・孢子総数	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	519	-	504	362	46	407	
不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	1	4	5	15		



第155図 花粉分布図

第14表 試料1g当りのプラント・オパール個数

	イネ (個/ g)	イネ穎破片 (個/ g)	ネザサ節型 (個/ g)	ササ属型 (個/ g)	他の タケ亜科 (個/ g)	ヨシ属 (個/ g)	キビ族 (個/ g)	ウシクサ族 (個/ g)	ポイント型 珪酸体 (個/ g)	不明 (個/ g)
試料6	0	0	29,900	1,000	0	0	4,800	8,700	1,000	1,000
試料5	0	0	18,300	0	0	1,100	4,300	1,100	0	0
試料7	1,100	2,100	37,400	4,300	1,100	0	6,400	2,100	0	2,100
試料8	2,100	0	12,600	1,000	0	0	12,600	7,300	1,000	0
試料12	0	0	54,900	4,600	1,100	0	4,600	18,300	1,100	3,400
試料9	0	0	232,600	16,400	1,300	1,300	65,700	118,800	2,500	0
試料10	0	0	665,700	20,300	10,900	3,100	74,800	157,500	3,100	1,600
試料11	1,300	0	249,200	18,900	6,700	0	37,700	51,200	2,700	1,300
試料13	0	0	5,800	2,300	0	0	3,500	0	0	0
試料14	0	0	5,700	0	0	0	4,500	1,100	0	1,100
試料15	0	0	1,800	0	0	0	1,800	0	0	0
試料16	1,000	0	3,000	0	0	0	1,000	1,000	0	0
試料17	0	0	3,700	0	0	0	0	1,200	0	0
試料18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
試料19	1,000	0	7,700	0	0	0	1,000	1,000	0	0
試料20	0	0	1,100	1,100	0	0	1,100	1,100	0	0
試料21	0	0	13,800	0	0	0	3,200	3,200	0	0
試料22	0	0	1,000	0	0	0	0	0	0	0
試料23	1,100	0	13,400	2,200	0	0	1,100	1,100	0	0
試料24	0	0	6,600	0	0	0	1,100	1,100	0	0
試料25	0	0	11,000	1,100	0	0	1,100	0	0	1,100
試料26	0	0	2,000	0	0	0	0	0	0	0
試料27	0	0	2,100	0	0	0	1,100	0	0	0
試料28	0	0	1,100	0	0	0	1,100	0	0	0
試料29	0	0	0	1,100	0	0	0	0	0	0
試料30	0	0	1,100	2,200	0	0	1,100	1,100	0	0
試料31	0	0	60,800	3,400	6,900	0	5,700	4,600	0	2,300
試料32	1,000	0	18,500	0	0	0	4,100	5,200	0	1,000
試料33	0	0	3,200	1,100	0	0	2,100	0	0	1,100
試料34	2,100	0	0	0	0	0	2,100	0	0	0
試料35	0	0	0	0	0	0	1,100	0	0	0
試料36	0	0	4,700	2,400	2,400	1,200	1,200	4,700	0	0
試料37	0	0	13,900	0	1,200	0	3,500	2,300	0	0
試料38	1,100	0	28,100	2,200	0	1,100	2,200	0	1,100	1,100
試料39	3,200	0	12,600	1,100	0	0	4,200	12,600	0	1,100
試料40	5,500	0	24,100	1,100	1,100	0	12,100	12,100	0	0
試料41	4,100	1,000	23,700	3,100	2,100	0	7,200	4,100	0	2,100
試料42	0	0	2,900	1,900	0	1,000	1,000	3,800	0	0
試料43	0	0	10,200	1,000	2,000	0	2,000	1,000	0	0
試料44	25,700	6,100	12,200	0	1,200	0	9,800	11,000	6,100	0

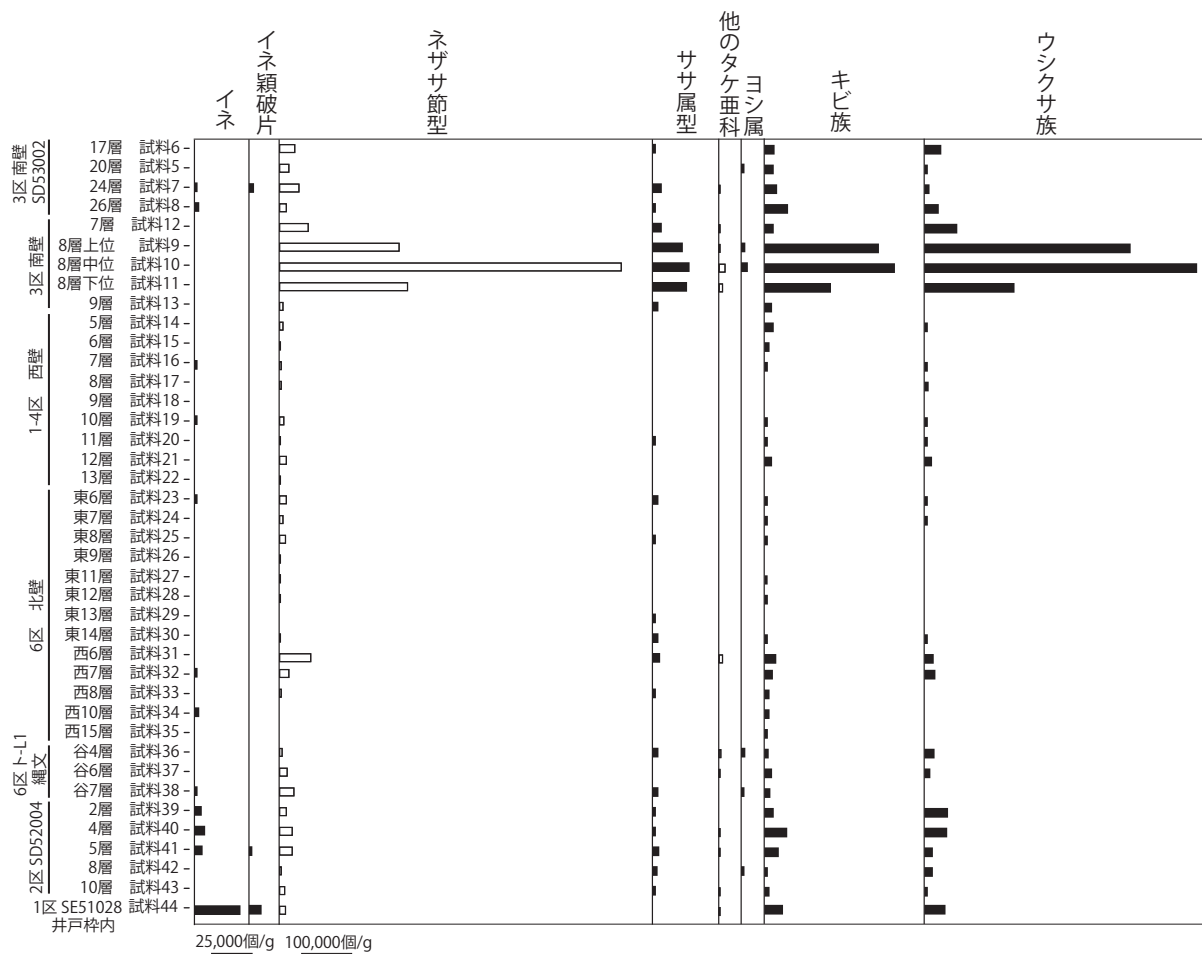
テバシイ属などの産出が目立つ。よって、遺跡周辺にはスギ林やアカガシ亜属とシイノキ属-マテバシイ属からなる照葉樹林や、コナラ亜属やクリ属の落葉樹林などが分布していたと考えられる。このうち、スギ属は上位層に向かって減少傾向を示しており、コナラ属コナラ亜属とクリ属は上位層に向かって増加傾向を示している。こうした産出傾向は、スギ林の縮小と、コナラ亜属とクリ属の拡大を示す可能性がある。

また、S D 52004 (試料No. 39～43) から産出する草本花粉では、ガマ属やオモダカ属、ツリフネソウ属、キカシグサ属などの抽水～湿性植物があり、溝周辺の湿地的環境が推察される。このうち、オモダカ属とキカシグサ属は水田雑草を含む分類群としても知られており、イネ科花粉の産出と合わせて考えると、S D 52004 周辺において水田が存在していた可能性がある。

プラント・オパール分析の結果でも、2、4、5層 (試料No. 39～41) では、少ないものの、イ

ネ機動細胞珪酸体が産出しており、水田の存在を示唆している。なお、S D 52004 の8層 (試料No. 42) と10層 (試料No. 43) ではイネが産出しておらず、その他の分類群の機動細胞珪酸体の産出も少ない傾向がある。こうした産出傾向を示す背景としては、植物珪酸体の堆積に営力が関与していた可能性が考えられる。すなわち、S D 52004 の下位層には中粒砂や細粒砂が堆積しており、比較的大きな営力が働き、堆積速度が速かったと推測されるため、イネ科植物の葉身が堆積しづらかったが、上位層になると粘質土やシルトが堆積しているため、営力が弱まり、イネ科植物の葉身が多く堆積するようになった可能性がある。

S D 53002 弥生時代～中世の溝S D 53002 では、花粉化石と珪藻化石のいずれも保存状態が非常に不良である。一般的に花粉や珪藻の保存は、埋没後の土壌環境が水浸かりとなる嫌氣的 (還元的) 状態で良く、大気に常時曝されるような好氣的 (酸化的) 状態で相対的に不良となる傾向がある。花



第 156 図 植物珪酸体分布図

粉化石と珪藻化石の保存が不良であるため、S D 53002 埋没時期の河床付近の堆積時期には、好気的な環境に晒されていた可能性がある。つまり、S D 53002 の溝床付近の堆積時期には、滞水状態となったり、地下水位が高く湿地になるような湿潤状態が維持されていなかったとみられる。植物珪酸体では、イネ（穎珪酸体を含む）が産出した。流路の集水域では、水田や人為的にイネが持ち込まれる居住域などが存在し、そこからイネの葉身がもたらされた可能性がある。

S E 51028 8～9世紀前半の井戸杵埋土のS E 51028（試料No. 44）では、樹木花粉ではスギ属の産出が目立ち、遺跡周辺のスギ林から供給されたと思われる。草本花粉ではイネ科やアカザ科-ヒユ科、ヨモギ属などの産出が目立ち、井戸周辺に生育していたと思われる。また、植物珪酸体ではイネやネザサ節型、キビ族、ウシクサ族などの産出が見られ、井戸周辺に生育していたイネ科植物から供給されたと思われる。イネについては、イネ類に形成される珪酸体の産出も目立つ。井戸内には、人為的に持ち込まれたイネが何らの要因で再堆積した可能性も考えられる。

c) 調査区基盤層の花粉・珪藻化石の産状

古代以降の遺構検出面下に累重する縄文時代中期～平安時代以前の調査区の基盤層（以下、基盤層とする）の花粉・珪藻分析では、すべての試料で保存状態が極めて不良であった。分析試料の層相と調査区周辺の地形をふまえると、このような花粉・珪藻化石の産状は、遺跡の立地環境と密接に関わると予想される。

本遺跡は、榑田川左岸の沖積氾濫原面上に立地している（第157図）。遺跡周辺の深部の堆積層については、櫻井編（2016）によって詳しく検討されている。これによると、調査区の基盤層に対比される層準では、今回の分析層準と岩質が類似するとみなされるシルトを中心として、所々で砂層を挟在する堆積層が、現地表面下から1～2m前後の層厚で側方へ広く連続して累重する。そして、その直下には、砂礫が5～7m前後の厚さで堆積している。この砂礫は、今回の発掘調査地点でも部分的に確認されている。

本遺跡は、榑田川が臨海部に広がる平野に出る谷口に近い場所に存在しており、付近の等高線が扇形に張り出すようにして分布する。このような地形をふまえると、遺跡周辺の沖積面は、沖積扇状地の氾濫原をなすと解釈される。櫻井編（2016）が示したボーリング柱状図から、遺跡周辺の深部の堆積層を構成する砂礫のうち上部のものは、沖積層に区別されるとともに、これらが厚く堆積している状況が読み取れる。このような基盤の堆積状況からも、遺跡周辺の沖積面は、扇状地であると考えられる。

遺跡周辺では、上記の沖積扇状地面を構成する砂礫を薄く覆って、今回微化石分析を実施した調査区の基盤層に相当するシルトが広く累重する（櫻井編2016）。このシルトは、活発な堆積領域が移動して、この場所での扇状地形成が終了しつつある離水傾向が強まった段階に堆積した浮遊洪水堆積物と考えられる。

砂礫を薄く覆う調査区基盤層をなすシルトについては、発掘調査結果から堆積状況が確認できる。調査区の堆積層の断面写真や断面図と遺物の出土状況によると、今回の調査区の古代以降の遺構検出面は、表土から極浅い深度で埋没している。この古代以降の遺構検出面の直下には、縄文時代中期末～後期頃の遺物を含むシルトを主体とする堆積層が堆積する。このような層序関係から、調査区周辺の氾濫原面は、縄文時代後期以降に氾濫原の離水が進行したと考えられる。また、調査区の基盤層のシルトを主体とする堆積層については、植物遺体が挟在せず、土色も酸化傾向を示す黄灰色系を示す領域が多い。このような層相から、シルト層の堆積時期および堆積後には好気的な地表環境が維持されていたと考えられる。

上記してきた調査区の基盤層の堆積状況と地形発達史から、分析地点周辺では、縄文時代中期末以前に、調査区の底部付近より下位の厚い砂礫層の堆積によって、高燥な微高地をなす沖積扇状地面が発達したと考えられる。縄文時代中期末から後期頃には、浮遊洪水堆積物のシルト主体の堆積層が砂礫層を覆って堆積していくような氾濫原が形成されていたと捉えられる。この時期には、すでに氾濫原が離水傾向へと転じており、さらに縄文時代後期以降にその傾向が強まったと解釈される。したがって、縄

文時代中期末から後期以降には、分析地点とその周辺は地表付近の水はけが良好で乾燥傾向にあり、好氣的土壤環境が維持される氾濫原が広がっていたと考えられる。今回花粉・珪藻分析を行ったのは、このような堆積・土壤環境下にあったとみられる調査区基盤層をなすシルト主体の堆積物であり、試料の微化石の保存状態が極めて不良であった。この産状は、上述のような試料採取層準の好氣的な堆積・土壤環境を反映しているとみなされる。

今回の微化石分析のうち、珪藻分析と花粉分析では、特に基盤層で保存状態が不良な試料が多く、化石群集にもとづく縄文時代から古代頃までの古環境復元が困難であった。ただし、微化石の産状は、上記のような遺跡周辺の地形発達史と密接に関連すると考えられ、このような観点から分析結果を評価できる。

d) 調査区基盤層の植物珪酸体の産状

植物珪酸体はガラス質であり、花粉や珪藻よりも風化に耐性が強い。縄文時代中期～平安時代以前の調査区の基盤層でも、保存状態が不良ながら統計的に扱えるだけの個数が産出した。基盤層の植物珪酸体では、乾燥地を好むネザサ節型、ササ属型、キビ族、ウシクサ族が多く産出しており、湿潤地を好むヨシ属がほとんど認められない。このような産状は、上記した基盤層の堆積・土壤環境とも調和的である。

なかでも、縄文時代中期以前の3区南壁で採取された試料No. 9～13では、特に黒ボク土とされる8層で植物珪酸体の産出量が非常に多い点が着目される。9層（試料No. 13）では植物珪酸体の産出量は比較的少ないが、8層下位（試料No. 11）以上の層準で、ネザサ節型やキビ族、ウシクサ族などの機動細胞珪酸体の産出量が急増する。こうした産出傾向から推測すると、9層の堆積時にはイネ科植物がそれほど繁茂していなかったが、8層の堆積時になるとネザサ節のササ類やキビ族、ウシクサ族などイネ科植物が分布を広げていた可能性がある。

こうしたイネ科植物の分布拡大には、黒ボク土の形成が関わっていると思われる。山野井(1996)は、微粒炭が腐植を吸着・保持して黒ボク土が形成されるとし、微粒炭は古代人の野焼きや山焼きなどの火

入れによって生じると述べている。黒ボク土とされる3層には微粒炭が多く含まれていると推測され、微粒炭を生じさせる火入れが行われることで、草原的環境が出現するようになる。一方、細野・佐瀬(1997)は、黒ボク土形成の条件の1つとして、腐植を供給する草原植生の重要性を述べており、草原の成立・維持には火入れなどの人間活動が必要としている。いずれにしろ、黒ボク土の形成過程については草原的環境の関与があったと思われ、8層におけるネザサ節型やキビ族、ウシクサ族の産出量の増加、特に最も黒味が増す8層中位でネザサ節型機動細胞珪酸体が突出する現象は、8層における草原的環境の拡大を示していると思われる。

e) 遺跡周辺の旧河道について

本遺跡内には、第157図の地形分類図からも確認されるように、明瞭な埋没旧流路（以下、旧流路とする）が幾条も地形判読できる。そして、このような旧流路は、地表の地割からも容易に認識できる。地形判読および地割から復元される旧流路については、発掘調査が実施されており、奈良時代頃から鎌倉時代前後にかけて機能および埋没した旧流路が確認されている（櫻井編2016）。また、この旧流路の埋積層では、砂を挟在するものの砂礫がほぼ認められず、シルトや粘土の泥質堆積物を主体とする埋没状況である様子が、櫻井編(2016)などの記載から読み取れる。このような流路の層相やその埋没過程は、旧流路が榎田川の主要な分流路ではなく、主流路の流路移動や切断によって切り離された放棄流路（増田・伊勢屋1985）や、洪水流の侵食によって形成された氾濫流路（増田2018）の特徴を有している。一般的に沖積扇状地面上では、本流の転流などによって切り離されたり、地形面が離水傾向に転じたのを契機として、それまで本流であった流路への河川水と堆積物の供給が急激に減少し、穏やかな河川堆積作用に変化するとともに、流路が固定的となる放棄流路や氾濫流路が形成されやすい。特に、本流転流後にその旧流路内を流れる河川は、名残川と呼ばれ、転流（流路変更）や流路切断が生じやすい扇状地でよくみられる地形とされる（鈴木1998）。

本遺跡内を流下する旧流路については、直線状をなしており、榎田川右岸の祓川沿いを中心に広く分

布する蛇行が著しい流路痕跡とは形態が大きく異なる。以上の旧流路の状況から、遺跡周辺では、縄文時代後期前後以降に離水傾向をさらに強めたと考えられる。このような流路痕跡の微地形および流路内とその基盤層の堆積層の特徴をふまえると、旧流路は名残川に相当すると推定される。名残川は、地表水が集積するとともに地下水でも涵養されるため、流路の堆積環境が穏やかで、大規模な洪水が起こりにくく、一定量の水量が見込まれ、灌漑など農業の利用に適した流路となる（鈴木 1998）。

これまでの発掘調査において、朝見遺跡と、この北東方向に続く中坪遺跡、堀町遺跡では、旧流路沿いで古代から中世の活発な人間活動や灌漑水路の掘削などが確認されている（三重県埋蔵文化財センター 2015）。上述の流路痕跡の分布から、榊田川右岸の氾濫原は、河川の地形および堆積作用が激しく、不安定であったとみられる。一方で、榊田川左岸の朝見遺跡とその周辺遺跡が載る氾濫原面は、榊田川右岸よりも相対的に堆積環境がかなり安定的であった様子が、調査区周辺の地形や基本層序の形成過程からも確認できる。このような場所における耕作地の開発等の人間活動にとって、名残川をなす旧流路は、水供給の基幹として重要な存在であったとみられる。本遺跡周辺の耕作地の開発、特に水田の構築

とその維持・管理については、旧流路内を流下する河川水の水量に強く依存していたと思われる。

ただし、灌漑については、現地表の水路網に見られるように、南側に存在する丘陵部分の開析谷からも古代以降のある段階で水路が整備されたと推測される。上述の遺跡の地形・地質学的検討から、遺跡周辺の沖積氾濫原面は、非常に安定的で耕作地開発を行いやすい領域であったと指摘できる。しかし、名残川の可能性のある旧流路や後背の丘陵地は、ともに水の涵養量が大きくないと予想され、耕作地開発の維持・管理の基礎となる水の供給量については、一定の限界が生じやすい地域であったとみられる。

今後は、本地域の水文学的な検討も併せて、古代以降の人間活動について検討していくことが課題と認識される。

（森 将志・野口真利江・辻 康男）

引用・参考文献

- 安藤一男（1990）「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42、p 73-88。
 Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1) , 337-360.
 千葉 崇・澤井裕紀（2014）「環境指標種群の再検討と更新」『Diatom』30、p 7-30。



国土地理院（2015）治水地形分類図（更新版：旧流路あり）から大幅に改変・単純化して作製
 凡例 HL：丘陵 TR：台地 FP：沖積氾濫原 NB：自然堤防 AC：旧流路 RD：水路・流路 Kus.R：榊田川 Hre.R：祓川

第 157 図 遺跡周辺の地形分類図

幡中光輔 (2012) 「西日本縄文時代における遺跡タイポロジー分析の実践と展開」(関西縄文文化研究会編) 『関西縄文時代研究の新展開: 松尾洋次郎さん追悼論集』 関西縄文文化研究会、p33-49.

細野 衛・佐瀬 隆 (1997) 「黒ボク土生成試論」『第四紀』 29、p1-9.

小杉正人 (1988) 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』 27、p1-20.

町田 洋・新井房夫 (2003) 『新編火山灰アトラス』 東京大学出版会、336p.

増田富士雄 (2018) 「京都府南部、城陽市下水主遺跡の発掘調査で見いだされた弥生時代の氾濫流路とその埋積物」『新名神高速道路整備事業関係遺跡下水主遺跡第1・4・6次』 京都府埋蔵文化財調査研究センター、p 247-255.

増田富士雄・伊勢屋ふじこ (1985) 「“逆グレーディング構造” 自然堤防帯における氾濫原洪水堆積物の示相堆積構造」『堆積学研究会報』 22-23、p108-116.

三重県埋蔵文化財センター編 (2015) 『水と大地といにしえの人びとー松阪市朝見地区の発掘調査からー』 三重県埋蔵文化財センター、30p.

中村俊夫 (2000) 「放射性炭素年代測定法の基礎」(日本先史時代のC14年代編集委員会編) 『日本先史時代のC14年代』 3-20、日本第四紀学会

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Haffidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), 1869-1887.

櫻井拓馬編 (2016) 『堀町遺跡 (第5次) 発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター、208p.

鈴木隆介 (1998) 『建設技術者のための地形図読図入門』 第2巻 低地、古今書院、554p.

山野井 徹 (1996) 「黒土の成因に関する地質学的検討」『地質学雑誌』 102、p526-544.

横山卓雄・檀原 徹・山下 透 (1986) 「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」『第四紀研究』 25、p21-30.

3. 樹種同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

(1) 試料

本分析調査で対象とする試料はほとんどが古代から中世とされる井戸の井戸枳材であり、S E 51028、S E 54031、S E 54036、S E 56004、S E 56006 から出土した計 87 点である。試料は 2018 年 9 月 11 日に当社技師 1 名が三重県埋蔵文化財センターに赴き採取した。結果は遺物観察表 (第 4 表) に示す。

(2) 分析方法

剃刀を用いて木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の切片を作成する。光学顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982)、Wheeler 他 (1998)、Richter 他 (2006) を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林 (1991) や伊東 (1995, 1996, 1997, 1998, 1999) を参考にする。

(3) 結果

顕微鏡観察の結果、全体の 9 割近くがスギに同定された。次に多いのがヒノキ属で、約 1 割を占める。ヒノキ属にはヒノキとサワラがあり、木材組織の違いにより識別できる場合もあるが、今回は遺物の破壊を極力抑えることに主眼を置き、両者を区別できるように試料採取 (広範囲かつ保存状態の良い場所からの採取) を行っていないため、ヒノキ属としている。その他コウヤマキ、ニッケイ属が 1 個体ずつ検出されている。以下に木材組織の特徴を述べる。

・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状で、1 分野に 1 個。放射組織は単列、

1～5細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don)
スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・ヒノキ属 (*Chamaecyparis*) ヒノキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は基本的にヒノキ型だが、保存が悪く観察できない箇所もある。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ニッケイ属 (*Cinnamomum*) クスノキ科

散孔材で、道管径は比較的大径、管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。油細胞がある。

(4) 考察

最も多く同定されたスギは、やや軽軟で加工性(特に割裂性)に富むので、土木、建築材として多く用いられる。次いで多いヒノキ属も優れた建築材であり、耐朽性、耐湿性に富むことから井戸枿材として適している。一方、曲物もスギとヒノキ属が用いられているが、曲げに強く、加工性に富むという材質の特性を生かした選択だと思われる。コウヤマキは耐水性に富む良材で現在も三重県の山間部に分布する。この特性から井戸枿材としては適材だが、産地が限られ、生育数も少ないことから用例は少ない。クスノキ属の材は、加工しやすく、油分が多いので耐朽性、耐湿性に優れているが、狂いやすいので、建築部材としての利用は多くない。

遺構別の樹種内訳では、S E 51028は全27点のうち、26点がスギ、削り抜きの水溜のみがニッケイ属に同定され、スギ中心の組成を示す。S E 54031は全28点の内、26点がスギ、2点がヒノ

キ属であり、やはりスギ中心の組成を示す。S E 54036は全20点の内、13点がスギに、6点がヒノキに、1点がコウヤマキであり、やはりスギ中心ではあるが、ヒノキの割合も高い。S E 56003は10点全てがスギに同定され、スギ中心の組成を示す。S E 56004とS E 56006は各1点を同定しているが、共にヒノキである。

なお、朝見遺跡も含まれる朝見上地区(朝見・堀町・中坪遺跡)の井戸枿部材の樹種については中坪遺跡発掘調査報告書(三重県埋蔵文化財センター2017)で詳細にまとめられている。これによると、奈良時代の井戸はヒノキが圧倒的に多く、平安時代前期から後期にかけてはスギが最も多く、ヒノキも合わせて利用される。平安時代末から鎌倉時代にかけては引き続きスギが最も多く、ヒノキの割合が減り、コウヤマキ、マツ属、モミ属等が利用される。室町時代から戦国時代になるとスギの割合が減り、ヒノキ、コウヤマキの割合が増える。これに沿って本分析調査の結果を見ると、S E 51028、S E 54031、S E 56003はスギ中心の組成を示し、平安時代前期から後期、もしくは平安時代末から鎌倉時代の組成に相似する。一方で、S E 54036ではスギ中心であるものの、ヒノキの割合も高い組成を示し、平安時代末から鎌倉時代の組成に相似する。各井戸の形態や帰属する年代を踏まえたうえで、井戸枿材の木材利用について検証し、これまでの朝見上地区における調査成果と比較する必要がある。

引用文献

- 林 昭三 (1991)『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 (1995)「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31、京都大学木質科学研究所、p81-181.
- 伊東隆夫 (1996)「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32、京都大学木質科学研究所、p66-176.
- 伊東隆夫 (1997)「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33、京都大学木質科学研究所、p83-201.
- 伊東隆夫 (1998)「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34、京都大学木質科学研究所、p30-166.
- 伊東隆夫 (1999)「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35、京都大学木質科学研究所、p47-216.

- 伊東隆夫・山田昌久（編）（2012）『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社、449p.
- 金原正明（2002・2003）「樹種同定・遺物観察表」『一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う六大A遺跡発掘調査報告（木製品編）』（三重県埋蔵文化財調査報告115-16・17）、三重県埋蔵文化財センター、p18-22
- パリノ・サーヴェイ株式会社（2000）「堀町遺跡（第1次）における自然科学分析」『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告7 堀町遺跡』（三重県埋蔵文化財調査報告123-7）、三重県埋蔵文化財センター、p261-266.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.（編）（2006）針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修），海青社，70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫（1982）図説木材組織. 地球社，176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（編）（1998）広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修），海青社，122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]
- 三重県埋蔵文化財センター（2017）「総括」『中坪遺跡（第1次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告370、三重県埋蔵文化財センター、166-179p.

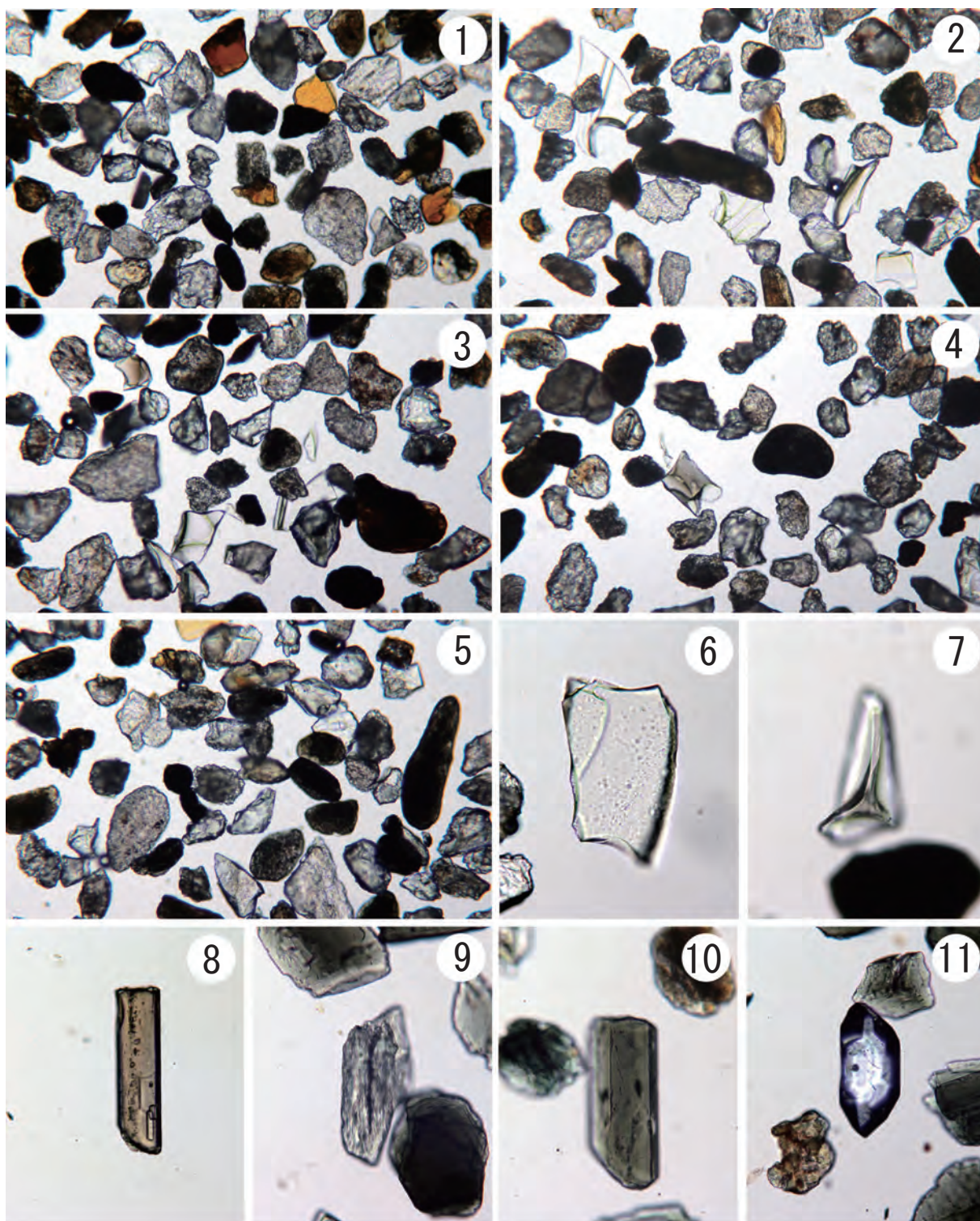
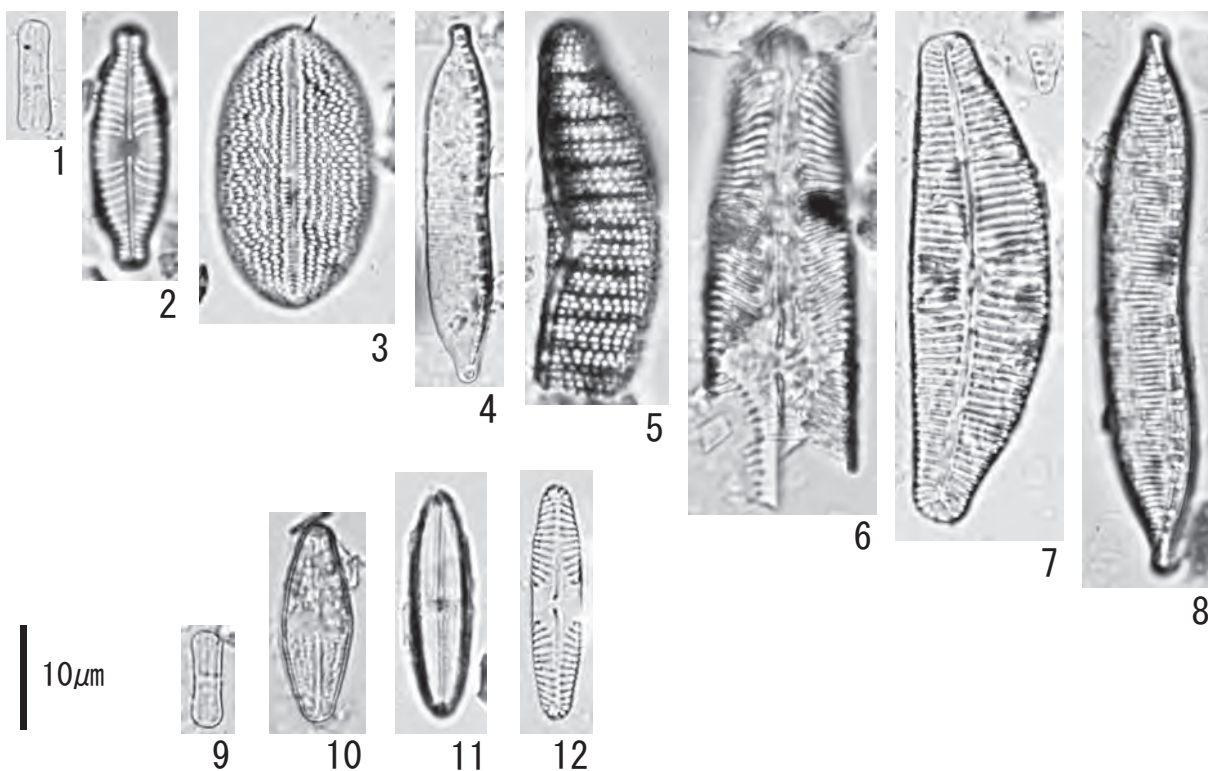


写真3 テフラ試料の偏光顕微鏡写真

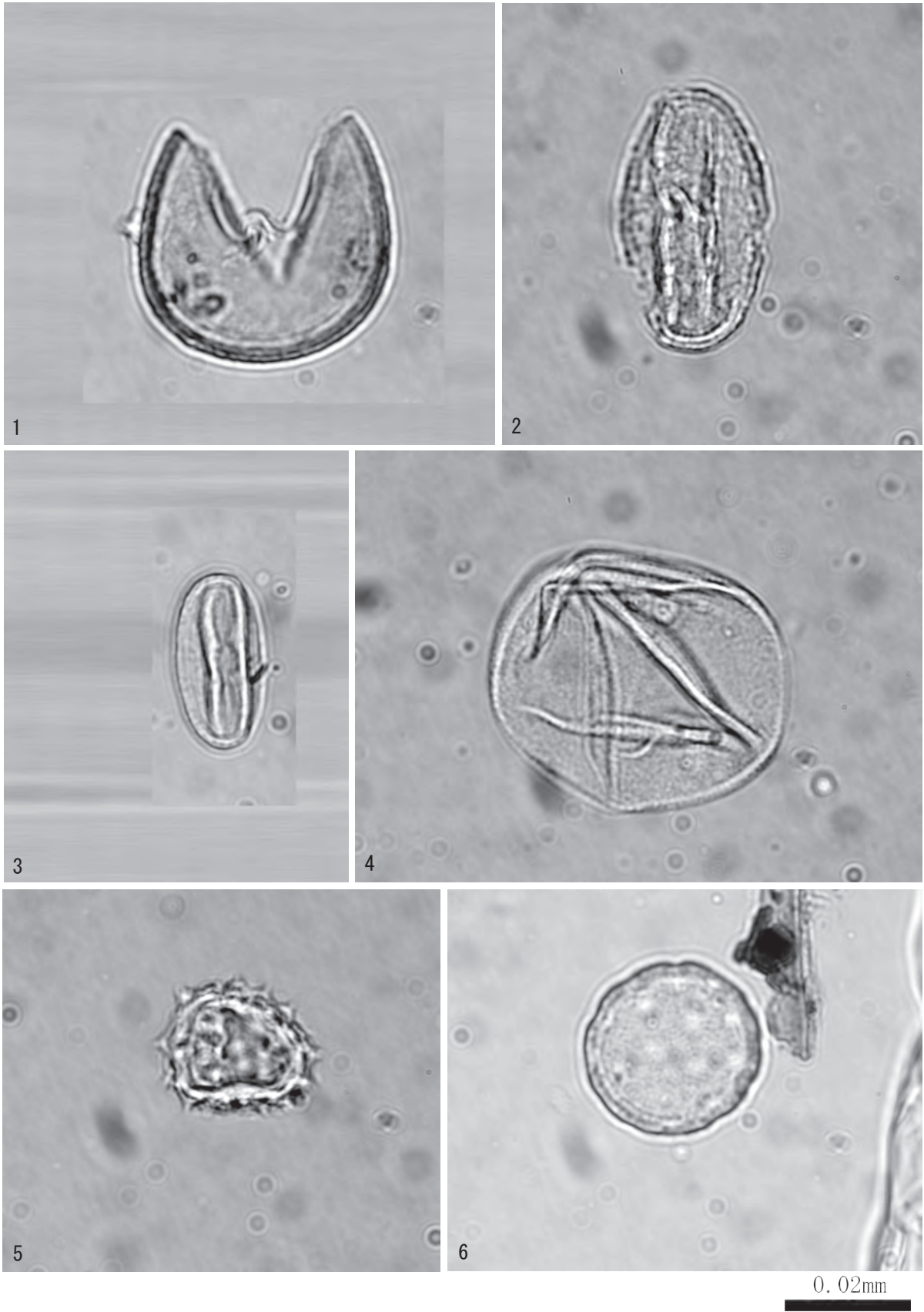
1. 4φ軽鋳物 (分析 No. 1) 2. 4φ軽鋳物 (分析 No. 2) 3. 4φ軽鋳物 (分析 No. 3)
 4. 4φ軽鋳物 (分析 No. 4) 5. 4φ軽鋳物 (分析 No. 5) 6. バブル型平板状ガラス (分析 No. 3)
 7. バブル型Y字状ガラス (分析 No. 3) 8. 斜方輝石 (分析 No. 2)
 9. 単斜輝石 (分析 No. 3) 10. 角閃石 (分析 No. 5) 11. ジルコン (分析 No. 5)



(括弧内の数字は試料No. を示す)

1. *Diadsmis contenta* (No. 44) 2. *Navicula elginensis* (No. 13) 3. *Cocconeis placentula* (No. 44)
 4. *Hantzschia amphioxys* (No. 44) 5. *Epithemia* spp. (No. 42) 6. *Pinnularia* spp. (No. 44)
 7. *Cymbella turgidula* (No. 44) 8. *Hantzschia amphioxys* (No. 44) 9. *Diadsmis contenta* (No. 44)
 10. *Luticola mutica* (No. 44) 11. *Neidium alpinum* (No. 44) 12. *Pinnularia subcapitata* (No. 44)

写真4 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真 (括弧内の数字は試料 No. を示す)



1. スギ属 (試料44 PLC. 2679)

3. シイノキ属-マテバシイ属 (試料42 PLC. 2681)

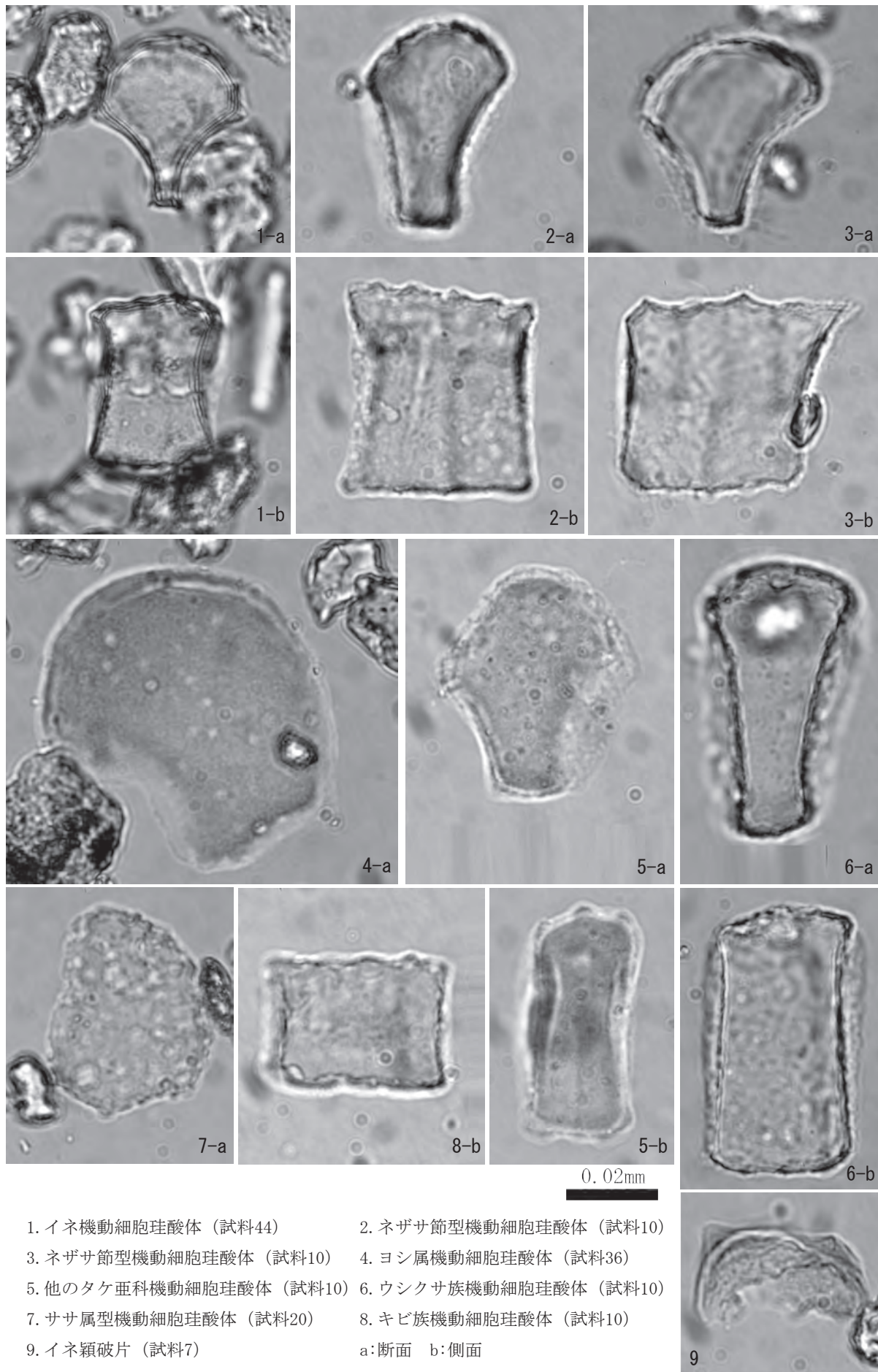
5. キク亜科 (試料44 PLC. 2683)

2. コナラ属コナラ亜属 (試料44 PLC. 2680)

4. イネ科 (試料44 PLC. 2682)

6. アカザ科-ヒユ科 (試料44 PLC. 2684)

写真5 産出した花粉化石



- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1. イネ機動細胞珪酸体 (試料44) | 2. ネザサ節型機動細胞珪酸体 (試料10) |
| 3. ネザサ節型機動細胞珪酸体 (試料10) | 4. ヨシ属機動細胞珪酸体 (試料36) |
| 5. 他のタケ亜科機動細胞珪酸体 (試料10) | 6. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (試料10) |
| 7. ササ属型機動細胞珪酸体 (試料20) | 8. キビ族機動細胞珪酸体 (試料10) |
| 9. イネ穎破片 (試料7) | a:断面 b:側面 |

写真6 産出した植物珪酸体

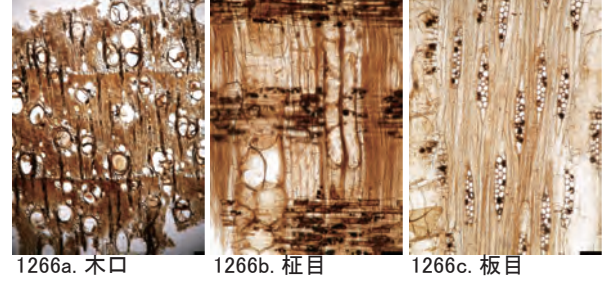
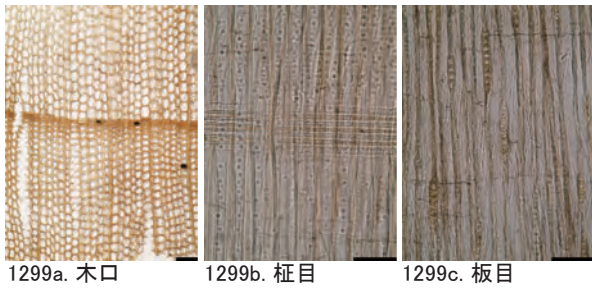
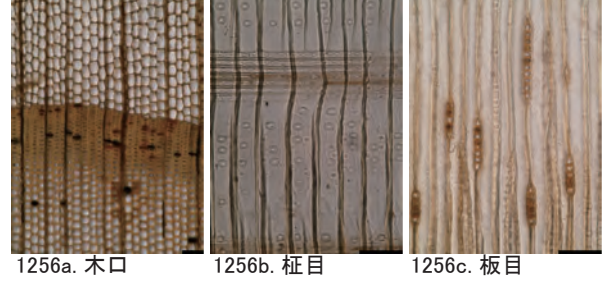
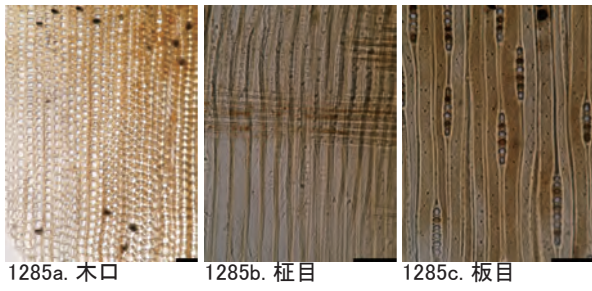
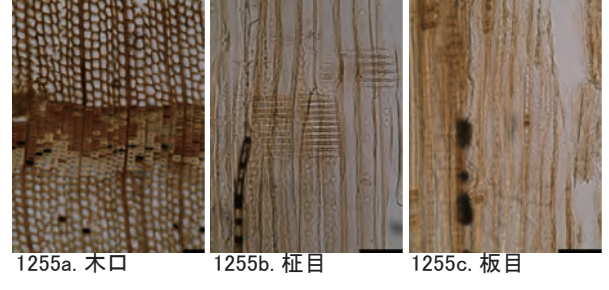
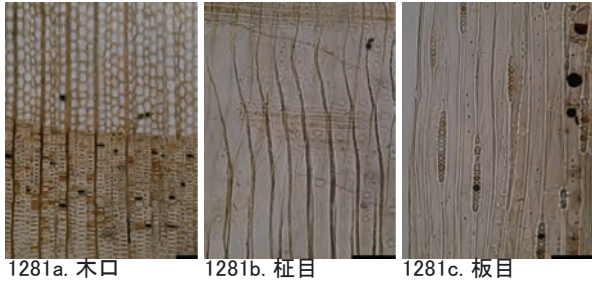
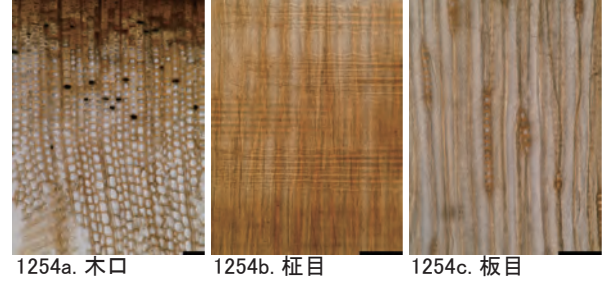
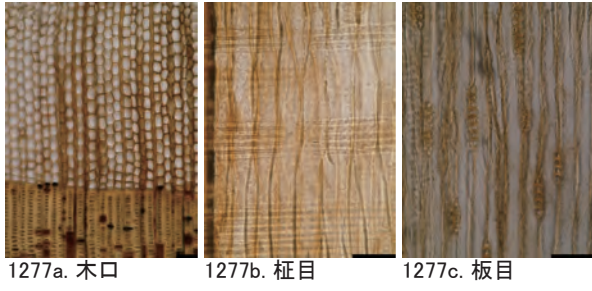
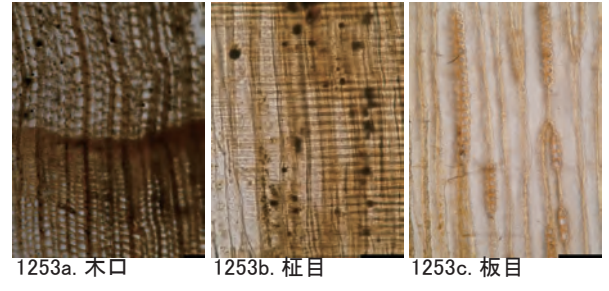
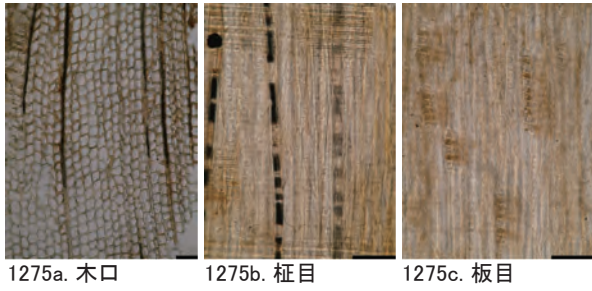
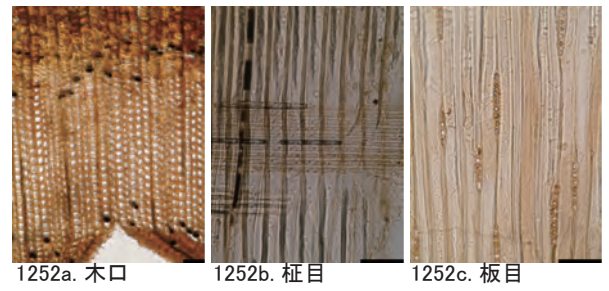
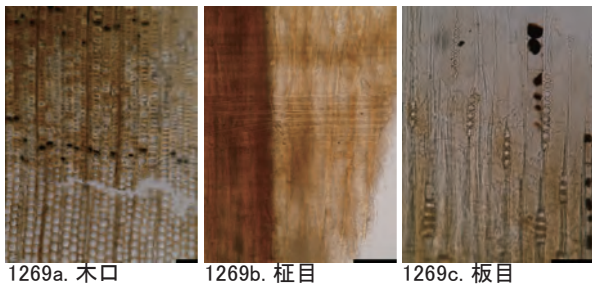
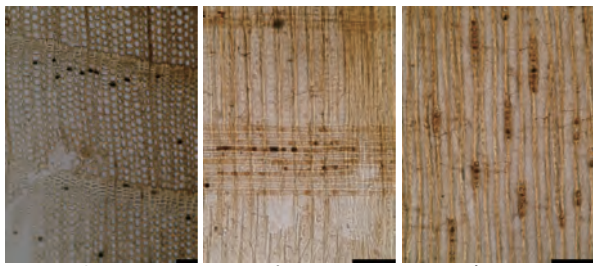


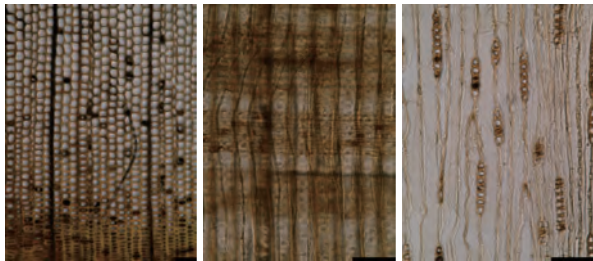
写真7 樹種同定結果1 (抜粋)



1310a. 木口

1310b. 杵目

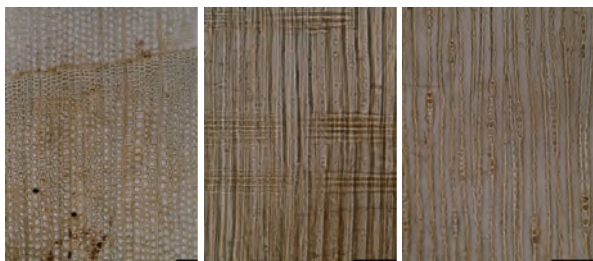
1310c. 板目



1311a. 木口

1311b. 杵目

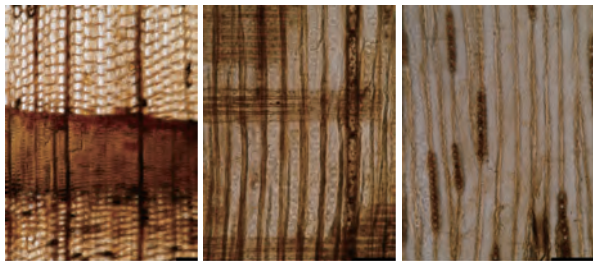
1311c. 板目



1312a. 木口

1312b. 杵目

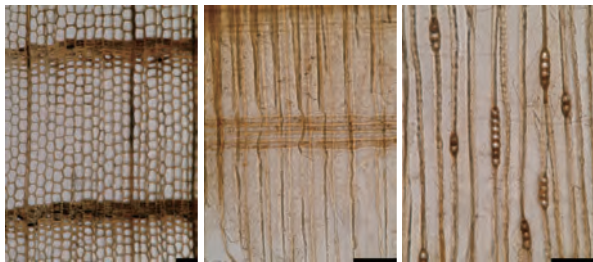
1312c. 板目



1313a. 木口

1313b. 杵目

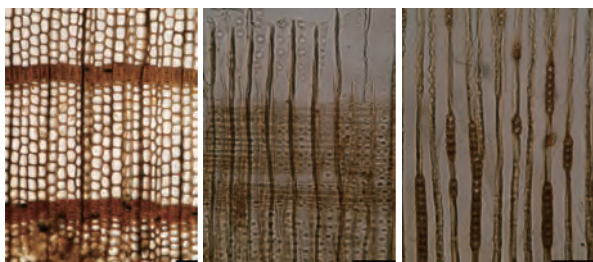
1313c. 板目



1314a. 木口

1314b. 杵目

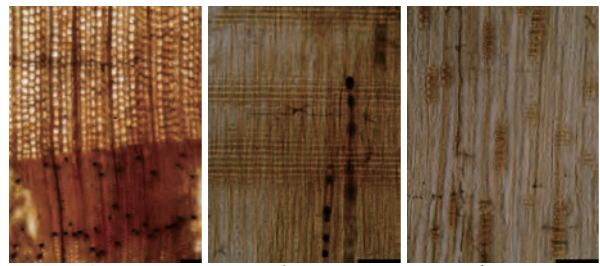
1314c. 板目



1315a. 木口

1315b. 杵目

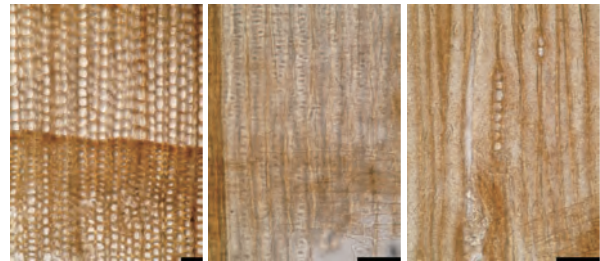
1315c. 板目



1303a. 木口

1303b. 杵目

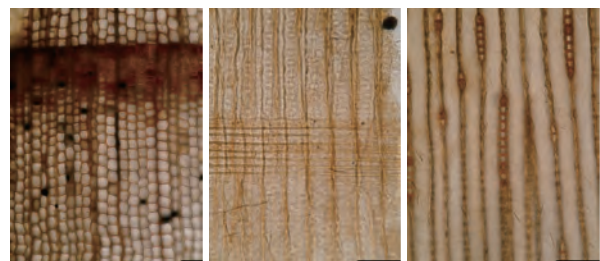
1303c. 板目



1304a. 木口

1304b. 杵目

1304c. 板目



1305a. 木口

1305b. 杵目

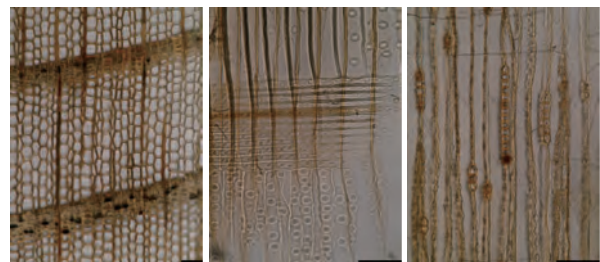
1305c. 板目



1306a. 木口

1306b. 杵目

1306c. 板目



1307a. 木口

1307b. 杵目

1307c. 板目



1308a. 木口

1308b. 杵目

1308c. 板目

写真8 樹種同定結果2 (抜粋)

VI 総括

1. 縄文時代の集落と環境

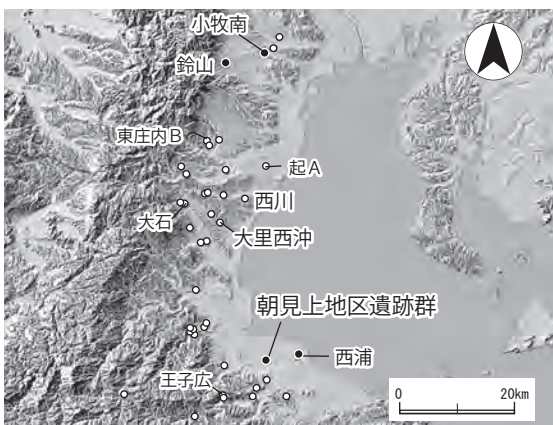
(1) 縄文時代の集落と地形環境

今回の調査では、1区・6区で縄文時代中期中葉～後期前葉の遺構・遺物が認められた。その後の第6次・7次調査、堀町遺跡、中坪遺跡も含めた朝見上地区遺跡群の調査においても、縄文中～後期の遺構・遺物が確認されている。また、櫛田川右岸下流域の西浦遺跡（多気郡明和町）では、浜堤ないし自然堤防の砂層中から里木Ⅱ式相当の埋設土器が出土しており、里木式・咲畑式期を嚆矢として櫛田川低地に遺跡が展開していくようである。

なお、堀町遺跡では、少量ながら後期中葉の土器（元住吉山Ⅰ式）も出土している。このように、沖積低地にあつて中期中葉から後期にかけて居住がなされた点は注目すべきところである。三重県内では、標高10m以下の低地にある縄文遺跡は非常に少ないため（第158図）⁽¹⁾、遺構の検出パターンや埋没地形についてまとめておきたい。

①遺構の検出パターン

朝見遺跡・堀町遺跡では、遺構を良好に検出できた箇所がごく限られており、炉の被熱面や遺物集中、埋設土器の単独出土としてしか把握できないことが多い。竪穴住居状の暗色土の落ち込みが認められても、支柱穴が検出できない、炉の位置が対応しないなど、調査当初は遺構認定に苦慮した。最終的には、



第158図 県内の縄文中～後期前半の遺跡（国土地理院数値地図をカシミール3Dにより作図）

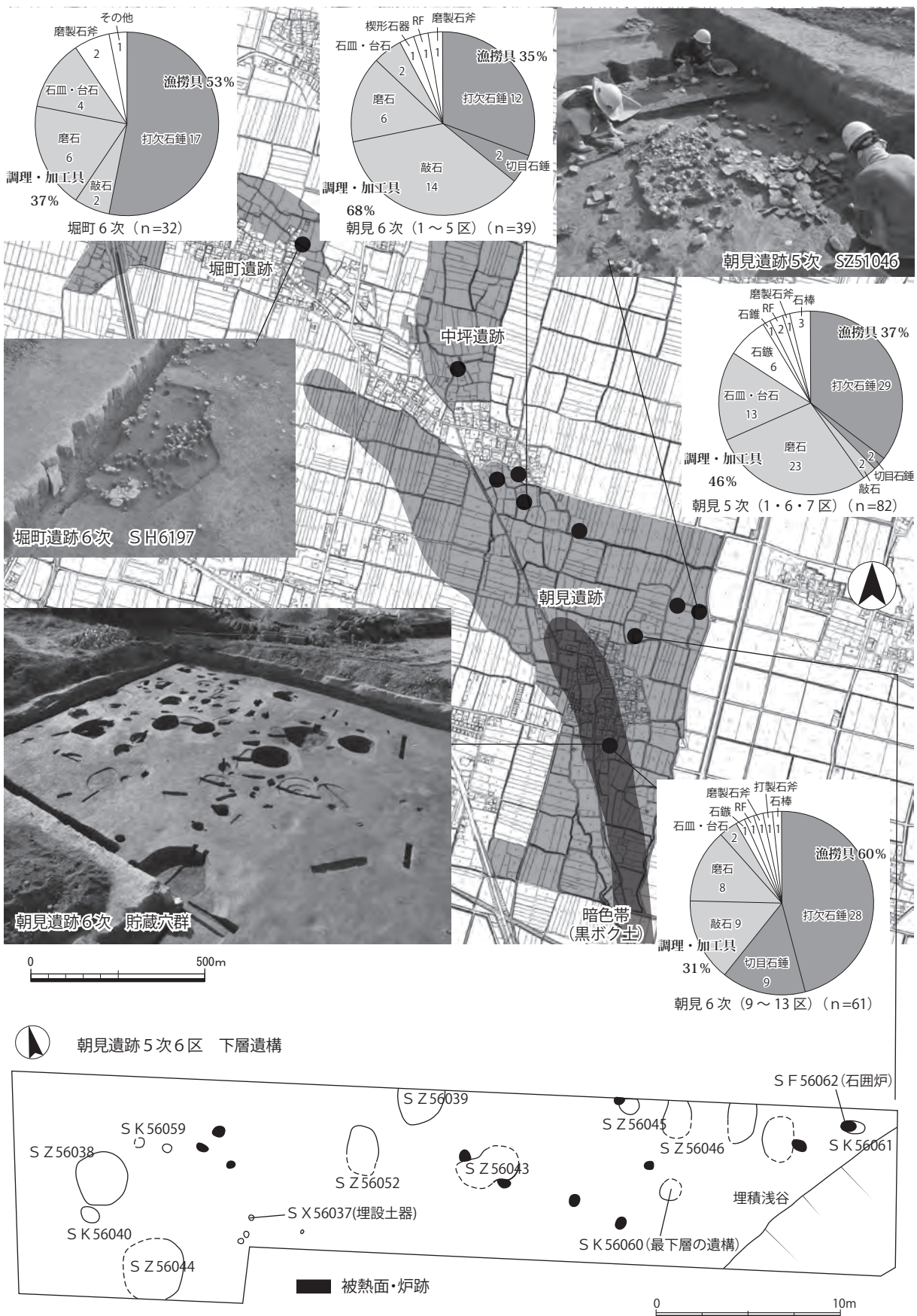
各所で実施した下層確認と土層観察の結果から、遺構は土壌化により消失、いわゆる「a層」となり、かつ大阪・河内平野のように堆積物の供給量が多くないため、遺構プランが下部まで消失した結果であると判断している⁽²⁾。

一方、谷の付近は堆積物の供給量が多いため、6区埋積浅谷付近では、「b層」上面で遺構を複数検出することができた。また、第6次調査では、谷ないし自然流路に接した地点で円筒形の土坑群が確認され、埋土中からオニグルミ、トチノキ等の炭化種子やアカガシ亜属の炭化子葉が出土した。これは伊賀市森脇遺跡（晩期）⁽³⁾、愛知県寺部遺跡（後期前葉）⁽⁴⁾の貯蔵穴群のように、谷や自然流路付近に堅果類の貯蔵穴を設けた、いわゆる低湿地型貯蔵穴⁽⁵⁾であろう。

これらを総合すると、朝見遺跡・堀町遺跡では、縄文中期中葉（咲畑式併行）から後期前葉（縁帯文期）にかけて竪穴住居・埋設土器・石囲炉・貯蔵穴などの遺構が微高地ごとに形成され、小規模な集落（居住域）が点在していたと考えられる（第159図）。中坪遺跡でも遺物が一定量出土しており、遺構が存在する可能性は高い。

縄文時代の遺物包含層・遺構は、空中写真で白く読み取れる埋没地形と関係している可能性が高い（写真図版1）。付近のボーリングデータによれば、沖積層下部の砂礫層が大きな凹凸を見せており、この凸地由来の微高地では、比較的安定した居住が可能であったと推測される（Ⅲ章、第6図）。その中でも、水生資源の利用、トチノキ等の灰汁抜きや貯蔵に適した流路・谷付近を選地したようである。微高地は、下部砂礫層の影響で地下水位が低いため、木製品などの有機質遺物は得られなかったが、微高地縁辺から後背湿地に相当する遺跡東端・西端では、今後有機質遺物や水場遺構が確認される可能性もあろう。

ところで、このような沖積低地での遺跡形成過程は、全国的には周知されてきているが、三重県内の沖積地における層位的調査は、度会町森添遺跡⁽⁶⁾



第159図 朝見上地区遺跡群の縄文遺構・遺物分布

など土砂堆積量の多いごく一部の遺跡にとどまっている。また、土壌化層＝暗色帯＝遺物包含層という認識が強く、腐植が弱い黄褐色系シルト中に遺構・遺物がある状況が注目されることはなかった。

しかし、過去の調査事例の中でも、谷底平野の地表下約3mで被熱面や遺物集中がみられた堀之内遺跡⁽⁷⁾(松阪市、縄文中期)は、朝見遺跡と同じ遺跡形成過程が想定できる。また令和2年度に三重県埋蔵文化財センターが調査した、雲出川水系大村川の河岸段丘上にある岡遺跡(津市白山町)でも、黄褐色系極細砂のa層を除去したところで縄文遺構を検出しており、段丘上でも朝見遺跡と同様の調査事例が今後増加していくと思われる。ひいては、縄文後期の「大規模葬祭空間」か「大集落」か評価が分かれている⁽⁸⁾天白遺跡(松阪市)なども、遺構面(機能面)の土壌化という観点から再評価することが可能となろう。

②黒ボク土と縄文前半期の微高地

遺跡南東の3区では、基盤層中に黒ボク土とみられる暗色帯(黒褐色シルト)がみられた。縄文遺構が確認された第6次調査11区・12区付近でも縄文後期初頭の遺構面に黒色シルトが認められ、他に2次SE72の基盤層や、5次9区下層でも同層を確認していることから、暗色帯が5次3区から現和屋・立田集落に向かって、北西方向に細長く広がるとみられる(第159図)。

自然科学分析(V章)によれば、当該層には植物珪酸体が非常に多く含まれ、ササ類やキビ族、ウシクサ族が分布し、一帯には高燥な草原的環境が広がっていたとみられる。また、層中に広域テフラK-Ah(6,300BP)が少量含まれており、大まかな生成時期が推定できる。6次調査11区下層黒色シルト(91層)も植物珪酸体を多含、K-Ahを含み、土壌のC14年代測定で $6585 \pm 25\text{yrBP}$ (5611-5483calBC:2 σ)の年代が得られている⁽⁹⁾。したがって、縄文早～前期の温暖な気候のもと、安定した高燥な草原的環境ができ、黒ボク土の生成が進んだと判断される。その後、シルト・細粒砂の堆積と土壌化が並行して進み、縄文中～後期の遺構面が形成された。

朝見上地区遺跡群では、今のところ中期の咲畑式を遡る遺構・遺物は明確でないが、第5次7-2区で

大型の有茎鏃(1710)や風化度合いの強いサヌカイト剥片などが得られており、今後、朝見遺跡内で縄文時代前半の遺構・遺物が確認される可能性は高いといえよう。当地での低地への進出が、沖積平野の埋積とともに縄文中期以降活発化するのか、あるいは自然堤防や扇状地由来の安定した微高地上で、時に洪水の影響を受けつつも早くから集落が営まれたのか、今後も注視していく必要がある。

なお、この埋没地形が、縄文時代から現代に至るまで朝見遺跡の動向を大きく左右していることを改めて強調しておきたい。

③縄文時代の気候変動イベントとの関係

朝見上地区遺跡群の遺跡形成上大きな画期となる縄文中期末は、紀元前2300年頃から進行した急激な寒冷化と湿潤化の時期(いわゆる4.2～4.3Kaイベント)に相当し、その後後期前葉にかけて温暖湿潤な気候に変化していくとされている⁽¹⁰⁾。

今回、1区や6区の調査では、縄文中期中葉以降、特に縄文中期末ごろに砂・シルトの埋積が進行したことや、後期初頭から前葉にかけて安定した環境下で多くの有機物が供給され、黒褐色の古土壌(暗色帯)が形成されたことが判明している。朝見遺跡下層の堆積状況は、4.2～4.3Kaイベント以降の気候変動と、一見調和するようにみえる。

伊勢湾沿岸では、愛知県林ノ峰貝塚で黄褐色の中期遺物包含層(H層)上に後期の黒褐色遺物包含層(G層)が形成された例⁽¹¹⁾や、愛知県朝日遺跡で後期の遺物包含層(黒色土)が形成される事例⁽¹²⁾とあわせ、今後より詳細な検討が必要であろう。

平野の地理学的研究がある程度進んでいる雲出川や宮川流域と異なり、榎田川低地の形成過程は不明な点が多い。ボーリングデータの収集などを合わせ、弥生時代以前の地形環境や縄文海進/海退との関係を明らかにしていくことが課題である。(櫻井)

(2) 縄文中期末の土器について

IV章でも示したように、5次調査の縄文土器は、後期初頭の資料も少量含みつつ、その主体となるものは中期末に属する土器群であった。この土器群は、一部土坑やピット出土のものが含まれるとはいえ、多くが1区のSZ51046から出土している。SZ51046出土縄文土器は、遺物が集中した箇所縄文土器を

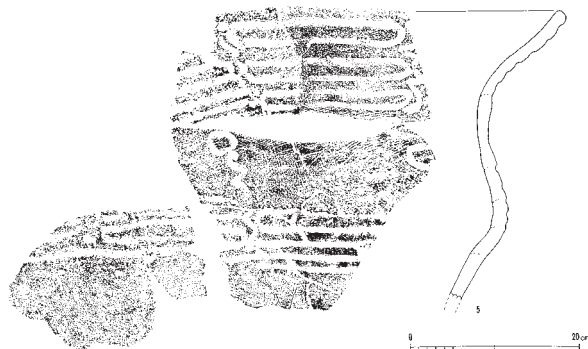
不明遺構（S Z）出土として取り上げたもので、型式学的に一時期（単一型式）の土器相とは言い難く、時期的な一括性には乏しい。

このS Z 51046 出土遺物も含め、第5次調査出土の縄文時代中期末葉土器群は、概ね北白川追分町遺跡で分離された北白川C式と器種組成や特徴で共通する部分が大きく、その範疇で考えると理解しやすい。そのため、本書においても、縄文土器の分類に当たっては「北白川追分町縄文遺跡の調査」で示された形式分類⁽¹³⁾を参考に土器分類を行っている。

しかし、一部においては、北白川C式ではあまり見かけない土器もある。これらは、北白川C式由来する土器というよりは、いわゆる東海西部系に属するとみたほうが理解しやすい。具体的には、深鉢Dとして分類した、口縁部文様に横沈線と横長楕円文を組み合わせて施文した平縁の有文深鉢がこれに相当する。

同類の土器は、津市大里西沖遺跡S H 15 出土縄文土器⁽¹⁴⁾のなかにも認められる（第160図、報告書5番の土器）。大里西沖遺跡の5は、口縁部だけでなく、肩部に配した縦方向の蛇行沈線に連結されて、胴部にも横長楕円文を基調とした胴部文様が配されている。大里西沖遺跡では、5と本書分類（第127図）の深鉢A 1類が相伴しており、時代が下るとともに深鉢Dは胴部や肩部の文様が消失し、口縁部文様帯に集約されてくるとみてよかろう。

こうした文様帯の変遷は、他の深鉢にも認められる。例えば、伊勢湾西岸の中期末深鉢の基軸となる有文の波状口縁深鉢である深鉢Aでは、口縁部に隆帯による渦巻区画文が時代が下がるとともに沈線化と主文様と従文様の分帯化を推し進めていくが⁽¹⁵⁾、完全に口縁部文様帯が分帯化し、文様も沈線化した



第160図 大里西沖遺跡S H 15 縄文土器5（註14）

深鉢A 4ではその下部に多重沈線による連弧文を配し（1347）、さらに深鉢A 5は主文様と従文様の規範自体が崩れ、多重沈線が口縁部文様帯にせり上がっていく動きをみせる（1348～1350）。

深鉢B類も、口縁部に橋状把手を配したB 1類（1373）のようなものが本来のものだったとみられるが、B 2類は橋状把手が凹点に置き換わって痕跡器官的な存在に変化し（1377～1380など）、B 3類では橋状把手の名残がさらに痕跡的になる一方、口縁直下に新たに無文帯が形成され（1375・1376）、B 4類では本来の口縁部文様帯が完全に消失して、新たに成立した口縁部無文帯の直下に胴部文様が接続するようになる（1386・1392など）。時間的な前後関係となるのか、併行関係にあるのかは今後の資料の増加を待って判断する必要があるが、その無文帯すら焼失し、胴部文様が口縁部までせり上がったのが深鉢E類ともいえる（1415・1416など）。

こうした文様帯の変遷、具体的には隆帯の沈線化、渦巻と楕円形区画が一体となった主文様の分帯化、多重沈線の発生などが関連しつつ、口縁部文様帯が上方へせり上がるとともに、最終的には退化・消失していく動きとしても捉えることができる。胴部文様の上方化は、この動きと連動したものであろう。

深鉢の型式変化を推し進めた動きは、鉢・浅鉢の類の動きにも連動するとみられるが、浅鉢は口縁部から底部まで全体形が判明するものが乏しく、全体的な評価は今後の課題としたい。（穂積）

（3）石器組成の特徴と評価

調査期間の制約もあって、小型の剥片石器は十分に回収できていないが、礫石器を中心に90点弱のまとまった量があり、地点ごとの石器組成を示す（第159図）。

朝見遺跡では打欠石錘とともに、磨石・石皿類が目立っている。より低地側の堀町遺跡は、打欠石錘が主体であり、漁撈への強い志向がうかがえる。朝見遺跡でも遺跡西側（6次11区付近）では、打欠石錘が多くみられ、付近の流路などで漁撈が行われたのであろう。両遺跡とも磨製石斧は少量で、打製石斧は少ない。

当地一帯は氾濫原や内水面、汽水域とのエコトーン（遷移的環境）であり、微高地上は疎林や草原的

環境が形成され、それらに即した資源獲得がなされたと予想される。一方、6次調査の低湿地型貯蔵穴が示すように、トチノキ・オニグルミ・イチイガシ(アカガシ亜属)など堅果類への食糧依存度は高かったようである。この点を反映して、朝見遺跡の石器組成は丘陵・段丘上の遺跡と大きく変わるところがない⁽¹⁶⁾。また打製石斧も少なく、現状では栽培植物への傾倒も看取できない。

なお、当地の植生のみで主食を賄うことは困難であったと予想され、森林資源の豊富な丘陵部との交易や、湖底・湖岸遺跡にみられるヒシの利用も想定しておきたい。朝見遺跡では自然遺物が得られていないため、土器の種実圧痕や残存デンプン粒などから植物食糧の利用状況を復原していく必要がある。

(櫻井)

2. 弥生～古墳時代の土地利用

(1) 弥生時代前～中期の空白期

弥生時代前～中期は、朝見上地区遺跡群および榎田川低地全体で遺構・遺物が非常に希薄である。6区埋積浅谷では、縄文時代後期初頭から前葉の遺物を包含する黒褐色シルト(第47区埋積浅谷4層)より上位は、細砂で急激に埋没し、その後弥生時代終末期まで遺跡の空白期となる。遺跡中央微高地上(和屋集落南)の第6次12-3区では、上層遺構の基盤層中(灰色細砂)に弥生時代中期中葉～後葉の壺体部片(土器4931)が含まれていた。このように縄文時代後期後半から弥生時代後期前半にかけては、朝見遺跡の微高地上においても砂・シルトによる埋積が進んでおり、年代こそ絞り込めないが、他の時代と比べ相対的に不安定な環境が生じた可能性がある。

伊勢湾沿岸では、雲出川流域や濃尾平野全体で河川の供給土砂量が弥生時代に増大したとされる⁽¹⁷⁾。また、近年の古気候研究では、伊勢湾沿岸の中期後葉(高蔵式期)以降、湿潤化と変動の激しい不安定な気候下で弥生集落の再編が進んだ可能性が指摘されている⁽¹⁸⁾。断片的ではあるが、遺跡の空白期についても重要な資料が得られたといえよう。

(2) 弥生時代終末期～古墳時代の生産域

弥生時代後期後半(山中Ⅱ式)、終末期(廻間Ⅰ

～Ⅱ式併行)以降は、溝や流路が認められ、主に生産域(水田)や墓域として開発が及んだとみられる(第161図)。集落の実態は不明で、古墳時代中・後期のピットが遺跡中央の微高地(6次調査12区)で若干確認されたにすぎないが、現状では現集落付近を居住域と推測しておきたい。

遺跡西部の4区・7区・9区には、幅約9m以上の自然流路が、弥生時代終末期から古墳時代後期にかけて微高地の縁辺を南東-北西に走っていたが、奈良時代までに埋没した。上流側の3区SD53002もこの時期以降、流路を浚渫して開削されたとみられ、長期にわたって維持されている。

遺跡東部では、2区でSD52004～52006など直線的な水路が古墳時代に開削され、SD52005・52016～018から分水、一帯に水田が広がっていたと推測される。SD52004を対象とした微化石分析の結果でも、イネ科や水田雑草を含む分類群の花粉、イネ機動細胞珪酸体が検出された(V章)。

朝見遺跡の溝等は、より上流側の琵琶垣内遺跡と概ね同時期であり、両遺跡の開発は連動しつつ進んだと考えられ、条里施工の前史として重要である。

(3) 方形周溝墓

今回の調査では5基の方形周溝墓を確認した。遺構の残りが悪く、認定に課題を残すものもあるが、これらも数に含めると、朝見遺跡の東側から隣接する瀬干遺跡にかけて確認された方形周溝墓は計15基となり、遺跡東部の1区・6区付近から瀬干遺跡にかけての微高地縁辺に墓域が展開していたようである(第161図)。また、遺跡中央北側の6次3区付近(SD63009)も墓域だった可能性がある。

検出した方形周溝墓の時期は、弥生時代後期後半のSX51042を除き、概ね濃尾平野の廻間Ⅰ式後半～Ⅱ式前半に併行する。周溝は、南側(瀬干遺跡は南東側)一方に陸橋部が開き、残存幅に比して深いのが特徴である。埋葬施設や墳丘は残存しない。

周溝出土土器は、有文赤彩・無文の広口壺や直口壺、高杯等で、重複遺構への混入ではあるが、内面に水銀朱が付着する高杯(118)もある。土器は大半が埋土上層からの出土であり、墳丘上から流入した土器の可能性が高いといえよう。

なお、SX51017では古墳時代前期後半、SX



第161図 弥生・古墳時代の遺構分布 (1:6,000)

56027 では7世紀代の土器が上層から出土しているが、S X 56027 上層の遺物出土状況は、7世紀においても方形周溝墓が認知され、儀礼ないし祖霊祭祀の対象であったことを窺わせる。

朝見遺跡が所在する和屋町には、明治末年に7基の古墳(塚)が存在し、その一つが6区に北接する「面塚」であると伝えられる(Ⅱ章)。しかし、6区付近では古墳時代の遺構は皆無であることから、7基の「古墳」に、弥生時代の方形周溝墓が含まれていた可能性がある。

3. 平安時代の遺構と遺物

(1) 平安遺構の分布と時期

飛鳥・奈良時代は、若干の遺構・遺物が散在するものの、本格的な開発は平安時代に入ってからである。既報告分の調査では、特に9世紀後半から10世紀前半にかけて、井戸や溝から緑釉陶器、大量の志摩式製塩土器などの特殊遺物が多くみられた。

今回の5次調査でも、掘立柱建物などの主要な遺構は、9世紀以降、特に齋宮編年のⅡ-3~4段階、灰釉陶器はK90~053号窯式に位置づけられ、9世紀後半~10世紀前半(平安時代前~中期)に集中している。緑釉陶器の優品や石製銚帯など、朝見遺跡で「官衙的」といえる遺構・遺物の大半は、この時期のものである。

当該期の掘立柱建物は、ピット掘方が方形、一辺約1mと大型、桁行4間程度で庇付きもみられる。こうした大型建物は、他に5区北、6区、7-1区、7-2区、9区で確認されている。建物が所在する区画外は遺構の空閑地であるが、深い谷などの大きな地形変化もないことから、空閑地は耕地や水路帯、農耕用牛馬の放牧地であったと推定しておきたい。このように、本次調査の結果、耕地等とみられる空閑地を挟みながら、方六町を超える広大な遺跡の各所に、複数の建物区画や水辺の祭祀場が展開していたことが判明した(第164図)。さらに、馬の存在(殺牛馬祭祀)や櫛田川分流の名残川の存在、2次・6次調査における製塩土器の集中的な出土も勘案すると、物流や水陸交通のセンターも域内に含まれていたとみられる。

平安後期(齋宮Ⅲ期、10世紀後半)以降は、主に9区で遺構・遺物が多くみられ、7-1区にも建物が展開しているが、規模は2×3間程度の小規模なものが中心で、関与した経営主体や遺跡の性格に変化が生じたことが考えられる。また、1区、6区ではこの時期の遺構が明確でなく、遺跡中央から西に建物の分布が偏るようである。

(2) 大型掘立柱建物の評価

①遺構の変遷と条里プラン

7-1区で大型掘立柱建物(S B 57041)を含む建物群が見つかり、付近は遺構の変遷が非常に明解であるため、詳細にみていきたい。

掘立柱建物群は、南北方向の小溝群にはさまれた区画内(東西約50m)に配されており、条里地割とは異なる正方位寄りの地割が存在したと考えられる。区画の東西幅は、条里の半町とも若干異なっている。

この地割方位は、当地の自然流路や微高地の形状に左右されたものと考えられ、微高地の両縁辺に区画溝が掘削されたのであろう。区画溝の外側にはほとんど遺構がなく、東・西に約60m離れて建物群が展開する(6区、7-2区)。

調査区内で建物は大きく3期の変遷が想定でき、1期は遺構の切り合いから、さらに2段階に細分が可能である(第162図)。

・1-a期(平安時代中期、10世紀前半)

最も大型のS B 57041が建てられ、建物の主軸は区画溝に近い方位をとる。同時期の付属建物は明確でなく、調査区外の南側に存在した可能性がある。

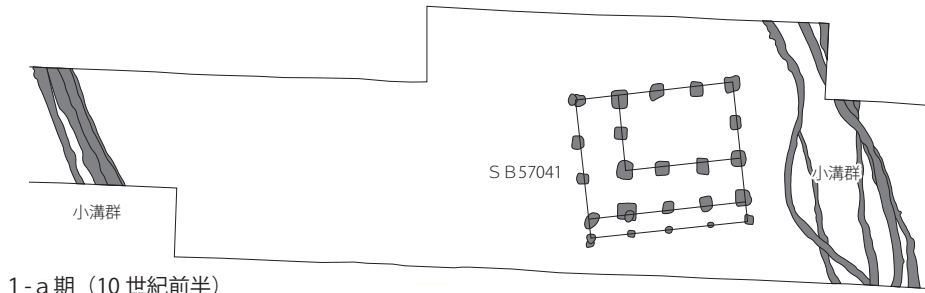
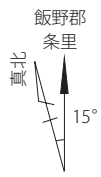
なお、S B 57041出土遺物からは明確にできないが、他地区の大型建物の動向や、1-b期との時期差を考慮すると、区画内の建物造営自体は、9世紀後半まで遡る可能性もある。

・1-b期(平安時代中期、10世紀前半)

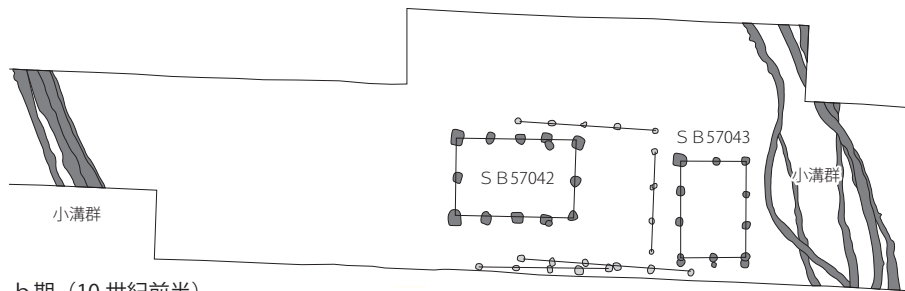
S B 57041廃絶後、同じく大型のピットをもつ側柱建物S B 57042・57043と、S B 57042を囲む柵が建てられる。建物の方位は区画溝の方位と異なり、条里方向をとる。見えない条里プランが意識されていた可能性が高い。

・2期(平安時代後期、10世紀後半~11世紀)

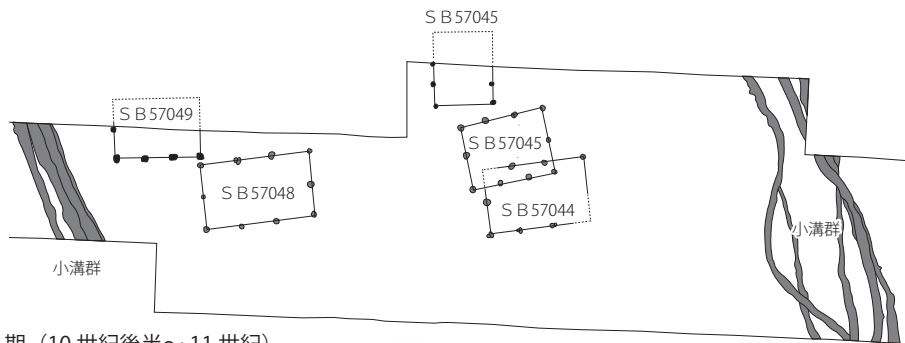
S B 57044など、2×3間、小型ピットの小規模な建物からなる。建物の方位は条里方向と、やや振



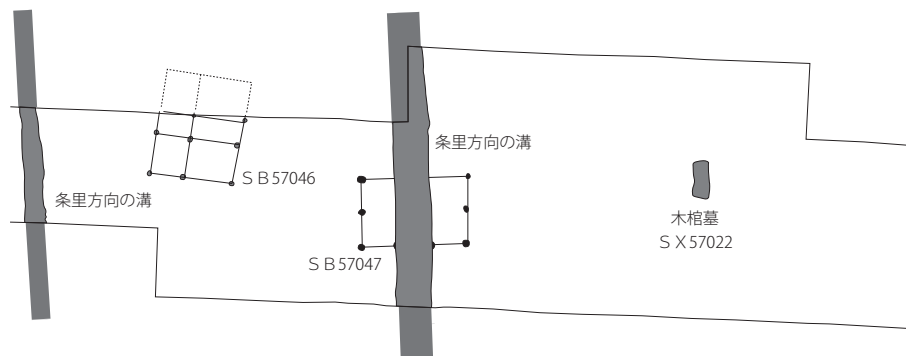
1-a期 (10世紀前半)



1-b期 (10世紀前半)



2期 (10世紀後半～11世紀)



3期 (12～13世紀)



第 162 図 7-1 区大型建物 S B 57041 付近の遺構変遷 (1:500)

れるものがあり、2段階程度の細かな変遷が想定されるが、建物の前後関係は明らかにできない。

・3期（中世Ⅰ～Ⅱ期、12～13世紀）

中世の総柱建物S B 57046や、2×3間のS B 57047、条里方向の溝、木棺墓がある。条里方向の溝はS B 57047廃絶後に掘削されている。7-1区では、他にも戦国期の条里方向の溝が確認された。

以上のように、当該区画では、当初条里プランは意識されておらず、他の調査区でも大型建物の方位は地形に即した正方位に近似することが多い。1-b期の建物建て替え以降、飯野郡条里プランに即した建物が出現することがわかる。中世に至ると、溝（水路）、建物、墓ともに、条里プランを明確に意識しているようである。

②建物の類例との比較

区画内で最も大型のS B 57041（10世紀前半）は、朝見遺跡で最大の建物でもあり、3間×2間の身舎に南・西側の二面庇、さらに南側に縁束・添柱ないし孫庇が付く。ピットは一辺約1mの方形で、当該期の建物柱穴としては斎宮や国庁に匹敵、あるいはそれ以上の規模である。一方で、柱痕跡は直径約25cmで、掘方の大きさからすると柱は特別に太いとはいえず、実用性の高い建物であったとみられる。

出土遺物は墨書土器714や緑釉陶器が目目されるが、他方で土錘や志摩式製塩土器が出土しており、漁撈などの実務にも関わる建物と推測される。土錘や志摩式製塩土器は、9区のピットからも多く出土しており、朝見遺跡の平安時代前～中期の建物に広く共通する要素といえよう。

さて、県内を対象に、平安時代の荘所や耕地開発拠点の居館に相当する建物⁽¹⁹⁾を概観すると、二面庇以上の建物を有する遺跡では、緑釉陶器を多く保有する傾向があることから、特にそれらと比較する（第163図）。柱筋内の占有面積により建物規模を比較すると、庇の有無と面積が概ね対応し、三面庇を超えると、占有面積が100㎡を超えるようになる。朝見遺跡S B 57041は二面庇であるため、占有面積からすると、六太B遺跡S B 45（三面庇）、位田遺跡S B 5（三面庇+孫庇か縁）をやや下回る規模となる。カウジデン遺跡S B 5は、付近に展開した東寺領大国荘との関係も考えられる建物で、四面庇の

非常に大型の建物である。こうした事例から、S B 57041は一般建物より大型ではあるものの、居館として特段に規模や格式を有するとはいえない。庇・縁のある南側に別の主屋（中枢施設）が存在し、その付属建物であった可能性もあろう。また、正規の地方官衙の主要建物のように、同位置で建物が建て替えられ、長期間存続することはなかった。

以上から、S B 57041は古代・中世の荘園関係資料で「田屋」「荘所」などと呼ばれる、耕地経営の拠点（居館）ないし付属建物に相当すると考える。一方で、当該期には異例ともいえる大型ピットをもつ背景には、官衙や寺院造営にも関与した技術者の関与や工人集団の編成を想定する必要がある。

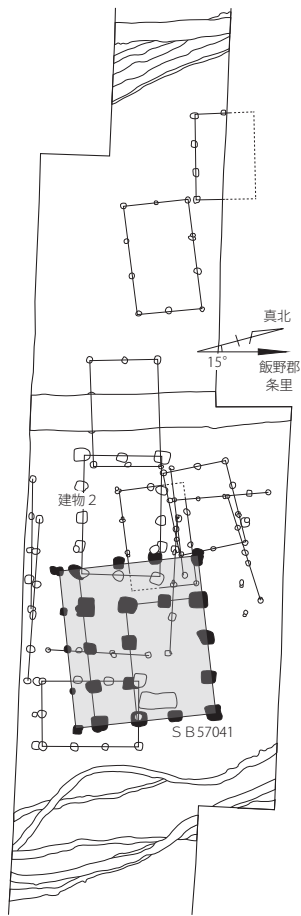
（3）水辺の祭祀と水路

①青銅鏡の評価

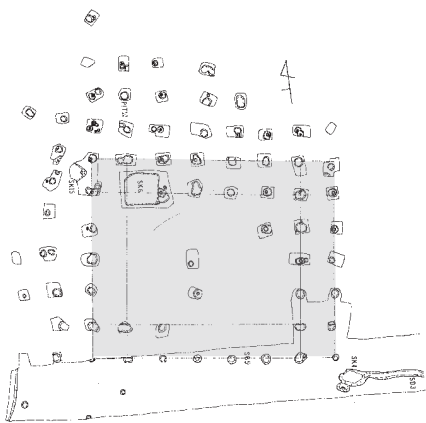
3区S D 53002の上面で青銅鏡が2面（瑞花円鏡・瑞花双鳥八稜鏡）出土した。鏡はともに鏡面を上にしており、ほぼ原位置を保った状態と判断され、水辺の祭祀や儀礼に用いた儀鏡と考えられる。他に祭祀等に関わる遺物は得られていない。埋土の状況から有機質遺物はすべて腐食した可能性が高いが、墨書土器などが集中する様子もなく、単発的・スポット的な祭祀であろう。なお下層からも素文鏡が出土したが、時代が異なる流入遺物の可能性が高い。

S D 53002上層出土土器は9世紀から鎌倉時代まで幅をもつが、鏡の製作年代は2面とも10世紀後半である。また、瑞花円鏡（212）は鑄込み後の粗い研磨痕が残っており、長期伝世なく供献された可能性が高い。よって、鏡の製作年代と同じ、10世紀後半（平安時代後期）を鏡供献の時期とみておきたい。流路や溝から鏡が出土する事例は大阪府大園遺跡などがあるが、祭祀の目的を具体的に示す例としては、溝の取水口付近に素文鏡・重圈鏡など3面を捧げた香川県居石遺跡の例が目目され、安定的な水供給が祭祀の目的と考えられている⁽²⁰⁾。水利との関係で注目されよう。また、大阪府五反島遺跡の渡し場の橋脚下など人の往来や土地の境界に供えたとされる例⁽²¹⁾も、視野に入れておく必要がある。

3区付近は水利上、遺跡東部（1・2区方面）と遺跡西部（8・9区方面）への分水点にあたる重要地点で、下流側（北西約1km）には溝から緑釉陶器



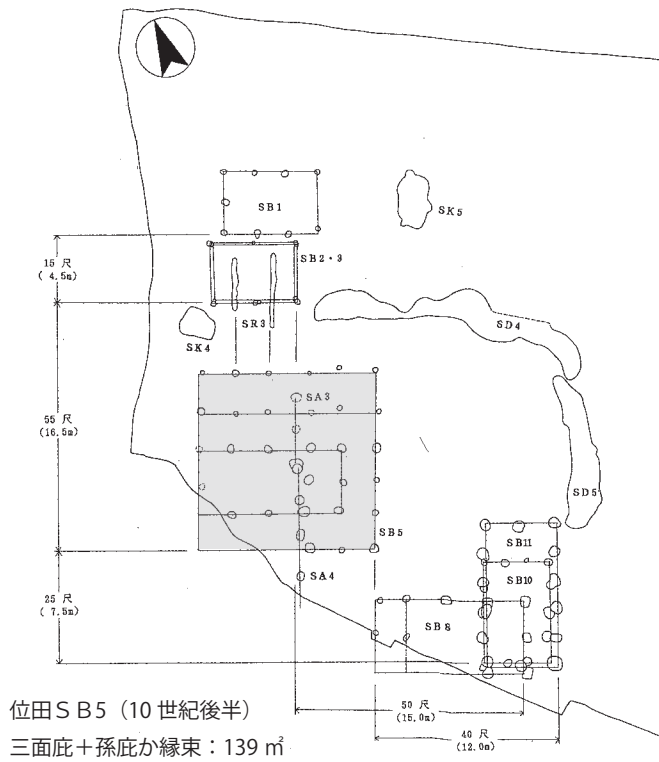
朝見5次SB57041
(10世紀前半)
二面庇+縁束か孫庇：94㎡



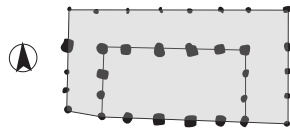
カウジデンSB5 (11世紀～)
四面庇：219㎡

参考：齋宮柳原地区

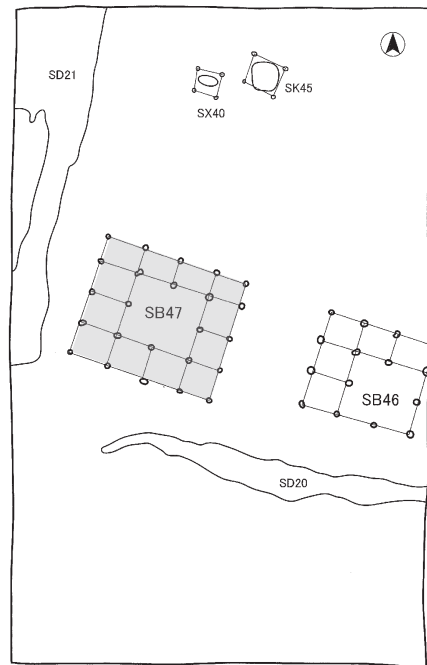
- 「正殿」SB9800 (四面庇：100㎡)
- 「西脇殿」SB1080 (三面庇：170㎡)
- 「東脇殿」SB9003 (片庇：86㎡)



位田SB5 (10世紀後半)
三面庇+孫庇か縁束：139㎡



六太B SB45 (9～10世紀)
三面庇：112㎡



大蓮寺SB47 (10世紀後半)
四面庇：80㎡



が大量に出土した2次調査地がある。

S D 53002 は幅約6m、深さ1mで、微高地の西側を北西方向へ流れる大溝である。弥生時代終末期～古墳時代や飛鳥・奈良時代の遺物も層位的にみられ、連綿と受け継がれた基幹水路であった。鏡を献じた平安後期には、シルトで大半が埋没しており、ごく浅い溝であった可能性が高い。

この状況から、鏡は渇水期の水乞いや雨乞い、あるいは雨期の河川氾濫など水害を鎮める祭祀に用いられたと推測される。他に豊穰祈願なども含め、広く農耕に関わる祭祀の可能性を第一に考えておきたい。耕地に水を供給する水路で、貴重品である鏡を用いた祭祀が行われたことは、遺跡の性格をより明確にするものといえよう。

なお、樹木年輪セルロースの酸素同位体比を中心とする近年の古気候研究では、10世紀中葉は少雨と高温の夏が数十年続く危機的状況にあったが、10世紀後半にかけて降水量は回復していくとされる⁽²²⁾。こうした数十年周期の気候の変動期にあたることも背景に想起しておく必要がある。

②水辺の祭祀と水路

朝見遺跡では、他にも遺跡西部の6次3区で古代の八花鏡片が出土しており、古代の鏡は計4枚となった。八花鏡は中世溝への混入であるが、水路が集中する遺跡西側で鏡が出土した点が重要である。

1・2次調査では、溝・流路や井戸の儀礼・祭祀の場が複数認められ、平安前～中期の堀町遺跡でも、これらの溝・流路の延長で、斎串などの木製祭祀具や多くの墨書土器が出土している。

朝見上地区遺跡群の平安期集落において、朝見遺跡南東から朝見遺跡西、堀町遺跡に至る溝・流路が、水辺の祭祀場としても重要な役割を担ったのである。

③緑釉陶器と鏡

朝見遺跡では、2次調査で271点の緑釉陶器が出土しており、緑彩・陰刻花文・唾壺など斎宮跡に比肩する優品がみられた。5次調査の緑釉陶器は、出土数は8点とさほど多くないが、椀・皿以外に把手付瓶などの高級什器が含まれ、豊富な緑釉陶器の一端が垣間見える。また、中坪遺跡では香炉、瑞花円鏡・瑞花双鳥八稜鏡が出土した3区東に接する大蓮寺遺跡でも、陰刻花文の緑釉陶器が出土している。

緑釉陶器の生産・流通には、淳和院などの院宮王臣家とその家政機関が介在した可能性が指摘されており⁽²³⁾、陰刻花文や緑釉緑彩などきわめて優秀な緑釉陶器を有する平安期朝見遺跡の経営主体も、これらと結びつきのある院宮王臣家や斎宮寮上級官人、伊勢国司、有力貴族・寺社、神郡である飯野郡を統治した伊勢大神宮司などが想定される。

これに加えて、信濃の牧経営に関わる長野県吉田川西遺跡⁽²⁴⁾（10世紀後半）のように、多量の緑釉陶器とともに複数の八稜鏡を保有する遺跡があることも注目したい。平安時代八稜鏡の主要な生産地は平安京内である。緑釉陶器と鏡の生産・流通は、直接結びつくものではないが、一部は院宮王臣家も関与した複数の奢侈品にアクセス可能な経営主体という点で、吉田川西遺跡の事例は重要である。斎宮跡で平安時代の八稜鏡が複数出土していることも改めて注目されよう。朝見遺跡の緑釉陶器の主体（平安時代前～中期）と、今回出土した鏡の時期（平安時代後期）はやや異なるが、一応注意を喚起しておきたい。

（4）平安時代の墨書土器

①「平」の墨書土器

朝見遺跡では、遺跡西部の2次調査で、溝から「美」「成」など吉祥句を記した墨書土器が130点出土している。今回の調査では、6区、7-1区の建物群、8・9区で墨書土器が15点出土した（第15表）。「平」を記す例が複数認められ、S D 58018「平成」やS B 57041ピット埋納遺物に「保平カ」がある。

第15表 第5次調査墨書土器一覧

番号	器種	調査区	遺構	時期	墨書
375	杯	4	S E 54031	Ⅱ-4 10C前半	□
456	杯	6	S E 56006 井戸枠内	Ⅱ-4 10C前半	七西井
655	杯カ	7	S E 56006 井戸枠内	平安	美カ
714	杯	7	SB57041-P16 掘方	Ⅱ-4 10C前半	保平カ
717	杯	7	SB57041-P5	Ⅱ-4 10C前半	□
805	杯カ	7	SA57068-P1	平安	十カ
845	杯カ	8	S D 58016	平安	十カ
876	杯	8	S D 58018	Ⅱ-4 10C前半	平成
877	杯カ	8	S D 58018	平安	乃カ
878	杯カ	8	S D 58018	平安	平
879	杯カ	8	S D 58018	平安	大
994	杯カ	9	S D 59027	平安	□平
995	杯カ	9	S D 59027	平安	□平
1130	杯カ	7	ツ-J14Pit4	平安	□
1131	杯カ	7	ツ-J14Pit4	平安	□

「平」は堀町遺跡にも「承平」「仁平」「南平」の例があり、一字目は様々で二字目に「平」を記すものが多い。いずれも平安前～中期の土師器杯で、水辺の祭祀に伴う遺物と考えられる。堀町遺跡（第6次）の報告書で類例を詳しく検討しているが、二文字目に「平」を記すものは全国的にも少なく、三重県内では斎宮跡などに若干例があるが、基本的には朝見上地区遺跡群の集団内に共有されたローカルな吉祥句と推測されている⁽²⁵⁾。ただし、朝見遺跡2次では「平」はみられず、地点ないし遺構ごとで様相が大きく異なる点も注意される。

吉祥句の意味は一義的には理解しがたいが、「平らか」に成る、の意を含めたものであろうか。

なお、「承平」「平成」は元号にもなる語であり、元号の典拠となる漢籍や古典の教養を持つ人物が、文字使用に関与した可能性も考えられる。

②「七西井」の評価

6区S E 56006で出土した墨書土器「七西井」(456)は、条里制との関連で注目される文字資料である。斎宮Ⅱ-4段階（10世紀前半）の土師器皿に野太く筆記し、字体は稚拙である。井戸枠痕跡内（井戸枠は腐食し消滅）上層から出土し、井戸廃絶時の儀礼や祭祀に伴う土器とみられる。

史料上、「七西井」に似た表記では、「地名+井」で井堰・溝の名前を示した例がある。伊勢国東寺領大国荘に関する康和5（1103）年の「東寺領伊勢国大国荘損田注進」に「永田井溝」「川原井溝」の用法がみられ、保安2（1121）年榑田川洪水に関する「大国荘流出田畠注進状」では、堰長（田堵）らが「堰溝」の被害を訴え出ている⁽²⁶⁾。

これらの史料では、「井」＝井堰・溝を指すことから、6区付近に「七西井溝」と呼ぶべき井堰・溝が存在し、その管理に6区掘立柱建物群の居住者が関与した可能性があろう。

他に、朝見遺跡は飯野郡復元条里で七条・八条の境界付近にあたることから（第164図）、七条に由来する地名「七西井」を表す可能性や、「飯野・飯高郡条里絵図」（沢氏古文書）で「一宮田」「二長田」「六麻生」など数字と地名を組み合わせる条里坪付を表す用法から、「七」+「西井」で条里坪付を示したことも考えられる。この場合、条里施工や坪並呼称

が、10世紀までには付近にある程度浸透していたこととなる。

大きくはこの三用例が候補にあげられ、いずれの場合も10世紀段階における一帯の開発や、条里施工の進展度を考える上で重要であるといえよう。

4. 条里地割と開発

（1）条里施工の年代と段階

①条里施工が大きく進展した時期

条里施工の前史として、弥生時代終末期～古墳時代には、付近の耕地開発が榑田川分流の名残川を中心として、ある程度進んだことが判明したが（2節）、朝見遺跡の飛鳥・奈良時代の遺構の希薄さからは、古墳時代以降の耕地開発が、右肩上がりでも進展したとは考えられない。

既往の調査では、条里の坪境溝の掘削時期や花粉分析の結果に基づき、11世紀以降に一帯の条里施工が大きく進展したとしている⁽²⁷⁾。水利に伴う溝は、長期存続するため細かな時期変遷を明らかにできないが、5次調査でも条里の地割に即した溝、現行坪境溝の前身遺構は、平安時代後期～末以降に開削されたとみられ、1・2次調査の所見を追認した。

第162図に示した7-1区の建物の変遷からも、平安時代末以降、微地形の起伏を克服するかたちで、条里に沿った直線的な水路が網羅されるようになったとみられる。また、堀町遺跡においても、平安時代後期に集落が大きく再編され、中世には微高地上にも条里方向の溝が及ぶようになる。

第Ⅱ章でみたように、「飯野・飯高郡条里図」（沢氏古文書）の成立が13世紀に遡るならば、13世紀までに条里坪並とその基準線となる坪境溝は、海岸付近まで広がっていたこととなろう。

②平安時代前～中期の条里施工

一方、朝見遺跡の最盛期である平安時代前～中期では、掘立柱建物の主軸方位を見る限り、見えない条里プランがある程度意識されていた可能性が高いが、自然の微地形も依然影響しており、条里プランが貫徹されたとは言い難い。大型建物がみられる堀町遺跡では、平安前～中期の建物は条里方向を志向しており、朝見遺跡とほぼ同じ状況といえる。見え



第 164 図 平安時代の空間利用 (1:6,000)

ない条里プランへの意識や、墨書土器「七西井」は、付近に条里地割が及んでいた可能性を示唆する。

ただし、この時期の朝見遺跡内の溝は、蛇行するもの、S字状の屈曲、緩やかなカーブを描くものが多く見られ、走行方向も一定でない。特に小型の溝（例えば、1区SD 51003～51005、9区SD 59002など）はその傾向が強く、いわゆる半折型や長地型といった古代、特に律令期の条里制に典型的な短冊形地割を読み取ることは困難である。むしろ、榎田川分流の名残川を中心に、自然の微起伏と水回りを巧みに取り入れた弥生・古墳時代以来の耕地開発と水田経営が、平安時代の朝見遺跡内では一般的であったのではないだろうか。

遺跡内は大きくみれば微高地にあたるため、遺跡外の低湿地とは様相が大きく異なる可能性があるものの、大型掘立柱建物が空地を挟んで展開する遺構分布のあり方から、遺跡内の開発はモザイク状に進展し、方格条里施工はごく限定的、あるいは早くに限界に達したと推測されるのである。加えて、基幹水路となる名残川の涵養量には限界もあり（V章）、水の広域的な供給や、旱魃への対応には潜在的問題があったことも考慮する必要がある。

多気・飯野両郡にまたがる9世紀段階の東寺領大國荘の内部には、広大な空地や川成荒地、桑畠などが含まれていたことも参考になろう⁽²⁸⁾。

③朝見遺跡における条里施工の諸段階

現時点で判明した事柄から、朝見遺跡における条里施工の諸段階をまとめておく。

弥生時代終末期～奈良時代 条里施工の前史で、榎田川分流の名残川を中心に、耕地開発が及ぶ。

平安時代前～中期 建物の方位から、見えない条里プランが存在、墨書土器「七西井」など、付近に条里地割が及ぶ可能性はあるが、遺跡内では不明確。

平安時代後期～末 大型建物は退転し、建物は小型化するが、条里坪境溝の掘削、地割内に条里方向の溝が掘削されるなど、条里施工が大きく進展した段階。13世紀には、条里絵図にある条里坪並が完成しつつあると推測され、現在に至る。

(2) その他の生業・生産

耕地開発、水田経営以外の生業・生産に関する事項をまとめておく。

漁撈 平安時代を通じて、大型建物の柱穴などから土錘が出土している。特に遺跡西部の9区に多く見られ、河川や溝、水田での網漁が重要な生業であったとみられる。荘園や勅旨田の経営に漁撈が深く関わることにはつとに指摘されており⁽²⁹⁾、この点も遺跡の性格を知る上で重要といえよう。

鍛冶・鑄造 各調査区で、鞆羽口や溶解炉の炉壁片、小型の椀形滓がみられ、遺跡各所の建物群に付随して、農具等の維持管理や小規模な出吹きがなされたと推測される。東南に接する大蓮寺遺跡でも鍛冶・鑄造関連遺物が若干みられる。

堀町遺跡では、飛鳥時代に鍛冶滓が集中するエリアがあるが、朝見遺跡内では今のところ工房区と断定しうる遺物集中エリアは確認できない。

製塩土器 9～10世紀の志摩式製塩土器が2次・6次調査で大量に出土しており、日常の食事や儀礼に用いる以上の需要があったようである。本次調査でも掘立柱建物のピット中などに製塩土器がみられた。

朝見遺跡が、塩の流通に関わる集散地だった可能性も想定されるが、製塩土器は遠隔地で出土することが多く、堅塩の外容器として運搬、廃棄されたとみられる。基本的には、当地で塩が大量に消費されたと考えるのが妥当であろう。

食事以外の塩の用途は三つ想定⁽³⁰⁾され、第一が農耕用牛馬の塩分補給である。製塩土器が特定の地区に集中する状況から、塩あるいは使用対象の牛馬は、遺跡中枢付近で管理されていた可能性がある。第二は、古代伊勢道に近い立地から、馱馬や伝馬の備蓄・管理が考えられる。今回の調査では、平安時代の微高地上の植生を示すデータは得られていないが、縄文時代の基盤層の状況（1節）を援用すれば、高燥な草原的環境や、流路帯に囲まれた閉鎖的空間を利用し、小規模な備蓄牧が展開した可能性がある。第三は、皮革生産（皮鞣し）に伴うもので、発掘調査で具体的な資料は得られていない。

朝見遺跡の製塩土器の出土量は、3節でみた県内他遺跡の出土量を圧倒している。これは、複数の拠点で複合した経営の規模によるか、農耕用牛馬の飼養にとどまらない遺跡の機能を有したかのいずれかで、現状では複数の可能性を示すにとどめたい。

(3) 中世の集落

今回の調査では、6区に中世の井戸や土坑、7区に小規模な建物や木棺墓はみられたが、全体的に遺構は希薄である。既報告分の調査成果も考慮すると、特に立田集落の南側に中世前期の集落が展開したと考えられる。中世参宮街道沿いの立田(旧立利村)は史料上、村落として早くに名がみえるのに対し、和屋は実態が不明であることから、立利村からの分村や出作地であったかも知れない。

室町時代以降は、立田・和屋ともに現集落付近へ集村化したとみられる。

(4) 気候変動との関係

① 9～10世紀の乾燥・温暖化

承和14年(847)の櫛田川洪水は、櫛田川流域に甚大な影響をもたらしたが、平安時代の前半期(9～10世紀)は、全体として乾燥・温暖化が進む時期であり、旱魃への対応が重要な課題であった⁽³¹⁾。

朝見遺跡の本格的な集落形成はこの時期にあたり、堀町遺跡でも9世紀代の大型建物がみられる。また、弘仁3年(812)年には布勢内親王の墾田が東寺に施入、大国荘が立荘される。このように櫛田川中・下流域で低地の開発が進む背景には、旱魃に伴い新たな耕地や水系の確保が求められたことや、乾燥により未開の低湿地開発が可能になった等が想起される。『万葉集注釈』に「已に渚は江湖と化されり」(平安頃か)と記された、櫛田川河口部の的形(潟湖)の湿地化・陸化も上記と連動していよう。

続く10世紀中葉頃には、高温乾燥の夏が数十年続く危機的な気候となり、農耕や灌漑水利に甚大な被害を与えた可能性が指摘される。朝見遺跡・堀町遺跡の大型建物・奢侈品・祭祀関連遺物は、10世紀後半に存続せず、遺跡の経営主体に大きな変化が生じたと推測される。遺跡の盛衰と気候変動の間には様々なファクターが関係し、直接的な影響関係は慎重に判断しなければならないが、現状では、気候変動の動向と特に矛盾しない。なお、平安後期(10世紀後半～11世紀前半)は、朝見遺跡よりも下流側の堀町遺跡で、より生活の痕跡が濃密である。

② 11世紀以降の気候変動と地域社会

11世紀以降、気候は反転し、短期的な変動を繰り返しながらも、長期的には15～16世紀まで一貫

して湿潤・冷涼な気候に変化していった。

平安後期以降、朝見遺跡の経営主体に大きな変化が生じたと推測されるが、一方で、その後も条里施工は進み、平安時代末以降、本格化するに至る。

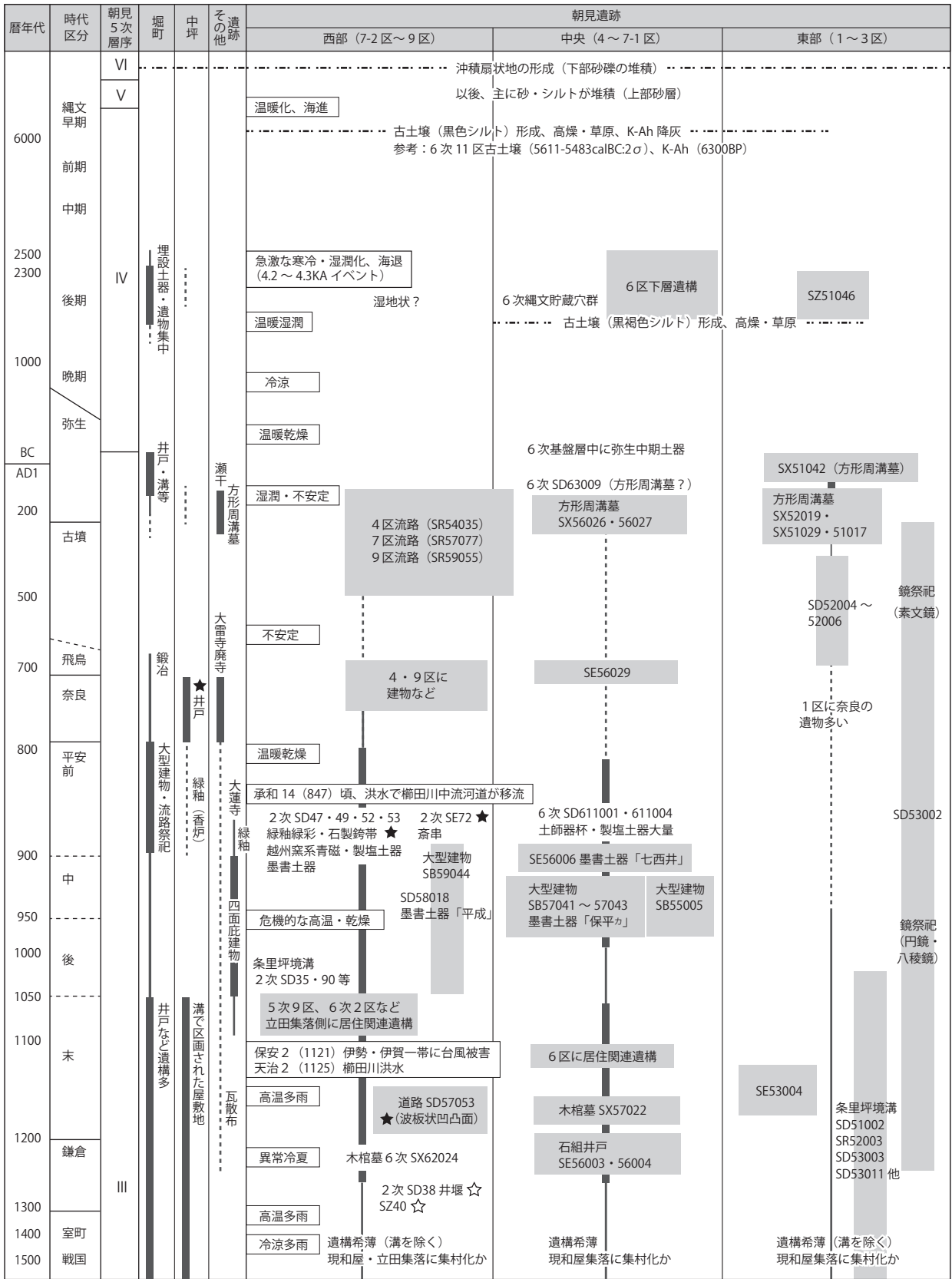
この遺跡の変質を考える上でも、東寺領大国荘の動向が参考になる。11世紀以降、気温や降水量が激しく変動し不安定となる中、大国荘では保安2年(1121)の台風、天治2年(1125)、宝治2年(1248)洪水など水害が多発した。保安2年(1121)の水害においては、田堵や郡司、神宮権禰宜など様々な在地勢力が溝や井堰の復旧にあたったこと、天治2年(1125)洪水では、耕地被害の大きさにも関わらず死者が少なく、水害に対する知識や備えが蓄積されていたこと、堰長や荘外住人が結託し、溝の復旧と同時に寺領を掠め取るなど既得権益の伸張をはかったことが知られる。水害を前提とした耕地経営がなされ、水害復旧を契機に地域社会や村落の再編が進み、東寺の支配力は低下していった⁽³²⁾。

朝見遺跡の建物や出土遺物の変質、平安時代末以降の盛んな溝掘削も、上級勢力の退転、在地勢力が主導権を握っていく過程として理解できる可能性は高いといえよう。かかる点では、平安後期～末の道路遺構(SD 57053 波板状凹凸面)に見られた馬歯の埋納は、古代律令国家が規制した殺牛馬祭祀が、中世前期の地域社会に存続したことを示すとともに、開発の基層を担った在地勢力の存在を表していよう。

さらに、朝見遺跡付近の名残川の涵養量は高くなく、旱魃には苦慮した可能性が高いが、水害が頻発する時期には、櫛田川右岸に比べて安定的な耕地経営が望める環境にあった(V章)。流路・溝の埋土は礫を含まない細砂やシルトで、水害の復旧や水路の改修も比較的容易であっただろう。このような周辺環境の特質が、11世紀以降の気候変動や地域社会の変化に適合した結果、朝見上地区遺跡群一帯の条里施工が活発化したと結論づけておきたい。

5. 朝見遺跡の特質

これまでの総括に基づき、第165図に縄文時代～中世の朝見遺跡の土地開発史をまとめ、合わせて朝見上地区遺跡群および周辺遺跡の動向を記した。



第 165 図 朝見遺跡の土地変遷史

以下では、平安時代、特に9世紀後半～10世紀前半の朝見遺跡について、現状判明していることをまとめておきたい。

(1) 朝見遺跡の諸属性

建物 一辺1mの方形ピットをもつ大型建物が、空閑地を挟みながら各所にみられる。三面・四面庇建物は未検出である。建物は短期間(土器1型式程度)で廃絶、規模を縮小させる。

奢侈品 初期貿易陶磁、多量の緑釉陶器(緑彩、陰刻花文、唾壺、把手付瓶等)など、齋宮跡に匹敵する格段の内容を持つ。隣接する中坪遺跡は緑釉香炉、大蓮寺遺跡は陰刻花文椀がみられる。

官人層の関与 石製鎗帯、大量の墨書土器、朱墨のある転用硯など、実務官人が文書事務など経営に関与か。堀町遺跡でも風字硯が出土。

宗教施設 朝見遺跡では不明確だが、南に大雷寺廃寺が所在、同寺の瓦が広く散布する。平安後期には大蓮寺遺跡に四面庇など庇付建物が複数みられ、有力者の居館ないし宗教施設の存在が想定される。

水辺の祭祀 井戸や溝から齋串や形代が出土。井戸や溝での殺牛馬祭祀。平安時代後期には水辺の鏡祭祀がなされ、他にも古代の鏡を保有。堀町遺跡でも、遺跡全体に水辺の祭祀(祓所か)がみられる。

その他 鍛冶・鑄造関連遺物、大量の志摩式製塩土器が出土。製塩土器は牛馬の使役や馬の備蓄牧と関係するものか。運河、物流や手工業生産のセンター機能を有する可能性もある。溝や掘立柱建物からの土錘出土から、漁撈にも一定の比重が置かれていた。

(2) 遺跡の性格と経営主体

朝見遺跡は性格や経営主体を確定する文字資料を欠いているため、現状では、様々な可能性を残しておくべきである。それでも、5次調査の結果、主な可能性は絞られてきたように思われる。

当遺跡では、耕地等とみられる空閑地を挟みながら、方六町を超える広大な遺跡の各所に、複数の建物区画や水辺の祭祀場が展開していたことが判明した(第164図)。こうした遺構の空間分布は、郡衙など正規の官衙にはみられず、むしろ東大寺領横江荘(石川県)に代表される大規模な古代荘園で、宇野隆夫氏が「有力寺社主導2型」として類型化するものに近い⁽³³⁾。その特徴は、数町の規模を有し、

中枢部の周辺に複数の荘所(各荘所は方一町に収まる)を編成、域内に宗教施設や船着場などの交通関連施設、工房区を包摂するところにある。

さらに、堀町遺跡、中坪遺跡、大蓮寺遺跡、大雷寺廃寺の動向も朝見遺跡と連動しており、櫛田川下流左岸の名残川を中心とした広大なエリアが、開発の対象であった可能性が高い。

以上から、朝見遺跡は郡衙等の地方官衙・下級官衙ではなく、荘園や勅旨田に類する大規模耕地開発・経営の拠点として評価するのが妥当と思われ、その成立や経営に、齋宮や飯野郡などの公的機構や実務官人層が関与した可能性が想定できる。

延喜2年の荘園整理令(902年)は、院宮王臣家による山川藪沢の占有禁止や、勅旨田・臨時御厨の停止、院宮・五位以上の官人による閑地荒田の買得などを禁止するが、朝見遺跡はまさにこのころに顕在化する遺跡である。ただし、時期的には律令国家から王朝国家への転換期でありながら、律令期を思わせる掘立柱建物の姿は非常に異質といえよう。

経営主体は広く、院宮王臣家や神郡を統治した伊勢大神宮司、伊勢国司を含む齋宮の上級官人などが想定され、さらに公的機関の実務官人、神宮神官、郡司等の豪族、富豪層や田堵が経営にあたったと推測される。

(3) 今後の課題と展望

今回の調査では、縄文時代から中世の遺構を広範囲にわたって検出したことで、櫛田川左岸下流域の沖積平野や遺跡の形成過程を詳細に知ることができた。また、こうした成果を近年の古気候研究と突き合わせ、遺跡の動向をより明確にしようと試みた。

引き続き、朝見上地区遺跡群や周辺集落の動向から、復元的・広域的に一带の土地開発史や景観を論じていく必要がある。また、微高地を中心とした今回の調査では、木製品、大型種実、花粉・珪藻など微化石の遺存状況が総じて不良で、細かな環境変遷のデータが得られなかった。こうしたデータの不足や偏りも、今後長期的に解決すべき課題である。

遺跡全体の遺構の時期変遷を示すことも今回は断念した。朝見遺跡全体、朝見上地区遺跡群の発掘調査全体の総括は、朝見遺跡7～9次調査の報告内容を踏まえ、別に行うこととしたい。(櫻井)

註

- (1) 田部剛士「三重県の概要・集成」『関西縄文時代の集落と地域社会』関西縄文文化研究会、2009年。
- (2) 新潟大学、小野映介氏の教示による（所属は調査当時）。「a層」「b層」の用法は、高橋学『平野の環境考古学』古今書院、2003年による。
- (3) 上野市遺跡調査会『森脇遺跡発掘調査報告』1995年。
- (4) 豊田市教育委員会『寺部遺跡』2011年。
- (5) 水ノ江和同「低湿地型貯蔵穴」『縄文時代の考古学』5、同成社、2007年。
- (6) 度会町教育委員会『森添遺跡』2011年。
- (7) 三重県埋蔵文化財センター『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊、1992年。
- (8) 矢野健一「近畿」『講座日本の考古学 縄文時代(上)』青木書店、2013年。
- (9) 三重県埋蔵文化財センター『朝見遺跡(第3・4・6次)発掘調査報告』2021年。
- (10) 小林謙一「南西関東縄紋中期後葉から後期前葉における推定人口と気候変動」『先史・古代の気候と社会変化』臨川書店、2020年。
- (11) 南知多町教育委員会『林ノ峰貝塚Ⅰ』1983年。
- (12) 石黒立人2006「伊勢湾周辺地域における弥生時代の平野地形について」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号、愛知県埋蔵文化財センター。
- (13) 泉拓良・家根祥多「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ-北白川追分町縄文遺跡の調査-』京都大学埋蔵文化財研究センター、1985年。
- (14) 伊藤裕偉・穂積裕昌「3. 大里西沖遺跡の調査」『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告-第1分冊-』三重県埋蔵文化財センター、1992年。
- (15) 註14文献第26図(29頁)に変遷概念図を示した。
- (16) 関西縄文時代研究会『縄文時代の石器Ⅱ 関西の縄文前期・中期』2003年。
- (17) 川瀬久美子「三重県雲出川下流部における海岸低地の形成と堆積環境の変遷」『地理学評論』76-4、日本地理学会、2003年 / 小野映介「濃尾平野における完新世後期の海岸線変化とその要因」『地理学評論』77、日本地理学会、2004年。
- (18) 樋上昇「東海地方における弥生～古墳時代の遺跡変遷と気候変動」『先史・古代の気候と社会変化』臨川書店、2020年。
- (19) 三重県教育委員会「カウジデン遺跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1980年 / 三重県埋蔵文化財センター『位田遺跡発掘調査報告』1999年 / 三重県埋蔵文化財センター『六大B遺跡(B～I地区)発掘調査報告』2006年 / 三重県埋蔵文化財センター『大蓮寺遺跡発掘調査報告』2014年。
- (20) 山元敏裕「香川県居石遺跡の儀鏡と出土遺構」『考古学ジャーナル』446、ニューサイエンス社、1999年。
- (21) 杉山洋『日本の美術394 古代の鏡』至文堂、1999年。
- (22) 田村憲美「10世紀を中心とする気候変動と中世成立期の社会」『気候変動と中世社会』臨川書店、2020年 / 伊藤俊一『荘園』中央公論新社、2021年。
- (23) 尾野善裕「平塚市出土緑釉陶器の歴史的背景」『第3回平塚市遺跡調査・研究発表会資料』平塚市教育委員会、2014年。
- (24) 長野県・長野県埋蔵文化財センター『塩尻市内その2：吉田川西遺跡』1989年。
- (25) 三重県埋蔵文化財センター『堀町遺跡(第6次)発掘調査報告』2017年。
- (26) 水野章二「10～12世紀の農業災害と中世社会の形成」『気候変動と中世社会』臨川書店、2020年。
- (27) 三重県埋蔵文化財センター『朝見遺跡(第1・2次)発掘調査報告』2014年。
- (28) 水野章二「大國・川合荘」『講座日本荘園史』6、吉川弘文館、1993年。
- (29) 宇野隆夫『荘園の考古学』青木書店、2001年。
- (30) 皮革生産と塩が関係することを、丸山真史が指摘している(丸山真史「河内・大和の動物供犠と斃馬処理」『馬の考古学』同成社、2021年)。
なお、ここでいう「備蓄牧」とは、古代の馬牧のうち、生産地の牧から供給された馬匹を備蓄するための牧を指し、官衙等の厩舎で飼養される以外の予備の馬を放牧する、比較的小規模の牧と想定されている(吉川敏子「近畿の馬牧」『馬と古代社会』八木書店、2021年)
- (31) 註22前掲。
- (32) 註26前掲。
- (33) 註29前掲。

報告書抄録

ふりがな	あさみいせき (だい5じ) はくつちょうさほうこく							
書名	朝見遺跡 (第5次) 発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	401							
編著者名	櫻井拓馬 (編)、森川常厚、土橋明梨紗、穂積裕昌							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52) 1732							
発行年月日	2022 (令和4) 年 3月14日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あさみ 朝見遺跡	まつさかし たつたちょう 松阪市立田町 ・わやちょう ・和屋町	204	a 838	34度 33分 33秒	136度 34分 44秒	20140422 ～ 20150218	9,996㎡	ほ場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
朝見遺跡	集落跡	縄文 (中～後期)	埋積浅谷 土坑・炉跡 埋設土器	土器・石器				
		弥生～鎌倉	方形周溝墓 掘立柱建物 井戸・土坑 溝・自然流路	土器・陶磁器 金属製品 木製品				
要約	<p>朝見遺跡は榎田川左岸の自然堤防帯に位置し、平安時代の重要遺物が多数出土したことで知られている。付近には条里景観がよく残っている。ほ場整備に伴い9ヶ所の調査区を設定し、縄文時代から鎌倉時代の遺構を検出した。なお、縄文時代の遺物包含層・遺構は、弥生時代～中世遺構面の下層で確認した。</p> <p>縄文時代の遺構・遺物は1・6区に集中しており、付近に中期末～後期前葉の集落が存在したと考えられ、馬の背状に延びる微高地と、その縁辺の水場付近を利用していた可能性が高い。弥生時代は1・6区で後期後半～終末期の方形周溝墓がみられ、瀬干遺跡から連続する墓域があったとみられる。</p> <p>平安時代は、3区の大溝から青銅鏡が2面出土した。水辺の農耕祭祀に供された儀鏡とみられ、鏡の製作年代は10世紀後半に比定できる。その他、7区で10世紀前半の二面庇建物を中心とする掘立柱建物群を確認した。ピットは一辺約1mの方形で、建物の配置や短期で廃絶する点から、居館的な性格が想定される。なお、5・6・9区にも同様の大型ピットをもつ建物が確認でき、遺構の空白地を挟みながら広範囲に大型建物が展開することが明らかになった。</p> <p>このような遺構の分布は、大規模な荘園や勅旨田のような耕地開発拠点を想起させるものであり、遺跡の性格や条里制の展開を知る上で重要な成果が得られた。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告401

朝見遺跡（第5次）発掘調査報告
～松阪市立田町・和屋町～
—本文編—

2022（令和4）年3月14日
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 （有）ミフジ印刷

